絆の冒険記

みぞれ雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
絆の冒険記

【Ｎコード】
Ｎ５０８５Ｈ

【作者名】
みぞれ雪

【あらすじ】
記憶をなくして人間からゼニガメになってしまった少年セナと、彼に出逢った心優しいヒトカゲのヴァイス。
そして、セナを追って人間からヒコザルになったホノオと、旅に同行するポッチャマのシアン。
４人が歩む凸凹の旅路は、出逢いと困難の連続で――。
そんなポケモン達の絆や成長を描く、喜怒哀楽の冒険物語です。

プロローグ（前書き）

何気ない、昼下がりの散歩。いつもとおんなじぽかぽか陽気。
……そんな中に、ボクを変える出会いがあったんだ。
（語り：ヴァイス）

プロローグ

様々なポケモン達が暮らす、自然に満ちた惑星“ガイア”。物語の始まりは、そんなガイアのやや南に位置する“小さな森”での小さな出逢いがきっかけだった。必然か偶然か分からぬ2人の少年の出逢いが新たな出逢いを生み、彼らの旅路が描かれてゆくのである――。

「ねえ、キミ！　起きてよ。大丈夫？」

突然聞こえたその懸命な呼びかけにより、少年は眠りから覚める。

「んー……？」

「よかったぁ！　気がついた。キミがここで倒れてたから、心配したよ」

うっすらと目を開けた少年の目の前には、明るい空と森の木の葉を背景に立つ、1人のポケモンがいた。全体的に体はオレンジ色だが、お腹の辺りはクリーム色をしている。その容姿は、二足歩行のトカゲのような、恐竜のようなものだ。小さな体から伸びる尻尾の先端には、その生命の象徴である、元気に燃える炎が宿っている――炎タイプのポケモン、ヒトカゲだ。

（なんだ、ヒトカゲか。うるせえな、起こすなよ……）

寝ぼけた少年は心で文句を言うと、再び目を閉じようとした。しかし、ここでとんでもないことに気がつく。

（え？　ヒトカゲ？）

パチリと目を開け、目の前の存在を凝視すると、確かに、いる。

「うわあ！　ひ、ヒトカゲだーっ！」

そう叫ぶ少年を見ると、ヒトカゲは眉をひそめる。

「なあに、その反応？　ボクがそんなに珍しい？」

「珍しいに決まってるだろ！　どうしてポケモンがオイラの前に……」

少し冷静さを失っている少年にとって、この後のヒトカゲの言葉は大きな衝撃になる。

「ゼニガメのキミだってポケモンじゃない」

「はあ！？」

思わず立ち上がる少年。早口で言い返した。

「オイラがゼニガメだって？　オイラは人間、見てわかるだろ！　ホラ、頭にちゃんと髪が――」

自らが人間だと主張する少年は、そう言うと自分の頭を触る。そ

してすぐに、スットンキョウな声を上げた。

「うわあぁぁー！　髪がないっ！　ハゲてるーっ！」

「ゼニガメに髪があったら気持ち悪いよ……」

騒ぐ少年に、ヒトカゲはため息をつく。

「いいや、オイラはゼニガメじゃねえ！　人間だから、お前達と違って服も着て――」

そう言って少年は自らの体を見るが、服の代わりに身につけている丸みを帯びた甲羅を見ると、閉口した。それに、手足は鮮やかな水色ではないか。

「……」

確かめるように、そして疑うように、少年は自分の水色の手のひらを眺めた。何度見ても、手のひらは肌色にならない。

「人間には、こんなに可愛い尻尾はないよ」

ヒトカゲがため息混じりに言うと、“少年の尻尾”を軽くさわった。

「ひゃ！」

軽く触れられたせいか、少しくすぐったかった。――つまり、尻尾に感覚があったのだ。甲羅のせいでうまく体を捻れず、首を精一杯回して自分の背中を眺める。すると、先端がくるんと丸まった水

色の尻尾が自分にあることに気がついてしまった。

「オイラ……ゼニガメに、なってる？」

とうとう事実を認めた少年。人間だったという彼の言葉には偽りがないのだが、今の自分の姿はまさにゼニガメだったのだ。

「そうだよ、ゼニガメだよ。……キミ、なんかおかしいよ？」

ヒトカゲが戸惑ったような声をあげるが、どうやらゼニガメになった少年の方は、それに答える余裕すらなかったようだ。

オイラは、人間だった。それは確実。でも、どんな人間だった？思えば人間だった頃の記憶がほとんどないのだ。そして、どうしてポケモンになり、ポケモンがいる世界にいるのか？　確か、人間にとってのポケモンは全くの想像上の生命体だったはず。それがまさか、現実にいるなんて……。

＞ｉ２０５４５―４３４＜

「ねえ」

ヒトカゲはゼニガメの肩を軽く揺すって呼びかけた。うつむいていたゼニガメの目線が跳ね上がる。

「ボクの名前は、ヴァイス。キミの名前を教えて」

ヒトカゲは“ヴァイス”と名乗る。そういえば、自分の名前は――？　少し考えた後に、ゼニガメになった少年は名前を思い出した。

「オイラの名前は瀬那（セナ）。女の子みたいな名前だけど、男だからな」

ゼニガメ――セナのその自己紹介を聞くと、ヴァイスはクスリと笑う。

「声を聞いたらわかるよ。よろしくね、セナ」

「ああ、よろしく」

2人が目を合わせると、セナも微笑んだ。ヴァイスの笑顔を見て、少しだけ安心したのだ。

「なあ。1つ聞きたいんだけど……」

ふと、セナがヴァイスに尋ねる。ヴァイスが「なあに」と返事をすると、セナは少し控えめに話しだした。

「あのさ、この世界に人間っているの？」

「いないよ」

「だよな。じゃあ、どうしてお前は人間を知ってるわけ？」

セナのその言葉を聞くと、ヴァイスは少し考え込む。言葉を見つけた後に、話しだした。

「えーとね、実は、ボクも不思議なんだよね。なんていうか、『人間って本当にいたんだ～』って感じなの」

「え？」

ポカンと口を開け、セナは言葉の続きを待つ。

「この世界に伝わる有名なおとぎ話の中に、空想上の生き物として出てくる……。それが、ボクらの知っている人間なんだ」

セナが“おとぎ話”という言葉を頭に浮かべると、想像できたのは妖精や鬼や天使や悪魔――。知ってはいるが、信じられていない。この世界のポケモン達にとっての人間のイメージは、そんな感じなのだろうとセナは解釈した。

「すごい偶然だな」

呆然としながら、セナは呟く。

「うん」

ヴァイスの返事の後に、わずかな沈黙が生まれた。

「オイラ、これからどうしよう」

そのセナの小さな呟きは、ヴァイスの耳にも届いた。ヴァイスが同情したような、切なそうな表情を見せ、言葉を探し始めたその時――。突然、地面が低くうなるような音がした。

「えっ？」

セナとヴァイスの戸惑いの声が重なる。その直後、２人の体は強い地震に押し倒された。

「う……」

黙っていては、暴れる地面に体を吹っ飛ばされそうになる。2人は伏せて、地面に生える雑草を力強く握った。嫌な予感がしたのはその時だ。自分達の下の地面から、ガラガラと岩でも崩れそうな音がした。

ギョッとして2人は目を見合わせるが、その直後だった。

「うわあぁぁーっ！」

とうとう2人の下にあった地面が音を立てて崩れ、岩石や土と共に、二人は暗闇に吸い込まれていった。

プロローグ（後書き）

はじめまして、作者のみぞれ雪と申します。
この小説に目を通してくださって、ありがとうございます！

一応ポケダンベースの小説ですが、ストーリーはほとんどオリジナルなので、“ポケモンだけの冒険物語”として読んでくださると嬉しいです。

山あり谷あり、喜怒哀楽の、かなり長い物語になってしまうかと思いますが、最後までお付き合い頂ければ嬉しいです。

第1話：セナとヴァイス――その1（前書き）

人間だったはずなのに、気がついたらゼニガメに！？　しかも記憶がほとんどなくて……。

ヒトカゲのヴァイスと知り合ったのは良いものの、地震で地面に穴があき、暗闇へまっしぐら！

どうなっちまうんだ、オイラは……。

（語り：セナ）

第1話：セナとヴァイス――その1

「うーん……」
「いてて……」

地震もおさまり、土壌が崩れたことにより立ち上った土埃も静かに地面に舞い落ちた。土と雑草を下敷きにして着地したため、2人は大きな怪我はしなくて済んだ。

「ここは、洞窟……だね」
「あぁ」

ヴァイスが辺りを見回しながら言う言葉に、セナが答える。湿ってひんやりとした薄暗い洞窟の中。自分達の声がどこまでも響いていきそうな気がして薄気味悪さを感じた。その空気のせいからか、しばし2人が沈黙していると――

「うえーん……」
「怖いよぉ……」

洞窟の奥からか、幼い2匹のポケモンがすすり泣く声が聞こえた。それと、子供に対して威圧的な、低い声もちらほら……。その瞬間、セナとヴァイスはどこか危機感を感じた。泣き声の主を助けに行かなくては。――でも、やっぱりちょっと怖い。ヴァイスはその気持ちのせいで、なかなか第1歩を踏み出せないでいた。しかしその時。

「よし、行くぞヴァイス！」

そう言って、セナはヴァイスの手を引いてずんずんと歩き始めた。

「えっ！？　あ、うん！」

戸惑いながら……でも、心のどこかで安堵しながら、ヴァイスはセナについていった。

一方セナは、助けに行くことにどこかやりがいや使命感を感じている自分に気付き、こちらも安堵した。オイラはきっと、悪くはない人間だったんだなぁー……と。

「うおっ！？」
「うわぁ！」

そんなことを考えていたからか、暗い足元の小石にセナがつまづき、ヴァイスの手をつかんだまま2人で転んだ。

「痛いよ、セナ！　道連れにしないで」

「へへへ、悪い悪い」

セナは舌を出して笑い、ヴァイスも怒っている様子は微塵もなく、むしろ楽しげに体に付いた土を払った。

「……ボクが前を歩くよ。　そうすれば足元も見やすいし、ね！」

まだ少し怖い気持ちはあったものの、少しづつ勇気が出てくるヴァイス。

「おー、頼むぜ！」

そんな様子に気付き、セナは威勢よく返事をしてにっこり笑った。

そして、ヴァイスのしっぽに灯された明るい炎の光に包まれながら、2人は泣き声のする方へと急いで向かった。

「だいぶ、声が大きくなってきたね」

「ああ」

ヴァイスの言葉にセナが答える。洞窟は、はじめは薄気味悪く感じたが、敵もいなければ、もう地震などの危険も起きない。しばらく歩いた2人の緊張感が少しだけ緩んできたその時だった。

「キィー！」
「キイィー！」

耳がキンとするような高音を出しながら、3匹のポケモンがセナとヴァイスに向かって飛んできた。――コウモリのような容姿のポケモン、ズバットだ。

「な、なに？」

セナは戸惑いながらズバットにこう聞いたが……

「ギャアァ！」

ズバットはセナに牙を剥き、3匹一緒に頭と両腕に噛みついた。

「うわあ！　いててててッ！」

痛みで目をきつく瞑り、セナは必死にズバットを振り払った。

「いきなり何すんだよ！」

体から離れたズバットたちを睨み付けながらセナが叫ぶと、

「キィ！」

ズバットたちは奇声を上げ、今度はヴァイスを追いかけ始めた。

「わあっ、やめてよ！」

逃げるヴァイスの頬を、ズバットの翼がピシャリと音を立ててかすめる。ヴァイスを追い越したズバットたちは振り返ると、セナとヴァイスを宙から見下ろしながら、不気味に笑っていた。

「しゃーない、戦うぞ！」

このままでは、やられる。そう判断したセナは深く息を吸い込んだ。

「“水鉄砲”！」

そう叫び、口から勢いよく水を発射したセナ。

「ギャアァ！？」

1匹のズバットを撃ち落とすと、さらに方向を変えて残りの2匹も撃ち落とす。

（うわぁ……すごいや、セナ）

ヴァイスはこの光景を、ぽかんと間の抜けた顔で眺めていた。

「キイィー！　逃げろー」

たくさんの水を浴び、ずぶ濡れになったズバットたちは、洞窟の奥へと姿を消した。

「すごい……」

そう呟き、目を輝かせてセナを見ているヴァイス。

「な……なんだなんだ、その顔は？」

困惑した表情でヴァイスを見る、セナ。

「すごいっ！　セナって強いんだ！　わーい、すごーい！」

先ほどの緊張がとけたからだろうか。セナの両手をつかみ、ヴァイスははしゃぎ始めた。

「ばっ、ばか……。やめろよヴァイス！」

なんだか恥ずかしくなったセナはヴァイスの手を払うと、

「オラ、行くぞ」

そうぶっきらぼうに呟き、ヴァイスの右手を引っ張って歩き始め

た。

「痛ーい！」

非難するようにセナを見るヴァイスを無視し、洞窟をどんどん進んでいく。――ポケモンになったばっかりなのに強いと言われても、いまいちピンとこないセナであった。

「ねぇ、セナ？」

「あん？」

「……前、見えてるの？」

しばらくセナに引っ張られた後に、ずっと気になっていたことをヴァイスは口に出した。セナに引きずられているせいで、ヴァイスのしっぽ――すなわち明かりは後ろを向いていたからだ。

「う……。だ、大丈夫に決まってるだろ！　目が慣れてきた」

そう言いつつも、セナはすぐにヴァイスの手を放す。

「手、放してるじゃん」

不満そうに呟いたが、再びヴァイスはセナの前を歩き始めた。

「アハハ……」

後ろを向き、ヴァイスはセナの苦笑いを見ながら微笑んでいた。
そして、視線を前に戻したとたん、気が付いた――顔よりも遥かに大きい岩が、ヴァイスめがけて飛んできたことに。

「わぁー！」

突然の奇襲を避けられず、ヴァイスのお腹に岩が直撃し、そのままセナめがけて吹っ飛んだ。

「うわっ！？」

訳も分からぬままあお向けに倒れるセナに、お腹を痛そうに押さえるヴァイス。

「どうした、ヴァイス！　大丈夫か？」

「うぅ……」

急いでセナが声をかけると、ヴァイスは辛そうにうずくまっていた。

「誰だよ石投げたの！？　返事しやがれ！」

近くに不自然に落ちていた“岩”を見つけて、状況を飲み込んだセナは叫んだ。返事はなかったが、静寂のお陰で2人は気付いた――ずっと追っていた泣き声の主が、すぐそばにいることに。
セナがヴァイスを支えながら声のする方へ歩いてみると、洞窟の壁にぴったりとくっついて泣いている、小さな2匹のポケモンがいた。一方は緑色の、アオムシのようなポケモン、キャタピー。もう一方は、オレンジ色のイモムシのような容姿で、頭に角をもつポケ

モン、ビードルだ。

「助けに来たよ。どうしたの？」

なるべく怖がられないように、ヴァイスは優しく話しかけた。

「ひっく。イ、イシツブテさんが――！」

キャタピーとビードルはそう言いかけると、何かに怯えるように言葉を切り、目を見開いた。その視線は、セナの後方。

「いっ……！」

ゴツリと鈍い音が響き、セナは苦痛の表情を浮かべる。

「セナ！」

「イシツブテねぇ……。そういうことか！」

衝撃を受けた頭を押さえながら、状況を飲み込んだセナが叫び、振り返ると、５体ものイシツブテ――小さな岩石のような容姿をしているポケモン――がセナたち４人を取り囲んでいた。

「うわぁ！」

突然目の前に現れたイシツブテの群れを見て、驚きの声をあげるヴァイスに、怯えだすキャタピーとビードル。

「お前達なんだろ？　ヴァイスやオイラを攻撃してきたり、キャタピーとビードルに怖い思いをさせたりしてたヤツは！」

「俺たち以外に誰がいると思うんだ？」

セナとイシツブテ達の間に険悪な雰囲気が流れた。

「ねえ、教えて。キャタピーとビードルに何をしたの？」

尖った雰囲気が少しだけ丸くなるように、気をつかって質問するヴァイス。――キャタピー達がこの雰囲気に怯えていたのに気が付いたからだ。

「その2匹が、『探検ごっこ』だとか言って俺たちの住みかに勝手に入ってきたんだぜ？　謝りもしないうちに帰すわけにはいかねえからなぁ」

「こいつらに悪気があるわけねえだろ！　それだけの理由で子供相手に5対2か!?　今すぐこの2匹を解放しろ！」

イシツブテの発言に、セナは怒りを露にする。そんな彼の言葉には、5体の中でも一番大きなイシツブテが答えた。

「そうだなぁー……。じゃあお前たち2匹で俺たちを倒せたら、その時は無事に全員帰してやるよ」

『お前たち2匹』という言葉と同時に、セナとヴァイスは指をさされた。

「へん！　それだけでいいんならやってやるよ。……“みずでっぽう”！」

セナは勢いよく技を繰り出した。激しい水圧がイシツブテのうちの1体に直撃し、水タイプの技が苦手なイシツブテは目を回して倒れる。

「よ、よくもやったな！」

残りのイシツブテ達が血相を変えてセナに体当たりをしてきた。1体、2体、3体……。セナは落ち着いて攻撃をかわしていたが、倒れているイシツブテを除いても、1体分、攻撃が足りないことに気付いた。ヴァイスがやられているのでは、と、辺りを見回してみるが、

「大丈夫？　セナ」

むしろ彼はセナの身を案じていた。じゃあ、もう1体のイシツブテはどこへ――

「俺ならここだぜ！」

今まで姿を見せなかったイシツブテ――1番大きな1体――が、洞窟の天井から岩落としを繰り出した。

「わあ！」

次々と落ちる岩から逃げ惑うセナとヴァイス。他のイシツブテたちも岩落としに協力し始め、一瞬たりとも気の抜けない状況になった。炎タイプのヴァイスが岩落としなんか食らったら――。セナがそんなことを考えていた、その時。

「うわー！」

キャタピーたちの悲鳴に気がついて目をやると、彼らをめがけて、岩が落ち行くのを目でとらえた。

「くそ！」

セナは精一杯の力を込めて、水鉄砲で岩を撃ち落とした。なんとかキャタピーたちには当たらずにすんだものの、その隙を敵は見逃さなかった。

「うわあーっ！」

大きな岩が雪崩のようにセナに襲いかかる。その不意打ちを避ける術はなく、衝撃に思わず悲鳴をあげた。そして、傷ついたセナは力なく倒れてしまった。

「セナ！」

ヴァイスはセナに駆け寄った。地面で砕けているたくさんの岩を踏んだので、足の裏が痛む。この状況に満足したのか、それとも単に疲れたのか、イシツブテたちの岩落としが止んだ。

「セナ、しっかりして！」

ヴァイスの声に反応して、セナの右手がピクリと動く。そして、

「ヴァイス……」

小さな小さなセナの声が、ヴァイスの耳に届いた。

「キャタピー……と、ビードル……無事、か？」

「うん、無事だよ！　セナのお陰で！」

痛々しいセナの様子に、ヴァイスはうっすら涙を浮かべながら言った。

「よかった……」

そう言ってホッとため息をつくと、

「ヴァイス……。次は、お前が……守る、番」

その言葉を残して、セナの体の力が抜けた。どうやら気を失ったようだ。

「セナ……。　ボク、頑張るよ！」

ヴァイスはそう言って振り返り、涙を拭いてイシツブテたちをキッと睨み付けた。

「おいおい……。　泣きべそかいてる炎タイプに、俺たちを倒せるわけ……」

「うっ、うるさいな！　よくもキャタピーたちを狙って、セナに酷いことしたな！？　ボクはキミ等を許さないよ！」

ヴァイスは、からかうイシツブテたちの言葉を遮って叫ぶと、深く息を吸い込んだ。威勢の良い言葉の割には恐怖で少し体が震えている。

「“ひのこ”！」

熱く燃え盛る火の玉が、イシツブテたちに襲いかかるが、熱そうな様子は微塵もなかった。

「だから言ったろ！　お前に俺たちは倒せない！！」

イシツブテたちは、ヴァイスの前後左右から、一斉に襲いかかってくる。両足に力を込めたヴァイスは、思い切り地面を蹴って飛び跳ねた。下方からガツッと鈍い音が聞こえ、イシツブテたちは痛そうにうめいている。どうやらイシツブテどうしが衝突したようだ。

「よくもやったなクソガキィ！」

「うあっ！」

宙に浮く無防備なヴァイスの体を蹴り上げるように、1体のイシツブテが下から頭突きをしてきた。ヴァイスは思わず苦しげな声を漏らす。

「落とすなよ、お前ら！」

最初のイシツブテに続いて、他の3体も頭突きでヴァイスの体を浮かせ続けた。

「う……痛っ！　……うあっ！」

攻撃を受ける度に、ヴァイスは苦しそうに叫んだ。そして、しばらくヴァイスを空中でもてあそんだあと、

「とどめだ！」

1番大きなイシツブテが、ヴァイスを思い切り地面に叩きつけた。
ヴァイスの体は、一度バウンドすると、うつ伏せになった。

「う……！」

ひどいダメージを受けてもなお、必死に立ち上がろうとするヴァイス。

「根性だけはあるようだが……。これで終わりだ！　“いわおとし”！」

雪崩のように岩が降り、ガラガラと音をたてながらヴァイスめがけて落ちていく。もうだめだと、ヴァイスが諦め、きつく目を閉じた、その時――

「うおりゃあぁーっ！」

無駄に大きな叫び声が聞こえ、勢いのよい水が岩を砕いた。

（セナ……？）

ヴァイスはゆっくり目を開け、顔を上げた。

「オイラがあれくらいで倒れると思うなよ！　どうだ！　特性“げきりゅう”の威力は！」

ヴァイスの視線の先には、元気一杯に叫ぶゼニガメ――セナが立

っていた。“げきりゅう”は、ピンチの時に水タイプの技の威力が跳ね上がる、ゼニガメ等が持つ能力。この特性を利用して、セナは強力な水鉄砲を放ったようだ。

「お疲れ、ヴァイス。結構やるじゃん♪」

セナはヴァイスのもとに駆け寄り、優しく声をかけた。

「そ、そんなこと、ないよ……」

あえぎながら呟くヴァイスの頭を撫でつつ、

「あーれー？　どーこに行こうとしてんのー？」

ニヤリと笑いながら――目は笑っていなかったが――セナは逃げようとするイシツブテたちに声をかけた。

「あ、いやぁ、その……」

セナの攻撃を見て急に弱気になったイシツブテたちは、言葉を濁した。

「ったく……。5対2なんてハンデつけてやってるんだから、逃げないでくださいよぉ。なに、そんなにオイラが怖いん？」

セナの挑発に、1番大きなイシツブテが乗ってきた。

「黙ってりゃ死なずに済んだものを……。クソガキィ！　ぶっ潰してくれる！」

頭に血がのぼった大きなイシツブテは汚い言葉を吐きまくり、仲間を引き連れてセナめがけて突進してきた。

「いらっしゃ～い♪　“みずでっぽう”！」

「ぎゃあああああー！」

不敵な笑みの後、セナはありったけの力を込めて激流を放った。すると、あっという間に４体ものイシツブテを飲み込み、倒すことができた――。

第1話：セナとヴァイス――その2（前書き）

ボクらが落ちた先は洞窟。遠くで助けを求める声が聞こえたから、ボク達は急いでそっちに向かったんだ。

イシツブテ達に襲われたキャタピー、ビードルをなんとか助け出すことができたよ。セナ、頼りになったなぁ……。そして、バトルはちょっと怖かったよ……。

とにかく、あとは洞窟を抜けるだけだね！

（語り：ヴァイス）

第1話：セナとヴァイス――その2

「やったぜ！　アハハハハハ！　ハハ、ハ……」

洞窟内に高笑いを響かせていたセナだが、蓄積していたダメージに耐えきれず、ふらりとヴァイスの横に倒れた。

「セナ、無茶しすぎだよ……」

「へへ……悪いかよ」

力なく会話するセナとヴァイスに急いで駆け寄ったのは、キャタピーとビードルだった。

「セナさんとヴァイスさん……って言いましたよね？　ありがとうございました！」

礼を言うキャタピーの後に、ビードルも続いた。

「ぼくたち、洞窟にオレンの実を持ってきているんです。はい、食べてください！」

「おぉ、サンキュ……」

「ありがとう……」

一口、また一口と、ビードルが差し出した青色の木の実――オレンを食べた2人は、すぐに元気になった。

「本当に、ごめんなさい。そんなにボロボロになってまで、ぼくら

を助けてくれて……」

「ハハ！　いいっていいって！」

キャタピーとビードルは申し訳なさそうにセナとヴァイスを見たが、少しも怒っている様子のないセナたちを見て安堵した。

「それより、とっととこの洞窟を抜けなきゃな！」

「はい、行きましょう！」

こうして、セナとヴァイスはキャタピーとビードルに案内してもらい、洞窟の外に抜け出すことができた。またズバットやイシツブテのような敵に出くわさないか不安があったが、ずいぶん長い間歩いても敵に会わずにすみ、出口が見えた時には４人はホッとした。

「……あれ？　ここは、“でこぼこ山”？」

洞窟から脱出したとたん、ヴァイスは驚いた表情を見せた。

「はい。ぼくらはここから洞窟に入ったんですけど、ヴァイスさんたちは違うんですか？」

同じく驚くビードル。

「うん。ボクらがいたのはここから遠い“小さな森”。そこでセナとボクがお話ししてたら地震がきて、地面に穴が空いて洞窟に落ちちゃったんだ」

「えーっ！　そうなんだ」

分からない地名ばかり出てきて、ちんぷんかんぷんのセナ。人間が住んでいた星は、確か、“地球”。でも、ここが地球なわけがないよな……。

「じゃあきっと、小さな森の地下には、でこぼこ山の洞窟が通っていたんだね。それで、穴から落ちて洞窟に迷い込んじゃったんだ。……ね、セナ？」

あれこれ考えてるうちに、いきなり話題を振られたセナは返答に困った。

「えと……何の話してたっけ？」

とりあえずそう返事をした。

「えーっ、聞いてなかったの？　……まあ、疲れてるし仕方ないよね。今日はもう帰ろうか？」

「はい、そうしましょう。今日はありがとうございました！」

「ぼくらの家はここから近いので、もう大丈夫です！　では、さようなら」

「うん、バイバーイ！」

ヴァイスの提案で、キャタピーとビードルは家に帰って行く。

困った。オイラはこれからどうすればいいんだ？セナは急に不安に襲われる。そもそも、人間だったはずなのに――

「セナー？　どうしたの？」

再び考え込むセナを、ヴァイスの声が現実に引き戻した。

「ヴァイス。お前、何か忘れてないか？」

少し声を低くして、セナが尋ねた。

「ほえ？　何かって……。あ！　そういえばボク、昨日の晩ごはん何だったか忘れちゃったよ！　アハハ！」

「はぁ～。そうじゃなくて！」

のんきなヴァイスに呆れ、セナは叫んだ。

「うわぁ！　な、何？」

驚いて声をあげるヴァイスに、セナは言った。

「お前にあったときに言ったろ！　オイラはゼニガメじゃねえ、人間だったんだ！」

「あ……そうだったね。でも、セナのこと疑ってる訳じゃないけど、本当にそうなの？」

「ああ。記憶はなくしたけど、人間だったことは確実だ。　人間として、オイラは“地球”っていう星に住んでいた」

ここで一呼吸置くと、セナはヴァイスに質問した。

「なあヴァイス。ここは、どこだ？　お前たちが住んでいるこの星の名前は？」

「残念だけど、ここは地球じゃないよ。この星は、“ガイア”。ポケモンたちが暮らす星なんだ」

不安そうなセナの表情を読み取り、気の毒そうにヴァイスが言う。

「だよな……」

そう呟くと、セナは笑顔で顔を上げた。

「分かった！　じゃあな、ヴァイス！　いろいろありがと」

これ以上こいつに迷惑はかけられない。そう思ったセナは、ヴァイスに背を向けた。

「まって！

走り出そうとするセナを、ヴァイスが呼び止めた。

「行くところがないなら、ボクのお家においでよ！　この世界のことも教えてあげる」

「でも――」

「ボクは、セナの役にたちたいんだ！　……ダメかな？」

切ない表情を浮かべるヴァイスを見て、きりきりと心が痛んだ。

（こいつ、オイラなんかのために、こんなに――）

「サンキュー、ヴァイス。本当に、助かるぜ」

申し訳なさそうに、セナが呟くと、

「いいのいいの！　友達が困っていたら、助けるのが当たり前だもん♪」

ヴァイスはそう言ってセナの肩を軽く叩いた。

「さっ、ボクのお家に行こっ！　ちょっと遠いけどね」

「……ああ！」

ウインクしてかわいらしく話すヴァイスに、セナは元気に返事をした。

それからだいぶ長い時間歩き、いつしか2人の影がずいぶん長くなっていた。2人が歩く海岸は、夕陽で照らされたオレンジ色の海のさざ波の音に包まれている。

「あれだよ！」

不意に、ヴァイスが叫ぶ。セナが、ヴァイスが指をさした方を見

てみると、海に面した高い崖の上方が、中で充分に生活できるくらいにえぐれている。おまけに、何かの――サメのような見た目をしていた。

「あれがボクの家、“サメハダ岩”だよ！　見た目がサメハダーっていうポケモンに似ているから、こんなふうに呼ばれているんだ」

「へぇー！」

あの中で暮らすのか。なんか、面白そうだな！　と、セナは胸を踊らせた。

回り道をして崖の先端付近まで行き、暗い階段を降りると、先程の崖の窪みに到着した。思ったよりも広い空間で、木の箱や草を絡めて作った布団など、生活に使うものが置かれていた。空には一番星がきらめいている。

「ここがボクの家。さ、座って！」

ヴァイスは、草でできている布団を差し出してくれた。

「サンキュー！　お、ふかふかじゃないか♪」

目を輝かせて歓声をあげるセナ。そんな彼を微笑んで見ていたヴァイスだが、何かを決心したように真剣な顔になった。

言わなきゃ……！　決心し、ヴァイスは口を開いた。

「あのね、セナ……。お、お願いがあるんだ！」

緊張しているせいか、妙に力が入ってしまった。

「ん、オイラに？　なんだよ？」

「ボクと一緒に、“救助隊”をやってくれないかな？」

「え、救助隊？　なんだ、それ？」

今までうつ伏せになって布団に寝転がっていたセナが、体を起こして座る姿勢になった。

「今、この世界――ガイアには、今日の地震のような災害が増えていて、イシツブテたちのように、意地悪なことをするポケモンも増えているんだ。それで、キャタピーやビードルのように、困っているポケモンたちも増えているの。……だからね、そんなポケモンたちを助けるのが、“ポケモン救助隊”なんだよ」

意外に思った。セナは、てっきりこのポケモンたちの星は平和なものだとばかり思っていたから……。

「ボクも、そんなポケモンたちを助けたい。こんなボクにでも、できる限りのことをしたいんだ！」

ここまで力強く話したヴァイスだが、急に声のトーンが落ちた。

「でも、ボク1人でやってく自信ないし……。セナなら、強くて頼りになるから一緒にやってくれないかなぁー……って思って」

「ヴァイス……」

「救助隊としていろんな所に出かければ、セナがポケモンになった

わけも分かってくると思うんだ。
……だから、どうかな？　お願いっ！」

否定する理由など、どこにもなかった。セナは微笑み、答えを出す。

「お前とは、どうやら気が合いそうだな。やろうぜ、救助隊！」

セナはスッと右手を伸ばし、ヴァイスに握手を求めた。

「いいの、セナ……？」

ヴァイスの目に涙が浮かぶ。

「当たり前じゃん！」

セナが最高の笑顔でヴァイスを見た。

すると……

「う、うわああーん！　ありがとう、セナー！」

ヴァイスは声を上げて泣きながらセナに抱きついてきた。

「うわ！」

はじめは困惑してたじたじとしたセナだが、ヴァイスに掴まれている腕がムズムズするような気がしてきた。

「やめろ、ヴァイス！　くすぐったい」

困ったように笑いながらセナが言うと、ヴァイスはセナからはなれた。

「あ、ごめん。嬉しくって、つい……」

そう言って微笑むと、ヴァイスは左手で涙を拭きながら、セナに右手を差し出した。

「じゃ、改めて……。これからよろしくね、セナ！」

「おう！」

２人が互いの手を強く握ると、セナとその仲間たちの冒険が、幕を開けた――。

＞ｉ３０２２７―４３４＜

第2話：出動！！救助隊“キズナ”！――その1（前書き）

とりあえずキャタピー&ビードルを救出し、洞窟から脱出したオイラ達。はい、めでたし、めでたし――で終わる訳がないオイラの困難。だって、帰る家がないんだもん！

困っていると、ヴァイスが自分の家に案内してくれた。オイラはそこ――サメハダ岩で生活することに。ありがたいや。

その夜ヴァイスはオイラに、救助隊をやらないかと言ってきた。家も貸してもらってるし、断る理由なんてないよね。

……結論！　なんだかよく分からないけど、救助隊やることになりました。

（語り：セナ）

＞i217634＜

第2話：出動！！救助隊“キズナ”！――その1

セナがポケモンになった次の日。サメハダ岩でぐっすり眠っている2人を朝陽が迎えた。やがてヴァイスが目を覚まし、それから1時間以上たった頃……。

「セナ！　起きてよ、ねぇセナってば！」

ヴァイスはセナの体を揺すりながら呼び掛け、起こそうとする。

「んー……？」

セナが薄目を開ける。やっと起きた！　ヴァイスがそう思った、その時。

「うーん……リンゴ～♪」

たちまち開きかけた目を閉じ、寝言を言いながらセナは寝返りをうった。

「もぉーッ！」

ヴァイスは呆れて不満の声を洩らした。

（“救助隊チーム登録”。セナと一緒に行きたかったけど……。しょうがない。ボク一人で行ってこよう）

そう決めると、ヴァイスはサメハダ岩に出入りするための階段を上り始めた。

「り～んご～……」

「ははは。まだ言ってるよ」

後方から聞こえてくるセナの寝言に苦笑いをするヴァイス。……あれ？　なんか、寝言が大きくなってきたような……。ヴァイスがそう思った、その時。

「リンゴー！」

「うわぁー！　セナ、いつの間に！？」

寝ぼけたセナが突然頭に噛みついてきて、驚くヴァイスの絶叫が狭い階段の通路に響き渡った。

結局あの後、ヴァイスの見事なビンタでセナが完全に覚醒し、２人は目的地へと向かった。サメハダ岩から少し歩くと、広場に着いた。

昨日サメハダ岩に行く途中にも通ったのだが、暗かったせいか、その時はどの店も閉まっていて、広場は静かだった。それが今では、沢山のポケモンたちでにぎわい、楽しげな笑い声が響いている。店を構えるポケモン、客として店に寄るポケモン、中央の噴水の近くではしゃぐポケモン……。　幸せそうな皆の姿を見て、セナの心が弾んだ。――ヴァイスはこの広場の名前を“はるかぜ広場”と言った。１年中暖かい土地だから、この名前がついたとか……。

そんな広場を横切ると、若々しい緑の草や、白や黄色の花に覆わ

れた小さな丘があった。その頂上の建物――何かのポケモンの形だろうか？　ペリカンのような形をしている――を指差して、ヴァイスが言った。

「セナ、あそこが“ポケモン救助隊連盟本部”だよ。ペリッパーっていうポケモンの形をしているんだ。あそこで救助隊チーム登録をするんだ」

どうやら、目的地に着いたらしい。

「よーし、セナ。本部まで競走だ！」

ヴァイスは無邪気に丘を駆け上がる。

「えーっ！？　待てよー！」

転びそうになりながら、セナは急いでヴァイスを追いかけた。

本部に着いた2人は、建物の中を見回した。あまり広くはない建物だった。入り口のすぐ近くに、たくさんの救助依頼の手紙を掲示している、木の板があった。そして掲示板の前には、どの依頼を受けようか考えている、救助隊のポケモンたちの姿が。また、入り口から左手に、受付のカウンターに並んで座っている、3匹のペリッパーがいた。

そのうち、手が空いている、1番奥に座っているペリッパーがセナとヴァイスを手招きした。カウンターに設置されているイスに2人が座ると、受付の奥のほうで、運んできた手紙を整理するペリッパーがいるのが見えた。

「おぅ！　ヴァイス君に、えーとキミは？　初めて見る顔だね」

広場の近くにすむヴァイスはペリッパーにも名前を知られているようだが、つい昨日ここにやって来たセナを見て、ペリッパーは名前を尋ねてきた。

「オイラはセナ。見ての通り、ゼニガメさ」

本当は人間なのに……とは言わないでおいた。言ったところでどうしようもない。

「オー、セナ君！　よろしくネ～！」

陽気なペリッパーとしばらく楽しく話をした後、いよいよヴァイスは救助隊を始めたいことを伝えた。

初めに、ペリッパーにチーム名を決めるように言われた。

「チーム名かぁ。いきなり難しいな。セナ、何かいいのある？」

唸りながら考えた後、ヴァイスはセナに話題を振った。

「んーと……。“キズナ”ってどうよ？」

「キズナ……」

「うん、キズナ。オイラが好きな言葉なんだけど……。だめか？」

恥ずかしそうに頬を赤らめながら言ったセナ。

「そんなことないよ！　……いいね、“キズナ”。それにしよう！」

「サンキュー！」

ヴァイスの同意により、ペリッパーは、２人のチーム名を登録した。照れながら笑うこの時のセナの顔を、ヴァイスはいつまでも忘れなかった。

それからは、ペリッパーが救助隊活動についての説明をした。

基本的に活動は自由で、本部の掲示板や通りすがりのポケモンたち、さらには各救助隊の基地――セナたちの場合はサメハダ岩――のポストに直接届く救助依頼などから困っているポケモンを見つけ、手を貸してあげることが主な仕事であること。一定の時期になったら救助隊の“ランクアップ”のための試験が行われること（ちなみに、この世界ではランクは６段階で、ノーマル、スーパー、ハイパー、シルバー、ゴールド、マスター……の順にランクが変わる）。ランクが上がるほど（もちろんランクだけが要因ではないが）、基地に依頼が届きやすくなること。

等々であった。話を聞いているときに、眠さで何度もセナのまぶたが降りてきたが、ヴァイスに腕をつねられる度にビクリと反応して目を開いた。

全ての説明が終わり手続きが済むと、卵に羽がついたデザインをした、小さなバッジ――救助隊員の証である、“救助隊バッジ”を渡される。

そして……

「キズナのお２人さーん、これから頑張るんだよーっ！」

ペリッパーの元気な声に見送られ、２人は本部を後にして広場に向かった。

「まったく……。セナってばペリッパーの説明聞かないで寝てばーっかり」

「あはは……」

ため息混じりのヴァイスに、苦笑いのセナ。

「救助隊のランクの中で、最高のランクは？」

「はぁ！？　えーと……。あ、思い出した！　ペリッパーランクだ！」

突然のヴァイスの問いかけに、意味不明の回答をするセナ。

「そんなわけないじゃん！　マスターランクだよ」

「えー！？　何でだよー！　本部はペリッパーの形をしてたじゃねーか！」

「はぁ……」

あきれ果てたヴァイスは話題を変えた。

「マスターランクと言えば、チーム“ＦＬＢ”だよなぁ」

空を見上げ呟くヴァイスの瞳は、憧れで輝いていた。

「えふえるびー？」

「フーディン、リザードン、バンギラスの救助隊だよ。優しくて強くて、最高の救助隊さ！」

何も知らないセナに説明するヴァイスだが、なんだか暴走しそうな雰囲気が漂っていた。

「そんなことより、あったぞ。お前が言ってた“ガルーラおばさんの倉庫”って店。」

「あ、ホントだ！」

セナはうまく話題をそらした。ヴァイスは店の正面に立ち、店主のガルーラに親しげに声をかけた。

「おはよう、おばさん、ルラちゃん！」

「あら、おはようヴァイス君！」

「おはよ！　おはよ！」

優しそうな雰囲気の親のガルーラと、そのお腹の袋に入った赤ちゃんのガルーラ――ヴァイスは“ルラ”と呼んだ――は、ヴァイスに挨拶する。――ガルーラは、頭部が外殻で覆われた怪獣じみた容姿のポケモンだが、彼女はとてもおおらかな性格のようで、話しかけやすいタイプだ。

「あら、その子はお友達？」

おばさんがセナを見ながら言う。

「うん、今日から一緒に救助隊やるんだ！　キズナっていうチーム名なの」

ヴァイスが名前まで紹介してくれなかったので、仕方なくセナは本日2度目の自己紹介をした。

「オイラはセナ。よろしくな、ガルーラおばさんにルラちゃん！」

「よろしくね、セナ君！　今日から頑張るんだよ、2人とも」

「よろしく！がんばれ！」

おばさんたちの激励を受け、2人はなんだか嬉しくなった。さらに、

「あ、よかったらこれ、使ってくれるかい？」

おばさんは、ヴァイスに“ゴローンの石”を3つ渡した。

「それは、敵に投げてダメージを与えるアイテムなんだよ。困ったときに使っておくれ」

「わぁー！」

手のひらの石を眺め、ヴァイスはおばさんの優しさに改めて感動する。すると。

「ヴァイスくーん♪」

誰かに呼ばれたヴァイスが、声がした方を向いてみると、

「救助隊を始めるなら～♪」
「この、“防御スカーフ”をあげるよ～♪」

おばさんの倉庫の右隣で商店を営む2人のポケモン――カメレオンのような容姿のカクレオンが、セナとヴァイスに、防御力が上がるアイテム防御スカーフを差し出した。この2人のカクレオンは兄弟。兄は普通の緑色の体をし、弟は色違いで、薄紫色の体をしている。

「わぁー！　ありがとう！」

早速スカーフを首に巻く。先程本部で貰った救助隊バッジも、ここにつけてみる。

「えへへ、かっこいいー♪」

「これでオイラの防御はカンペキ～♪」

「……ほんとにそうかなー？“ひっかく”」

ヴァイスがセナのほっぺたに爪を立てたとたんに、

「痛い痛い痛い！」

セナが叫び出すと、周りにいた皆が笑った。

「素敵な友達ができてよかったわね、ヴァイス君」
「よかったね、ヴァイシュくん！」

おばさんとルラの言葉に、２人はちょっぴり照れる。

「うちの商品で、ぜひ依頼を成功させてね～♪」

「がんばってね～♪」

カクレオン兄弟のセリフは、どこか商売じみていた。

「みんな、本当にありがとう！」

「がんばるぜー！」

カクレオンの言葉に元気に返事をした２人は、依頼を受けるために、再び救助隊連盟本部へと向かった。

「広場のみんな、いいやつだな！」

セナは自分のスカーフを見ながら言った。

「うん！　特にさっきのガルーラおばさんやカクレオンさんたちにはよく面倒見てもらってるから……。救助隊のこと、どうしても報告したかったんだ」

「そっか」

そんなことを話していると、広場を抜けて丘が目の前に現れた。

２人が丘を登ろうとした、その時。

「あの……」

後ろから小さな声が聞こえ、２人は振り返った。声の主は、幼いピチュー――黄色い体の二足歩行のネズミのような容姿で、耳はひし形のような形をしている――だった。左耳の付け根の辺りに、桃色の花の形のアクセサリーをつけているので、どうやら女の子らしい。

「あなたたち、救助隊でちゅよね？」

「そうだよ。どうしたの？」

目線をピチューに合わせ、優しく尋ねるヴァイス。

「ぉ、お兄ちゃんを……」

ピチューは、もじもじと消えそうな声で呟いた。

「お兄ちゃんがどうしたんだ？」

ヴァイスの真似をして、セナが尋ねた。次の瞬間、何かを決心したピチューは、先ほどまでと全く違った大きな声で叫んだ。

「あたちのお兄ちゃんを、助けてほしいでちゅーっ！」

ピチューはそう叫ぶと、声をあげて泣き始めてしまった。

第2話：出動！！救助隊“キズナ”！――その2（前書き）

セナの提案で、ボクとセナの救助隊のチーム名は“キズナ”になった。いい言葉だし、呼びやすいし、なかなか気に入ったよ。
ガルーラおばちゃんやカクレオンさん達に救助隊のことを話したら、なんだかすごくやる気が出てきたなぁ。
そんなボク達に助けを求めに来た女の子ピチュー。どうやらお兄ちゃんがピンチみたいだけど……？
（語り：ヴァイス）

第2話：出動！！救助隊“キズナ”！――その2

ピチューに連れられて、セナとヴァイスは広場より北にある森にたどり着いた。昨日の小さな森よりも高い樹木が多く、あまり花は咲いていなかったが、クローバーが地面をおおっていた。

「あたちとお兄ちゃんは、この“クローバーの森”に４つ葉のクローバーを探しに来ていたんでちゅ。あたちたちのお家の近くにはなかったから……。そしたら、お兄ちゃんとケンカしてはぐれてしまいまちた。しばらくお兄ちゃんを探していたら、森の奥からお兄ちゃんが叫ぶ声が聞こえてきて……それで、救助隊の助けが借りたかったんでちゅ」

まだ上手く話せないながらも、ピチューは必死に状況を説明する。

「そっか。じゃあ、急いでお兄ちゃんを探さないとね！　……ねぇ、キミの名前は？」

「キララっていいまちゅ」

ヴァイスの問いかけに、ピチューの女の子は“キララ”と名乗った。

「おっ、いい名前だな♪　なぁキララ、オイラたちに付いてきたいか？それとも、安全な場所で待っていたい？」

「もちろんついていきまちゅ！　お兄ちゃんがこうなったのも、あたちがわがまま言うから……」

キララの目が涙で潤んできた。

「な、泣かないで、キララ」

「お兄ちゃんは絶対に無事に見つけてやる。お前のことも、オイラたちがしっかり守ってやるから。な！」

泣き出しそうなキララを、セナとヴァイスは焦って慰める。

「……はい、ありがとうでちゅ！」

彼女にはよほど“救助隊”が頼もしく見えたのだろう、安心してにっこりと笑った。その一方、救助隊としての初の任務に不安が膨らむヴァイス。

「よーし、じゃあまずはお兄ちゃんを呼びながら、森の中を探そうぜ！　キララ。お兄ちゃんとはぐれた大体の場所、覚えてるか？」

「こっちでちゅ！」

セナが尋ねると、キララは北を指差して森の中を歩いていった。

「よし、行くぞ！　……って、ヴァイス。おーいヴァイス！　なにぼーっとしてんだよ？」

考え事をしていたヴァイスの肩をセナが軽く叩くと、ヴァイスは驚き、小さく跳ね上がった。

「えへへ、何でもないよ！　さっ、行こっか！」

ヴァイスが笑顔でそう言うと、キララを真ん中に挟み、3人は横に並んで森の北部へと歩き始めた。

そんな彼らの姿を、樹の影に隠れて眺めていた2匹のポケモンがいた。

「驚いたぜ。あの弱虫ヴァイスが、本当に救助隊を始めたなんて」

そのうちの1匹、ハスブレロ――頭に蓮の葉をかぶったカッパのようなポケモン――がそう言うと、

「今回の依頼、おれっちたちが盛大に盛り上げてやろうぜ！」

もう1匹のポケモン、ブルー――ピンクの妖精ポケモンだが、その顔はブルドックに似ている――がそう提案した。もちろん、ここでの“盛り上げる”は、決して好ましい意味ではない。彼らの怪しげな笑みが、それを裏付けていた。

2人は目を合わせて再度ニヤリと笑うと、セナたちの後をつけて森へ入ったのであった――。

そんな怪しげな気配を察知できる訳もなく、セナたちは森の奥へと進む。

「お兄ちゃーん！　どこでちゅかー！？」

兄を見つけるため、キララが叫ぶ。

「お兄ちゃーん！　どこだー？　いたら返事してくれーっ！」

キララに続き、セナも森の中で叫んだが、ヴァイスはそのセリフに違和感を感じた。

「ねぇ、セナ。なんか、おかしくない？」

「なんか……って？　もしかして敵の気配か！？」

ヴァイスの怪訝な表情の原因が自分であるとは、セナは思いもしない。

「違うよ、もう！　ボクらが今探しているのは、キララにとってのお兄ちゃん。なのに、どうしてキミまで『お兄ちゃん』って叫び出すのさ？　変でしょ！」

「あ……」

確かに、おかしい。セナは少し顔を赤くした。

「……なあ、キララ。お兄ちゃんの名前は？」

「お兄ちゃんはキラロって名前の、ピカチュウでちゅ」

ピカチュウもピチューと同じくネズミのようなポケモンだが、体の黄色はピチューのそれより濃く、耳は細長い。

「よーし、今度は平気。キラロー！　どこだー！？」

恥ずかしいせいか、ヤケぎみに叫ぶセナを見て、ヴァイスとキララはクスリと笑う。知り合って2日目にして、セナが間抜けであることをよくよく理解させられたヴァイスであった。

「この辺りでお兄ちゃんとはぐれたでちゅ」

3人がしばらく歩くと、不意にキララが言った。

「分かった！　キラロー！　どこにいる、の……？」

「どうした？　ヴァイス」

「あそこに誰か倒れてる。なんだか体が黄色いような……」

前方を指さし、ヴァイスは言う。

「まさか……！　急ぐぞ！」

幼いキララのペースに合わせながら、3人は急いでそのポケモンの元へ。だんだんはっきりと分かるその姿を見て、どうやら倒れているのはピカチュウだと分かった。

「お兄ちゃん！」

キララはそのピカチュウに駆け寄り、体を揺すった。彼はぐったりとして、うつ伏せになっている。

「キラロなのか？」

「はい、間違いないでちゅ！」

キララは涙目で答える。

「キララ……」

苦しそうに呼吸をしながら、キラロが言葉を発した。

「お兄ちゃん！？」

兄の声を聞き、キララは少し安心する。

「うぅ……。誰か、“モモンの実”を……。スピアーに、刺されちゃった」

よく見ると、キラロの左腕に、蜂に刺されたような傷が何ヵ所かあった。

「大変！　早く毒を消さなくちゃ！」

セナはヴァイスの言葉で、スピアーに刺されると毒状態になるということを理解した。それはそうと……。

「ヴァイス、モモンの実ってなんだ？」

「食べると体から毒が抜ける木の実だよ。この近くにあるのかなぁ」

「あ！　あたち、モモンの実がなっている木を知ってまちゅ！」

キララの言葉に、ヴァイスは一瞬ホッとした表情を見せ、すぐに真剣な顔で指示を出した。

「分かった。キララ、ボクと一緒にモモンの実をとりに行こう！セナはここでキラロと一緒にいて！」

「わかったでちゅ！」

「お、おう！」

セナとキララが返事をしたのを確認して、ヴァイスはセナに、ガルーラおばさんにもらったゴローンの石を2つ渡した。残りの1つはヴァイスが持つことに。

「何かあったらそれを使って！　……じゃあね、セナ。すぐに戻ってくるから、頼んだよ！」

そう言うと、ヴァイスはキララを連れて走り出した。

「気を付けてな！　早く戻ってこいよー！」

風になびくヴァイスの防御スカーフを見つめながら、セナは叫んだ。

「大丈夫？　キララ」

ヴァイスはキララの体力を気づかい、声を掛けた。

「ハァ、ハァ……。だ、大丈夫でちゅ！　お兄ちゃんは、もっと苦しいんでちゅから」

キララは走る速度を緩めようとしない。

「もう少しでちゅ。……ほら、あった！」

ヴァイスが前方を見てみると、葉が生い茂り、桃色の実をたくさんつけている木が見えた。

「ほんとだ、あと少し。頑張ろうキララ！」

「はいでちゅ！」

とうとう2人はモモンの木の下にたどり着いた。キララだけでなく、ヴァイスも息を弾ませている。

「よーし、とるぞー！　……って、高いなぁ！」

ヴァイスは上を見上げ、木の高さに驚く。

「こんなときは……ゴローンの石」

ヴァイスは、持っていたゴローンの石――本来は攻撃用のアイテムなのだが――をモモンの実めがけて投げた。木の葉が揺れて落ちてきたのは、投げたゴローンの石だった。

「あれ、失敗しちゃった。よーし、もう一度！」

「ヴァイスお兄ちゃん、頑張るでちゅー」

再び投げられたゴローンの石は、今度は木の枝に引っ掛かり、落ちてこなくなった。

「うわ。投げるの下手くそだな、ボク……。しょうがない、木に登ってとろう。キララは木の下で待ってて」

そう言うと、ヴァイスはスルスルと上手に木に登っていった。そして木の葉をかき分けて、柔らかいモモンの実を慎重に掴んだ。

「とれた！」

「やったでちゅー！」

ヴァイスの言葉に、キララは歓声をあげる。あとはこの実をもぎ、キラロのところへ持ち帰るだけ。2人がすっかり安心しきった、その時……。

「うわあーっ！」

ヴァイスの体を何度も衝撃が襲い、突然木の上から地面に叩きつけられた。

「いったたた……。な、何!?」

強く地面に打ってくらくらする頭を押さえながら、ヴァイスは辺りを見回す。彼の手には、先程掴んだモモンの実が、少し潰れて収まっていた。乱暴に折られた木の枝や、あちらこちらに散らばっている、種――どうやら、モモンのみの種ではないようだ――。

「これは、“種マシンガン”？」

１つの種を手にとって、ヴァイスが呟いた。植物の種を勢いよく飛ばして相手にぶつける攻撃、“種マシンガン”。何者かが放ったこの技によって自分は木から落とされた――。ヴァイスはこう推測した。

「ご名答！　弱虫ヴァイス君♪」

どこかから聞こえた、嫌味な声。

「ブ、ブレロ！」

その声に心当たりがあるヴァイスは、声がした後ろを振り返った。

「何さ、なんでこんなこと――」

「君と遊びたかっただけなんだけど♪」

ヴァイスの言葉を遮る、ブレロという名のハスブレロ。頭に被っている蓮の葉の下から見える笑顔は、ヴァイスを凍りつかせた。

ここでふと、重大なことに気が付くヴァイス。

「ねえ。キララはどこ？　さっきここにいたピチューは！？」

「気が付くのが遅すぎやしないかい？　救助隊のくせに」

「うぅ……」

その言葉に悔しさを感じた、弱気になって少しうつむく。

「そのピチューなら、さっきブルルが森の入り口に連れていったよ」

「それって誘拐じゃないか！　やっぱりブルルも一緒だったんだね！」

いつもブレロと共にいたずらをする、ブルーというポケモンのブルルも共犯者だと知ると、ヴァイスの中の怒りの感情が強くなる。

「キララに何をするつもりなの！？」

「何もしないさ。言ったろ？　僕らは君と遊びたい。君の救助隊“ごっこ”に付き合ってやっているだけさ♪」

さらに嫌味な口調でブレロは続けた。

「ピチューを返して欲しければ、今すぐ森の入り口に来な！　まぁ、毒で弱っているピカチュウを見捨ててまでとは言わないけどね！」

「……」

返す言葉がないヴァイス。沈黙し、再び弱気になる。

「そうだ、いいことを思い付いた♪　今日中にピチューを取り返せなかったら、広場の皆に悪い噂を広めよう！　君らが救助に失敗した事を……ね」

そう言うと、ブレロはヴァイスに背を向けた。

「じゃあな、僕も森の入り口に向かう。来る勇気があったら来るん

だね！　弱虫くん」

高笑いをしながら遠ざかるブレロの背中を睨んだ後、ヴァイスはモモンの実を握りしめ、セナとキラロの元へ走り出す。

地面に生い茂るクローバーの葉は、ヴァイスの涙を持ち上げていた。

第2話：出動！！救助隊“キズナ”！――その3（前書き）

依頼主のピチュー――キララと共に、キララの兄――ピカチュウのキラロを見つけられたのは良いけど、キラロは毒を受けていた！
ボクはキララの案内でモモンのみを採りにいったんだ。モモンのみは手に入ったんだけど、ハスブレロのブレロとブルーのブルルに邪魔されて、なんとキララが誘拐されちゃった！
ど、どうしよう……。
（語り：ヴァイス）

第2話：出動！！救助隊“キズナ”！――その3

「大丈夫か？　キラロ」

「はい、まだ……」

セナとキラロはヴァイスとキララの帰りを待っている。

「遅いな……」

キラロには聞こえないくらいの大きさの声で、セナは呟いた。なかなか帰ってこないヴァイスたち。そして、毒に侵されているキラロの身を案じているセナ。自分が何もできないことが、ひどくもどかしい。

その時……

「セナーっ！！」

ヴァイスの精一杯叫ぶ声が、セナの耳に届いた。

「ヴァイス！」

オレンジ色の小さな体が、ものすごい速さで駆けつけてくる。その表情から不安と焦りの気持ちが伝わってきた。

「ハァ、ハァ……」

セナの目の前につくと、ヴァイスは苦しそうに呼吸をする。その右手には、潰れかけたモモンの実。体には、種マシンガンによって

つけられた浅い傷があった。

「おい、大丈夫か！？」

ヴァイスの様子を見て、ただ事ではないとセナは察した。

「あれ……。なあ、キララはどこだよ？」

「誘拐されちゃった！　ボクが……。ボクがぼんやりしてたから！」

ヴァイスの頬を涙が伝う。

「はぁ！？」

状況が飲み込めないセナに、妹の身を案じて動揺するキラロ。

「とにかく森の入り口に行かなきゃ！　セナ、キラロにこれを食べさせて！　ボクはキララを助けに先に行く！」

ヴァイスが投げたモモンの実を、セナは上手にキャッチする。

「キラロが良くなったら、セナも来てね！　じゃあ！」

「あっ、おい！」

セナの呼び掛けは、ヴァイスの耳に届かなかった。スカーフをなびかせて、ヴァイスは森の入り口に向かって駆けていった。

「よく分からねぇけど、これは……ヤバイぞ！」

とにかく早くヴァイスを追いかけなくちゃ！　そう思ったセナは、急いでキラロにモモンの実を食べさせたのだった。

いつも、意地悪をされてきた。嫌味もたくさん言われた。ボクは気が弱くて、ブレロやブルルに言い返せなかったから……。

でも、変わんなくちゃ！ボクはもう、救助隊員なんだから。

決意を胸に、ヴァイスは疾風の如く駆ける。地面のクローバーが、ざわざわと激しく揺れた。

「キララ！！」

「ヴァイスお兄ちゃん！」

入り口にたどり着いたヴァイスは、木に縄で縛り付けられているキララを見つけ、心が痛む。同時に、ここまで休みなく走り続けたせいで、激しく咳き込んだ。

「ずいぶん早かったじゃないか。怖くて逃げるかと思ったよ」

小柄なわりに随分と口が達者なブルルが言う。

「逃げるわけ、ないでしょ……」

肩で息をしながら、ヴァイスはやっとのことで声を出す。

「さあヴァイス、かかってこいよ。僕らを倒したら、ピチューを返

してやる。……と言っても、ピチューに危害を加えるつもりはまるでないけどね。お前をいたぶって満足したら、その時もピチューを返すよ。ただし、悪い噂を流されたくなかったら、僕らを倒すんだね！」

自分達がヴァイスなんかに負けるはずがない。そう思っているかのように、上から目線で話すブレロ。

『危害を加えない』と言われても不安の残るキララは、近くにいるブルルを涙目で見つめる。

「大丈夫。おれっち達がヴァイスを倒したら、すぐに放してあげるから」

ブルルはそう言ったが、その冷たい笑顔はキララの不安を膨れさせた。

「ふざけないで……。“ひのこ”！」

激しく燃える火の玉は、ヴァイスの怒りを表しているようだった。しかし、まだ呼吸がととのっていないせいで、狙ったブルルまで火の粉が届かない。

「へへっ、なんだその攻撃は！　獲物は、こうやって狙うんだよ！」

ブレロはそう言うと、口から勢いよく水を発射した。

「わあっ！」

ブルルに意識が集中していて、ヴァイスはブレロの攻撃を受けてしまった。

「ヴァイスお兄ちゃん！」

倒れ込むヴァイスを見て、キララは悲痛な叫び声をあげる。

「ハァ、ハァ……。」

水タイプの技は、炎タイプのヴァイスにとっては大きな打撃。息をするのも必死だが、ヴァイスはなんとか立ち上がった。

「隙あり！　“噛みつく”」

ヴァイスの左肩に、ブルルが背後から噛みついた。

「うぐっ……！」

痛そうに顔を歪めるヴァイスだが、ブルルはなかなか離さない。ヴァイスの体にどんどん食い込むブルルの鋭い牙……。あまりの痛さにヴァイスの気が遠くなりかけた。

「いてッ！」

ブルルは不意に声を上げるとヴァイスから離れ、頭をさすりだした。その足元には、ゴローンの石。

「やっほーう！　大当たり～」

親指を立ててそう叫ぶと、セナが森の木の影から飛び出してきた。その後ろには、元気になったキラロの姿が。

「お兄ちゃんに、セナお兄ちゃん！」

キララは嬉しそうに叫ぶ。

「キララ！　今縄をほどくからな！」

キラロは急いでキララに駆け寄り、器用に縄を外した。自由になったキララを微笑んで見た後、セナはブレロ達を睨み付けた。

「てめえら……。覚悟しろ！　許さねえからな！」

ブレロ達2人とヴァイスの関係なんて、全く分からない。それでも、仲間を傷付けた敵と、今まで何もできなかった自分に腹を立て、セナは怒鳴る。

「これはこれは、ヴァイス君のお友達。こんな弱虫と救助隊をやろうだなんて、随分と物好きです、ね！」

彼にしては普通に話していると思いきや、セリフの最後の方で、ブレロはセナに種マシンガンを放った。

「おあっ！？」

突然の奇襲を、セナは変な声をあげながらもなんとかかわす。しかし、後ろに回り込んだブルルがセナの尻尾をつかみ、バランスを崩させた。

「わあ！」

転倒して仰向けになったセナに、ブルルがのし掛かる。そして、

「へへっ……。“雷の牙”！」

電気をまとったブルルの牙が、セナに襲いかかった。

「うあっ……！！」

体を貫くような電撃に、セナは辛そうな叫びを上げる。

「セナ……！」

ヴァイスは自らの体の痛みも忘れ、電気技に弱い水タイプのセナを心配して叫んだ。

「見たかヴァイス。君の仲間なんて、所詮こんなもんだ。君のように、弱いのさ」

攻撃を終えたブルルが、フラフラと立つヴァイスのもとに歩み寄る。しかし、ヴァイスはニヤリと笑う。――ブルルの背後に、大きく息を吸い込むセナを見たからだ。

「誰が弱いだ！？　食らえ！」

怒りを激しい水流に変え、セナは“水鉄砲”を繰り出した。

「うぎゃあ！？」

倒したと思っていたセナからの、突然の奇襲に驚くブルル。さらに、

「今度こそ！　えい！」

至近距離で放ったヴァイスの“火の粉”は、今度はブルルを捕らえた。立て続けに2人の攻撃を受け、ブルルは倒れて気を失った。

「なっ……！？」

急な形勢逆転に、ブレロは動揺する。

「すげえや、防御スカーフ。さっきの攻撃を受けても、全然痛くねーし♪」

全然痛くない、と言うのはただセナが強がっているだけだと誰が見ても分かるのだが、確かにスカーフのお陰で、通常よりもかなりダメージが軽減したようだ。

「うぐぐ……。なめやがって！　ならこうだ！　“吸いとる”」

ブレロは、防御スカーフではダメージを防げない、特殊攻撃でセナを攻めようとした。ブレロの鋭い爪が伸びた手が、セナの尻尾を乱暴につかむと、セナのエネルギーがブレロに吸いとられていく。

「くっ……や、止めろ！」

草タイプの技が苦手なセナは、はじめは痛々しい叫び声をあげ、次第にぐったりとしてきた。

「セナお兄ちゃん！」

「セナさん！」

セナのピンチに、キララとキラロは心配そうに叫ぶ。そんな状況に満足げなブレロだったが……。

「たあ！」

ブレロの後ろに回り込んだヴァイスは、超至近距離から“火の粉”を放つ。

「うあ！？」

衝撃でブレロが弾き飛んでセナの尻尾を離すと、ヴァイスはセナのもとへ駆け寄った。

「しっかり、セナ！」

「ハァ、ハァ……。おう、サンキュー」

ヴァイスの手を借りて、セナはよろよろと立ち上がった。

「もーほんとに怒った……。お返しだ！」

ヴァイスの“火の粉”でダメージを受けているブレロを睨み付け、セナは“水鉄砲”を放つ。でも、水・草タイプのブレロには、ほとんどダメージは無いのでは……？　セナの攻撃が終わった後、ヴァイスのその考えに反してブレロは倒れていた。

「ただの水鉄砲だと思ったら大間違いさっ♪　だって……」

セナはブレロに歩み寄ると、濡れた小石を拾い上げた。

「コイツにダメージを与えたのは、このゴローンの石なんだから」

どうやらセナは、強い水の流れにゴローンの石を乗せ、それをブレロにぶつけたようだ。確かに、普通に投げてぶつけるよりもだいぶ痛いだろう。

「くそ……。」

ブレロが立ち上がると、セナは身構えた。しかし、セナには目もくれず、ブレロは倒れているブルルを起こした。意識が戻ったブルルは、ゆっくりと立ち上がる。そして、

「フン！　アイテムなんか使いやがって……。勝った気になるんじゃねえぞ！」

捨て台詞をはいて、ブレロとブルルは広場の方へと去っていった。

第2話：出動！！救助隊“キズナ”！――その4（前書き）

ハスブレロのブレロさんとブルーのブルルさんが、ボクの妹のキララを連れ去ってしまいました！

でも、さすがは救助隊のセナさんとヴァイスさん。少し苦戦したものの、ブレロさんとブルルさんからキララを取り返してくれたんです！

ボクの毒もきれいに抜けたし、本当に良かった……。

（語り：キラロ）

第2話：出動！！救助隊“キズナ”！――その4

「助けてくれて、本当にありがとうございました！　あのまま毒で死んじゃうかと思いましたよ」

ペコリと頭を下げ、キラロはセナとヴァイスにお礼をする。

「いいよいいよ！　それより、怖い思いをさせてごめんね。キララ」

ブレロ達の件で、責任を感じるヴァイス。彼らは、単にヴァイスをからかうためにあんなことをしたのだから。

「ヴァイスお兄ちゃんは悪くないでちゅよ！　それに、戦ってる姿がすごーくかっこよかったでちゅ！」

「ほんとほんと！」

キララとキラロの言葉で、ヴァイスはまたまた涙を流した。

「泣き虫だな～、お前は」

呆れたように、でも、優しく笑うセナ。彼につられてキララとキラロも笑う。

「ごめん。でも、安心したから……」

そう言って涙をふくと、ヴァイスもニッコリ笑った。

「そうだ！　プレゼント♪」

セナは不意にそう言うと、首に巻いていた防御スカーフをとり、キラロに渡した。もちろん救助隊バッジを取り外して。ヴァイスもセナの真似をしてキララにスカーフを渡す。

「今度から出掛けるときは、必ずそれを身につけるように！　効果はオイラが保証する」

「でも、大切なものなんじゃ……」

スカーフを受け取るのを躊躇うキラロ。

「大丈夫！　オイラたちは無敵の救助隊、キズナさ！」

調子に乗ってそう断言するセナを見て、ヴァイスは苦笑いした。

「どうせセナなんかすぐスカーフをボロボロにしちゃうから！　だから、キミ達が大切に使ってくれると嬉しいな♪」

「なんだとー！」

ムキになったセナはヴァイスの頭をひっぱたく。

「いったぁ！」

クスクスと笑いながら、キララとキラロはスカーフを首に巻く。

「じゃあ、ありがたくいただきますね！」

「おう！　似合うじゃねえか」

照れながら笑う、兄と妹。

「お家はどこ？」

「“新緑の森”でちゅ！」

ヴァイスの問いかけにキララが答えた。

「そっかぁ。あんまり近くないけど、大丈夫？」

「はい！　明るい道を通るし、２人一緒ならね♪」

「うん、お兄ちゃん！」

仲むつまじい２人を見て、セナとヴァイスは微笑んだ。

「じゃあ、元気でね！」

ヴァイスのその言葉の後、２、３の言葉を交わして、セナ達はサメハダ岩へと帰っていった――。

セナとヴァイスは、サメハダ岩の草の布団の上に座りながら、夕御飯のリンゴを食べている。

「――あの２人に、ボクはいっつもイタズラされてたんだ。悔しかったけど、ボク弱虫だから、言い返せなかった」

ブレロとブルルとの関係について、セナに説明するヴァイス。

「そっか。元々の知り合いだったのか」

相づちを打つセナ。

「セナはきっと、ボクみたいな悩みはなかったよね」

ため息をついて、ヴァイスが言う。

「なんでそう思うんだ？」

「過激な言い返しができそうだから」

「……」

「あ、別にセナのこと悪く言う気はないよ！むしろちょっぴり羨ましい。……まぁ、度がすぎるのもよくないけどね！　アハハ！」

「……」

不満げな表情で、セナはヴァイスを見る。

「でも……、ありがとう！」

ヴァイスは、突然セナに礼を言った。

「え、何が？」

「今日はなんだか、すごく勇気が出たんだ。だから、ブレロ達と戦

えた。……これって救助隊を始めたからかな？　それともセナがいたから？」

素直すぎるヴァイスは、思ったことを恥ずかしげもなく口にする。

「さ、さあな」

ぶっきらぼうにそう言うと、セナはヴァイスから視線をそらした。

「あれー、セナ？　もしかして照れてる？」

「別に……」

「やっぱり照れてる！　かーわいいー♪　リンゴみたいに顔が真っ赤だよ！」

キャッキャとはしゃぐヴァイスに、セナはさらに顔を赤くした。

「うるせーっ！」

セナはそう叫ぶと、ガツガツとリンゴを食べた。

ヴァイスとの出会い、初めての救助、そして救助隊キズナ結成――。ポケモンになって、色々あった2日間が、セナにはとても長く感じられた。ちょっぴり痛い経験もしたが、ヴァイスや、助けたポケモン達の笑顔。それがこれからも見られるのなら、ずっと救助隊を続けていきたい。――と、心ではそう思ったが、素直になれないセナであった。

そんなサメハダ岩から遠く離れた、とある岩山でのことだった。
この夜、一人の人間の少年は、ポケモン――ヒコザルになった。
元は人間の彼だが、今は見事に小猿のような容姿をしている。真っ暗な岩山では、自分の尾に灯った小さな炎だけが頼りだ。とはいえ、明るくなるのは背後のみ。

「……今日はいいや、明日からにしよう」

そう呟くと、彼はその場に仰向けに寝転がった。背中がゴツゴツして、寝心地が悪い。なかなか寝付けぬヒコザルの少年は、星空を眺めながら、自分のこれからについて考えていた。
オレの、人間としての記憶……。セナは失った、記憶……。それこそが、このガイアで起きる事件の謎を解く鍵になる。オレをこの世界に送ったポケモン――実体を見せなかった、光の渦――は、こう言った。

「まずはセナを探さなくちゃな」

考えがまとまった彼はそう呟くと、いつしか眠りについた。

こうして、セナもヴァイスも知らない、もう1つの冒険が幕を開けた。

第2話：出動！！救助隊“キズナ”！――その4（後書き）

戦闘シーンが長いですね（汗）。上手にまとめられないもので……。

第3話：ホノオの旅立ち（前書き）

救助隊としての初めての仕事は大成功！
誰かに感謝されるのってすごく嬉しいし、何よりポケモンとしての生活は楽しい！　……ま、オイラはこういう感情をうまく表に出せないんだけどさ。
（語り：セナ）

＞ｉ１１８９９―４３４＜

第3話：ホノオの旅立ち

セナとヴァイスが救助隊を結成した、次の日。

「おはよう、セナ！　今日は早いね」

「あぁ、おはよ」

サメハダ岩に朝日が差し込み、セナとヴァイスが起床する。

オイラだってもっと寝ていたかったさ、とセナは思った。でも、気になる夢を見てしまってから目が覚め、どうしても眠れなかったのだ。

――暗い空間で、セナはひたすら泣いていた。恐怖、孤独、そして罪悪感……。それらの残酷な感情は、夢とは思えないくらいリアルに、セナの心に襲いかかってきた。

そんな時、どこかから優しくセナを呼ぶ声が。同時に、暗かった空間は柔らかな光に包まれる。セナは涙をふいて、声がした方を見た。遠くに見えるのは、ぼんやりとかすんだ人間の姿。

姿をきちんと確認したくて、ゼニガメの姿のセナはその人間のもとへと駆け寄った。しかし、その人間の姿を確認する前に、夢はフッと途切れ、目を覚ましたセナの頬は、涙で濡れていた――。

「おーい、セナ！　どうしたのさ？」

自らが見た夢についてしばらく考えていると、ヴァイスが呼び掛けてきた。

「悪い。まだ眠いんだもん」

目を擦りながら、セナは嘘をついた。

「じゃあ、ボクが叩いてあげるよ！」

「さ、さあ！　今日も頑張ろうか、ヴァイス君♪」

叩かれるのは嫌だなと思い、セナは空元気を出した。こうして、救助隊生活2日目が始まった。

一方、昨日ヒコザルになった少年は――。

「うーん、眠い……」

『眠い』と寝言をいいながら、岩山の上で眠っていた。そして、太陽がすっかり真上に昇ったとき……。

「ふあぁー！　よく寝た♪」

彼は満足げに伸びをして、行くあてもなく歩きだした。

「さーあ、セナはどこだ～？　セーナ、セーナ、セナセナ♪」

訳の分からない歌を歌いながら岩山を歩く。

「……て、歌ってる場合じゃねーや。真面目に、どこに行きゃあいいんだ？」

今更ながら、途方に暮れた。この広い世界で、しかも、どんなポケモンになったか分からないセナを探すなんて。つーか、さっきの歌、誰も聞いてないよな……！？　だんだんと思考のそれる少年。周りに誰もいないことを確認しようと辺りを見回したとき……

「キャーッ！　助けてー！！」

突然聞こえた甲高い悲鳴に、びっくりして飛び上がった。とりあえず、声がした方に向かうと崖に行き着いたが、声はすれども姿が見えず……。

「おーい、どこにいるー！？」

「ここだヨー！」

少年が崖から叫ぶと、足元から声が聞こえた。よく見ると、なんとか崖をつかむ、平べったい形をした青い手が。

「うわぁ！」

突然訪れた超デンジャラスな状況に、少年は驚きの声をあげる。

「ま、待ってろ！　今助けるからな！！」

彼は急いで青い手をしっかり掴み、その手の持ち主を引き上げた――。

「ありがとう！　助かったヨ♪」

さっきまであんな状況に置かれていながら、少年に助けられたポケモン――水色のペンギンのような容姿のポッチャマは、ケロリと笑って礼を言う。

「お、おう……」

その態度に、少年は戸惑う。何より、崖に捕まっていたときから、ポッチャマが大事そうに片手に持っていた、1輪の花が気になった。

「その花はなんだ？」

「あ、これネ！」

少年の問いかけに、ポッチャマは嬉しそうに答える。

「この花が崖の途中に生えてて、キレイだから欲しくなっちゃって……。手を伸ばせば取れそうだったから、崖の上から取ろうとしたんだけど、そしたらさっきみたいに、落ちそうになっちゃった」

「……そんなにこの花が欲しかったのか？」

「ウン！お花大好きだから♪」

どうやらこのポッチャマは幼い女の子らしいと、少年は判断した。

「そっか。……なあ、お前の名前は？」

１００％、セナではない！　そう思いながらも、少年は一応ポッチャマに名前を尋ねた。

「“シアン”っていうんだヨ♪」

やっぱり、聞くだけ無駄だった。

「はぁー。そっか、そうだよなぁ」

「何!?　そのリアクションは!」

思わず本音が出る少年に、ポッチャマは機嫌を損ねた。

「あ、悪い悪い!　シアンか。女の子らしくていい名前じゃないか!」

すかさずご機嫌をとろうとしたが、まさかそれが逆効果になるとは……。

「ちっがーう!　シアンは男の子!」

あまりの声の大きさに頭がキンと痛くなり、少年は頭をおさえた。

「……で、キミの名前は?」

目をまわす少年に、シアンが尋ねた。

「うぅ……。オ、オレの名前は、焔(ホノオ)。」

ヒコザルになった少年は、ホノオと名乗った。

「そっか、ホノオって言うんだネ!　ねえねえ、ホノオはどこに住

んでるの？」

あっという間に機嫌がなおったシアンは、ホノオに尋ねる。

「地球……に、住んでた」

「チキュウ？　それって、ガイアのどこら辺？　西？　東？」

「ガイアの外の、別の惑星」

その答えに、シアンは怪訝な表情を浮かべる。

「えーっ！？　キミ変だヨ！　何言ってるのサ？」

シアンにいちいち説明するのが面倒で、適当に答えていたホノオだが、かえって面倒な展開になってきた。

「はぁー……。あのな、シアン」

ホノオはとうとう観念して、自分のことをシアンに話したのだった。

「そっかあ。セナってコを追って、人間からポケモンに……」

「信じられるか？」

「ううん全然」

即答するシアンに、ホノオは苦笑いした。

「ははは……。だよな」

ホノオは続けた。

「しかもさ、セナがどんなポケモンになったか分かんないんだ」

「うーん。イトマルかもしれないし、ズバットやメノクラゲかも……。それは大変だネー」

蜘蛛、コウモリ、クラゲ……。なぜか、ビミョーなポケモンの名前ばかりあげる、シアン。

「……それはないと信じたい」

シアンがあげたポケモン達の姿を想像しては、ホノオはその映像を打ち消した。

「……あ、そうだ！」

急に、高い声でシアンが叫ぶ。

「なんだ？」

ほんのちょっと期待をして、シアンを見るホノオ。

「ここからけっこう遠いんだけど、“精霊の崖”っていうところに、“ネイティオ”っていうポケモンが住んでいるんだヨ！　彼はエスパーの力で色々な物事を見透すし、中でもポケモン探しが凄く得意

なんだって！」

「マジ！？」

シアンが言うことだから……と、さほどの期待をしていなかったホノオだが、まさかの大当たりに目を輝かせた。

「ウン、ホント！　だから、ネイティオに会えば、きっとセナの居場所も分かるヨ♪」

そうと聞いたら即実行！　……の、せっかちなホノオ。

「分かった、行ってみる！　じゃあな、ありがとシアン！」

シアンに背を向けたが……

「待って！」

シアンに腕を掴まれて、立ち止まった。

「なんだよ」

「なんだよじゃないでしょ！　精霊の崖の場所知ってるの！？」

「あ、知らない……」

「やっぱりネ！」

ため息をつくシアン。

「じゃあサ、シアンも手伝うヨ！　セナ探しをネ♪」

「……ほぇ！？」

突然の発言に、ホノオは間抜けな声を発した。

「だって、なんか面白そうだし、ホノオ1人じゃ心配だし……ネ！」

ニッコリとホノオを見るシアンを見て、ホノオは思う。こいつ、いいやつかもな……。

「マジ？　ほんとにいいの！？」

シアンに何度も確認するホノオ。先が見えない不安から解放された、喜びのせいかもしれない。

「いいのいいの。キミはシアンの命の恩人だし！」

「おおーっ！　サンキュー！！」

ホノオはシアンの手をギュッと握る。

「痛いヨ！」

その強い力に、顔をしかめるシアン。

「はは、悪い」

ホノオはシアンの手を放すと、ニカッと笑ってシアンを見た。

「これからよろしく頼むぜ、シアン！」

「ウン、こちらこそ！　……じゃ、精霊の崖にレッツゴー♪」

「オーッ！」

こうして岩山をあとにしたホノオとシアンは、精霊の崖へと旅立ったのであった。

第3話：ホノオの旅立ち（後書き）

シアンの語尾がカタカナなのは、あえてです（笑）
ようやく主要な人物が増えてきましたが、まだまだ物語は先が長いです。

第４話：セナの涙とネイティオと――その１（前書き）

人間からヒコザルになったオレの目的はセナを探すこと。でも、困ったことに、手がかりが全くないんだよね。

そんな時、崖から落ちそうになっていたポケモン――ポッチャマのシアン。オレはそいつを助けたんだけど、なんとこいつがセナを見つける手がかりをくれた。精霊の崖にいるネイティオに会えばいいらしい。

それでは、シアンと共に精霊の崖目指してしゅっぱーつ！！

……ちなみにシアンは男なんだぜ。

（語り：ホノオ）

第4話：セナの涙とネイティオと――その1

「ありがとうございましたー！」

「うん、じゃあねぇー！」

セナとヴァイスが救助隊を始めて数日後。オレンの実配達の依頼を済ませると、セナとヴァイスは依頼主のニドリーナというポケモンに別れを告げた。

「今日も大成功だね♪」

「まぁ、配達の依頼は簡単だからな！」

だいぶ仕事にも慣れ、毎日確実に依頼をこなすセナ達。2人が肩にかけている、小さなカバン――セナのは青色、ヴァイスは赤色――は、初の依頼成功を祝福して、ガルーラおばさんが作ってくれたものだ。そのカバンについている、救助隊員の証である救助隊バッジも、だいぶサマになってきた。はるかぜ広場でも、“キズナ”は駆け出しのわりに腕がいいと、評判が良かった。

そんな順調な日々に、ヴァイスの心は弾む。しかし、ヴァイスが知らないところで、セナは悩みを抱えていた。原因は、あのおかしな夢。毎日毎日見るそれは、最近になって新たな展開を見せている。

「う……ん」

その日の夜中、いつものように、セナは夢の中の負の感情にうなされる。その隣では、ヴァイスがすやすやと寝息をたてながら、気持ち良さそうに眠っている。

そろそろ来るな。夢の中で涙を流すセナは、いつも名前を呼ぶ人間の気配に感づく。

「セナ……」

その瞬間、やはりいつも通りに周りの空間が明るくなり、セナから苦しみが抜けていった。変化したのは、この後から。名前を呼ぶ人間は、セナのすぐ後ろに立っていた。

「大丈夫か？」

しゃがみこみ、ゼニガメの姿のセナに目線を合わせて話しかけてくるその人間は、燃えるようなオレンジ色の、長めの髪をした少年だった。綺麗に整った顔立ちをしている。

「ありがとう、焔（ホノオ）」

夢の中のセナは、その少年を“焔”と呼ぶ。礼を言われた焔は微笑むと、謎多き一言を。

「いいかセナ。過去に負けるなよ！」

焔はセナの頭を優しく撫でた。ちょっと恥ずかしいけど、暖かな気持ちになった。

「もうすぐ会えるからな。もうすぐ……」

その言葉を残して、焔の体は光の中に溶けていった。そして、セナは夢から覚める――。

「焔って誰だよ……？　過去に、負けるな？」

涙をふきながら、セナは夢の内容について考えた。

夢から覚めた時点で、その日の睡眠は終了。夢の内容が気になって、目をつぶっても、寝よう寝ようと思っても、少しも眠気がやってこない毎日を過ごす。何よりも眠りを妨げるのは、夢の中に焔が現れるまでに感じる、強い負の感情だ。眠りたくてもあんな恐ろしい夢を見るのは怖い。少しだけ、セナは震えていた。

しかし、眠ることが大好きなセナにとって、睡眠不足は大敵。

「いっ……！」

日々の疲労が癒えず、激しい頭痛に襲われる。割れそうに痛む頭を抱えながら、セナはもがいた。

やがて、意識が遠くなる。ハハハ。眠れないよりましだよ……。セナは、そう思った次の瞬間から、朝が来るまで気を失っていた――。

セナがそんな日々を過ごしている間にも、ホノオとシアンは着々と精霊の崖に近づいていた。突然たくさんのポケモンに襲われたり、早瀬で溺れかけたホノオをシアンが助けたり……。そんな様々な困難を乗り越えながら、ホノオは思う。シアンが居なかったら、オレ

は確実に死んでたなぁ……と。空気が読めないのが困り者だけど、そんなシアンに日々感謝する、ホノオなのだった。

そんなある日のこと。

「とどめだ！　火の粉！」

場所は、精霊の崖にあと1歩のところにある、“新緑の森”。しばらくポケモンとして生活し、だいぶ戦うことに慣れてきたホノオは、今の相手であるアリアドスに火の玉を飛ばした。

「ギャアア！！」

蜘蛛のような容姿をした虫タイプのアリアドスは、炎タイプの技で大ダメージを食らい、ドサリと倒れた。

「やった！」
「すごいでちゅー！」

その様子をそばで見守っていたのは、男の子のピカチュウと、小さな女の子のピチューだ。シアンは、アリアドスが背後に隠していたピンクの花形のアクセサリーを、ピチューのもとへ持っていった。

「はい、キララちゃん！　取り返したヨ♪」

キララと呼ばれたピチューは、目を輝かせてアクセサリーを耳の付け根の辺りにつけた。

「わぁー、ありがとうでちゅ！　ホノオお兄ちゃんに、シアンお姉ちゃん！」

シアンの表情が、わずかに引きつる。

「良かったな、キララ！」

キララの兄のピカチュウ――キラロは、キララの頭を撫でた。

「えー……、2人とも、驚かないで聞いてくれ。実は、シアンは……お、男なんッ……アハハハ！」

セリフの途中でたまらず笑い転げるホノオ。シアンが行く先々で女の子に間違われるのが、おかしかったのだ。

「何がおかしいノ！？」

シアンはくちばしで思い切りホノオの背中を突っついた。

「ぎゃっ！！」

強烈な一撃に、ホノオは悲鳴をあげた。

「ご、ごめんでちゅ……。シアンお兄ちゃん」

目を回すホノオを見ながら、キララはおずおずと謝る。

「ちゃんと謝って、キララちゃんはいい子だなぁ♪　……ホラ、ホノオ君は～？」

横たわるホノオのお腹を蹴りながら、シアンは言う。容赦ないようだ。

「ご、ごめんなしゃい……」

すぐに怒って攻撃してくるのが、シアンの難点。そう思い知った、ホノオであった。

キララ、キラロと別れた後、ホノオとシアンはいよいよ精霊の崖を登ろうとした。頂上にいるネイティオのところへとたどり着く方法は2つ。シアンは、どちらの道で行くかホノオに尋ねた。

「どうする、ホノオ。近道だけど、落ちたら即死の恐怖の急斜面を登る？　それとも、なだらかで遠い、坂道がいい？」

「坂道でお願いします」

いつにもまして、ホノオの決断は早かった。

「だよネ♪　そうしよう！」

シアンはそう言うと、さらに付け足した。

「こっちのなだらかな坂道から行っても、頑張れば、今日中に着くはずだヨ！」

「マジで！？　よーし、待ってろよ、セナ！」

「待ってヨー、ホノオのせっかちー！」

駆け出すホノオを、シアンは焦って追いかけた。

こうして、いよいよ2人はネイティオに会うための最後の道のりに足を踏み入れた。

一方のセナとヴァイスは、その少し前の時分に、依頼を受けて“西の砂漠”を歩いていた。内容は、そこに住むヤジロンというポケモンにモモンの実を配達する、というものだった。

「暑い……」

相変わらず体調が優れないセナに、太陽の陽射しが容赦なく照りつける。

「大丈夫、セナ？　フラフラしてるよ」

ヴァイスは心配そうにセナを見つめる。

「なんだよ、そんなに心配しやがって。余裕余裕！」

空元気を出して、セナはヴァイスの前を歩いていく。

「セナ……」

切ない表情を浮かべ、ヴァイスはセナの後ろ姿を見ながら呟いた。

この日は、珍しいことが起こった。セナとヴァイスは、初めて依頼に失敗してしまったのだ。その詳細はというと……。

ヤジロンに会いに行く途中、2人は届けるモモンの実を、ハリネズミのような地面タイプのポケモン、サンドパンに奪われた。取り返そうと戦うが、サンドパンによく効くセナの“水鉄砲”が、ことごとく外れてしまった。さらに、攻撃を全くかわせなかったセナはあっという間に倒され、ヴァイスも相手との相性が悪く、やられてしまった――。

仕方なく、今日はサメハダ岩に帰る。

「ごめん……」

帰り道の途中、今回の失敗に責任を感じたセナは、うつむいてヴァイスに謝った。

「そんな……。セナだけが悪いんじゃないよ！　それに、誰だってたまには失敗しちゃうし。……ね？」

コクリと頷くセナ。ヴァイスに励まされるほどに、自分が情けなくなる。

「ねえ、セナ」

はるかぜ広場を通りかかったとき、ヴァイスはセナに声をかけた。

「ボク、ちょっと広場に用事があるんだ。先に帰って、リンゴ食べてて」

そう言うと、ヴァイスはセナに背を向け、走り出した。

いつもは心地よいさざ波の音が、今日は切なく感じる。もうすぐ1日が終わり、頭を悩ませる夜がやって来る。1人でサメハダ岩に帰ってきたセナの気持ちは沈んでいた。毎日の夢が気になり、眠れない日々。疲れがたまり、救助隊の仕事にまで悪影響が出てきてしまっている。でも、失敗を夢なんかのせいにできないし、あんな話、誰にも言えない。

……もう、嫌だ。何も考えたくないや。ため息をまた1つ。疲れ果てたセナは、いつからだろうか、心の底から笑えなくなっていた。

そんな、肩を落とすセナを、ヴァイスはサメハダ岩の階段を降りたところで密かに見ていた。後ろ姿しか見えないが、ここまで落ち込んでいるセナは初めて見た。

どう声をかければよいのか迷い、サメハダ岩に入るのをためらう。ヴァイスがそうこうしていると、セナが右手をスッと目元に当てた。その行動の意味をなんとなく悟ると、キュッと胸が締め付けられるような気がした。

なんだか、ボクまで泣いてしまいそう。そう思ったヴァイスは、何食わぬ顔をしてそろりそろりとセナに近づく。ここはあえて、おどけちゃおう。セナとボクのために。ニヤリと笑うと、ヴァイスはセナの尻尾に手を伸ばす。

セナの尻尾に軽くさわると、ピクリと肩が動く。これは――もしかして、弱いな？確信したヴァイスは、セナの尻尾をくすぐり始め

た。すぐにセナは身をよじり、逃れようと必死に暴れ出した。

＞ｉ２４７６０―４３４＜

「わあっ、止めろ！　アハハハ！」

憂鬱だったセナを、尻尾に走る強烈なくすぐったさが笑わせる。

彼がくるりと後ろを向くと、楽しそうに自分の尻尾をいじるヴァイスと目が合った。

「くうっ……このっ、お前か！」

セナはそう叫ぶと、ヴァイスの頭を叩いた。

「えへへ♪　ばれちゃった！」

舌を出してそう言うと、ヴァイスは自分の布団の上に座った。

「なぁヴァイス、今まで広場で何してたんだ？」

一段落すると、セナはヴァイスに問う。

「別に～♪　……それよりセナ。リンゴまだ食べてないでしょ？」

言い当てられたセナは、ギクリと反応した。

「な、何でそれを――」

「超・能・力！」

セナの言葉を遮り、ヴァイスはおどける。しかし、セナが不満そ

うな顔をしたので、ヴァイスは本当のことを話した。

「……なんてね、嘘だよ。本当は知ってたんだ。セナが最近元気ないなぁーって」

「えっ……。どこがだよ!?　フツーに元気だし!」

動揺するセナ。強がりを、また1つ。

「嘘!　キミ、最近全然上手に笑えてないじゃん!」

「……」

セナの心がズキンと痛む。気持ちが揺れる。

「ねえ、セナ。ボクで良ければ、辛いこと全部話して?　きっと楽になるから――」

「うるせえな!」

ヴァイスの言葉をかき消し、セナは怒鳴った。

「他人事だろ。ほっといてくれ。お前に話したところで何になるってんだ」

「何言ってるの、セナ?　ボクら友達じゃん。他人事だなんて、思ってないのに……」

セナらしくない冷たい言葉に心を痛め、ヴァイスはついに泣き出してしまった。

どうしてコイツは、こんなにオイラなんかのことを考えてくれる

んだろう？　ポロポロと落ちるヴァイスの涙を見る度に、心が強く痛む。そして、こんがらがっていたものがスルスルとほどけ、楽になる。――まるで、夢の中で苦しみから解放される時のように。

「ごめん。ありがと、ヴァイス」

静かに礼を言うと、押さえきれない感情に襲われた。

「うっ……」

セナは小さく嗚咽を漏らす。ヴァイスの前で見せる、初めての涙。

ほんのちょっと、素直になれた。

第４話：セナの涙とネイティオと――その２（前書き）

オイラ達は順調な救助隊生活を送っていた――あくまで表面上は。オイラは毎日のように変な夢を見るようになって、寝不足状態が続いていた。誰にも悩みを言えず、体調は悪くなり、ついにはオイラのせいで依頼に失敗してしまった。

追い詰められたオイラを支えてくれたのは、ヴァイス。優しい言葉をかけられたから、つい涙を見せてしまった。

……なんか、恥ずかしいな。アイツにゃかなわないや。

（語り：セナ）

第4話：セナの涙とネイティオと――その2

なだらかな坂道を歩くホノオとシアンを、夕陽が照らしている。

「ねえ、ホノオ」

ネイティオにあと少しのところで、シアンはホノオに話しかけた。

「うん？」

「セナってホノオにとってどんな存在なの？」

「なんだよ、いきなり」

「いいじゃん。気になったんだから、教えてヨ～！」

シアンは駄々をこねて、ホノオの体を揺する。

「わ、分かったから放せ」

別に隠すようなことでもないので、ホノオは説明した。

「親友だよ。……いや、親友だった」

「“だった”？　どういうコト？」

シアンは、意味ありげな発言に食いついてきた。

「アイツは、ポケモンになったときに、人間の時の記憶を失ったら

しい。だから、オレのことだって忘れちまったさ」

「えっ。何でそんなコトをホノオが知ってるの？」

「オレは、あるポケモンに、ガイアに来るように頼まれたんだよ。頼まれたというか、半強制的っていうか……。そのポケモンが、色々と教えてくれたから」

ホノオは、その時のことを振り返る。

――あの日、“それ”はホノオの夢の中に現れた。
柔らかな光が包む空間に、人間の姿の焔は1人ポツンと立ち尽くしていた。

「ここは、夢？」

「そうですよ」

焔の呟きに、透き通った、それでいて落ち着いた、女性のような声が答えた。

「だっ、誰だ！？」

焔が叫ぶと、目の前に光が集まり、小さな渦を巻き始めた。

「焔さん、ですよね？」

「そうだけど……。誰だよ、お前？」

渦を巻く光に、焔は問いかけた。

「ワタシは、“ポケモン”です」

「はあ～？」

意味の分からぬ返答に戸惑う焔。“ポケモン”と名乗ったその光は、彼に構わず続けた。

「焔さん。瀬那さんを、覚えていますか？」

その言葉に、焔は強い反応を見せた。

「当たり前だろ！　オレの親友、美波瀬那（ミナミセナ）……。忘れるはずがねえ！」

「そうですか。それは、良かった」

そう言うと、“ポケモン”は焔にとって驚きの発言をした。

「その瀬那さんは、昨日、ポケモンの世界へと旅立ちました。人間の代表として責任をとり、ポケモン達の星、ガイアの破壊を防ぐために」

「えっ！？」

瀬那がポケモンに？　それに、人間の責任に、ガイアの破壊って？　状況をよく飲み込めていない焔を置いて、“ポケモン”はさらに話を進めた。

「瀬那さんをガイアに連れていくときに、ワタシ、彼に自らの使命について伝えたんです。しかし、困ったことに、彼はポケモンになる際に記憶を失ってしまったのです」

「アイツが、記憶を……」

「ですから、あなたもポケモンになって、瀬那さんのサポートをしていただきたいのです。あなたや瀬那さんの、“人間としての記憶”が、これからガイアで起こる事件の、謎をとく鍵になりそうですから」

「うーん……」

考えることが苦手な焔は、複雑な展開に頭を抱えた。

「別に、ワタシの力があれば、事件を解決することもできるのですが……。人間の責任を、ワタシがとる理由がありませんから」

突然声のトーンを落とし、冷たく言い放った、光の渦――“ポケモン”。何でコイツは、こんなにも人間を憎んでいるんだ？　焔の心がざわざわと音をたてた。

「親友のサポートくらい、やっていただけますよね？　まあ、嫌なら別に構いません。記憶を失なった親友を、見捨てていただいても……」

「――っ！　黙れ！　行くさ。行ってやるぜ！！」

人を見下しやがって……。

“ポケモン”の口調に腹が立った焔は、彼女のセリフを遮り怒鳴った。

「分かりました。何か、聞きたいことはありますか？」

謝りもしないで淡々と話を進める相手の態度のせいで、短気な焔は冷静さを失なった。

「ねえよ！　ガイアってところに行って、瀬那を見つけてサポートすればいいんだろ！？」

「はいそうです。覚悟はよろしいですか？」

「とっくにできてる！」

「そうですか。では、参りましょう。目を閉じてください、焔さん」

その言葉と共に、焔はかたく目を瞑った。

――オレが転校してから、久しぶりに瀬那に会う。あの、青くてクセがついてる髪に、小さな身長。そして、あどけない顔立ちは、そのまんまだろうか？

そんなことを考えていた焔だが、ふと重大なことに気が付いた。瀬那は、ポケモンになったんだ。ということは、オレが知ってる瀬那の外見なんて、役に立たないではないか！　ヤバい！　さっき、あの“ポケモン”とかいう嫌なヤツに聞いとけば良かった！　ついでに、何だかよく分からない、“これからガイアで起こる事件”についても。

激しく後悔したが、時すでに遅し。フッと意識がなくなった焔は、ヒコザルの姿で、あの岩山に倒れていたのであった――。

「ぎゃあああーッ！　バカだよオレ！　あのときセナがどんなポケモンになったか聞いておけば……！」

「わあ！　いきなり何！？」

一通り考えごとが済むと、突然ホノオは絶叫した。シアンは当然驚く。

「うるさいナ！　キミがバカなのは分かってるから、叫ぶまでもないでしょ！？」

「だって――！」

まだわめこうとするホノオにシアンは呆れ、話題をもとに戻した。

「えーと、セナは記憶をなくしたから、ホノオのコトを覚えてない。だからホノオは、親友だった、って言ったんだ」

「あ？　ああ。悲しいけど、しゃーないだろ？　また親友に戻ればいいだけの話さ！」

「キミのその、根拠のない自信って、どっから来るんだろうネ？」

「あはは、知らね」

苦笑いのシアンの言葉に、ホノオは適当な答えをよこした。

「――まぁ、良かったのかもしれない。アイツが記憶を失なったことは」

独り言のように呟くホノオだが、それを聞き漏らさないスーパー地獄耳の持ち主、シアン。

「え？　どうして？」

「どうして、って……」

ホノオは言葉を詰まらせた。本当の理由を、オレは言いたくない……。いや、言えない。

「そ、それは……。こうしてオレもポケモンになって、お前と旅ができているからさ！」

「うわ気持ち悪っ！」

いくら、とっさのごまかしのために適当に言ったセリフとはいえ、シアンの言葉――しかも即答――で、ホノオは心に大ダメージを食らった。

「忘れてください……」

うなだれてそう呟くが、

「お前と旅ができているからサっ！　お～まえ～と～♪　た～びが～♪」

ホノオのセリフをリピートし、シアンははやし立てる。怒りと恥ずかしさで、元々オレンジ色のホノオの体が、真っ赤に染まる。

「っ！　コンのヤロー！　ブッ殺す！！」

「キャー♪」

ホノオがシアンを追いかけながら、一気に頂上にたどり着いた。

「……あ、いた！　ネイティオさーん、助けてー！」

逃げ足だけは速いシアンは、崖の上で、夕陽に染まった森を見つめている、ネイティオのもとへ駆け込んだ。ネイティオは、こけしのようなシルエットの、緑色の鳥ポケモンだ。

「……何だ、お主は」

振り返ってシアンを見つめたその眼差しは、何か神秘的なものを感じさせた。

「待ちやがれペンギン野郎ー！　焼き鳥にしてくれるーっ！」

猛スピードでシアンを追いかけながら、ホノオはわめき散らす。

「何！？　焼き鳥だと！？」

“焼き鳥”という言葉に、ネイティオは過敏に反応する。

そして……。

「そうはさせんぞ！　サイコキネシス！！」

「ぎゃあぁーっ！！」

すっかり取り乱したネイティオは、強力な念力を放ってホノオを襲い、激しい頭痛を与えた。ホノオはドサリと倒れて気を失う。

「ホ、ホノオ！？」

「何、“ホノオ”だと！？　いかん！　私としたことが、つい焼き鳥という言葉に反応して……！」

やりすぎに反省した2人は、ホノオの元へと駆け寄った。

一方、しばらくの間泣いたセナは、ヴァイスに優しくなだめられて落ち着きを取り戻していた。そして、ヴァイスに不思議な夢のことを話したのだった。

「そっか。暗い空間で怖さや罪悪感を感じているセナを、焔って人間が呼んでいて……。そしたら急に、周りが明るくなって、嫌な気持ちもなくなる……」

「ああ。そんで、謎の言葉を残して夢が終わる」

「『過去に負けるな』に、『もうすぐ会える』？」

「ああ」

2人はセナの夢の話を整理する。

「眠れないのもしょうがないよ。気になることが多すぎるもん」

ヴァイスはセナに同情して言う。

「うん、まあね。やっぱり寝ないとちょっと辛いしさ……」

ため息をつき、セナは呟いた。

「ボクは、その、焔って人間を探してみればいいと思うな」

「はっ！？」

ヴァイスの言葉にセナは戸惑う。

「探すってどうやって？　人間がこの世界にいるわけないだろ？」

「でも、焔は『もうすぐ会える』って言ってるんでしょ？　それって、焔がポケモンになったことを表しているんじゃない？」

確かにそうだと、セナは納得する。

「そっか！　でも、どんなポケモンになったのか分からねえし……」

「ふふっ！　それなら方法があるんだよん♪」

得意気にそう言うと、ヴァイスはサメハダ岩に置いている、木でできた箱の中をあさり、地図を取り出した。

「今、ボクらがいるサメハダ岩は、このはるかぜ広場の近くだよ。それで……」

床にガイアの地図を広げ、尻尾の炎で照らしながらヴァイスが説明しだした。

内容は、“精霊の崖”にいるネイティオに聞けば、焔の居場所が分かるかもしれないと言うこと。

そして、そこに行くためには“聖なる森”という広大な森を通る必要があること――。

「けっこう長い旅になっちゃうと思うけど……。どうする？　行ってみない？」

「お前は、いいのか？」

「もちろんだよ！」

笑顔でそう断言するヴァイス。

「サンキュ、ヴァイス。お前が居なけりゃ、オイラ……」

これ以上泣くのは、カッコ悪すぎる。セナは、必死に涙をこらえた。

「……とにかく、焔を探すことが、オイラがポケモンになった理由を見つける手がかりになりそうだよな！　明日から頑張ろうぜっ！」

「うん！　さっ、準備準備～♪」

ヴァイスは自分の赤いバッグを手元に引き寄せ、地図を丸めて中に入れた。そのバッグの中には、体力を回復する“オレンの実”が２つ、食料の“リンゴ”が３つ入っている。

「オイラも。……よいしょっと」

セナは、サメハダ岩への入り口の階段の近くにある、自分の青いバッグを掴む。バッグの中に手を突っ込むと、攻撃アイテム“木の枝”が2本、あと“リンゴ”が5つも……。そして、自分がバッグに入れた記憶のない感触が。

「ん？」

セナが不思議そうにそれを取り出すと、黄緑色の小さな便箋だと分かった。

「手紙？」

「えっへへ♪　見つかっちゃった」

どうやらこれは、ヴァイスからのものらしい。セナが考え事をしているうちに、入れたのだろうか。

「それね、さっき広場で書いてたの。だって、ほら。途中で見られるのって、恥ずかしいじゃない」

「これ、オイラに？」

「うん！　ボクからのお手紙。読んでみて」

セナは便箋から手紙を取り出す。そして、ヴァイスの子供っぽい文字を、目で追っていった。

第４話：セナの涙とネイティオと――その３（前書き）

キャー、シアンはちょっとホノオのマネをしただけなのに、ホノオが追いかけてきたー！　シアンがネイティオさんに助けを求めたら、なぜかネイティオさんがホノオに攻撃して、ホノオが倒れちゃったヨ！

ざまあ……じゃなくて、大変大変！！

（語り：シアン）

第4話：セナの涙とネイティオと――その3

夕陽が沈み、満月の光に照らされている精霊の崖で。

「うーん……」

ネイティオのサイコキネシスにより倒れていたホノオが、目を覚ました。

「あっ、起きた！　よかったー！」

シアンはホッとため息をつく。

「シアン……。あれ？　なんでオレ、倒れてたんだ？」

その言葉に答えたのはネイティオ。彼はホノオの顔を覗き込みながら言った。

「かたじけない。私が取り乱してしまって、つい……。ホノオ、悪いが“焼き鳥”という言葉を口に出さないでくれまいか？」

「あ、ああ」

思い出した。オレは焼き鳥という言葉に反応したネイティオにやられたんだ。そんなにこの言葉が嫌いなのか？

「ホノオ。お主が来るのをずっと待っておったぞ。よくぞたどり着いた」

「はあ。どうも」

自分のことを知っているなんて、さすがエスパーといったところだろうか。それともシアンが喋ったのか？　そんなことより気になっていたことを、ホノオはついに質問した。

「なあ、ネイティオ。セナは今、どこにいる？」

「この“聖なる森”を抜け、南に進むと“はるかぜ広場”という広場がある。その近くに、セナはいる」

崖の下に広がっている広大な森を見つめながら、ネイティオが言う。どうやらこの森が聖なる森のようだ。辺りが暗いせいでもあるだろうが、崖の上から見渡しても終わりが見えてこない。

「すごく広い森だネ……」

呆然と、シアンが呟いた。

「ホノオ」

そう言ってホノオを見るネイティオの瞳は神秘的に輝いて、目が合うと吸い込まれそうな気持ちになった。

「人間であるお主に、１つ尋ねたい。自らやセナの使命について、お主はどのように考えておるのだ？」

「え……？」

そんなことも知っているのか。

「いきなり使命とか事件とか言われても、正直意味わかんねえって思ってたし、今も少し思ってる。でも、とにかくそれってオレ達が人間だからこそ引き受けなきゃなんないんだろ？」

一呼吸置き、さらに続けた。

「それに、何だかんだで今の冒険が楽しいから、事件の謎はオレ達が見つけてみせる！　ネイティオ、こればっかりはあんたのエスパーの力には頼らないからな！」

本当は、ここで全てを聞けば旅が楽になるのだろう。でも、いいんだ。それじゃあ“オレ達の冒険”じゃなくなるし。

「その答えを待っておったのだ。頼もしい、良い目をしておる」

「えっへへ♪　そうかぁ？」

調子に乗り出したホノオを見て、シアンはあきれ果てた。

「どーせホノオなんて、ただカッコつけたかっただけでしょっ！　ほら、さっきだって『お前と旅が……』」

「うぎゃあ！　黙れーッ！」

「キャー！　避難だー！」

ホノオが怒鳴ると、シアンは登ってきた坂道を駆け降りた。

「じゃあな、ネイティオ。ありがとう」

微笑んで別れを告げると、ホノオも坂道を猛スピードで駆け降りていった。

ホノオとシアンの叫び声が遠ざかるのを聞きながら、ネイティオは考えた。

聖なる森で育った私は、幼き日々から他のエスパーポケモンよりも格段に優れた超能力を持っていた。

そんな私でも、実は分からなかったのだ。セナやホノオがこれから関わる事件。そして、増え続ける自然災害については。日々不安に襲われる私にとって、さっきのホノオの言葉は何よりも救いになった。

こちらこそ、ありがとう。

この時のネイティオの気持ちは、約1時間後に粉砕するのである。

行きの登りは時間がかかったのに、どうして帰りはこんなに早いのだろうか。ネイティオと話をしてから約1時間後、ホノオとシアンは聖なる森に足を踏み入れた。

「この森を抜けて南にあるはるかぜ広場ってところに、セナはいるんだよネ！」

「そうさっ！　やっほーう！　旅路に光が差したぞ～♪」

夜なのに妙にハイテンションなホノオ。

「広場って言うくらいだから、いろんなポケモンが集まるんだろうネ」

「そうさ！　その中にはきっとセナが♪」

「結局、セナがどんなポケモンになったのか聞くの忘れちゃったネ」

「そうさ！　……って、あああーっ！　しまったぁー！」

ホノオの顔が青ざめる。

「どうする？　もう1度ネイティオに会いに行く？」

ため息をついてシアンが言う。

「んー。ネイティオんとこからはけっこう歩いたが、結局回り道をして、オレらがいるのはあの崖の下……。叫べば届くかな？」

ホノオはブツブツと何かを呟く。

「何する気？」

不安げにシアンが聞く。

「ネイティオを、命をかけて召喚する！」

そう言うと、ホノオは大きく息を吸い込んだ。

そして。

「オレはあぁーっ！　焼き鳥が大好きだーッ！！」

ホノオのその言葉はネイティオの耳に届き、我を忘れたネイティオは、血相を変えてホノオの元へとテレポートしてきた。

かくして、ネイティオのサイコキネシスを食らうというリスクと引き換えに、『セナはゼニガメになった』という情報を手にしたホノオであった。

＞ｉ３０２２２―４３４＜

『セナへ

いつも元気で明るいセナを、ボクはすごく頼りにしてるよ！
弱虫だったボクが毎日救助に向かえているのもセナのお陰です。
本当にありがとう。

でも、もっとボクのことを頼ってほしいな。
ボクも、もっとしっかりするからね！

これからも、よろしく！

ヴァイスより』

ヴァイスからの手紙を読み終えたセナは、それをカバンにしまいこんだ。短い手紙だったけど、とても大切そうに――。さすがのヴァイスも恥ずかしそうにしている。そんな彼を見て、セナは久しぶりの笑顔を見せた。

「ありがとう」

その日の夢は、いつもと違っていた。
はじめから明るい空間に、セナと焔は立っていた。
「お前は今日、物語の扉を開けた。オレはもう、お前の夢にはでてこない」
そう言って、焔はセナに背を向けて歩き始める。
「待てよ！　行っちまうのか？」
セナは後ろ姿に声をかける。
「言ったろ？　もうすぐ会えるって。人間の姿のオレ、焔はお前にもう用はない。用があるのは、ポケモンの姿のホノオだからな」
そう言うと、焔はスッと消えた。
「焔……」
呆然と、セナは呟く。なんだったんだ、お前って。
「セナ。……セナ！」
後ろから、親しみ深い、可愛らしい男の子の声が聞こえた。
「ヴァイス……」
「どうしたの？　ボーッとして。さ、早く行こう！」

ヴァイスが指をさすのは、遠くにある、強い、強い光。

「ああ！」

返事をすると、セナはヴァイスと共に歩きだした。強い光に向かって。

この日を最後に、セナの不思議な夢は終わる。焔が出てくる不思議な夢は。

そして、久しぶりに次の日の朝までぐっすりと眠った、セナなのであった。

第４話：セナの涙とネイティオと――その３（後書き）

展開がややこしくなってきましたが、うまく伝わっているでしょうか……？

第5話：拳に込める使命感――その1（前書き）

ネイティオと色々と話をしたのに、オレは肝心なことを聞き忘れた。セナがどんなポケモンになったか――これが分からなきゃ、探しようがねえ！

しかーし！　心配は要らないのである。オレにはとっておきの上級召喚魔法がある！　聖なる森にて呪文を叫んだオレの元には、狙い通りネイティオが飛んできて、セナがゼニガメになったと教えてくれた。召喚魔法は大成功！　……え？　ダメージ？　――上級魔法にデメリットは付き物なのだよ、うん。

と、とにかく、はるかぜ広場を目指せ！

（語り：ホノオ）

第5話：拳に込める使命感――その1

「おはよう、セナ！」

「あぁ、おはよ！」

セナが目覚めると、ヴァイスが声をかけてきた。

「セナ、すっごく気持ち良さそうに寝てたね」

「ああ。よく寝たよく寝た、大満足♪」

2人は楽しそうに話す。

「さぁ行きましょうか。“精霊の崖”を目指して！」

青いバッグを肩にかけながら、セナが元気に言う。

「うん！」

ヴァイスが赤いバッグを肩にかけると、2人は階段を登ってサメハダ岩の外に出ようとした。その時……。

「うわ、地震か！？」

突然揺れだした地面。立ってはいられる強さだが、不安をあおる揺れだった。2人が転倒しないようにしゃがみ込んでいると、やがて揺れはやむ。

「この前はどこかの川が溢れたって聞くし、だんだん災害の数が多くなってるね」

「ああ」

ちょっと気分が盛り下がったが、２人は旅の準備をするために、はるかぜ広場へと向かった。

広場に行くと、まずは“ペルシアン銀行”でお金の管理をした。依頼に成功すると、救助隊本部から基地のポストにお金が届く。金額はランクに応じているので、ノーマルランクのキズナはあまり大きな収入はないが、コツコツ貯金して貯めていた。

そして、ガルーラおばさんの倉庫とカクレオン商店でアイテムの整理をした。

ちなみにセナのバッグには、“木の枝”を２本、“リンゴ”を３個、“オレンの実”を１個、敵を眠らせる道具“バクスイ玉”を１個、そしてヴァイスからの手紙。

ヴァイスのバッグには、“モモンの実”を１個、“リンゴ”を３個、“オレンの実”を２個、そしてガイアの地図を詰めこんだ。

準備が済んだ２人は、北にある聖なる森へと向かった。木漏れ日がやわらかく光り、空気が澄んでいる綺麗な森。そこに到着するのにさほど時間はかからなかったが、長いのは、ここからの道のり。

「精霊の崖に行くには、この森を抜けなくちゃ。広いけど、頑張ろうね！」

「ああ。じゃ、行くか」

会話をかわすと、２人は広く、神聖な森に足を踏み入れた。

こうして、セナとヴァイスははるかぜ広場方面から精霊の崖方面へ。一方、昨日聖なる森で一夜を明かしたホノオとシアンは、その逆の方向に森を進みだしたのであった。

セナとヴァイスが森の中を歩いていると、見覚えのあるポケモンに出会った。

「よう、キーマにポポじゃねぇか！」

向日葵のような容姿のポケモンであるキマワリのキーマに、頭に黄色い花が咲いているかわいらしいポケモンであるポポッコのポポ。2人ともよくはるかぜ広場にいて、ヴァイスの前々からの知り合いだ。セナも話をしたことがあるが、どちらもセナとヴァイスより少し歳上の女の子のようだ。

「あら、セナにヴァイス。ごきげんよう。これからどこに行きますの？」

セナとは対称的な上品な口調でキーマが聞いてきた。

「えーとね、精霊の崖ってところ。ネイティオに会うんだ！」

答えたのはヴァイスだ。

「へぇ、そんな遠いところまで……。大変ね」

そのポポの言葉に、

「大変じゃないよ！　楽しいもん。ね、セナ！」

「まあな」

２人はそう答えた。

「まあ、それはよかったですわ！　それより２人とも、ネイティオのところに行くのなら、ひとつ忠告がありますの」

と、キーマは気になる言葉を口にする。

「え？　なに？」

ヴァイスは怖々と聞いた。

「ネイティオの前で“焼き鳥”は禁句よ、２人とも！　炎タイプのヒトカゲのヴァイスと、食いしん坊のセナの組み合わせなら、会話の中でうっかりこの言葉を言ってしまいそうだから」

「なんだよ。オイラはそこまで食い意地張ってねえ！」

ポポにからかわれ、セナは反論する。

「でも、どうして焼き鳥って言っちゃダメなの？」

予想もしなかったポポの答えに、ヴァイスは拍子抜けしていた。

「彼はこの言葉を極度に嫌うのですわ。何でも、過去に炎タイプのポケモン達に襲われたせいだとか。ともかく気をつけて！　昨日の夜も、１人のヒコザルがサイコキネシスで半殺しにされたそうです

から」

乙女たちの噂話は、電話もメールもないこの世界でも、驚異的な早さで伝わるようだ。

「うへ～。怖っ」

「あら、セナもヴァイスも、そんなに怖がる必要はないわ。焼き鳥さえ言わなければ、ただの性格にクセのあるポケモンだから♪」

「ただの……って、アンタねぇ、“クセのある”ってだけでフツーじゃねえよな？」

呆れ顔のセナ。

「まぁ、セナは食べ物の話ばっかりするし、教えてくれて命拾いしたよ。ありがとう！」

「ヴァイス……オメェってヤツは！」

セナはヴァイスを睨みながら、歩み寄った。

「わ、セナが襲ってくるー！　じゃあね、キーマ、ポポ！」

「あ、待てコラ！　うわっ！」

セナはヴァイスを追いかけたが、３歩駆けたら転んだ。

「ウフフ。いつも元気でいいですわね」

「そうね」

キーマとポポは、遠ざかるセナとヴァイスを微笑みながら見ていた。

ちょうどその頃、森の中で大きなくしゃみをした1人のポケモンが。

「……っくしゅん！」

「ホノオ、風邪ナノ？　バカのクセに」

「ちげーよシアン！　きっと誰かがオレの噂を……」

まさにその通り。ちょうどこの頃、キーマとポポによって焼き鳥の件を噂されていたホノオなのであった。

「キーマもポポも、この森に住んでたんだな。はじめて知ったぜ」

一方のセナとヴァイスは、森を歩きながら話をしていた。

「うん。はるかぜ広場に集まるポケモン達には、聖なる森のこころ辺のエリアから広場に来ているポケモンもけっこういるんだ！」

「へぇー」

そんな2人の会話を、草の茂みに隠れて聞いているポケモンがいた。ハスブレロのブレロと、ブルーのブルルだ。

「そうさ、ヴァイス。そして、僕達も聖なる森に住むポケモンなんだぜ」

ブレロがニヤリと笑いながら言う。

「最近ヴァイスで遊んでないからなぁ。久しぶりに遊ぼうか」

ブルルがそう言うと、顔をしかめるブレロ。

「それができたら毎日遊んでるだろ。でも……」

ブレロの瞳に映るのは、ヴァイスと話をしながら笑っている、1人のゼニガメ――セナの姿。

「あのセナって奴が来てから、どうも調子が狂うんだよな。ヴァイスも反抗的になるし……」

「そうなんだよなぁ。アイツ、いったい何者なんだ？　突然広場に現れやがって」

眉間にシワを寄せてブルルが言う。

「まぁいいさ。今日こそはあいつらに仕返ししてやる！　やるぞブルル！」

「おう！」

こうして、ブレロとブルルはセナ達の後をつけ始めた。

「……ふぅ、そろそろ休まねぇか？」

「うん。ボクも疲れちゃった」

セナの言葉で、２人は休憩を始めた。幹が太い木に腰掛けて座ると、セナのまぶたが重そうに降りてきた。

「アハハ、眠いの？」

「うん……。おやすみ、ヴァイス。くぅ……」

可愛らしく寝息をたてて、セナはあっという間に眠り始めた。

「フフ。疲れてるもんね」

ヴァイスは微笑みながら、セナの頭を撫でた。

「ククク……。あいつら、のんきにスピアーの巣の近くで寝てやがる。今がチャンスじゃねえか！」

のんびりくつろいでいる２人を、木の影から見ていたブレロとブルル。どうやら何か企んでいるようだ。ブルルは、バッグからゴローンの石を取り出した。

「よーし、しっかり狙えよブルル！」

「了解っ！」

そう言うと、セナ達が休んでいる木のすぐ近くの木にあるスピアーの巣をめがけて石を投げた。

「ふあぁ……。なんだかボクも眠くなってきたよ」

すやすや眠るセナを見て、ヴァイスはあくびをした。スッと目を閉じた、その瞬間。

「いたっ！」

ヴァイスの額に石が当たった。

「うぅ……。誰！？　ゴローンの石投げたのは！」

身をかがめ、落ちていた手のひらサイズの石を手にとって叫んだその時、頭上から、ブンブンと羽が擦れあう不快な音がした。ヴァイスが顔を上げる途中に目に入ったのは、木から落ちて無惨に潰れた、スピアーの巣。

「も、もしかして……」

頭が真っ白になったヴァイスが、ギクシャクと顔をあげてみると、怒りに満ちた顔でヴァイス達を睨み付けている、スズメバチのような容姿のポケモン、スピアーの群れがいた。

「えーと、こっ、この巣はボクらが壊したんじゃないよ！　えと……き、きっと、どっかから飛んできたこの石が当たって……」

十数匹のスピアー相手に、ヴァイスは懸命に説明する。

「そうか。お前がこの石を投げて……」

「ええっ!?　ち、違うってば！　信じてよ！」

聞く耳を持たないスピアー達に、ヴァイスはパニックになる。

「覚悟しろよ、イタズラ小僧共！」

スピアー達の鋭い毒針が猛スピードでセナとヴァイスに迫る。

「うわあああぁ！！」

ヴァイスがセナの左腕をガシッと掴み、間一髪で毒針をかわした。

「ふぇ？　な、何が起こったんだ!?」

「走ってセナ！　に、逃げるよっ！」

寝ぼけているセナの質問に答えている余裕はない。

「んぎゃあ！　なんだこりゃあ!?」

目をこすっていたセナだが、スピアーの群れを見て、一瞬で眠気が吹き飛んだ。

「待たんか悪ガキ！」

走り出すセナ達だが、スピアーの群れは物凄い速さで追ってくる。

「うわわわわ！　人がせっかく爆睡してたのに……」

「そんなこと言ってる場合！？」

ぐんぐん縮まる、スピアー達との距離。セナののんきな発言に、ヴァイスは突っ込んだ。

「む！　爆睡？」

セナは自らの発言から何かひらめいたようだ。そして、バッグから取り出したのは、紫色の、手のひらサイズの玉だった。それを右手でしっかりと掴むと、セナは立ち止まって後ろを向く。

「あっ、そっか！　バクスイ玉！」

ヴァイスは、セナのやりたいことが分かったようだ。

「食らえ！　毒針！」

尻についた毒針を向け、スピアー達は今にもセナ達を刺そうとする。

「いっけえぇ！！」

セナはそう叫ぶと、スピアー達に向かって紫色のバクスイ玉を投げた。投げられたバクスイ玉は、淡く光ると空中で破裂し、中から光の粉が出てきた。そして、粉が降りかかったスピアー達は、あっという間に眠りだし、ドサドサと空中から地面に落ちた。

「はぁ、はぁ……。た、助かったぁ」

力が抜けたように、ヴァイスは尻餅をつく。

「死ぬかと思ったぜ」

額の汗をぬぐうと、セナはヴァイスを立たせ、スピアーから逃げるように歩きだした。

「くそ！　バクスイ玉だと？」

「面白くないな……」

残念そうに言う、ブレロとブルル。

「よし、次だ次！」

セナとヴァイスを睨み付け、ブレロとブルルは再び後を追い始めた。

「ないか？　ヴァイス」

「うん。ないよ！」

さっきスピアーに襲われてから、木にスピアーの巣がないか気にしながら歩いているセナとヴァイス。目線は常に木の上方。足元に

は、注意をしていなかった……。
しばらく歩いていると、ふと、セナの足元からカチッという音が聞こえてきた。

「へ！？」
「い、今、カチッって……」

2人が恐る恐る足元を見てみると……。セナが、罠の一種“自爆スイッチ”を踏んでいた。不吉な予感に完全に固まる2人。そして――

「うわあああぁー！！」

森に凄まじい爆音が鳴り響き、ポッポ達は驚いて木から飛び立つ。スイッチの周囲の草や木も焼け焦げ、爆発が終わったスイッチの上では、真っ黒になってうつ伏せに倒れている、セナとヴァイスの姿が――。

「ギャーハハハ！　引っ掛かったな、ざまぁみろ！」

ブレロの高笑いと共に、ブレロとブルルが姿を現した。

「お、お前ら……」

その声にピンときたセナは、焼け焦げた木に掴まりながら立ち上がった。

「もしかして、さっきのスピアーの時も……」

ヴァイスもよろよろと立ち上がる。

「そうさ♪　おれっち達が巣を落としたんだよ！」

ブルルの答えに、セナの目付きが変わった。

「ふざけんな！　何でてめーらは邪魔ばっかりすんだよ！」

「悪いねぇ。君が僕らとヴァイスとの遊びを邪魔するから、ついやりすぎちゃったよ」

「なっ、遊びだぁ！？」

「しっかし君もかわいそうにね。ヴァイスなんかとチームを組んだばっかりに、こんなことに巻き込まれて……」

ブルルのその言葉が、ヴァイスの心に突き刺さった。

「今日はお前らを倒す！　“種マシンガン”！！」

ブレロは鋭くとがった種を、セナとヴァイス目掛けて発射した。

「うわーっ！！」

「いたたっ！」

水タイプのセナに、容赦なく襲いかかる草タイプの攻撃。炎タイプのヴァイスでさえも、傷を負った体に受ける攻撃に苦しんだ。

「フフ……セナ。やあっとお前に復讐ができた。最高だよ」

セナの尻尾を踏みつけながら、ブレロが言う。

「あっ……！」

セナはきつく目を閉じ、痛みに耐える。

「今日は防御スカーフを着けていないな。なら、とどめは雷のキバだ！」

ブルルが自分のキバに電気のエネルギーをため始めた。

（そうはさせない！）

ヴァイスが息を吸い込み、ブルルに火の粉を放とうとした、その時。

「待ちな！」

どこからか、そう叫ぶ女の声が聞こえた。

「げっ！　この声は……」

ブレロとブルルが後ろを振り向いてみると、1人のカメールが笑みを浮かべて――目は笑っていないが――立っていた。カメールは、亀のような容姿の濃い水色のポケモンで、ゼニガメの進化系。羽のような耳と、ふさふさとした毛の生えた尻尾を持っている。

「メ、メルさん！」

ブレロとブルルにメルと呼ばれた女の子のカメールは、2人の元へ歩み寄った。

「アンタ達。よくもアタイのいとことその友達をいじめてくれたね！」

メルは『アタイのいとこ』と言いながら、セナのことを見た。

（げっ……！　セナって、あのメルさんのいとこだったのか！？）

メルの言葉に、ブレロ達は焦り始める。

＞ｉ３０２２３―４３４＜

「こいつを食らいたくなかったら、今すぐ立ち去りな！」

メルはそう言うと、拳に冷気をまとわせて、思い切り地面を殴り付けた。凍りつく雑草……強力な“冷凍パンチ”だった。

「ごっ、ごめんなさーい！」

ブレロとブルルは、その威力を見て怯えだし、逃げていった。

「アッハッハ！　いい気味だねぇ♪」

遠ざかる2人の後ろ姿を見て、メルは高笑いをする。状況が飲み込めないセナとヴァイスは、ただ唖然とするばかりだった。

第5話：拳に込める使命感――その2（前書き）

精霊の崖に向かうオイラ達を邪魔するのは、ブレロとブルル！
何とかスピアーの大群から逃げられたオイラ達だけど、奴らの罠に引っかかって、とうとうピンチに……。

そんな時に助けてくれたのは、女性のカメール。彼女は、一体……？

（語り：セナ）

第5話：拳に込める使命感――その2

「ホント、あいつらはいたずら好きで嫌になっちゃうよ。まぁ、アタイがいつもお仕置きしてやってるからね。アタイの顔見ればすぐ逃げ出すのさ」

持ち歩いていたオレンの実で傷を癒したセナとヴァイスに、メルは自分のことを説明した。

「2人とも、名前を教えてくれるかい？」

「オイラはセナ」

「ボクはヴァイスです」

2人が名乗ると、メルはセナを見ながら言う。

「セナ。アンタはもう、ブレロ達の前ではアタイのいとこだってことになっちゃったからね。2人とも、これでもういたずらされないから、安心しな！」

「は、はぁ……」

そんなメルとセナの会話を側で聞きながら、ヴァイスはさっきブルルに言われた言葉を思い出した。

『ヴァイスなんかとチームを組んだばっかりに、こんなことに巻き込まれて――』。

「セナ、ごめんね」

「え。な、何が？」

突然謝りだしたヴァイスに、セナは戸惑う。

「セナがブレロ達のいたずらに巻き込まれちゃうのって、ボクのせいなんだよ。ごめん」

「ヴァイス……」

俯くヴァイスに近寄ると、セナは話しかけた。

「あのさ。えと……。お前はもっと、自信を持ってもいいと思うぜ。んーと、上手く言えないけど……。オイラは、お前と一緒にいるのが嫌じゃないからな」

何度も何度もつっかえた。これだけのことを言うのにも、セナの頬は真っ赤だった。

「うん。ありがとう、セナ……」

そんな不器用なセナの言葉でも——いや、だからこそ、安心したヴァイスの目が潤んできた。

「アンタ、ますますアタイのいとこみたいだよ。似てるとは思ってたけどね」

セナに近寄り、メルが言った。

「え、いとこいるんだ？」

「いたよ。アンタのように、口が悪いけど優しいゼニガメのいとこが。たまにこの森にも遊びに来てたんだけどね、ある日ここに来る途中、土砂崩れに巻き込まれて死んじまった」

「そ、そんな……」

少し寂しそうに話すメルを見て、ヴァイスの涙が頬を伝う。この人も、家族を……。

「そっか……。悪かった、変なことを聞いちまって」

これ以上、この話には触れない方がいいし、きっと深くは話してくれないだろう。そう悟ったセナは、話を終わらせた。

「なぁに、いいんだよ！」

元気に笑うメルの表情からは、悲しみを乗り越えた者独特の、たくましい強さがうかがえた。

「なぁ、アンタのこと、“姉貴”って呼んでもいいか？」

「ボクも、“お姉ちゃん”って呼びたいな♪」

失ったいとこの代わりをできる者なんて、誰もいない。それでも、少しでも寂しさを癒せるのなら……。そう考えたセナとヴァイスは、無邪気にメルに甘える。

「2人ともありがとう。可愛い弟ができたみたいで嬉しいよ」

メルはセナとヴァイスの頭を優しく撫でる。照れくさそうに笑う

セナに、ニコニコしているヴァイス。まるで、3人が前々からの姉弟だったような、温かい雰囲気が漂った。

「なぁ姉貴。さっき使ってた技、オイラにも教えてくれよ！」

「あぁ、“冷凍パンチ”かい？」

「そう、それ！」

セナの目が輝いた。

「あーっ、セナだけずるい！　ボクもお姉ちゃんみたいに強くなりたいな」

「そうだねぇ……。ヴァイスなら、“炎のパンチ”が使えるかも。アタイは水タイプだからできないけど、技の使い方は冷凍パンチとほぼ一緒だよ」

「わーい！　じゃあ教えてー！」

「手のかかる弟たちだよ、全く」

そう言いつつも、メルは嬉しそうに微笑んでいる。

こうして、セナとヴァイスは、メルに新たな技を教えてもらえることになった。

「まずは、セナは氷を、ヴァイスは炎を利き手にまとわせて」

技の使い方を説明するメルに、

「普段口から出してる炎を、手から出すなんて……」

「オイラ、氷タイプの技使ったことねぇし……」

口答えをするセナとヴァイス。

「はい、やる気がないならここまでにするよ」

「わー、待って待って！」

「やる！　やってみるから！」

2人に背を向けたメルを焦って引き留めた。

「右手に炎を……えい！」

ヴァイスが右手に力を込めると、グッと握った拳に火力の弱い炎が覆った。

「やった、できたよセナ！」

ヴァイスは得意気にセナを見る。

「見てろよ。オイラだって！」

セナの右手が凍りつき、薄い冷気の層をまとった。

「へっへーん♪　どうよ？」

メルとヴァイスを見ながら、セナは右手を高々と挙げた。

「1回でできるなんて、すごいじゃないか！　あとは相手を思い切り殴り付けるだけさ！」

（な、殴り付けるって……。もっと他の言い回しがなかったのかな？）

メルの乱暴な言葉に、ヴァイスは苦笑い。

「とにかく、何回も練習すれば炎も氷もどんどん強くなるから、やってみな！」

「おう、姉貴！」

「うん、お姉ちゃん！」

こうして技習得のための特訓は続き、森に夕陽が差し込んできた。

「いくぜヴァイス！」

「負けないよ！」

セナの凍りつくような冷気をまとった拳と、ヴァイスの燃え上がる炎をまとった拳がぶつかり合った。互いをにらみながら拳を押し合う2人だが……

「わぁー！」

互いのエネルギーが反発して爆発が起こり、2人は吹っ飛んだ。

「よし、すごい威力じゃないか！　実戦練習も終わり！」

メルが号令をかけると、セナとヴァイスは立ち上がってメルの元へ。

「今日は色々とありがとう！　新しい技、いっぱい使ってみるよ」

嬉しそうに礼を言うヴァイス。

「こっちこそ礼を言わなきゃ。ありがとね」

メルはそう言ったあと、セナとヴァイスを見て尋ねた。

「アンタたち、この森のどこかに住んでいるのかい？」

「いいや。オイラたちが住んでるのは、はるかぜ広場のすぐ近くにある、サメハダ岩って場所」

「今は用事があって、精霊の崖に向かっている途中なの」

セナとヴァイスがそう説明すると、

「ふうん。……今日はもう遅いし、まだまだ精霊の崖には遠いだろう。今夜はアタイの家に泊まらない？」

「い、いいのか？」

「もちろん。アタイの家族もこの森に住んでるけど、アタイは一人

暮らししてるんだ。小さな家だけど、ちゃんと寝る場所もあるよ」

「やったー！　お姉ちゃんちにお泊まりだー！」

ヴァイスが歓声をあげ、３人はメルの家へと向かった。

メルの家は、木でできた小さな家だった。家の周りは花壇に囲まれていて、そこには色とりどりの花が。――セナとヴァイスにとって、ほんの少し、メルが女性らしく見えた。

「お邪魔しまーす！」

中を見回してみると、玄関から左手にキッチンがあり、正面の居間には４人で座れる木製のテーブルと椅子があった。そして、右手には寝室。いくつか布団があり、小柄なセナとヴァイスとメルなら、３人で充分に眠れるスペースがあった。全体的に、きちんと整頓されている。

ふと、グウゥ……と、おかしな音が鳴った。犯人はセナ。さっきの音は、お腹が鳴った音だった。

「ハハハ！　お腹が空いたみたいだね。待っててね、今何か作ってやるから」

メルはそう言うと、玄関から左手にあるキッチンへと歩いていった。セナとヴァイスは、居間の椅子に座って料理の完成を待つことに。しだいに美味しそうな匂いが居間まで漂い始め、ヴァイスまで

お腹を鳴らした。

「はい、どうぞ」

しばらくすると、メルがアップルパイをテーブルに運んできた。

「うわー、うまそー♪」

「いただきまーす！」

3人でそれを食べている間は、誰も一言も言葉を交わさなかった。生地はサクサクしていて、ほどよい甘さにシナモンが効いたリンゴ――。メルが料理上手なのは意外に思ったが、夢中でアップルパイを食べるセナとヴァイスてあった。

「ごちそうさまー！」

あっという間に食事を終えた3人は、雑談をして楽しんだ。

セナとヴァイスがバッグに着けているバッジを見て、救助隊をやっているのかと尋ねるメル。その通り、とセナが返事をすると、メルにキズナの活躍を語り始めた。

やがて、3人は寝室で眠りにつく。月が照らす森では、ふくろうに似たポケモン、ホーホーが鳴いていた。メルとセナはぐっすり眠ったように見えたが、ヴァイスはあれこれと考えているうちに眠れなくなった。

昼間、いとこを亡くしたメルの話を聞いて、ヴァイスはひどく心を痛めた。そして、気づいた。自分と同じような経験をしているポケモンがいて、災害により、その数は増え続けるだろうと。死んじゃった、ボクのお母さん。行方不明の、ボクのお父さん……。その

2人の優しい笑顔を思いだし、閉じたヴァイスの目から、涙が溢れた。

その時、隣の布団が動きだし、セナが起き上がった。そして、セナは足音をたてないように静かに、静かに玄関に向かい、そっと戸を引いて外に出ていった。

（セナ？）

セナの様子が気になったヴァイスは、涙をふいて玄関の戸を眺めた。そして、メルを起こさないようにそっと玄関に歩いていき、少しだけ戸を開けて、外の様子を伺った。

外に出たセナは玄関に背を向け、思い切り伸びをした。

「よし、やるか」

そう呟くと、右手に力を込め、拳に氷をまとわせる。月の光が反射して綺麗な輝きを放つ氷は、ヴァイスの目にもしっかりと映った。

さらに意識を集中させると、右手を包んでいた冷たい空気の層が、セナの体を覆い始め、足元に生えている雑草をも凍りつかせた。目を閉じて、この状態を長く保とうとするセナだが、少し時間がたつと、全身を覆った冷気は拡散し、右手の氷がバラバラと崩れた。

「ふぅ……。まだイマイチだな」

少し息を弾ませながら、セナが呟く。

（セナ、偉いや。冷凍パンチの練習してるんだ）

隙間から見えるセナの姿に、ヴァイスは感心した。

「よし、もう1回」

再度右手を握りしめるセナ。精一杯の力を込めてみると、地面に向けたセナの手から鋭い氷柱が勢いよく伸びてきて、地面の雑草を突き刺した。

「うわっ！」

突然の出来事に、当の本人セナと、戸の隙間からそれを見ていたヴァイスは小さく叫び声をあげた。氷柱はすぐに形を失いさっきの氷のように崩れた。

「ヴァイス？」

ヴァイスの小さな叫び声は、セナの耳にも届いていたようだ。

「は～い……」

覗いていた罪悪感もあり、ヴァイスは気まずそうな表情を浮かべ、ゆっくりと扉を開けた。

「練習中だよね？」

「ああ、まぁな♪」

ヴァイスは怖々とセナに話しかけたが、いつも通りの返事にホッとした。

「すごかったよ、あの氷柱！」

「いいや、まだ駄目だよ。技の威力もまちまちだし、氷の力が長続きしねぇんだよ。これじゃ敵を殴る前に氷が崩れて、ただのパンチになっちまう」

「そっか……」

自分に厳しいセナの態度を見て、立派に思った。

ボクだって……。

「ボクも一緒に練習するよ。セナに負けてらんない！」

「お、言ったな～？」

笑みを浮かべてそう言ったセナだが、急に真面目な顔つきになった。

「その前に……。ちょっと話をしねぇか、ヴァイス？　救助隊の仲間として、お前に伝えときたいことがある」

「え？　うん。いいよ」

メルの家の前で、セナとヴァイスは向かい合わせに座る。

「なぁ、ヴァイス」

少しの沈黙の後、セナが口を開いた。

「救助隊、やめようか」

「えっ！？」

当然ヴァイスは激しく動揺する。その後に、２人の間に沈黙が流れた。

「……なーんてねっ！　嘘、嘘♪」

舌を出しながら笑うセナに、ヴァイスの中で何かがプツンと切れた。無言で、怒りでメラメラと燃えさかる尻尾をセナの顔の前に近づけた。

「ぅわっち！　ごめんなさーいっ！」

水タイプのセナも、さすがに熱がって顔を背けた。

「で、話って何なのさ？」

「あ、ああ。えーと、あのさぁ……」

言葉を選んだ後、セナが話し出した。

「最近立て続けに起こってる災害……。なんとかしなきゃなぁーって思ってさ」

「セナもそう思ってたんだ！」

ボクと同じことを、セナも気にして寝なかったんだ。そう思ったヴァイスは、驚きの声をあげた。

「ああ。……まぁ、なんとかするって言っても、オイラには災害を止める特殊能力なんてねぇよ。でも、とにかく、姉貴のように災害で悲しむポケモンを増やしたくないから……。だから、災害の原因を突き止めて、ガイアが安全になればいいなぁーって。だって変だろ？　こんなに災害が起こるなんて」

「うん、変」

一度言葉を切り、ヴァイスは続けた。

「ボクもそうしたいな。お姉ちゃんの話を聞いていたとき、すごく悲しくなったんだ。だって、ボクにはお姉ちゃんの気持ち、よく分かるもん。誰かを失う気持ち……」

「ヴァイス？　どうしたんだよ？」

突然話すのをやめ、泣き出すヴァイスにセナは戸惑った。

「本当はね、ガイアが初めておかしくなったのは、ボクがまだ小さいときなの。突然空から“破壊光線”がたくさん降ってきて、運悪く当たったポケモンが亡くなる事故……いや、事件。その犠牲者の1人が……」

震えだすヴァイスの声。まさか、と思ったセナの予感は的中した。

「ボクの、お母さんだったんだ……」

「え……」

言葉が出てこない。ヴァイスにどう声を掛けたらいいんだろう？
ヴァイスのすすり泣く音と、ホーホーたちが静かに鳴く声が、辺りを包んだ。

「ごめんね。いきなりこんな変なこと言って」

目に涙をためながらも、ヴァイスは無理をして笑顔を見せる。

こいつ、昨日までのオイラにそっくりだ。無理して笑いやがって……。

「ヴァイス」

目を合わせると、自分まで泣いてしまいそうだ。そう思ったセナは、目線を地面に向けて話しかけた。

「昨日、オイラに言ってくれたじゃん。辛いことも、話せば楽になるって。だから、良ければ教えてくれ。お前の、辛い記憶を」

昨日はヴァイスにすごく助けられた。今度は、オイラが助ける番だ。

「セナ、ありがとう」

こうして語られたヴァイスの過去に、後にセナは動揺することになる。だってヴァイスは、自分の前では、そんな悩みを抱えた様子

は微塵も見せなかったから。

第5話：拳に込める使命感――その3（前書き）

アタイが助けたゼニガメ――セナと、ヒトカゲ――ヴァイス。いとこのことを話したアタイを思ってか、弟のように懐いてくれたよ。教えてあげた技の飲み込みは早いし、救助隊活動を頑張ってるみたいだし……。なんだか誇らしいねえ。

（語り：メル）

第5話：拳に込める使命感――その3

「ボクが赤ちゃんだった頃、ボクとお父さんとお母さんの3人で、サメハダ岩に住んでいたんだ」

ヴァイスは静かに語り始めた。

「リザードンだったお父さんは、仲間のカメックスさん、フシギバナさんと救助隊をやっていたんだ。……お父さんの名前は、レッド。お父さんたちの救助隊“ＯＮＥ（ワン）”は、誰もが憧れるマスターランクで、ボクもすごく尊敬していたんだ。

リザードだったお母さんは、毎日サメハダ岩でボクの面倒を見てくれて、すごく優しかったんだ。……お母さんの名前は、フレム。

しばらくの間は平和に暮らせていて、お父さんの救助隊の仕事もあんまり多くなかったんだ。でも、ボクがきちんと会話ができるくらいに成長した頃かな？　あの事件が起こったんだよ」

「破壊光線の？」

「うん。あの日、ボクは風邪を引いて、高熱を出したんだ。お父さんは届け物をする依頼があって、サメハダ岩にはボクとお母さんだけ。だからお母さんは、薬草を探してくるって言って、小さな森に出かけたの。でも、いつまでたっても帰ってこないから、ボクは心配してたんだ。

そんな時、サメハダ岩のすぐ近くの海に破壊光線が落ちてきて、すごい水しぶきをあげたんだよ。ボクはもう、怖くて怖くて。お母さん、早く帰ってきて！　って、ずっと願ってた。

結局、帰ってきたのは依頼を済ませた泣き顔のお父さん。帰ってくる途中で見つけたお母さんの、冷たい傷だらけの体を抱えて、泣

いていたんだ……」

お母さん、しんじゃったの……？

あの時、幼い自分が経験した、大切な存在の死。思い出すと、いつだって悲しくなった。

「……」

こういうときは、何か言葉をかければいいものなのだろうか？

セナが言葉を探しているうちに、ヴァイスはまた話し出してしまった。

「それからしばらくの間は、特におかしな事件も起きなかったし、今のような災害も少ない、平和なガイアに戻ったんだ。でも、それが昔のボクには悲しかった。お母さんや、その他にも犠牲になったポケモン達がいたのに、そんなの関係なく世界は進んでいくんだよ。ボクの中の時間は、お母さんが生きてたときから止まったままだった。お母さんが死んじゃった事実をいつまでも受け入れられなかったんだ。

でもね。そんな時に助けてくれたのが、ボクのお父さんだったんだ。お父さんだって、悲しんだに違いないよね。自分の妻を亡くしたんだもん。それでもお父さんは、ボクの前ではいつも笑顔でいてくれたんだ。それに、お父さんの救助隊仲間のカメックスのブルーさんと、フシギバナのグリーンさんも、よくサメハダ岩に来て、ボクと遊んでくれたんだ。そのお陰でボクは元気づけられて、ようやくお父さん達と一緒に前へ進めたんだ。

まさか、今度はそんなお父さん達が姿を消しちゃうなんてね……」

もう、やめてくれ……。これ以上、ヴァイスを傷つけないで欲しい。過ぎた過去の話であるにも関わらず、思わずそう願ってしまう

セナがいた。

「ガイアで起こった恐ろしい事件の2つ目は、今でも謎だらけの事件なんだ。

ある日、“キザキの森”っていう森のポケモン達が、突然姿を消し始めたんだ。そして、自分の友達や家族が行方不明になってしまった森のポケモン達は、みんな心配して、たくさんの救助隊に捜索願いを出したんだ。事件の謎を解き明かすために、自ら進んで森へと向かう救助隊もいたよ。

でも、見つからなかった。消えてしまったポケモン達だけじゃなくて、救助に向かったポケモン達も、そのままずっと行方が分からないんだ……」

これから先の話は、だいたい予測がついた。でも。そうでないことを願いたい。

「とうとうやって来たんだよ。お父さん達にも、依頼が来たんだ。確か、当時のボクと同じくらいの、幼いキモリの男の子からで、お母さんがいなくなったんだって……」

「その依頼を受けてから、お前の父さんの救助隊ＯＮＥの3人も、行方が分からないのか」

「うん」

ようやく口を開くセナに、答えるヴァイス。

「ついに、キザキの森にはポケモンの姿がなくなったんだ。森に住んでいたポケモン達も、みんな姿を消しちゃった。今ではキザキの

森は、“暗黒の森”とも呼ばれているの。昔はポケモンたちでにぎわう明るい森だったのに……。みんなキザキの森を怖がって、誰も近寄ろうとしなくなったんだ。

これが、今でも語り継がれる最悪の事件……“暗黒の森事件”」

「暗黒の、森事件……」

その恐ろしい名前を、セナも呟いてみた。ゾッと寒気がして、少し体を震わせた。

「暗黒の森事件の後も、再び平和な毎日になった。はじめのうちは、ポケモン達はみんな、不安を抱えたまんまだったんだ。でも、時が経ち、傷が癒え、またポケモン達に笑顔が戻ってきたんだ」

その笑顔の中に、ヴァイスのものはあったのだろうか？　うまく想像できない。

ヴァイスの話は、終盤に差し掛かった。

「自然災害が増え始めたのは、ここ数ヵ月の間からだよ。ちょっと前までは全然こんなことなかったのに、急に災害が増えたんだ。ただの“自然”災害だとは思えない。やっぱり変だよね。

これで……」

一呼吸置いて、ヴァイスは言った。

「これで、ガイアの異変とボクの家族の話はおしまい。話せてスッキリしたよ、ありがとう！」

笑顔を見せるヴァイスだが、もう1つだけ、セナが気になっていることがある。少し迷った末に、セナはヴァイスに聞いてみること

にした。

「……なぁ」

「なあに、セナ？」

「お前、両親がいなくなってから、今までどうやって過ごしていたんだ？」

薄々は分かっていた。この、両親がいなくなってからの時間こそが、ヴァイスにとっては最も残酷なものだっただろうな……と。

「生活面では、全然問題はなかったよ！　ガルーラおばさんやカクレオンさん達が、ボクの面倒を見てくれたから。それに、広場のみんなもボクのことを支えてくれていたし、毎日きちんと生活できてた。でも……」

表情が曇り、ヴァイスはうつむき始めた。

「本当は、すごく寂しかった。確かに、広場に行けばみんなに会えるし、にぎやかな時間を過ごせるよ。でも、家では独りぼっちなんだ。死んじゃったお母さんの笑顔はもう見れないし、お父さんは、いつまで経っても帰ってこない……。だから……」

ヴァイスの声が、震え始める。セナの視界が、涙でにじむ。

「セナに出逢って、救助隊を始めるまでは……。ボク、毎日すごく寂しかったんだよ……」

今までずっと、涙をこらえて話をしてきたヴァイス。今は泣き崩

れ、大粒の涙を流している。そんな彼に寄り添うと、セナは躊躇いもなく泣き始めた。心がからっぽになるまで――。

「……ごめんな」

思いきり泣いた後は、なんだか不思議な気持ちになった。だいぶ2人が落ち着くと、セナはヴァイスに謝った。

「え？」

「お前がそんな大変な経験をしてたのに、オイラ今まで気付いてやれなかった」

ヴァイスのことを理解していたつもりだったのに、本当は、分かってなかったんだな。こう考えると、セナは少し悔しくなった。

「気付かなくて当たり前だと思うなぁ」

ヴァイスが話し始めた。

「だって、さっきも言ったじゃん。寂しかったのはセナに出逢う前だって。セナに逢ってからは、毎日が楽しかったし、なんか安心できたんだ。だから、セナの前で見せてた笑顔はいつも本物。空元気とかじゃないからね？」

強いな、コイツは。心の底からそう思った。

「……よし！」

ほんのちょっと残っていた涙をふくと、セナは立ち上がる。

「過去に起こった、破壊光線の事件と暗黒の森事件は、今の災害と関係あるかもな……。

やっぱり、ここはオイラたちキズナがなんとかしなきゃな！」

「え？」

ニコリと笑うセナを見て、ヴァイスも立ち上がった。

「なーんて。まだまだ駆け出しのオイラ達にでっかいことなんかできやしないさ。でもさ、まずは毎日の救助を頑張ろうぜ！」

「うん。お姉ちゃんのいとこを襲った土砂崩れも、きっと最近の異変のせいで起きたんだろうね。やっぱり、これから悲しむポケモン達を少しでも減らせればいいなぁって、ボクも思うよ！」

２人の頼もしい表情が月の光に照らされている。

「それとだ。依頼で色んな土地に行くついでに、お前の父さん達を探してみねぇか？」

「いいの、セナ？」

「あぁ。お前の父さんなら、きっと生きてるってオイラは信じられる。それに、マスターランクなんだろ？」

「うん！　お父さん達はすごく強かったから、絶対にどこかで生き

てる。ボクだって、ずっと信じて帰りを待っているんだもん」

力強いヴァイスの言葉を聞くと、心に爽やかな風が吹いた。

「よーし！それが、これからのオイラ達の目標だな。まずはホノオを見つけなきゃだけど……。これからも、よろしく！」

「うん！」

いつかも交わしたような握手を、再度交わす2人。さっきまでは暗く響いていたホーホー達の鳴き声が、今度は少し明るく聞こえた。まるで、2人の新たな目標を応援するかのように……。

「さっ、続きだ続き！」

照れくさそうにパッと手を離し、セナはそう言った。

「続き？　……あぁ、“冷凍パンチ”と“炎のパンチ”の練習だね！」

長い話を終え、ヴァイスも本来していたことを思い出したようだ。

「そうさ！　やっぱり救助隊として、もっと強くなんなきゃな」

誰かを、ヴァイスを、姉貴を、そしてポケモン達を、守るための強さが欲しい。

セナは拳に力を込め、透き通る氷を右手にまとわせた。ヴァイスも、明るい炎を右手に……。

「おっと、パンチまではやるなよ！　姉貴起こしちまうと怖そうだから、あくまでも炎と氷をまとわせる段階の練習な」

「アハハ！　分かってるって♪」

あれだけ家の前で話をされたから、とっくに起きちまってるよ……。玄関の扉の隙間からセナとヴァイスのやり取りを聞いていたメルは、一粒だけこぼれた涙をふきながら、そう思った。

（でも、ありがとう、２人とも。アタイやそのいとこ――ＯＮＥのブルーさんの息子――達のために……）

太陽のように明るく輝くヴァイスの拳に、月の光が反射して神秘的に煌めくセナの拳。それらを見ていると、心に綺麗な希望の光が宿る。

こんな光が、もっと多くのポケモン達に届けばいいのに。そう思いながら、パタンと扉を閉め、再び布団に向かうメルなのであった。

第5話：拳に込める使命感――その3（後書き）

徐々にシリアスな感じになってきましたが、ギャグもちょくちょく入れながら話を進めていきたいなぁ、とは思ってます（笑）

第6話：水晶の湖にて――その1（前書き）

父さんは行方不明で、母さんは――ごめん、言いたくない。とにかくヴァイスは、自身の辛い経験をオイラに教えてくれた。

ヴァイスの父さん達は、いつか必ず見つけて見せる！

そして……オイラが、少しでもヴァイスの役に立っているのなら、嬉しいなあ。

（語り：セナ）

第6話：水晶の湖にて――その1

セナとヴァイスがメルと出会った、次の日。メルの家の寝室の窓に取り付けてられている、水色のカーテンの隙間から、明るい光が差し込んだ。ここ、聖なる森では、昨夜鳴いていたホーホー達と入れ替わるように、今はポッポやムックル達が鳴いている。

メルはやがて朝の訪れに気付き、ゆっくりと目を開けた。そして、体を起こして隣の布団を見てみると、仲良く寄り添い眠っている2人の“弟”の姿が。

「お疲れ様」

夜中に技の練習をしていた姿を思いだし、微笑んだメルはもうしばらく2人を寝かせてあげることにした……。

一方のホノオとシアンは、朝早くから起き、今日もひたすら聖なる森の中を歩いていた。

ブレロとブルルに邪魔をされ、メルに技を教えてもらい……と、セナ達は昨日はあまり長い道のりを歩かなかった。そんな彼らと対照的に、ホノオとシアンは昨日から長い距離を歩いた。時に冗談を言い、互いに追いかけ回し……。驚異的な速さではるかぜ広場に近づきつつあるホノオ達。彼らのお陰で、セナとホノオの再会の時が、グッと近くなった。

「なぁ、シアン」

ホノオは不意に、森の中を歩きながらシアンに話しかける。

「なあに、ホノオ？」

いつもと違って真剣な様子のホノオに、シアンは少し戸惑う。

「セナ、元気にしてるかな？」

ポケモンになってから、だいぶ長い時間が経った。最初はただただセナを探すためにがむしゃらだったホノオだが、いざセナの居場所が分かってみると、今度はその安否が気になり始めたのだ。

「えっ。シアンに聞かれても分からないヨ」

「ハハ、だよなぁ」

予想通りの答えに、苦笑いするホノオ。

「オレ達さぁ、今こうしてこの森を歩くまでに、本当に色々あったよな」

「ウン」

2人はこれまでの旅の道のりを振り返り始めた。

「精霊の崖に着くまでに、いきなり岩場でポケモンの大群に襲われたことあったろ？　炎タイプのオレだけじゃ、正直死んでたかもなぁ……とか思うときがあってさぁ」

遠回しに、ホノオはシアンに礼を言う。

「シアンなんて、ホノオがいなければ崖から落ちてたヨ！」

シアンのその言葉に、ホノオは短く笑った。懐かしいな……。あれが、オレ達の旅の始まりだった。

「そういえばお前、あン時の花はどうしたんだよ？」

ホノオのその言葉に、

「どこかに行っちゃったヨ。でも、旅の途中でもっとキレイなお花をたくさん見れたから、シアンはそれでいい♪」

ケロリとそう答える、相変わらずのシアン。

「ハハ！　お前らしいや」

「なんだヨー！」

少しムキになったシアンに謝りながら、ホノオは話を進めた。

「悪い悪い。まぁとにかく、この世界に来てからは楽しいことがいっぱいだったぜ。でもさ……」

一呼吸置き、続きを話す。

「災害も多いし、襲われることもあるし……。意外と危険に満ちた世界なのかなあって思っちまった。だから“アイツ”が余計に心配なんだ」

珍しく不安そうな表情を浮かべるホノオの顔を、シアンは不思議そうにのぞき込む。

「それはシアン達が旅をしてるからでしょー？　セナは広場で遊んで暮らしてるかもヨ？」

「そうだと良いけどな。アイツって、元気だし頼りになるヤツなんだよ。でも、不安で……」

「どうして？　元気で頼れるんなら、友達いっぱいできるんじゃないノ？」

「いや。アイツは、例えば自分が守ると決めた者は、なにがなんでも守り通すようなヤツだからさ。余計なことに首突っ込んで、死んでなきゃいいなぁ……なんて思って」

何かを思い出すように、遠い目をしている。初めて見たホノオの切ない表情に、さすがのシアンも心が動いた。

「へーぇ。ホノオにも、人を思いやる気持ちってものがあったんだネェ」

シアンがケンカを売ってみると、ホノオの顔が、ガラリと変わった。

「もしかしてテメェ、オレに殺されたい？」

「殺せるもんなら殺してみなヨ♪」

物騒な言葉を躊躇いもなく言い合う2人。こんなやり取りも、今ではすっかり慣れたものだった。シアンは自慢の逃げ足で、ホノオから遠ざかる。

「あっ！　待ちやがれ短足ペンギン！」

「やーだネッ！　それに、ペンギンが足長かったら気持ち悪いもーん♪」

相変わらずの程度の低い会話だが、このケンカのお陰で先ほどまでの不安はどこかに吹き飛んでしまった。こうしてホノオは、猛スピードでシアンを追いかけつつ、今なおメルの家で眠っているセナとの距離を縮めたのだった。

太陽が空の真ん中まで上がり、昼が訪れようとしている時刻。メルが作った朝ごはん兼昼ごはんを食べて旅の準備をしたセナとヴァイスは、家の外に出て、世話になったメルに別れを告げる。

「じゃあな。行ってくるぜ姉貴」

「色々とありがとう、お姉ちゃん」

旅立つ2人の表情を、メルは微笑んで見る。

「あぁ、行っておいで。アタイの方こそ、本当にありがとうね！」

これで別れと思うとなんだか物足りなくなり、メルはさらに一言

付け足した。

「アタイの家からはるかぜ広場まで、そう遠くないからね。また遊びに来るんだよ」

「……あ、そっか！　何だかんだでボク達、昨日はあんまり歩いてないんだぁ」

ヴァイスがそう言うと、メルとセナは笑い始めた。

「ハハ、本当だ！　とっとと行かなきゃな、精霊の崖に」

セナは肩からかけているバッグをポン、ポンと軽く叩き、メルの家から一歩遠ざかる。ヴァイスも一緒に、メルのことを名残惜しそうに見ながら、一歩、また一歩……。

「早く行きな！　ホラ、歩くときはビシッと歩く！」

「はっ、はいっ！！」

メルに一喝されたセナとヴァイスは驚いて飛び上がるが、すぐにその表情が微笑みに変わる。姉貴らしい、お姉ちゃんらしい、旅立ちの応援。その言葉に背中を押されたセナとヴァイスは、メルに背を向け競うように走り出す。

表情を和らげつつ、遠ざかるセナとヴァイスの姿を、メルはずっと見ていた。

「頑張るんだよ。救助隊、キズナ」

誰も聞くはずのない言葉を、メルは大事に呟いた。

聖なる森の中にある、広く、澄んでいる湖、“水晶の湖”。鏡のように森の木々を映すこの湖を、護っているポケモンがいた。スラリとしているが、どこかたくましい水色の体に、風に美しくなびく白い帯。額に輝く水晶は、神秘的な、深い紫色をしている。

目を閉じて、風の流れを読んでいたそのポケモンは、突然ハッと深紅の瞳を見開く。感じ取ったのだ。もうすぐこの湖にやってくる、1人の人間の気配を。

（ホウオウ様がおっしゃることには、地球より“破壊の魔王”と“救いの勇者”がガイアに現れる。

人間、セナよ。汝のそのいずれかの立場を、我に示したまえ！）

心の中でそう呟くと、再び目を閉じ、セナの訪れを静かに待つポケモン。その凛とした姿からは想像がつかないくらいに、心の中は揺れていた。

セナとヴァイスは森の中を歩いている。

「あ、そういえば！」

ヴァイスが突然そう声をあげた。

「なんだよ？」

ヴァイスの発言が気になり、セナは聞き返した。

「この聖なる森にはね、“水晶の湖”っていう、ガイアで一番広くて綺麗な湖があるんだ。それで、“スイクン”っていう伝説のポケモンがその湖を護っているんだって！」

「スイクン？」

「うん、スイクン！　透き通る水晶のように美しい心をもつポケモンだって評判で、ガイアのポケモン達はみんな信頼してるんだ！」

ヴァイスが嬉しそうに話すので、セナはなんだかスイクンに会いたくなってきた。

ヴァイスはバッグから地図を取りだし、水晶の湖の場所を確かめる。セナもその地図を覗き込んだ。

「水晶の湖は、今歩いている場所からすぐ近くにあるはず。……ほら！」

２人が目線を地図から前方に戻すと、ヴァイスは指をさした。木々の間から見える、木漏れ日を反射して美しく輝いている湖を見ながら。

「あれかもな！　行ってみようぜ」

セナのその言葉で、２人は走り出した。

透き通る広い湖が、２人の目の前に広がった。

「すげぇな」

「綺麗……」

初めて見る水晶の湖に、感動の声をもらす。心が穏やかになるような、不思議な輝きを放つ湖だった。

目を輝かせるセナとヴァイスだったが、直後、予想もしなかった出来事に襲われる。

「“風おこし”！」

背後から凛とした声が聞こえたかと思ったその刹那、セナの体は風にあおられ、宙に放り出される。

「うわ！？」

「セナ！」

状況がよく飲み込めていないまま突風によって高々と浮くセナに、彼を見ながら驚いて声をあげるヴァイス。すぐに風は通りすぎ、浮力をなくしたセナは、地面に思いきり背中を打ち付けた。

「うっ！」

仰向けになって顔を歪めるセナに、ヴァイスは駆け寄った。

「だっ、大丈夫！？　セナ！」

「う……。な、なんとか」

セナがゆっくりと体を起こした時、ヴァイスの背後から先ほどの声が。

「汝がセナか」

「えっ！？」

気配なく近寄る声の主に驚いて、ヴァイスが振り返ると……

「我が名はスイクン。この湖を護る者だ。」

水色の体に、額には美しい紫色の水晶……。淡々と名乗る、そのポケモンこそがスイクンだったのだ。

「汝よ」

スイクンが自らの元へ歩み寄ってくると、セナは身構える。

「汝の波動はただのゼニガメのものではない。汝は、人間であろう」

「えっ……！？」

ピタリと言い当てるスイクンに、セナの鼓動が強く響いた。

「我には見えるのだ。人間の、悪き波動がな！」

スイクンが、凍りつくような冷たい眼差しをセナに向けてそう言うと、ヴァイスの表情が変わる。

「ち、違うよ！　確かにセナは人間だけど、すっごくいい人なんだ！　あなたなんかに何が分かるの！？」

「ヴァイス……」

さっきまで、あんなにスイクンを良く言っていたのに。自分のことを悪く言われたとたんに、尊敬する存在さえも怒鳴り付けるヴァイスの姿を見て、セナの心が少し熱くなった。

「ほう。それならば……」

スイクンがヴァイスに前足をかざす。

「うわっ！」

スイクンの前足が輝き始めたとたん、ヴァイスの周りを水晶のような規則的な形をしたバリアが覆う。

「ヴァイス！？」

淡い水色をしたバリアを、外側から叩くセナと、内側から叩くヴァイス。

「くそ！　割るぞ！」

「うん！」

セナの言葉にヴァイスが頷くと、それぞれ右手に氷と炎をまとわせた。

「“冷凍パンチ”！」

「“炎のパンチ”！」

精一杯練習した自慢の技を撃ち込むが、セナとヴァイスの拳を隔てるバリアには、傷ひとつ付かない。

「無駄だ。それは我にしか解けぬ水晶のバリア」

そのスイクンの言葉に、悔しそうな顔をする2人。

「ヴァイスとやらがそこまで言うならば、少しばかり試させてもらおう。セナ。もし我が、汝を悪き人間と判断したその時は……！」

目にもとまらぬ速さでスイクンはセナめがけて駆ける。

「うあっ！」

思いきり体を弾き飛ばされたセナは、苦しげな声をもらして森の木々に体をぶつけた。

「生かしておくのは危険すぎる。悪いが、その時は消えてもらおう」

スイクンは蔑んだような眼差しをセナに向ける。

その時は消えてもらおう。痛む体を起こすセナと閉じ込められたヴァイスの心に、その言葉が重くのし掛かった。

第6話：水晶の湖にて――その2（前書き）

旅を続けていて、ふと、不安になったんだよね。
記憶があって、自分のポジションをよく理解しているオレでさえ、危険な体験をしたんだ。なら、セナはどうなんだろう……。
アイツは仲間思いだから、だれかをかばって大怪我したりしていなければいいけど。

――と、不安になる前に。
今、「ホノオがこんなに思いやりがある発言をするなんて、きっと病気に違いない」とか思った奴。ちょっとこっち来い。
（語り：ホノオ）

第6話：水晶の湖にて――その2

「いっ、いきなり何するんだよ！？　“試す”って、何を……」

状況を飲み込めないセナは理不尽なスイクンの奇襲に抗議の声をあげたが、その言葉は遮られた。

「汝を善か悪か判断するのは我だ。汝はただ、思いのまま戦うがよい」

「……分かった。じゃあ、遠慮なく！」

スイクンの言葉を完全に承諾したわけではないが、戦いを避けられないと知ったセナの顔つきが変わる。彼は駆け出すと、スイクンとの距離を一気に詰め、拳に氷をまとわせた。

「“冷凍パンチ”！」

全力でスイクンを殴り付けようとしたセナだが、その凍てつく拳は右の前足により簡単に押さえつけられた。

「うっ……！？」

「その程度か、汝の力は」

冷たく言い放つスイクンに、セナは密かに笑みを浮かべ、右手に力を込める。すると、セナの拳がまとっている氷が、鋭く尖る氷柱へと姿を変えた。

「なっ……！」

前足を傷つけまいと、とっさに後方に飛び退き、スイクンはセナとの距離をとった。その姿を見ると、セナはバリアの中にいるヴァイスを見て、ニコリと笑った。大丈夫。オイラはなんとかしてみせる……と。

（セナ……）

一方のヴァイスは不安で一杯だった。自分が手出しできないのが、とてももどかしい。

「隙あり！」

スイクンは、目線がそれた隙にセナ目掛けて突進する。

「わっ！」

セナはとっさに上にジャンプして攻撃を回避する。しかし、

「甘い！」

スイクンはセナの後ろに回り込み、その自慢の脚力で跳びはね、宙に浮くセナに突進を仕掛けようとした。

「うわ……。じゃあ“高速スピン”！」

手足と頭を甲羅の中にしまい、安全を確保したセナは高速スピンを繰り出した。スイクンの額が甲羅と衝突し、セナは弾き飛び、スイクンの額の水晶にはわずかに傷がつく。

「へへへっ！　どうよ？」

甲羅の中から出てきたセナは、少し息を弾ませているが、得意気にスイクンを見た。互いに正面から睨み合う。

「汝を少々甘く見すぎていたようだ。汝は世界を滅ぼすかもしれぬ人間なのに……」

「えっ！？」

スイクンの気になる言葉に、セナとヴァイスの驚く声が重なる。その一瞬の気持ちの揺らぎを見逃してはくれず、スイクンはセナの元へ駆け寄り、乱暴に体を押し倒した。

「痛っ！」

仰向けに倒れて身動きがとれないセナの喉元に左の前足を乗せ、スイクンはじわじわと体重をかけた。

「くっ……！」

両手でスイクンの足を退けようともがくセナだが、耐え難い苦しみは増す一方。

「セ、セナ！！」

窮地に立たされたセナに、ヴァイスは悲痛な声で呼び掛ける。

（ヴァイス……）

その声に応えようと、朦朧とする意識の中で必死に突破口を探した。その一方で、冷酷な表情のスイクンはさらに力を加え始める。

「っあ……！」

考える間も与えられない攻撃に、いよいよセナの意識が遠のいた。セナは悪い人間なんかじゃない。だから、死んじゃ嫌だよ……！全ての想いを乗せて、ヴァイスは喉が張り裂けそうな大声で叫ぶ。

「セナー！！」

きつく閉じていたセナの目が、急に見開かれる。そして、のし掛かっているスイクンの足から一旦手を離し、空に向かって拳を突き上げると、精一杯の力を込めて氷柱を生み出した。

「！」

スイクンの頬に、鋭い氷柱が傷をつける。一瞬のし掛かる力が緩まると、セナは高速スピンでピンチを脱した。激しく咳き込むと、なんだか呼吸をするのが久しぶりのような心地がした。

「ぜぇ、ぜぇ……」

荒い呼吸をなんとか落ち着かせようと、たくさん息を吸い込んだ。

「その冷凍パンチを見る限りでも、汝はやはり普通のポケモンにはない力を持っているようだな」

頬についた傷を気にしながらスイクンが言う。

「お褒めのお言葉をどうも。うれしゅーございます」

生意気な口を利くと、セナはスイクンを睨みつける。だいぶ呼吸は整ったようだった。

「我が力を見るがよい！　“追い風”」

セナのセリフを聞き流すと、スイクンは自分の背後に追い風をまとった。そして、移動速度が増したスイクンは、風の如くセナに体当たりを仕掛けてきた。

「うわっ！」

お腹に衝撃を受けたセナは吹っ飛ばされ、ヴァイスが閉じ込められているバリアに激突する。

「だ、大丈夫!?」

痛そうに頭をさするセナを心配して、ヴァイスは声をかける。セナは親指を立て、その言葉に答えた。

「あぁ。さっきは助かったぜヴァイス！　悪いけど、もう一度手を貸してもらうからな」

そう言うと、追い風に吹かれ、とてつもない速さで辺りを駆けるスイクンを、なんとか目で追い始めた。

（……速いな、マジで。とりあえずこのバリアを上手く利用して攻撃をかわすにしても、オイラの攻撃が当てにくいよな）

あれこれと考えていると、スイクンがこちらに向かって突進してきた。

「わ！」

セナが急いでバリアの後ろに回り込むと、バリアに自ら突進する訳にもいかず、スイクンは舌打ちしながらバリアの横をかすめて駆け抜ける。

「うわぁ！」

目の前を通過するスイクンに、ヴァイスは驚く。

セナは、スイクンが近くを通ったとき、予想以上に強い風を感じた。

（スピードを上げているだけあって、すごい追い風だな。奴の小回りが効かなくなるのが難点みたいだけど、けっこう厄介じゃねぇか）

セナの後ろに回り込み、再びこちらへと向かってくるスイクンの後ろを、今なお突風が吹き荒れている。

セナはバリアを利用して、再度攻撃を避けた。

そして、吹き飛ばされそうなほどの追い風を感じながら、ある名案を思い付いた。

（スイクンを追い続けるこの風に、あれを乗せれば……！）

「バリアを使うとは……。こしゃくな真似を！」

今までは、辺りを走りつつスピードを上げて、時に突進を仕掛けてきたスイクンだが、作戦を変えて水晶のバリアの周りを高速で回り始めた。

「う……」

その姿をもはや正確に捉えることができず、うろたえるセナとヴァイス。

「どうだ？　これならバリアの陰に隠れる暇などあるまい」

なおも猛スピードで周りを回り続けるスイクンを見ていると、目が眩んできた。

「くそー！　食らえ、“泡”！」

セナはやみくもに目の前に泡を発射する。

「フフ。どこを狙っているのだ？」

セナが目を凝らすと、さらにスピードを上げるスイクンの後ろを、“追い風”に乗った“毒々”入りの“泡”が、陽の光を浴びてきらめきながら追跡しているのが見えた。

（気付いてないんだな。オイラはちゃんと攻撃してんだよ！）

あとは、泡をスイクンに当てるために、追い風による加速を止めなければ。セナは、一発食らう覚悟を決め、身を固める。スイクン

は思い切り地面を蹴ると、セナをバリアに押し付けるように体重をかけてきた。セナは痛みに耐え、悲鳴を噛み殺す――自分が使った“毒々”を吸ってしまわぬように。

スイクンが走り回るのをやめると、今までスイクンに吹き続けていた追い風が、泡を叩きつけた。

「な、なんだ？」

バチバチと破裂する泡に、驚くスイクン。セナは高速スピンでスイクンを体から突き放すと、説明を始めた。

「泡だよ、毒々入りのな！　ただの泡じゃアンタには効かねぇだろうから、ちょっと工夫して追い風に乗せたんだ！」

「……なるほど」

確かに、少しずつ心臓が大きく動くのが分かる。走りすぎで息が切れることなどない我が。

（この者の、ある程度の知恵と力は証明された。最後の勇者の印を確かめるため……手荒な真似を、どうか許して欲しい）

これから自分がすることを思うと、スイクンは心を痛める。戦いは、終わりに近づく。

「汝ごときの人間に、この技を使うときが来るとはな」

「こ、“この技”ってなんだよ？」

意味ありげなスイクンの言葉に、セナは警戒心を見せた。その時、

スイクンの瞳が強い光を放つと、辺りを突風が吹き荒れた。

「うわっ……！」

目を開けていられないほどの強い風が吹き、セナは顔を手で覆う。

「だ、大丈夫！？」

突然起こった気象の変化にヴァイスが心配そうな声を上げるが、セナには答える余裕はなかった。地面のあちらこちらから生える巨大な水晶は、スイクンとヴァイスの目だけに映る。

「行くぞ。“クリスタルストーム”！」

スイクンのその言葉と同時に、辺りの水晶が砕けて鋭く尖り、風に乗ってセナに一斉に襲いかかった。

「うわあぁぁ！！」

初めに声をあげたのは、状況をよく見ることができていたヴァイス。ギラギラと光りながらセナに向かう水晶の破片を直視できずに、両手で顔を覆った。

風が吹く音、水晶が砕ける音、そしてヴァイスの叫び声……。セナは、自らの体を切り裂く鋭い痛みで、それらの訳がようやく理解できた。

「うあああぁぁーっ！！」

耳をつんざくセナの悲鳴を無視して、鋭利な水晶は深い切り傷をつける。時にはざくりと刺さり、水色の体は対照的な色に染まった。

何度も、何度も自分を襲う痛みに、体が引き裂かれてしまいそうな心地がした――。

風が吹き止む。
宙を舞っていた水晶が地面に落ちる。
水晶の嵐が去ったあと、深い無数の傷を負ったセナは崩れ落ち、うつ伏せに倒れた。

「セナ……！！」

ヴァイスの目の前に広がるのは、今にも壊れてしまいそうなくらいにボロボロに傷ついた大切な友達に、所々が赤く色付く水晶の破片……。そんな、これ以上ないくらいに残酷な風景を目の前にして、ヴァイスは言葉を失った。
スイクンは静かにヴァイスの元へ歩み寄ると、前足をかざしてヴァイスを覆うバリアを解いた。

「酷い……。酷いよ……」

体を震わせながら、ヴァイスはスイクンに言う。

「ヴァイス。我は、セナを悪と見なした」

その言葉に、ヴァイスの思考が完全に停止した。

（ハハハ……。もう、駄目だ。やっぱりオイラ、ここで殺されちまうんだ）

スイクンの宣告は、今にも意識が途切れそうなセナの耳に届く。

（せめて、死ぬ前に知りたかった。オイラは何のために、ここに――ガイアに来たんだろう？　オイラの今の存在意義は……？）

セナの頬を伝う涙が傷口を濡らし、激痛が走った。顔をしかめ、セナは地面に顔を埋めるように下を向いた。

「この人間は、世界を滅ぼす危険があるのだ。そんな人間と、今まで一緒にいたヴァイス。汝とて、ただでは済まされぬぞ」

遠のいたセナの意識を呼び戻したのは、スイクンのその言葉だった。

（……ヴァイスにまで、危害を!?　冗談じゃねぇ！）

力を振り絞って顔を上げ、スイクンとヴァイスの姿を確認する。どうやらバリアを解いた後、スイクンはヴァイスと少し距離をとったようだ。そして、額の水晶が淡く光り、体に力をためているのが見える。

（見つけた。オイラのサイゴの役目！）

作戦を練ったセナは、首を甲羅の中に引っ込めて力をため、決行の時を待つ。

「悪いが汝にも消えてもらおう。“ハイドロポンプ”！」

スイクンの額の水晶から放たれたのは、ヴァイス目掛けて一筋に伸びる、太く、激しい激流。

「……！」

震えて動くことのできないヴァイスだったが、突然何者かに体を押された。

（よかった……。コイツを守れれば……後は、オイラは……満足、だ……）

ヴァイスに“ロケット頭突き”を当てて弾き飛ばした後、安心したセナは意識がなくなった。

ヴァイスが振り返ると、さっきまで自分がいたはずの場所には、力が抜けて、ずぶ濡れになったセナの姿が。彼を貫いた後の水には、微かに赤い色が混じっていた。

第6話：水晶の湖にて――その3（前書き）

スイクンに突然襲われたセナ。ボクは水晶に閉じ込められて、手助けができない……すごく、悔しいよ。

セナはすごく頑張ったんだけど、スイクンの“クリスタルストーム”って技を受けて、ボロボロになっちゃった。それなのに、スイクンに狙われたボクをかばってくれて……。

そんな……。セナ、死んじゃ嫌だよ！！

（語り：ヴァイス）

第6話：水晶の湖にて――その3

セナ。どうして？　どうしてボクなんかのことを……。
足に力が入らなくなり、ヴァイスはペタリと座り込む。

「ねぇ、セナ。返事をしてよ……」

目に涙を溜めながら、セナに話しかけた。微かに呼吸をしてはいるが、立ち上がりそうな気配はまるでない。その満足そうな、安らかな顔を見ていると、心が砕けてしまいそうだった。
そんなセナとヴァイスを見て、スイクンはある事を確信した。セナの元へと駆け寄るスイクンの顔を見て、ヴァイスは悲しく表情を崩して言った。

「なんで？　セナの何が悪かったの？　セナはボクの、たった一人の大切な友達なのに……」

その顔を見ると、スイクンの心が鉛を詰め込んだように重くなった。そして。

「ヴァイス……。申し訳ない事をした。セナは悪い者ではない。むしろ、その逆だ。世界を救う勇者の印を、我に示してくれたのだ」

戦いの終わりを告げるその言葉と共に、スイクンはセナに右の前足をかざす。セナの体が柔らかな光を発すると、深い傷が跡形もなく消えていった。スッと、静かに目を開けたセナ。

「ん……。うわ！」

目の前にいるスイクンに驚き、すぐに立ち上がると身構えた。

「セナよ……」

それを見て悲しそうな表情をするスイクン。彼はセナに話すのだった。戦いの理由と、自らが判断したセナの立場について。

「手荒な真似をしてしまい、すまなかった。汝を襲った理由を、良ければ聞いて欲しいのだが……」

その言葉からは、まるで敵意が感じられなかった。

「あぁ、いいぜ。オイラはそれが知りたかった」

戦闘体勢を解除して、セナもスイクンに柔らかな表情を見せる。そんな2人を尻目に、ショックから立ち直れていないヴァイスは、止めどなく涙を流していた。

「これは、“命の神”と呼ばれておられる幻のポケモン、ホウオウ様が話して下さったことなのだが……」

「ホウオウ？」

スイクンの言葉に、セナは首をかしげる。

「ホウオウ様は、普段は滅多なことでは地上と連絡をとらぬポケモンでな……。なんでも、新たな命を創造する仕事があり、お忙しいのだ。一度は命を失った我とエンテイ、ライコウを、伝説のポケモンに生まれ変わらせて下さった、心優しいお方だ。」

スイクンはよほどホウオウを尊敬しているのだろう。丁寧な言葉遣いだった。

「もしかして、その滅多に地上と連絡をとらないホウオウから、アンタに何か連絡が？」

「そうだ。汝はなかなか勘が良いようだな」

少し表情が緩むセナだが、おそらくこれから話されることは、何か良からぬ、重大なこと。再度セナが表情を引き締めると、スイクンが話し始めた。

「数百年前から、こんな予言がされていたのだ。『地球より“破壊の魔王”と“救いの勇者”がガイアに現れる』と。そして数日前にホウオウ様は、我にお伝えして下さったのだ。『魔王と勇者が揃いし今、破壊の勢力が動き出す』」

「“破壊の魔王”と“救いの勇者”は、共に地球から……。だから、人間のオイラには、そのどっちかである可能性があったと？」

セナの言葉に、深く頷くスイクン。

「その通りだ。それで、我は汝と戦うことにより、汝がいずれの立場であるのかを見分けたのだ」

「そっか……。結局、どっちなんだよ、オイラは？」

スイクンは、自分の判断を優しい声で告げた。

「ある程度の知恵と力を持つことが、魔王か勇者であるための条件

だった。判断を下した決め手は、汝のあの行動だ」

一呼吸置き、スイクンは再び話し始める。

「命を懸けてまで何かを守ろうとする姿が、勇者の印。セナ。先程ヴァイスを守ったときのあの気持ちを、今度はガイアを守るために使ってはくれないだろうか？」

「えっ……」

突然の展開に、言葉が出てこない。オイラが、このガイアを守る!?

ヴァイスの泣き声だけが辺りを包む。重苦しい雰囲気に耐えかねなくなったスイクンは、セナに深々と頭を下げて言った。

「本当に、理不尽なことであると思っている。ついさっき、汝に致命傷を負わせたばかりの我がこんなことを申しても、信じられるはずもないだろう。しかし、仕方がなかったのだ。汝が魔王であれば消去して、勇者であればその“証”を渡すのが、ホウオウ様から言い渡された、我の役目であったから。どうか、ガイアのために、我が言葉を信じてはくれないか？」

目に涙を溜めながら、尚も頭を下げ続けるスイクン。その言葉に、態度に、セナの心が強く動かされた。そして、ようやく口を開く。

「ま、まずは頭を上げてくれよ」

言われるがままにスイクンが頭を上げると、目の前には笑顔のセナが。

「オイラに世界を守る力があるのなら。本当に、オイラで良いのなら……。頑張ってみたいね！」

スイクンは、揺れる瞳でセナを見つめる。

「本当に、良いのか？」

「うん！　ちょっと自信ないけど、な」

恥ずかしそうに答えるセナを見て、スイクンは心から礼を言った。

「恩に着るぞ、セナ。ならば、手を出してくれぬか？勇者の“証”を汝に渡そう」

「あ、あぁ」

セナは返事をすると、手のひらを上に向けてスイクンに差し出す。その手のひらに置かれたのは、スイクンのような綺麗な水色をした水晶に、美しい虹色の羽根が入ったものだった。

「我とホウオウ様の力を込めて作った“ホーリークリスタ”というアイテムだ。３回だけ汝を助け、手を貸すことができるので、ピンチの時には頼りにするがよい」

「へー、すごいな。サンキュー！」

セナが透き通るホーリークリスタを見つめながら礼を言うと、スイクンはもう１つの効果を説明しだした。

「しかし、このアイテムには消滅の力も宿っている。そこは、充分

注意して使ってもらいたい」

「し、消滅！？」

恐ろしい言葉に、驚くセナ。

「そうだ。ホーリークリスタは非常に丈夫な造りなのだが、唯一“憎しみの感情”に弱い。そのような気持ちを持つ者がこのアイテムを攻撃すると、簡単に粉々になり、消滅するのだ。アイテムを壊した者と共に、な」

アイテムを壊した者は、消滅する。不安そうにホーリークリスタを見つめるセナに、スイクンは慌てて言う。

「あ、安心するのだ。汝には、そのような憎しみの感情は微塵も宿っていない。だから、汝に害を及ぼすことは、決してない」

「は、はぁ」

これはまた、エラい物をいただいちまったな、とセナは思った。

「あのさ。今、ガイアで起こっている異変について、アンタやホウオウは何か知らないの？」

世界をどう救うのかが不明瞭なので、セナはスイクンに尋ねたが。

「それは、まだ分からないのだ。我も、おそらくホウオウ様でさえも」

スイクンのその言葉に、ガクリと肩を落とすセナ。

「じゃあ、オイラって、これからどうすればいいんだよ？世界を救うために、今できることは？」

「普通に、今まで通りに過ごすのが一番だ。うかつな行動をして、まだ正体も分からぬ魔王に、汝の存在がバレると厄介だからな」

「えー？　そんなんで良いのかぁ～？」

苦い表情を見せるセナに、スイクンは笑いながら言う。

「ハハハ！　何もそんなに焦らんでよい。ホウオウ様によれば、破壊の勢力はまだ動き始めたばかりなのでな」

スイクンは、セナに背中を見せる。

「では、我はこれにて失礼する。毒を消す、モモンの実をとりに行きたいのでな」

「あ、悪い……」

先程の戦いで、自分が“毒々”を使ったことを思いだし、申し訳なさそうにセナは謝る。

「良いのだよ。我の方こそ、本当に済まないことをした。でも、汝のことは、心から応援する。どうか、頑張って欲しい」

「サンキュー、スイクン。アンタ、何だかんだで良いヤツだよ！」

セナのその言葉に、スイクンは表情を緩めた。

「フフ、ありがとう。では、また会おう！」

そう言うと、スイクンは地面を蹴り、風のように何処かへと駆け出した。

「ふー……。よかったな、どうにかなって♪」

セナがヴァイスに話しかけるが、返事が返ってこない。座り込んで、ただただうつ向き涙を流しているヴァイスに、セナは笑いながら右手を差し出した。

「ほら、まずは立てよ。手ぇ貸してやるから、掴まって……」

ピシャリと鋭い音が森の中に響き渡り、セナの言葉を遮る。ヴァイスが、セナの右手を叩いた音だった。

「いってぇなぁ～！　何すんだよ!?」

セナが不満そうな声を上げると、ヴァイスが怒りに満ちた顔でセナを睨む。そして。

「セナのバカーッ!!」

ヴァイスのその怒鳴り声はセナの耳を貫き、森の中に響き渡った。

一方その頃、ホノオとシアンは水晶の湖のほとり――しかし、セナ達とは別の場所で休憩をしていた。

「ふぁ～。疲れた疲れた」

ホノオはそう言うと、ゴロンと仰向けに寝転がる。

「ここ数日、キミがムチャばっかりするから……。自業自得だヨ」

シアンも歩き疲れ、ぐったりと座り込んだ。

「でも、だいぶ来たよな、オレら。もうすぐ森を抜けられそうな気がするぜ！」

希望に満ちた元気な声でホノオが言うと、

「え～でも分かんないヨ～？　だって、こーんなに大きい湖がある森だもん。ハンパなく先が長いんじゃない？」

目の前の広大な湖を見て、意気消沈気味のシアンが言った。

「おまっ……！　せっかくオレ様が元気付けようとしてやったのに！」

「キミにそんな思いやりの心があるわけないじゃん。恩着せがましいナ！」

いつものごとく言い争いを始めた2人だが、突如聞こえた微かな

叫び声で、ピタリと黙る。

「セナのバカーッ！！」

確かに今、そう聞こえた。

「セナ！？」

「行ってみようヨ！」

こうして休憩を終えた2人は、声がした方へと急いだのであった。

突然ものすごい剣幕で怒鳴り付けられたセナは、耳を押さえて尻餅をついた。

「……」

きょとんとして言葉を発しないセナを、ヴァイスが問い詰めた。

「なんでボクの代わりに攻撃を受けたの？」

「なんでって、当たり前じゃねぇか。お前があんなの食らったら、マズイだろ？」

その言葉を聞くと、ヴァイスが声を荒げた。

「だからってあんな無茶しなくても良いじゃない！　ボクは助けてなんて言ってないし望んでもいなかった！」

徐々に怒りが込み上げてくるセナ。

「別にオイラの勝手だろ！？　お前の意思なんてどうでもいいじゃねぇか！」

「そんな。わがまま言わないでよ……」

ヴァイスの声は徐々に勢いをなくし、哀しみを帯びて震えてきた。

「はぁ！？　人の親切をわがままだぁ！？」

「だって。お父さんもお母さんもいないボクには、セナ……。キミしかいないんだよ？　それなのに、そんなキミが死んじゃったら、ボクは……」

セナの心が、ズキンと痛む。ヴァイスのその気持ちは、痛いほど分かるつもりだから。

でも、このときのセナは、“謝る”という選択肢を選ばなかった――いや、選べなかった。自らの行動は、ヴァイスのためにとったものだという自信が、そうさせてくれなかったのだ。

「あっそ。何とでも言え、バーカ」

腕組みをして立ち上がると、セナはヴァイスに冷たく背中を向けた。２人を引き裂くように風が吹くと、なんとも気まずい雰囲気が漂うのだった。

第6話：水晶の湖にて――その3（後書き）

今回の話はいかがだったでしょうか？
この小説が始まって以来一番のピンチになりましたね。
スイクンが途中まで余りにも残忍だったのですが、どうか彼を嫌いにならないで下さいね（笑）

第7話：ごめん――その1（前書き）

スイクンとは何とか和解でき、しかもオイラはガイアの運命がかかった（？）重要なお願いをされてしまった！

……とりあえず、スイクンからもらったアイテム、ホーリークリスタは、大切にしたいね。

とにかくこれで、一件落着――とできたら、どんなによかっただろう。ヴァイスがいきなりオイラを怒鳴りつけやがった。

確かに無茶して心配はかけた。でもさ、何も怒ること無いのに。

オイラが無事なんだから、それでいいじゃねえか……あのバカ。

（語り：セナ）

第7話：ごめん――その1

次々と溢れる涙を拭うヒトカゲと、そんな彼に背を向けて頬を膨らませるゼニガメ。ホノオとシアンは草の茂みの影から、そんな彼らを眺めていた。

「間違いねぇ、あのゼニガメがセナだ！」

2人に聞こえてしまわぬよう、ホノオは小声でシアンに話しかけた。

「やった！　やっとセナを見つけたネ♪」

同じく小声でシアンが言う。

「しっかし、アイツらどうしたんだ？　すごく険悪なムードだけど」

そう。セナを見つけたのはいいが、問題はここからのようだ。ゴール直前に突きつけられた難題に、ホノオはもどかしい気持ちで頭を抱えた。

そんな彼にはお構い無しといった感じで、シアンは1人勝手にある結論を出した。

「シアン分かったヨ。あのヒトカゲが泣いてるってことは、セナがヒトカゲをいじめたんじゃないカナ？」

「はぁ？」

ホノオがシアンを見る眼差しは不信感に満ちている。

「なんでそうなるんだよ？　それに、セナはいじめとかするタイプじゃねぇし……」

「いいや、シアンの推理に間違いはないもんネ！」

そして、変に自信たっぷりなシアンはキッとセナを睨み付け、こんな発言を。

「よーし、シアンがいじめっこをちゃんと叱って、ヒトカゲを助けるゾ！」

悪い予感に、ホノオの血の気がサッと引いた。

「バ、バカ！　止めろよ、なぁシアンってば！」

草をかき分けてセナ達の元へと向かおうとするシアンを必死に止めようとするホノオだが、既に手遅れ。ホノオとシアンのやり取りの騒がしさに、セナとヴァイスが注目しているのだった。自信満々にセナの前に歩み寄るシアンに、唖然とするセナとヴァイス。ホノオに至っては、絶望的な気持ちになり、大きなため息をついた。

「キミ！」

「あ？」

目の前のポッチャマに突然呼び掛けられ、セナは怪訝な表情を見せる。

「どうしてこのヒトカゲを泣かせたのサ！？　いじめはダメだヨ！」

「え……？」

オイラがヴァイスをいじめた？　このポッチャマ、いきなり何言ってんだ？

「だって、キミが意地悪なこと言ったからヒトカゲは泣いてるんでしょ？　謝んなヨ！」

早とちりにも程がある……。空気が読めないのはいつものことなんだが。異様な雰囲気に耐えられなくなったホノオは、思い切りシアンの後頭部を殴り付け、気絶させた。

「ア、アハハハ！　いきなり変なこと言って、悪い悪い。コイツいっつもこうなんだ。空気も読めず、早とちりで……」

「あぁそうですか」

ホノオの言葉を遮り、セナは投げやりに言い放つ。

「相手が泣いてたら、それで悪者扱いかよ。事情も知らないくせに、何なんだ？」

「ご、ごめん……」

怒りで震えているセナに、ホノオはシアンの代わりに謝った。

「はは。もう、面倒くせぇ。何とでも言うがいいさ」

セナはため息をついて、サメハダ岩の方へスタスタと歩いていってしまった。

「セナ……」

ヴァイスが震える小さな声で呼びかけたが、その声はセナに届かず、いつしかセナの姿は森の中へと消えていった。

「いきなり何なの、キミ達は？　ボクとセナは、ちょっと喧嘩しちゃっただけで、別にいじめられた訳じゃないのに」

ヴァイスの視線がホノオに痛く突き刺さる。

「悪いな、本当に」

トラブルの元になったシアンは、未だに地面に顔を埋めるようにうずくまり、気を失っている。

「もしかして、ボクらの仲が悪くなるのを見てて、楽しいの？」

シアンの代わりに問い詰められるホノオも、なかなか大変なものだ。

「そ、そんなことはない！　だって、オレは……」

ホノオは、自分の立場と目的を話すことにした。

「オレは……オレも、人間なんだ。セナをサポートするために地球からやってきた人間、ホノオっていうんだ」

ホノオ？　ボク達が探していた、人間のホノオだよね？

「そっか。キミが、ホノオ、なんだ」

「えっ？　なんでオレのこと知ってんの？」

ヴァイスの言葉に、ホノオは大声を上げて驚いた。

「説明は後で。まず、ボクはセナを追いかけなきゃ！」

慌ただしくホノオに背中を向け、ヴァイスは走り出そうとするが……。

「ま、待った！」

ホノオに呼び止められて、ヴァイスは振り向く。

「オレ達も一緒に探すよ！　こうなったのにも責任があるし……」

「ありがとう！」

ヴァイスがニコリと微笑むと、ホノオはシアンを背負ってヴァイスの元へ。

「あ、このポッチャマは、シアンって奴なんだ。トラブルメーカーなんだけど、一緒に行ってもいいか？」

先ほどまでの騒動を気にし、遠慮がちにホノオがシアンを紹介する。

「いいよ！　ボクはヴァイス。よろしくね」

快く了解を得たので、ホノオはなんだかホッとした。

「あぁ、よろしく。じゃあ、行くぞヴァイス！」

「うん！」

ヴァイスが返事をすると、セナを追って駆け出した。

セナは、森の中を黙々と歩く。

元々は、ヴァイスを守るためにとった、スイクンとの戦いでのあの行動。そのせいでヴァイスとここまで関係が悪化してしまうなんて……。こんなことになるんだったら、どこかで勇気を出して謝ればよかったのかな？

全てが空回りしている気がして、どうしようもなく歯がゆくなった。

もうすぐメルの家の前を通る。オイラとヴァイスが喧嘩したなんて言えば、姉貴はどう思うかな？メルに会うのも心苦しく感じたセナは、来たときと別の道を通ることにした。

今、どこにいるんだろう？　確認したくても、地図はヴァイスの赤いバッグの中。自分の青いバッグがひどく役立たずに見えて、恨めしそうに見つめた。

少し薄暗く、湿った感じのするところに来て、いよいよセナの不

安が膨らみ始めた。モヤモヤする気持ちを捨ててしまおうと、セナは前を見据えて、思い切り息を吸ってはいた。この行動が、まさか大惨事を引き起こすなんて。

前方を見ていたせいで、足元に全く注意を払わなかったセナ。突然地面から出ている突起につまずき、思い切り転んだ。

「いってぇ……」

膝を擦りむいたセナが、腹立たしげに突起を見たところ……その突起は、セナに蹴られたせいで今にも泣き出しそうな、幼い子供のキノココだった。キノコのようなポケモン、キノココは、薄暗いところを好む。足元が見にくいこともあり、踏まれても仕方がない気もするのだが。

「げっ！」

嫌な予感がした、その刹那。

「うわあああぁーん！！　痛いよぉー！」

そのキノココの泣き声が森に響き渡り、あっという間に、セナはキノココの大群に囲まれてしまった。

「坊や、どうしたんだい？」

母親と思われるキノココが、子供のキノココに声をかけてきた。

「ぐすっ……。あ、あのゼニガメが、ぼくのことを蹴ったんだ！」

キノココ達は、恨みのこもった目でセナを見る。

「ご、ごめん！　わざとやった訳じゃなくて！」

セナは焦って説明するが、その思いはキノココ達には届かない。

「よくも私のかわいい息子に……。みんな、やるわよ！」

先ほどの母親のキノココが号令をかけると、キノココ達の頭から、大量の紫の粉――“毒の粉”が出てきた。

「うわぁぁ！　……ケホ、ケホッ！」

セナは突然の出来事に驚き、思い切り粉を吸い込んでしまった。すぐに体に毒が回り、苦しくなって倒れ込む。

「ハァ、ハァ……」

激しくなった呼吸のせいで、さらに多くの粉が体の中に入る。

（苦しい……。だ、誰か……）

自分だけの力ではどうにもならない状況ではあるが、今の自分には助けを求められる人などいない。強く心臓が痛むと、セナは気を失った。

第7話：ごめん――その2（前書き）

オイラ達の喧嘩中に、ヒコザルと変なポッチャマが乱入してきた。
あのポッチャマ、オイラを悪者扱いしやがる……。腹が立ったから、あんな気まずい空間からはオサラバさせてもらったよ。

……と、単独行動を開始したオイラだけど、キノココ達を怒らせちゃって大量の“毒の粉”を浴びることに……。
本日2回目の、命の、危機……が……。
（語り：セナ）

第7話：ごめん――その2

「うーん……。ここはドコ？　シアンはダレ？」

ホノオの背中で、シアンが目を覚ます。

「自分の名前言ってンじゃん。ここは聖なる森。テメェはシアン」

ホノオはため息混じりにそう言うと、シアンを地面に下ろして自分で歩かせた。

「あれ、ホノオ？　それに、さっきのヒトカゲクン……。シアン達って、今何してるノ？」

ホノオの表情が引きつる。

「テメェのせいでセナを探し直してんだバカヤロー！」

「えーっ、そうナノ！？」

怒鳴り付けるホノオだが、シアンはわざとなのか、それとも本当に覚えていないのか。

「ま、まぁまぁ……。あ、シアン。ボクはヴァイス。セナの、友達だよ」

焦って仲裁に入るヴァイス。シアンに自己紹介をして、2人の気を喧嘩から反らした。“友達”。その言葉を言う前に、少し不自然な間が空いてしまった。

「ワーイ、ヴァイスよろしくネッ！」

ご機嫌そうに微笑みながらそう言うシアンを、ホノオは舌打ちしながら一瞥した。

一方では、毒で気を失ったセナの周りを、キノココ達が取り囲んでいる。

「ふん。うちの子をいじめるから、わたし達のチームプレーの餌食になるんだよ」

母親のキノココは、大人数での奇襲を“チームプレー”という言葉で正当化する。

「ねぇママ。最後に、ぼくに“ギガドレイン”を教えてよ！」

セナに蹴られて泣きべそをかいていた姿はどこへやら。すっかりご機嫌の子供キノココだった。

「勿論よ。坊や、よく見ておくんだよ！」

母親のキノココはセナに歩み寄り、残りわずかな体力を奪おうとした。母親のキノココがセナの体に触れると、母親の体が強い緑色の光に包まれた。もうすぐ技“ギガドレイン”が発動し、体力を吸い尽くされてしまう。セナが絶体絶命のピンチに陥った、その時。セナの青色のバッグから、中に虹色の羽根が入った水色の水晶――

ホーリークリスタが姿を現す。

「なんだい、これは？」

宙に浮く綺麗な水晶を、キノココ達はみな不思議そうに眺めている。突然、ホーリークリスタが太陽の光のような閃光を発して、ギガドレインの緑色の光などかき消した。そして。

「う、うわあぁぁ！」

「眩しい！」

キノココ達の目を鋭い光が貫き、うろたえ始めた。

「み、みんな、逃げるよ！」

薄暗い場所を好むキノココ達はこの光に耐えきれず、どこかへと逃げ出してしまった。

キノココ達を追い払うとホーリークリスタの光がおさまり、何かに引き付けられるように、どこかへと飛んでいってしまった。

一人になったセナは、微かに、でも必死に、呼吸を繰り返していた。

メルの家の前まで来た、ヴァイス達。

「あ、お姉ちゃん！」

庭の花壇に水をあげているメルに、ヴァイスは話しかけた。

「あら、ヴァイス。精霊の崖には行かないのかい？」

「もう行かなくてもいいんだ。探していたポケモンが見つかったから」

メルの問いかけに、ヴァイスはホノオとシアンを見ながら答えた。

「そうかい。それより、セナは？」

「ボクが聞きたかったのはそれなんだ。セナと喧嘩して、はぐれちゃって……。そっかぁ、お姉ちゃんも見てないのかぁ」

「喧嘩？　アンタ達が？」

「うん……」

なんだか申し訳ない気持ちで、ヴァイスがうつむきながら答えた。

「ねえねえ、あなたって、どうしてヴァイスのお姉ちゃんなのにリザードじゃないノ？」

「そんなこと聞いてる場合か！？」

カメールのメルを不思議そうに見ながら言うシアンを、ホノオはまた怒鳴り付けた。

「アハハ！　そっか、アンタ達とははじめましてだね。アタイはメル。ヴァイスとセナとは本当の兄弟じゃないけど、お姉ちゃんとか姉貴とか呼ばれているんだよ」

「なるほどね。オレはホノオで、コイツはシアン。メルさん、よろしくな！」

こうして皆が名前を覚えあったあと、メルが話を切り出した。

「じゃあさ、アタイも手伝うよ。ヴァイスとセナの仲を放ってはおけないからね！」

「ありがとう。ごめんね、お姉ちゃん……」

泣きそうな顔をしているヴァイスの背中を、メルが軽く叩く。

「いいんだよ！　さあ、行くよ」

メルが持っていたじょうろを地面に置き、４人が歩き出そうとした。ふと、ヴァイスが辺りを見回してみると、陽の光が当たって煌めいている何かが、こちらへ飛んでくるのが目に入った。

「ホーリー、クリスタ……」

間近に来たそれを見て、ヴァイスが名前を呟く。

「なんだこれ？」

「キレーイ♪」

ホノオとシアンは、飛んで来た水晶に興味津々のようだ。

ヴァイスの目の前で、水晶は何かを伝えるように、内側からチカチカと光る。

「もしかして、セナのピンチ！？」

ヴァイスが悟ったことを口にすると、ほかの３人が驚く。

「な、何だって！？」

メルの言葉に答えず、ヴァイスは自分を導くように、どこかに向かって飛び出した水晶を見据え、走り出した。

「おっ、おい！」

そんなヴァイスの背中を、３人は焦って追いかけ始めた。

水晶に導かれ、じめじめした薄暗い場所を駆けるヴァイス達。辺りに生える苔むした木々を見て、メルが呟く。

「もしかしたら、セナのピンチは本当かも知れないね」

「えっ……！」

「なんで！？」

驚いてメルに質問する、ホノオとシアン。

「この辺りには、わがままで理不尽なキノココの群れが住んでいてね……。セナはドジだから、なにかやらかしてなければいいんだけど」

ズバリと正解を言うメル。彼女の言葉を聞くと、ヴァイスはひどい不安に襲われた。

（無事でいてね、セナ）

ヴァイスがそう祈ったとたんに、水晶がピタリと止まる。そして、今度はゆっくりと動き出した。ヴァイス達が草を掻き分けて水晶についていくと、甲羅を身につけた、小さな水色の体が――セナが、倒れていた。

「セナ！！」

４人の声がキレイに重なり、皆一斉にセナの元へと駆け寄った。

「セナ！　しっかりして！」

ヴァイスが涙目になりながら、セナを抱き起こす。

「う、ん……」

もうろうとする意識の中、セナは微かに目を開けた。

「この顔色の悪さ。やっぱりキノココ達の毒にやられたんだね」

予感が的中してしまい、メルは顔をしかめて呟く。ホノオとシアンも焦り始めた。ヴァイスは自分の赤いバッグに手を突っ込むと、モモンの実を掴んだ。

「はい。セナ、モモンの実だよ。苦しいだろうけど、頑張って食べて！」

ヴァイスがセナの口の前に、モモンの実を持っていく。セナは小

さく口を開け、少しずつモモンの実をかじる。甘い味を飲みほすと、徐々に苦しみが抜けていった。

「ヴァイス……」

毒は抜けたものの、体力を奪われたせいでセナは辛そうに話す。

「どうして、ここに……？　オイラ、助けて、なんて、言ってないのに……」

セナの姿を見ていると、ヴァイスは涙が溢れてきた。

「バカだなぁ。そんなこと、どうだっていいじゃない……」

ヴァイスはセナに抱きつくと、思い切り泣き出した。

「セナが無事で、本当によかったよ……」

ヴァイスの温もりが、久しぶりのように感じられる。ヴァイスの涙でセナの頬が濡れると、なんだか素直な気持ちになった。

「ヴァイス、ありがとう。あと、さっきは、本当に……ごめん」

やっと言えた――言いたくても言えなかった、感謝と謝罪の言葉。口にした途端に、安心したセナの目から涙が。

「ボクの方こそ、ごめんね。あの時のセナの気持ち、今のボクには痛いほど分かるから……」

ピンチの友達を助けるときって、どうしても必死になっちゃうものなんだよね。さっき、ハイドロポンプから助けてくれたときのセナも、きっとそうだったんだ。ヴァイスもセナに謝ると、2人の距離が再び――いや、前よりもさらに近くなった。

そんな彼らを見て、もう1人涙を流す者が。

「あれれー？　なんでホノオまで泣いてるのサ？」

からかうように、シアンはホノオに話しかけた。

「うるせぇな……」

シアンに背を向け、ホノオは涙を拭った。

（アイツに――セナに、こんなにいい友達がいたんだ。……良かった）

親友の幸せを心から喜んだホノオ。事情はよく分からないが、そんな彼になんとなく同情したメルは、優しくその肩を叩くのだった。

「ねぇ、セナ」

しばらく泣いた後、ヴァイスは優しく話しかけた。

「うん？」

「ホノオが見つかったんだ。あのヒコザルが、人間だった男の子の、

ホノオなんだよ！」

「あのヒコザル、って？」

セナが辺りを見回すと、さっきの変なポッチャマに、メルの姉貴。そして、涙目のヒコザルがいた。

「なっ、なになに！？　お前ら、ずっとここに居たのか！？」

どうやらセナは、今までこの3人の存在に気付いていなかったようだ。だからこそ、あんなに素直になれたのだが。

「失礼しちゃうね！　みんな、アンタのことを心配して探してたんだよ！」

「も、申し訳御座いません、お姉様……」

メルに叱られ、セナは小さく縮みながら謝った。そして。

「セナ、久しぶり。……なんて言っても、オレのことなんか忘れただろうけど。オレは、人間のときにお前と親友だった、ホノオってんだ。ついでにこのポッチャマはシアン」

その声には、覚えがあった。前まで見ていた夢で、暗い空間からセナを何度も救い出してくれた、人間の――焔の、声。

「お前のこと、覚えてないけど知ってはいたぜ。よっ、ホノオ。オイラがセナだ！」

軽く右手をあげて、セナがホノオに返事をする。

「覚えてないけど知ってはいた？　お前と違ってバカなオレに、そんなこと言わないでくれよ」

セナの言葉が理解できず、苦笑いする。ヴァイスは、そのホノオの言葉に、引っ掛かるものがあった。

「ねぇホノオ？『お前と違って』って、もしかして……」

「あぁ、そうさヴァイス。意外かも知れないけど、セナは人間のとき、成績優秀だったんだぜ！　それこそ、校内では常に1位で、たまに2位……」

「えええぇぇ！？　う、嘘だぁー！」

ホノオの言葉を遮り、ヴァイスが驚いて大声をあげた。

「おいヴァイス。そんなにオイラはアホに見えたのかよ？」

不満げにヴァイスを睨むセナ。

「あっ、あたっ。当たり前じゃない！　中の下くらいで妥当じゃないの？」

「アハハハ！　だよなぁ！　オレも小3のときに引っ越してきたコイツ見たとたんに、『オレより頭悪いんじゃねぇ！？』って期待したもんだぜ！」

おかしそうに笑い転げるヴァイスとホノオを見て、メルとシアンもクスクスと笑う。

「ちぇっ。なんだよお前ら」

舌打ちをして、セナはすね始めた。

「ねぇねぇ、ホノオ。ボク、もっと人間のときのセナについて知りたいなぁ」

「オレも、話したいこと……それから、話さなくちゃなんないことが、たくさんあるんだ！」

セナをからかうことで、すっかり意気投合したヴァイスとホノオ。

「あらあら。じゃあ、この森でそんなことされたらうるさくって迷惑だから、サメハダ岩に帰ってからにしておくれよ」

メルにそう言われると、ヴァイスとホノオは、はーい、とご機嫌に返事をする。

「ちくしょーッ、勝手にしろお前ら！　ほら、とっとと帰るぞとっとと！」

顔を真っ赤にしたセナは、スタスタと歩き始めた。

「待て待て～♪」

「ワーイ、セナがすねた～♪」

ホノオとシアンは楽しそうにセナを追いかけ始めた。

「今日もありがとうね、お姉ちゃん！」

「ウフフ。早く行かないと置いていかれちゃうよ？」

さいごにメルに礼を言ったヴァイスだが、そのメルの返事でハッとなった。

「わー、大変だ！　じゃあね、お姉ちゃん」

すっかり遠くなった3人の姿を、ヴァイスは焦って追いかけ始めた。

こうして、セナとヴァイスのホノオを探す旅は、短いようで長い2日間で終わりを告げ、久しぶりにサメハダ岩に帰る。また、この日、スイクンからもらったばかりのホーリークリスタが、早くも3回のうち、1回目の力を使ったのであった。

第7話：ごめん――その2（後書き）

ようやくセナとホノオが会えました。長かったなあ……。

第8話：交わる旅路（前書き）

仲良しのセナとヴァイスが喧嘩したと聞いた時は、本当に驚いたね。

水晶がアタイ達を導いて、弱ったセナを発見した時も驚いた。

でも、無事に仲直りできて良かったよ。前よりもさらに仲が良くなったみたいだしね。

ホノオも見つけられたみたいだし……良かったねえ、セナ。ヴァイス。

（語り：メル）

第8話：交わる旅路

穏やかな波の音が、セナとヴァイスにはとても久しぶりに感じられる。夜空に輝く星や三日月は、サメハダ岩にいるセナ、ヴァイス、ホノオ、シアン――4人の姿を照らしていた。

4つに増えている草の布団に、それぞれが腰を降ろしている。

「さぁ、まずはお前達の番だ」

ホノオがセナとヴァイスの顔を見ながら言う。

「セナ。ポケモンになってから今までのこと、オレとシアンに教えてくれよ。あと、オレのことを知っていた理由もな」

「あぁ」

こうして、セナは語り始めた。

自分とヴァイスとの出会い。現在救助隊活動をしていること。ここまではテンポよく話が進んだが、複雑な展開になったのは、この後だった。

「ある日を境に、オイラは毎日不思議な夢を見たんだ。その夢の中に、ホノオ……。人間の姿の、お前が出てきたんだよ」

「なるほど」

セナの説明に、ホノオが頷く。その夢のお陰で、セナはオレのことを知っていたんだ。

「その夢ってどんな内容ナノ？」

興味津々に、シアンが聞いてきた。セナはあの夢のことを話す。

――夢の中で、暗い空間で罪悪感や孤独に襲われていたセナに、人間の焔が話しかけると、苦しみが抜け、周りも明るくなる。そして、焔との会話の中で出てきた、気になる言葉『過去に負けるな』。

「……」

セナの夢の内容を知ったホノオは、すっかり黙り込んでしまった。

「ねぇホノオ。このセナの夢の内容って、セナが人間のときと何か関係があるのかな？」

ヴァイスが期待のこもった目でホノオを見るが、

「さ、さぁ。分からないや」

そう答えるホノオは、どこか動揺しているようだった。

（何か引っ掛かるけど……。まぁ、いいか）

ホノオを問い詰めることはやめにして、セナは話題を次に移した。

やがて夢を見なくなり、自分達がホノオを探す旅に出たこと。そして、その途中で出会ったポケモン、スイクンとの出来事。

「破壊の魔王と救いの勇者は、地球から……」

ホノオの言葉に、セナは頷く。

「あぁ。オイラはなんとか救いの勇者だって認められて、ホーリークリスタっていうアイテムをもらったんだ。3回だけ、オイラのピンチを救ってくれるらしい」

もう1つの効果を説明することを、セナはすっかり忘れていた。
憎しみを持ったものがこの水晶を攻撃すると、水晶が壊れ、壊した者も消滅するという効果を。

「その後、ボクとセナが喧嘩しちゃって、ホノオとシアンと出会って……。それで、今に至るんだ」

ヴァイスが話をまとめると、一通り、セナの報告が終わる。

「もしかして、ホーリークリスタって、さっきセナのピンチをシアン達に教えてくれたあの水晶のコト？」

「うん」

シアンの問いに、答えるヴァイス。

「つまりオイラは、もらったばかりの水晶の力を、すでに1回使っちまったんだ」

ため息混じりにセナが言う。

「もったいないなァ～、もう！」

「あはは、だよなぁ」

少しきつい口調のシアンに、セナは苦笑い。
ホノオは、気になる事項について考えていた。

（セナは救いの勇者。やはり、使命を背負ってガイアに来たのは間違いない。破壊の魔王の存在が気になるよな。奴も地球から……。つまり、人間なのか？　オレじゃないよな、まさか）

と、そんなことを考えていたが、それより何より気になることは……。

（セナの夢は、明らかに奴の過去に関係している。罪悪感、孤独……。それに“過去に負けるな”っていう、オレからのメッセージだって、あの時の――）

「おーい、ホノオ？」

セナがホノオの顔を不思議そうに覗き込むと、ホノオは考え事をやめる。

「次は、お前とシアンの番。どうしてお前は……そしてオイラも、ポケモンになったんだ？」

「あ、あぁ。それは……」

今度はホノオが自分とシアンの旅を語り始めた。

「はじめにオレとお前の人間時代の関係について、軽く話すわ。これはシアンも知らないことだし」

「あぁ。それも気になるな」

セナが相づちをうつと、ホノオは話し始めた。

「セナ。お前は、小3の時にオレ達の学校に転校してきたんだ。ずいぶん遠くからな」

「そっか。それが、セナとホノオの出会いだったんだね」

ヴァイスの言葉に頷き、ホノオは話を続けた。様々な出来事を通して少しずつ仲良くなり、やがては自信を持って“親友”と言える関係になったこと。それから同じ中学校に進んだが、中1の秋に、今度はホノオが遠くに転校してしまい、今は互いに離れた土地で生活をしていること。

「意外だナ。今は近くに住んでいないなんて」

シアンが珍しく真面目な発言を。

「そう。近くに住んでいないからこそ、オレはアイツに……“ポケモン”に言われるまで、セナがポケモンになり、ガイアに来たことが分からなかったんだ」

「“ポケモン”？」

固有名詞として使われたその単語に違和感を感じ、ヴァイスが不思議そうな顔をする。

「あぁ、“ポケモン”。ここからが、オレとセナがポケモンになった理由だ」

セナの表情が引き締まったのを確認すると、ホノオは“ポケモン”と話し、ガイアにつれてこられたあの夜のことを語り始めた。

あの日自分は、夢の中で、“ポケモン”と名乗る光の渦（おそらくあれは仮の姿だが）に出会った。そこで、“人間としての責任”を負い、“ガイアの破壊を防ぐ”ためにセナがポケモンになったが、記憶を失ったことを知らされた。どうやら人間を憎んでいるらしい、その“ポケモン”は、セナのサポートをするため。そして、ホノオの“人間としての記憶”を、ガイアでこれから起こる事件の謎を解く手がかりにするために、ホノオをガイアに送った。

「オイラが、人間としての責任をとる、代表……だってことなのか？」

浅く、2回頷いて、ホノオはセナに返事をした。

「あぁ。理由はまだよくわかんねぇけど」

「どうしてセナなんだろうね？」

「ウーン……」

頭を抱える一同。

「そんで“ポケモン”は、人間を憎んでいる。なぁ、シアン、ヴァイス。オレ達人間は、このガイアに何か悪いことしたのか？」

ホノオの問いかけに、強く首を横に振るヴァイスとシアン。

「だよな。そもそも、別の惑星に住んでいるんだし」

ホノオは頭を抱え、ため息をついた。

セナは、ホノオの話の中で、特に強く気になることがあった。

（人間としての記憶が、事件の謎を解く手がかりに……。事件と言えば、ヴァイスの両親を襲った“破壊光線の事件”に“暗黒の森事件”）

考えを口に出すのは止めておいた。事件の話は、きっとヴァイスを苦しめるだろうから。

「まぁ、その……。オレが短気なせいで“ポケモン”に腹を立て、大した手がかりも得ずに、このガイアにヒコザルとしてやって来たんだ。」

少し申し訳なさそうに、ホノオは話す。

「それから、シアンとホノオが出会って、2人でセナを探したんだよネ！」

「あぁ。大変な旅路だった。でも、良かったよ。久しぶりにセナに会えたし♪」

シアンが話をまとめ、ホノオが相づちをうち、ホノオ達の報告が終わった。

「確かにホノオって、なんか初対面じゃないような……。不思議な感じがするんだよな」

まじまじとホノオの顔を見ながら、セナが言った。

「おっ！　嬉しいこと言ってくれるね、親友♪」

ホノオがセナに歩み寄り、ポンと肩を叩くと、少しセナの顔が赤くなった。

「……ねぇ、ホノオとシアン。もしよければ、ボクらの救助隊キズナに入って、一緒に救助隊活動しない？」

しばらく雑談した後に、ヴァイスが話を切り出すと、目を輝かせるホノオとシアン。

「お、いいねぇ！」
「楽しそうだネ！」

２人とも、乗り気のようだ。

「楽しいだけじゃねぇからな。仕事に責任感持てよ」

セナの少々厳しい言葉に、シアンは少し表情を渋らせた。

「分かってるって。それに、オレの役目はセナのサポート。どのみち一緒に行動するつもりだったしさ！」

ホノオが頼もしい表情でそんなことを言うと、ヴァイスが楽しげにこう言った。

「やったー！　じゃ、明日本部に行って、メンバー登録しよう。なんだか賑やかになるね、セナ♪」

「まぁな」

こうして、新たなメンバーが加わることになり、物語は、新たなステージへと移り変わるのであった。

その夜、４人が『おやすみ』を言って、それぞれが布団に横になってから、わずか３０秒後。ホノオがムクリと起き上がると、シアンの元へと歩み寄り、小声で、でもシアンに聞こえるように話しかけた。

「シアンのバーカ、アーホ。チビ短足♪　えーとそれから……。キミは女の子ですかー？」

「くか～……」

突如一方的に悪口を言いまくるホノオだが、既に爆睡しているシアンからは大きないびきのみが返ってきた。やっぱり、もう寝てる。ホッと安堵してため息をつくと、今度はセナの元へ。そして、目を閉じているセナの頬を、こちょこちょとくすぐってみた。

「ふ……ふふ。く、くしゅぐった～い」

セナがクスクスと笑いながら声をあげたので、ホノオはギクリと手を引っ込めた。

「あ、あれ？　起きてました？」

ドキドキしながらそう問いかけてみるが……。

「ハハハ……。すぅ……すぅ……」

ホノオの問いかけに答えず、寝息を立て始めたセナを見て、ホノオは確信し、またまた安堵のため息をついた。よかった。さっきのは寝言。コイツも寝てる……。

「さっきから何してるのさ？」

背後からいきなり聞こえてきたヴァイスの声に、ホノオは危うく叫び声をあげそうになった。

「あうっ！　あ、いやぁ……。セナとシアンがまだ起きてるかどうか確認しようと思ってね」

「……」

ホノオの言葉に、ヴァイスは怪訝そうな顔をした。

「そ、そんな顔しなくてもいいだろぉ？　オレは、お前と2人で話がしたかったんだ……」

「ボクと？　なあに、その話って」

ヴァイスは意味ありげなホノオの言葉を待つ。

「ヴァイス。本当に、ありがとう」

「ほぇ！　何が？」

突然ホノオに伝えられた感謝の気持ちに驚き、大きな声をあげたヴァイス。慌てて口を押さえるが、どうやらセナ達を起こすには音量が足りなかったようだ。

「バカ……」

一瞬ヒヤヒヤしたホノオは3度目の安堵のため息をつき、話を進めた。

「ありがとう。セナと仲良くしてくれてさぁ」

「あ、あぁ。そのことね」

ヴァイスはちょっぴり恥ずかしくなった。

「でも、本当に助かっているのはボクの方なんだよ。セナに逢ってからは、毎日が楽しい！」

ヴァイスは、明るく、柔らかな笑みをホノオに向けた。

「そっか。よかった」

ホノオが珍しく優しげな表情を浮かべるが、それはすぐに切ない表情へと変わった。

「お前にだけは、知っていてほしいんだ。記憶をなくした今でこそ、セナは心の底から明るく振る舞えるんだけど……」

そこで一息つくホノオ。ヴァイスはじっと、次の言葉を待つ。

「人間の時は、明るさにも無理があったんだよ。過去の罪悪感に、独り孤独に戦うアイツ……。心の中では、いつも泣いてた」

「……」

どう言葉を返せばいいのか、ヴァイスは悩み、ただただ黙る。

「さっきは分かんないって言ったけど、本当は知っていたんだ。『過去に負けるな』は、オレが引っ越すときにセナに言った言葉。でも、オレはアイツの前でそれを言うのが、すごく怖かったんだ。その一言が引き金になって、アイツの記憶が戻ったら……なんて思うと」

ホノオの頬に、一筋の涙が流れる。慌てて上を向き、これ以上涙が落ちないようにした。視界が涙でにじむ……。

「ごめん。いきなりこんなこと……。ただ、これだけはお願いだ。アイツは強がってるけど、あんまり強いと思わないでくれ。本当は、誰よりも傷つきやすくて、誰よりも弱い奴なんだよ」

涙をためきれなくなり、ホノオは上を向くのをやめる。彼の大粒の涙は、ヴァイスの涙を誘った。

「そうだったんだ……」

目を潤ませて、ヴァイスが言う。

「じゃあ、ボクらがセナを守らなくちゃね！」

ヴァイスの力強い言葉に、ホノオは泣きながら頷く。この日出逢ったばかりのヴァイスとホノオだが、彼らの心は強力に結び付いた。決意と、同じものを守ろうとする一体感によって――。

……ここがどこかは分からない。漆黒の空間に不気味な笑いを浮かべながらたたずむ者がいることは、確かな事実である。

「フフフ……」

微かに笑い声を洩らすと、瞳が怪しく輝く。その者の瞳は、破壊の道を見据えていた。

第8話：交わる旅路（後書き）

これから先のストーリーは、少しの間はほのぼのメインで話が進み、
それが終わったらシリアス突入……みたいな流れで進む予定です。

第９話：頑張れリーダー！――その１（前書き）

とりあえずサメハダ岩にお邪魔して、オレ達は色々と現状を報告しあった。……え。「“報告”の内容をもっと詳しく言え」だって？　……め、面倒なんだいっ！　忘れた訳じゃないって！

えー、とにかく、オレとシアンも救助隊キズナに入ったから、よろしくな。

それから……ヴァイスはセナとすごく仲良くしてくれているみたいだから、教えてやった。セナって、案外もろいんだ。

セナを支えることを喜んで引き受けてくれたコイツは、やっぱりいい奴だな。

（語り：ホノオ）

＞ｉ１１８９７―４３４＜

第9話：頑張れリーダー！――その1

セナとホノオが出会った次の日。

「えぇーっ！　オイラがリーダー！？」

少し顔をしかめながらセナが言うと、ヴァイス、ホノオ、シアンの頭が上下した。

ここは、ペリッパーの形をした建物ポケモン救助隊連盟本部。今朝、セナ達４人が目を覚ますと、まずはここに向かったのだった。

建物内の受付にいるペリッパーに、キズナの新メンバー――ホノオとシアンの登録を申し込んだセナ達４人。その手続きの始めに、まずしなければならないこと。それは、キズナのリーダーを決めること。受付のペリッパーいわく、隊員が３人を越えた救助隊チームは、メンバーの中から１人、リーダーを決めなければならないそうだったのだ。

こうしてリーダーを決める話し合いをし、セナが顔をしかめて驚きの声をあげている現在に至る。

「だって～。新入りのオレとシアンがやるわけにはいかないし」

ホノオが舌を出しながら言うと、シアンが頷く。するとヴァイスが、慌ててそれに付け足した。

「そうそう。でもボクは、あんまりリーダーって柄じゃないし」

「う……」

まぁ確かにな……と、納得してしまうセナ。悪くないかな、リー

ダー。

「じゃあ、オイラがリーダーやるよ！」

決意してセナが言うと、ヴァイス達はパッと表情を明るくする。

「さっすがセナだね♪」

「よしゃ！　頼むぜ、リーダー！」

「頑張ってネ♪」

ヴァイス、ホノオ、シアンが、セナの背中や頭をぽんぽんと叩きながら言う。

「い、痛い痛い！！」

セナは、笑い声の混じった叫びをあげた。

「決まりみたいだね！」

ペリッパーが、ニコニコしながらセナを見る。目が合うと、ちょっぴりむずむずするような、不思議な気持ちがした。

最後に、ペリッパーは、名簿に救助隊のメンバーを書くように指示をした。セナが鉛筆を持ち、ぶつぶつと呟きながら、紙に４人の情報を書き込んでいく。

「『セナ。種族、ゼニガメ。性別、♂……。リーダー……』

『ヴァイス。種族、ヒトカゲ。性別、♂……』

『ホノオ。種族、ヒコザル。性別、♂……』」

ここまでの書き込みには、何も問題はなかったのだが――。

「『シアン。種族、ポッチャマ。性別、♀……』」

毎度お馴染みのこの展開に、ホノオは必死に笑いを噛み殺す。

「ネェ、セナ……」

「あん？」

セナが呼ばれて振り返ると、シアンは不満げな表情を浮かべている。

「シアンはネ、男の子なんだヨ」

「……へ？」

シアンのその言葉に、一瞬石になったように固まる、セナとヴァイス。

「えっ……。え？　ぅえええぇーっ！？」

そんな……。このシアンが、男の子！？　数秒間の沈黙の後に、ようやくシアンの言葉の意味を理解すると、場をわきまえずに大声で叫んでしまった。その声は、あまり広くはない本部の建物の中にあっという間に響き渡り、受付のペリッパーや、そこで話をするポケモン。本部に依頼の手紙を運ぶペリッパー。さらに、本部の入り口付近にある、救助依頼が張り出されている掲示板の前にいた、多くの救助隊ポケモン達……。本部にいる全てのポケモン達が、セナ

とヴァイスのことを見ているのであった。

「は、恥ずかしかったぁ」

あのあと、そそくさと本部を後にして、はるかぜ広場を歩くキズナの４人。セナとヴァイスは、さっきのポケモン達みんなの視線を思い出す度に、顔が赤くなる。

「ま、ドンマイドンマイ♪　シアンが男だと一発で分かるヤツなんて、そう滅多にいるもんじゃないさ！」

ホノオがシアンへの挑発の意味も込めたセリフで、凹むセナとヴァイスを慰めるが、シアンからの突っ込みが、いつまで待っても帰ってこない。

「あれ？　シアン？」

セナ、ヴァイス、ホノオの３人は、辺りを見回してシアンを探す。いつの間にか、近くから姿を消したようだった。

「迷子かよ、あのバカ」

ホノオがうんざりした様子で頭を抱えた。

「よう、キーマにポポ！」

ホノオの判断で、とりあえずシアンは放っておくことにしたセナ達。広場中央の噴水付近に来ると、噴水の近くにあるベンチに座って話をしているポケモン――キマワリのキーマと、ポポッコのポポに話しかけた。

「あら、セナにヴァイスではありませんか！　精霊の崖には行きましたの？」

そういえば、ホノオを探す旅の1日目に、このキーマとポポに会った。キーマの返事でそのことを思い出したセナとヴァイスだが、精霊の崖に行かずとも、目的は達成されたと言うことを話した。ホノオを探すという目的は。

「あら、じゃああなたがホノオね？」

セナとヴァイスの話が終わった後、ポポがホノオに話しかけた。

「あぁ！　えと、キーマとポポだよな？　よろしく頼むぜ！」

ニコリと笑いながら返事をするホノオを見て、ポポの脳裏にある噂が浮かんだ。もしかして、ホノオって、あの……。

「ねぇ、ホノオ？　もしかして、『ネイティオの前で“焼き鳥”発言をして、半殺しにされたヒコザル』って、あなたのことかしら？」

苦い思い出を言い放ったポポのせいで、ホノオは痛い一撃を思い出す。

「うっ！　そ、そうっスけど……」

意気消沈しつつ呟くホノオを見て、セナはこらえきれずに笑いだした。

「あはは！　マジで～！？　バカだなお前！」

セナは、いつもポポ達に『食い意地がはってる』などと散々ネタにされている。それ故、ホノオのネタにできるような話を知って、少し気味が良くなったのだ。ホノオはそんなセナを鋭く睨み付けると、固く握った拳を、笑い転げているセナの頭にグリグリと押し付けた。

「んぎゃ！？　痛い痛い痛い！　止めてー！」

頭が割れそうに痛み、セナは甲高い悲鳴をあげた。

「あ？　この程度を痛いだぁ？　オレはなぁ、これの数十倍はいてぇ思いをしたんだよ！」

あの時の、ネイティオのサイコキネシスを思い出すと、ホノオはさらに拳を固く握った。

「や、止めてよホノオ！　やりすぎ！」

その光景を、ヴァイスはハラハラしながら眺め、ホノオを止めようとした。

「どいて、ヴァイス」

何者かに声をかけられて振り返ると、そこにはすっかり忘れていた存在――怒りに満ちた様子の、シアンがいた。彼女――いや、彼のやりたいことはなんとなく掴んだヴァイスだが、ここはあえて、シアンの言う通りにした。

「ホノオ、いじめはダメーッ！　“ドリルくちばし”！」

ホノオの後頭部に、激しく回転したシアンのくちばしが押し付けられた。

「ぎゃあああぁ！！」

ホノオが思わず奇声をあげてのたうち回ると、セナはホノオの拳から逃れた。

こうして、ドタバタしつつも４人が集合し、セナが示した本日のスケジュールに沿って、キズナは行動を開始した。

カクレオン商店やガルーラおばさんの倉庫を利用して、セナ達はアイテムの整理をし、ついでにカクレオンやおばさんに、キズナの新メンバーを紹介した。そして、オレンの実を少し多めにバッグに詰め込むと、４人が向かったのは、小さな森を抜けたところにある広い草原、“青空平原”だった。青空平原は、広くて障害物がなく、オマケに天気も安定しているため、よくポケモン達がバトルの練習に使う土地だった。そして、セナ達もまた――。

「よーし、今日の救助活動は午後から！　午前は、バトルを通してホノオとシアンの戦闘能力を把握したいと思う」

すっかりリーダーが様になっているセナは、これから自分達がすることを他の3人に伝えた。

「よっしゃ！　バトルか♪」

ホノオが気合いを入れてグッと左手を握った。

「ルールは一対一のシングルバトルな。さぁ、組み合わせはどうする？」

セナの問いかけに、ホノオは目を輝かせて言う。

「じゃ、オレはセナと戦ってみたい！」

「じゃあ、ボクはシアンとだね！」

ホノオとセナがバトルをすることに決まると、もう一方の組み合わせも自動的に決まる。

「ワーイ、決まりだネッ！　さっそくやろうヨ♪」

シアンがそう言うと、セナとホノオ、ヴァイスとシアンがそれぞれ向き合い、戦闘に向けて身構えた。

「んじゃあ、遠慮なくいくぜ！　“火炎放射”！」

ホノオが口から強烈な火柱を放つと、セナとホノオのバトルが始まった。

「うわっ！」

セナはやっとのことでホノオの火炎放射の直撃を避けたが、強い火が起こす風のせいでバランスを崩してしまう。

「しまった……！」

「よっしゃ！　“乱れ引っ掻き”！」

素早くセナの背後に回り込んでいたホノオは、セナの隙をついて攻撃に入る。

「くッ……！」

ホノオの激しい攻撃に、セナはうろたえる。腕や後頭部など、甲羅から出ている部分に傷がつき、表情を歪めた。

「この……！　“高速スピン”！」

手足を甲羅の中に引っ込め、セナは高速で体を回転させる。

「ッ！？　痛えー！」

セナを引っ掻いていた両手が弾かれ、ホノオはわめきながらブンブンと手を振り回す。

「へっへーん♪」

少し息があがっているが、セナは得意気にホノオを見る。

「やっぱりそう簡単には倒せねぇかぁ……」

ホノオはそう言うと、次の攻撃に移った。

「いくぜ、“炎の渦”！」

セナはかわそうとしたが、炎が体に強く巻きつき、たちまち締め付けられた。

「ぐっ……！」

苦しそうな様子のセナに、ホノオは歩み寄る。

「ふっふっふ……。さーあ、どうする？　セナ」

すっかり余裕の表情を浮かべるホノオを見て、セナはニヤリと笑う。

「バーカ♪」

そう呟くと、セナは右手に力を込める。たちまちセナの右手から鋭い氷柱が出現したが、炎の渦に締め付けられているせいで、ホノオにはそれが見えていないようだ。セナを締め付ける激しい炎と右手の氷柱が接触する。氷柱は溶けて水になり、そして、その水は一気に気化した。突如、炎の渦の内部から爆風が吹き、渦は粉々に砕け散った。

「なっ……！？」

驚くホノオに、セナは説明する。

「水が気体……つまり水蒸気になるときって、体積が膨れ上がるだろ？　だから、氷を炎の渦で溶かして水にして、さらにそれを気化させて、爆風を生み出したんだ！」

「説明聞いてもちんぷんかんぷんなんスけど……」

セナの説明をさっぱり理解しないホノオに、思わずため息がもれた。

「とにかく、確かにお前は力があるし、スピードも速い……。でも、もっと頭を使いな！」

自らの頭を指差しながら、挑発じみた口調でセナは言う。ホノオが気を悪くしたのは言うまでもない。

「あぁ悪かったですねぇ、バカで！　どうせオレは、成績優秀なテメーと違ってビリの常連でしたよーだ！」

そう言うと、怒りで火力が増した火炎放射をセナに放つ。

「うわっ！」

まともにそれを食らってしまう。得意なはずの炎タイプの技だが、結構なダメージを受けた。

「う……」

これまでのバトルの展開では、セナはやや押され気味。

「これで終わりだ！　“かわらわり”！」

ホノオはセナに最後の攻撃をしようと、利き手の左手を思い切りセナめがけて降り下ろした。

「ま、“守る”！」

セナがとっさに守るを使うと、淡い光がセナを包み、ホノオの左手を弾いた。

「ふぁ……。何？　あれが最後の攻撃のつもりスか？」

退屈そうにあくびをしながらセナが言う。――そう、“あくび”をしながら。

「この野郎、てめぇ！」

守るを使った直後のセナに、再度かわらわりをしようとするホノオだが……。

「あれ？　なんか、体に、力が入らない……」

強い睡魔に襲われ、ホノオは倒れた。

「勝負あったな！」

すやすやと眠るホノオを見ながら、満足そうにセナが呟く。セナが何気なくしたあくびは、実は技だったのだ。“あくび”を見たポケモンは眠気を誘われ、やがて眠ってしまう。ホノオにとどめまでさす必要はないので、このバトルはセナの勝利で終わった。

第9話：頑張れリーダー！――その2（前書き）

救助隊は、メンバーが3人を超えたらリーダーを決めるらしい。
そんなわけで、オイラがリーダーになりました。ま、いいか。

とりあえず、今日の午前はチーム内でバトル演習。オイラはホノオと戦ったんだけど、スピードやパワーはなかなか。
ま、水タイプの技も使わずに勝っちゃったけどねっ。……苦戦はしたけど。

さあて、ヴァイスとシアンの勝負の行方は――？

（語り：セナ）

第9話：頑張れリーダー！――その2

セナとホノオが、激しいバトルを繰り広げているとき、一方のヴァイスとシアンは――。

「ねぇ～ヴァイス～」

シアンが甘えた声を出し、上目遣いでヴァイスを見つめた。

「うっ……。な、なに？」

せっかくバトルに向けて気持ちを引き締めていたのに、危うく緩みそうになった。

「シアンネ、あんまりバトルとか慣れてないから、ちょっと怖いんだァ。だから、あんまりシアンに乱暴しないでネ？」

可愛らしく目を潤ませながらそう言うシアンに、小さな子供が大好きなヴァイスの気持ちが揺らぐ。

（か、かわいい……）

いくらシアンを女の子だと思っていたとはいえ、さすがにそっちの感情は抱かなかった。でも、あどけない顔でヴァイスを問い詰めるその姿に、心が大きく揺れた。

「わ、分かったよ。優しくするから。ね？」

ヴァイスがそう答えてしまうと、シアンの表情がパッと明るくな

る。

「ワーイ、ホントに～？　シアン、ヴァイス大好き～♪」

シアンはヴァイスに歩み寄り、抱きついた。

「えと……」

あれ？　ボクは今、シアンとバトルしていたはずだったのに。完全にシアンにペースを握られ、ヴァイスの調子が狂い始めた。

「じゃ、遠慮なくいかせてもらうネっ♪」

「へ？」

シアンはニヤリと表情を変えると、ヴァイスに抱きついたまま、技を発動した。

「いっくヨ～！　“渦潮”！」

シアンは回転を始めると、水を纏った竜巻と化す。

「うわ！」

シアンと密着した状態だったヴァイスは、激しい水の流れに弾き飛ばされた。

「いたたた……」

地面に思い切り体をぶつけてしまい、ヴァイスが顔をしかめなが

ら起き上がると――。

「じゃあー、今度は“バブル光線”！」

ヴァイスの苦手な水技を、シアンは容赦なく繰り返す。

「わあああぁーっ！！」

無数の泡がヴァイスに当たってバチバチと強く弾けると、激痛が走った。

「うぅ……」

うつ伏せに倒れるヴァイスに、シアンが近づく。

「優しくしてくれてありがとネ♪　さぁ、次が最後だヨ～！」

シアンのその言葉を聞くと、ヴァイスは心に闘志の炎を燃やす。

（こんな負け方は、いくらなんでも悔しい！）

作戦を立てたヴァイスは、必死になって顔をあげ、息を大きく吸い込むシアンの目を見つめた。そして。

「グスン……。シアン～。痛いよぉ」

大きな目から、ポロポロと涙をこぼした。

「エッ……」

シアンの動きが固まる。

＞ｉ２４７６１―４３４＜

「どうして……。どうして、シアンはボクのことをいじめるの……？」

たった2日の付き合いだが、ヴァイスはこれまでのシアンの行動から学んでいた。シアンは“いじめっ子”には、妙に厳しいことを。そんな彼が、自らがいじめっ子扱いをされたら？　ヴァイスのそんな作戦は、効果てきめんのようだ。

「ご、ごめんネヴァイス！　シアン、いじめるつもりはなかったんだヨ……」

シアンは慌ててヴァイスを慰める。

「くすん……。ねぇ、もういじめない？」

涙で目を潤ませ、上目遣いで可愛らしく問い詰めてみた。

生まれて初めて嘘泣きなんてしたのに……。ボク、演技の才能あるのかな？　と、ヴァイス自身も、あまりに上出来な演技に少々驚いていた。

「ウン！　シアンはヴァイスの味方だヨ！」

シアンは言ってしまった。ヴァイスの猛攻の引き金となる言葉を。

「ありがとう！　やっぱり、シアンって優しいんだね♪」

ヴァイスがシアンに向ける笑顔は、今は天使のよう。

「じゃあ、バトルの続きをしよっか！」

その言葉と同時に、ヴァイスから悪魔のような笑顔が伺えた。

「たあ！　“煙幕”！」

ヴァイスが小さな黒い玉をシアンに投げつけると、たちまち玉が弾けて中から黒い煙が。

「わあ！　な、何！？」

煙はシアンにまとわりつき、彼の視界のみをふさぐ。

「よーし、“火の粉”！」

ヴァイスが口から火の玉を吹くと、黒い煙に覆われたシアンに的確にヒットする。

「きゃあ！　熱いヨ！」

大ダメージには繋がっていないようだが、シアンは叫び声をあげた。火の玉が起こした風のせいで、シアンを覆う黒い煙が拡散していく。

「シアンを怒らせたなァ～！？」

ヴァイスを睨み付けると、シアンは大きく息を吸い込む。

「えい！　“潮水”！」

塩分を含んだ水は、傷を負ったヴァイスに当たるとかなりしみて痛そうだ。必死になってヴァイスは攻撃をよけ、シアンと距離をとる。

「はぁ、はぁ……。やっと正々堂々戦えるね！」

好ましくない状況に立たされているが、ヴァイスはようやく、バトルを楽しむかのような、無邪気ないつもの笑顔を見せたのだった。

「シアンはいじめっ子じゃないもん！　“ドリルくちばし”！」

先程のやり取りを、シアンはまだ気にしているようだ。体を回転させながら鋭いくちばしを向け、ヴァイスの懐に飛び込んだ。しかし、助走距離が長かったせいもあってか、ヒラリと攻撃をかわされる。

「エッ……」

前のめりになり、戸惑いながらバランスを崩すシアン。そんな彼の後ろに回り込むと……

「“切り裂く”！」

ヴァイスが爪を尖らせ、シアンの背中を切り裂いた。

「キャアアア！！」

激痛が走り、シアンは思わず叫び声をあげた。そして、ドサリとうつ伏せに地面に倒れる。ヴァイスはシアンに近寄ると、しゃがみ

こんで聞いてみた。

「ねぇ、シアン。どうする～？　まだやる？」

ヴァイスはニコニコ顔だったが、シアンは顔を地面に伏せたまま、ヴァイスを見ずに答えた。

「もうやめる。シアンは痛いの嫌いだヨ……」

到底限界には達していなかっただろうが、根性という言葉を知らないシアンは、あっさりと降参した。

「やーった♪　ボクの勝ちだね！」

ヴァイスが嬉しそうにガッツポーズをすると、ホノオとのバトルを終えたセナが話しかけてきた。

「おぉ。そっちはお前が勝ったのか♪」

「うん！　シアンもなかなか強かったよ！」

いろんな意味で……と、思わず付け足したくなるヴァイスだった。

「ははっ、だよな！　やっぱオイラ達は“先輩”だし♪」

ヴァイスの勝利を当然と思っていたセナは、笑いながらそんなことを言う。

「じゃ、そろそろ昼飯だ。あぁ、腹減ったぁ～！」

太陽が高々と真上に昇っていて、昼の訪れを示している。セナは両手を空に向かって思い切り伸ばすと、青いバッグの中からオレンの実を取り出したのだった。

はるかぜ広場の中にある、ピンク色をした可愛らしい建物――ピィ、ピッピ、ピクシーが、兄弟で営む飲食店、“カフェＰｉＰｉ♪”。おしゃれでくつろげるお店だと評判で、今も多くのポケモン達が、この店で昼食を済ませている。

その中で、２人のポケモンがそわそわした様子で席に座っていた。

「おせぇな……」

頬と耳が赤い、ウサギのようなポケモン――プラスルが、コンコンとテーブルを叩きながら言う。その名前の通り、頬にはプラスのマークがある。ワイルドな口調に合わず、ソプラノの、高くて可愛い声だった。誰かを待っているかのようなその言葉に、もう１人のポケモン――頬と耳が青いウサギのようなポケモン、マイナン――が相槌を打つ。プラスルとは対照的に、頬にはマイナスのマークがあった。

「うん……。午前中に、ここで待ち合わせる予定だったのにね」

不安そうに、店の窓から外を見るマイナン。穏やかな口調だが、どこか愛嬌のある声をしている。

「やっぱさ、あいつらって、トラブルに巻き込まれやすいタイプじゃん？」

プラスルのその言葉を聞くと、マイナンが心配そうな表情を浮かべた。

「やっぱりそうなのかな？　でも、ソプラの悪い予感ってけっこう当たるからね……」

「あぁ」

ソプラと呼ばれたプラスルは、頷き、悔しそうに言う。

「アタシ達が助けに行ければいいんだけどな……」

一人称から判断すると、ソプラは女の子らしかった。

「もしも強い敵に襲われてたら、ボクらだけじゃどうしようもないよね……」

耳を垂らして、マイナンはうつむく。

「どうする、アルル？　救助隊にでも護衛頼んで、迎えに行ってみねぇか？」

アルルと呼ばれたマイナンは、ソプラの言葉で少し目線を前に向けた。

「そっか！　じっとしてもいられないし、それなら安心だね！　でも、どの救助隊に頼むの？」

その言葉を待ってましたと言わんばかりに、ソプラは、ゼニガメ、

ヒトカゲ、ヒコザル、そしてポッチャマが座って、楽しそうに話をしている席を指差した。

「あいつらだよ～♪　キズナ！　お前の大好きな、ヴァイスがいるチームさ！」

「なっ……」

ソプラが“ヴァイス”という言葉を口にすると、アルルは顔が赤く染まる。

「ち、ちょっと、ソプラは大袈裟すぎ！　ボクはただ、ヴァイスさんは、優しいし明るいし、いいポケモンだなぁ～って、憧れてるだけだからね！」

「つまりそれって、ちょっと気になってるってことだろ？」

ソプラの言葉に、アルルは黙ってしまう。どうやら図星のようだ。そう、ヴァイスに淡い恋心を抱くこのマイナン――アルルは、一人称こそ“ボク”だが、お年頃の女の子。憧れの対象であるヴァイスに依頼をすることは、嬉しくも恥ずかしいことなのだった。

「さぁ、そうと決まったら行くぜ、アルル！」

黙ったままのアルルの手をひき、ソプラはセナ達キズナが食事をしているテーブルへと向かう。

「ちょ！　ソプラ！　ソプラってば！！」

ぐいぐいと手を引っ張られ、真っ赤な顔のアルルは、転びそうに

なった。

「よっ！　セナにヴァイス♪　それから、ええと――」

ソプラはセナ達に親しげに声をかける。はるかぜ広場付近の住人なので、互いに知り合いなのだ。

「あっ、ソプラにアルル！」

「あぁ、このヒコザルがホノオで、ポッチャマはシアン。今日からキズナの一員だぜ！」

ヴァイスは嬉しそうにソプラとアルルに声をかけ、セナはホノオとシアンを見て戸惑うソプラに、説明した。ホノオはソプラ達に声をかけようと、飲んでいた“リンゴとモモンのミックスジュース”が入ったコップをテーブルに置く。

「よぉ！　アタシはソプラで、このマイナンはアルル。2人とも、カワイイ女の子だろ？」

ソプラがそう言った刹那、ホノオが口に含んでいたジュースを勢いよく吹き出した。

「おあっ！？　きたねーな！」

危うくジュースがかかりそうだったセナが怒鳴る。幸いテーブルの上の皿は全部空だったが、テーブルがジュースまみれに……。

「だ、だって……。お前ら女なん！？」

確かにソプラのしゃべり方は、男に近いものだったが、ホノオは言ってはならないことを言ってしまった。

「はぁ！？　殺されてぇのかこのクソザルがあぁ！！」

ソプラは怒り狂い、“ホノオに”強力な電撃を放ったつもりだった。

「うぎゃあああ！！」

「ちょ、オイラまでー！？」

「うわあああーっ！！」

「ホノオのバカァー！！」

当初の予定の４倍の悲鳴が店中に響き、店の誰もがこのテーブルに注目した。

結局あの後、ソプラは店主のピクシーにこっぴどく叱られた。一方、そのピクシーの普段の笑顔とのギャップに恐怖した残りの５人は、そそくさと店の外へと逃げ出したのだった。

「みんな、ごめんね……」

ソプラの代わりにひたすら謝るアルル。

「ははは……いいよいいよ」

セナのセリフは棒読み。今はオレンの実のお陰で傷が癒えたが、水タイプのセナとシアンにとっては、あれは地獄の一撃だった。

「実はボク達ね、キミ達の救助隊に頼みたいことがあって声をかけ

たんだけど……」

その言葉に、セナの瞳に再び生気が宿った。

「お、依頼か？」

「『頼みたいこと』って、なあに～？」

ヴァイスの笑顔がアルルへと向けられる。恥ずかしくて目線を反らし、アルルは話し始めた。

「ボク達のお友達の、ピカチュウのキラロとピチューのキララって、たまにこの広場にいるでしょう？」

「あぁ。確か、定期的にお前達の家に泊まって、数日間のあいだここらに滞在するんだよな」

アルルの言葉にセナが相槌を打った。

キズナを結成してから初めて救助したポケモン、キラロとキララ。そして、ホノオとシアンもまた、旅の途中で出会ったポケモンだった。

「で、キララ達がどうしたんだよ？」

ホノオの問いかけに、アルルは本題に入った。

「それがね、本当は今日の午前に、新緑の森からはるばる歩いてきたキラロとキララが、はるかぜ広場に着く予定だったんだ。でも……」

「昼を過ぎても、来ないんだね？」

「は、はい」

ヴァイスに問われ、少し緊張しながらアルルが答える。

「それで、様子を見に行きたいんだけど……。キラロ達が通る道は本来すごく安全なのに、到着が遅れているの。だから、怖いポケモンとかに襲われていたらと思うと、ボクとソプラだけじゃ危ないと思って……」

ホノオは、ソプラさえいれば最強じゃん……と思ったが、口に出さないでおいた。

「よし、分かった！　オイラ達が着いていくから、キララとキラロを探そうぜ！」

セナのその言葉で、交渉が成立した。

「いいの！？　ありがとう！」

アルルが目を輝かせてそう言うと、お説教から解放されたソプラが、ピンクの建物から出てきて、こちらに向かってきた。

「あっ、ソプラ。みなさん良いって言ってくれたよ！」

しょんぼりしていたソプラが、一気に明るい表情になった。

「マジで！？よっしゃー、サンキューキズナ！　さぁ、行こうぜ行

こうぜ！」

「あ、待ってよソプラ！」

どこかへ駆け出すソプラに、焦って追いかけるアルル。そんな彼女達を見、今回の依頼主は手がかかりそうだと、４人は苦笑いするのであった。

第９話：頑張れリーダー！――その３（前書き）

シアンはヴァイスと正　々　堂　々戦ったけど、負けちゃったヨ。バトルって、痛いネ。

お昼ご飯を食べにカフェに行ったら、バカホノオのせいでソプラの電撃を食らっちゃうし……今日は痛い日だナ。

……あっ、言い忘れるところだったヨ。シアン達は、ソプラとアルルに頼まれて、キラロとキララを探しに行くことになったヨ！

（語り：シアン）

第9話：頑張れリーダー！――その3

「だいぶ広場に近くなってきたな、キララ」

「そうでちゅね、お兄ちゃん♪」

セナ達が依頼を受ける、2時間ほど前のこと。仲のよい兄と妹、キラロとキララは、はるかぜ広場にあと少しの“海風の林”の中を歩いていた。彼らの首には、かつてセナとヴァイスに貰った“防御スカーフ”が、大事そうに巻かれている。海風の林に生えている木々の間隔は広く、明るい陽射しがよく地面に届いている。海沿いの爽やかな風が吹くその林の中には、よく広場にも顔を見せる、温厚なポケモン達が住んでいた。

「ソプラお姉ちゃんとアルルお姉ちゃん、きっと喜ぶでちゅね！」

キララが手のひらに収まる星の形をした黄色い石を見ながら、目を輝かせて言った。

「うん。もうすぐアルルの誕生日だからな。喜んでもらえればいいな！」

数日前に洞窟を探検して見つけた、この綺麗な石。おそらく珍しい物であるこれを、ソプラとアルルにプレゼントしようと、キラロとキララは計画していた。

まさかこの石が、トラブルを引き起こす原因になるなんて。この時の2人は、ニヤリと笑みを浮かべ、宙から自分達を見下ろす存在に気付くことはなかった。

それから約2時間後、セナ達キズナと依頼者のソプラとアルルは、この海風の林へと足を踏み入れた。

「へー！　キラロとキララって、この林を通って広場に来てるんだぁ！」

「あぁ。安全な場所だろ？　住んでるポケモン達もいい奴らだし、災害だって起こりようがねぇ」

ヴァイスが驚いて声をあげると、ソプラがそれに答えた。

「もしも……」

アルルが話し始める。

「もしも、キラロとキララに何かがあったとすれば、この林の外部から来たポケモンの仕業かもね」

「そっか。アルルの言う通りかも！」

ヴァイスのその言葉を聞くなり、アルルの頬が、わずかに赤くなる。彼に肯定されたのが、嬉しくて、少し恥ずかしくて――。その瞬間を、見逃していない者がいた。

（あれ？もしかしてアルルって、ヴァイスのことを……）

アルルの秘めている想いにうっすらと感づいたホノオは、セナと

シアンにも目配せする。コクリと上下する、2つの頭。セナとシアンもまた、普段青色のマイナンの頬が赤くなっているのに気が付いたようだ。

（はは～ん♪　やっぱり！）

ホノオの推測が確信に変わると、彼はヴァイス――1人、アルルの気持ちに気付かず、キョロキョロと林の中を見渡している――とアルルを交互に見比べ、ニヤニヤと笑みを浮かべた。

「何妄想してんだ？　変態クソザルが……」

ソプラが、そんなホノオを怪訝な表情で見ながら言った。

「……んなっ！？」

不意に声をかけられ、ハッとソプラの方を見る。

「くく……。も、妄想！」

「変態クソザルだってサ！」

ホノオがにやけていた理由がある程度分かっていたセナとシアンだが、彼に助け船は出さず、薄情にも、むしろ嘲笑う立場になっていた。

「妄想なんて誰がするかよ！？　オレはただ……」

ここから先は――アルルがヴァイスのことを、とはとても言えない。

「あ？　『ただ』、何だって～？」

いたずらっぽくセナがホノオを問い詰める。

「……うるせえぇーッ！！」

ホノオはセナを怒鳴り付け、彼の背中に思い切りのし掛かった。

「はぅッ！？」

突如お腹に衝撃を受け、変な声が洩れた。

「さぁ～、バカセナ。これが言えたら許してやるよ……。“ご”で始まって“い”で終わる言葉はなんだ～？」

セナの頭に固く握った拳をグリグリと押し付けながら、ホノオは言う。

「い、痛い痛い！　えと……。ご、“ご飯食べたい”！」

『“ご”で始まって“い”で終わる言葉』。セナの答えは、『“ご”飯食べた“い”』。

ホノオが要求していた謝罪の言葉――ごめんなさい、とは遠くかけ離れた言葉だが、納得させられたホノオは、思わず攻撃の手を止める。

「“高速スピン”！」

そのスキにセナは甲羅に身を隠して高速回転し、ホノオを振り払

った。

「ふぎゃッ！」

セナに弾き飛ばされ、近くの木に強く頭をぶつけたホノオは目を回した。

「変態撃退っ！」

セナは、シアンとソプラの方を向き、ピースをしながらおどけてそう言う。

「セナ、さすがだネ！」

「よくやったな！」

シアンとソプラからは、セナに歓声が送られた。

「さっきから賑やかだね、みんな」

状況をよく飲み込めていないヴァイスは、首をかしげながら、アルルにそう言った。

「う、うん……」

さらに頬を赤く染め、アルルはそう返事をするのだった。

そんなやり取りをして、みんなの緊張感が抜けてきたとき、状況が動いた。

「た、大変ですーっ！」

林の奥の方から、１人のポケモンが慌てた様子で飛んできた。白い体に生えている羽には見るものを威嚇する赤い目玉のような模様があるが、そのポケモン――アメモース本体の顔はどこかかわいらしい。

「む！　どうしたんだ！？」

アメモースの緊迫した声から、ただ事ではないと悟ったセナ。

「あ、あなた達は、救助隊キズナ！　た、大変なんです！　僕、見てしまいました！」

「お、落ち着いてよアメモースさん。何を見たの？」

あまりに焦ってうまく口が回っていないアメモースを見て、ヴァイスは落ち着いた声で尋ねた。

「あ、あの。さっき僕がこの林の上を飛んでいたら、仲の良いピカチュウとピチューがちょっと怪しいポケモンに話しかけられていて……」

「キラロとキララだ！！」

仲の良いピカチュウとピチュー。その言葉で確信して、みんなの声が重なった。

「え？　お知り合いなのですか？」

「うん！　ボク達、今その2人を探しているところなの！」

驚いたように問うアメモースに、ヴァイスがみんなを代表して答えた。

「それならなおさら大変だ！　その後、その怪しいポケモン達はピカチュウとピチューをどこかへ連れていったんです！」

「マ、マジかよ……」

悪い予感に皆がサッと青ざめ、ソプラの口からは呆然と言葉が洩れる。

「絶対に危ないと確信した僕は、その怪しげなポケモン達とピカチュウ達の後をつけました。奴らは、ピカチュウ達を“小さな岩山”のふもとまで連れていくと、ピカチュウ達の持っていた綺麗な石を渡すように脅し始めたんです！」

「盗賊団か……」

深刻な表情で、セナが呟く。

「その後彼らがどうなったのか……。僕は心配でたまりません。僕は、救助隊の皆さんのような強さはないし、助けることができなくて。でも、ただの傍観者にはなりたくなかったから、誰かに助けを求めようと、すぐに広場に向かっていたのです！」

無力な自分を責めるように、悔しそうな顔をしてアメモースは言った。

「教えてくれてありがとな。さぁ、その場所に案内してくれないか？」

アメモースを励ますように礼を言い、セナがそう問う。

「も、もちろんです！　さぁ、ついてきてください！」

そう言うと、アメモースはものすごいスピードでどこかへ飛んでいき、グングンとセナ達との距離が離れていく。

「ちょっ、ストップ！　ストーップ！」

危うく見失いそうになり、セナは叫んで彼を止めた。

「あ、ごめんなさい」

アメモースはセナ達の元へ戻ってくると、ペースを合わせて飛び、盗賊団とキラロとキララがいる場所へと案内した。

「さぁ、そろそろおとなしくよこした方が良いぜ？」

カマキリを思わせる赤い体に、手には大きなハサミがついている。鋭い目つきのそのポケモン、ハッサムが、尖ったハサミをキララの顔の前でギラリと光らせる。

「お、お兄ちゃーん……」

恐怖のあまり、キララはキラロに抱きつき、泣き出してしまった。

「フフフ……」

その様子を見ながら、ハッサムの仲間のポケモンが不敵な笑みを浮かべる。黄色い体に大きな耳と鼻。常に振り子を手放さないポケモン、スリーパーだ。

「いいっスよ～、お頭～！」

この状況を楽しむように、側で見ていたエテボース――薄紫色の猿のような容姿で、２本の尻尾から器用な手が生えているポケモン――がそう言った。“お頭”とは、ハッサムのこと。どうやら、このエテボースもハッサムの仲間のようだ。

「く、悔しいけど、渡すしか……」

妹を傷つけられるのは、絶対に嫌だ！　そう思ったキラロは、決意を固め、今まで渋っていた行動をとる。ソプラとアルルに渡すはずだった星形の黄色い石を、ハッサムに手渡すという行動を……。

「待て！！」

ハッサムがキラロから石を奪おうとした、その時。ここ、小さな岩山に、救いの光が現れた。キズナのメンバー４人に、依頼者のソプラとアルル。そして、事件の目撃者のアメモースだった。

「てめぇら……。盗賊団“スライ”じゃねぇか……」

ハッサム、スリーパー、エテボース。その組み合わせに覚えがあ

ったセナは、そう呟く。救助隊連盟本部にある、お尋ね者を掲示している掲示板に、ポスターを長い間貼り付けられている、盗賊団スライ。なかなか厄介な相手のようだ。

「とっとときラロとキララを返しやがれ！」

ホノオがそう叫ぶと、ハッサムがニヤリと笑いながら言う。

「そうか。今回の俺達の相手は、かの救助隊キズナか……」

「……えっ？」

まるで、この場に誰かが駆けつけてくるのを想定していたような。そんな不可解なハッサムの言葉に、ヴァイスが疑問の声を洩らす。

「よく連れてきたッスね～♪　偉いよ、アメモースちん♪」

エテボースのその言葉に、凍りつく一同。

「ア、アメモースさん？」

恐る恐るアメモースと目を合わせ、話しかけるヴァイス。

「“銀色の風”！」

突如冷たい表情を浮かべたアメモースは、キズナとソプラ、アルルに“銀色の風”で襲いかかった。

「うわあぁぁー！！」

強い風に吹き飛ばされ、皆の悲鳴が重なった。

そのまま体を岩山に叩きつけられると、ドサリと倒れ込んだ。

「ご名答。俺達は、盗賊団スライ」

倒れているセナ達に歩みより、ハッサムが話しかける。

「だが残念だな。本当は、俺達には４人目のメンバーがいるんだぜ？」

（そ、それが、アメモースだってワケか……）

セナはうつ伏せの状態から顔をあげ、ハッサムを睨み付けた。

「どうして俺達が、お前達をここに連れてきたか分かるか？」

「し、知ったこっちゃないヨ……」

ハッサムの問いに、もっともな答えを返すシアン。

「俺達は～、“救助隊”っつーモンが嫌いなワケ♪　正義ぶっちゃって、どこがかっこいいんだよ？盗賊団の方が断然カッコイーっての♪」

エテボースのその話し方からは、あまり危機感を感じられない。

しかし、その言葉は、ヴァイスを怒らせるには充分だった。

「ふざけないで！　ボクらはかっこいいから救助隊をやっているんじゃない！　困っているポケモンを助けたいからやってるんだ！」

その言葉に、セナ、ホノオ、シアンは強く共感し、キズナの４人は静かに立ち上がった。

「お宝を盗むだけじゃ、三流の盗賊団だな。俺達は違う」

ハッサムがそう言うと、スリーパー、エテボース、そして、さっきまで味方だと思っていたアメモース――盗賊団スライの残りのメンバーも、キズナに歩み寄った。

「宝物を奪うついでに、目障りな救助隊を倒す。それが、この盗賊団が一流である所以だ」

盗賊団の頭であるハッサムは、誇らしげに言った。

「そして俺の役割は、お前達のような間抜けな救助隊を、お頭達の元へと連れてくることなんだ」

さっきまでのアメモースの様子からは、とても想像できないような、意地の悪い笑顔を見せた。

「ち・な・み・に～♪　アメモースちんがシークレットなメンバーなのは、スリーパーちんが救助隊の奴らの記憶を操作して、アメモースちんの記憶を消してくれるからだよ♪」

それで、アメモースがスライのメンバーだと気付かず、自分達のようにおびき寄せられて多くの救助隊が重症を負っているのか。真相を知ると、セナ達４人はスライの面々を睨み付けた。

「許さねぇ。てめぇらは、オイラ達が絶対に捕まえてやるからな！」

セナの言葉で気合いが入った、ヴァイス、ホノオ、シアン。
皆が大きく息を吸い込み、戦いに向けての準備を万全に整えた。

第９話：頑張れリーダー！――その４（前書き）

ボクらがキラロ達を探していると、アメモースがやってきて、キラロ達が盗賊団に襲われているって教えてくれたんだ。
急いで現場に向かったのはいいけど、まさか、アメモースが嘘つきだったなんてね……。

今回の敵は、盗賊団スライ。宝を盗み、救助隊を襲う、困った盗賊団なんだ。
みんな、絶対に負けないよ！
（語り：ヴァイス）

第9話：頑張れリーダー！――その4

セナ、ヴァイス、ホノオ、シアン。息を思い切り吸い込んだ4人は、互いに目を合わせると、力強く頷く。そして、敵――盗賊団スライの4人を睨み付けると、セナとシアンは水を、ヴァイスとホノオは炎を、勢いよく口から放った。4つの攻撃が重なり、敵に迫る。――が、さすがは盗賊団。素早くセナ達の攻撃を避けると、行動に出た。

「いくっスよーん♪　“嫌な音”！」

エテボースは、セナ達目掛けて音波を飛ばした。

「うああ！！」

音波が直撃し、不快な音を聞かされるセナ達4人。耳をふさいでもしつこく脳内に浸透してくるその音のせいで、体から力が抜けてしまい、防御が手薄になる。

「さあさあ皆さん♪　行きまっせ～！」

エテボースがそう言うと、スライの4人は攻撃体勢に入った。そして。

「“電光石火”！」

その声が聞こえたかと思うと、セナの体に衝撃が走り、弾き飛ばされた。

「うっ……！」

近くに生えていた木に頭を思い切りぶつけ、セナは顔を歪めた。
そんな彼に近寄ってきたのは、盗賊団の頭であり、セナを電光石火で攻撃した、ハッサムだった。

「お前の相手はこの俺だ」

その言葉と共に、セナの顔の前で鋭いハサミをギラリと光らせるハッサム。セナは立ち上がろうとしていたが、座った体勢で動作をピタリと止め、冷や汗を流した。

（下手に動いたらやられちまうな……）

セナはハッサムの顔を睨み付けた。

「フッ。怖いか？」

挑発的な口調で、ハッサムが聞いてくる。

「いいや、全然」

セナは涼しい顔を無理に作り、余裕を演じる。

「フン。その生意気な面を叩き割ってやる！」

ニヤリと笑みを浮かべると、ハッサムはセナの顔めがけて素早くハサミの尖った部分を突き刺した。が、ハサミは空を切るとセナの背後にあった木に当たり、木はミシミシと音を立てて倒れる。とっさに首を甲羅の中に引っ込めて攻撃をかわしたセナは、立ち上がる

とハッサムとの距離をとった。

先程セナがハッサムの攻撃を受けたのと同時に――。

「“頭突き”！」

スライのスリーパーは、ヴァイスめがけて頭突きを繰り出した。

「うあ！」

スリーパーの頭突きがお腹に強く当たり、ヴァイスはうずくまって激しく咳き込んだ。そんな彼に、スリーパーは静かに近寄る。ヴァイスはスリーパーの気配に気が付くと、必死に顔をあげてスリーパーを睨み付けた。

「キミ達には絶対勝つからね！　これ以上悪いことをさせてたまるか！」

ヴァイスは立ち上がりながらそう言うが、スリーパーから返事はない。表情も、ピクリとも変わらない。

（む、無口なのかなこの人……。なんかやりづらいよ）

スリーパーの雰囲気に少し圧倒されるヴァイスだが、そんなことも言ってはいられない。

「いくよ！　“火の粉”！」

勢いよく火の玉を放ったが、その攻撃は無駄のない動きでヒラリとかわされてしまう。

「“サイケ光線”！」

スリーパーは、エスパーの力が込められた不思議な色の光線を、ヴァイスに放った

「うわあぁ！」

攻撃をかわされたことに驚いて隙だらけだったヴァイスは、サイケ光線を受けて辛そうな叫び声をあげてしまったのだった。

「いくよお猿ちん！“ダブルアタック”！」

“嫌な音”を聞かされた直後、ホノオはエテボースの尻尾に付いた手に2回叩きつけられた。その衝撃で、ホノオの体は地面に強く押し付けられ、そのまま引きずられた。

「うあっ……！」

地面との摩擦で背中がひどく熱くなる。ホノオの体が止まると、エテボースが仰向けに倒れているホノオに近づいてきた。

「やっほー！　キミの相手は俺だから♪」

相変わらず陽気に話しかけてくるエテボースにカチンときて、ホノオは勢いよく起き上がると怒鳴り出した。

「テメーさっきはよくも猿呼ばわりしてくれたな!?　そっちこそ立派な猿じゃねぇか！　あ!?」

“お猿ちん”などと呼ばれて怒り狂うホノオを、エテボースはケラケラと笑う。

「だって～、猿なものは猿だもんね。俺も猿、キミも猿♪」

“キミも猿”と言う言葉と共に、尻尾に付いている2つの手でホノオを指差すエテボース。

「人を指差すな、クソアホモンキー!!」

暴言と共に、ホノオはエテボースに燃え盛る“火炎放射”を放つ。しかし、身軽なエテボースはそれを難なくかわし、あっという間にホノオの背後に回り込んだ。

「そんなに怖い顔しないでよぉ～。えい、“くすぐる”！」

エテボースの尻尾の手がホノオの脇腹に伸び、這うようにうごめく。耐えがたいむずがゆさがホノオを襲った。

「ちょっ！　やッ、止めろーっ！」

たまらずホノオは身をよじり、戦場に似つかわしくない笑い声が辺りに響いた。

「ひゃはは！　死ぬ！　苦しい……っ！」

息を吸えずに絶えず笑うホノオに、エテボースは次の攻撃を仕掛けた。

「意外と弱いね～、お猿ちん♪　じゃあ、“乱れ引っ掻き”～！」

尻尾の手の爪を尖らせると、今度はホノオの背中を何度も引っ掻く。

「うぐっ！」

無防備な状態に受けた突然の激しい攻撃に、苦痛の表情を浮かべる。エテボースの先ほどの“くすぐる”は、見た目は遊びのような技だが、実は相手を疲れさせて攻撃、防御力を下げる恐ろしい技なのだ。さらにはじめの“嫌な音”にも、防御力低下の効果がある。どん底の防御力のホノオ。次から次へと想像以上の痛みに襲われて、次第に足がふらつく。

「よーし、ラストー！」

エテボースが最大の力でホノオの背中を切り裂いた。

「うわあぁぁーっ！！」

激痛に思わず悲鳴をあげてしまうホノオ。エテボースの“乱れ引っ掻き”が終わると、ドサリとうつ伏せに倒れるのだった。

「“電光石火”！」

未だ書き付けられていない組み合わせはただ1つ。シアンはあの時、アメモースの電光石火によってダメージを受けた。

「イタタ……」

痛む体を起こすシアンに、アメモースが迫る。

「俺がお前の相手だ。まさか俺が敵だとは思わなかっただろう？」

アメモースが浮かべる意地の悪い笑みに、シアンは怒りの表情を露にした。

「ウン！　キミって最低なポケモンだネ！　シアン、キミみたいなポケモン、大っ嫌い！」

そう言い放つシアンだが、どこか迫力がない。

「あらあら、嫌われちゃったね。“シアン”かぁ。可愛い名前じゃねぇか、嬢ちゃんよ」

宙に浮きながら、文字通りシアンを見下しているアメモース。その言葉に、シアンが猛反発しない訳がない。

「シアンは男の子だヨ！」

シアンは特有の、甲高い声で抗議する。

するとアメモースは、突然狂ったように笑い始めた。

「はっはっはっは！　下手な冗談はよしてくれないか？」

「冗談じゃないもん、ホントだもん！」

シアンは頬を膨らませると、体を回転させてアメモースに突進した。

「“ドリルくちばし”！」

セナ達がスライの面々とバトルを始めた頃。先程アメモースの“銀色の風”で岩山に叩きつけられて倒れていたソプラとアルルが起き上がり、怯えた様子で状況を眺めているキラロとキララの元へと向かった。キラロ達のすぐ近くでは、シアンとアメモースが戦っている。

「よぉ、キラロ、キララ。怪我はねぇのか？」

相変わらず、荒れた言葉遣いでソプラが尋ねる。

「う、うん。なんとかね」

そう答えるキラロだが、恐怖による疲れが伺えた。

「ソプラお姉ちゃーん……。怖かったでちゅー！」

キララは泣き出し、ソプラに抱きついた。

「でも、どうしてキラロ達は盗賊団に襲われたの？」

アルルがそう問うと、キラロは、トラブルの元になった、黄色い星形の石を見せながら言う。

「ぼく達、この石をアルル達にプレゼントしたくて持ってきたんだけど、どうやら盗賊団がこれに目をつけたみたい」

キラロはそのきれいな石を、アルルの手のひらに乗せた。

「うわぁー、これボクに！？　ありがとう、キラロ、キララ！」

アルルが歓声をあげると、キラロとキララは目的を達成した満足感で頬を緩めた。一瞬、この４人の中に暖かな雰囲気が流れたが、すぐさまその雰囲気を壊す者がいた。

「フフフ。こいつらがどうなってもいいのかな？」

アメモースが、ソプラ達４人に近寄ってくる。シアンの“ドリルくちばし”をかわした後、アメモースがとった行動は……。

「さあ、シアンちゃん。そこから一歩でも近寄ると、この４人に“エアスラッシュ”をブッ放すぜ？」

ソプラ達４人を人質にするという、なんとも卑怯な行動だった。

「う……」

状況をどうにもできず、うろたえるシアン。その様子を見て勝利を確信したアメモースだが、ソプラがニヤリと笑みを浮かべた瞬間、彼の負けが決まった。

「どうやら人質にする奴を間違えちまったみてぇだな、害虫！」

ソプラの周りの空気が、バチバチと音を立てる。

「な、『害虫』だと！？」

失礼極まりない言葉に、ソプラを睨み付けて脅すアメモース。羽の模様を鋭い目付きのように見せ、なんとも恐ろしい姿に変貌したが、もはやソプラにはそんなことは関係ない。

「邪魔な虫を害虫っつーんだよ！　駆除してやるぜ！」

ついにソプラが体に力を込めると、鋭い電流がアメモースを貫く。

「ぎゃあああぁー！！」

飛行タイプのアメモースには、ソプラの電撃は効果抜群のようだ。ソプラが放電を終えると、アメモースは黒焦げになり、呆気なく地面へと崩れ落ちた。

「けっ！　ざまあみろってんだ！」

ソプラはアメモースを一度蹴ると、シアンの方を見て言った。

「さぁ、出陣だぜシアン！　あと、アルル！　セナやヴァイスの手助けをしようぜ！」

「ウン！　よーし、シアンはセナを手助けするヨ！」

シアンはそう言うと、ハッサムと戦うセナの元へと駆けていった。

「さーあ、アルルぅ♪」

ソプラはニヤニヤと笑いながらアルルの肩を叩く。

「お前はヴァイスと一緒に戦いな。チャンスだぜチャンス！」

「ええっ！？チャンスって、そんな……」

頬を赤らめるアルルの背中をソプラが押す。

「ほら！　早く行かないとヴァイスがやられちまうぜ？」

「……う、うん！」

ヴァイスがやられる。それだけは嫌だと強く願うと、アルルはスリーパーと戦うヴァイスの元へと向かったのだった。

「って、そんじゃアタシはクソザルとじゃねぇか。はぁ、失敗失敗」

ソプラはそう呟くと、渋々エテボースと戦うホノオの元へと歩いていった。

「ハァ、ハァ……。何で当たらないの？」

スリーパーの“サイケ光線”を受けた後も、なんとか戦い続けていたヴァイス。しかし、片っ端から攻撃が避けられ、疲労がたまってあえいでいた。スリーパーの特性は、“予知夢”。時々相手の攻撃をかわすことができるという特性だ。この特性にも助けられ、スリーパーはヴァイスの攻撃を避けられたのだ。

スリーパーは、右手に持っている振り子を怪しく揺らす。“サイコキネシス”を放つ合図だった。

（まずいよ……！）

逃げようとするが、体が思うように動かない。スリーパーが力をため終わり、ヴァイスに“サイコキネシス”を放とうとした、その時。

「“スパーク”！」

アルルは体に電気をまとい、スリーパーに体当たりした。それほどの威力はなかったものの、スリーパーの攻撃体勢を崩すのには充分だった。

「アルル！」

突然の乱入にヴァイスは驚く。

「ヴァイスさん、ボクも戦うよ！」

引き締まった表情で、アルルはヴァイスに言った。

「えぇっ！？　でも、危ないよ！」

ヴァイスは焦ってアルルの考えを止めようとするが……。

「でも！　ヴァイスさん怪我してるし、ボク役にたちたいよ！」

これまでのスリーパーとの戦いで負った傷が、確かに少し痛む。

辛い状況の中、その言葉がヴァイスには嬉しかった。

「ありがとう、アルル！　よーし、アルルが攻撃されたら、ボクが守るからね！」

ボクが守るからね。アルルの鼓動を速くする、不思議な言葉だった。

第9話：頑張れリーダー！――その5（前書き）

オレは盗賊団のエテボースと戦うことになったんだけど……このヘラヘラモンキー、ホノオ様に向かって「お猿ちん」とは何事だ！！……おい。今「猿ＶＳ猿ｗｗ」とか言った奴……ちょっとツラ貸せ。

しかしまあ、この盗賊猿が、意外と強いのよね。

動きは速いし、“嫌な音”や“くすぐる”（オレが弱いのは内緒にしてくれ！）で防御力が下がってる中、“乱れひっかき”なんてやってきやがった。

悔しいが……苦戦中だ。

（語り：ホノオ）

第9話：頑張れリーダー！――その5

「“サイケ光線”！」

しばし、ヴァイスとアルルの間にいい感じの雰囲気が漂ったが、スリーパーの攻撃がそれを壊す。

「逃げるよ！」

立ち尽くすアルルの右手をひいて、ヴァイスは攻撃をかわした。

「ふぅ。危なかった」

アルルの無事を確認すると、ヴァイスは微笑みかけた。

「あ、ありがとう、ヴァイスさん……」

顔を赤くして、アルルはそう答える。

「いいのいいの♪　よーし、行くよアルル！」

ヴァイスがそう言うと、ヴァイスとアルルはスリーパーに駆け寄った。

「えいっ！　“切り裂く”！」

ヴァイスが爪をとがらせてスリーパーを引っ掻こうとするが、やはりその攻撃はひらりとかわされる。しかし、そこにスリーパーの隙を見つけ、ヴァイスがうっすらと笑みを浮かべた。

「“スパーク”！」

ヴァイスの攻撃をかわした後のスリーパーに、電撃をまとったアルルが体当たりした。威力はそこまで強くないものの、大きくよろけるスリーパー。そんな彼に追い討ちをかけるべく、ヴァイスは右手に炎をまとわせる。

「“炎のパンチ”！」

頬に燃え盛る拳が激突し、スリーパーは弾き飛ぶ。攻撃がクリーンヒットした感覚が久しぶりのように感じられ、ヴァイスは少しスカッとした気分になった。

「やった！　倒したのかな？」

アルルが仰向けに倒れるスリーパーを見て嬉しそうにそう言うが……。

「いいや、まだだよ」

ヴァイスのその言葉と共に、スリーパーは立ち上がる。そしてヴァイスと目が合うと、スリーパーは自らの瞳を鋭く光らせた。

「“金縛り”」

「うっ……！」

スリーパーの“金縛り”の効果で、ヴァイスは体が硬直したように動かなくなった。

「どうしたの、ヴァイスさん！？」

心配そうに、アルルはヴァイスに声をかける。

「か、体が動かないんだ……」

悔しそうな顔つきでそう話すヴァイス。そんな彼に、少しの傷を負ったスリーパーが近づいた。そして、振り子を揺らすと攻撃を始めた。

「“サイコキネシス”！」

「う、うわあぁーっ！！」

強力な念力を浴びせられ、ヴァイスは頭痛に苦しむ。スリーパーは、残酷な笑みを浮かべ、振り子からさらに強い念力を出した。

「ヴァイスさん！」

ヴァイスを守りたい。その一心で、アルルはスリーパーに“スパーク”を繰り出した。スリーパーがよろけたことで念力が途切れ、ヴァイスは苦しみから解放された。まだ“金縛り”の効果が続いているため、立ち尽くしたまま肩で息をする。そんなヴァイスの瞳に、ある光景が映る。怒りに満ちたスリーパーが、アルルを睨み付けていた。

（あっ！　危ないアルル！）

ヴァイスはそう思ったものの、まだ体は言うことを聞いてくれず、

今は声すら出せない。そしてスリーパーは、ヴァイスが恐れた行動に出てしまった。

「“サイケ光線”！」

不思議な色をした光線が、アルルをとらえた。

「うわあーっ！」

アルルのその悲鳴を聞くと、ヴァイスの心が引き裂かれそうに痛んだ。ごめんね、アルル。ボク、アルルのこと守るって言ったのに！　とても悔しくなり、ヴァイスの目に涙がたまった。皮肉にも、“サイケ光線”を浴びたアルルが倒れるのと、ヴァイスの金縛りが解けるのは、ほぼ同時だった。

「アルル！」

ヴァイスがよろけながらもアルルに駆け寄ってみるが、彼女は気を失っていた。何か強い感情が、ヴァイスの中に沸き上がり、押さえきれなくなる。

「許さない……」

そう言って自らを睨むヴァイスの眼差しに、スリーパーは、思わず怯んでしまった。

「食らえ！」

怒りをパワーに変えたような勢いの炎が、スリーパーに迫る。それは、いつもヴァイスが使っている技“火の粉”よりもさらに強い

“火炎放射”だった。

「ぐわあああぁ！」

“火炎放射”を避けきれず、スリーパーから悲鳴が聞こえた。ヴァイスが攻撃を終えると、黒焦げのスリーパーは、ドサリと倒れた。倒した。今度こそそう確信すると、ヴァイスはよろよろとアルルの元へと向かう。

「あ、ヴァイスさん……」

うっすらと目を開けて、アルルは体を起こした。

「アルルごめんね。ボク、アルルのこと守るって言ったのに」

目に涙をためて、ヴァイスはアルルに謝る。

「え……。そんな、大丈夫だよ！」

目の前で泣き始めたヴァイスを見て、アルルは顔を赤くしながら焦ってそう言った。

（こういう誠実さも、ボクがヴァイスさんを好きな理由なんだろうなぁ……）

アルルがそう思って頬を緩めると、ついにヴァイスは蓄積していたダメージに耐えきれずに倒れてしまった。

「ヴァイスさん！」

アルルが名前を呼ぶ声が、だんだんと遠くなっていく心地がした。
ゆっくり、ゆっくりと、ヴァイスは目を閉じたのだった。

「ハァ、ハァ……。くそ……」

激しい“乱れ引っ掻き”を受けた後も、なんとか立ち上がり、ホノオは再び戦う姿勢を見せた。

「えーっ!?　まだやるの、お猿ちん?　ボロボロじゃない!」

「うるせぇ……」

エテボースの言葉に腹が立ち、キッと睨み付けた。

「まぁ、やりたいなら良いけどねっ!　じゃあ“ダブルアタック”!」

エテボースの尻尾に着いた手が、ホノオを叩きつけようとするが、フラフラしながらも、ホノオは攻撃をかわした。

「か、“火炎放射”!」

そしてホノオは、エテボースに“火炎放射”を放つ。しかし、やはり身軽なエテボースは、燃え盛る火柱を避けてしまった。

「く……」

その様子を見たとたんに、疲労がドッとホノオを襲い、彼は地面に膝をついてしまった。

「ぜぇ……ぜぇ……」

乱れた息を落ち着かせようと、必死に呼吸を繰り返すが、その隙だらけの様子を相手が見逃してくれるはずがなかった。

「無理はしないでよぉ、お猿ちん。死んじゃうよ～？」

こちらが苛立つようなセリフを言いながらエテボースが近寄ってくるが、背中の傷が鋭くうずき、ホノオはエテボースの顔を見られず、きつく目を閉じた。

「さーぁ、これでとどめだ……！？」

そう言いかけると、何かの気配を察知したエテボースは、素早くその場から飛び退いた。刹那、エテボースがいた場所に飛んできたのは、鋭い電撃。

「ちっ。外したか……」

ホノオが顔をあげると、ソプラがこちらに歩いてくるのが分かった。

「よぉクソザル。おめぇあんな猿にやられてンの？　だらしねぇな」

「っ……！」

ソプラの無神経な言葉に苛立ちを覚えるホノオだが、背中の傷が

彼の反論を妨げた。

「おっ、いらっしゃーいプラスルちん♪　アンタ、このお猿ちんより断然強いんでなーい？」

ソプラに陽気に話しかけるエテボース。

「あぁ、まあな♪」

余裕の表情を浮かべ、そう断言するソプラ。

馬鹿に、するなよ……。ホノオの中に、激しい悔しさと怒りが込み上げ、彼に再び立ち上がる力を与えた。プライドを守るために――。

「てめえは引っ込んでろ、ソプラ。こんな猿、オレだけで充分だ……！」

「ハァ！？」

ホノオの言葉に、ソプラは怪訝な表情を見せた。

「バカじゃねぇの！？　オマエなんかが勝てるわけ……」

「うるさい！！」

ホノオの凄まじい怒鳴り声に、さすがのソプラも黙り込む。

「これはお前の仕事じゃねぇ。救助隊キズナの仕事なんだ。でしゃばるんじゃねぇよ。……目障りなんだよ」

そのきつい言葉で、ソプラの心がぐらついた。

「……あっそ。人がせっかく親切に手を貸してやってんのに……。勝手に負けてろ、クソザルが」

腕を組むと、ソプラはホノオに背を向けた。

「あーれー？　仲間割れしちゃったのぉ？　ドンマイお猿ちん！」

馬鹿にするようにそう語りかけるエテボースに、ホノオは突如無言で奇襲する。左足に、激しく燃える炎を宿し、エテボースを思い切り蹴りつける――“ブレイズキック”という技だ。

「ぐっ……！　痛いなぁ！　いきなりやることないじゃーん！」

腹にホノオの攻撃を受け、よろけながらエテボースが言った。

「お前は、オレが倒す……！」

ホノオは息を吸い込み、隙のできたエテボースに再び“火炎放射”を放った。

「おっ……とぉ！？」

ヘッドスライディングをするように横に飛び、なんとかエテボースは攻撃をかわした。

「やるじゃない、お猿ちん……」

お腹に付いた汚れを払い、エテボースは立ち上がりながら言った。

「ハァ……ハァ……」

やっと少しは優位になったものの、かなり苦しそうに呼吸をするホノオ。霞む視界から、エテボースを見据えた。

「でも、やっぱりそんなボロボロじゃあ、俺には勝てないな！“いあいぎり”！」

尻尾についた手の爪を鋭くとがらせて、ホノオのお腹を思いきり切りつけた。

「ぐああっ！！」

ホノオの苦しげな悲鳴は、ソプラの耳にもきちんと届いた。

やっぱり、クソザルには無理だったか。ここはアタシがあのエテボースを倒して、クソザルに土下座でもさせようじゃねぇか。そう企んだソプラは、バチバチと体に電気をため始めるが――

「見逃さないよ？　プラスルちん」

自分が攻撃する気配を、エテボースに読まれてしまった。

「くっ……。食らえっ！」

蓄電途中ではあるが、ソプラは強力な電気をエテボースに放つ。しかしエテボースは、それをかわしてしまうと、ソプラに攻撃を仕掛けた。

「“ダブルアタック”！」

「くっ……！」

エテボースの手に弾かれ、ソプラはホノオのすぐ側まで飛ばされた。

（つ、強えぇ……）

今まで自分の強さに自信を持っていたソプラだが、その自信が崩れそうになった。

「さぁ、2人まとめて倒してあげるね！　“スピードスター”！」

エテボースは、無数の星形の弾丸を、素早くホノオとソプラに向けて放った。

「うわ……！」

避けることは不可能に等しいと思い、ソプラは覚悟をして目を瞑る――が、いつまでたっても痛みがない。そっと目を開けてみると、飛び込んできた眺めに驚愕した。

「オ……オイ！」

ソプラの目の前には、酷く傷ついたホノオが倒れていた。おそらく、“スピードスター”からかばってくれたのだろう。

また、このときソプラは、うつ伏せに倒れるホノオの背中の傷を見て、気が付いた。コイツはずっと、こんなに酷い怪我をしながら、戦っていたんだと。それなのに、アタシは……。

「アハハハ！　攻撃をかばうなんて、なーにバカなことやってんだろ？」

エテボースは、ホノオを馬鹿にしたように笑い始める。

「黙れ、クソ猿……」

ソプラはそう言うと、エテボースに向かっていった。

「“電光石火”！」

ソプラが素早くエテボースの元へ飛び込むが――。

「“嫌な音”！」

エテボースの出した不快な音波が直撃し、たまらずソプラは足を止め、耳を押さえた。

「うぅ……」

うろたえるソプラに、近づくエテボース。

「行くよん！　“引っ掻く”！」

鋭い爪が、ソプラを襲う。

「うぐっ……！」

お腹に傷を負い、ソプラは顔を歪めた。

「くそ……！　食らえ、“雷”！」

すぐさま強力な技で反撃しようとするソプラだが、相変わらずエテボースに軽々と攻撃をかわされた。

「どんなに強い技でもねぇ、当てなきゃダメなんだよン♪　“ダブルアタック”！」

再びエテボースはソプラに“ダブルアタック”を繰り出し、ソプラの体を弾き飛ばした。

「うああ！」

悲痛な悲鳴を洩らし、ソプラは倒れ込んだ。

「さ・あ・て♪　とどめをさしちゃうぞ～！」

エテボースが笑みを浮かべてソプラに近寄る。もう駄目だと、彼女が諦めかけたその時。また、彼が救ってくれた。

「“炎の渦”！」

エテボースの背後からその言葉が聞こえると共に、激しい炎がエテボースの体に巻き付き、締め付けた。

「ちょ、お猿ちん！？　まだ戦えたワケ！？」

突然の事態に、エテボースはパニックに陥る。

「ハァ、ハァ……。ホ、ホノオ様を、ナメるなよ！」

息を切らしながらもエテボースにそう言うと、今度はソプラに話しかけた。

「攻撃さえ、当たれば、楽勝だぜ……。ソプラ、やっちまえ！」

「っしゃー！　じゃあ遠慮なく“雷”！」

ソプラが鋭い電流を放ち、エテボースの体を貫いた。

「ぎゃあああ！！」

その悲鳴を聞いてなんとも気味の良い心地がしたホノオは、“炎の渦”を解除して、エテボースにとどめを刺した。

「“火炎放射”ーっ！」

ホノオやヴァイスが持つ、自らがピンチの時に炎タイプの技の威力が跳ね上がる特性、“猛火”。この特性の影響もあって、ホノオが放った火炎放射は凄まじい高温の炎となり、微かに青い色をしていた。

ソプラとホノオの攻撃が終わると、エテボースが黒焦げになって倒れ込んだ。それと同時に、無理が祟ったホノオも――。

「オイ、大丈夫かよ！？」

ソプラは心配そうにホノオに声をかけた。

「てめえなんかに……心配……されたくねぇや……」

こんな口をきくホノオを、今のソプラは憎たらしいと思えなかった。

「えと。ホノオだっけか？　なんか、色々とありがとな。あと、ごめ……」

ソプラにこんなことを言われると、なんだか調子が狂いそうだ。

そう思ったホノオは、彼女の言葉を遮って言った。

「無駄なこと、話す暇があったら……、とっとと、どこかからオレンの実でも、採ってこいよ……」

まずは何よりも怪我の治療が先決であった。

「よし、分かった！　待ってろよ！」

ソプラはそう答えると、森がある方角へと走っていった。その姿を見届けると、ホノオは気を失ったのだった。

「“電光石火”！」

セナがせっかくハッサムとの距離をとったのに、あっという間にその間合いが詰められた。

「ぐあっ！」

ハッサムの硬い体に弾き飛ばされ、セナは再び木に激突した。

「フフフ……」

不敵な笑みを浮かべながら、ハッサムはセナに近寄ってくる。今度は素早く立ち上がると、セナは攻撃を仕掛けた。

「“水鉄砲”！」

強い水の流れがハッサムに迫るが、“電光石火”を使うことによって、セナの攻撃を容易く回避する。そして。

「“切り裂く”！」

ハッサムは、右手のハサミをセナに向かって降り下ろした。

「くっ……！」

とっさに右手から氷柱を出現させたセナは、ハサミを氷柱で防ぎ、攻撃の直撃を免れた。

「む。“冷凍パンチ”の応用か……」

押さえつけられているハサミをセナの氷柱に押し付けながら、ハッサムが言う。

「あぁ」

ハッサムのハサミに力負けしないよう、精一杯の力を右腕に込めながら、セナが短く返事をした。

「フフ。しかし、残念だったな」

ハッサムのその言葉に、嫌な予感がした。

「俺にはこの左手もあるんだぜ？」

しまった。さすがに右手の氷柱で、ハッサムの両手のハサミを防ぐのは難しい。青ざめるセナに、ハッサムの左手のハサミが襲いかかる。

「“切り裂く”！」

ハッサムの左手のハサミは、セナの右肩に深い切り傷を刻み付けた。

「うあああぁっ！！」

あまりの痛さに、喉が張り裂けそうな声でセナが叫ぶ。右手を覆っていた氷柱もバラバラと砕け、ついにハッサムの右手もセナの頭に直撃した。

「うっ……！」

強い目眩に襲われ、セナは力なくうつ伏せに倒れた。

「ふっ。なんだ？　もうおしまいか？」

傷を負ったセナの右肩を、ぐりぐりと踏みつけながらハッサムが言う。

「ぐっ……うあ！」

激痛が体を貫き、セナは悶え苦しむ。

徐々に遠のく意識……。いっそのこと、気を失ってしまった方が、楽なのかも知れねぇな。

抵抗する気力は、セナには残されていなかった。

第9話：頑張れリーダー！――その6（前書き）

オイラは盗賊団の頭（“あたま”じゃないぞ。“かしら”だからな！）、ハッサムと戦っていたんだけど、“切り裂く”を防ぎきれずに、肩に大怪我を負った。

しかも、奴が血だらけの肩をぐりぐりと踏みつけるから、傷口が――と、グロいお話はほどほどにしよう。

痛いし、なんだかもう力が……出、ない……。

（語り：セナ）

第9話：頑張れリーダー！――その6

苦痛に襲われ悶えるこの時。ほんの一瞬セナの頭をよぎった考えを、後の彼は酷く責めることになる。でも、そんな思いがよぎるのも、仕方がない状況なのかもしれない。

オイラは頑張って勝てなかったのだから、仕方がない。きっと、他の誰かが……特に、炎タイプのヴァイスやホノオなんかが、やってくれるだろう。その考えが脳裏をかすめた刹那、セナの意識は闇に吸い込まれていった。

「ふ。他愛もない」

ハッサムは、セナが気を失ったのを確認すると、ボロボロになったセナの右肩を強く蹴りつけた。にじみ出る鮮明な赤はハッサムの足にも付着したが、ハッサムの体もまた赤色のためさほど目立ちはせず、彼自身、それが付こうが気にとめぬ様子だった。

「セナ～！　助けに来た……ヨ……」

倒れていたセナに急いで近寄ってきたシアンだが、状況をすべて飲み込むと、思わず足を止めてしまう。

「セ、セナ！？」

シアンの視界からたちまちセナ以外のものが姿を消した。再びセナの元へシアンが駆け寄ると、とても直視できないような怪我の有り様が目の前に広がるのだった……。

「……！！」

言葉を失うシアン。そんな彼に背後から話しかけたのは、ハッサムだった。

「仲間が心配か？」

シアンは後ろを向いてハッサムを見据えると、やっと口を開く。

「酷いヨ！　こんなに、ボロボロにしなくても……」

「俺は俺のやり方で戦った。それだけだ」

冷酷極まりない瞳に、シアンの中で怒りが弾けた。

「よくも、シアンのお友達をいじめたなァ！？　許さないヨ！　“バブル光線”！」

シアンが放つ無数の泡は、鋭く輝きながらハッサムへと向かっていった。

柔らかな光に包まれている……。夢の中、セナは不思議な空間に1人立ち尽くしていた。

「素晴らしい。人間の諦めの良さを、見せていただきました」

「誰だ！？」

ふとどこかから聞こえてきた、落ち着いた女性の声に、セナは警戒心を見せた。すると、セナの目の前で光が渦を巻き、声の主は、仮の姿を見せた。

「はじめまして。いや、お久しぶりです、セナさん。ワタシは“ポケモン”と申します」

その存在については、昨夜ホノオから聞いていた。セナとホノオをガイアに送ったポケモンが、“ポケモン”と名乗るこの光の渦。

「あ、あぁ。お前が“ポケモン”か」

神秘的な雰囲気を醸し出し、不思議に落ち着いた声を持つその存在に、少し押されぎみにセナが答えた。

「はい。そうです」

淡々とそう答えると、“ポケモン”は、次の言葉のトーンを落とした。

「やはり、人間は弱い生き物ですね」

「“弱い”って、どうして……」

“ポケモン”の言葉には、何か強い感情が込められている気がした。それは、憎しみか、悲しみか……。

「困ったときは、すぐに他人をあてにするでしょう？　あなただってそうです。もっと自分で頑張れるはずなのに、頑張らない。まだ頑張れるのに、言い訳をして、諦めてしまう。そんな弱さが、ワタ

シは大嫌いなのですよ」

“ポケモン”のその言葉は、セナの心を深くえぐる。

「そうか。ごめんな……」

最低だ。オイラは。オイラが諦めたせいで、ヴァイス達にもしものことがあったら……。

そんなことを考えると、セナの目から一粒の涙が。

「ワタシは、人間が憎いです。とても、とても……」

セナに追い討ちをかけるように冷たい声で言う“ポケモン”。

人間が、憎い……。オイラは、ポケモンが憎くない。むしろ、すごく好きなのにな。悲しくなるのと同時に、どうにかしなくては、と奮い立つセナがいた。

「なぁ、“ポケモン”」

涙を拭いて、セナは“ポケモン”に話しかけた。

「人間が嫌いだなんて、悲しいこと言わないで欲しいんだ」

一見するとただの光の渦で、見た目から感情が読み取れない“ポケモン”だが、表情が曇るように光が暗くなるのが、セナの目に映った。

「ワタシの事情も何も、記憶のないあなたなどには分からない。それなのに、何を図々しい……」

「違うんだ！」

“ポケモン”の言葉を、悲しい表情で遮るセナ。そして、落ち着いた声で“ポケモン”に語りかけた。

「ごめん、怒鳴っちまって。あのさ、ありがとう。大切なこと、教えてくれてさ……」

その言葉を聞くと、光の渦が穏やかになったような気がした。

「今は人間のことを嫌いでもいいよ。でも……、とにかくオイラ、頑張るからさ。頑張って、お前の中の人間のイメージを、変えてみせる！」

微笑みながら、まっすぐな眼差しで自分を見つめるセナに、ほんの少しだけ、“ポケモン”の心が動いた。

「あなたの活躍は、これからも見させていただきます。せいぜい頑張ってください」

その言葉を残して、“ポケモン”は消えてしまった。

「さてと。まずはハッサムを倒さなきゃな。オイラ、1人で……」

そう呟くと、セナの夢がフッと途切れたのだった。

「ハァ、ハァ……」

ハッサムの素早い攻撃に、なかなか反撃ができなかった。
序盤は自慢の逃げ足で、ハッサムの攻撃をかわし続けていた、シアン。しかし、一度攻撃が当たってしまうと、そこから一気に奇襲を受けてしまった。傷ついた体で必死にハッサムから逃げたのだが、ついに追い詰められてしまい、今はあえぎながら、もうろうとした意識の中で岩山にもたれ掛かり、なんとか立っている。彼の背後には、どこか残酷さを感じさせる冷たい岩肌。目の前には、凍りつくような目付きの、殺気だったハッサム。

「来ないで！　“潮水”！」

やけになったシアンは、ハッサムに“潮水”を繰り出して抵抗を試みたが、水流はハサミで容易く弾かれた。

「逃げ惑うのも、ここまでのようだな」

ハッサムは、シアンにギラリと光るハサミを見せつける。
シアンもセナみたいにやられちゃうのカナ？　恐怖に震え、シアンがギュッと目を瞑った、その時。

「させるか！　“アクアテール”！」

その声の直後、ハッサムの頭に衝撃が走り、シアンに向けていたハサミで頭を押さえた。

「ぐっ……」

ハッサムが後ろを振り返ると……

「シアン、大丈夫か？」

右肩をかばうように押さえながら立つ、セナがいた。

「セナ！　大丈夫ナノ！？」

その痛々しい様子には、さすがのシアンも心配せずにはいられなかった。

「おーけーおーけー♪　痛いのは右肩だけだからさ」

ニコリと微笑みながらシアンに言う。

「ありが、と……」

ハッサムの攻撃から免れた安心感により、シアンの体から力が抜ける。

（オイラの方こそ。今まで頑張って戦ってくれて、ありがとな）

シアンが倒れると、セナは心の中で礼を言った。そして、ハッサムを睨み付けた。

「悪いねお頭。やっぱりオイラ、諦めきれなくてさ」

そう話すセナの息は、少し弾んでいた。

「どうやらその右腕を引き裂かれたいみてえだな」

ハッサムがセナに駆け寄りハサミを右肩めがけて降りおろす。セナはそれを避けきれず、左腕を鋭く切りつけられた。いや、避けき

れなかったのではない。どうやらわざと左腕を切りつけられたようだ。

「っ……！」

顔をしかめながら、セナは左腕の痛みに意識を集中した。すると、先程までのどうしようもない右肩の痛みが、それほど気にならなくなった。

「行くぜお頭。“水鉄砲”！」

セナが放った水流は、やはり難なくかわされ、ハッサムはハサミを掲げてこちらに駆けてくる。このままでは、さっきと同じ展開に……。そんな時、セナは動き出した。痛む腕や肩を必死に動かし、素早く甲羅に身を隠す。そして。

「“高速スピン”！」

鋭く回転をしながら、ハッサムに突っ込んだ。

「ふっ。所詮ノーマルタイプの技……」

そう呟く鋼タイプのハッサムには、確かにセナの“高速スピン”はあまり効果がないようだった。しかし、セナは甲羅の中でニヤリと笑う。そして息を吸い込むと、首を引っ込めたまま、思い切り水を噴射した。

「うわ……！？」

強い水の流れにハッサムは飛ばされ、地面に引きずられる。地面

との摩擦により熱が生じ、炎タイプの攻撃が苦手なハッサムを苦しめた。

「くそ……」

ハッサムの体がピタリと止まると、よろよろと立ち上がる。すると、ハッサムの目に飛び込んできたのは……。

「うっ……！」

先程の攻撃で激しく動かした右肩が鋭く痛み、地面に膝をつき悲痛な声を洩らす、セナだった。

「ハハハハ！　どうやらさっきの攻撃は、俺へのダメージよりもお前自身へのダメージの方が大きいようだな！」

「う……ぐっ……！」

必死に痛みに耐えようとするが、荒い呼吸を繰り返す度に傷がうずき、思わずきつく目を閉じてしまう。傷からにじむその色を見ると、嫌というほど痛さが伝わってくる。

「痛いだろ？　辛いだろう？　すぐに楽にしてやるからよ」

ハッサムがそう言うと、彼の周りに激しい空気の流れができた。

そして。

「“かまいたち”！」

風の刃が矢のようにセナに迫る。ハッサムが繰り出す特殊攻撃、

“かまいたち”は、セナの体をえぐるように傷つける。

「っ……う……」

叫ぶ気力さえない体に攻撃の指示を出したのは、強い、セナの想いだった。

（諦めちゃ、駄目だ……！　まだまだ、反撃の……チャンス、が……！）

激痛にうずくまるセナの体が、綺麗に磨かれた鏡のように、太陽の光を浴びて輝いた。

（“ミラーコート”！）

残りわずかの力を体に込めると、セナに突き刺さっていた風の刃が勢いよく跳ね返り、2倍……いや、それ以上の速さでハッサムに迫った。

「ぐわあああぁ！！」

突如強烈な攻撃を浴び、ハッサムは鋭い叫び声をあげた。

……セナとハッサム。しばらく倒れたまま動かなかった両者だが、やがて一方がヨロヨロと起きあがる。

「俺を……。俺を、ここまで追い詰めるとはな……」

“ミラーコート”で強力に跳ね返された“かまいたち”といえど、彼の鋼の体は固かった。どうにかハッサムが立ち上がると、セナに

とどめを刺そうと近寄ってくる。

（今度こそ、おしまいなのか……）

微かに残る意識の中、セナを支えていた心が折れた。そんな時。

「“潮水”！」

突然激しい流れが体に当たり、ハッサムはよろける。

「ぐあ……！」

傷を負った体には、塩分がしみた。

「シアンも……まだ、戦うモン……」

岩肌に寄りかかり、体を支えて立ち上がるシアン。彼の放った“潮水”が、ハッサムに当たったのだった。ハッサムがシアンに近寄る。シアンは倒れそうな体を必死に支える。

「ふ……。いくら俺が傷を負っていようと、お前1人に俺は倒せまい」

そのハッサムの言葉を聞くと、ビクリと目を瞑るシアン。しかし、その直後、ハッサムの勝利の確信を打ち砕く声が聞こえたのだった。

「残念でした。シアンは1人じゃないんだよ♪」

「忘れてもらっちゃ困るんだけど」

不敵な笑みを浮かべて、ヴァイスとホノオがハッサムに近寄って

くる。ソプラが採ってきたオレンの実ですっかり体力を回復し、余裕の表情だ。

「なっ……。スリーパーと、エテボースは、まさか！？」

「その“まさか”だ。楽勝だったぞ！」

「キミも、覚悟してね！」

ハッサムの言葉を途中で遮り、ホノオとヴァイスは得意気に言う。

うろたえるハッサム。対するヴァイス、ホノオ、そしてシアン。

その様子は、消えゆく意識の中で、聴覚で拾い上げた。

（みんな……。ごめん……）

ボロボロの体。折れそうな気持ち――。とうとう耐えきれず、セナは静かに気を失うのだった。

柔らかなさざ波の音が、セナに優しく語りかける。

「ん……」

そっと目を開けてみると、セナの視界に３つの笑顔が飛び込んできた。

「あ、セナ！　よかったぁ～！」

「心配したんだぞ！」

「怪我は大丈夫ナノ？」

ヴァイス、ホノオ、シアンが、セナの目覚めに喜び、口々にセナに話しかけた。

ここは、サメハダ岩。空には星が輝いている……。あれ？　スライは？　ハッサムは？

状況が飲み込めず、セナは戸惑う。

「みんな……」

呆然とそう言うセナの心情を察したのか、ヴァイス達は説明を始めた。

「スライの奴らはみんな倒したよ！　それから、救助隊バッジを使って本部や保安官に連絡して……」

嬉しそうに、ヴァイスが話す。

「見事、オレ達キズナは奴らを捕まえたんだぜ♪」

弾けるような笑顔を見せるホノオ。

「でも、セナが酷い怪我をしちゃったから、急いでサメハダ岩に戻ってきたんだヨ」

シアンのその言葉で、セナは思い出す。怪我？　そうか、ハッサムにやられて……。恐る恐る、右肩に触れてみた。

「いッ……！」

鋭利な何かに突き刺されたように、肩に痛みが走る。それに、“かまいたち”で傷だらけの体も、少し動かしただけで悲鳴を上げた。セナが顔を歪めると、3人は心配そうにセナを見る。

「やっぱり痛いよね。とりあえず、包帯は巻いておいたんだけど……」

なるほど。ヴァイスに言われて自分の右肩を見ると、白い包帯が規則的に、綺麗に巻かれている。

「上手でしょ？　ついさっきまで、ここにソプラとアルル、それから、キラロにキララもいたんだけど……」

オイラは、キラロ達にまで、心配かけたんだな……。ヴァイスの言葉を聞きながら、こんなことを思った。

「この包帯は、ボクとアルルが巻いたんだよ！　だって、他の子が巻けると思う？」

ヴァイスはホノオとシアンの方を見て、2人をからかうようにそう言う。

「し、失礼な！」

「シアンだって巻けるもん！」

ホノオとシアンはヴァイスに猛反発し、彼の頭をひっぱたく。

「いたーい！」

思わず叫ぶヴァイスだが、楽しそうにじゃれあう3人。みんな…

…。オイラを元気付けるために――オイラなんかのために、こんなに明るく振る舞ってくれてるのかな？

「ごめん、みんな……」

胸が押し潰されそうになったセナは、うつ向いてポツリと言葉を発した。とたんに静かになり、ヴァイス達はセナに注目する。

「情けねぇな、オイラ。助けられてばっかりで。オイラが一番、しっかりしなきゃなんないのに……」

かすれそうな、弱々しい声で、セナは話す。

「何言ってるのさ」

セナに歩みよるヴァイス。

「セナは、あのハッサムにあそこまでダメージを与えたじゃない！ボクらが今、明るく『勝った！』って言えているのは、セナのお陰なんだよ？」

ヴァイスは、悲しそうな声でそう訴えた。

「なぁセナ。誰もお前を責めやしないんだからさ……。頼むから、自分を責めるのだけはやめてくれないか？」

ホノオのその言葉は、セナの心の奥深くで強く響いた。前にもこんなことを言われたような……。よく分からないけど、懐かしい気持ち。

「……うん」

ヴァイスとホノオの言葉を聞いて、今にも泣き出しそうな震えた返事をし――それでも、必死に涙をこらえている、セナ。彼の性格をよく知るヴァイスとホノオは、泣き出さないようにと温かく見守っているのだが……。

「な、泣かないで、セナ！」

場の空気を読めぬシアンのその言葉で、セナの我慢の糸がプツンと切れてしまった。

「う……」

泣くなんて情けないよ……。そう思って、泣かないように頑張ったのに。

一度溢れてしまった涙を、止める方法をセナは知らない。ぽろぽろと涙を流す彼を、ヴァイスとホノオはおろおろと見つめている。泣かせた直接的な原因であるシアンは、よしよしとその頭を撫でるのであった。

＞ｉ２４７５６―４３４＜

セナとヴァイスの、初めての依頼達成の地である、クローバーの森。この中にある小さな小屋が、ソプラとアルルの家だった。月明かりに照らされた、桃色の可愛らしい屋根の下で、電気タイプのポケモン４人が話をしていた。

「ア・ル・ル♪　ヴァイスとどんな感じだったんだ～？」

ソプラがアルルの背中をつつきながら、そう質問する。

「えーっ！　それはぁ……えと……」

たちまちアルルの頬が赤くなる。

「相変わらず、ヴァイスさんはちょっと鈍いけど……。でも、けっこういい感じだった……かな？」

「おおーっ、イイねぇイイねぇ～！」

アルルの言葉を聞くなり、はしゃぎだすソプラ。その様子を見て、相変わらずだなと思い、クスリと笑いあうキラロとキララであった。

「も、もう！　恥ずかしいよー！　それで、そっちはどうだったの、ソプラ？」

「……へ？」

突然のアルルからの問いかけに、ソプラは明らかな動揺をみせる。

「ば、バカじゃねぇの！？　いくら守ってくれたからって、アタシはあんなクソザルなんか、好きになんねえぞ！？」

ふーん……。ソプラって――。そうだったんだぁ♪　アルルはそう思いながらニヤリと笑う。

「あのさ、ソプラ。ボクは、エテボースとのバトルについて聞いたんだけど……」

「えぇっ！？」

ソプラは先程の、ピントのずれた受け答えを後悔し、徐々に頬が赤くなる。アルルにうまくはめられたようだ。

「なななんだぁ♪　そーんなことかぁ♪　あんな奴、アタシが一瞬で倒したからな！」

胸をはってそう答えるソプラに、キララが歓声をあげた。

「すごいでちゅ！　ソプラお姉ちゃん！」

「へっへーん♪　だろ？」

恥ずかしさを振り払うように、大袈裟に威張ってみせるソプラ。そんな不自然な様子の彼女を見て、アルルとキラロは意味ありげな笑みを浮かべるのであった。

忙しい1日も終わり、サメハダ岩にて眠りにつくセナ達。その夜、セナの夢の中に、再び光の渦――“ポケモン”が現れた。

「なぁ、“ポケモン”」

「何ですか？」

セナの呼び掛けに、“ポケモン”が応じる。

「結局オイラ、みんなの助けを借りちまった。弱い人間で、ごめん……」

救いの勇者だなんだと言われているのに、オイラはハッサムすら倒せないんだ……。すっかり自信をなくしたセナは、誰にも言えない悩みを、不覚にも“ポケモン”に打ち明けたのだった。

「セナさん……」

心なしか、柔らかさのこもった声で、“ポケモン”は語りだした。

「強さ、弱さとは、決してバトルについてを言うのではないのです。大切なのは、心の強さ。あなたに、自分の力で困難に立ち向かう強い意思があったからこそ、仲間が期待以上の協力をしてくれたのですよ」

分かったような、まださっぱり分からないような……。でも、不思議と元気付けられる言葉を言われた気がした。

「あぁ。ありがとう！」

この後も、2、3の会話をやり取りしたセナと“ポケモン”なのだが、その会話の内容は、朝が訪れる頃には、すっかり思い出せない記憶の彼方にあるのであった。

第9話：頑張れリーダー！――その6（後書き）

繋ぎの話なのに、なんだか無駄に時間がかかった、今回の話です。

ギリギリ勝利の戦闘シーンが書いていて楽しくて、つい……（汗）

第１０話：昇格試験――その１（前書き）

一度は気絶したオイラだけど、“ポケモン”に気合をかけられて、もう一度ハッサムに向かったんだ。それでも、かなわなくて……結局、ヴァイス達がハッサムを倒してくれた。

その夜、リーダーなのに……使命があるのに……って自信を無くしたオイラを、みんなが慰めてくれた。みんなの前じゃうまく言えないけど、すごく嬉しかった。

……あっ、そうそう。オイラが泣いたことは、誰にも言わないで欲しい！

（語り：セナ）

＞ｉ１１８９５―４３４＜

第１０話：昇格試験――その１

ゼニガメになった元人間の少年セナと、ヒトカゲの少年ヴァイスが結成した救助隊キズナ。このチームに、セナを追って人間からヒコザルになった少年ホノオと、一応男の子のポッチャマのシアンが加わってから、だいぶ時間が経過した。盗賊団スライとの戦闘で深く傷ついたセナの右肩もゆっくりと治っていき、やがては“冷凍パンチ”が再び使えるようになった。

また、４人でチーム登録をしてからも、数々の依頼をこなしてきた、キズナ。時には新たな仲間と出会い、長き冒険へと旅立った。

「元気にしてるかな。“あいつら”」

旅が終わって久々にサメハダ岩へと戻ってくると、セナは星空を見ながらそう呟く。出会って共に冒険した、数々の仲間を想いながら。

「うん。きっとね！」

ヴァイスがセナに答えると、流れ星が空を駆ける。４人はそれを見ると、明日への希望に胸を踊らせるのであった。

キズナの救助隊としての能力もだいぶ高まってきたある日の早朝。サメハダ岩の入り口付近に置かれている木製のポストに、ペリッパーが水色の、救助依頼の手紙の便箋よりも大きな封筒を運んできた。

「頑張るんだよ。キズナ♪」

ペリッパーはそう言うと、別の便箋をくわえて、それをどこかへと運ぶべく、飛んでいってしまった。

「起きろー！　セーナーッ！！」

朝日が差し込むサメハダ岩で。その日の朝、先程シアンに無理やり起こされたホノオが、憂さ晴らしをするかのごとく、まだ起きぬセナを怒鳴り付けた。

「んー……？」

セナは薄目を開けるが、再び彼の意識は眠りの世界へと落ちてゆく。

「まったく、セナってば……」

セナと出会ってから時々経験したこんな朝の出来事に、ヴァイスはため息をついた。

「しょうがないや。自業自得だからね？　セナ……」

ヴァイスはそう言うと、セナの尻尾を思い切りつねった。

「うぎゃあぁぁ！？」

たちまちセナは飛び上がり、奇声をあげた。こうして、彼らの忙しい1日が幕を開けるのであった。

その後４人は朝食のリンゴを食べ、救助活動を開始するために行動し始めた。まず、いつもの日課となっている、ポストに依頼の手紙が入っているかどうかのチェックをしたのだが……。セナがポストに手を突っ込むと、なにやら慣れぬ感触が。

「うん？」

それをポストから出してみると、表面がざらざらした、大きな水色の封筒だった。早朝にペリッパーが運んできたものだ。

「なんだそれ？」

ホノオがそれを見て、不思議そうな顔をする。

「シアンへのファンレターカナ？　水色だしネ！」

他の３人は、その言葉を冗談ととらえアハハと笑うが、シアンは至って真面目に言ったつもりだった。

「さぁーて♪　なんでしょー？」

セナは、そっと封筒から手紙を取りだし、みんなに隠すようにそれに目を通す。

「おぉっ！？」

それを見た瞬間、セナの目に歓喜の色が宿る。

「なになに？」

ヴァイスが目を輝かせてそう言うが……。

「おーしーえーなーいー♪」

セナは舌を出してふざけてそう言うと、手紙をたたみ始めた。

「あ、そう。じゃあ……」

ヴァイスはそう言うと、深く息を吸い込んだ。“火炎放射”の合図だ。

「ま、待て！　言う！　言うから！」

セナは焦ってヴァイスの攻撃の動作を止めると、手紙の内容を話し始めた。

「試験だ！　オイラ達キズナの、ランクアップのための、昇格試験だー！」

「うそ……？　ホントに！？」

セナが拳を空に向かって突き上げ、嬉しそうにそう言うと、ヴァイスも目を輝かせて聞き返す。

「試験って、なんだ？」

「さあネ」

ホノオとシアンは首をかしげる。

「ホノオ、シアン。よーく聞け！　オイラ達の救助隊ランクは、今は初心者レベルのノーマルランクなんだ。でも、この試験をクリアしたら、ひとつランクがあがって……。えと……ペリッパー、ランク……になるんだっけ？」

セナは、ヴァイスと共に救助隊チーム登録をしに行ったときにペリッパーから受けた説明をホノオ達に話そうとしたのだが……。後半部分には自信がないのか、だんだん声が小さくなった。

（そういえばセナ、あの時寝てたからなぁ……）

ヴァイスは呆れてセナを見ると、セナの説明に付け足した。

「この世界では、救助隊ランクは、ノーマル、スーパー、ハイパー、シルバー、ゴールド、マスター……の順に高くなるんだ。ランクアップのためには、救助隊連盟から出される試験に合格しなきゃいけないの」

「ランクが上がったらどうなるんだ？」

ホノオはヴァイスに問いかける。

「ちょっと有名になるから依頼が受けやすくなるよ。あと、依頼を済ませた後にもらえるポケが増えるんだ」

この世界では、依頼成功の知らせを本部に届けると、次の日の朝にポストにお金――単位はポケ――や依頼主からのお礼のアイテムが届く仕組みなのだが……。どうやらその、ポストに届く金額が少し増えるようだった。

「すごーい！　さっ、早く試験を受けようヨ！」

シアンがそう言うと、皆が強く頷く。

「うん！　まずはノーマルの次のスーパーランクを目指して、頑張ろー！」

「おぉーっ！」

ヴァイスが号令をかけると、ホノオとシアンもそれに乗った。セナはただ1人、「そうか、“スーパーランク”だったか」と呟き、顔を赤くしたのであった。

＞ｉ２４７５７―４３４＜

先程の封筒には、試験の詳しい内容と、ガイアの地図――すでにヴァイスがひとつ持っていたので、こちらはセナの青いバッグにつめた――が入っていた。４人は地図を見ながら、試験が行われる場所へと向かったのであった。

救助隊連盟本部がある丘を越えると、救助隊活動のために作られた森、“救助の森”が広がる。ここにはランクアップの試験会場であるダンジョンがいくつか作られ、また、救助隊によって捕まえられたお尋ね者ポケモン達を更生させる施設、“ポケモン警察署”がある。おそらくセナ達が捕まえた盗賊団スライの４人も、この施設の中に……。そう思うと、施設の前を通る際に気分が良くなったセナ達４人であった。

そして、森の中を少し歩くと、『救助隊昇格試験……ノーマル↓スーパー』と書いてある木製の看板の近くにある、大きな穴が空い

た大樹を見つけた。苔むして、幹がかなり太い、立派な大樹だ。

「この樹の中で、オイラ達の試験が……」

目的地にたどり着くと、セナは大樹を見上げてそう呟く。

「手紙によると、この樹の中を探検して、“葉っぱの宝石”っていうアイテムを見つければいいんだね？」

ヴァイスが封筒の中に入っていた、試験の詳細を書いた手紙を読みながら言う。

「あぁ」

セナはそう答えると、ヴァイスが読んでいる手紙を覗き込む。

手紙に書かれていたことは……。大樹の穴に入って探検し、葉っぱの宝石を見つけて、救助隊連盟本部に持ち帰る。それで、試験に合格となり、ランクアップの手続きが済むということ。

手紙の最後の方の文章を、セナは読み上げた。

「『この試験には、先輩の救助隊も協力してくれるんだよ♪　彼らにも感謝して、試験合格をめざして頑張ってくれッ！』……だってさ」

テンションの高い文体は、おそらくペリッパーがこれを書いた故であろう。ただ、気になるのは……。

「“先輩の救助隊”って、きっとランクが上の救助隊ってことだよね？」

ヴァイスがそう言うと、セナは真剣な顔つきで頷く。

「“協力”って、どんな意味なんだろうな？　もしかして……わっ！」

セナが、自分の考えた“協力”の意味を言おうとした瞬間、ホノオに背中を押されてバランスを崩しそうになった。

「まぁまぁお2人さん。そう固いこと言わずにとっとと試験始めようぜ？」

「探検探検♪　わーい！　ワクワクしてきたヨ～♪」

ホノオはセナの、シアンはヴァイスの背中を押しながら、大樹の穴へと近づいてゆく。

「わわっ、分かった！　自分で歩くから、押すなっての！」

今にも転びそうなセナは、焦ってホノオに押すのを止めさせた。それと同時に、シアンもヴァイスの背中を押すのを止めた。

「ったく。てめーらはもっと、落ち着けよな？」

ため息混じりでそう言うと、セナは先頭に立って穴へと向かう。そして、セナが穴の中へと入ったとたん……。背筋がゾッとするような、心臓に悪いような。妙な感覚がセナを襲う。

足元を見ると、その感覚の意味は容易に理解できた。

「うわあぁー！」

突如悲鳴をあげ、姿を消すセナに、ヴァイス、ホノオ、シアンは驚く。そして、急いで穴へと駆け込んだのだが……。足場が、ない。

「うわぁ、落ちるーっ！」
「いやっほー♪　たーのし～♪」
「キャアーっ！」

ヴァイスとシアンの悲鳴。それから、ホノオの歓喜の声は、セナの後を追って暗い穴の底へと吸い込まれていったのだった。

第１０話：昇格試験――その２（前書き）

救助隊活動を頑張っていたボク達に、ついに昇格のチャンスがやってきた！　……もう、セナってばぁ。今のノーマルランクの次はペリッパーランクじゃなくて、スーパーランクだよ！

さて。試験会場の不思議な大樹に向かったボク達だけど、さっそく穴に落ちちゃった！　――楽しんでる子が１人いたけどね。

どうなっちゃうの？　ボク達。

（語り：ヴァイス）

第１０話：昇格試験――その２

「いてっ！」

重力によって、地面に体を叩きつけられたセナは、辺りを見回そうと顔をあげるが……。

「はうっ！？」

背中にのし掛かる何かのせいで強い衝撃を受け、変な声をあげると目を回してしまった。

「いてて……」

セナの背中の上で、強く打ったお腹を押さえるヴァイス。その横には、うつ伏せに着地して顔面を強く打ったシアン――右側の頬が妙に赤く腫れている――と、ストンとうまく着地したホノオの姿が。

「みんな、一応無事みたいだね」

ヴァイスがホノオ、シアンと目を合わせてそう言うと、

「お前の足元の奴はそうでもなさそうだがな」

ホノオはセナの元へと歩みより、その顔を覗き込むが、セナは地面にぴったりと顔をつけ、意識が飛んでいるようだった。

「ふぇっ！？　あ、ごめんセナ！」

ヴァイスは慌ててセナの甲羅の上から降りた。

「あうぅ～……」

ホノオがセナを抱き起こして顔を覗き込むと、くらくらと目を回していた。

「おーい、起きろー！」

ホノオがセナの頬をぺちぺちと叩きながら言う。反応がイマイチなので頬をつねってみると、セナはハッと気付いて目を開けた。しかし……。

「いてーよバカ！　てめぇ、それが人の背中にのしかかった後の態度か!?　食らえ、“アクアテール”！」

「ちょっ、ちがっ……！　うぎゃあああ！」

うまく着地して外傷がほとんどなかったためなのか、ホノオはセナに誤解され、とんだとばっちりを受けてしまった。

「痛い～痛い痛い痛い～……」

それからしばらくして……。あの後ホノオに怒りの反撃を食らったセナは、頭にできた大きなコブをさすりながら、先頭を歩く。

「てめぇが悪いんだぜ、馬鹿野郎……」

ホノオがセナを睨み付けてそう言った。

（ボクが乗ったって、セナにバレなくてよかったな……）

先程のホノオには悪いが、そう思ってしまうヴァイスだった。

辺りを見回しながら、４人は歩く。大樹の穴は真っ暗だったのに、どうしてだろうか。今歩いている場所は、陽の光も差し込んでいないのに、しっかりと明るかった。

ちなみに、さっき穴から落ちた後、落ちた場所から地上に出ている穴の入り口までに、はしごがかかっていることに気が付き、４人は激しく落胆した。注意深く、周りを見ながら歩いていこうと心に決めたのだった。

「なんだか不思議なところだネ～」

シアンが、さっきから歩いている、トンネルのような通路を見て言った。

「ボクらがさっき落ちたってことは、ここは地下だよね？　もしかして、アリの巣みたいに地面を掘って、こんな通路を――ダンジョンを、作ったのかなぁ？」

ヴァイスの推理を、セナは首を振って否定する。

「いいや。壁をよく見てみな。木でできてるだろ？　オイラ達はさっき、この樹の幹に空いた穴から落ちた。ってことは、樹の内部にいるのには間違いねぇ。きっとここは、樹の根の中をくりぬいて作った通路なんだよ」

セナがもっともらしい答えを述べると、何を思ったのか……。シアンは突然壁に向かって水を噴射した。

「うわっ、危ねぇ！　何やってんだよ、シアン！」

危うく水流が当たりそうになったホノオが、シアンを怒鳴り付けた。

「だって～。ここが根なら、お水をいーっぱいあげなきゃネ♪」

「普通根の中からお水あげるかなぁ？」

シアンが行動の理由を話すと、ヴァイスが少し控えめに突っ込んだ。

「そもそも、根や幹が空洞なのに、何でこの樹は生きているんだ？　セナ」

「うえぇっ！？」

そんなこと聞かれても……と言わんばかりに、セナは驚いて声をあげた。

「あれ？　答えられないの？」

挑発するかのように、ホノオはニヤリと笑ってセナを見る。

「しっ、知るかそんなモン！」

セナは機嫌を損ねたようで、ぷくりと頬を膨らませると、先へと

歩いていってしまった。

はじめのうちは、ただの木でできたトンネルのような通路だったのが、しばらく歩くと違ってきた。徐々に、足元には短い草が生えて、所々に葉っぱの茂みがあり……。神秘的な雰囲気も醸し出していた。

「あーっ、お花だ～♪」

シアンが、茂みの中にポツンと生えた2つの赤い花を見て、嬉しそうにそれに近寄る。

「アイツの花好きも、女以上だな……」

ホノオは呆れた様子でその姿を眺めた。

「ねっねっ♪　このお花、なんていうお花なのカナ～？」

シアンがその花を手でつつきながら、目を輝かせてそう言うと、

「“キレイハナ”っていう花よ！」

茂みの中から答える声が。

「え？」

セナ達4人の疑問の声が重なった。次の瞬間、シアンが触れてい

る赤い花から黄色い粉が出てきて、シアンに降りかかった。

「ケホケホ！　なにコレー！？」

突然の出来事に驚き、むせながらシアンが叫ぶ。すると、茂みがガサガサと音をたてると、３人のポケモンが飛び出してきた。

「軽率な行動はダメよ、シアン。ようこそ！　救助隊キズナ」

飛び出してきたポケモンのうちの１人。先程シアンが触っていた２つの赤い花を頭につけた、キレイハナという可愛らしいポケモンの言葉だった。

「僕らはスーパーランクの救助隊、“フローラル”」

彼ら３人のチーム名を名のるのは、イタチのような見た目の水ポケモン、フローゼルだった。心なしか、彼の種族名とチーム名が似ている気がして滑稽であった。

「俺達が、お前らの試験を手伝ってやる！」

荒い口調でこう言ったのは、意外にも、そのチームフローラルで唯一進化していない地面タイプのポケモン、サンドだった。アルマジロのような容姿で、他の２人より幾分か体が小さい。

「あっ、フローラルの皆さんじゃねぇか！　いやぁ、シアンはいっつもこうで、オイラ達にも止められないのさ」

どうやらセナ達もあちらの先輩チームを知っているらしく、親しげに声をかけた。

「“手伝い”って、どんな手伝い？　まさか、ボク達の仲間としてこのダンジョンを冒険してくれるの？」

ヴァイスの目がキラキラと輝くが、彼の期待は見事に散ることに。

「いいえ。その逆よ」

キレイハナがそう言うと、３つのアイテムを取り出してセナに投げた。

「おっと！」

１つは右手、もう１つは左手。最後の道具はセナの口の中へと入ってしまった。

「あっ、食べちゃった！」

ヴァイスが思わずそう叫ぶと、セナは舌を出して苦笑いする。

「私が今渡した３つのアイテム、“癒しの種”と“透明の玉”。それから“邪悪な種”。これらをうまく使って、私達に勝つのよ。それが、あなた達の昇格試験での課題、“戦闘試験”」

「なるほど。アイテムの知識もないと勝てないって訳ね」

キレイハナの言葉に、セナは頷く。自分の右手には、状態異常を治す、癒しの種。左手には、しばらくの間姿を消して透明になれる、透明の玉。と、いうことは……。

「あああーっ、しまったぁーッ！」

思わずセナは、頭を抱えて叫び出す。先程セナが食べてしまったのは、邪悪な種。食べると攻撃力がどん底まで下がる、本来であれば敵に食べさせる道具なのだ。ヴァイスはセナが叫んだ理由が薄々分かったようで、セナを慰めようと、彼に近寄る。状況がよく分かっていないホノオも、とりあえずセナの元へと近寄るのだが、シアンが来ない。

「おーい、シアン？」

ヴァイスがシアンの方を見て名前を呼ぶと、シアンは辛そうな表情を浮かべていた。

「ヴァイス。癒しの種ちょうだい。シアン、さっきの黄色い粉を浴びて、痺れちゃったみたい……」

それで、体を動かしたくても動かなかったのだ。ヴァイスはシアンの元へと癒しの種を持っていくと、食べさせた。ここまでで、バトルで使うはずだったアイテムを2つも使用してしまった。

集合したキズナの４人とフローラルの３人が、互いに睨み合う。

「フロラさん。オイラにわざと邪悪な種を食べさせたな！？」

相手がランクが上の先輩であろうと、さすがにフロラ――アイテムを投げた、キレイハナ――への不満がおさまらないようだ。

「フフフ。残念ながら、仕組んだわけじゃないのよね。偶然よ。避けるなりなんなりすれば良かったでしょう？　まぁ、その透明の玉を上手く使って頑張ることね！」

「くっ……」

キレイハナのフロラが言うこともっともであり、セナは悔しそうな顔をした。

「とにかく、早くバトルを始めようか！」

フローゼル――彼の名前は“フロウ”――がそう言うと、キズナの４人は構えた。

「さて、そっちからいいぜ。かかってきな！」

サンドの“サハラ”がそう言うと、セナ達４人は一斉に動き出した。

「“火炎放射”ーっ！！」

ホノオとヴァイスは、キレイハナのフロラに“火炎放射”を放った。

「フロラ！」

フローゼルのフロウがそう叫ぶと、口から水を噴射して、２人の強い火炎を打ち消してしまった。

「ちっ……」

舌打ちしたホノオを、フロラは怒鳴り付けた。

「ちょっと！　乙女に対して1対2とは何事なの！？」

乙女とは思えない剣幕だ。

「うるせぇ！　卑怯なクソババア！」

「なっ！　なに言ってるのさホノオ！」

先輩の救助隊メンバーに暴言をはくホノオを、ヴァイスは焦って制しようとした。しかし、ホノオのその言葉をバッチリ聞いたフロラが憤慨しない訳がなかった。

「フロウ。悪いけどヴァイスの相手をしてやって。私はこの猿をズッタズタに引き裂かないと気が済まないの……」

恐ろしい言葉を口走るキレイハナのフロラに、フローゼルのフロウはゾッと寒気がして、ただコクコクと頷いた。

一方、体の痺れもとれたシアンは、サンドのサハラに向かって“バブル光線”を放った。

「くっ。“すなかけ”だ！」

サンドのサハラが地面を蹴ると砂が生じ、それが無数の泡に当たると、泡がバチバチと弾けてしまった。

「行くぜシアン。“スピードスター”！」

サハラが、避けることなどできない星形の光線を、シアンに向けて素早く放つ。

「きゃあ！」

シアンは思わず目を瞑る。そんなシアンと、彼に迫る“スピードスター”の間に立ちはだかったのはセナだった。

「“守る”！」

セナがそう言うと、柔らかに輝く光の壁がセナとシアンを攻撃から守った。

「ありがとう、セナ！」

シアンは目を開けて、セナに礼を言った。

「あぁ。良いってことよ！　このバトル、どうやらオイラは攻撃では役立たずらしいからな。守りに徹するさ！」

セナがそう言った直後、サハラがニヤリと笑って言う。

「だが、その技“守る”は、あまり何度も使えない技だぜ？　さぁ、どうする！？」

サンドのサハラは爪を尖らせると再びシアンを狙い始めた。

「食らえ！　“切り裂く”！」

サハラが腕を大きく振って爪で切り裂いたのは、シアンではなく、再び立ちはだかったセナ。腕を交差させて、攻撃を受けていた。

「体をはってみんなを守る。それがリーダーの役目。……なんてネ」

セナはウインクしてそう言うと、サハラと距離を置く。カッコつけて慣れぬセリフを言ってみたためか、恥ずかしそうに笑った。そして、心配そうなシアンを見て、ある技を使った。

「“アクアリング”！」

セナが、水の力が宿った明るい青色の光の輪をまとうと、腕に受けた傷が少しずつ治ってゆく。

「ふあぁ……。これで、守りも完璧ですっ♪」

あくびをしながらそう言うセナは、まだまだ余裕の表情だ。

「あくびするたぁ、なめやがって……。おらぁ！“転がる”！」

バトル中にあくびをする態度が、彼は気にくわなかったのだ。しかし、あれはセナの技なのだから、仕方がないのだが。怒ったサンドのサハラは体を丸め、勢いよくこちらに迫ってくる。

「シアン、“渦潮”だ！」

「ウン！」

何故かポケモントレーナーのようにシアンに命令するセナ。彼の指示を受けると、シアンは自らの体に水をまとい、体を回転させて流れをつくる。そのまま転がっているサハラにぶつかると、互いの回転が勢いを弱め合い、攻撃は相殺された。ダメージが多いのは、苦手な水を体に浴びた、地面タイプのサハラのようだ。なんとか彼

は立ち上がるが、その直後、バランスを崩す。

「くっ……体に、力が……入ら、ねぇ……」

そこまでのダメージはないはずのサハラが、パタリと倒れてしまった。

「へへーん！　使えるねぇ、“あくび”♪」

どうやらサハラは、先程セナが使った技“あくび”を見たせいで眠気を誘われ、倒れたと言うよりも、眠ってしまったようだった。

「さぁ、とどめをさすヨー♪」

シアンが眠っているサハラを見て息を吸い込むが、慌ててセナが制する。

「ま、待て待て！　さすがにそんな容赦ない真似はできねえよ！ヴァイス達に加勢しよう！」

セナがそう言うと、はーい、とシアンが返事をし、2人はヴァイスとホノオの元へと向かったのだった。

第１０話：昇格試験――その３（前書き）

試験の途中にきれいなお花を見つけたんだけど、そのお花は“キレイハナ”――じゃなくて、フロラさんだったヨ！

なんかバトルをすることになったんだけど、セナがシアンを助けてくれて、シアンはサンドのサハラさんを倒しちゃった♪

さーて、ヴァイスを助けなきゃネ！

……え、ホノオ？　誰それ。

（語り：シアン）

第１０話：昇格試験――その３

「う……ぐ……」

ゆっくりと近づいてくるフロラを、ホノオは苦痛の表情を浮かべて睨み付ける。意外なことに、ホノオは草タイプのキレイハナであるフロラ相手に苦戦していた。先程、力自慢の左腕を使い、強力な“炎のパンチ”をフロラに撃ち込んだホノオだが、その際にフロラが使った“痺れ粉”を吸い込んでしまい、体が痺れて動かなくなってしまったのだ。

「ウフフ。お猿さん？　さっきのダメージ、きっちりと返してもらいますからねぇ？」

ダメージのせいであえぐフロラだが、その口調は恐ろしい。

『猿じゃねぇよ！』と反論する余裕も、ホノオには残されていなかった。

「エネルギーをいただくわ！　“ギガドレイン”！」

ホノオに触れたとたん、フロラの体が緑色に輝き、ホノオからエネルギーを吸い取る。

「うっ……！」

草タイプの技“ギガドレイン”は、単発ならホノオには大した打撃にはならない。しかし、痺れで反撃のできぬホノオは連続で“ギガドレイン”を浴び、確実に体力を奪われた。それと対称に、徐々

に体のやけどが治るフロラ。ホノオが大ピンチに陥った、その時。

「きゃっ！」

突如フロラは叫び声をあげ、攻撃は中断される。ホノオが前を見てみると、何故かフロラの動きが極度に鈍くなっている。

「体が重い……。何なの？」

特に何がのし掛かっているというわけでもないのだが、フロラは必死に“何か”を振り払おうとしている。しばしホノオがキョトンとしていると、フロラの頭上から聞き慣れた元気な声が聞こえてきた。

「ピンと来ねぇのか間抜けなクソザルよぉ。しゃーないから教えてやるぜ！　セナだよ。オイラが透明の玉を使って、姿を消してフロラさんを押さえてるんだ！　分かったら、今のうちにとっとと攻撃しやがれバカ猿！」

セナの、馬鹿にしたような口調のせいで、ホノオは怒って頬を膨らませる。

「うっ、うるせーバカセナがぁーッ！」

その言葉と同時に、ホノオは“火炎放射”を放つ。彼がピンチであったせいか、火炎の勢いは凄まじいものだった。

「キャーッ！！」

フロラは悲鳴をあげ、燃え盛る炎が収まると、黒焦げになってバ

タリと倒れた。そして、それと同時に透明の玉の効果が切れて、フロラ程ではないが、体が焦げたセナが。

「てっ、てめぇ！　無茶しやがって！」

ホノオが、フロラと共に“火炎放射”を受けて傷を負ったセナに心配そうに駆け寄った。

「大丈夫か？　痛くねぇか？」

ホノオがそっとセナの傷口に触れてみた。

「いたたたッ！！　な、何すんだバカ野郎！」

よほどしみたのか、セナは顔をしかめた。

「これぐらい自分で治すからさ。“アクアリング”！」

セナが“アクアリング”を使うと、少しずつやけどが癒えていく。

「オイラの心配するよりも、テメーの頭ン中を心配しやがれ、バーカ♪」

セナが舌を出し、コンコンとホノオの頭を叩く。

そういえば、さっきオレにあんな暴言吐いたのは、オレがフロラをセナもろとも攻撃しやすくするためだったのかもな。そう思ったホノオは、今度は言い返しをせず、自分の頭を背伸びして叩く小さなゼニガメを、微笑んで見るのであった。

フローゼルのフロウは水タイプ。ただでさえ相性が良くないのに、先程炎タイプの技の威力が落ちる“水遊び”を使われて、ヴァイスは大苦戦していた。

「ヴァイス、いくよ！　“アクアジェット”！」

フローゼルのフロウは水をまとい、ものすごいスピードでヴァイスに迫る。

「うわぁ！」

その攻撃に、ヴァイスは思いきり弾き飛ばされた。ちょうどその時、サハラとの戦いを終えたシアンがこちらへと駆けてきた。

「ヴァイス～、助けに来たヨ――キャアアァ！！」

セリフの途中で、猛烈な勢いでこちらに飛ばされてきたヴァイスを見つけて叫び声をあげるが、すぐにヴァイスの背中がシアンのお腹にのし掛かる。

「いたた……。あっ、シアン！」

自分の下敷きになるシアンを見て、ヴァイスは驚いて声をあげた。

「ごめんねシアン。ボクを守るために下敷きになって……」

（いや、違うんだけどナ……）

自分を見ながら目に涙をためてそう言うヴァイスの声に、目を回すシアンは心の中で突っ込んだ。

「ありがとうシアン！　ボク、シアンの分まで頑張るからね！」

少々大袈裟なセリフを喋ると、ヴァイスはフロウに向かっていく。

「炎タイプの技がダメなら、これでどうだ！　“竜の怒り”！」

ヴァイスが両手を広げると、地面から竜を型どった衝撃波が出てきて、噛み付くようにフロウを襲う。

「うわぁぁ！！」

これはフロウにも効いたようで、ヴァイスは少し得意気な顔をした。

「さ、さすがヴァイスだね。攻撃の種類が豊富だよ」

立ち上がってヴァイスをほめるフロウ。

「え、えへへ♪」

ヴァイスは照れて、嬉しそうな、恥ずかしそうな顔をした。

「よーし、“煙幕”だぁ！」

ほめられて、さらに気合いの入ったヴァイスは口から黒い玉をはくが、フロウはそれをかわす。

「僕だって負けないからね！　“渦潮”！」

「えっ……。うわ！」

“煙幕”を使って隙ができたヴァイスを、フロウは水流を操り締め付ける。――シアンが使う“渦潮”とは違う技の使い方をしたようだ。

「うっ……」

苦手な水が体にきつく巻き付き、ヴァイスは苦しそうな表情を見せた。

「よし！　次で決めるよ、ヴァイス！」

フローゼルのフロウは息を大きく吸い込んだ。

「くっ……。“煙幕”！」

ヴァイスは拳を握りしめ、攻撃体勢に入り隙ができたフロウに“煙幕”を放つ。

「うわっ、やられた！」

今度はしっかりヒットして、フロウの周りに黒い煙が漂う。ヴァイスが固く握る拳は、徐々に熱を持ち、“水遊び”のせいで弱くなった炎が宿る。

（頑張んなきゃ……。“煙幕”が晴れる前に！）

“渦潮”で体力が奪われるヴァイスだが、逆にそれがチャンスになったのかもしれない。ピンチに陥ったヴァイスは特性の“猛火”

を発動し、右手の炎。それから、彼の尻尾に宿る炎が強烈に燃え盛り、体に巻き付く水を蒸発させてしまった。

「今ならこの技でもフロウさんを倒せる気がするよ。ごめんねフロウさん。“火炎放射”！」

自由を取り戻したヴァイスは、いまだ煙に視界を塞がれているフロウに、勢いよく燃える火柱を放った。

「わあぁぁー！！」

決定打を浴び、フロウは思いきり叫ぶ。煙が晴れ、炎が消え、フロウはうつ伏せに倒れた。

こうしてヴァイスも勝利をおさめ、救助隊フローラルに勝利したキズナは、試験の課題をクリアして、先へと進むのであった。

「後は、このダンジョンの奥にある葉っぱの宝石をとって帰るだけだよな！」

セナの言葉に皆が頷く。先程のバトルを終えた後、フローラルのメンバーは、キズナにこの事を伝えると、キズナの勝利を報告するために、ペリッパーの形の本部へと向かったのだった。

「でもさぁ……」

ヴァイスの真剣そうな声に、他の3人は振り向く。

「どうしてあのチーム、草タイプのポケモンが1人だけなのに名前が“フローラル”なのかなぁ？　キレイハナのフローラさんがリーダーだから？」

彼のどうでもいいような発言に拍子抜けしたセナだが、こんなときに限って真面目に考える、ホノオとシアン。

「あ、分かったぜ！」

ホノオがパッと顔を明るくした。

「きっとさ、フローラルってのは、あのババアを指してて、水タイプのフロウや地面タイプのサハラは、奴の栄養源なんだよ！」

確かに、植物は水と土があってこそ育つが。この猿は、何を言っているんだろうか？

「だからフロラはあんなに権力が強そうで凶暴なんだぜハッハッハ――いてえぇ！」

セナが思いきりホノオの頭を殴ると、ホノオの馬鹿みたいな笑い声も止む。

「てめぇらも、真面目にやらないと殴るぜ？」

セナがヴァイスとシアンを睨み付けながら言うその表情は、なんだか恐ろしい。

「ごめんなさーい……」

ヴァイスとシアンの謝る声が、重なるのだった。

そんなやり取りをしてから少し歩くと、通路が行き止まりになっている。――“行き止まり”と言えど、その空間は広く、充分に走り回れる程のスペース。そして、辺りには草が生い茂り、さらに不思議なことに、ここは樹の中なのに、さらにいくつかの木が生えていた。

「なーんかここだけ森みてぇ……」

セナが、その不思議な空間を見回しながらそう言った。

「あっ、見てみんな！」

ヴァイスはそう言うと、その空間の真ん中にある、大きな切り株の元へ走り出した。ホノオ、シアンが後を追い、転んだセナは、遅れて追いかける。

切り株の上にポツンと置かれた緑色の、透き通ったものにヴァイスが触れた。

「これは、葉っぱの宝石じゃないかな？」

確かに、葉っぱの形をしているし、神秘的な雰囲気を持っていたので、どうもそれらしかった。

「後はこれを持ち帰るだけだから……オレ達！」

「試験クリアだネ！　わーいわーい♪」

ホノオとシアンが歓喜の声をあげると、そこにようやくセナがたどり着いた。

「セナ！　これ見て！」

ヴァイスが投げる緑のものを、セナは上手に左手でキャッチする。

「おぉっ！　葉っぱの宝石！」

澄んだ緑色の、葉っぱの形をした宝石。セナもそれを見て、確信したようだ。

「よっしゃー、やったぞ！　みんな、早く本部に持ち帰ろうぜっ！」

「はーい！」

セナの言葉に、ヴァイス、ホノオ、シアンの3人は、無邪気に返事をした。そして、ダンジョンの入り口へと戻るべく、4人は切り株に背を向けた。その時――。

「！」

殺気にも似た雰囲気を、ヴァイスは察知した。急いで振り返るが、誰も、いない……。だが、彼が前を向いたとたん、再び殺気が背中を突き刺すのであった。

「どうしたん？　ヴァイス」

震えるヴァイスを見て、セナは声をかけた。

「セナ……怖いよ……」

ギュッと目を閉じて、ヴァイスはセナに抱きついてきた。

「ハハハ！　なんだよいきなり～」

セナははじめは冗談だと思って笑い飛ばしたが、ヴァイスがポロリと涙を流した瞬間、真剣な眼差しに変わる。ホノオも、シアンも、それは同じだった。セナ、ホノオ、シアンが意識を集中させると、突如突き刺さるような殺意を感じた。

「誰――」

セナが『誰だ！』と言いながら振り返ろうとしたのだが、あちらの方がわずかに早かった。草の茂みが揺れたかと思うと、そこから強烈な“破壊光線”が飛び出し、４人の背中を貫く。それも、一発ではなくて、何度も、何度も。

「うあああぁーっ！！」

声にならないような、４つの悲痛な叫び声が、空間を引き裂くように響く。それと同時に、幾度も重なる、凄まじい爆発音も――。

「フフフ……」

傷だらけになりながらも、微かに呼吸を繰り返す４人。その姿を、冷たい眼差しで見下ろすように睨み付ける、いくつかの影があった。

とある救助隊が彼らを運んだのは、それからしばらくしてのことだった。

第１０話：昇格試験――その４（前書き）

使えるはずの道具を2つも失った状態からのスタートだったけど、なんとかオイラ達は戦闘試験を突破したんだ。
そして葉っぱの宝石を見つけたんだけど……突然の攻撃を防げずにやられちまった。
こんなに難しいのか、１回目の昇格試験は……。
（語り：セナ）

第１０話：昇格試験――その４

体が波の音に包まれている。
大樹の中でセナ達が倒されてからしばらく経ち、夜空に星が輝いている。
ここは、サメハダ岩。ヴァイスの意識が戻り、薄く目を開けると、目の前には優しそうな顔をした、３人のポケモンが。

「良かった。気が付いたね！」

ヴァイスにとって、なんだか懐かしい感じのする、温かな声。

「リザードンさん。それに、フーディンさんに、バンギラスさん……」

呆然と、目の前にいるポケモン達の名前を呟くヴァイス。フーディンはとても賢いポケモンで、その脳の大きさ故か、頭が大きい。体は黄色く、ひげが生え、常にスプーンを持ち歩いているポケモンだ。リザードンはオレンジ色で少し首が長い龍のようなポケモンで、立派な翼がある。バンギラスは鎧のように硬い、緑色の体のポケモンだ。
そんな彼を見て、彼ら3人のリーダーであるフーディンが、状況を説明した。

「君達キズナがいつまで経っても試験から戻ってこないって聞いたから、心配してね。ワシ達、救助隊“ＦＬＢ”が様子を見に行ったら、４人ともひどい怪我をしていて……。それで、ペリッパーに君達の基地の場所を聞いて、ここまで運んできたんだよ」

「そっか。でもまさか、あのＦＬＢに助けてもらえるなんてね！とにかく、ありがとう！」

フーディンの話を聞いて、ヴァイスは彼らに礼を言う。

救助隊、ＦＬＢ――。このガイアで、最高の救助隊ランクであるマスターランクの救助隊だ。個々の天才的な能力と、抜群のチームワークを誇り、難関試験も合格してマスターランクになったという、誰もが憧れる救助隊。ヴァイスも、父がいなくなってしばらくたってからは、彼らに憧れを抱き――特にリザードンには、自分の父親を重ね――、彼らの背中を追いたがっていたのである。

因みに彼らは、本名を公開しない“匿名制”という制度を使い、チーム登録をしている。それ故、皆は彼らを種族名で呼び、たとえ彼らが有名救助隊であろうと、その本名は知られていないのだとか。

「どういたしまして」

バンギラスが、優しげな表情を浮かべてそう言うと同時に、セナが目を覚ました。

「セナ！」

ヴァイスがセナの元へと駆け寄るために立ち上がろうとすると、体に激痛が走った。

「うあ……！」

「まだ激しく動いちゃ駄目だ。安静にするのだ」

苦しむヴァイスに、フーディンが声をかけた。

「少し、私達と話をしないか？」

リザードンが、今意識のあるセナとヴァイスに話しかけた。

「あぁ」

「いいの？　ありがとう！」

ヴァイスの返事は、なぜかとても嬉しそう。単に彼らが憧れの救助隊だからか、それとも――。

「お前達キズナは、なかなか腕がいい救助隊だって評判なんだぜ！　ノーマルランクにしとくのが、勿体無いくらいだ」

バンギラスがそう言うと、セナとヴァイスはくすぐったそうに照れ笑いした。

「えへへ♪　ありがとう！」

ヴァイスは笑顔でそう答える。

「多分、オイラが怪我してたり、みんなで旅に出たりしたから……。だから、ちょっぴり試験を受けるのが遅くなっちまったのかもなぁ」

素直に礼が言えぬセナは、少しズレた返答を。

「ハハハ、そうかそうか……。これからも頑張って、どんどんランクを上げていくんだぞ！」

リザードンのその言葉は、セナとヴァイスの胸を切なく打った。

「ありがとう、リザードンさん。でも、ボク達試験に落ちたから……」

「だから、スーパーランクにもなれねぇや……」

結局、葉っぱの宝石を、本部に持ち帰ることができなかった。だから、試験は――。うつむき、落ち込む2人。ヴァイスに至っては、今にも泣き出しそうである。

「フハハ！　心配無用さ」

「え？」

フーディンの言葉に応じて、セナとヴァイスの疑問の声が重なった。

「あの試験には、不合格というものはないのだよ。本部に申し出れば、何度でも挑戦できる」

「諦めないで何度も挑戦する力が、救助隊には必要なのだからな！」

フーディンとリザードンのその言葉を聞くと、セナとヴァイスの頬が緩む。

「じ、じゃあ、まだチャンスはあるんだね！？」

「あぁ、もちろんだ！」

バンギラスが力強く断言すると、ヴァイスはセナの方を見て、ついに泣き出した。

「なんだよ、泣き虫だなぁ～」

セナが苦笑いしながらヴァイスに言うが、涙は止まらない。

「だって……。だって、安心したんだもーん！」

声をあげて泣くヴァイスに、それを微笑んで見るセナ。そんな小さな2人を、ＦＬＢの3人は温かな眼差しで見つめるのだった。

「じゃあ、そろそろ失礼するよ」

フーディンが腰をあげると、リザードンとバンギラスも立ち上がる。

「オレンの実をたくさん食べれば、明後日には怪我は治るさ！　幸い、深くえぐれるような傷はないみたいだからな」

「そしたら、また試験頑張るんだぞ！」

リザードンとバンギラスが、キズナに励ましの言葉を贈った。

「あ、ありがとう！」

「頑張るぜ！」

うまく立ち上がることができないが、言葉に精一杯の感謝の気持ちを込めた。

「じゃあね。そっちの2人にもよろしく言っておいて」

まだ目覚めぬホノオとシアンを見ながら別れの言葉を告げたのは、リザードンだったのだが……。

じゃあね。その言葉は、ヴァイスの心の奥深くで響いた。行かないで、お父さん！　なぜだかそう叫びたくなるヴァイス。

「待って！」

思わず、ＦＬＢの３人――正確には、リザードンを呼び止めてしまった。

「なんだい？」

優しくそう問いかける、リザードンの声を聞くと、とても切なくなる。だってそれは、あまりにもお父さんに似ていて――。

「あの……」

呼び止めてから、後悔した。行かないで、なんて。そんな変なこと、言えない。

「ボク達、きっと立派な救助隊になってみせるよ！　ＦＬＢのような……」

そして、お父さん達の救助隊、“ＯＮＥ”のような。心の中でこう付け足すと、涙が溢れそうだったが、ヴァイスはそれをグッとこらえた。

「……うん。期待してるよ」

リザードンはニコリと笑ってそう答えてくれた。
セナは、ＦＬＢの３人がサメハダ岩から去って行く姿を見ながら、何となくだが、ヴァイスの心情を察していた。

「セナ……」

ホノオとシアンがまだ起きていないのを確認すると、ヴァイスは静かにセナに呼び掛けた。

「キミに、相談したいことがあるんだ」

「……なんだ？」

セナは、ヴァイスのまっすぐな眼差しに引き込まれるように目を合わせて、ヴァイスの『相談したいこと』を聞くのを待った。

海に面した崖に空いている、“サメハダー”というポケモンの形をした空間――すなわちサメハダ岩から出ると、ＦＬＢの３人は穏やかな海と星空を見つめる。

「“任務”は……果たしたな」

フーディンは、その右手に握られている“あるもの”を見ながらそう言った。辺りが暗くてよく見えないその小さなものの用途――怪我の治療に使うのか、連絡を取るための機械か、それとも――は定かではない。しかし。

「あぁ」

声を重ねて返事をし、真剣に頷くリザードンとバンギラスの様子から、どうやらその“あるもの”が、フーディンの言う“任務”と関係ありそうだ。

今はまだ、ここまでしか書き記すことはできない。

第１０話：昇格試験――その５（前書き）

試験に失敗したオイラ達を助けてくれたのは、なんとマスターランクの救助隊ＦＬＢ。いろいろと話をしたんだけど、やっぱり感じよかったよ。

そんで、救助隊昇格試験は再試験ができるって、ＦＬＢが教えてくれた。――まだあきらめるわけにはいかないな。

ところでヴァイス。“相談”って何だ？

ホノオもシアンもまだ目覚めていないし、どうやらオイラにしか言えなさそうな感じだけど……。

（語り：セナ）

第１０話：昇格試験――その５

「やっぱりさぁ～」

セナは、まだ目覚めぬホノオを見ながら話し始めた。

「間抜け面してるよなぁ～コイツ。猿とバカを足して２で割ったみてぇ。こりゃあ、テストで赤点しかとれない顔だね」

しばらくの沈黙……。

「まだ……寝てるね」

ヴァイスがそう呟くと、セナはホッとため息をつく。

「はぁー、良かったぁー！　もしもこいつが起きてたら……！」

どうやら、ホノオが起きているか確かめるために、セナはこのような行動をとったようだ。うーんと言いながら寝返りを打つホノオは、まだ夢の中。

「じゃ、次はヴァイスの番♪」

セナがそう言うと、ヴァイスは顔を引き締めて頷く。そして。

「こっちはこっちで、かわいい寝顔♪　“女の子”にしか見えないや」

ヴァイスは、シアンが言われて嫌がる言葉、“女の子”を口にす

るが、シアンからは反応がない。

「よし。こっちも起きてないや」

ホノオとシアンの、悪口を言われるとすぐに怒る性質を利用して、彼ら2人が眠っていることを確信したセナとヴァイス（半分は、ゲームのように面白がっていたようだが）。秘密の相談は、ここから始まるのだった。

「セナ。ありがとうね」

「え？」

ヴァイスがはじめに口に出したのは、そんな感謝の言葉。その言葉の訳が分からず、戸惑うセナがいた。

「あのさ。ボクが初めてキミに、ボクのお父さんとお母さんについて話したのは、聖なる森でお姉ちゃんに会った日だったね」

話し始めるヴァイス。セナはただ浅く、2回、コクリと頷く。

「あの日から、いろんなコトがあったけど、セナはいつもボクの気持ちを察して、“あの話”について触れないでいてくれた。助かったよ、ありがとう！」

ヴァイスはニコリと微笑みながら再びセナに礼を言う。セナはそれに微笑みで応じようとしたが、どうしても、ヴァイスの笑顔の奥底に隠れた哀しみが見え隠れしてしまい……。少し、引きつった表情をヴァイスに向けたのであった。

「でもね」

ヴァイスはそう続ける。

「いつまでもこのままじゃいけないって、ボクは思うんだ。だって……」

「ホノオやシアンは、このことを知らない。だから、なかなかお前の父さんを探せないんだよなぁ……」

ヴァイスが言葉を切ると、セナがその続きを言う。

「さすがセナだね。ボクのこと、すごくよく分かってくれて……」

セナがそのヴァイスの言葉に対して、照れと戸惑いの混じった、なんとも表現しがたい笑顔を浮かべた。

「あのね。ボクが今こんなことを言い出したのにも訳があって……」

先ほどから、ヴァイスの胸にずっと引っかかっている出来事。少々急な話題転換になるなと自分自身でも思いつつ、ヴァイスはそれを話すのだった。

「前から少し思っていたんだけど、実際に見たら本当にそうだ。さっきのＦＬＢのリザードンさん、声とか優しさとか強さとか……。とにかく、ボクのお父さんにすごく似ているんだ」

「そ、そうなのか……」

とりあえず、ヴァイスが父親の話を始めたきっかけはこのせいだろうなと、セナは思った。事実、そうなのだが。しかし。

「似てるって、どのくらい？」

不可解なこの話の展開を、セナはすぐに素直に飲み込めるわけではないようだ。

「それは、もう、あの人がお父さんだったらなぁって思うくらい。でも、もちろん別人だと思うよ。だって、お父さんは救助隊ＯＮＥのメンバーだもん。見つかるときは、ブルーさんとグリーンさんも一緒に見つかるはずだよ」

ブルーとグリーンは、ヴァイスの父レッドの救助隊仲間だ。ブルーはカメックスで、グリーンはフシギバナ。

（そうか。レッドさんが単独でＦＬＢに入ってるわけないよな）

ヴァイスのその意見には、セナも納得のようだ。

ただ、気になることがある。どうしてＦＬＢは、本名を公開しない“匿名制”を使って救助隊登録をしているのだろうか。まぁ、匿名制は、人間でいう芸能人の芸名みたいなもの。別にＦＬＢだけがこの制度を用いているわけではないし、深い理由がない場合がほとんどなのだが……。

「とにかく、ボク、なんだか急にお父さんに会いたくなっちゃってさ。セナ達も巻き込むのは悪いなって思うけど、お父さんを探しに行きたいんだ」

とうとうヴァイスは本題を話した。

「気にすんなよ。つーかお前はさ、もう少しわがままになってもいいと思うぜ？」

「うん。ありがとう」

少しスッキリとした気分で、ヴァイスはそう返事をした。

「さて。問題はコイツらにどう伝えるかだけど……。そろそろ起こすか？」

なかなか目を開けないホノオとシアンを見ながら、セナは言う。

「そうだね」

ヴァイスがそう返事をすると、セナは怪我をした体を慎重に動かし、ホノオが眠っている草の布団の元へと歩み寄った。

「ほら、起きろホノオ」

セナがホノオを揺すって起こそうと、肩に手をふれた途端……。

「いってえええぇ！！」

ホノオは飛び上がり、セナの手を振り払った。

「あれ？　もしかして起きてたん？」

そのホノオの反応の早さから、セナはそう判断する。

「怪我してんのに触るんじゃねえ！　あぁそうさ。起きづらい雰囲

気だったから、ずっと寝たふりしてたんだよ」

「へー！　よくオイラがおまえのこと猿だの何だの言ってたのに起きなかったなぁ！　お前も偉くなったよ♪」

セナのその言葉で、ホノオの表情が険しく……。

「あぁ？　猿だぁ？　どういうことだよ？」

しまった。余計なこと言っちまった。おそらくホノオが起きたのは、セナがホノオの悪口を言って起きているかを確かめた直後。セナのその行動を知ったホノオは、セナを睨みつけている。

「ななっ。なんでもございません、ホノオ様♪」

セナはそう言うと、急いでホノオに背を向け、自分の布団に戻るが――

「逃がすか！」

ホノオはとっさにセナの尻尾を強くつかんだ。

刹那に上がる、セナの鋭い叫び声――。シアンを起こしたヴァイスは、セナとホノオを見て、呆れたような笑みを浮かべたのだった。

キズナの４人が起きたところで、会議が始まった。

まずセナとヴァイスは、自分達がＦＬＢに助けられたことを説明

した。その時に眠っていたホノオとシアンは驚き、そしてあのＦＬＢと会話をしたセナとヴァイスを羨むのだった。
そうして話題はヴァイスの父親についてに移り変わる。

「えーっ！？　ヴァイスって、あの救助隊ＯＮＥのリーダー、レッドさんの息子だったノー！？」

シアンはその事実を知って、激しく驚いている。ＯＮＥも巻き込まれた、あのキザキの森での大量失踪事件――暗黒の森事件――が起こったとき、ヴァイスがそうであったように、当然シアンもまだ幼かった。そんな彼でさえも知っているということから、救助隊ＯＮＥの有名さ――そして偉大さがよくわかった、元人間のセナとホノオなのだった。

「う、うん……」

シアンの大げさなリアクションに圧倒されながら、ヴァイスは答える。

「そんで、その暗黒の森事件でいなくなってから、まだ帰ってきていないんだよな……」

ホノオがヴァイスにそう確認すると、ヴァイスはコクリと頷く。

「そして、ＦＬＢのリザードンによく似ている、か。……よし！」

セナは何かを決心したように、立ち上がる。

「それじゃ、今回の昇格試験が終わったら、ヴァイスの父さん達を探してみようぜ、みんな！」

「おう！　絶対に見つけてやるよ！」
「シアン、ＯＮＥの３人に会ってみたいナ♪」
セナの言葉に、ホノオとシアンも嬉しそうに答えた。
「みんな……。ありがとう」
いつものごとく、泣き始めたヴァイス。そんな彼を見て、セナは苦笑いしながらも心に誓う。まずは試験に合格し、そして、必ずヴァイスの父さんは見つけてみせる！　――と。
しばらくしてヴァイスが泣きやむと、再び話題が移り変わる。彼らの目の前にある、試験の話へと。
「本当に、何だったんだろうな。あの“破壊光線”」
セナは腕を組みながら、真剣な表情で呟く。今日の試験中に彼らを襲った“破壊光線”の謎について、皆で話し合うことになった。
「おかしいよな。だって、フローラルの奴らは、バトルが終わったら、後は葉っぱの宝石を本部に届けるだけだって言っていたのに」
ホノオでさえも、真剣にこのことについて考えている。そんな中、シアンはヴァイスが微かに震えているのに気がついた。
「ヴァイス？　どうしたノ？」
シアンに話しかけられると、ヴァイスはびくりと反応する。

「……ごめん。ボク、怖いんだ。あの時のことを、あのとき感じた殺気を思い出すと、すごく怖い。ボクね、“破壊光線”っていう技が大嫌いなんだよ……」

ポツリポツリと話し始めるヴァイス。

『“破壊光線”っていう技が大嫌いなんだよ』。その言葉を聞いたとたん、セナはハッとした。

「どうしてだ？」

少し躊躇いながらホノオがヴァイスに聞くが、そんなホノオにセナが答えた。

「ホノオ、シアン。そのことについては、オイラが後で話すからさ。まず、今は話を試験についてのことに戻そうぜ」

ヴァイスの口からあの惨劇が語られることを、セナは恐れた。当のヴァイスも、その方が助かると言いたげに、ホッとした表情でセナを見た。

「……悪い」

ホノオが俯き、きまり悪そうに呟くと、セナが話し始めた。

「とりあえず、あの“破壊――、いや、オイラ達の試験の失敗についてだけど」

“破壊光線”という言葉を使うのさえも、セナは辛く感じた。後にホノオ達に、ヴァイスの過去について話さなくてはいけないと思

うとなおさらだ。セナは続けて自分の考えを述べる。

「考えられるのはまず、フロラさん達、救助隊フローラルの3人が、試験について間違った情報をオイラ達に与えたってことかな。あんまり疑いたくねぇけど」

その言葉に、少々驚いた表情を見せる、ヴァイス、ホノオ、シアン。

「そして、こんな場合も考えられる。誰かが――フローラルの3人が気づかぬうちにダンジョンに忍び込んだ誰かが、オイラ達の試験を邪魔した」

「そんな……！」

ホノオはその考えに驚き、声を上げたが、セナはそれを制する。

「あくまでもオイラの仮説だ。真相を確かめるのは、この怪我が治ってから、もう一度試験にのぞむ時だ」

各々が、それぞれの考えを巡らせる。サメハダ岩は、沈黙に包まれる。

「とにかく今日はもう寝よう。とっととこの怪我を治す。すべてが始まるのは、その後だ」

重苦しい雰囲気に耐えられなくなったセナは、そう呟いて沈黙の話し合いをやめにした。

「ボク、ちょっと今日は疲れちゃった。先に寝るね。おやすみ、み

んな」

ヴァイスはそそくさと草の布団に横になり、すぐにすやすやと眠り始めた。あどけなく可愛らしい、純粋な少年の寝顔。残酷な過去を今だけは捨て去って安心しきったヴァイスの顔を、久しぶりに見た気がしたセナだった。

セナ達3人はしばらくは黙ったままだったが、ホノオがとつぜん口を開く。

「……セナ。さっきのことについて、教えてくれないか？」

「どうしてヴァイスは“破壊光線”が嫌いナノ？」

ホノオに続いて、シアンもセナに疑問を投げかけた。とうとう、話さなくてはならない時がきた。セナは決心すると、少しずつ話し始める。

ヴァイスの父親がまだ行方不明になっていないとき、事件が起こったこと。空から“破壊光線”が降ってきて、多くの犠牲者が出る事件……。ヴァイスの母親フレムが、その、犠牲者となったこと……。

話を進めているうちに、セナはある光景を思い出す。聖なる森で、メルと出会ったあの日。その夜に、セナにだけ自らの過去を打ち明けた、あのヴァイスの表情。

「ヴァイス……」

全てを話し終えた時、セナがそう呟くと、彼の頬を涙が優しく撫でてゆく。いつもは強がりで、意地でも他人の前で泣かないように頑張るセナを……いつでも自分の弱みを人に見せず、悲しみを隠し

て虚勢を張る少年、瀬那（セナ）を、ホノオは知っていた。そんな、コイツが……。そう思うと、ホノオも自然に視界がにじむ。そして、いつもケロッと笑っているシアンでさえも、今は――。

「……あれ？」

セナはふと、自らの頬に両手を当てる。気づかぬうちに流した涙が、その両手に触れる。その瞬間に、一気に恥ずかしさが込み上げ、セナは顔を紅くした。

「とにかくお願いだ。今はなしたことは、ヴァイスの前では言うなよ。思い出させたくないから」

セナが恥ずかしさからか普段よりも小さな声で言ったその言葉に、ホノオとシアンは頷いた。その瞬間、彼ら2人の頬から涙が振り落とされた。

再び沈黙がサメハダ岩を包み込む。

「オイラ、もう寝るわ。明日からまた頑張ろうな。おやすみ……」

セナはそう呟くと、逃げるように布団に寝転がり、夢の世界へ。

「オレ達も、寝るか」

「ウン。おやすみ、ホノオ……」

ホノオとシアンが眠りにつくと、キズナの忙しい1日が終わりを告げた。

試験には失敗してしまったが、新たな謎――そして、新たな目標

を見つけた彼ら４人。そして、ガイアで起こる事件と冒険の主役である、破壊の魔王と救いの勇者。この２つの勢力がぶつかり、交わるまでには、そう先は長くないのだった。

第１０話：昇格試験――その６（前書き）

ＦＬＢのリザードンさんを見ていたら、なんだかお父さんに会いたくなって――と、セナに相談してみたんだ。

セナはもちろん、ホノオやシアンまで、ボクのお父さんを探すのを手伝ってくれるって言ってくれた。

みんな、ありがとう。

（語り：ヴァイス）

第１０話：昇格試験――その６

キズナが試験に失敗した、次の日。彼ら４人は、昨日ＦＬＢが去り際に言った通りに、これでもかというくらいオレンの実――体力を回復し傷を癒やす効果がある――を食べた。破壊光線によって受けた傷は深くはないものの広範囲に及んでいた。それでも、いつもはご飯に食べるはずのリンゴの代わりにもオレンの実を食べるなどの徹底ぶりで、見事に怪我を治したセナ達。セナの食欲が顕著に目立ったこの１日が終わると、４人は眠りにつき、決意を胸に明日へと。

こうしてそのまた次の日がやってきて、いつものごとくセナは皆に叩き起こされる。そして、体調も万全な４人は再試験を受けるために、まずは救助隊連盟本部へと向かうのだった。

本部にてペリッパーに再試験の申し込みをするセナ達。本当に、再試験が受けられるのかな――ＦＬＢを疑っている訳ではないけど。そんな不安を抱えるヴァイスだったが、ペリッパーはセナが用件を言うと、ニコリと微笑み陽気に言った。

「応援してるよ！　頑張ってねっ、キズナ♪」

その、明るいペリッパーの声に元気づけられ、セナ達は意気揚々と試験会場の大樹がある救助の森へと向かう。そんな４人の後ろ姿を眺めながら、セナ達の再試験の申し込みの手続きをしたペリッパーが、隣の受付の窓口で少々暇そうにしているペリッパーに声をかけた。

「ねぇ」

「なんだい？」

声をかけられたペリッパーが応じると、話しかけた方のペリッパーは、深く考え込んだ後に話し始めた。

「おとといの試験の時、キズナの試験の手伝いをしていた救助隊フローラルは、セナ達はフローラルを倒して戦闘試験をクリアしたって本部に報告しにきたよね？」

「あぁ、そういえばそうだったよね」

いずれのペリッパーも、不可解な点について気になったようだ。

「どうしてキズナは、葉っぱの宝石を本部に届けないで、わざわざ再試験を受けるんだろうね？」

本部のペリッパー達がそんな話をしていると知る術もないセナ達は、本部がある丘をこえたところにある救助の森を歩いていた。

「よーし、今度こそ合格するぞ！」

「おーっ！」

セナの号令に、ヴァイス達3人は元気に返事をする。いっそう気合いが入った4人は、あっという間に試験会場の大樹の前に立っていた。おとといの試験を受けにきたときには、初っ端から大樹の幹に飛び込み、落下しながらダンジョンへとたどり着いたセナ。しかし、そんなひどい目にあった後、このダンジョンへ出入りするためのはしごがあることに気がついたのだった。セナは、今日は慎重にはし

ごに足をかけ、そろりそろりと大樹の幹にあいた穴からダンジョン内部――おそらく、この大樹の根をくり抜いて作った――へと降りてゆく。そんな彼の後に続いて、ヴァイスとシアンもはしごを降りてゆく。そんな中。

「おっ先ーっ♪」

などとご機嫌に言いながら、ホノオははしごを使わず穴の中へと飛び降りた。そして、余計な行動のせいで彼は大惨事に見舞われる。ホノオは、落下する際にシアンとすれ違うと、調子に乗ってシアンの頭をたたく。

「キャッ！　痛いヨー！」

シアンはとっさに両手で叩かれた頭を押さえた。そう、“両手で”。

はしごをつかむ手がなくなったシアンは、重力に従い落ちてゆき、ヴァイスにのしかかる。そしてヴァイスとシアンの体重がセナのそれと重なると、3人は悲鳴をあげながら穴へと落下し……。

「ぐえっ！？」

先にダンジョン内へと降り立っていたホノオの背中にそれが衝突。凄まじい衝撃が走ったのだった。

「ったく。緊張感というものを持たんのか、お前は……」

セナはホノオを睨みつけ、文句を言いながらダンジョンを歩く。

「す、すみませ～ん……」

さすがに先程のは堪えたのだろう。大人しくホノオが謝ったので、キズナの４人はスムーズに先へ進むことができた。そして。

「あ！」

辺りに草の茂みが増え、神秘的な雰囲気が漂い始めた頃。おとといと同じくらいの地点で、先輩救助隊のフローラルが待ちかまえていた。すかさず４人は駆け寄り、セナはあることを聞こうとする。

――おとといの試験での“破壊光線”は、試験の内容に含まれているのかどうかを。もしそうなのなら、それをきちんと伝えなかったフローラルの３人に裏があるのでは？　セナがあれこれ思いを巡らせた後に口を開くが、そのほんの一瞬早く口を開いた者がいた。

「あなた達。どうしてこの前私達に勝って戦闘試験をクリアしたのに、葉っぱの宝石を本部に持ち帰らなかったの？」

その表情は、言葉は、あまりに裏のないものだった。救助隊フローラルのリーダーである、キレイハナのフロラは、セナ達にこんな質問を。４人が返答に困っていると、さらにもう１人が質問を重ねた。

「もしかして、僕らと戦った後に誰かがおなか痛くなって引き返したの？」

フローラルのメンバーである、フローゼルのフロウの言葉だ。言い訳にするには都合のいい言葉だが……。真相は、違うのに。

「いや、あの……その……」

セナは返答に困り、ヴァイス、ホノオ、シアンもそれぞれ不思議そうな顔をして互いに目を見合わせる。結局、彼ら――フロラやフロウ――の態度から判断すると、フローラルはあの“破壊光線”の出来事を全く知らず、そして、本来の試験にはあのようなシチュエーションはないようだ。

「まぁいいじゃんかよ。もう一度戦闘試験をやりゃあいい話じゃねぇか」

フローラルのもう1人のメンバーである、サンドのサハラは、面倒くさそうにそう言うと、強引に話を進めるのだった。

今度の戦闘試験では、セナ達は、敵を混乱させる“ふらふら玉”、食べると攻撃力と特殊攻撃が最大限まで強くなる“猛撃の種”、そして体力を回復する“オレンの実”の3つのアイテムを渡された。前回は戦闘開始時からすでにアイテムを2つ消費してしまい――それでも、フローラルを倒して戦闘試験は突破した、キズナ。ならば、最初からアイテムが豊富な今回の戦闘では――。

まず、戦闘が始まると、セナは猛撃の種を食べて攻撃力を強化した。おとといのバトルでは猛撃の種と真逆の効果がある邪悪な種を食べてしまい、満足に攻撃技を出せなかったセナ。その分の埋め合わせをするかのように、今日の試験では暴れまくった。

しかし、あまり水タイプの攻撃が効かない草タイプのフロラとセナと同じく水タイプのフロウは、セナに攻撃しようとするが。ヴァイスがふらふら玉を使ったせいで、フロラは混乱する。そんな自我を忘れたフロラの草タイプの技は、草タイプが苦手なフロウやサハラに炸裂した。

とどめにホノオとシアンがフロラに攻撃し、オレンの実を使わずに、キズナはフローラルに勝利したのだった。

こうしてバトルを終えた彼らは、あとはダンジョンを進んで葉っぱの宝石を見つけるだけだった。何度か念を押してフローラルに質問してみたが、本当に、ノーマルランクからスーパーランクへの昇格試験の内容は“それだけ”でいいのだそうで……。つまり、セナが密かに疑っていた可能性――あの“破壊光線”は、『突然の奇襲に対処する能力をみる試練』などという、昇格試験の一貫だということ――は望みが薄くなった。

そして４人は、警戒しながらダンジョンを進み、とうとう問題の場所へやってきた。大樹のダンジョンの行き止まり。森のような、広く開放的……それでいて神秘的な空間。その空間の中央にある切り株の上に、やはり葉っぱの宝石が置いてある。それを見ると、皆が表情を引き締めた。

「……いくぞ」

セナのその言葉とともに、キズナは宝石に向かって歩き出す。ホノオ、シアンは辺りをよく見回し、セナとヴァイスは意識を集中して敵の気配を――前回感じたような“殺気”を察知しようとする。そして慎重に切り株へと近づき、葉っぱの宝石へと手を伸ばし――。

セナは、しっかりとそれを掴んだ。

その場で沈黙する４人。依然警戒を続けたが、いくら経っても、この空間からはキズナの４人以外の気配が感じられなかった。

「おい！　誰かいるなら出て来やがれ！」

試しにセナがそう叫ぶが、その声はただ空間にむなしく響き、辺りに生える草の茂みや木の葉は、微動だにしない。

「戻るぞ」

「うん」

セナが首を傾げて通ってきた道を引き返すと、ヴァイス、ホノオ、シアンもそれに続く。

敵の気配を疑い、警戒を続けながら試験会場の大樹のダンジョンの入り口に戻るが、変わったことは何もなく……。とうとう、入り口にたどり着いた。

「あとはホントに、本部に行くだけなんだネ？」

シアンがポカンとした顔で言うと、他の3人は頷く。前回はあんなにひどい目にあって試験に失敗したのに、この手応えのなさは何なんだろうか？　無論、これが本来のノーマルランクからスーパーランクへの昇格試験なのだが……。

拍子抜けしたセナ達は、嬉しさの中にどこか納得のいかない、モヤモヤとした感情を胸に抱きながら、はしごを登って大樹の外に出た。セナがしっかりと握る葉っぱの宝石は透き通る緑色でとても綺麗だったが――しかし、なぜかその輝きを見ても素直にプラスの感情が出てこないセナ達だった。

第１０話：昇格試験――その７（前書き）

昇格試験の再試験を受けたオイラ達。
……でも、なんだかおかしいな。

この前戦闘試験の相手をしてくれたチーム、フローラルの皆さんは、あの“破壊光線”について何も知らなさそうだし、そもそも、今回の再試験は不気味なほどに簡単すぎたんだ。

どういうことだ……？
（語り：セナ）

第１０話：昇格試験――その７

結局あの後、難なく本部に葉っぱの宝石を届けることができ、無事、ノーマルランクからスーパーランクに昇格できた、救助隊キズナ。現在セナ達４人はサメハダ岩へと戻ってきて、それぞれ自分の草の布団に座っている。

煌めく星に焦点をあわせず、ただただぼんやりと夜空を眺めながら、セナは、先程本部で交わしたペリッパーとの会話を思い出していた。――葉っぱの宝石を届けたときの、あのペリッパーの言葉を。セナ達が本部に葉っぱの宝石を届けたら、受付のペリッパーは、笑顔で祝福してくれた。しかし、その後に言われた、今でも気になるあの言葉。

『ノーマルランクからスーパーランクへの昇格試験はとても簡単なはずなんだよ。まさかキミ達が再試験を受けるなんてね……』

つまり、やはり何者かが、簡単なはずの試験を妨害したのだ。

（じゃあ、いったい誰が、何のために……）

黙々と１人考え事を続けるセナは、いつの間にか周りが見えなくなっていた。

そのとき、他の３人はと言うと。

「やーった♪　シアン達もこれからスーパーランクだネっ♪」

曇りが一切ない笑顔を浮かべ、シアンが嬉しそうに言う。

「そうさっ♪　やっほーぅ♪　昇格昇格～」

先程のことを考えているセナとは対照的に、ホノオははしゃぐ。

「ボク達の活躍を、お父さん達はどこかで知っているのかな？」

「あぁヴァイス。きっとそうさ！　今回のオレらの昇格だって、きっといつか耳にして、喜ぶに違いねぇよ。もしかしたら、成長したお前に会いたくて、サメハダ岩までブッ飛んで来ちまうかもな！」

ホノオがウインクしながらヴァイスの言葉に答えると、ヴァイスはそっか、と言いながらニコリと笑った。

ふと、ヴァイスはセナが先程から会話に入ってこないのに気がついた。彼の方を見てみると、難しそうな顔をして、微動だにせず考え事をしているようだった。ふぅ、とため息をつくとヴァイスは立ち上がり、セナの背後に回り込む。が、当のセナは背後の気配にちっとも気がつかないようだ。そして。

「セナ？」

ヴァイスが不意にセナの名を呼ぶと、セナの肩がびくりと跳ね上がる。

「うあっ！？」

突如背後に現れたヴァイスの姿を認めると、セナは驚いて声を上げた。

「ハハハ！　なにビビってんだよ？」

ホノオはセナを指差してからかうが、セナはまだ、夢から覚めたばかりのような、ボケッとした顔をしていた。

「気にしてるの？　試験のこと」

ヴァイスに見事に考えを当てられたセナ。

「ま、まぁ……」

そう答える彼は、どこか納得のいかない表情をしていた。

（逆に、こいつらは全然気にしてないのか？）

そんなことを考えながら、ヴァイス、ホノオ、シアンをまじまじと見つめた。

「ま、分からんでもないけどな、その気持ち……」

よいしょ、と言いながらホノオは立ち上がると、セナの元へと歩み寄る。そして、シアンもホノオの後を――。

「でも。せっかくスーパーランクになったんだし、今日はもっと喜んでもいいんじゃないかな？」

ヴァイスはニコリと微笑み、セナの顔を覗き込む。

あ。そうか。ヴァイスの顔を見て、ハッと気づいた。あの“破壊光線”について今いくら考えたって、答えはここにはない。今ここにあるもの――あるべきものは、試験に合格した喜びではないか。

そしてみんなは、それを分かってて――。

「そっか。ゴメンな、みんな」

うっすらと笑みを浮かべ、セナは言った。

「“ゴメン”じゃねぇだろ、お前はさ……」

ため息をつき、ホノオはセナに言った。

「ちっとも悪くねぇのにすぐ謝るの、お前の悪い癖だよ。ホント、変わってないな、お前は……」

ホノオはふと、人間としてセナと過ごした日々を思い出す。

「ごめん……」

口にしてから、セナはああ、しまったと言わんばかりに口をぐっと閉じた。今まで意識してなかったけど、オイラは、そうだ。盗賊団スライと戦った日の夜も、みんなに謝って――。

沈黙して何も言わなくなったセナに、シアンは声をかける。

「まぁまぁ、ちょっとずつ直していけば良いじゃん♪　……ネ？　だから、今は明るく明るく～ッ♪」

いつもお気楽なシアンだからこそ、気まずい空気をものともせずに言いたいことを言えるんだ。――そのせいで困ったこともあったけど。そう思ったヴァイスは、今はシアンに感謝するのだった。

「まぁさ」

黙りっぱなしだったホノオが、セナに話しかける。

「とりあえず、肩の力抜いて楽に行こうぜ？　難しいこと、あんまり考えたくねぇしさ」

ホノオはそう言うとセナの後ろに立ち、「凝ってますねー」などと言いながら軽く肩をもむ。すると、セナはじたばたと暴れ出し、笑い声をあげた。

「うひゃ、やめろぉ！　くすぐったいっ！」

セナのその反応を見て、ホノオはニヤリと笑う。

「ハハ！　こういうのに弱いところも、全然変わってないな」

「う、うるせぇ！」

セナは少々ムキになって、ホノオを睨みつけた。

「ホント、仲良かったんだね、セナとホノオは！」

じゃれあう2人を見て、ヴァイスはクスリと笑いながら言った。

「“良かった”んじゃなくて、今も良いんだよ。な、セナ♪」

「は？　どこが」

すぐに調子に乗るホノオに呆れ、セナはすぐに否定の言葉を。

「この薄情者ーッ！」

ホノオが大きな声でそう言うと、サメハダ岩ではドッと笑いが巻き起こる。こうして、試験での謎をすっかり忘れ、いつものように賑やかに会話を交わすセナ達なのだった。

「よーし！　じゃあ、明日からヴァイスのお父さん探し、頑張っちゃうヨ♪」

しばらく雑談した後で、明日からのことを話し合っていると、シアンはこんなことを言った。

「あー！　オイラのセリフ取るなよー！」
「いいや、オレのセリフだったのにっ！」

セナとホノオはシアンの頭を軽くたたいた。その様子を見て、微笑むヴァイス。

「みんな。本当にありがとうね！」

ボクのお父さんを探すのに、みんなこんなに一生懸命になってくれて――。そう思うと、暖かな気持ちになるヴァイスだった。

「そう言えばさぁー」

セナは不意に、ホノオを見て話し出した。

「お前なら知ってるだろ？　オイラの父さんって、どんなんだったの？」

「な、なんだよいきなり……」

だんだん声が小さくなるホノオ。心なしか、どこか動揺しているように見えた。

「いや、別に深い意味はねぇ。ただちょっと、気になっただけだよ」

セナが控えめにそう言うと、ほんの少しの間4人は沈黙する。そして、ホノオが話し出した。ヴァイスとシアンは興味津々といった様子で、ホノオの話に耳を傾けた。

「セナ。お前の父さんは、優しくて、頭も良くて、いつも、セナを大事に考えていた。理想の父親だったよ」

そこで言葉を区切ると、ホノオは遠い目をしてこう続けた。

「オレの親父と大違いさ。羨ましかったよ」

セナとヴァイスは、ハッと顔を見合わせる。

「えー？　ホノオのお父さんは違ったノ～？　――痛ッ！」

シアンが無神経な発言をするので、セナはすぐにシアンの腕をつねった。

「オレの……」

どうやらホノオはシアンの質問を聞いてしまったようで、静かに答え始めた。少しいやな予感がして、セナとヴァイスは心配そうな眼差しをホノオに向ける。

「オレの親父は、乱暴だし、酒にばっかり金使うし……。最低だったよ。酷いときにはお袋に手ぇあげたりするんだからさ」

「……」

セナとヴァイスだけでなく、さすがにシアンも言葉を返せなかった。そんな3人を見て、ホノオは慌てて付け足した。——苦笑いを浮かべながら。

「ま、今はもう両親が離婚したから、あんなクソ親父にも会わなくて済むんだけどさ。でも、離婚が原因で、セナと過ごした街から引っ越すはめになって……。それは、ちょっと、辛かったかな？」

「ごめん。変なこと聞いちまってさ……」

セナが申しわけなさそうにそう言うのを見て、ホノオはきまり悪く感じた。

「いいっていいって！　オレが勝手に話したんだからさ。……それよりお前、また謝ったろ？」

ホノオはケロッと笑いながら、セナの頭を叩く。

「おかしいよ、そんなの……」

そんなホノオを見て、ヴァイスはぽつりと話し始めた。

「どうして家族なのに、傷つけるの？　どうして進んで離れ離れに暮らすの？　家族がいるって、ものすごく幸せなことなのに……」

その悲しそうな瞳をみて、ホノオは困惑する。そして、つっかえながら、答え始めた。

「あのな、ヴァイス……。オレ達子供にはどうにもできないことって、世の中にわんさかあるんだぜ。よく分かんねーけど、“大人の事情”……ってヤツかな？」

言い終わった後、ホノオは再度、よく分かんねーと呟くと、悲しげに苦笑いする。

「ボクは……。ボクも、いずれは大人になるんだよね。ボクもなっちゃうのかな。子供を悲しませる大人に……」

ヴァイスの言葉には、皆が深く考えさせられた。オイラは。オレは、シアンは……。どんな大人に、なれるんだろう？

「大丈夫さ」

そう答えたのは、セナ。

「お前には、尊敬できる大人がいるだろ？　お前の父さん達の救助隊、ＯＮＥの３人のような、みんなに夢を与えてたような大人が」

その言葉に、ヴァイスは強く頷く。

「だからさ、そんな大人の背中を追って、大きくなれば、良いんだよ」

「そうだよネ」

セナの言葉に相づちをうつのはシアンだ。

「じゃあシアンも、ＯＮＥのレッドさん達が大好きだから、そんな大人になりたいナ♪」

シアンの言葉に、セナ、ヴァイス、ホノオは微笑んだ。

「オレとセナは、ＯＮＥの３人はよく知らないけど……。だからこそ、会ってみたいね！」

ホノオの言葉に頷くと、セナは拳を高々と空に向かって突き上げながら叫ぶ。

「よっしゃ！　絶対にヴァイスの父さん達を見つけるぞー！」

その姿を見て、ヴァイスはおかしそうに笑う。

「ホント、セナは元気だよねっ！」

「どうもどうも～♪」

ノリよく返事をするセナを見て、ホノオはふと考えた。

本当に、今の記憶を失ったセナは、本来の明るさを見せているな。

でも、いつかコイツは、人間の時のことを思い出しちまうのかな……？　その日が来るのが、オレは、怖い。

その後、またふざけの混じった雑談をはじめたキズナだが、やがて眠りにつく。みんなで掲げた一つの強い想いと、それぞれが抱える想いと共に、明日を待つ。

（セナの父さん……か）

ふぅ、とため息をつきながら、布団に寝転がるホノオは、心でこんなことを呟いた。

彼1人が抱える不安。そして、彼1人が知る真実。しばしそのようなことに思いをはせていたのだが、ふと、こんなにごちゃごちゃと考えるなんて、オレらしくないなと思い返す。そして……。なるようになるさ、と自分に言い聞かせると、いつしか眠りにつくのだった。

第１０話：昇格試験――その７（後書き）

さてさて、今回の昇格試験の話にはかなり多くの謎が出てきましたが、そろそろこの小説にも、シリアスな場面が出てくるかと……。

そして、ストーリーの複雑化も予想されますので、何か小説に気になる矛盾点がありましたら、その都度教えて下されば幸いです。

ぶっちゃけ結構矛盾設定がありますがね（小声

第１１話：旅立ちを染める闇――その１（前書き）

結局、試験はすごく簡単なまま、オレ達キズナは無事にスーパーランクへと昇格した！

――セナはなんか納得いかなそうだったけど、こういう時は子供らしく素直に喜んでおくべきだと思うぜ。

“子供らしく”と言えば、大人になることについてみんなで話していた時に、改めて気が付いた。セナって、自分の父さんも覚えていないほどに、きれいに記憶が消えているんだ。

思い出しちまうのは、いつなんだろう？

（語り：ホノオ）

＞ｉ１１９００―４３４＜

第11話：旅立ちを染める闇――その1

セナ達の救助隊キズナが昇格試験に合格した、その夜中。

「う……っ……」

眠っているセナだが、表情が険しく、うなされている様子である。それもそのはず。この時彼が見た夢は――。

辺りが怪しい雰囲気の光に包まれている。

「ここは……どこだ？」

夢の中のゼニガメ、セナはポツリとそう呟く。孤独に押しつぶされそうになりながら、寂しげに、悲しげに――。すると、セナの背後に、彼を恨みのこもった目つきで鋭くにらむ、一つのまなざしが現れた。

「瀬那（セナ）……」

その、冷たく低い声がセナを呼ぶと、セナの背筋が、冷え切った金属が突き刺さるような不快感を覚えるのだった。

「誰――っ！」

とっさに振り返ってそれを――怪しげな光の中にぼうっと浮かぶ、鋭い目を――見つけると、セナの頭が激しく痛む。その目と声の主は姿を見せなかったのだが、痛烈な恨みを語る一対の目が、セナの

心を鋭く引き裂くのだった。

「人間、瀬那」

その声は刃となり、セナに精神的なダメージを与えた。それだけ威圧的で、鋭い声だったのだ。

「人間のお前こそ、このガイアの自然災害の元凶なのだよ」

「……っ！」

ひどい頭痛で目がくらみ、セナは頭を抑えてしゃがみ込む。オイラが、自然災害の原因!?　さらに、その謎の声はセナに追い打ちをかける。

「お前はこのガイアを破滅に追い込む運命にあるのだ」

「うぅっ……！」

話が進めば進むほど、セナの苦しみが増していく。頭が割れそうで、心は砕け散りそうで……。

「よって……。お前は、ここで消去する！」

次の瞬間、声の主の瞳が鋭い閃光を放つ。

「うあああぁっ！！」

その光に焼き尽くされたように、体中に激痛が走る。やめろ……。やめてくれ……！　ただただ必死に心の中で、そう願うのだった。

「わあっ！！」

きつく閉じていた目を思いきり見開き、セナは体を起こす。ここは、救助隊“キズナ”の基地である、サメハダ岩。セナは、あの辛い、不気味な夢から目を覚ましたのだった。しばらくの間は、乱れた呼吸を整えるため、必死に深呼吸を繰り返す。夢の内容を思い返すと胸が痛み、ぐっと目をつぶるセナだった。

「……セナ」

まだ呼吸が整っていないが、どこからか、名前を呼ぶ声がした。

「なっ、何だよ！？」

先ほどの夢のせいか、名前を呼ばれることに恐怖を感じてしまい、セナは声の主を怒鳴りつける。すると、その声の主はため息をつき、名を名乗った。

「セナ、オレだ。ホノオだ」

まだ時刻は夜。暗闇にだいぶ目が慣れたセナはその姿を確認すると、確かに、草の布団から体を起こしたホノオがいた。彼もまた、苦しそうにあえいでいる。セナは声の正体が判明すると、ホッと一息つく。そんな不自然な様子から、ホノオは何かを察したようだ。

「お前も、悪い夢を？」

お前“も”という言葉に、セナは反応した。

「あぁ。まさかお前もか！？」

ホノオは声に出して返事はせず、ただ一度頷く。そして、

「なんか、いやな予感がするな……」

セナと同じ内容の夢を見ていた、同じく元人間のホノオは、うつむき、ポツリと呟いた。

「あぁ。すごく……」

あの夢で自分たちに向けられていた憎しみ。あの声の正体。そして、自分達がこの惑星ガイアの、自然災害の原因に？　それらが示す意味と、それらの真偽は分からぬままだが、これだけは言える。何か、不吉なことが起ころうとしている――。

その夜、セナとホノオは、再び眠りにつくことはなかった。気がかりなことが多すぎるし、何より、あんなに苦しい思いをするのが怖かったから。もし、あれから更に夢が進んでいたら？　自分達は、消されていたのだろうか？　それを考えると、たまらなく怖かったから……。不安に押しつぶされそうになると、なにも知らず、幸せそうに眠るヴァイスとシアンの顔をちらりと眺めた。

こうして、サメハダ岩に、朝日がさし込んできた時。

「ん？　なんか……」

「地面が……揺れてる？」

セナとホノオが、ゆっくりと揺れ始めた地面に気がつき、そう言った直後。

「うわぁ！」

突如激しく揺れる地面に驚くセナとホノオの声が重なった。

「ぐっ……」

「すっげぇ……大きな地震……」

座っていることすら困難になり、２人はうつ伏せに倒れ込むと、飛ばされてしまわぬように踏ん張る。すると、

「うわわっ！」

「何ナノ！？」

ヴァイスとシアンも目を覚まし、大きな地震に驚いた。この早朝の大地震は、大地だけでなく、揺れを感じた多くのポケモン達の心も激しく揺らすのだった。

――やがて、揺れがやみ、ピタリと地面が止まる。

「わぁ！」

今まで激しく揺られていたため、突然の静止に再び驚く４人だった。揺れは止まったが、サメハダ岩から見下ろせる海が、白く高い波を立て――それ故に聞こえる、波がざわめく音が、先ほどの地震の大きさを物語っていた。

この地震のせいで、ヴァイスとシアンも完全に目覚める。そして、

皆が不安げに会話をかわすと、今日は様子を見るために、すこし早めにはるかぜ広場へと向かうことになったのだった。

「うーたん！」
「う～たーん！」

セナ達が広場に姿を現すと、彼らに気がついた幼いポケモン達が、こちらに駆けてきた。

「どうしたの？　みんな」

ヴァイスが、駆け寄ってきた3人のポケモン達に、優しく声をかける。どうやら“うーたん”とは、ヴァイスのことらしい。

「えーん、うーたん！　さっきの地震、怖かったよぉー！」

水色の体のポケモン、“ウパー”に、つぼみのような形をしたポケモン、“スボミー”。そして、おかっぱ頭の女の子のような容姿のポケモン“ムチュール”。その、3人の幼いポケモン達は、ヴァイスに抱きつき、泣き出してしまった（最も、ウパーとスボミーには手がないため、“抱きつく”というよりも“すり寄る”と表現した方が適当なのだが）。よほどヴァイスになついているようだ。

「そっか。怖かったよね。よしよし、もう大丈夫だよ」

ヴァイスは3人に優しい笑顔を向け、彼らの頭をなでる。するとたちまち、ウパー、スボミー、ムチュールの3人は、ご機嫌そうな笑顔を浮かべるのだった。

しばらく傍観者だったセナ、ホノオ、シアンも、ヴァイス達に近寄った。

「みんな、お家は大丈夫か？」

セナが、一番近くにいたウパーの頭をなでながら言った。一応、子供達の前なら、彼も“お家”などと丁寧な言葉遣いをするようだ。

「うん。大丈夫だよ、せなたん♪」

ウパーはセナにニコリと笑顔を向けると、今度はセナに抱きついた。

「わっ！」

セナはどこか照れくさそうに、困惑している。そんな彼を見ると、ヴァイスは自分に抱きつくスボミーとムチュールに目線を合わせて言った。

「ほら、2人もせなたんのところに行っておいで♪」

「うん、うーたん！」

ヴァイスの言うことを素直に聞いたスボミーとムチュールは、セナの元へと向かう。

「せなたん！」

「せなたん、あそぼー！」

「こらヴァイス！　えと……」

どうやらヴァイスは、セナが照れる反応を見るのが楽しく、スボミー達もあちらにやったようだ。そしてホノオとシアンも、セナがどうしていいのかわからずにオロオロとする様子を、楽しんで見ているのだった。

「ったく、ヴァイスは……」

結局あの後、ウパーとスボミーとムチュールは、セナの尻尾を猫じゃらしのようにして遊ぶと、満足して広場の噴水へと向かった。

「えへへ♪　でも、セナ可愛かったよ！」

「う、うるせえうるせえ！　子供の相手は苦手なんだっ！」

ヴァイスの言葉を聞くと顔を赤くし、セナはスタスタとガルーラおばさんの倉庫やカクレオン商店がある方角へ向かう。

「ホント、素直じゃねえなぁ、アイツは」

ホノオが呆れて笑うと、急ぎ足でセナの後を追う。ヴァイスもその後を急いだのだが……

「うーたん♪　シアンをおんぶしてヨ♪」

先ほどの幼いポケモン達に便乗してだろうか？　シアンは上目遣いでヴァイスの瞳を見つめ、甘え始めた。

「えーっ!?　……しょうがないなぁ、もう」

面倒見のよいヴァイスは、おとなしくシアンをおんぶする。

「わぁ♪　うーたん暖かいネ♪」

「その呼び方やめてよね。けっこう恥ずかしいんだからさ」

こんな会話を交わすと、セナとホノオの後を追っていったのであった。

こうしてキズナの４人は、ガルーラおばさんの倉庫とカクレオン商店を利用して、旅立ちの準備を整えた――ガルーラやカクレオン兄弟と、様々な会話を交わしながら。

「そっか。いよいよお父さんを探しに行くんだね」

今回のセナ達の旅の目的を聞いて、ガルーラがそう言った。ガルーラやカクレオン兄弟。独りぼっちだった頃のヴァイスの面倒をみていた、ヴァイスのよき理解者だ。

「うん！　絶対に、お父さん達ＯＮＥを見つけるんだ！」

「うぅ～。ヴァイス君っ、こんなに立派になって……。もうワタクシ感動だよ……」

「あたしもです、兄さん……。うぅっ、兄さーん！」

悲しみよりも、希望が勝っている。そんなヴァイスの言葉を聞くと、カクレオン兄弟は目に涙をためた。

「なっ、泣かないでよ、カクレオンさん！」

申し訳ない気持ちになり、ヴァイスは焦ってカクレオンに声をかけた。

「ごめんよ。つい……」

兄の、緑色のカクレオンは、涙を拭った。

「それで、どうやって探すんだい？」

弟の色違いのカクレオン――体が薄い紫色をしている――が、そう質問する。それには、セナが元気に答えた。

「人探しなら、ネイティオっしょ！　とりあえず精霊の崖に行ってみるわ」

やがて旅の準備が済むと、セナ達４人はガルーラとカクレオン兄弟の声援を受け、広場を後にしようとした。

中央にある、噴水の辺りを過ぎた頃。彼ら４人を呼び止める者がいた。――広場で占い師の仕事をしている、エーフィだ。スラリとした体に、神秘的な瞳。そんな容姿の彼は、セナとホノオに衝撃の事実を告げる。

「悪い予感がしたから、呼び止めたんだ。セナ君、ホノオ君。特に

君達には、何か“とてつもなく過酷な試練”が待っていると思う……」

「え……」

その宣告に、固まる４人。セナとホノオは、夜に見た怪しい夢を思い出すのだった。

ここがどこかは分からない。暗い一室で、胸に憎悪の感情を抱きながら、一つの装置と向かい合う姿があった。

「フフフ。いよいよ実践の時……。さらばだ。美波瀬那（ミナミセナ）」

何故か、セナの本名を知っている、この存在。彼が彼女か分からぬこの存在の行動が、キズナの、そしてガイアの運命を変えてゆく。

第１１話：旅立ちを染める闇――その２（前書き）

試験も終わり、いよいよヴァイスの父さんを探しに行くぞ！　って、意気込んでいたのに。

そんなオイラ――それからホノオを襲うのは、気味の悪い悪夢だった。

さらに、広場に行くと、占い師のエーフィから不吉な予言をされ……。

なんだか、嫌な予感がする。

（語り：セナ）

第11話：旅立ちを染める闇――その2

『本当に、気をつけてね』とエーフィに念を押され、キズナの4人はまずは聖なる森へと向かう。精霊の崖に行ってネイティオに会い、ヴァイスの父の居場所を聞くために。

重い足取り。沈黙する4人。そんな中で、まず第一に口を開いたのはヴァイスだった。

「エーフィの占いって、本当によく当たるんだよね。すごく不安だよ」

その言葉に、不機嫌そうに口をとがらせてホノオが問う。

「『よく当たる』って、何が根拠でそんなこと言ってるんだよ?」

ヴァイスはチラリとセナ――うつむき、ひとりで考え事をしている――の方をみると、話し始めた。

「ボクがセナと出逢う前の日。広場でボクが遊んでたら、エーフィがすっごく嬉しそうな顔をして、ボクを呼び止めたんだ」

そこで一旦言葉を切ると、ボクが何て言われたと思う? と、ヴァイスは瞳で皆に質問を投げかけた。ここでセナも、この話に参加してきた。

「『明日、運命を変えるステキな出逢いがあるよ』だってさ。当たってた。ボクはセナと出逢えて、孤独から解放されたんだ」

思わず顔を赤くするセナ。そんな彼を、シアンはじっと見つめた。

ホノオは、占いなど馬鹿馬鹿しいとでも言いたげに、ヴァイスから目を背けるのだった。

（オレは占いなんか信じねぇ。……でも、嫌な予感はする。あの、夢のせいで）

この会話を最後に、彼らは――シアンでさえも、黙ったまま聖なる森の入り口へとたどり着いたのだった。そこからしばらくは、草を踏み、時にはかき分けながら進む、４人の足音だけがやけに騒がしく感じたのだった。

「あら？　キズナの４人じゃないか。今度はどこに行くんだい？」

やがて４人は、メルの家の近くを通る。彼女は、木でできた小さな小屋の周りに咲き誇る、色とりどりの花壇の花に、水色のじょうろで水をやっていた。

キミが喋ってよ。いいや、お前が答えればいいじゃん。４人は、そう言いたげに、互いに異様な雰囲気の視線をぶつけるのだった。

「なに。どうしたんだい？」

そんな、暗い雰囲気の彼らに違和感を感じ、メルはまずはヴァイスを見て問い詰めた。メルに見られると、ヴァイスも黙っているわけにもいかなくなり、ついにポツリと抑揚のない声で呟いた。

「これから、いなくなっちゃったボクのお父さん、レッドを……。お父さん達の救助隊ＯＮＥのみんなを探すために、精霊の崖に行くんだけど……」

「旅立つときに、広場の占い師のエーフィに、不吉な予言をされて……」

ヴァイスが喋りだしたことできっかけができたのか、セナはヴァイスの途切れた言葉の続きを言った。そして、

「嫌な予感がするんだヨ」

セナの後に、静かに続いたのは、シアン。普段は空気が読めぬ彼でさえもこんなことを言い出すので、さすがのメルも驚いた。しかし。

「なんだい、そんな占いくらいで」

メルは笑顔を浮かべ、ケロッとそう言った。

確かに、ヴァイスやシアンにとっては、不吉な予感の要因は、エーフィの占いだけだが……。

「でも……！」

ホノオが、言いかけた言葉を飲み込む。嫌な予感は、占いなんかだけじゃないんだ。オレとセナがみた夢だって……。そう思ったホノオだが、誰が夢の話を信じてくれようか？　黙っている方が得策だと判断した彼の気持ちを解したのは、同じ内容の夢を見た、セナのみ。

ヴァイス、シアン、メルはしばし頭を傾げたが、メルは話を戻すのだった。

「とにかく、何なんだいアンタ達は。嫌な予感で暗くなるなんて、らしくないよ？」

そうは言われても、どこか腑に落ちぬ様子で、４人は小さくなる。

「アンタ達は今まで、多くの困難を乗り越えてきたじゃないか」

今まで出会った困難。その言葉に、４人は思いを巡らせた。

ハスブレロのブレロと、ブルーのブルルに、徹底的にじゃまをされた日々。独り抱えた、不思議な夢と、胸の不安。セナに出会うまでの道程での、危険な体験の数々。スイクンと戦い、友を守り、友が傷つき。喧嘩をしてしまい、本当に苦しかったこと。盗賊団との、ギリギリの戦い。異世界の者との接触。試験での、突然の邪魔者。

そんな体験や、その時に感じた想いが、一瞬のうちに皆の心の中で重なり、少しずつ輝きを増す。

「これからどんな困難があっても、アンタ達なら乗り切れるって、アタイは信じてる」

メルのまっすぐな応援で、４人は確信できた。そうだ。オイラ達なら。ボク達、オレ達、シアン達ならきっと……。

セナ達の顔に明るさが宿ると、いつも通りのやりとりが始まった。

「なーんだよお前ら。死んだようなツラしてて、バッカみてぇ！」

皆を指差しケラケラと笑うホノオに、非難が殺到する。

「ホノオ、人のことといえないじゃーん！」

「ああ、確かにオイラ達はバカ“みたい”だったが……」

「正真正銘おバカのホノオに言われたくないネ！」

そんな様子を見て、メルが言う。

「アハハ！　それでこそ、救助隊キズナさ！」

こうしてくだらない会話が発展し、いつものごとく、ホノオとシアンの喧嘩が始まり――そうになるが、それはメルが事前に防ぐ。そして一段落すると、メルがある提案を。

「花壇の花にやってた水が少なくなってきたんで水晶の湖まで水を補給しに行きたいんだよ。あそこの水をあげると、花の色が綺麗になるからね。だから、水晶の湖まで一緒に行かなかい？」

「わーい、お姉ちゃんと一緒だー♪」

ヴァイスの声は弾んでいる。

「メル姉がいると、オレ怒られっぱなしなんだよなー」

ホノオが苦笑いを浮かべて言うと、周りにいる皆がアハハと笑う。ちなみに、ホノオやシアンもメルと親しくなった今、ホノオはメルのことを『メル姉』、シアンは『ねーちゃん』と呼ぶようになっていた。

「それはアンタが問題児だからだよ。もっと落ち着きを持てば良いんだけどねぇ」

「そうそう！　ねーちゃんの言うとおりだヨ♪」

メルの言葉に賛成したシアンだが、彼の言葉は、すぐにセナが否定する。

「シアンが人に言えねぇよ」

「なんだとー！」

シアンは頬を膨らませて、セナを追いかけ始めた。――もちろん、ホノオ相手ではないので、シアンに攻撃の意志はまるで感じられなかった。

「にーげろー！」

セナは水晶の湖の方へと駆け出すが、すぐに草に足を絡ませ、転んでしまう。追いついたシアンはセナの背中にのしかかり、軽くセナの頭を叩いていた。

「結局、ボク以外はみんな問題児だよね」

ヴァイスがクスリと笑いながら言った。

「さ、アタイ達も行こうかねぇ」

ほとんど空になったじょうろをしっかりと持つと、メルは追いかけっこでわずかに遠ざかったセナとシアンの元へ向かう。

「悔しいけど、確かにうーたんには問題児要素が少ないよなぁ」

ホノオが歩き出しながらそう言うと、

「ホノオまで“うーたん”って言わないでよ！」

ヴァイスが頬を膨らませて答え、メルの後を追った。

こうしてキズナは、メルと共に水晶の湖へと向かったのだった。

メルの家から水晶の湖までは、さほど時間はかからなかった。10分ほど歩くと、一同の瞳には鏡のように綺麗に、森の木々やその隙間から見える空を映す湖が広がったのだった。それはとても広大で、神秘的。水は一切の濁りもなかった。

しばらく5人は腰を下ろし、のんびりとくつろぐ。

ふと、セナは何かに気がついた。広い湖の向こうから、何かがこちらへと駆けてくる。

「スイクン……かな」

水色の、スラッとしているがどこかたくましい体に、紫の美しいたてがみのようなものを背中でなびかせ、白いリボンのようなものが風に揺れる。その神秘的な容姿のスイクンは、今は小さくしか見えないが、どうやらこちらに近づいてきているようだった。

「おーい、スイクーン！」

一度は襲われ大怪我をしたが、今は心を許した存在。そんなスイクンに、セナは笑顔を向けて元気に叫び、小さな体を目立たせるために思いきり手を振る。パタパタと可愛らしく動く尻尾が、彼の喜びを表していた。

スイクンはグングンとセナとの距離を縮める。スイクンを初めて見るホノオとシアンはその速さに驚いていた。ヴァイスもスイクン

に手を振り始めたのだが、スイクンが近づくにつれて、メルはなにか違和感を覚えた。

（スイクン。だんだんこっちに近づいているのに、ちっともスピードを落とさないね。むしろ、だんだんスピードが上がっているんじゃないかい？　ちゃんと止まれるんだろうね？）

メルの違和感は次第に不安に変わる。そして、スイクンがかなり近づいてきた時に、とうとう確信したのだ。

「セナ、危ない！」

メルはのんきに手を振るセナに怒鳴る。

「……え？　うわ！」

ここでようやく、セナも察した。スイクンには、セナの前で止まる気はない。むしろ……突進を仕掛けようとしている！　ヴァイス、ホノオ、シアンも危機感を抱いたが、セナの目の前に迫っているスイクンからセナを救う術はない。

「うっ！」

セナの腹部を突き刺すように、スイクンは額についた紫の水晶をぶつけた。セナは苦しそうな悲鳴をあげると、思いきり弾き飛ばされ、生えていた森の木に激突。その木からは木片が舞い、ミシミシと音を立てて倒れるのだった。

「……セナ！」

そのあまりの威力に一瞬の間ひるんだが、セナの安否を心配し、ヴァイスが駆け寄る。他の3人も、それに続いた。

「大丈夫!?」

ヴァイスが仰向けに倒れていたセナを抱き起こすと、彼はきつく目を閉じて、いててと呟く。セナがゆっくりと目を開けてみるが、頭を強くぶつけたせいで、視界が揺らぎ、あまり気分が良くない。

「っ……!」

鋭く痛む頭を押さえながら、再びギュッと目を閉じた。

セナの元へと集まる一同に、スイクンも近づいてくる。しばらくはセナを心配してそちらばかり見つめていたが、ゆらりとできた大きな陰で、スイクンが背後に迫っているのを察知したヴァイス達。

「てめぇ、よくも!」

ホノオが恨みのこもった声で、振り向きながらスイクンを怒鳴った。

が、しかし。ホノオのその威勢も、スイクンと目が合うとピタリと静まってしまう。スイクンの、その、突き刺すような恨みがこもった冷たいまなざしを――まるであの、不吉な夢の中で見たまなざしのようなそれを、見たからだった。

第１１話：旅立ちを染める闇――その３（前書き）

びっくりしたよ。花壇の花に水をやっていたら、すごく暗い顔をしたキズナの４人がやってくるんだから。

不吉な予言をされたらしいけど、それくらいの困難なら、この４人は乗り越えてきたはずさ。そう言ってあげたら、すぐにいつものキズナが戻ってきたよ。

そして、アタイとキズナは水晶の湖に向かったんだけど……さっそくその予言とやらが当たったようだね。

スイクンが、セナに襲いかかってきたんだ！

（語り：メル）

第11話：旅立ちを染める闇――その3

「……！」

スイクンと目があったとたん、ホノオは硬直したように体や表情をこわばらせた。そして、その恨みのこもった冷たい目をしたスイクンの姿を見据えながら、一歩、また一歩と後退する。

「ホノオ？」

そんな彼の様子を見て、ヴァイスとシアンは心配そうに話しかけたが、その声はどうやら届いていないようだった。

こんな状況の中、勇敢にもスイクンを怒鳴りつけたのは、やはりメルだった。

「スイクン。アンタいきなり何するんだい！」

メルのよく通る大きな怒鳴り声を聞いても、少しも冷たい表情を崩さぬスイクン。静かに、その口を開くのであった。

「セナ、ホノオ。人間のお前達の存在こそ、このガイアの自然界のバランスを壊す元凶なのだ」

夢で見たのと、同じようなセリフ。オイラ達が、オレ達が、ガイアの自然を狂わせる……。

「な、何言ってるんだ？」

ホノオが声を振り絞って反論する。

「オレ達は、“ポケモン”って奴に、ガイアを守るために連れてこられたんだ。災害の元凶なわけねえだろ！」

次第に彼は勢いづき、声を荒げた。確かにホノオは、光の渦のような姿をした“ポケモン”と名乗る存在に言われたのだ。人間としての責任を果たし、ガイアの破壊を防ぐ。それが、セナとホノオの使命であると。

そして、腹部に衝撃を受けて苦しそうに呼吸をするセナも、喘ぎながらスイクンに聞いた。

「っ……。この前、アンタ……オイラのこと、認めて、くれたじゃん……。“救いの勇者”だ……って……」

自らを問い詰めるような切なさがこもったその声に、スイクンは感情を込めずに答える。

「誤審だったのだ。ホウオウ様からもご指摘をいただいた。どうやら、この前私がお前を救いの勇者と判断したのは誤りで……。セナにホノオ。この2人こそ、ガイアを破滅に追い込む、“破壊の魔王”である。これが、真実だ」

うそ……だろ？　セナはそのスイクンの言葉や態度で悲しくなる。焦りや恐怖よりも悲しさが勝る。優しくしてくれた、スイクンが、こんなに残酷な宣告を……。

セナに追い討ちをかけるのはスイクンの言葉。だが、その言葉を聞いて、セナはどこか違和感を感じる。

「よって私の使命は、お前達2人を消すこと。ホウオウ様からの御命令だ」

別に、スイクンの言葉はおかしくないし、至って冷静な雰囲気を醸し出している。でも、なにか“違和感”を感じる。なにか――。

そのセナの思考は、すぐに妨害される。

「私は使命を果たす。覚悟だ！」

その言葉と共に、スイクンの紅い瞳がぼんやりと輝く――が、セナを除いて、何が起こっているのか全く理解していない。

セナを、除いて。

「っ！」

突如、体にじわりと痛みを感じる。神経を直接刺激されているような痛みが、全身に――。その痛みは徐々に激しさを増してゆく。

「うっ……。うあっ！」

思わず洩れる悲鳴で、皆が異変に気がついた。セナを見ると、特に何をされている様子でもないのに、目をつぶり、歯を食いしばり、何かに耐えている。

これまでヴァイス達が異変に気がつかなかったのも、仕方がないだろう。スイクンは、瞳をぼんやりと輝かせた時、“神通力”という技を発動していたのだが……。この技は、“目に見えない不思議な力”で相手を苦しめる技なのだから。

「セナ、大丈夫！？」

「しっかりしろ！」

「どうしたノ！？」

ヴァイス、ホノオ、シアンが声をそろえて心配する。しかし、その問いに答える余裕もなければ、先ほど気になった“違和感”について考える余裕もなくなった。神経を引き裂かれたような――体が焼け尽きてしまいそうな痛みを感じたからだ。

「うわあぁぁーっ！！」

悲痛な叫びをあげて、セナは悶え苦しむ。メルはそんなセナを心配そうに見つめると、スイクンを鋭く睨んだ。そして、

「セナに何するんだい！　“冷凍パンチ”！」

右手に凍てつく氷、体に冷気をまとい、甲羅を背負っているカメールという種族からは想像できないくらいの速さでスイクンに迫った。

「くっ……」

さすがにこの、怒りのこもった高威力の技を阻止しなければならなくなり、スイクンは“神通力”を解除する。これと同時に、スイクンの瞳の淡い輝きは止む。その代わり、次の攻撃に移るために額の水晶が輝いた。

苦しみから解放されたセナだが、気を失い、地面に崩れ落ちた。スイクンは向かってくるメルを見据えると、ヴァイス達3人がセナに呼びかける声を聞きながら、攻撃を放った。

「“ハイドロポンプ”」

激しい水流がメルに襲いかかるが、メルは飛ばされないようにと踏ん張る。

「こんな水、アタイが凍らせて……！」

そう言いながら水に冷たい拳を押し付けるメルだが、スイクンの力が勝ったのか、激流に飲まれてしまった。

「お姉ちゃん！」

ヴァイスが悲痛な声でメルに呼びかけるが、メルはその声を聞いてニヤリと笑う。

「くっ……。だったらこれさ！　“ミラーコート”！」

メルが光り輝くと、彼女に襲いかかっていた激流が2倍の速さでスイクンに迫る。メルが“ミラーコート”を使って、“ハイドロポンプ”を跳ね返したのだ。

「っ……！」

正面からその攻撃を受けたスイクンは、表情をしかめて顔を背けた。そして攻撃が終わると、少し息を弾ませたメルとスイクンが睨み合う。

「アンタ達」

メルは少し離れたヴァイス、ホノオ、シアンに声をかけた。

「逃げようったってそうはいかせてもらえないことくらい、分かっているだろう？」

そのメルの言葉に、コクリと頷く3人。スイクンは殺気立っていて、とても和解できるような雰囲気ではない。殺されたくないのなら、戦いは避けられない。うまくここから逃げるには、スイクンを一度倒しでもしないと――。

そんな覚悟も込めて、頷いたのだ。

そして、ホノオがセナを背負うと、3人はメルの元へと向かった。

「セナはアタイが守る。貸しな、ホノオ」

そう言うと、メルはホノオの背中からセナを下ろし、自分の背中に背負う。完全に力が抜けて、呼吸が不規則なセナを肌で感じたホノオとメルは不安が募るが、その気持ちを紛らわすために軽く首を振り、メルはスイクンを睨んだ。

「覚悟はいいね？　いくよ、みんな！」

メルの言葉と同時に、ヴァイス、ホノオ、シアンは大きく息を吸い、スイクンを攻撃する姿勢に入った。

「“火炎放射”！！」
「“潮水”！」
「“ハイドロポンプ”！」

ヴァイスとホノオは燃え盛る“火炎放射”を、シアンは勢いのよい“潮水”を、そしてメルは、水タイプの大技“ハイドロポンプ”をスイクンめがけて放った。４つの攻撃は交わり、轟音を立ててスイクンに向かうが、スイクンはそれを見て鼻で笑うと、軽々と攻撃を避けた。

「人間。消えるがよい。“バブル光線”！」

スイクンは無数の泡を、水タイプの技が苦手なホノオに集中的に放つ。とても泡とは思えない素早さで、スイクンの光線は一直線にホノオに向かうが……

「へん！　そんなの食らうか！」

ホノオもまた、軽々とスイクンの“バブル光線”を避けた。

しかし、ここで油断したのがいけなかったようだ。

「フン。“風おこし”！」

スイクンは風を操って、無数の泡をそれに乗せる。そして、たくさんの泡がホノオの背後から接近する。これはホノオ以外の皆も予想していなかったことのようで、誰も為すすべもなく――

「うわあぁ！」

泡が、風によってホノオに強く押し付けられた。当たった途端に泡が強くはじけ、激痛を感じたホノオは悲鳴をあげる。そして、地面に強く引きずられるように、ヴァイス達3人から離れた場所へと飛ばされた。

スイクンはニヤリと不気味な笑みを浮かべると、ホノオに近寄る。それを見て、ヴァイス、シアン、メルは焦りを感じ、スイクンの背後から攻撃を放ちながら近寄る。

「“火炎放射”！」
「“潮水”！」
「“ハイドロポンプ”！」

しかし、つい先ほど悠々とかわされた攻撃――しかも、走りながら不安定に放ったそれ――を当てるのはやはり難しく、スイクンはそれを振り返らずにかわし、ついにホノオの近くまでたどり着いた。

「まずい！」

セナを背負ったメルは、少し動きにくそうにしてスイクンを追う。ヴァイス、シアンはその少し先を行き、スイクンがホノオに攻撃するのを阻止しようとした。しかしスイクンは、そんな3人に一瞥もやらず、ホノオに技を繰り出した。

「〝毒々〟」

自らのすぐ近くで、スイクンの声で小さく呟かれたその技名を聞くと、ホノオの背筋に寒気が走った。マズい！　そう思ったが、伝説のポケモンによって放たれた弱点のダメージが重く、体が動かない。そして、体の傷から強烈な猛毒がしみこんでゆくのを感じながら、意識が遠のいてゆくのだった。

「うっ……」

苦しさにうめくホノオを見ると、スイクンは向かってくるヴァイス達の方を向いた。

「あれ？　ホノオに何もしないの？」

スイクンが静かに〝毒々〟を使っていたことに気がつかず、ヴァイスはスイクンに近寄りながらそう疑問の声を洩らす。

「ふ。じきに奴は息絶える。後は、セナ。その人間さえやってしまえば！」

そのスイクンの表情はヴァイス達に重く突き刺さり、後々まで残ることとなる。とても、清らかな湖を護るものとは思えない、狂気に満ちた笑みは――。

「えっ。ホノオは？」

いよいよスイクンの近くにたどり着いたヴァイスとシアン。シアンがホノオの元へ歩み寄ると……

「ほ、ホノオ！」

シアンが甲高い叫び声をあげる。酷くぐったりとして、苦しそうにあえぐホノオを見たからだった。これはおそらく毒で――。そう判断したシアンは、ヴァイスにあるものを要求する。

「ヴァイス！　持ってきたモモンの実ちょうだい！」

「うん！」

ヴァイスは自分の赤いバッグをあさり、毒を消す効果のあるモモンの実を探した。しかし、それをスイクンがおとなしく見ているわけもなく、

「させん！」

そう言い放ち、ヴァイスに無数の泡――“バブル光線”を放った。

「わあああぁー！」

ヴァイスは悲鳴を上げ、技の勢いに飛ばされる。そして、メルのすぐ近くでピタリと止まると、倒れてしまった。

「ヴァイス！」

メルがヴァイスに声をかけたとたん、彼女の体を大きな影が覆う。スイクンが、近づいてきたのだ。

「おとなしく、セナを渡すのだ」

メルが背負った小さな者の命を、スイクンは要求する。

「あいにくその気はないね！　“ハイドロポンプ”！」

メルは至近距離で、スイクンの足に“ハイドロポンプ”を撃つ。強い水圧に押されてもスイクンの足元はわずかにしかふらつかなかったが、メルはそれで満足したかのように、笑みを浮かべる。そして、さらにスイクンに攻撃をしかけた。

「凍っちまいな！　“冷凍ビーム”！」

メルの口から、キラリと光る細かい氷のかけらが混じった冷気が放たれると、“ハイドロポンプ”により濡れていたスイクンの足が見る見るうちに凍りつき、体の自由を奪う。

「やった！　ねーちゃん！」

シアンが歓喜の声をあげ、メルはスイクンの顔を得意げに見た。

そして、自由の効かなくなったスイクンの横を、セナを背負い、ヴァイスを抱きかかえるという体勢で通り抜け、シアン――それから倒れたホノオの元へと急いだ。もちろん、猛毒に苦しむホノオにモモンの実をあげるのが第一の目的である。メルはホノオの元へ到着すると、セナとヴァイスを地面にそっと下ろした。そして、ヴァイスの赤いバッグからモモンの実を取り出し、ホノオに与えようとしたが、その時。スイクンが、ふふふ……、と不気味な笑い声を洩らしたのだった。

「な、何がおかしいんだい！」

メルはスイクンの態度が気に入らなく、スイクンを怒鳴りつけた。まだホノオにモモンの実を与えていないのだが。

「愚かな。この程度で、私の行動を封じたつもりなのか？」

いやな予感のする返答だが、メルはそれに強気に答えた。

「あら、残念だけど、それは違うね。アタイはただ、ホノオの毒を治すために、近くに来たかった。ただの、そのためだけの足止めのつもりだよ」

そこでメルは、ようやく目的を思い出し、モモンの実をホノオの口に運ぶ。モモンの実は少しずつかじられるが、ホノオが受けた毒は強く、どうやら1つでは足りそうになかった。さらにもう1つの実を取りだそうとメルが赤いバッグをあさり、シアンがその間にセナとヴァイスの回復のため、オレンの実をセナの青いバッグから探していると……。ガラスが割れたような、鋭い音が聞こえた。

とっさにメルとシアンは作業の手を止め、音がした方を見ると、スイクンの足にしがみついていた氷が全て割れて、地面にバラバラ

と散っていた。

「お前達は、どうして人間の味方をするのだ？」

メルにシアン。そして倒れているヴァイスにそう問いながら、スイクンは5人の元へ近寄る。そして、自分で聞いた質問の答えを待たず、すぐに次の言葉を重ねた。

「どうやら、ここにいる全ての存在を、消す必要があるようだな」

「なっ……！？」

スイクンの殺意が、皆に向く。その展開に言葉を失ったメルとシアンだが、1人、このスイクンの言葉に反抗する者がいた。

「待てよ……」

声がした方を見てみると、意識が戻り、体を起こして座っているセナがいた。いまだに呼吸は少し苦しそうだ。

「意味わかんねぇ。なんで、ガイアの破壊の元凶はオイラ達なのに、他のみんなも消そうとするんだ？　消すなら、オイラを消せよ……」

「セナ！！」

セナのその発言を聞き、メルは彼を怒鳴りつけた。そんなことを言うもんじゃない。そんな気持ちを込めて。

「ふ。面白いことを言うものだ」

スイクンはセナをあざ笑うかのような眼差しを向けた。

「だが。元凶の味方をするような存在も、このガイアで生かしてはおけんのだよ。ホウオウ様も、きっとこのようにお考えだ」

「ふざけるなよ！」

とうとうセナは怒り出し、拳を握ると右手につららを出現させた。メルに教わった“冷凍パンチ”――彼が応用し、拳からつららがでるようにしたもの――を使ったのだ。そして、スイクンに向かって駆け出すと、鋭利なつららをまるで剣のように振りかざす。

「おらぁ！」

セナがスイクンに迫ったまさにその時。突如物凄い勢いで、地面から淡い水色の水晶が飛び出した。その水晶はセナとスイクンを隔て、セナのつららの剣は水晶にぶつかる。刹那、水色だった水晶が赤く不気味に光り、セナの体に電撃のような赤い光線が襲いかかった。

「うわあぁぁーっ！！」

バチバチと猛威を振るうその攻撃を受けたセナは、聖なる森の神聖な空気を引き裂くような叫び声をあげた。右手のつららは完全にバラバラに砕け散っている。そして、水晶から衝撃を受けてメル達の元へとはじき飛ばされた。

「セナ！」

メル、シアンはもちろんのこと、意識が戻ったヴァイスや1つの

モモンで毒が軽くなったホノオも、声をそろえて叫ぶ。地面に叩きつけられたセナだが、必死にスイクンを見据え、体を起こそうとする。

「もう止めて！　無理しないでよ！」

ヴァイスが悲痛な声でセナに訴えるが、とうとうセナは再び立ち上がった。全身に傷を負い、痛みで体が裂けてしまいそうだった。

そんな、激しく呼吸をして、今にも倒れそうなセナを見ると、スイクンは再びあざ笑う。

「無駄な努力だったな」

そう冷たく呟くと、地面から巨大な水晶をいくつも出現させ、突風が辺りを吹き荒れる。

「あっ！」

せっかく立ち上がったセナだが、その風に押し倒された。地面に打ちつけた左腕が痛む。そして、以前スイクンと戦ったことのある、セナとヴァイスは確信する。この技は、もしかして“クリスタルストーム”。

「これで私の使命は達成だ」

そのセリフを、はじめはなんとなく聞いていたセナだが、もうろうとする意識の中、確かに悟ったのだった。さっきも感じた、スイクンのセリフに対する“違和感”の正体を。

「な、なにがおこるノ！？」

吹き荒れる暴風の中、セナの耳にシアンの不安げな声が届いた。

「みんな。なるべく近くに集まってくれ！　オイラがなんとかみんなを守るから！」

その問に答えるように、風に負けないほどの大声をセナは張り上げる。すると、５人は集合し、ピタリと互いに身をくっつけた。

「終わりだ。“クリスタルストーム”！」

スイクンのその声と、辺りの水晶が割れる音が、５人の耳へと届いたのだった。

第１１話：旅立ちを染める闇――その４（前書き）

襲いかかってきたスイクンに、オイラ達５人は立ち向かう――なんて言ってみれば聞こえはいいけど。正直に言う。オイラはあっという間に倒された。

もう一度スイクンに攻撃してみたけど、やっぱりかなわなくて。

……弱い自分が情けない。

なんて、落ち込んでいる場合じゃない！　スイクンの“クリスタルストーム”を、なんとしても防がなくっちゃ！

（語り：セナ）

第11話：旅立ちを染める闇――その4

強風と共に、鋭く尖った水晶の破片がセナ達5人に迫る。

「うわあ！」

「キャーッ、何アレ！？」

向かってくる無数の水晶片。初めて見るその凄まじい光景に、ホノオとシアンは悲鳴を重ねる。いよいよ水晶が5人を切り裂こうとした、その時。

「“守る”！」

強風で体を倒され、今なお尻餅をついているセナが、空に向かって高々と両手を挙げる。すると、淡い光のシールドが5人をドームのように覆い、水晶から皆を守った。

「す、すげぇぞセナ！」

「やったネ！」

ホノオとシアンが安堵して歓喜の声をあげるが、ヴァイスとメルはいまだ状況は厳しいことを悟る。苦痛でかたく目をつぶり、震えるその両腕でドームを押し上げるようにしてシールドを維持するセナを見たからだ。通常は自分のみにかかる技を、5人にも――しかもこれほど傷ついた状態で使用する彼は、いつ倒れてもおかしくなかった。そしてそれはシールドの消滅を意味し、いまだにシールドの外の世界を地獄へと化している水晶の嵐、“クリスタルストーム”の直撃を――。

このような状態を踏まえ、メルは自らの両手を空に突き上げた。

「“守る”！」

彼女もまた“守る”を使うと、消えそうだったシールドの光が強くなる。

「セナは休んでな！　そんでみんな、今のうちにバッグから木の実でも引っ張り出して各自で体力を回復しな！　早く！」

テキパキとした指示にキズナの４人は頷くと、バッグの中身を手当たり次第に外に出し、目的の木の実を見つけてはかじりついた。セナやヴァイスの傷は癒え、ホノオに残っていた毒の苦しみは完全に抜けた。シアンはのんきにも自分が好きな、甘いモモンの実を食べて、少し幸せな気分になった。

しかし、回復を終えた４人がメルを見たとたん、表情が引きつる。

「あっ、姉貴！」

思わず叫ぶセナの視線の先には、歯を食いしばってシールドを張り続けるメルがいた。

「うわ、まずいよ！」

そう叫ぶヴァイスの視線は、荒れ狂うシールドの外を見ているようだったが、実際には少し違う。彼が発見したのは、次第に光が薄くなり、消えつつあるシールドの壁。そして外のスイクンはいまだにこちらを睨みつけている。まだまだこの嵐を止ませない。語らずしてそう訴えていた。

「姉貴、休めよ！　今度はオイラが！」

これ以上メルに任せることに危機感を感じ、再びセナも“守る”を使うが、その効果も長くは続かなかった。とうとうシールドは静かに消滅するのだった。

「わあああぁ！！」

声を重ねるのはヴァイス、ホノオ、シアン。

しかしメルは、風に吹かれながら目を閉じ、軽く息を吸った。刃物のような水晶の破片がすぐそばに迫ったが、その時、メルは行動を起こした。

「“波乗り”！」

メルが地面に手をつくと、5人の周りの地面から勢いよく大量の水が飛び出し、その勢いは水晶の向きを変えてしまった。吹き出し続ける津波のような水は、セナ達の周りに新たな分厚い壁を作ったのだった。

しかしこれにスイクンは相当苛ついたようで、歯をむき出しにするような恐ろしい表情で風を強化する。すると、ピンと空に伸びていた水の壁が、ぐにゃりと変形しだした。今にも水晶が突き出てきそうである。

メルは舌打ちすると、セナに指示を出した。

「セナ、“雨乞い”使えるかい！？」

「あぁ！」

メルの突然の要求に即座に答えたセナは、空に片手を向けると雨

を降らせた。すると、その効果でメルの“波乗り”の威力が増した。再び勢いを取り戻した水の壁の外では、メルでさえ簡単に吹き飛ばされてしまいそうなほどの風が吹いている。“波乗り”でできた壁から飛び散る水しぶきや、強風のせいで横殴りに降る雨が、飛び交う無数の鋭利な水晶を濡らしていた。

しかしメルも、やはり技を使い続けるのはキツいようだ。地面から手を離し立ち上がると、みるみるうちに壁が低くなる。

「わあっ、セナ！」

自らに大量の水が強く降りかかりそうになるのを見たヴァイスは、思わずセナに抱きついた。セナは小さな体でヴァイスを水から守ろうとし、彼に覆い被さる。

今度こそ終わりだ。そう思ったキズナの４人を救うのは、勇敢な彼女の声。

「ねらい通りさ！“吹雪”！」

メルのその言葉とともに、崩壊中の水の壁の外の暴風に冷気が乗る。辺りを駆け巡る凍てつく風はあっという間に水の壁を氷の壁へと変え、セナ達は大量の水の直撃と水晶の直撃……二つの難を免れた。

さらに5人とスイクンを隔てる壁の外部では、“波乗り”や“雨乞い”の効果で塗れていた水晶が徐々に凍り付いている。いまだ効果の続くセナの“雨乞い”の豪雨は、吹雪の凍てつく風に乗り、水晶に付着。それが次第に凍りつき、徐々に水晶片は大きな氷の塊となる。すると、セナ達を囲む高く硬い氷の壁の外で、風を操るスイクンは表情を歪める。辺りを舞っていた水晶片が氷のせいで重くなり、それらを宙に浮かせるのが困難になったのだ。

「くっ。私は……。私は、使命を！」

執念をあらわにして歯を食いしばり、風を強化しようとするスイクンだが、さすがの彼にも限界が来たようだ。水晶が閉じ込められた重い氷の塊は鈍い音を立てて、凍りつく地面に落ちた。

「“私”は、使命を……ね」

ふと、セナがニヤリと笑いながら呟く言葉に、皆が首を傾げた。そんな皆の様子を見て、セナはさらに得意げに笑う。そして、透き通る氷の壁の外を見ると、どうやら暴風――“クリスタルストーム”は、完全に止んだようだ。

スイクンは息を切らし、こちらを憎たらしそうに睨んでいる。

「さて。種明かしでもするかな」

急に態度に余裕が出てきたセナは、“冷凍パンチ”を使用して右手につららを生やす。そして、自分達を囲む氷の壁に何度もつららを突き刺し、壁から出るための穴を開けた。

「姉貴、お疲れ！　行くぞ。みんな」

そう声をかけて穴から外へでるセナの後に、ヴァイス、ホノオ、シアン。そして、強力な技の使用が重なり、少し息を切らせたメルの順で続いた。先ほどの“雨乞い”で濡れた地面が“吹雪”で凍りつき、足の裏がヒヤリと冷たい。ひゃあ、冷てぇ！　などと声を上げ、おどけるセナだが、どこか緊張を隠しているように、ヴァイスには見えた。おそらく、今まで演じていた余裕の裏には、彼が掴んだ真実が。

「こしゃくな……。私の“クリスタルストーム”を防ぐとは！」

スイクンはセナ達を睨みつけ、額の水晶を光らせた。息を荒げ、憎しみで表情が歪んでいる。

「げっ、マズいぞ！」

地面がツルツルに凍り、うまく移動ができない。そんな状況で、スイクンの技――おそらく繰りだそうとしているのは“ハイドロポンプ”――が放たれたら……。

焦るヴァイス、シアン、そして声を上げたホノオに、息を吸い攻撃の相殺をしようと考えるメル。1人微笑みを浮かべるセナは、スイクンに話しかけた。

「たかが技一つ防がれたくらいで、なにそんなにムキになってんだ？　別にスイクンの力があれば、ほかの技でオイラ達殺すのだって簡単じゃん」

「うるさい！　私の究極の技をお前達などに防がれるのは心外なのだ！」

いまだに少し呼吸が荒いスイクンは、セナの言葉にムキになってそう反論するが、セナにはその姿は何かを必死に弁解するかのように見えて、滑稽だった。

「まぁ、今のアンタじゃ、“クリスタルストーム”を使った後にそれだけ息を切らしてるのも頷けるがな。……ボロがでてるぞ！　お前は誰だ！」

突如余裕の表情を破り、セナは声を張り上げ、スイクンを鋭く睨みつけた。

「なっ……！？」

セナの言葉を聞いたとたん、ヴァイス達は驚きの表情をセナに向けた。

「フフフ。頭がおかしくなったのか。私のどこがスイクンではないと言うのだ？」

今度は皆の視線が、発言者のスイクンに集まる。心なしか、スイクンの表情はかたく見えた。

「バーカ。そのセリフに証拠があるんだよ。『私のどこがスイクンではないと言うのだ？』……このセリフ、よく覚えてろよ」

怪訝な顔をするスイクンに、表情に疑問符を浮かべるヴァイス、ホノオ、シアン、メル。

「あのなぁ。スイクンの一人称は『我』。ついでに二人称は『汝』。アンタみたいに、『私』とか『お前』とか言わないんだよ！」

刹那、スイクンはハッと目を見開く。

「あっ！　そういえば！」

ホノオやシアンはスイクンに会ったことがなかったためぽっとしない表情だったが、かつてのスイクンを思い出したヴァイスは納得すると共に叫んだ。水晶の湖の近くで暮らすメルも何度かスイクン

と言葉を交わしたことがあったため、あっと驚いたようにセナを見た。

「ずっとさ、スイクンと話してるのに相手がスイクンじゃないような“違和感”があったわけ。『我』とか『汝』とか言ってる方が、スイクンらしいもんな」

セナはじりじりとスイクンに近づきながら、その目を見て問い詰める。不意をつかれて攻撃準備を解除してしまったスイクンは、しばしの間、表面にはあまり出さぬが激しく動揺した。

「まぁさ、一人称とかが変わっただけで別人とは言い難いんだけどね。でも、ありのままのスイクンだとも言い難いようだな？」

自分の考えが的中したことを悟ったセナは、完全に強気な姿勢でスイクンに話しかける。

「すごい……セナ」

ヴァイスがただただ呆然と呟く。ホノオやシアンもようやく状況が飲み込めてきたようだ。メルは腕を組み、静かにセナとスイクンのやりとりを見つめる。

「もう一度、聞く。お前は誰だ？　本当にスイクンなのか？」

スイクンのすぐそばに歩み寄ったセナは、見上げるようにスイクンの目を睨む。

「……ふふ」

少しの間沈黙したスイクンだが、やがて不敵な笑みを浮かべた。

「な、何がおかしいんだよ!?」

怒鳴ると同時に、その笑みから良からぬ何かを感じ取り、セナは警戒して少しスイクンと距離を置く。

「フハハハハ、面白い！　お見事だ！」

狂ったように笑うスイクン。セナ達の耳に届くその笑い声は、なんとも不快な響きを奏でる。

「セナは正解なんだな!?　じゃあ正体を教えろ！」

ホノオはスイクンを怒鳴りつける。今まで自分達を消そうとしていた存在に対する怒りが押さえきれず――。

「“我”の正体、か。それを今ここで教えてしまうのも、そして“汝”達をここで消してしまうのも……。惜しい。あまりに惜しい」

スイクンはさりげなく一人称と二人称を直した。そしてさらに続ける。

「セナ、ホノオ。今回は見逃してやろう。汝らの処分など、“奴ら”に任せれば良いのだ」

「“奴ら”って、誰のことなの!?」

ヴァイスの問に答えず、スイクンはセナ達に背を向ける。

「逃げるのか？」

セナはスイクンを挑発するように話しかける。

「ならばここで殺して欲しいのか？」

背を向けたままだが、スイクンの言葉は威圧的で、思わずセナは返答の言葉を詰まらせる。しかし、そこで強気になれる彼女がいた。

「あら、災いの元凶“破壊の魔王”を生かしといていいのかい？」

「メル姉！」

「ねーちゃん！」

メルの言葉で再びスイクンが襲ってくることを恐れ、ホノオとシアンは焦ってメルの言葉に怒鳴り声を重ねた。

「最終的に我が勝てばよいのだ。ガイアが滅びぬ前に……。心配無用、策はとうに練ってある」

その言葉を言い終えると、スイクンは足に力を込めた。

「さらばだ」

凍った地面を滑ることなく蹴り、スイクンはどこかへと駆け出す。

「おい待てよ――うわぁ！」

セナは追いかけようとするが、見事に氷に足を滑らせ、転んで地面に顔をぶつけた。

「いってぇ……」

セナが苛立ちの混じった声で呟き、顔をあげると、スイクンの姿はすでに見えなくなっていた。

まるで取り残されたように、呆然とスイクンが向かった方向を眺めるセナ達5人。先ほど“吹雪”を使用した影響は今なお強く、辺りの空気がヒヤリと彼らの頬を冷やす。足の裏――転んでうつぶせのセナの場合は体中で直に感じる地面の氷の冷たさが、彼らの心を刺すのだった。

第１１話：旅立ちを染める闇――その４（後書き）

第１１話はこれで終わりです。

スイクンの一人称、二人称についてですが、お時間のある方はちらっと確認してみていただければ幸いです（笑）

『水晶の湖にて――その２』もしくは『水晶の湖にて――その３』を読んだ後に、『旅立ちを染める闇――その３』を読んでみると…

…たしかに、前回から密かに変わっていたのです。

第１２話：月夜の決断――その１（前書き）

セナとメル姉のアイデアで、なんとかスイクンの“クリスタルストーム”を防ぐことができた！

さらに、セナによると、この“スイクン”はどうも“おかしなスイクン”らしいんだ。その予想は大当たり。それで、スイクンは、ひとまずオレ達を見逃してくれた。

――くれた、と言ったが、感謝なんてもちろんしてないよ。むしろ、まだ何か企んでいそうで、今後も気を抜けないなって思った。

（語り：ホノオ）

第１２話：月夜の決断――その１

聖なる森の木々の間から漏れる光が、赤みを帯びてきた。時は夕方。もやもやとした思いを抱えながら、セナ達はメルの家へと引き返した。

メルの家の花壇の花々は、夕陽で姿を赤く染め、メルの帰宅を喜んで迎えているようだった。先ほどスイクンに襲われる、というアクシデントがありながら、冷静なメルはきちんと水晶の湖の水をじょうろに汲み、持ち帰っていたのだ。セナ達キズナの４人を先に家の中へと入れてやると、メルは家の周りを覆う花々に水をやり始めた。しかし、さすがのメルでも、その表情からは疲れがうかがえた。

結局、この日はメルの家で夜を過ごすことになった。夕ご飯として、メルは木の実を使った温かいスープを作ってくれた。メルの家の居間にあるテーブルは、元は４人用だったが、今は、５人の中で一番小柄なシアンがテーブルの短い辺の位置に椅子を置いて座ることで落ち着いている。メルとヴァイスが隣同士で座り、それと向かい合うようにセナとホノオも――。このような位置関係で、なんとも静かな夕食の時間が始まったのだった。

「なんかさ」

彼らしくなく、ポツリと言葉を発するホノオに、皆の注目が集まる。

「今こうして飯食ってるのが奇跡みてぇ。本当に、今日は駄目かと思った」

普段ならこのような言葉は慎んで欲しいものだが、さすがに今日

は、共感せずにはいられなかった。

「セナとねーちゃんがいなかったら、大変だったネ……」

珍しくもっともなことを言うシアン。

確かに、“クリスタルストーム”を防いだのはセナとメルの技であり、もし防ぐことができていなかったら――嫌な場面しか想像できない。シアンはただ事実を述べただけに等しいのだが、しかし、その何気ないセリフで、深く考え込むセナだった。

（そうだ。今オイラ達が無事でいられるのは、姉貴が居たから。……オイラだけじゃ、何もできなかった）

心が沈むと、その沈んだ深さに伴って、どんどんスープを飲む速度が遅くなる。

「結局、あのスイクンって何者だったんだろうね？」

ヴァイスの問にはメルが答える。

「可能性がありすぎて、なんとも言えないね。あれが完全にニセモノなのかもしれないし、はたまた操られているか……」

まだ浮かんだ考えがあったが、セナとホノオを深く傷つけるであろうその仮説を、メルは心の奥底にしまい込んだ。

（セナとホノオが破壊の魔王とかなんとかじゃあないという保証も、残念ながらないね。今日のスイクンの話が本当で、世界を守るために何者かが仕込んだということも……）

考えるのをやめ、メルはまだ熱いスープをスプーンで口に運ぶ。
そして、重い話題を無理やり転換することを試みた。

「どうだい、今日のスープは？　元気が出るようにオボンの実を入れてじっくり煮込んだんだけど……」

“オボンの実”とは、オレンの実同様、体力を回復する力のある木の実だが、その力はオレンよりも強い。

「うん。おいしいよ、お姉ちゃん！」

ヴァイスはメルの気遣いを察して、微笑んでメルを見ると、また一口スープを飲む。

「初めて会ったときのイメージからは想像つかねぇな。メル姉がこんなに料理上手いの」

ホノオも明るく微笑むと、ほめ言葉かどうか、微妙なセリフをメルに贈る。

「シアンはオボンも好きだけど、モモンの実がだーいすき！　ねーちゃん、今度シアン達にモモンでデザート作ってヨ♪」

シアンが可愛らしくメルにおねだりをする。

「あぁ。いつでも作ってあげるよ、シアン」

「やったー！」

シアンが歓声を上げると、ヴァイスとホノオはやれやれと言いた

げにシアンを見る。
何気ないこの一時は、こんなにも幸せで――。だからこそ、セナは哀しくなる。自分の頭の中で、ある結論がまとまったのだ。
スプーンをスープの器に沈めたまま、わずかにあがる湯気を見つめている。
「セナ」
ふと、ヴァイスに呼ばれた声で我に返った。
「スープおいしいね、セナ♪」
ニコリと微笑むその笑顔は、少しまぶしい。
「お前がいらないなら、オレが飲んでやるけど？」
ホノオは隣に座っているセナの器を、自分の近くに軽く引き寄せる。
「悪い。そうしてくれないか？」
「……は？」
冗談のつもりでホノオはそう言ったのに、セナはスープを手放す。普段なら、一番に完食しておかわりをもらいに行くようなセナが――。
「あら。あんまりおいしくなかったかい？」
メルは少し残念そうな顔で言うが、セナはその問いかけに首を振

る。

「いいや。ごめんな姉貴。今日はちょっと、体調良くないんだよ……」

苦笑いしてそう言うと、静かに立ち上がる。

「ごめん。先に寝室で寝てるわ。おやすみ」

「ああ。おやすみ、セナ」

メルは少し心配そうにセナを見て、視線で彼を見送る。寝室の扉を静かに開けたセナの姿が見えなくなると、彼が残したスープが寂しげに湯気をたてていた。

寝室に入るなり、セナは肩から下げていた青色のバッグを枕元に置き、一番手前の布団に仰向けに倒れた。ふかふかの布団は、セナの体を優しく迎えてくれ、ほんの一瞬だけ気持ちが安らいだ。

長い長いため息をつき終えると、セナのお腹がおかしな音を立てる。何だかんだで、実はお腹が空いていて、体調も良好だったのだ。空腹に耐えられなくなったセナは渋々と体を起こし、アイテムの入った青色のバッグを自分の近くに引き寄せる。そして、真っ赤に熟れたリンゴを取り出し、無心でそれにかじりついた。

おいしい。先ほどみんなで食べた、メルの温かなスープの方がおいしいはずなのに、1人で食べるひんやりとしたリンゴの方が、おいしく感じてしまう。そんな自分をあざ笑いながら、セナはまた一口リンゴをかじる。

あっという間に食べ終わると、今度はモモンの実をバッグから取り出した。が、その実を手に取って眺めながら、もの思いにふける。

このモモンの実一つ取っても、これまでポケモンとして過ごしてきた日々を実にたくさん思い出せる。

救助隊キズナとしての初めての依頼は、まずは毒を負ったピカチュウのキラロの救済から始まった。

その時に世話になったのが、モモンの実。

セナ達が初めて依頼に失敗した時は、確か、届けるはずのモモンの実を奪われてしまって。

ヴァイスと喧嘩をし、腹を立てて立ち去ったセナを襲ったのは、キノココ達の毒だった。ヴァイスが食べさせてくれたモモンの実のお陰でセナは一命をとりとめ、ヴァイスとも仲直りしたのだった。

どの思い出の、どんな時も、いつも隣にいたのはヴァイスだった。支え合い、共に泣いたり笑ったり……。

それなのに――。今晩、セナがしようと決心した行動は、確実にヴァイスを哀しませる。これを、裏切りと呼ぶのか呼ばないのか？

セナが今欲しいのは、その答えだったのだ。

次第に目にたまる涙が、視界に映るモモンの実を歪ませる。その光景を、まるで今までの思い出が崩れ去っていく比喩のように感じられたセナは、急いでモモンの実にかじり付き、胸に思い出を焼き付けた。

セナが再びモモンにかじり付こうとすると、コンコンと寝室のドアをノックする音が聞こえた。

「セナ。大丈夫？」

そう声をかけながら、少しだけ開けたドアの隙間から顔を覗かせるヴァイス。そして、モモンの実を食べている彼を見ると、おかしそうに吹き出した。

「なんだよ」

少し無愛想にセナが言うと、ヴァイスは湯気がたくさん上がっている、温かなスープの器を片手に寝室に入ってきた。

「結局お腹空いてたんだね。やっぱりスープ持ってきて良かったよ」

そう言うと、セナの目の前にスープの器を置き、ヴァイスはセナの隣に腰を下ろす。

「さっきのぬるくなったスープはホノオが飲んでくれたから、お鍋に残ってたのを温めたんだ。飲んでよ。おいしいよ♪」

食べかけのモモンの実を置くと、セナはスープから漂う白い湯気を見た。それはまるで、仲間の優しさをそのまま表したようで――。余計に、悲しくなった。

「さんきゅ」

そっと熱い器に触れ、スプーンでスープをすくう。一口飲んだスープは、なぜか先ほどのリンゴよりもよほどおいしく感じられた。

ヴァイスはセナを微笑んで見ているが、その一方で、あることを思案していた。食事を終えたセナに、どのように話しかけようか？

セナは、ヴァイスが答えを見つけるのを待ってはくれず、夢中でスープを飲む。そして、空になった器を置くと、ふぅ、とため息をついた。

「なんで……」

不意に、セナはヴァイスに話しかけた。

「なんで、オイラが腹減ってるのが分かったん？」

言葉が寂しげに宙を舞う。

「だって」

ヴァイスは表情を暗くして、静かに答え始めた。

「セナが悩んでるのって、本当によく分かっちゃうんだ。キミは驚くだろうね。うまく隠してるつもりだもんね。でも、そんなことないよ。すっごくへたくそ」

「あ、そ」

空になった器をいつまでも見つめ、セナは静かにつぶやいた。

「あのさ」

ヴァイスはセナの目を見て話すが、視線はぶつからない。

「セナは、何も悪くないんだからね？」

まるで、今までセナは自分が悪いと思っていたかのような、見透かした言い方。だが、事実そうだった。

「スイクンに襲われたことだってセナが悪いんじゃないし、ボクはセナとホノオが破壊の魔王じゃないって信じてる」

「でも」

セナは自分が抱えていた最大の悩みを、ヴァイスに打ち明けた。

「スイクンはオイラ達を狙ってあんなことしてきたのに、お前達まで危険な目にあって……。それなのに、オイラの力じゃお前達を守ることすらできないんだよ。姉貴がいたから、オイラ達は今無事なんだ。姉貴がいなきゃ、オイラは何の役にも……」

言葉の最後を濁らせ、セナは続ける。

「こんな無力な奴が、救いの勇者なわけないよな……」

バッグの中から、かつてのスイクンにもらった勇者の証、ホーリークリスタを取り出して見つめながら、セナは吐き捨てる。淡い水色の水晶の中で、虹色の羽根が美しい色を放っている。

「……バカ。セナのバカ」

ヴァイスは目に涙をためて、セナを睨みつけた。

「“守ること”は義務じゃないんだよ？　どうしてセナばっかり抱え込まなきゃいけないのさ」

「……」

言いたいことはあった。でも、うまく形にならなくて。

「それに、セナはこれ以上何かを守らなくてもいいんだよ。ボクはもう、充分過ぎるくらいキミに助けてもらっているから。だから……」

言葉を区切り、ヴァイスは続けた。

「もし例え、キミ達が破壊の魔王でガイアの災害の元だとしても、ボクは絶対にキミの味方をするから。キミも、ボクを信じてよ」

ヴァイスの、痛いほど真っ直ぐな眼差しが、セナの頬に当たる。でも、セナはそれに答えることができなかった。

しばらく沈黙が続くと、ヴァイスはそっと立ち上がり、寝室から立ち去ろうとする。しかし、振り返ると視界に映るセナの背中は、あまりにも頼りなくて、今にでも消えてしまいそうで……。切なくなったヴァイスは、背後からセナを抱きしめた。

「ヴァイス？」

少し驚いたのか、小さくセナの肩が跳ねた。

「ごめんね、セナ。偉そうなこと言っちゃって。辛かったんだよね。自分の存在が否定されちゃったんだもん」

「……うん」

セナが小さく頷くと、ヴァイスは優しい言葉をかける。

「ボクは、セナがいなきゃダメなんだから。だから、ボクのためにも、自分を大切にしてね」

ヴァイスはそっとセナから体をはなすと、今度は静かに寝室から出ていった。

「ヴァイス」

ヴァイスが出て行った後も、セナは扉をじっと見つめた。

「でもさ」

誰もいなくなった空間で、セナの小さな声がポツリと生まれては消える。

「守りたい奴を守れないのって、辛いことなんだよ……ヴァイス」

ヴァイスとの会話で言いそびれた言葉を、つぶやいたのだった。

ヴァイスはいつも優しく接してくれて、何度もセナの折れそうな心を支えた。

でも。

だからこそ。

自分が決めたことを、曲げられなかったのだ。

誰も聞くことができないセナ心のつぶやきが、セナの中では何よりも悲痛な音をあげた。

ゴメンな、ヴァイス。

第１２話：月夜の決断――その２（前書き）

スイクンは、人間であるオイラ達を狙ってきた。でも、オイラだけの力じゃ、スイクンからヴァイス達を守れなかったわけで。

ダメだよ、こんなんじゃ。絶対にヴァイス達に迷惑かけちまう。

――だからオイラは“決意”したんだけど。ヴァイスの優しい言葉が、態度が、逆に痛い。

（語り：セナ）

第１２話：月夜の決断――その２

時間は前後するが、その日の夕暮れ時のことだった。
セナ達の元を去ったスイクンは、とある場所に向かって駆けていた。その場所は、はるかぜ広場の近くの丘にある救助隊連盟本部だった。ペリカンのようなポケモン、ペリッパーの形をした少々間の抜けたその建物に、恐ろしい野望を抱いた者が間もなく訪れようとしていた――。

風を身にまとい駆けてきたスイクンの足が、本部の前でピタリと止まった。

「ここか」

彼は間抜けな建物を見て鼻で笑うと、その建物の中へ。
本部に入ってきたそのポケモンに、注目しない者はいなかった。様々なランクの救助隊が、依頼の成功を受付のペリッパーに報告していた時分。その美しく、神聖なポケモン、スイクンに、皆の視線が集まった。ペリッパーに、３０人ほどの救助隊の隊員のポケモン。そして、その中には、かつてセナ達を助けたマスターランクの救助隊、ＦＬＢもいた。
スイクンが、３つのうち入り口に一番近い受付に向かうと、そこでペリッパーと話をしていたポケモン達がサッとよけた。そして、唖然としているペリッパーに、スイクンは静かに話しかける。

「ペリッパーよ。頼みがあるのだ」

「た、頼みと申しますと？」

伝説のポケモンであり、さらにガイアのポケモン達の間で信頼されているスイクン。その存在を目の前にすると、普段は陽気なペリッパーもさすがに緊張しているようだ。

「今すぐガイアの全救助隊に向けて、号外を発行して欲しいのだ。明日の早朝に、この本部がある丘に、全救助隊が集まるようにな」

何があったのだろうと不思議に思いながら、ペリッパーは、はいと頷く。

「何があったのだ？」

ＦＬＢのリーダー、フーディンが、スイクンの迫力にひるまずに聞く。

「明日の朝に、我が直々に話す。……皆！」

スイクンが本部にいた全ての救助隊員のポケモンに向けて話しかけると、全ての顔がすぐさまこちらを向いた。

「明日に早起きができるよう、今日は早く寝るのだ。世界の運命がかかっているのだからな」

そう言って、スイクンは本部を出るとどこかへと駆けだしてゆく。本部に残されたポケモン達は、スイクンが言った重すぎる言葉のせいで、しばし固まっていた。

世界の運命がかかっている。

セナは静かに体を起こし、寝室を見回す。深夜の聖なる森にはホーホー達の声が深みを持って響き、辺りを照らすのは大きな満月だけだった。窓からもれてくる月明かりに照らされたヴァイス、ホノオ、シアン、そしてメルの寝顔を見るが、やがてそれらは涙でぼやけてしまった。

皆が眠っているのを確認すると、セナはゆっくりと立ち上がり、青いバッグを肩にかける。そのバッグの重みは、まるでセナの行動を阻止しようとするかのように感じられたが、迷いはなかった。そして、自分の隣で眠るヴァイスに、小さな声で話しかけた。

「ヴァイス。今までありがとう。でも、ゴメン。オイラは行くわ」

返ってきたのは、ヴァイスの静かな寝息だけだった。

「みんなも、じゃあな。ホノオ、殺されるんじゃねぇぞ？」

昼間のスイクンの言葉だと、セナとホノオは再び命を狙われるかもしれない。セナはホノオの身を案じ、優しく声をかけた。仰向けで寝ていたホノオだが、セナが言葉を言い終えるとすぐに、寝返りをうってセナに背中を見せた。

「……いこう」

自らの決心を固めるために、セナはこう呟くと寝室の扉のドアノブに手をかけた。そして。静かに扉を開けて、寝室を――メルの家を、去ったのだった。

セナは静かに夜の森を歩き出す。ホーホーの鳴き声、生い茂る木の葉、寂しげな月明かり。悲しいはずのセナだが、辺りの情景が不

思議なほど素直にセナの心に映った。
ホーホー達が鳴く声に混じり、時折彼らの会話が混じって聞こえた。
あの子、こんなに遅くにどうしたんだろうね？　悲しそうな顔をしているね。お友達と喧嘩しちゃったのかな？
「うるせぇ」
誰にも聞こえないように呟くと、セナはとある場所へと足を速めた。
昼間に宙を舞い、セナ達を切り裂こうとした水晶の破片は、すでにまとっていた氷の衣を失い、月の光を浴びて鋭く光っている。水晶の湖へとやってきたセナは、湖の近くに腰を下ろすと、辺りに無数に散らばる水晶の破片のうちの一つを手に取った。
月光を当ててまじまじと眺めると、それは凶悪な光を放つ。そっと、水晶のとがった部分を指でなぞると、ぞくりと背筋に寒気が走った。
もし、こんな攻撃をまともにくらったら――。いや、姉貴がいなけりゃ、食らってたよな。
ため息をつき、セナは1人呟いた。オイラは無力だ、と。
自分に命を狙う敵からみんなを守る力がないことは、スイクンに思い知らされた。真っ先にやられたし、関係のないヴァイスまで傷ついた。
だから、いいんだ。オイラがみんなの元を離れる。これが、みんなを守るためにオイラができる、たった一つのことだから。
ホノオは――。確かにホノオも人間だし命を狙われているが、ホノオに自分の考えを話しても無駄だということくらい、分かってい

る。『何バカなこと言ってるんだ！』って怒鳴られて、連れ戻されるのがオチなんだから。それに、ホノオ1人くらいなら、みんなで力を合わせれば、守れるはず。

重荷は、少ない方がいいんだ。

この直後、まさに考えていた存在から声をかけられるなんて、セナが予想をしていたわけもなかった。

「よぉ、セナ」

聞き慣れたその声が耳に届くと、セナは硬直した。きっと、後ろを振り返ると、奴がいる。分かってはいるけど、怖くて振り向けないでいた。

「散歩……なワケないよな」

セナの青いバッグを見ながら、ホノオはそう呟く。ただの散歩で、こんなものを持ち歩く必要などないのだから。

これからホノオにどんな説教をされるのだろうか？　自分にとって、痛い言葉ばっかりなんだろうな。と、すっかりホノオを恐れているセナとは対照的に、ホノオはのんきにヨイショ、と呟くとセナの隣に腰を下ろした。

「でっかい月だなぁ～。キレイに湖に映ってんな」

間の抜けた声でセナに話しかけるホノオ。その顔には笑みが浮かんでいるが、ホノオを見ようとしないセナにはそれは届かなかった。

「なんでここに来たん？　ホノオ」

恐る恐る、セナは聞く。いつホノオに怒鳴られても良いように覚悟を決め、心に壁を作りながら。

「ん？　いやぁ、なんか、悪夢を見るのが怖くなっちゃってさ。ガキみてえだろ？」

おどけて笑うホノオだが、セナは相変わらずホノオと目を合わせようとせず、静かな湖を見つめている。

「それに、オレはオレで考えることがあったから、眠れなくってさ。そしたら、お前が急にどっかに行っちまうから、どうしたのかなぁ～なんて思って、後を付けたんだよ」

「お前も、考え事を？」

ホノオのセリフの中のある言葉が気になり、セナは問い返す。

「あぁ。珍しいっしょ？」

普段ならセナは悪口一つと共に頷くはずだが、今はなぜか、ホノオに悪口が言えなかった。ぎこちない笑みを浮かべ、ちょっと頭を縦に動かしただけ。

「まぁさ、オレだって一応生き物なんだから、悩みくらいあるのさ」

「『一応生き物』って何だよ」

ホノオの言葉にセナがポツリと突っ込むと、ホノオは嬉しそうにクスリと笑った。

「おっ、ようやく反応がありましたな♪　お前まで偽モンかと思ったぜ」

セナはようやくホノオの笑顔を見た。怒っているような様子は微塵もなく、むしろ、悲しげで、少し弱々しくて――。

「セナ」

ホノオの呼びかけに、セナは視線を合わせることで答えた。

「お前なんて、まだマシな方さ。元気出せよ」

「……」

どう反応してよいのか、分からなかった。人間としての記憶をなくしたセナにとって、ホノオはいつも強気で、単純で、悩みなど無さそうに見えたから。

セナの返答がないので、ホノオは一方的に話し始めた。

「お前が今日のスイクンが怪しいって見破ったお陰で、オレ達は今日のところは見逃してもらえたんだよ。ま、これからどんな仕打ちが待ってるか分かんないけどね。それに、人間じゃなくて、直接は狙われてなかったメル姉が、あんなに貢献して……」

ホノオは視線を下に向ける。彼が浮かべている笑みからは、嬉しさなど感じられない。

「オレ、何やってるんだろうな？　今日なんて、ひるみっぱなしで情けなかったぜ。頭悪いからバトルじゃ役立たずだし、短気ですぐ冷静さを失うし……」

ちらりと、ホノオはセナを見る。

「それに、“元”親友にゃ、信頼もされてないみたいだな」

その一言で、セナは先ほどまでのホノオへの態度を省みた。

「違う」

小さく否定の言葉を漏らす。

「違わねえよ。お前はオレを恐れてる。……違うか？」

「……」

申し訳ないが、当たっていた。でも、セナにはそれをストレートに言うことなどできない。

「今日、寝室にお前のスープを持ってくヴァイスを見てさ。あー、オレ、負けてるなぁ～……なーんて、バカみたいなコト考えた。恋愛じゃあるまいし、友情に勝ち負けがあるかってーの。こんな事考える時点で、オレはダメなんだけどさ。……でもさ」

ホノオの弱い姿を初めて見たセナは、ただただそんな彼に悲しい視線を送り、言葉の続きを待つ。

「やっぱり、お前はアイツには気を許してるみたいだし、それに比べてオレはどうかなぁー？　とか考えちゃうじゃん。やっぱりさ、オレのことなんか信頼してないよな。だって、同じ人間で、同じ境遇にいるオレに黙って、お前はどっかに行っちまうし、オレがさっ

きお前に声をかけた時なんかさ」

ホノオの悲痛な声が、言葉が、心に響く。

「違うよ、ホノオ」

セナはホノオをなだめるように、優しい声で反論する。少し照れるけど言うしかない。

「お前はさ、オイラのこと、ホントによく考えてくれてるよ。それは、ホント、よくわかる。でもさ。きっと、親とかが居たらこんな感じなんだろうけど、だからこそ、自分の意見に反対されそうで……。ホラ、ほっといて欲しいこともあるし。……そうだろ？」

「……ん。そうかもな」

ホノオはセナを見て笑って答えるが、心の底から納得した、というわけでもなさそうだった。

「でもさ、今回ばっかりは、オレもお前の“考え”に賛成……かもしんない。それに、お前がそんな風に自分を追い詰めるような考え方をするようになったワケ、知ってるしね」

「なんだよ、その“ワケ”って」

セナは首を傾げてホノオに問うが、ホノオは首を振る。

「今は、ちょっと話せない。……話したくない」

「ご、ごめん」

自分のことなのにホノオの方が詳しいことにはあまり納得がいかないが、ここは折れることにした。

「すぐに謝るなよ。前にも言ったろ？」

「うん……」

この言葉が空間に消えてゆくと、互いに黙り込む。

そして、しばらくの後に、

「あのさ」

セナが頬を紅く染めながら静かに語り始めるのは、ヴァイスへの切ない思いだった。

第１２話：月夜の決断――その３（前書き）

セナらしいや。ヴァイス達に迷惑かけないように、独りで旅立つことを決意したらしい。――オレは、どうやらあまり頼りにされていないみたいだ。

まあ、それは置いといて。セナが何か言いたいみたいだ。

（語り：ホノオ）

第12話：月夜の決断――その3

「もし……」

セナがためらいがちに語尾をのばす。ホノオはセナの目をじっと見つめ、先を催促した。

「もし、オイラがヴァイスの前から姿を消したら、アイツ哀しむのかな？」

あまりにも切ない響きを持つ、セナの言葉。しかし、現在彼らが直面している現実は、あまりにも重く――。仕方がないことかもしれない。

「そうだな。間違いなく、な」

ホノオはセナの言葉に強く頷く。

「例え、オイラがいなくなったことで、自分達が安全になったとしても？」

「ああ」

「……そうだよな」

そう呟くと、セナはうつむき考え込む。ほんのちょっと揺れた気持ちを再び固めると、断言した。

「それでもオイラは行かなくちゃ。それが、アイツの為だから」

「そうか」

迷いのないその気持ちに、ホノオも反対しなかった。むしろ彼も――。

セナは、ポケモンになり、ヴァイスと出逢った時のことを思い出すように、湖に映る月影を見つめながらしみじみと語り始めた。

「オイラ、アイツがいなかったらどうなってたかな。記憶をなくしてガイアに来て、アイツに出逢ってから、ずっとサメハダ岩で面倒見てもらって、そんで救助隊キズナの活動頑張って……。でも、アイツにとってもオイラが必要なんだって思うと、なんか嬉しくて……」

セナは少し顔を上げ、宇宙（そら）に浮かぶ月を直接見た。

「初めてアイツの過去を知った時、オイラ思ったんだ。アイツには、絶対父さんと再会して欲しいって。ようやく今日、その目標に向かって一歩踏み出したのに、こんなことになっちまって……」

命を狙われる苦しさ。そして誰かが傷つく悲しさ。自分の無力さ……。セナやホノオに残酷な感情を抱かせた運命を恨むように、セナは月を睨みつけた。

「オイラはアイツに世話になってるし、アイツもオイラを必要としてくれた。でもさ、アイツの身に危険が及んでまでも一緒にいようとは、やっぱり思えないんだ。アイツが大切だから……なのかもしれない。それに……」

ホノオは、セナがこんなにも素直になる瞬間がどういう時かを知っていた。今にも心が折れてしまいそうなとき――。そんなセナが、

ホノオの隣にいた。

「それに、アイツが父さんに再会する前にアイツに何かあったら、アイツの父さんにも悪いよな」

「あぁ。まぁな」

あれこれ言おうとしたことがあったが、うまく形にならず、ホノオは短くそう返す。

「だからさ、アイツやシアンの元から離れる代わりに、オイラはオイラでアイツの父さんを探す。そんで見つけたら、アイツに……ヴァイスに会ってもらって……。

まあ、極端なことを言っちゃえばさ」

この時のセナの表情は、後々までホノオの記憶に深く残った。

こぼれ落ちそうな涙がセナの瞳を不安げに揺れ動き、今にも泣き出しそうな顔をしていた。

「アイツに父さんさえ戻ってくれれば、もしオイラがくたばっちまっても大丈夫かなぁ……なんて思ったりしてね」

かすれた抑揚のない声でそう言い終えると、セナは気がつかぬうちに一筋の涙を流す。

「どうして……」

震える声で、ホノオが話し出す。

「どうして、お前は平気でそんな事が言えるんだよ？　ヴァイスは

あんなにお前のことを必要として、あんなにお前のこと、大事に思ってて……。それって、お前がただの“父さんの代わり”だからなわけないだろ？」

セナの表情は変わらぬまま、さらに涙が一筋。

「お前はお前。オレだって、お前がいなきゃ駄目だよ。シアンやメル姉だって、きっと……。こんなにお前のことを大切に思っている奴がいるのにさ。それってきっと、幸せなことなのにさ。……なんで？」

ホノオがグッと目を瞑ると、涙が弾けて宙に投げ出された。

「なぁ。お前の代わりができる奴なんて、この世に1人もいないんだぜ？　お前が羨ましくても、お前になれない奴がたくさんいるんだぞ？　そんなお前が、くたばっていいわけがないだろ！」

不思議な感覚だった。ついさっきまではホノオに怒鳴られることを恐れていたはずなのに、今はなんだか温かい。

「良かった」

セナがつぶやく一言で、ホノオは揺れる視界にセナを映した。

「オイラさ、本当は、誰かにそう言ってもらいたかったのかもしんない。

だって、自分の存在が今日否定されてさ。あんなに誰かに“死ね”って思われてさ。でも、すごく辛くても、誰にも悩みが、言えない、から……。誰かの気持ちを確かめるのも、怖くて。……すごく怖かったからさ……。勝手に、自分で自分の存在を否定し始めて…

…。

ハハハ……。なんかもう、よくわかんねぇ。分かんねーけど……ありがとう」

込みあげてくる、嬉しさと悲しさ。大粒の涙が溢れ、声が声にならず……。それでもセナは、精一杯の気持ちをホノオに伝えた。

「あぁ」

頷きながら、ホノオはふと過去に思いを馳せた。いつかもあったなぁ。こんな会話を、カッコ悪く泣きながら、セナと交わしたことが。

惑星ガイアにある、広大で神聖な森、聖なる森。

その中にある広い湖、水晶の湖は、綺麗な月明かりに照らされ、涙ぐんでほとりに腰を下ろしている2人の少年――ゼニガメの姿のセナと、ヒコザルの姿のホノオ――は、言葉を交わさずただただ動かぬ湖の水面を見つめている。時に凶器と化す、辺りに散らばっている水晶の鋭利な欠片も、今は月光を含み美しく見えた。

「……よし」

気が済むまで泣いてしまうと、妙にすがすがしい気分になる。セナはスッと立ち上がると、ホノオに微笑みかけた。

「じゃ、オイラはもう行くわ。今晩のうちに、なるべく姉貴の家から遠ざからなくちゃな」

セナの言葉を聞いて、ホノオは少し切なそうな顔をした。そして、

立ち上がると口を開く。

「あのさ。オレも連れて行ってくれないか？」

懇願するような眼差しで、ホノオが申し出た。

「足手まといになるかもだけど、やっぱりオレはセナがいなくちゃ……。それに、ヴァイスやシアンやメル姉なんかに迷惑かけらんないし……。駄目か？」

「ホノオ……」

そう呟くと、セナはコロッと表情を明るくした。

「しゃーねーな、連れてってやるよ！　そんなにセナ様と一緒にいたいんならな♪」

強がりではなく、自然に冗談が出てきた。

「へりくだっときゃいい気になりやがって。このホノオ様が一緒に行ってやると行ってるんだ！　感謝の言葉くらい欲しいものだな～」

「お前にあげる“ありがとう”の5文字がもったいねえよ」

いつも通りのやりとりをすると、心が軽くなった。そこでホノオは、更に調子に乗る。

「このっ、チビセナのクセに生意気だぞ！　食らえ！」

そう言うと、ホノオはセナの首筋に手を伸ばし、コチョコチョと

くすぐりだした。

「わっ、止めろバカ！」

すぐにセナはホノオの手を振り払おうと暴れ出す。しかしすぐに、力の強いホノオに押さえつけられた。

「感謝の言葉を言ってくれれば、止めてやるんだけどな～」

優位に立ったホノオは、セナをいじめるのを楽しんでいるよう。小さく震えながら必死に笑いをこらえるセナに気が付くと、彼が耐えきれないような強さでくすぐってみる。

「うひゃあ！？　やっ、アハハハ……！　あっ、ありがとうホノオ！　だから止めてくれーっ！」

「それでよし♪」

思い通りの答えを勝ち取ったホノオは満足げに言うと、セナをくすぐっていた左手をピンと前に伸ばし、前方を指差す。解放された瞬間、セナは体から力を抜いてぐったりとした。

「そんじゃ、行くぞセナ君。ホノオ様について来たまえ！」

そう言ってズンズンとどこかに歩き出すが……

「行くあてはあるんか？」

とセナが聞くと、振り返り、舌を出して苦笑いした。

「てへへ♪　ないっす♪」

ため息をついたセナは、ホノオに追いつくとパチンとホノオの頭を叩いた。

「いてっ！」

「オイラ達は、ヴァイスの父さんを探しに行くんだよ。だったら精霊の崖に行ってネイティオに聞けばよし！」

セナはニヤリと笑みを浮かべてホノオを見ると、こう付け足す。

「くれぐれも、“焼き鳥”とは言うなよ？　ネイティオに殺されるからな？」

「へーい」

こうして、先ほどまでの沈んだ姿はどこへやら……。２人はネイティオのいる精霊の崖に向かって歩き出した。

夜の森を歩くのが、次第に楽しくなってきたセナとホノオ。だがさすがに時間帯が深夜ということもあり、１時間半くらいの時間を歩くと疲れも見え、今日は寝てまた明日歩くことにした。

２人は柔らかい草の上に腰を下ろす。歩いてきた道のりを眺め、ここまで歩いたら、さすがにヴァイス達もオイラ達を探せないだろうと、セナは判断した。聖なる森は、それだけ広いのだ。

さっきまでは明るい気分だったのに、もうすぐ眠るのかと思うと、再びセンチメンタルな気分になる。セナはなんとなく肩から下げている青いバッグの中に手を突っ込むと、懐かしい手触りの物を発見した。

あの日からずっと大切にバッグの中に入れていた、ヴァイスからの手紙。短いものだったので、今でも内容は鮮明に覚えているのだが、急にヴァイスの子供っぽい字が恋しくなり、手紙を読みたくなったのだ。

セナが静かに手紙を取り出すと、ホノオもその動作に注目する。そんな彼と目を合わせると、セナはホノオにも見せるようにして、月明かりでヴァイスからの手紙を読んだ。

「『セナへ

いつも元気で明るいセナを、ボクはすごく頼りにしてるよ！
弱虫だったボクが毎日救助に向かえているのもセナのお陰です。
本当にありがとう。

でも、もっとボクのことを頼ってほしいな。
ボクも、もっとしっかりするからね！

これからも、よろしく！

ヴァイスより』」

セナとホノオの、文を声に出して読む呟くような声が重なる。

『もっとボクのことを頼ってほしいな』。この一言が、セナの中で妙に引っかかる。
そして、心の中で呟いた。

お前のこと、頼りにしてないわけじゃない。でも、ごめん。

「なぁホノオ」

今度は声に出してホノオに問いかける。

「オイラ達……間違ってないよな？」

ホノオは一瞬複雑そうな顔をしたが、すぐにきっぱりと答えた。

「分かんねえ。でも、オレ達はヴァイスやシアンのことを思って決めたんだし、もう、引き返せない。やるなら覚悟を持って向かわなきゃ。だろ？」

「あぁ」

この会話が終わると、セナとホノオは2、3の言葉を交わした後に、眠りにつく。彼らが翌朝目を覚ますと、過酷な運命が先を照らす明日へ、時が移ってしまっているのだった。

第１２話：月夜の決断――その３（後書き）

これで、第１２話はおしまいです。

今回は、なんとか少しだけほのぼのした感じのシーンを挟めましたが、これから先、辛い場面や、シリアスな展開が増えることが予想されます。

実際、今回の話は私も執筆していて辛かったですし……。

そして、まだ明かしていないセナの過去や、スイクンがたくらんでいる行動や……。

他にも数え切れないくらい、セナやその仲間達は辛い思いをすると思いますね（汗）

でも、ここで断言しますが、私はセナ達が乗り越えられない試練は彼らに与えません。

……じゃないと１００％バッドエンドになっちゃいますしね（汗）

彼らがどのように試練に立ち向かうのか――。

その様子を、ぜひぜひこれからも応援していただければ……と思います。

第１３話：依頼者スイクン――その１（前書き）

１人で色々と抱え込んでいたオイラだけど、ホノオが相談に乗ってくれて――怒りながらも、オイラを肯定してくれて、嬉しかった。
そして、ホノオはオイラについてきてくれた。人間２人でヴァイス達から離れることになった。
しばらくヴァイスから離れるのは寂しいな――アイツからもらった手紙を読んで、そう思ったんだ。
（語り：セナ）

第１３話：依頼者スイクン――その１

早朝に、一度目が覚めた。

セナは眠い目をこすりながら、体を起こして辺りを見回す。柔らかな草の上に座っている自分を囲むように幹が立派に太い木々が生え、その葉をかき分けて、柔らかな朝陽が降り注ぐ。

あれ？　ここはどこだ？　姉貴の家で、寝てたはずなのに。

寝ぼけながら、セナは呟く。

「ヴァイス……？」

自分のすぐそばで仰向けに寝転がっているオレンジ色の体を見下ろすが、やがてそれがホノオであると分かると、セナは全てを悟った。

そうだ。オイラ達は昨日の夜、自ら進んでヴァイス達と別れたんだ。

自分が先ほど何気なく呟いた言葉はあまりにも切なくて、視界がにじむ。

セナは涙があふれる前に目を閉じ、切ない雫がこぼれ落ちてしまわぬように仰向けになった。

そして、次第に遠くなる意識の中で、心に誓う。

これから先、どんなに大変な目にあっても、絶対に生き延びてみせる。もし、命を狙われることがなくなる日が来たのなら、笑って

ヴァイスやシアンのところに帰る。

こうして二度寝をしたセナは、後にホノオに叩き起こされるのだった。

事態が深刻化したのはまさにこの頃。

“はるかぜ広場”の近くにある小さな丘に、大小さまざま、色とりどりの、多くのポケモン達が集合している。彼らは皆、救助隊のポケモンだ。

昨日の夕方にスイクンの依頼によって発行された号外。明日の早朝に、“ポケモン救助隊連盟本部”のある丘に、全ての救助隊は集合すること。この内容を読んで、救助隊のポケモン達はこのペリッパーの形をした建物の近くに集まったのだ。

当然、彼らのざわめきはやみそうにない。号外による命令だけに、各々が疑問や不安を顔に浮かべながら、話の内容はあれかこれかと議論する。

そんなどよめいた空気を一瞬で変えられる者がいた。

「待たせた」

スイクンが風を切り、丘の向こうから瞬時に姿を現す。その姿に、皆唖然としたのだ。

「す、スイクンだ……」

こう呟くポケモンも少なくない。皆の前に姿を現したのは、ガイアの住民が皆慕うスイクンだったのだから。

“水晶のように綺麗な心を持つポケモン”。ポケモン達のスイクンへの印象を一言で表すとこうなる。

メルのように“聖なる森”の“水晶の湖”に近いエリアに住むポケモンは会うことが容易いが、遠くに住むポケモンはそうはいかない。

現在この丘には、遠方で救助隊活動を行う救助隊――ちなみにいつもはこの本部ではなく、救助隊連盟の支部を拠点に活動している――もはるばると集まっているので、特にそのようなポケモン達が目を輝かせているのだ。

すっかり静かになったポケモン達を一通り見回すと、スイクンは静かに話し始めた。

「遠くから集まった者も多いだろう。緊急の連絡で悪かったが、こうして集まってくれたことに感謝している」

深々と頭を下げるスイクンの態度を見ると、さすがと思わずにいられないポケモンも多かった。神聖な伝説のポケモンでありながら、感謝の気持ちを忘れずに頭を下げている。

スイクンはスッと頭を上げると、真剣な眼差しを多くの救助隊ポケモンに向けた。

「緊急事態につき、簡潔に話をしよう。今、このガイアで災害が増えていることは、皆知っているであろう。その原因が、分かったのだよ」

その言葉に、辺りは騒然とする。災害、という言葉で、各々が思いを巡らせたのだ。――例えば“はるかぜ広場”の近くに住むポケモンは、昨日の早朝の地震を。

スイクンが一つ咳払いをすると、前列のポケモン達が静かになり、徐々に後列まで静けさが広まった。

仲間と話をしていた救助隊のポケモン達の注目が再び自分に向けられているのを確かめると、スイクンは話を進める。

「災害を広げる“元凶”は、とある者達の存在だ。皆、このガイアに“人間”がいると知っているだろうか？」

「えっ？」

辺りが一瞬固まる。

少し経った後に、前列で話を聞いていたとあるポケモンがスイクンに質問する。

「でも、そもそもガイアに人間なんかがいたら、とっくに噂になっているんじゃ？」

「いいや」

スイクンは首を振ってその考えを否定する。

「実はその存在は、人間からポケモンの姿に“なった”のだ。だか

ら普通にポケモンとしてこの惑星でも生活できるのだ」

徐々に、スイクンが言いたいことへと近づいてきている。

「それでもやはり、元はこのガイアにいなかった存在。だから、彼らの存在が自然界のバランスを崩しているのだ」

「つまり――」

スイクンに対して口を開いたのは、スイクンの目の前で話を聞いていたポケモン、マスターランクの救助隊“ＦＬＢ”のリーダー、フーディンだった。

「その者達が存在する限り、ガイアの災害は治まらないのだな？」

「汝は飲み込みが早いようだな。しかし、事態は災害が“治まらない”だけという、生ぬるいものではないのだよ」

スイクンは軽く息を吸うと、ポケモン達にとって衝撃の事実を。

「このまま放っておくと大災害が起こり、ガイアは破滅するだろう」

スイクンが現れてから何度も静寂とざわめきを繰り返してきたこの丘が、かつてないほどに揺れた。

自分達の世界が破滅する。その言葉に、パニックを起こすものがいたのだ。

衝撃のあまりに、ショックに弱い種族のビリリダマが後方で爆発し、周囲のポケモン達の悲鳴が空気を裂く。数人の♀ポケモンは泣

き始め、“破滅”という言葉で放心状態に陥るポケモンもいた。

スイクンは、このような事態を予想していたためか、軽くため息をつくだけで黙り込んだが、見かねたＦＬＢのリザードンが翼をはためかせ、上空から皆に呼びかけた。

「みんな、落ち着くんだ！　まだガイアが破滅するとは限らない！　ガイアの運命を変えられるのは、私達救助隊なんだ！」

青い空に、よく映えるオレンジ色が浮かぶのを、救助隊のポケモン達はじっと見る。

やがて落ち着きを取り戻し、オレンジ色がＦＬＢのリザードンだと分かると、皆は静かになる。

リザードンがストンと地面に降り立つと、スイクンは小声でありがとうと言う。

そんなスイクンを見て、今度はＦＬＢのバンギラスが先を促した。

「それで、誰なんだ？　災害の元凶である人間って」

「それは……」

悲しそうな表情を浮かべた後、スイクンは言った。ゼニガメの姿のセナと、ヒコザルの姿のホノオである、と……。

「それって、あの、“キズナ”の？」

どこかから聞こえるその言葉に、スイクンは静かに頷く。

「そんな……」

集団の前方で呆然と呟くのは、セナ達“キズナ”の昇格試験の手伝いをした救助隊、“フローラル”の一員である、フローゼルという種族のフロウだ。

「“キズナ”のみんな、いい子だと思っていたのに……」

落胆するフロウに、“フローラル”のチームメイトである、キレイハナのフロラと、サンドのサハラが同情する。

「いい奴だ」

スイクンはうつむき、悲しげな顔をした。

「我も彼ら2人を知っているが、確かにいい奴だった。できれば、このような事態にならないで欲しかったのだが……」

スイクンの眼差しはチラリとフロウに向けられ、そして救助隊のポケモン達皆に訴えかけた。

「たとえセナとホノオがいい奴であろうと、彼らの“存在自体”が災いを引き起こすのだ。だから、気の毒ではあるが……」

とうとう、スイクンの話がゴールにたどり着いてしまった。

「このガイアにあるいくつもの命を救うため、セナとホノオの存在を消すことに、協力してくれないだろうか？」

今度はかつてないほどの静寂が辺りを包む。

「他に、方法はないのか？」

“ＦＬＢ”のフーディンが、１人静かに口を開く。

「我とホウオウ様が相談したが、それでも他に良い案など出なかったのだ。我も、認めたくはない。いくらガイアのためとはいえ、幼い彼らの命を奪うのは……」

話に“ホウオウ”という単語が出てくると、さらに説得力が高まった。スイクンの重苦しい様子からも、ポケモン達は事態の深刻さを読みとったのだ。

すると、どこからかこんな声が。

「手伝うのはいいけどさぁ、それなりの報酬は貰えるんだろうな？」

ちょうど端の方でスイクンの話を聞いていた救助隊のポケモン、エレキブルという種族だ。黄色の体に黒色の横じま模様があり、背部から2本の触覚が生えた、ずんぐりとした体型をしている。

こんな時になんてことを言うんだ！　……と、その近くにいるポケモンが怒鳴りつけたが、エレキブルの仲間のレントラーという種族のポケモンに鋭く睨みつけられ、黙り込んでしまう。レントラーは、青と黒の体毛に覆われた、ライオンのような容姿のポケモンだ。その目つきは鋭く、威圧的である。

「命に物をかけることなど、本来はしたくないのだが、この場合、任務をやり遂げてくれたポケモンは、ガイアを救った“英雄”とも言えるポケモンだからな。我とホウオウ様より、それなりのものを贈呈しよう」

その言葉が魅力的に聞こえたのは、先ほどのエレキブルだけではないのだろう。表には出さぬが、ポケモン達には皆それぞれの思いがあった。

「だってさ」

エレキブルの仲間のサンダース――黄色い体毛が刺々しく尖っている、四つん這いのポケモンは、ニヤリと笑ってエレキブルを見た。

エレキブル、レントラー、サンダース。3人とも電気タイプのポケモンで構成されている、このゴールドランク――マスターランクの一つ手前――の救助隊、“ボルト”のメンバーは、スイクンの言葉を聞くと動き出した。

「こうしちゃいられねぇ。とっととセナとホノオを殺して報酬はいただくぞ！」

リーダーのエレキブルが他の2人に呼びかけると、“ボルト”の3人は皆が集まっている丘から離れる。

「それじゃ、任務は果たしてくるぜ！　てめーらも、報酬が欲しけりゃこの俺様達に先を越されないことだな！　ハッハッハッハ！」

豪快に笑い飛ばしながら遠ざかるエレキブルに、冷たい雰囲気を放ち続けるレントラーとサンダース。彼ら“ボルト”が丘を離れる様子を、悲しげな瞳で見送るポケモンも多かった。

「みんな」

暗い雰囲気の中で話し始めたのは、やはりトップクラスの実力を誇る“ＦＬＢ”のメンバー３人だった。

「このスイクンからの依頼には、命を奪う、という悲しさがある。だから、無理に依頼を受けなくても、構わないのだよ」

残酷な依頼内容で泣き出すポケモン達に向けて、フーディンは優しく言った。

「しかし、悲しいことだが、スイクンやホウオウが言っていることは信憑性が高い。おそらくこのままでは、ガイアは……」

リザードンが、うつむきながら言う。セリフの終わり部分を濁した。

「だから、世界の運命がかかったこの依頼には、『絶対にガイアを救う』という強い気持ちを持って向かってほしい。先ほどの“ボルト”の３人のような気持ちを持っている奴には、セナとホノオの命を奪う資格などないのだからな」

バンギラスはこう言った後で、“命を奪う資格”なんて、本来ならば誰にもないのだが……と悲しげにつぶやいた。

「とにかく、ガイアの破滅を食い止めたいという気持ちのあるものだけでよい。今日この後から、各チームごとに相談して、自分達が進む道をきめてくれ」

リザードンがそう話をまとめると、スイクンが解散の合図を出す。

使命感、または“破滅”という言葉の恐怖に駆られ、真っ先に依

頼のためにその場を飛び出した救助隊があった。とても参加できない……という風に、泣き崩れるポケモンがいた。チーム内で意見が割れ、激しく議論する救助隊があった。“報酬”に期待して、いやらしい笑みを浮かべながら丘を後にするポケモンの姿も残念ながら、あった……。

依頼内容を伝えきったスイクンは丘を後にしようとするが、“ＦＬＢ”に呼び止められた。

「スイクン。辛いことを、わざわざ伝えてくれてありがとう。ワシ達ＦＬＢも、こんな事態は避けたかったのだが……。ガイアのためならば、お主の依頼を受け取るよ」

フーディンのその言葉に頷くと、スイクンは地面を蹴ってその場を後にした。

こうして、セナとホノオにとっては最悪の形で、事態は動き出した。

そして、この時どこかへ駆けていったスイクンはしばらくの間行方をくらませ、スイクンが再び他のポケモンに会うのはしばらく先のことだった。

第１３話：依頼者スイクン――その２（前書き）

スイクンから、直々に依頼があった。

最近起こっている災害――そしてこれからガイアに起こる壊滅的な災害の原因が、人間からポケモンになったセナとホノオらしい。

ガイアを守るためには、幼い２人が犠牲になる必要がある――残酷なことだ。

救助隊として、ＦＬＢもこの依頼を受けるつもりだ。十分に、命の重さを考慮しつつ、な。

（語り：ＦＬＢのフーディン）

第１３話：依頼者スイクン――その２

「どうして……？」

もぬけの殻となった隣の布団を見つめ、ヴァイスは力なく呟く。

場所はメルの家の寝室。胸騒ぎがして体を起こしたヴァイスのいやな予感は的中し、そこに、セナはいなかった。

「お姉ちゃん！　シアン！」

ヴァイスはまだ眠っているメルとシアンに声をかけ、視線をそちらに移してみると、シアンの隣の布団もからっぽだった。

「ん……？　ヴァイス、どうしたんだい？」

目をこすりながら尋ねるメルだが、ヴァイスの表情を見たとたんに引き締まった顔つきになる。

ヴァイスは今にも泣き出しそうな顔をして、メルに話しかけた。

「セナとホノオが、いなくなっちゃった……」

メルがすぐにシアンを起こすと、３人はメルの家の玄関から飛び出す。

扉が動き、隙間から外がチラリと見えた瞬間、ヴァイスは願った。

どうか、この扉のすぐ向こうに、セナとホノオがいますように。
2人仲良く寄り添って寝ていて、何事もなかったかのように今日も“おはよう”が言えますように――。

うすうす感じていた嫌な予感は、やはり的中し、不確かな願いは叶わなかった。扉の向こうに広がるのは、森の木々くらいだった。

「セナの……バカ」

呆然とそう呟くと、ヴァイスはあたりに生えている草の上に力なく座り込む。

どうして今、セナとホノオがいないのか。その理由は、手に取るように分かっていた。
事実、昨日からヴァイスは薄々危惧していたのだ。セナが、どこかに消えてしまうことを。

予感が的中したからこそ、2人の気持ちを考えるのが苦しくて、残された自分も辛くて……。

「バカ。セナのバカ。ホノオの、バカ。う……うわあぁーっ！」

声を上げて泣き始めたヴァイスにかける言葉がなく、メルとシアンはただただヴァイスを悲しげな瞳で見つめるだけ。次第にシアンにも、ホノオとセナがいなくなるという現実が重くのしかかり、目に涙をためた。

バカ……。キミ達が消えたって、ボクはちっとも嬉しくないんだよ。それとも……。友達なのに、2人ともボクには頼れなかったのかな？

運命を憎むことを、今のヴァイスは忘れていた。怒りの矛先を、セナとホノオに向けてみたり、頼りない自分に向けてみたり……。こうしてさまよいながら、涙を流すのであった。

救助隊達の早朝の集会を終えて、にぎわう時間になった“はるかぜ広場”。

だが今日は、にぎわっていると言うよりは騒然としていて、落ち着きがない様子であった。

遠くから集会のために集まった、見慣れぬ救助隊ポケモンが多数広場をうろつき、そのポケモン達が議論するのは、セナとホノオに関する衝撃の事態で……。いつも広場にいる顔ぶれが、表情をひきつらせているのであった。

そんな中、“聖なる森”から広場に訪れた顔ぶれがあった。

「なんか変な奴だとは思っていたけど……まさか人間だったとはな」

噂を耳にしたその2人のポケモンが、広場の噴水の近くで話をしている。

「ていうかあいつら、僕達に嘘をつきやがった」

先ほどの妖精ポケモンブルーの言葉に、頭に蓮の葉を被ったポケモン、ハスブレロが言葉を重ねる。

彼らはあの、ハスブレロの“ブレロ”とブルーの“ブルル”。かつてセナ達の救助隊活動の邪魔をして楽しんでいたポケモンだ。
彼らがセナ達に対する嫌がらせをやめたのには、ある理由があったのだが……。

「あぁ。ずっと騙されてたな、おれっち達」

ブルルもブレロに同意すると、ブレロが地面を見つめて話しだした。

「ずっと前、僕達があいつらをからかってた時にメルさんが助けにきた。それで、確かにメルさんは、セナのことを“いとこ”だって言った」

ブレロの言葉にブルルは頷く。

確かに、かつてセナとヴァイスがホノオを探すために“精霊の崖”を目指している途中、ブレロ達はセナ達を追い詰めることができた。そしてとどめをさそうとした途端、カメールのメルが現れて、ブレロ達は追い払われたのだ。
その時にメルが言った言葉を、いまでもブレロとブルルは覚えていた。……メルは、セナのことを、いとこだと言った。

ゼニガメの進化系はカメールであり、そうした種族上の関係もあったためかブレロ達はずっとそのことを信じて、メルの影響力が及ぶセナを恐れたのだが……。

「いとこじゃない、どころじゃない。奴はポケモンでもなかったんだ」

ブルルが不満そうな顔でそう言うと、ブレロは呟いた。

「久しぶりに、奴らをからかうか……」

ブレロとブルルは、セナ達の居場所を聞き込むために“ガルーラおばちゃんの倉庫”に近寄ってみたが、先客がいたのでその隣の“カクレオン商店”に立ち寄った。

嫌がらせに使う道具を選びながら、隣の店で交わされている会話に耳を澄ます。

「そんな……」

おそらく女の子だと思われる声で、呆然とそう呟いたのは、頬や耳が青色のうさぎのようなポケモン、マイナンだった。

「でも、そんなのスイクンが言ってるだけで、証拠もなんにもないんだろ!?」

荒い言葉遣い。しかしかわいらしい声でガルーラを問い詰めるのは、マイナンと対照的に、頬や耳が赤色のポケモン、プラスルだ。

「おばちゃんだって信じたくないさ。でも、あのスイクンがそう言うなら、もうそれだけで充分説得力があるからね」

ガルーラおばちゃんは悲しげな表情で、そう呟く。

どうやら、セナとホノオのことを話しているようだな。ブレロとブルルがそう推測した直後、自分達が買い物をしている店のカクレオン兄弟も、隣の店の会話に参加し始めた。

「でも、セナ君もホノオ君も、いつも救助をがんばっている、すごくいい子だよ！」

兄の、緑色のカクレオンのその言葉に、ガルーラは首を横に振る。

「いいや。どうやら問題なのは、いい子、悪い子、ということじゃなくて、セナ君達の“存在”自体がガイアに災いをもたらすとか」

「なんだよそれ！？　あんなちっぽけなあいつら1人2人がいるくらいで、ガイアに何の影響があるっつーんだよ！？」

声を荒げるプラスルの“ソプラ”を、マイナンの“アルル”がなだめようとする。

「ソプラ、落ち着いて……」

「落ち着いてられるかよ！　こうしてる間にも、多くの救助隊が奴らを殺しに出かけるんだぜ！？　そんなのって……」

「ソプラ！」

アルルがソプラの目をじっと見て叫ぶと、落ち着きを失っていた“彼女”――言葉遣いこそ悪いが、ソプラは一応女の子なのだ――も黙り込む。

「ねぇソプラ。キミは、例えセナさんとホノオさんのせいで世界が終わるとしても、2人の味方ができる？」

アルルの『セナさんとホノオさんのせいで――』という言葉に、ソプラは気を悪くした。

「だから、あいつらが災いの原因なわけないって……」

「だから『例え』って言ったじゃん！」

普段穏やかなアルルが、珍しくソプラの怒鳴り声をかき消した。やりとりの様子をただ見るだけのつもりだったブレロとブルルだが、その熱のこもった話し合いに思わず見入ってしまっていた。

しばしの沈黙のあと、アルルは静かにソプラに謝ると、答えを促す。

「当たり前だろ。アタシはあいつらの味方をしてやりたいね」

ソプラのその答えを聞くと、アルルは安心したように笑った。

「良かった！　ボクと同じだ」

アルルは決意に満ちた表情でソプラに語りかけた。

「だったらさ、ボク達でセナさん達を助けようよ！　確かにセナさん達“キズナ”はメンバーが4人もいるけど……」

そこで一旦言葉を区切り、アルルは救助隊員でごった返している広場を見回す。

「こんなに多くの救助隊ポケモン達に命を狙われるとなると、戦力は多い方がいい。ボク達もセナさん達を探して、一緒に戦おうよ！」

アルルの意見には充分賛成なのだが、ソプラはその発言に驚いていた。アルルは元々、こんな積極的な発言などできなかったのだ。仕切るのは、いつもソプラ。

ひょっとしたら、セナ達と共に盗賊団と戦った経験から、アルルの中の何かが変わったのかもしれない。――恋愛に対しては、ちっとも積極的になってはいないのだが。

ソプラがあれこれと考えていると、アルルは自分の考えに対するソプラの意見を求めてきた。

「アタシだって、そうしようとしてたんだぜ？　もちろん、奴らを助けに行くに決まってるさ」

アルルに先を越されたのが少し悔しい気もして、ソプラはどこか素直ではない返事をすると、アルルは苦笑いした。

と、ここまで会話を聞いて、ブレロとブルルはようやく今の自分達の目的を思い出した。セナ達の居場所を探ることだ。

そして、ソプラとアルルの会話の流れから考えると、もしガルーラやカクレオンがセナ達が向かった場所を知っていれば、それを今、ソプラ達に教えるはず。自分達がガルーラに聞くよりも、よほど自然な流れだと感じたため、ブレロとブルルはより一層耳を澄ませて会話を聞いた。

ソプラがセナ達が昨日向かった場所についてガルーラに尋ねると、案の定ガルーラは情報を知っていたようだ。

しかし、広場の救助隊達にそれを聞かれるとまずい。ガルーラは周りを見回すと、ごくごく小さな声で、ソプラとアルルに情報を提供した。

『セナ達は昨日、“精霊の崖”に行くために“聖なる森”へと足を踏み入れた』。

この情報は、ブレロは聞くことができなかったが、耳のよいブルルはしっかりと拾い上げ、ニヤリと笑った。

情報を聞き漏らしたブレロだが、ブルルのその表情を見て安心し、さっそくセナ達を探すことにした。

「カクレオンさん。これほしいんだけど」

いくつかの“不思議玉”というアイテムを手にしたブルルが、隣の店で会話をしていたカクレオン兄弟を呼び戻した。

「おっと、ごめんよ」

再び商売を始めた2人に、ブレロは“不思議玉”の代金を払う。

そして、

「どうもありがとうね」

というカクレオンの声を背中で受けながら、ブレロとブルルは出発した。

「“聖なる森”にいるんだってさ」

ブルルがブレロに言うと、2人は嫌らしい笑みを浮かべる。

「久々に、奴らをからかうネタができた。よーし、絶対に見つけてやる！」

ブレロのその言葉と共に、ブレロとブルルは広場を後にした。

その一方で、旅立ちを控えている2人の女の子は、今なお“ガルーラおばちゃんの倉庫”の前でガルーラと話をしているのであった。

第１３話：依頼者スイクン――その３（前書き）

嫌な予感はしたんだけど、的中して欲しくなかった。それなのに……セナとホノオは、どこかへいなくなっちゃったんだ。

（語り：ヴァイス）

第１３話：依頼者スイクン――その３

「ソプラちゃん、アルルちゃん」

先ほどまで近くにいた２人のポケモン、ブレロとブルルの目的など、知る由もなかった。

彼ら２人が去った後も、“ガルーラおばちゃんの倉庫”の前では会話が続く。

「ん？」
「なあに？」

ガルーラに呼ばれたので、ソプラとアルルは返事をする。

「君たちみたいな考え方に、おばちゃんも賛成だよ。おばちゃんだって、セナ君もホノオ君も、災害の元じゃないって、信じてるさ」

ガルーラおばちゃんの、悲痛な表情。彼女のお腹の袋に入っている赤ちゃんのガルーラ――いつかヴァイスは“ルラ”と呼んだ――も、肌で母の感情を読み取り、おとなしくうつむいている。

ソプラとアルルが返事の言葉を探しているうちに、ガルーラは再び言葉を重ねた。

「おばちゃんだって、セナ君達を助けに行きたいよ。だけど、倉庫を休むことができないから……」

彼女が経営する“ガルーラおばちゃんの倉庫”には、多くのポケモン達の貴重品が保管されている。預かり屋として絶大な信頼を得

ているガルーラは、この責任がある仕事を休むことなどできないのだ。

悔しそうに言うガルーラを励ますように、アルルが微笑む。

「大丈夫だよ。ボク達がセナさんやホノオさんをお手伝いするから！」

ここで、ソプラはにやけながらアルルに耳打ちした。

「ついでにヴァイスもな」

ガルーラにはそれは聞こえなかったようだが、アルルは顔を真っ赤にした。

「そそそっ……ソプラだって、ホノオさんのために頑張るんでしょー！？」

こんどはガルーラの耳に届いたその言葉は、ガルーラを驚かせることに。

「ばっ、言うな！」

ソプラが元々赤色の頬をさらに赤く染め、アルルの頭を叩いた。

「いたーいっ！」

それまで浮かぬ表情だったガルーラが、そこでふっと笑う。

「知らなかったねぇ～。ソプラちゃんがホノオ君のことを……」

「おばちゃん！！」

ソプラが声を張り上げ、ガルーラの声をかき消した。

「アハハ、ごめんよ」

ガルーラは頭をかいて笑いながら謝る。

そして、少し表情を引き締めると、カウンターの影から何かを取り出して、カウンターの上に置いた。

セナやヴァイスが持っているようなバッグ。膨れた黄色いそれが、カウンターの上にあった。

「なんだよ、これ？」

ソプラの問に、ガルーラは得意げに答えた。

「おばちゃんは一緒に行ってあげることはできないけど、応援ならできるからね。このバッグ、本当はルラが大きくなったときに、って思ったんだけど、君達にあげるよ」

「うわぁー！　ありがとう、おばちゃん！」

アルルが嬉しそうにバッグを手元に引き寄せて、中身を見てみる。

回復アイテム“オレンの実”に、攻撃アイテム“ゴローンの石”。

他にも、ありとあらゆるアイテムが、ぎっしりと詰まっていた。

「それだけあれば、ずいぶんと楽に旅ができるはずさ」

「重そうだけどな」

ソプラの突っ込みに、ガルーラは短く笑った。

「じゃあ、おばちゃんの分まで頑張ってくるんだよ」

準備は整った。出発は早い方がいい。

「うん。本当にありがとうね、おばちゃん！」

アルルがバッグを肩に掛けながら言う。見た目の割に、そこまで重くないような気がした。

「よっしゃ、行こうぜ！」

ソプラが威勢良くいうと、2人は早足でガルーラから遠ざかってゆく。

いつもよりポケモン達が多い、今日の“はるかぜ広場”。ソプラとアルルの小さな姿など、たちまち他のポケモンの陰になって見えなくなってしまった。

ガルーラは、きっと大丈夫……と自分に言い聞かせながら、お腹の袋に入っている子供、ルラの頭を優しくなでているのであった。

頭にひどい痛みを感じた。

「うぐっ……」

うめき声を上げながら、セナは瞬時に悟る。あぁ、オイラはもうおしまいだ、と――。

「こら、バカセナ！　いつまで寝てるんだ？」

セナの耳にホノオの声が届く。

あれ？　ホノオも死んじまったのか？

そう思いながら薄目をあけると、空の青と森の緑。それから、ホノオのオレンジ色が目に飛び込んできた。

「ホノオ……」

セナがぼうっとしてそう呟くと、ホノオは拳をカタく握り、再び仰向けになっているセナの頭に振り下ろした。

「――っ！」

とっさに頭を押さえながら、セナは今度こそ状況を把握した。

さっきの頭の痛みは、ホノオに殴られたヤツだ。決して、夢の中に出てきたスイクンにやられたものじゃなくて。

「っぎゃあああっ！　痛い痛い痛いーっ！！」

意識がはっきりとしてきた途端、本格的な痛みがセナの頭を襲う。すでに何度か殴られていたらしく、頭には大きなコブが。

「はぁ。やっと起きたぜ……」

うんざりした様子でセナを殴った左手をヒラヒラとさせながら、ホノオが言う。

「こぉらバカホノオ！　何しやがるんだ！」

目に涙をためながら、セナはホノオを怒鳴りつける。

「しゃーねーだろ！？　呼びかけても揺すっても悪口言ってもつねってもムリヤリ目を開けても何かのおとぎ話みたいにキス――はさすがに気持ちわりーからしなかったけど……とにかく起きなかったんだからさ！」

……気になる言葉がいくつかあったが、ホノオはよほど苦労したのだ、ということは伝わってくる。

「わりい。一度起きたんだけどね」

セナは舌を出して苦笑いしながら言う。

「まーたお得意の二度寝か！？　お前が二度寝するとマジで起きない時があるからさあ……」

“また”という言葉から、セナの人間時代の行いが多少うかがえた。

「へへっ、きっと体質なんだ、しょーがない。許してくれたまえ、ホノオ君♪」

冗談混じりでケロッと言うセナだが、そんな彼にホノオは怒りを露わにした。

「てめーふざけんな！　いいか、明日から二度寝厳禁！　いいな？」

「えーっ！？　なんでてめーに決められんなきゃなんねーんだよ！」

セナがこう口答えするのは、ホノオの苦労を知らないから。

「お前なぁ――！」

……と、朝から（最も、日の出からだいぶ経ったが）賑やかに言い争いをするセナ達だが、おそらく広場で明かされた事実を知っていれば、このようなことなどしなかったのだろう。――敵に、居場所を教えるような行為など。

「いたぞ！　セナとホノオだ！」

突如上空から、緊迫した声が聞こえる。セナとホノオは顔をこわばらせ、とっさに声がした方を向いた。

「ヴァイス」

しばらくは自分自身もショックが大きく、泣きじゃくるヴァイスに声をかけてやれなかった。しかし、ようやく気持ちの整理がついたメルは、優しくヴァイスの肩を叩く。

「お姉ちゃん……」

ヴァイスの辛そうな表情がメルに向けられると、彼女も心を痛める。

「ヴァイス。泣くのはもうやめな。シアンを見習いなよ」

名前を呼ばれ、シアンもヴァイスに近寄ってくる。もちろん彼とて悲しくないわけがないのだが、涙はとっくに乾いていた。

「ヴァイス。セナとホノオを探しにいこうヨ。きっと2人とも、まだ近くにいるんじゃないカナ？」

まだ昼よりだいぶ前である今の時刻を考えると、セナ達がそれほど離れたところにはいないだろう……とシアンは思ったのだ。

「そうさ。セナ達を見つけてまた、一緒になればいいんだから……」

「嫌だ」

メルの言葉を、ヴァイスは震えた涙声で遮った。

「ボクは、セナやホノオにとって、必要ない存在なんだよ。だから、ボクには頼ってくれなかった」

メルとシアンはポカンとした表情でヴァイスを見る。

「ボク、セナに『もっと頼って』って言ったのに……。ボクは、セナといつも一緒にいたかったのに……。セナは、そうじゃなかったんだよ……」

その言葉を聞いて、悲しげな表情をしたのはシアンのみ。メルは

怒りに満ちた表情で、ヴァイスを睨んでいた。

「なにひねくれてんだい！」

メルの平手がヴァイスの頬をとらえると、ピシャリと鋭い音が森に響く。

「お姉……ちゃん？」

涙で濡れ、叩かれて熱を帯びた頬をそっと触りながら、ヴァイスは呆然とメルを見上げた。

「セナとホノオがどんな気持ちでアタイ達の元を去ったか、一番よく分かるのはアンタなんだよ、ヴァイス」

心の奥では痛いほど分かっていた。これは、セナ達が望んだ形なんかじゃない。

分かってはいたのに。

「あの2人らしい行動だよ。ヴァイスやシアンに迷惑かけたくなかったんだ」

ヴァイスとシアンは黙ってメルの言葉を聞いている。

「それなのに、かわいそうじゃないかい？　ヴァイスのためを思ってやったことで、どうしてヴァイスに嫌われなきゃなんないんだ？」

メルのまっすぐな眼差しが、ヴァイスにまっすぐにメッセージを届けた。

「かわいそうだよ……」

ヴァイスは小さな声で呟く。

「セナは素直になれないんだ。素直になりたくっても、いつも1人で抱え込んでた。それを一番分かってるのはボクだって、自信あったのにな。全然分かってなかったね」

しょんぼりと呟くヴァイスに、メルは今度は優しく話しかけた。

「ゴメン。ヴァイスの気持ちだって、間違いではなかったさ。むしろ自然なこと。これ以上“キズナ”がバラバラになるのを見たくなかったっていう、アタイのワガママを押しつけちまっただけなんだけどね……」

メルの瞳が少し悲しげに光っている。

「ねーちゃんはワガママじゃないヨ！　みーんなみんな、悪くなんかないって、シアンは思うヨ？」

「ちょっとだけ、すれ違っちゃっただけなんだよね」

ヴァイスが涙を拭いて笑みを浮かべる。

きっとまた、一緒になれる。そんな気持ちがして、安心したのだ。

「セナとホノオを、探しに行こう！」

メルに叩かれてからずっと尻餅をついていたヴァイスが、スッと迷いなく立ち上がった。

「ウン、行こう！」

シアンはヴァイスの右手を両手で握って軽く引っ張りながら、上目遣いで甘え始める。すっかりいつもの調子に戻ったようだ。

「フフ。セナやホノオと違って、聞き分けのいい弟達だねぇ」

メルは微笑んでそういった後、自らが口にした“弟”という単語を想う。

「本当に、アタイにとってアンタ達“キズナ”は“弟”みたいなものなんだよ。兄弟は、やっぱりみんな一緒にいるのが一番だからねぇ」

その、ポツリとつぶやくような言葉は、やけにヴァイスとシアンの心に響いた。

この後メルの提案で、とりあえず昼頃までは、ヴァイスとシアンは一緒、メルは単独……という組み合わせで近場を探索してみることになった。

もしかしたらこちらの取り越し苦労で、本当はただセナとホノオが気まぐれに散歩に出かけた……という可能性を、捨てていなかったからだ。

そして、昼近くになったらメルの家の前に集合することになった。

メルと別れたヴァイスとシアンは、ひとまず“はるかぜ広場”へと向かうことにした。元人間のセナとホノオが行く当てのある唯一の場所であるし、正直なところ、一番“いてほしい”場所だったからだ。

「“キズナ”が兄弟なら、ヴァイスはお兄ちゃんだネ♪　ヴァイスお兄ちゃ～ん♪」

広場に向かう途中、シアンはヴァイスにぴったりとくっつき、再び甘え始めた。

「もう、シアンってばぁ」

呆れ顔のヴァイスだが、嫌そうな様子は微塵もなかった。

この直後、まさかあの2人に会うとは思いもしなかったヴァイスとシアンは、今はまだ、笑みを浮かべて歩いていたのであった。

第１３話：依頼者スイクン――その４（前書き）

セナとクソザルが原因で、ガイアが破滅？　アタシはそんなの信じたくないぜ。

どうやらアルルも同じ考えみたいだから、アタシ達は旅立つことにした。多くの救助隊に襲われるであろうセナとクソザルを、助けてやるんだ。

（語り：ソプラ）

第１３話：依頼者スイクン――その４

ヴァイスとシアンが“聖なる森”から“はるかぜ広場”へと向かう道のりのちょうど中頃に、２つの旅路がぶつかった。

「こんにちは～、弱虫君♪　今日はセナとホノオの救助に向かうのかい？」

森の茂みの奥から聞こえる、あの嫌みな声。

「ぶ、ブレロ！」

声の主の名前――ハスブレロの“ブレロ”――を、ヴァイスは叫ぶ。

「シアンちゃんもご一緒で。楽しそうじゃないか」

「シアン“ちゃん”って何ナノ！？　ブルル！」

もう一つの声――ブルーの“ブルル”のそれ――に、シアンは頬を膨らませて反応した。

シアンやホノオが救助隊“キズナ”に入った時は、かつてセナとヴァイスが受けていたようなブレロとブルルからの妨害は止んでいた。しかし、広場で顔をあわせる度に放たれる嫌みな言葉や軽蔑的な視線……。シアンやホノオも、ブレロとブルルにはあまり良いイメージを持っていなかったのだ。

「まぁまぁそんなに怒らずに。それより君達。事態の割には危機感が欠けているんじゃないかい？」

「“事態”？」

ブレロの意味ありげな言葉に、ヴァイスは首を傾げた。

「そっ、それより！　早くその茂みから出てきなヨ！」

姿の見えぬ相手との会話とは、どこか落ち着かないもの。シアンは表情を見せずに――といっても、それは彼らの声色が充分すぎるほど示しているのだが――一方的に話しかけてくるブレロとブルルに抗議をする。

「言われなくても……ね！」

セリフの途中で、茂みから“種マシンガン”が放たれ、尖った大粒の種がヴァイスとシアンに迫る。

「そのパターンはもう飽きたよ！　“火の粉”！」

ブレロはいつかも、こうしてセナに不意打ちをしたことがある。攻撃を予測していたヴァイスはシアンと種の間に立つと、茂みを燃やしてしまわないように弱めの炎タイプの技で種を焼き落とした。

すると、茂みが揺れてブレロとブルルがつまらなそうに出てくる。が、ブルルの手には“カクレオン商店”で仕入れた“不思議玉”が握られていた。

「あっ！」

ヴァイスがそれを見て危機感を感じるが、その刹那に玉が淡く光

り、避ける術なく効果が発揮されてしまう。

「それ、“投げ飛ばし玉”だよ！」

ブルルがヴァイスに向かってその水色の球体を放り投げると、ヴァイスの体が何かに押されたように吹っ飛び、後ろにいたシアンを巻き込んだ。

「うわぁ！」
「きゃっ！」

2人の悲鳴が重なり、体は地面に叩きつけられた。

「な、何するんだよ、いきなり！」

ヴァイスが体を起こして言う。

「卑怯者～ッ！」

シアンもそれに続くが、返ってきたのはブレロとブルルの不敵で不気味な笑いだった。

「ふふふ。“卑怯者”、か」

「“嘘つき”のお前なんかに言われたくないなぁ、ヴァイス」

「えっ？“嘘つき”？」

ブルルの言葉がヴァイスの心に引っかかる。ボクがいつ、ブレロとブルルに嘘を？

その疑問に対する答えはすぐに返ってきた。

「あぁ嘘つきさ。お前……いや、正確にはお前“達”は、ずっとおれっち達に嘘をついていた」

ブルルの返答に、機嫌を損ねたのはシアンだ。

「ヴァイスは嘘つきなんかじゃないヨ！　キミ達は何を言いたいノ!?」

「ふふ。なるほどね。嘘が達者なヴァイス君は、自分達がいつ嘘をついたのかも忘れてしまうんだねぇ」

本当に、ヴァイスは身に覚えがなかったのだ。しかし、ブレロにここまで言われると、さすがに少し心が揺らぐ。

「ブレロ、教えて。ボクがキミ達についた嘘って何なの?」

ヴァイスの言葉を聞くと、ブレロとブルルは大げさに“やれやれ”といったリアクションをして、ヴァイスに答えた。

「セナ君の正体は、“人間”で間違いないんだよなぁ？　“メルさんのいとこ”じゃなくて」

「おれっち達、お前達にだまされて、ずーっとセナはメルさんのいとこだと思っていて、奴を恐れてたんだけどね。あー、騙された騙された！」

「えっ……。た、確かにそうだけど、なんでブレロがそんなことを知ってるのさ?」

視線を泳がせ、動揺を隠せぬヴァイス。
セナとホノオが人間であるということを知っているのは、ボク達“キズナ”とお姉ちゃん、あとネイティオと……ホノオの話に出てきた“ポケモン”っていうポケモンだけなはずなのに。
真実を知っているブレロは、意味ありげな発言を。
「僕達だけじゃないさ。広場のポケモン達も、全救助隊のポケモン達も、みーんな知っているのさ」
その気味の悪い発言で、いやな予感がした。
「そ、それが何なのサ！？」
シアンは不安を振り払うように声を張り上げる。
「教えてあげようか。“事態”の深刻さを」
腕を組んで、ニヤリと笑いながらブルルが言う。
「随分と親切だね」
その言葉とは裏腹に、ヴァイスは険悪な眼差しをブレロとブルルに向けた。
「あぁ。これを聞いて泣きべそをかく君を見るのが、楽しみで仕方がないからさ」
ブレロのその言葉はハッタリか、それとも――。

少しだけぐらつく気持ちを、ブレロを睨むことで落ち着かせた。
そして。

「言ってごらんよ。泣き顔は見せてあげないけどね」

無理をして彼らしくない程の強気な発言をヴァイスがすると、ブレロとブルルは顔を見合わせ、言葉を準備する。一瞬の沈黙の後に、ブレロの口が動き出した。

「いたぞ！　セナとホノオだ！」

一方のセナとホノオは、背後から突如聞こえた声に表情をひきつらせて、振り向いた。

「えっ……！？」

すぐそこまで迫った声の主を見て、驚きの声を重ねる。

3人の鳥ポケモンが迫ってくる。そこまでは状況を把握できたのだが、細部を把握する前に、セナとホノオの体に3人のうちの1人のポケモンの翼が襲いかかった。

「うあっ！」

中途半端に振り返ったせいで、相手の攻撃が腹部に当たる。セナとホノオは苦しげに声を上げると、体を地面に引きずられた。

咳き込みながらも体を起こし、状況を理解しようと、先ほどの鳥ポケモン達を見据えた。

セナとホノオに迫り、翼をはためかせながら2人を見下ろすそれらのポケモン達。その周りを、セナとホノオに攻撃したポケモンの物と思われる羽根がふわふわと落下していた。

茶色や白の、柔らかい羽根。どうやらそれは、ピジョットというポケモンのもののようだ。立派なたてがみに、大きな翼。きりりとした目をしている。

その左にいるのは、細く長い首とくちばしで、翼もシャープな形をしている。そして、目つきの鋭い鳥ポケモン、オニドリルだ。

ピジョットの左にいるのは、ムクホークというポケモン。黒い体の、鷹のような見た目をしているポケモンで、赤く鋭い目をしている。何より印象的なのは、その左目を覆ってしまいそうなほど長い、顔の前に垂れ下がったたてがみだ。

ようやく襲ってきたポケモン達の特徴を掴んだセナ達だが、わからぬことはまだまだある。

「うっ……。お前、なんでいきなり攻撃するんだよ?」

少し呼吸を乱しながら、セナが疑問点を問う。

「そうか。私達が“第一号”なのか」

「“第一号”?」

ピジョットの意味ありげな言葉を、ホノオが復唱した。

「状況も分からずに――ってのも、なかなか可哀想じゃないか？　俺達だって、そんな理不尽なマネはしたくないしな」

自分達の置かれている状況を全く把握できていないセナとホノオにとって、このオニドリルの言葉はまさに謎だらけ。

唯一掴めたのは、どうやらこのオニドリルは目つきが鋭い割には怖い性格じゃなさそうだ、ということだけだ。

「うむ。そうだよな。いきなり悪かった。セナ、ホノオ」

「は、はぁ……」

オニドリルの言葉に納得して、セナ達に頭を下げるピジョット。

とりあえず返事を返したセナ達だが、怪訝な表情を浮かべている。

いきなり攻撃したり、訳も分からず謝ったり……。そんな不可解な行動の訳が、いよいよ明かされる。

「では、これから状況を説明しよう。いいか？　落ち着いて聞くのだよ」

コクコクと、2つの頭が2度上下したのを確認すると、ムクホークはさらに続けた。

「まず、紹介が遅れたな。我々は、救助隊“ウィング”だ」

「えっ、救助隊！？」

セナとホノオの、驚きの声が重なる。

どうして救助隊が、オイラ達を？　セナのその疑問を察して、ピ

ジョットが口を開いた。

「驚くのも仕方がないな。同じく救助隊員であるお前達が、どうして救助隊に襲われるのか疑問だろう」

再びセナとホノオが頷くと、今度はピジョットとオニドリルとムクホーク――救助隊“ウィング”の3人が、互いに顔を合わせて、気まずい雰囲気を漂わせた。

これからセナとホノオに、彼らの過酷すぎる運命を宣告しなくてはならない。まだ子供の彼らにこのようなことを言うのもなんとも心苦しいが――かと言って、なにも知らない彼らの命を奪うのは、それこそ“ウィング”の3人の良心に反するのだ。

ピジョットが、その重い口を開いた。

「我々がお前達に攻撃したのは、依頼なんだ。スイクンからのな」

「スイクン……！」

“スイクン”。

その単語を聞いただけで、瞬時に状況をくみ取ることができた。

奴は、救助隊を利用してオイラ達を消そうとしている。昨日“水晶の湖”を立ち去る際にスイクンが言った言葉が、セナの頭に鮮明に蘇る。

汝達の処分など、“奴ら”に任せれば良いのだ。

“奴ら”の正体が分かった今、セナとホノオは震撼する。

目の前にいるのは、敵。2人の命をねらう敵なのだ。

「スイクンが全救助隊に知らせてくれたんだ。人間であるお前達のせいでガイアに災いが起こり、このままではガイアは破滅する。とな」

分かっている。――それが真実かどうかは分からないが、彼らが言おうとしていることは、昨日スイクンから嫌と言うほど聞かされたから。

ならば聞く必要などない。一刻も早く敵を撒かなければ。

分かってはいるが、2人の足は、ゆっくり、ゆっくりとしか動かない。さらに説明を続けようとくちばしを動かすオニドリルを見据えながら、地面の草を押しつぶすように足を引きずる。

「さっきも言ったが、俺達も救助隊だ。このガイアを守るために、俺達がとらなければならない行動は……」

言葉がそこできれる。救助隊“ウィング”の3人が目を合わせ、再びセナとホノオを見たときの眼差しは、先ほどまでの、状況を説明していたときのそれとは違っていた。

「ガイアのためなんだ。許せ！」

ピジョットの言葉がきっかけとなり、3人の翼が空気を切り裂く。刹那、セナとホノオの目つきが変わる。

自分達に突きつけられそうな鋭い3つのくちばしを見据え、セナは両手をそちらに突き出した。

「殺されるもんか。“守る”！」

光のシールドがくちばしとセナ達を隔てる。ピジョット達が急に勢いをなくしたせいで、行き場をなくした風がシールドの周りを吹き荒れた。

「ぐっ……」

シールドに押し返されたせいで後退するピジョット達。しかし……

「もう一度だ！　“守る”を崩せ！」

ムクホークがそう言うと、セナとホノオに逃げるスキを与えずに、再び“守る”で作り出したシールドに3つの鋭いくちばしが突きつけられた。

「うわぁ！」

そのあまりの迫力に、ホノオは思わず声を上げた。

“守る”のシールドは、強固なものだがきわめて薄い。破れたら、覚悟しなくては。

気持ちを強く保つために、セナは相手の瞳を睨む。3つの鋭い眼差しがセナの瞳を突き刺したが、臆さず、怯まず……。

「ん……くっ……」

徐々にシールドを保つのが難しくなり、セナは苦しげな声を漏らす。

相手と目が合っている。“あの技”が使える。しかし、技の効果がでるまでに時間が……。

あれこれと考えた末、使うべき技は思いついた。しかし、体力的に、厳しいものが――

「セナ！」

ホノオの声で、セナの思考が遮断される。

「無理すんな。いざとなったらオレが一発やっちゃるから！」

ニコリと微笑むと、ホノオは真剣な眼差しを敵に向ける。

そうか、忘れていた。オイラは1人じゃない。

自らの作戦が成り立つ方法を思いつき、セナはニヤリと笑う。そして、ホノオに指示を出した。

「よーし、ホノオ。オイラが合図したら、フルパワーの“火炎放射”をぶっ放せ！」

「あいよ！」

もうすでに、シールドの光がかすんできた。限界がくる、その前に……。

セナは、ピジョット、オニドリル、ムクホークと視線が合っていることを確認する。

そして眠そうに目をこすると、大きな“あくび”をした。

「なっ……！？」

この緊迫した状況の中での間の抜けた行動に、ピジョット達は拍子抜けする。

（やっぱり“あくび”使うと気が抜けちまうな。“守る”ももう限界だ）

今までシールドを張ることに向けていた強い気持ちを、今度はホノオを信じる気持ちへと変えた。

「ホノオ、今だ！」

「よっしゃ、食らえーっ！」

セナの合図とともにシールドが消失し、いよいよくちばしが2人に迫る。ホノオが大きく口を開く。前に立ち防御に徹したセナの視界には、今は鋭い3つのくちばしが。

（頼んだ、ホノオ！）

くちばしを直視できなくなり、きつく目をつむった直後、右の頬に熱を感じた。3人の大きな鳥ポケモンを思い切りのけぞらせるほどの、ホノオの強い“火炎放射”の熱だ。

「ぐあぁぁーっ！！」

3人の悲鳴が聞こえると、セナはゆっくりと目を開ける。“火炎放射”の勢いのおかげで、先ほどまで目の前にいたピジョット達と、

5メートルほどの距離ができていた。

「あといいよ、ホノオ。もう“効果”が出てるだろうから」

セナの言葉で、ホノオの猛攻が止む。

すると、ピジョット、オニドリル、ムクホーク。静かになった“聖なる森”に、3人のいびきが響いていた。

第１３話：依頼者スイクン――その４（後書き）

オチ（？）の意味はお分かりでしょうか……？

セナが使った技“あくび”は、敵の眠気をさそう効果があります。
少々効果が出るまでに時間がかかりますが。

第１３話：依頼者スイクン――その５（前書き）

どうやらスイクンは、救助隊を利用してオイラ達を消すつもりらしい。精神的にも結構キツいし、なかなか考えたじゃないの。
敵第一号のウイングって救助隊が善良な奴らで本当によかった。
事情を丁寧に教えてくれたもん。

そんなウイングをうまくまくと、オイラ達の逃亡生活が始まる……。

（語り：セナ）

第13話：依頼者スイクン――その5

ブレロとブルルの話が終わる。この日の朝、“はるかぜ広場”で決められたセナとホノオの運命についての話が。

「嘘つき……」

なんとも形容しがたい、ヴァイスの声。

「嘘じゃないさ。僕達は親切にも、君達に真実を教えたまで……」

「うるさい！」

今度は怒りのこもった眼差しで、ヴァイスは発言者であるブレロを怒鳴りつける。その声に驚いたシアンは、ヴァイスの隣で小さく跳ね上がった。

「よくそんな嘘をつけるね？　『セナとホノオのせいでガイアが破滅するから、救助隊が2人を追っている』。どうせこんなの、ボクをからかうための嘘でしょ？」

「だから嘘じゃないって！」

ブレロとブルルの述べたことは、多少の誇張表現があったものの、確かに事実だった。それがヴァイスに――あの泣き虫で気弱なヴァイスに、こうもキッパリと嘘だと言われるとは、まさか思わなかった。そんな動揺を隠せずに、ブルルは焦り気味でヴァイスに反論する。

シアンには、ヴァイスのセリフが彼の本心かは分からなかった。

「確かにさ」

ヴァイスが静かに、しかし重みのある声で話し始めた。

「セナがお姉ちゃんのいとこだっていうのは嘘。セナは、人間だよ。でもさ！　だからってなんで殺されなきゃなんないのさ！？　そんなのおかしいよ！」

「……」

今回ばかりは事実を述べたのに、疑われて返す言葉のないブレロとブルル。自分たちのいかなる話も、ヴァイスに分かってもらえないだろう。そんな気がした。

「いくら嘘でも、よくそんな嘘を言えるね？　どうせそんな話は、ただの君達の願望なんでしょ？　セナが嫌いだから、死んでほしいだけでしょ！？」

「ヴァイス！」

どんどんヒートアップするヴァイスを止めるべく、シアンが一声かける。しかし、ヴァイスの鋭い一瞥により、彼のこれ以上の発言は許されなくなった。

「命の重さが分からない最低なポケモンなんて、大っ嫌い！」

ヴァイスはそう言うと、思い切り“火炎放射”を放つ。怒りで格段にパワーが上がり、辺りの草が燃えることを一切配慮しないその攻撃は、ブレロとブルルに襲いかかった。

「うわあああ！！」

“火の粉”すら満足に放てない頃のヴァイスを、ブレロとブルルは知っていた。だからこそ、この威力には驚いたのだ。

「ちょっと……ヴァイス！」

もしもブレロとブルルが言っていることがただの嘘なら、シアンだって攻撃に参加していただろう。少なくとも、ブレロ達が問題の話をする前は、ブレロ達に敵意を抱き、倒そうとしていた。

しかし、いつもは温厚なヴァイスの今の姿は、シアンには認め難かった。相手の言葉を一切聞かず、攻撃に徹する姿は。

だから、ヴァイスの腕をつかんで注意を促したのだが……。

「うるさいな！」

「キャッ！」

乱暴に腕を振られ、シアンは地面に思い切り尻餅をついた。

「シアンまで、命の重さが分からないんだね。こんな嘘をつかれて、悔しくないの？」

「だって……」

言葉を濁し、シアンは黙り込む。自分の言葉さえも、今のヴァイスに届く自信がなかった。

ただ、ヴァイスが先ほどから連呼する『命の重さ』という言葉を思

うと、胸が締め付けられた。

以前、救助隊の昇格試験に失敗した夜に、セナが教えてくれたヴァイスの過去。それがその言葉に、言い表せないほどの重みを加えていたのだ。

母親を永遠に失った過去がある。だから、もう二度と大切なものを失いたくない。その気持ちはよく分かるのだが――。

「まぁ、シアンはブレロとブルルのことだってよく分かんないもんね」

なんとか体を起こしたブレロとブルル。そんな2人に、ヴァイスは冷たい笑顔を向けながら言う。

「この2人、ボクをからかうのが好きなんだよ。ボクは弱かったから、いつも泣いてた。でもね、今のボクはもう弱くないんだ。ブレロ達なんかに騙されないし、戦っても負けない！」

再び息を吸い込むと、ヴァイスは傷を負っているブレロとブルルに、再び強力な炎を放った。

「っ……！」

熱さに顔を背け、迫る炎を食らう覚悟でブレロとブルルは目をつむる。

ヴァイスがここまで強くなったとは予想をしていなかったのもそうなのだが、何よりも誤算だったのは、ヴァイスの逆鱗に触れてしまったことのようだ――そんなことを思いながら。

しかし、いつまで経ってもヴァイスの攻撃が当たらない。不思議

に思ったブレロとブルルは顔を上げた。

「はぁ、はぁ……」

2人の前に立っているのは、息を切らした小さなポッチャマ、シアン。辺りを漂う蒸気は、シアンがヴァイスの攻撃を相殺した、という事実を物語っていた。

「シアン？　何やってるの？　ブレロとブルルはボクらの敵なんだよ？　セナとホノオが死ねばいいって思ってるような最低な奴なんだよ！？」

そんなヴァイスの言葉を聞いて、すっかりブレロとブルルは小さくなっていた。

これまでの罪悪感がないとは言えなかった。自分達が話したセナとホノオについての話が、ヴァイスには受け入れるのが難しいだろうとも思っていた。

しかし……。今、目の前にいるヴァイスの、自分達を一切受け付けない態度。かつてないその反応に、対応しきれないでいた。

「ヴァイス。落ち着いてヨ」

ブレロとブルルを攻撃から守ったシアンは、ヴァイスに優しく話しかけた。

「確かにブレロ達が言ってることは嘘かもしれない。シアンだって、信じられないモン。でもサ、本当かもしれないのにこんなに攻撃しちゃかわいそうだヨ」

シアンの言葉を聞くと、ヴァイスの表情が曇る。

「ふーん。シアンはブレロ達のこと信じるんだ。セナとホノオが救助隊に殺されちゃうなんて、そんなおかしな話を？」

心のどこかでは、自分の屁理屈に気がついているヴァイスがいたのかもしれない。しかし彼は、このような発言を。

「違うモン！　シアンはただ、もっとブレロとブルルのお話を聞いてあげた方がいいんじゃないカナ、って」

「……」

シアンが言葉を区切るが、ヴァイスは沈黙を続けた。仕方なく、再び話し出す。

「ねぇ。確かにヴァイスはブレロ達のことが嫌いだよネ？　意地悪されたんだもんネ。でも、これじゃあ逆に、ヴァイスがいじめっ子みたいだヨ」

痛い言葉。しかし、まだヴァイスの中には、抑えきれない感情があった。

「さっきヴァイス、『ボクはもう弱くない』って言ったよネ？　でも、それって本当にいいことなのカナ？　どんなに強くても優しくないヴァイスなんて、シアン、怖くて嫌だヨ」

自分達の目の前で交わされる、シアンとヴァイスの会話。

自分達に対して敵意むき出しのヴァイスだが、しかし、そんな彼にどこか共感できるような。妙な気持ちが、ブレロとブルルの心に芽生えた。

「シアン……」

徐々にヴァイスの瞳には、涙がたまる。しかしそれは、決して自分の意見を曲げた証のような“弱い”涙ではなくて――。

「どうせシアンにも、ボクの気持ちなんか分からないよね。シアンみたいな、きれいごとばっかり並べられるお子様にはね」

涙は、わがままを貫き通すための武器になっていた。

「ヴァイス……」

小さくそれだけ呟いたが、そこから先の言葉が見つからない。結局、呟いた直後にヴァイスに睨みつけられ、ブレロは再び黙り込んだ。

「シアンは、お子様なのカナ？」

ポツリと、シアンは呟く。

「うん。人の痛みを知らないお子様だよ」

鋭いヴァイスの言葉が、シアンの胸を刺す。

「お子様じゃ……だめナノ？」

ヴァイスの目に焼き付くのは、良くも悪くも純粋な、シアンの眼差しだった。

「綺麗だよ、お子様の心は。でも、必ずいつかは汚れる」

何のために、ボクはここまでシアンを拒絶しているんだろう？

始まりは、ブレロとブルルに対する反感から、重ねに重ねた屁理屈。なぜだか分からないけど、屁理屈を正当化するために、またまた重ねる。

自分が、分からなくなる。ヴァイスにとっては初めてのこの感覚は、ブレロやブルルにとっては痛いほど分かる気持ちだった。

しばらくの沈黙は、可愛らしいソプラノの声が破る。

「あっ！　ヴァイスにシアンじゃん！」

ガルーラに励まされた後、“はるかぜ広場”からこの“聖なる森”を歩き出したソプラとアルル。セナ達“キズナ”を探しにきた彼女達が、ヴァイスやシアンの元へと駆け寄ってきた。

「ヴァイスさん、シアンさん。どうしたの？　それに、ブレロさんやブルルさん、怪我なんかしちゃって」

その場の異様な雰囲気と状況から、アルルは首を傾げた。しかし、それよりも重大な違和感を、ソプラは指摘した。

「そ、それよりヴァイス、シアン。セナとホノオはどこにいるんだよ！？」

そう。いるはずの――いるべき姿がそこにはないのだ。

ソプラがこうも慌てた様子で話すのは、事情を知っているから。しかし、まだセナとホノオの運命についての真相が分からぬままのヴァイスとシアンは、その様子にわずかな違和感を感じる。そして、一瞬の後に胸騒ぎを感じた、ヴァイスなのだった。

「セナとホノオは、朝起きたらいなくなっていたんだヨ。シアン達“キズナ”は、昨日はねーちゃんの――メルねーちゃんの家にお泊まりしたんだケド……」

メルも時々“はるかぜ広場”に顔を出すため、ソプラとアルルは彼女を全く知らない、という訳ではなかった。

「セナさんにホノオさん……」

アルルはうつむき、切ない表情を浮かべて話し始めた。

「“こうなる”ことを、どこかで分かっていたのかな？　ただいなくなったにしては、タイミングが……」

この言葉で、ヴァイスは悟る。

昨日のスイクンの言葉。セナとホノオがいなくなったこと。嘘だと否定し続けた、さっきのブレロとブルルの話。不自然なソプラとアルルの言動。

現実は、知ることを恐れたくなるようなことだが、もう逃げられないのかもしれない。そしてヴァイスとシアンは、この事を――セナとホノオが置かれた状況の事を、すでに“耳にしたかもしれない”。

その場に居合わせた各々が、皆、少しずつ違ったことを想う。しかし、先ほどのような刺々しい雰囲気は、今はもうなかった。

「ソプラ、アルル。広場で今朝、何があったのか知っているんだね？」

問うのはヴァイス。頷くソプラとアルル。

一拍置いて、ヴァイスは真実を知る覚悟をする。

そして、

「教えて」

ただそれだけを言うと、ソプラとアルルに眼差しを向けた。

第１４話：現実と向き合って――その１（前書き）

いつも優しいヴァイスが、あんなに怒るとは思わなかったヨ。ブレロとブルルが嫌いなのはよーく分かるんだケド、でも、怖いヴァイスは嫌だヨ……。

ヴァイスが暴走してた時にネ、ちょうどソプラとアルルが来たノ。ヴァイスが冷静になってよかったケド、なんだか嫌な予感がするネ。

（語り：シアン）

第１４話：現実と向き合って――その１

「クソ……」

呟くのはホノオ。

少し前に救助隊“ウィング”をうまくまいたセナとホノオだが、新たに目の前に立ちはだかる救助隊に足止めされていた。

彼らの前方に回り込んで威嚇しているのは、ザングースという種族のポケモンだ。白い体毛に赤のジグザグな模様が入っていて、両手には鋭い爪が。そして目つきが鋭く、猫のような顔立ちをしている。

ザングースと向き合っているセナ達の右側にいるのが、ブーピッグというポケモンだ。名前から連想できるように、まるまるとしたお腹の、豚のようなポケモンである。体は紫色で、手足や耳は黒く、額やお腹には黒い真珠のような飾りがいくつかついている。

セナ達の足元には、毒々しい紫色のトゲが敷き詰められていて、一歩でも動くと足に刺さってしまう。

このトゲは“どくびし”という技で作り出されたもので、その名の通り、踏むと痛いし毒を食らってしまう。

技の使用人は、セナ達の左側にいる、ロズレイドというポケモン。両手には赤と青のバラの花を持ち、自身もバラを模したような、優雅な容姿のポケモンだ。

敵に囲まれ、一歩も動けない。セナとホノオは早くも窮地に立たされていた。

「逃走を始めてこんなにすぐにやられちまうのかと思うと気の毒だが、ガイアのためなんだ」

セナとホノオを思いやる言葉を発したのは、意外にも、鋭い目つきのザングースだった。先ほどの“ウィング”のオニドリル同様、見た目より優しい性格のようだ。

敵として会うんじゃなくて、こういうポケモンと仲良くしてみたかったなぁ……。

ふと、叶わぬ願いを心で呟くと、セナは少し寂しい気分になった。

「すまないが……俺達は依頼を成功させる！」

ブーピッグがそう言いながら、自身の両脚に力をためる。

とどめをさそうとしている。

しばしの考え事を止め、セナは表情を引き締めた。

「“飛び跳ねる”！！」

直後、ブーピッグがその巨体を脚力で空へ高々と放り投げた。

ギラリと光る太陽の光を遮り、セナとホノオの真上に浮遊する。

「うわ……！」

横への動きも封じられているのに、上空も塞がれた。

ブーピッグがセナとホノオの真上に、隕石のごとく力強く落ちてくる場面を想像すると、思わず声を上げてしまうホノオだった。

一方で、セナは決断する。

ずいぶんと高く飛び跳ねたブーピッグが落ちてくる前に、この作戦が成功するはず……。

「ホノオ！」

セナの呼びかけに、ホノオはパッと表情を明るくして答えた。

「“どくびし”食らいたくなかったら、思いっきりジャンプしろ！！」

「へっ？」

唐突なセナの要求に、スットンキョウな声を上げたホノオ。

しかし彼にも構っている時間はなく、セナは甲羅に閉じこもる。

「いくぞ！“高速スピン”！！」

甲羅に身を隠したまま、セナは高速で回転し、さらに前方――ザングースに向かって飛び出した。

地をはう甲羅のお陰で“どくびし”が飛び散り通路が出来たが、セナが飛ばした“どくびし”がホノオの足元にも迫る。

「うわぁ！」

焦ってジャンプすると、ギリギリ“どくびし”をかわせた。

しかし、忘れてはならないのが上空のブーピッグ。すぐさま彼の着地地点から避難しなくては。

地面に片足が着くとすぐさま、ホノオは地面を力強く蹴り、セナの甲羅の後を追う。

ブーピッグが地面に落ちると凄まじい地響きの後で奇声があがる。

おそらく彼の着地地点には、セナが飛ばした“どくびし”が――。申し訳ない気持ちもしたが、2人はそれに構ってなどいられなかった。

セナが“高速スピン”で勢いよく前方のザングースを弾き飛ばし、ホノオは“炎の渦”を使って、追いかけてきたロズレイドをきつく炎で束縛した。

背後から自分達の名を呼ぶ声が聞こえるのを感じながら、セナとホノオはザングース達に背を向け、その場を走り去った。

「はぁ、はぁ……」

あれからしばらくの間、運良く救助隊のポケモンに会わず、無言で森を駆けたセナとホノオ。

現在は、ここ“聖なる森”の中にどっしりと根を下ろしていた大樹にのぼり、木の葉の中に身を潜めながら息を整えている。

「はぁ……。何度死にかけたんだぁ？　オレ達」

一段落つくと、ホノオは右隣に腰掛けるセナにため息混じりで話しかけた。

「まだ2回」

短く答えると、セナは一度言葉を区切る。そしてまた話しだした。

「実際、オイラ達を追ってる全ての救助隊のポケモンの数なんて、ヤバいぞ？」

ホノオにそう言うと、セナもため息。太い木の枝に腰掛けながら足をぶらぶらとさせると、生い茂る木の葉が揺れた。

「これから大丈夫かな？」

さほど深刻な口調ではないものの、不安の意を表すホノオ。それを聞いて考え込むと、セナはホノオに眼差しを向けた。

「大丈夫……とは言えないな。この“聖なる森”にいる間は」

意味ありげなセナの言葉に、ホノオは首を傾げた。

「ホラ、この森って、住んでるポケモンも多いだろ？　だから、オイラ達の噂が広まりやすいから、気がついたら敵に囲まれちまう。むしろ、今までがラッキーだったさ。このままこの森に居続けたら、同時にいくつもの救助隊に襲われるかもしれない」

セナの言葉を聞いて、黙りこくるホノオ。顔に浮かぶ不安の色が、先ほどよりも色濃くなっていた。

「あのさ」

しっかりと、目線を合わせる2人。

「とっととこの“聖なる森”を抜けて、あんまりポケモンのいない地域に逃げちまおう」

セナの提案に、文句はなかった。ただ、一つだけ気になることが。

「ネイティオは？　奴に会って、ヴァイスの父さんの居場所を聞くんじゃねえの？」

一瞬うつむき、すぐに顔を上げ、セナは答える。

「あぁ。ネイティオには会えないだろうな。でもさ、奴に頼らなくたってヴァイスの父さんは探せるし、何より――」

表情に決意を込めて、セナは次の言葉を。

「優先すべきことは、オイラ達の安全。ヴァイスやシアンのところに帰れるまで、しっかり生きなきゃ」

『生きなきゃ』

偽りがない、力強いその言葉を聞くと、ホノオはニッと笑う。

「そだな。まぁぼちぼち、頑張りましょー！」

活気づけるために元気よく言うと、うんと伸びをするホノオ。背筋をピンと伸ばし、めいいっぱい両手を空に突き上げたが――体のバランスが、ぐらりと後ろに傾く。

「わっと……」

とっさに近くにあった木の枝を掴むが、あまりに頼りない細さのその枝は、むなしくポキッと折れてしまう。

「わあああー！！」

叫び声を上げながら、地面に背中を向けて落ちる。そんなホノオを見ていると、近くにいる救助隊のポケモンに見つかりはしないか――と不安になるセナだったが、それは杞憂に終わった。

「ぐえっ！」

背中を強く打ったホノオの奇声は、彼と地面との衝突音にかき消された。

セナは木の葉の間から下を見下ろし、ホノオを見てクスクスと笑う。

「猿が木から落ちたね」

そう言いながら木の幹を伝って、スルスルと大樹を降りる。

そして、目を回すホノオをよそに、青いバッグからガイアの地図を取り出すと、目的地――あまりポケモンがいない地域――を検討し始めた。

時刻は昼を少しばかり過ぎた頃。

セナとホノオが見つからなかったので、仕方なくメルは自らの家へと足を進めた。昼時までセナとホノオを探してみて、見つからなかったらメルの家に集合する、と、ヴァイスとシアンと約束したからだ。

セナとホノオを見つけることは、できなかった。しかし、彼女が手がかりを掴んだのは確かだ。

森の中で、セナとホノオを探すポケモン達の姿をたびたび見かけたのだ。

ひょっとして、ヴァイス達が救助隊に捜索を依頼したのだろうか。それとも――。

あれこれと考えていると、花壇の花に囲まれた、木造の小さな小屋――メルの家が見えてきた。

よくよく目を凝らすと、色とりどりの花のそばに、色とりどりのポケモン達の姿が。

少し首を傾げると、メルは家に向かって駆け出す。あまり動かぬポケモン達の姿をよくよく見てみると、その中に、映えるオレンジ色を確認できた。ヒトカゲのヴァイスだ。

「ヴァイス！」

名前を呼ばれると、メルに手を振り、早く、と催促する。

そんなヴァイス以外のポケモン達もメルに視線を向けたのだが、その顔ぶれに驚き、メルは思わず足を止めた。

ヴァイスがいる。シアンもいる。そして、プラスルとマイナン――確か、名前はソプラとアルル――がいるのはまだ分かる。

どうして、ブレロとブルルが？

「お姉ちゃん、早くー！」

ヴァイスに呼ばれて我に返ると、再び走り出す。

そして、集まっているポケモン達――ヴァイス達のところへと合

流した。

「ええと……何から聞けばいいんだろうね？」

ヴァイス達を見渡しながら、メルが困惑したように声を漏らす。

「あのね、お姉ちゃん」

すぐに口を開くヴァイス。そして、ブレロとブルルやソプラとアルルに教わった、セナとホノオが置かれた状況についてメルに話したのだった――。

「そうかい……。それで、あんなに多くの救助隊が、この森の中をウロチョロしてたんだね」

先ほどまでの疑問のつじつまが合い、ヴァイスの話を聞き終わったメルはすぐに納得して呟く。

しかし、彼女の状況把握がこれほどまでに早かったのは、ヴァイスのおかげと言っても良かった。彼の、落ち着いていて丁寧な説明口調が、メルの理解の助けになったのだ。

こんな彼が、つい先ほどまで怒り狂っていたとは、話を聞く限りでは想像できなかった。

「ヴァイス、シアン。アンタ達、“はるかぜ広場”の様子を見てきたのかい？」

メルの言葉に対して首を横に振る、ヴァイスとシアン。
変わりに答えたのは、アルルだった。簡潔な自己紹介の後に、説明を加えてゆく。

「メルさん、こんにちは。ボクはアルルです。ボクとこちらのプラスル、ソプラは、広場の様子を見てきました」

ここまで言うと、ソプラが割り込んでくる。

「“はるかぜ広場”にゃ救助隊がわんさかいてさ。全部の救助隊がそうするって訳でもないんだけど、なんか『セナとホノオを倒さなきゃ』って言ってる救助隊もたくさんいたぜ。そんでアタシ達、セナとクソザルを助けるために広場を出て、ヴァイス達に会って――」

年長者のメルと話すときでも、相変わらずの言葉遣いをするソプラ。特に彼女の『クソザル』というフレーズを聞いた途端、メルは可笑しそうにクスリと笑った。

「――そうかい。じゃあ、ヴァイスとシアンに状況を伝えてくれたのが、アンタ達なんだね？」

メルはソプラとアルルを見て問うが、2人は首を振る。

「実は、先客がいたんだ」

そう答えるソプラの視線の先には、メルがずっと気にしていた存在、ブレロとブルルがいた。

その場の皆の眼差しが向けられ、少しおどおどとするブレロとブ

ルル。そんな彼らを、ヴァイスは微笑んで見つめた。

「あ、あの……。僕達も、ヴァイス達と一緒にセナとホノオを探したいなぁ……って。ダメですか？」

今までのブレロらしからぬ言葉に、目を丸くするメル。だが、次第に彼とブルルのおどおどした態度が可笑しく感じて、またまたクスリと笑う。

チラリと、ヴァイスに視線を向けてみた。ヴァイスはメルに微笑みを返す。シアンもまた――。

ヴァイスとブレロ、ブルルがどんな出来事によって今の間柄になったのかは、メルにはハッキリとは分からなかった。しかし、ヴァイスやシアンの微笑みをはじめとして、その場に流れる温かな雰囲気。

メルにはそれだけで充分だった。

「別に構わないよ。むしろ増えて嬉しいくらいだね。じゃ、遠慮なく頼むよ！　ブレロ、ブルル」

一瞬の沈黙。

それを塗り替えたのが、ヴァイスの歓喜の声だった。

「やったー！　良かったね、ブレロ、ブルル♪」

偽りのない祝福の言葉に、心が温かくなる。ほんの少しだけ目が潤む、ブレロとブルルだった。

「ただし。条件があるよ」

メルの言葉によって、再び訪れる沈黙。眼差しを向けられたブレロとブルルは、少し息をのんで後ずさりした。

「一緒にセナとホノオを探す旅にでるってことは、アタイ達は仲間だ。だからさ――」

ブレロ達を注視するのを止め、ぐるりと皆の顔を見回す。

「敬語は禁止。いいね？」

皆、意外な要求に拍子抜けする。

「ブレロにブルル。アンタ達は男なんだから、もっとシャキッとしな。アルルはそんなに礼儀正しくしなくてもいいよ。ソプラは――言うことないね」

最後のフレーズを聞くと、得意げに胸を張るソプラ。しかし、その様子はどこか滑稽で、皆笑いをこらえるのに必死だった。

「分かったら返事しな！」

「はい！」

メルの言葉の後で、きれいに重なる返事。その声は、メルの背中をポンと押す。

「それじゃ、まずはこの森で救助隊のポケモン達を探すよ。聞き込みをするんだ」

テキパキと指示を出し、上手く皆をまとめる。そんなメルを先頭にして、セナとホノオを探す旅の一行は、花壇の花に囲まれた小さな小屋――メルの家から歩き出す。

メルの後ろを歩くヴァイスは、最後にもう一度今の状況と冷静に向き合うために、少し考え込んだ。

セナとホノオならまだやられていないと思うけど、これからどうなるかは分からない。だから、なるべく早く見つけて、ボクらが手を貸さなくちゃ。

でも、さっきみたいな行動は、しちゃいけないよね。辛い状況だけど、セナとホノオ……それから、一緒に旅をする仲間を信じなきゃ。

ここまで考えると、メルの背中を見つめて頼もしく微笑む。右隣にいるシアンと目を合わせると、シアンはニコッとあどけない笑顔を向けてきたので、つられて笑顔になった。

クルリと、ヴァイスは後ろを向く。ソプラと目を合わせると、彼女は元気な笑顔を見せた。アルルはなぜか、少し恥ずかしそう。

そして、ブレロとブルルに目を向ける。照れたように笑うその顔を見るとヴァイスは前方に視線を戻す。

そして、先ほどソプラとアルルに真実を聞いた後のことを、ふと思い返してみた。

自分と、ブレロ、ブルルとのやり取りを――。

第１４話：現実と向き合って――その１（後書き）

どうするか悩んだのですが、ヴァイスとブレロ&ブルルの和解シーンは、次回明かそうと思います。

ただ時間軸にそって話を進めると、どうしても単調になってしまって……（汗）。

第１４話：現実と向き合って――その２（前書き）

聖なる森は、広くてポケモンが多い土地。下手すると敵に囲まれちまうから、とっとと抜けちゃおう。

なんとしても、生き抜かなきゃ。いつかほとぼりが冷めたときに、ヴァイスやシアン達に会うためにも。

（語り：セナ）

第１４話：現実と向き合って――その２

「――って訳なんだ」

まだ昼前の時分。

ソプラとアルルの、セナとホノオが置かれた状況についての説明が終わった。その時のことを、ヴァイスは思い返す――。

「……」

何も言えなかった。

真実は、自分が否定し続けていたことだったから。ブレロとブルルの言葉を全否定したヴァイスだが、その言葉が、本当だったから。言葉を失い、少し震えているヴァイスの隣には、こちらもショックで言葉が出ないシアンがいた。

「ヴァイス……さん」

ヴァイスのそんな姿を見て、切なそうな表情で呟くのはアルルだった。大切な友達の命が――。こんな話を信じなければならない彼の気持ちを考えただけで、痛かった。

（そんな……）

ようやく考え事を始めたヴァイス。

（まさか、ブレロとブルルの話が、本当だったなんて……）

もちろん一番の打撃になったのは、セナ達に迫る危機を示すその知らせ自体であるはずなのだが、何故だろう。今のヴァイスの頭の中を占めるのは、ブレロとブルルのことだったのだ。

（ボク……なんであんなことしちゃったんだろ？）

怒り狂い、ブレロやブルル、さらにはシアンにまでも手をあげた、少し前の自分。“彼”の誤った行動に、今更頭を悩ませるヴァイスだった。

（これじゃ、ブレロとブルルになに言われても、仕方がないよね）

どうしようもなく、申し訳なくなった。確かにあちらに不純な動機はあったが、これぱかりは自分が悪い。

この際、罵声を浴びせられた方がよほど気分もすっきりするのでは。

こう思ったヴァイスは、すがるような眼差しをブレロとブルルに向けた。

「え……？」

そんなヴァイスの瞳をみると、思わず戸惑いの声を漏らすブレロとブルル。ヴァイスをからかい、傷つけるために“はるかぜ広場”を出た彼らだが、今のヴァイスはからかうには弱すぎる。そして何より――。

今までブレロとブルルがヴァイスを好かなかったのには、ある“要因”があったのだが、しかし、それが気にならなくなる出来事が、つい先ほど起こったのだ。

「――僕は」

静かに話し始めるブレロ。

「僕は、お前みたいな“いい子チャン”は大嫌いだった。いつでも他者に優しくして、自分の感情を素直に出せる“いい子”は――」

そこまで聞くと、シアンがムッとした表情になったので、ヴァイスはシアンにまなざしを向けて彼を落ち着かせた。

「だって、“いい子”ってのは、いつも素直に子供らしくふるまえる、っていう“特技”を持ってるばっかりに、人に好かれてさ……。そうしたくても、“いい子”になれなかった僕らは、お前を見るとムシャクシャした」

その言葉は、鋭くヴァイスの胸を刺した。

自分がそんな風に思われているとは知らなかった。それもあるのだが、何より――。

ブレロ、ブルルと重なる者が、ヴァイスの胸の奥で悲痛な表情を浮かべていた。

自分の気持ちを素直に表現できないポケモンって、“ここにも”いたんだ。そう考えると、ヴァイスはうつむきだした。

（セナ……）

胸の奥の彼に、そっと話しかけた。彼がヴァイスに向けたのは、可愛らしい――しかし痛々しい、作り笑い。

（やっぱり……）

表情を暗くするヴァイスを見ると、ブルルが焦って話を進めた。別に彼らは、ヴァイスを攻撃するために話している訳ではないのだから。

「でもさぁ。さっきのおっかないお前を見てたら、なんかすごく親近感沸いたんだよな。おかしな話だけど。お前にも我を忘れる瞬間ってモンがあって、だからお前って、特別な能力をもった“いい子”でもなくて、おれっち達とおんなじポケモンなんだなぁって」

ブルルはそう言いながら、うっすらと笑みを浮かべた。それは決して、意地の悪い笑みではなく――。

しばし話題から置いてけぼりにされているソプラは必死に状況を理解しようと頭を回転させていた。一方のアルルはソプラよりも少し内容の理解が進んでいた。ヴァイスさんは、ブレロさん達にいったい何をしたんだろう……？　そればかりを考えていた。

「あのね」

ヴァイスは、ブレロとブルルにしっかりと眼差しを向けて話し始めた。

「確かにボクは、ブレロにとっては“いい子”に見えてたかもしれないね。でも、今思えば悪い子だったかもしれない」

ヴァイスのその言葉にシアン、ソプラ、アルルは驚き、バッとヴァイスに顔を向けた。

「確かにボクは、自分の気持ちを素直に言えるよ。でも――いや、

“だから”って言うべきかもしれないんだけど、その逆の人の気持ちなんて、考えられなかったんだ」

一呼吸置き、ヴァイスは続けた。

「ボクがセナに逢ってからは、セナにいろいろなことを教えてもらったんだ。救助隊活動をして、世界が広がった。弱かったボクが、少しずつ強くなった。それに……。セナっていつも独りで悩みを抱えちゃってさ。ちっともボクに相談してくれないんだもん。いつも、限界がくるまでボロボロになってた。シアンは、分かるよね？」

シアンがこの時思い出した場面は、昨夜のメルの家で、明らかに元気のなかったセナだ。体調が悪いと言って寝室に向かうセナの顔には、それでも作り笑いが浮かべてあった。

コクリと、シアンは頷いた。

「はじめのうちは、ボクは悔しかったよ。セナにとってのボクって、頼れない存在なのかなって、いっつも不安になってた。でも、そんなセナのことが、いつの間にか理解できるようになっていたんだ」

思い出す、セナと過ごした日々。いつの間にか、ヴァイスは再び自分を忘れていた。誰に聞かせようという目的もなく、ただ話したいことを話していた——そんな感じだった。

「セナはボクを頼ろうとしなかったんじゃない。頼りたくても素直になれないのがセナだったんだ。自分が思うような行動をとれなかったから、すごく……すごく、苦しかったと思う」

声が震えるが、ヴァイスは話をやめようとしない。

「ブレロとブルルに、よく似てるんだよ……。なりたい自分になれなくて、真逆の行動をとっちゃう」

素直な“いい子”が羨ましかった。でも、自分達はそうなれなくて。ムシャクシャして“いい子”のヴァイスをいじめていたら、いつの間にか、自分達は目指している方向と真逆に歩き出していた。かくしてブレロとブルルは、ヴァイスに度々嫌がらせをするようになっていったのだった。

「意外だな」

ブレロはポツリと呟いた。

「セナだって、ヴァイスと同じで素直ないい子だと思ってた」

視界をにじませる涙を拭くと、ヴァイスは笑みを浮かべて答えた。

「セナは、素直じゃないけどいい子だったんだよ」

少し不思議そうな顔をするブレロとブルル。

「悩みがないときは、元気で明るくて。頼れるリーダーなんだ。素直さだけがいい子の要素じゃないってこと」

ヴァイスに続いて、シアンも口を開く。

「ホノオはネ、バカで間抜けで単純でせっかちで短気で乱暴で言葉遣いが悪くてすぐ調子にのるけど、意外と優しいところもあるんだヨ」

短所が多すぎるようなその発言に、ヴァイスはクスリと笑った。
ソプラは、そういえば盗賊団とのバトルの時、クソザルがアタシを助けてくれたなぁ……などと、決して口にはしないことを思っては頬を赤く染めた。

「……あのさ」

自信なさげに、ブレロが話しだす。

「僕達にもあるのかな？　長所……とか」

ないはずはない。
それは確実なはずなのだが、具体的なものが思いつかない限りはきれいごとに聞こえてしまう。
しばしヴァイスは考え込んだ。

「うーん。さっきボクらに本当のことを教えてくれたこと……かな？」

やっとの思いでこれだけ言うが、後はもう分からなかった。申し訳ないが、今までブレロとブルルには悪いイメージしかなかったから。

しかし、ボク達にわざわざ教えに来てくれたと思ってみると、やっぱり素直になれない面があったのかもな――
ヴァイスがそこまで考えると、ブルルが短く笑い、話しだした。

「はは。やっぱり聞くだけ無駄だったみたいだな、ブレロ」

苦笑いを浮かべる2人を見ていると、複雑な心境になった。

何か言わなくては。
その気持ちがヴァイスの口を小さく開かせたが、言葉が準備できていないため、再び閉じた。

「じゃ、僕達は広場に帰る。もうお前たちに嫌がらせしないからさ」

しばらくの後にブレロがそう言うと、ブルルと共にヴァイス達に背中を向けた。

「待ってよ」

口にした瞬間、しまった、と思った。もっと威勢良く言うべき言葉だったのに、ヴァイスの口からでたのは、なんだか情けない響きをもつ言葉。

ついつい口に出してしまったような言葉だが、しかし、その言葉によって、ヴァイスが次に話すべき言葉が決まっていった。

「確かに今は、ボクはブレロとブルルの良さは分からない。でも、君たちの良さを知りたいって気持ちはあるよ」

「シアンもシアンもー！」

ヴァイスの言葉に便乗し、シアンが言った。

「だからさ……もし良ければ、これから友達にならない？」

ヴァイスの言葉の意味を理解してようやく、ブレロとブルルは再び体をヴァイス達の方へと向けた。
ヴァイスだけではなかった。シアンもアルルも、さらには状況を

よく理解していないソプラも、とりあえずは笑っていた。

返した微笑みが、ブレロとブルルの返事。

かくして和解したヴァイス達とブレロ達は、6人でメルの家へと向かったのだった――。

ヴァイスが先ほどのことを思い返すのを止めてすぐに、ヴァイス、シアン、メル、ブレロ、ブルル、ソプラ、アルルの7人は、とある救助隊を見つけた。

近づいてみると、それは3人の鳥ポケモン――ピジョット、オニドリル、ムクホークの救助隊“ウィング”だった。

3人の、少し焦げたような翼を見て、もしかすると――と思う一行。急いで“ウィング”の元へと向かうと、セナとホノオを知らないかと尋ねた。

「あぁ、あの2人には会ったよ。俺達が第一号の救助隊だったみたいだ」

ピジョットのその言葉に食いつくように、皆の目つきが変わる。

「それで!?　セナ達はどこへ!?」

ヴァイスの勢いに少し押されつつも、オニドリルは答える。

「それが、俺達は奴らに逃げられちまって……」

「おまけに“あくび”で眠らされたから、あの2人がどこに行ったかは分からなかったんだ」

オニドリルの言葉に、自分の言葉を重ねるムクホーク。彼の発言に、皆が肩を落とした。

「なーんだ。わかった、ありがとネ……」

元気のない声でシアンが言うと、“ウィング”の3人にくるりと背中を向ける。その後ろをソプラが追おうとしたとき。

「待て」

ピジョットに声をかけられ、再び“ウィング”の3人に7人の視線が集まった。

「お前達に、アドバイスがあるんだ」

――ピジョット達は、ヴァイスとシアンが救助隊“キズナ”のメンバーだということを知っていた。すなわち、ヴァイス達7人がセナとホノオの味方だということも。

そんな彼らに、ピジョットは忠告した。

彼ら“ウィング”はそうではないのだが、この世界の救助隊にはセナ達を憎んでいる者もいるらしい、ということだった。その多くは、自然災害で家族や友達を亡くしたポケモン。災害の元凶がセナとホノオだというスイクンの話によって、恨みの矛先を彼ら2人に向けたものもいるらしいのだ。

セナとホノオの敵になりすまして情報収集をしたほうが、おそらく厄介なことに巻き込まれないだろう。こう言い残すと、“ウィング”の3人は去っていった。

ずいぶんと親切な彼らに唖然としていたヴァイス達だが、メルが消えそうな、でもきちんとみんなに届いた声で呟くのを聞くと、視線が彼女に集まる。

「アタイだって、災害でいとこを亡くしたさ。でも、セナとホノオのせいなんかじゃない」

しばらくの間、皆でその場に立ち尽くした。

――結局この日、覚悟を決めたヴァイス達は、自分達もセナとホノオを消すことにした、という設定の元、情報収集を続けた。

この広い“聖なる森”の中で、いくつかの救助隊に出会うことはできたのだが、先ほどの“ウィング”以来、セナ達を見つけたという救助隊に出会うことはできなかった。

結局、日が暮れてしまい、為す術がなくなった。また明日探そうと決めると、ヴァイス達は草の上に寝転がる。

「ねえ、シアン」

「どうしたノ？　ヴァイス」

そっと呼びかけるヴァイスに、答えるシアン。

「ここからネイティオのところに行くには、歩いてどのくらいかかるの？」

超能力者の彼に聞けば――と、ヴァイスは思ったのだ。

「うーん。今から歩いても、明日までに着くのは難しそうだヨ」

それじゃ遅すぎる。

ヴァイスはため息をついた。やはり、地道な聞き込みを続けるしかないのだろうか？

次第に眠くなる中で、ヴァイスは強く願う。

どうかセナとホノオが無事でありますように――。

やがてぐっすりと眠った彼らの姿を、木の葉の間から顔を出す月光が、控えめに照らしていた。

第１４話：現実と向き合って――その２（後書き）

実は、ブレロ&ブルルは元々仲間になる設定で出してたキャラなんです（笑）。

ここ数話、ほとんどが心理描写で話が進む、ダラダラ展開でしたね（汗）

次回からは、少しずつ状況が動いていきます。

――といっても、無駄なくらいに心理や風景の描写を入れたがるワタクシなので、文の量の割には話が進まないかも知れません（汗）

ここまで読んでくださった皆様、本当にありがとうございます。

そしてこれからも、よろしければお願い致します。

第１４話：現実と向き合って――その３（前書き）

ブレロ達にとって、ボクは“素直ないい子”だったみたい。でもね、ボクは素直だけど、“素直になれない子の気持ちが分からない、悪い子”だったと思うよ。セナは、“素直じゃないけどいい子”だし、いろんな子がいていいんだよね。

ブレロとブルルとは仲直りができたし、２人はボクらの旅に――セナとホノオを探す旅に協力してくれるって！　ソプラもアルルも味方してくれるし、すごく嬉しいよ！

（語り：ヴァイス）

第１４話：現実と向き合って――その３

ヴァイスとブレロ、ブルルが無事和解した日のことだ。この日、『早く“聖なる森”を抜けてポケモンがあまりいない地域に逃げる』と決めたセナとホノオ。２組目に遭遇した救助隊をまいたあとに地図を見て検討した結果、ひとまずはこの森を東に抜けてしばらく歩いたところにある“迷宮の洞窟”というところを目指すことにした。

“迷宮の洞窟”はその名の通り、迷宮のごとく通路が複雑な洞窟だ。初めのうちはほとんど分かれ道がないのだが、進むほどに分かれ道が増え、気がつくと同じ場所を回っていることさえあるという。そんな不便な構造の洞窟にわざわざ住むポケモンなどそういるものではないため、『ポケモンがあまりいない地域』という条件に見事に当てはまるのだ。

セナが地図を見ながらそのメリットをホノオに話すと、彼も賛成した。――ただ、さすがにいつまでも洞窟に居座るつもりはない、というのが彼らの結論であった。ヴァイスの父を探しながら逃げるという目的にそぐわない方法であるし、食料の調達が不可能な洞窟にいつまでも居座ることは、進んで飢え死ぬようなものだからだ。

こうして、まずは“聖なる森”を抜けるために東へと歩いたセナ達。途中で２組の救助隊と遭遇したが、“あくび”を利用して、うまく逃げることができた。

夕暮れ時。茜色の日差しに染まった大樹が、セナとホノオの前に姿を現した。

しばらく歩いて疲れがたまったセナ達は、この大樹にポケモンが住んでいなければ、ひとまずこの木の上で休むことにした。

木の上に登るために、太い幹に足をかける2人。大樹が長生きであることを物語るゴツゴツとした表面の木の皮は、彼らの木登りの助けになった。

木の上のほうに登れば登るほど、丈夫な木の枝が張り巡らされていた。

がっちりと密集する枝を折らぬようにかき分けて登る。すると、上方の枝分かれが少なく、ある程度くつろげるような空間にたどり着いた。その空間をぐるりと囲むように木の葉が生い茂り、外から自分達の姿が見えそうにない。足元には、先ほどまで自分達が懸命にかき分けて登った木の枝が、網のように張り巡らされている。おまけにその枝もふかふかの葉で覆われている。セナが寝転がってみると、なかなか寝心地もよかった。

ほんの一瞬、数日前まで自分達が眠っていた、“サメハダ岩”の草の布団の温もりを思い出した。

「なぁ。今夜はこの樹で休まないか？」

もうすぐ日が暮れる時間帯に、このような安全な場所を見つけた。安堵感から、セナはホノオに提案する。

「賛成。そろそろ疲れたし、何より、こんなに丈夫な床があれば、お前みたいな酷い寝相のアホでも落ちずに済むからな」

ホノオがニヤリと笑みを浮かべながら返す言葉に、セナは頬を膨らませる。ホノオから顔を背けると、嫌みたらしく言った。

「もう木から落ちなくて済みますね、お猿さん」

「なんだとー！？」

その言葉を聞くと、ホノオはセナの頭を思い切り叩く。ピシャリと高い音が鳴った。

「いってぇ！！　何するんだアホノオ！」

思わずセナがそう叫ぶ。ホノオも言い返そうと言葉を探したその一瞬の沈黙の間に――

「今の声、セナとホノオじゃないか！？」

――遠くでそう叫ぶ声がした。大人の男性のような声だったので、おそらく救助隊のポケモンの声だろう。

ドキリとしたセナとホノオは目を見開いて顔を見合わせ、沈黙を続けた。

少しずつ近づく、いくつかの足音。その軽快なリズムを聞く限り、さほど大柄ではないポケモンのようだ。

高い樹の上にいるにも関わらず、セナもホノオも顔をこわばらせ、ピクリとも動かない。呼吸ですら、浅く、ゆっくりと――。

やがて樹のすぐ近くの茂みが揺れる音がして、セナとホノオの緊張はピークに達する。互いの鼓動が聞こえるような、変な気持ちがした。

「気のせいだったか」

しばらくして、先ほどのポケモンの声が聞こえた。そして、いくつかの足音はゆっくりと遠ざかってゆく――。

「はぁ～。ビックリしたぁ」

ホッとため息をつくセナにからかうような眼差しを向け、ホノオは声を抑えて話す。

「はは。ビビりすぎだよお前は」

「お前が人に言えないだろう」

ムッとしたように言い返すセナだが、彼のお腹が変な音を立てると、たちまち黙ってしまった。

「ハハハ！　でっかい音だなぁ。さっき鳴らなくてよかったな、それ」

笑いながら話すホノオの言葉に顔を赤くしたが、すぐに彼自身も吹き出した。

「ふふっ。オイラはお前と違って、お腹も空気が読めるお利口さんなの」

「なんだよ、それ？」

おどけるセナの言葉にホノオが突っ込む。あまり大声をだしては敵に見つかるからと、2人で声を殺して笑いあった。

オイラ達、いつまでこうして笑いあえるのかな？　ふと、セナの頭をこのような考えがよぎる。この先辛いことがあったら、自分達

から笑顔は消えてしまうのだろうか？

「なぁ、ホノオ？」

「……っえ？」

こみ上げる笑いを抑えてから返事をしたので、なんだか不自然な間が空いた。

「なんつーかさ……。いつまでこうして笑っていられるのかな、って思ってさ」

「お前がボケるのをやめない限りずっと」

少ししんみりと言ってみたのに、ホノオはふざけた答えをよこした。もういいよと呟くと、セナはホノオから顔を背ける。

「冗談だっての」

そのホノオの言葉を聞いて振り向いてみると、少し寂しげな顔をしていた。

「どうなっちまうのかな、オレ達……。確かに、これから何が起こるかなんて分かんねえや」

「うん……」

セナはそう呟いてうつむく。終わりの見えぬ困難を思うと、気持ちが沈んだ。

「――なーんて、誰が言うかよ、バーカ♪」

突如おどけた口調に変わるホノオに、セナは視線を向けた。

「辛いことや大変なことがどれくらいあるかなんて、オレ達の知ったことじゃない。全て運じゃねえか。……でもさ、そんな中でいかにオレ達が明るくいられるかってのは、オレ達次第じゃん」

ホノオの考えはいつも単純だが、セナにはできない発想だ。今回も、そうだった。

これじゃ、どっちが“キズナ”のリーダーか分かんねえや。いつも自分を励ましてくれるホノオと、悩みっぱなしの自分。両者を比べてみると、ため息が漏れた。

「あんまりさ、完璧になろうなんて思うなよ？」

不意に聞こえたホノオの言葉。セナにはよく意味が分からない。

「人間の頃から、お前は完璧目指して空回りしてたんだよね。別に自分に足りないものが他人にあっても、気にすることないじゃん。人は人、自分は自分。違うから他人なんだし、一緒にいる価値がある」

「……こういうところは大人だよな、お前って」

ホノオの考えは正しいが、オイラなんかにゃ真似できない。そう心で呟くと、セナは投げやりに言葉を放つ。

「キレなきゃ大人なの、オレは。いろいろあったからね」

「羨ましいよ。お前が」

消えそうな声で呟くと、セナは木の葉に顔を埋めるように、うつぶせに寝転がる。

「オレだってお前が――というか、立派に九九を全て言える奴が、全員羨ましいさ。でも、オレにしかない良さがあるから、別にいいやって思える」

「……」

あぁ、オイラとコイツは根本的に考え方が違うんだな。こう考えると、この場から逃げ出したくなる。ホノオの声を、聞きたくない……。

耳をふさぎ、目をつむり、セナは顔を木の葉に押し付けた。

「ごめん」

突然ホノオが謝るので、セナはゆっくりと顔を上げて、ホノオの顔を見た。

「元気づけるつもりだったのに、逆にお前を追いつめちまったみたいだな。ハハハ……」

笑いながらそう言うホノオの声が、セナに追い討ちをかけた。

コイツはオイラに対して優越感を感じているから、他人事のように笑えるんだ。キリキリと胸が痛む。きつくつむった目から涙がにじむ。

さっきまではお腹がすいていたはずなのに、今はもう、とにかく早く眠ってしまいたかった。

「だからさー、こういうところがダメなの、オレは」

ああそうですか。

話を聞く気になれず、セナはため息だけをもらす。どうしようもなく無気力。そのはずなのに、悔しさを握りつぶすように、両手の拳を思い切り握っている。

震えるセナの拳を眺めながら、ホノオは独り言のように呟いた。

「うまくお前を慰めようって頑張ったのに、結果がこのザマだ。自分が気がつかないうちに誰かを傷つけてんだ。今度いつお前を傷つけちまうのかなって思うと、ちょっと怖い」

スッと、気持ちが軽くなった。コイツもコイツで悩みや弱さを持っているんだ。その種類が、オイラと違うだけで――。

「ごめん」

そう言って涙をふくと、セナは体を起こしてホノオと並んで座った。

「また謝った。お前は悪くないのにさ」

――というか、オレが謝らせてしまった。こう心で付け足すと、今度はホノオの気持ちが沈む。

「じゃ、言葉を変えるわ。ありがとう。お陰様で、なんだか元気が出ましたよ」

はじめは、お世辞だと思った。しかしホノオがセナの顔を見てみると、確かに先ほどまでとは全く違った、すっきりとした表情になっていた。

「……どういたしましてっ！　へへっ、さっすがオレ様」

一瞬でお調子者に早変わり。これが演技なのか本当なのかは、セナも見抜けなかった。

でも、やはりホノオ“らしい”ホノオを見ていると、安心できる。自然と頬が緩んだ。

「まぁさ」

ホノオが話し始める。2人は微笑み、顔を合わせる。少し前に笑いあっていた2人だが、互いの笑顔を久々に見たような気がした。

「お前とオレ。せっかく2人いるんだから、2人揃ってようやく1人前になるくらいで良いんじゃないの？」

「うわ、それじゃ、お前の脳みその大部分をオイラが補わなきゃいけないじゃん」

こんな冗談も言うようになった。そんなセナを見ると、やはり安心するホノオだった。

「ああそうさ。その代わり、お前から笑顔が消えたらオレが笑わせる。どんな変な顔見せてやってもいいし、どんな音痴な歌でも歌ってやるさ」

その言葉を聞いただけで、セナはクスクスと笑い声をあげた。

「すげえな、お前の生き様って。……つーかそもそも、お前って元々音痴じゃないんだ？」

「何だと！？　失礼な！　じゃあ歌ってやるよ」

座っていたホノオは立ち上がり、深く息を吸い込んだ。そして口を開く。

「さーいーた～♪　さーいーた～♪　チューリップーのーはーなーが～♪」

歌い出しを聴いたとたんにセナは吹き出した。「童謡じゃねえか！」と突っ込もうとしたが、伸びのある堂々としたホノオの声に思わず聴き入ってしまった。けっこう、うまい。なんだか童謡を歌わせるのはもったいないような――。

セナの頬が緩む。確かにホノオの歌声は、聴いていて幸せになれるような気がする。

そんなセナの感動をぶち壊したのは、当の歌い手、ホノオだった。

「どーのーはーなー見テェ～も～、キ～レいーだァなァアア♪」

最後のほうで、音程やリズムがガタガタになる。崩れはじめは肩を震わせて笑いをこらえていたセナだが、曲が終わる頃にはケラケラと笑い転げていた。

「いやぁ～、すんばらしい歌声じゃないの～♪　さすがオレ！」

大笑いするセナを見て、満足そうにそう言うホノオ。もちろん曲

の最後の音程の崩れは、彼が意図的にやったものだ。

「アハハハ！　おまっ……意外と上手いと思ったら……ふふっ。ハハハ！」

セナの目が潤んできた。息を吸う間もなく笑い続けているせいで、表情は少しばかり苦しそうだ。

「何？　もっと聴きたいって？」

セナを見ながら、彼をからかうような口調でホノオが問う。

「アハッ。もういい！　もぉいいっ！　……はぁ、はぁ」

少々必死に叫んだ後、ようやく笑いがおさまってきた。しっかりと息を吸い、乱れた呼吸を整える。

「さぁて、お次はお前が歌う番」

ホノオのそのムチャクチャな要求に答えたのは、セナのお腹がなる大きな音だった。

「良い声してますね～」

セナのお腹をまじまじと見つめながら、ホノオがそう声を漏らす。

「だろ？　オイラのお腹は歌も歌えるんだ！」

おどけて胸を張り、セナが威張る。すると彼のセリフに同意するかのように、再びセナのお腹がなる。

セナとホノオは顔を見合わせる。すると、必死に笑いをこらえる互いの顔がおかしく思え、ついに声を上げて笑い出した。

すっかり敵の存在を忘れてしまっていた2人だが、幸い彼らの笑い声は、互いの耳にしか届かなかった。

「ハハハ！　飯食おうぜ飯！　腹減って死にそうだ～」

その言葉の後で、セナは青いバッグから2つのリンゴを取り出した。

こうして夕ご飯を食べながら、セナは思う。オイラ達なら、きっと大丈夫。根拠のない自信だけど、そういうのも大切なんじゃないかな？

＞ｉ２４７５８―４３４＜

そんなセナの考えが粉々に砕け散る瞬間が待ち受けていることなど、彼らには知る由がなかった。食べている間もふざけあい、互いに冗談を言いあった。

そしてこの日は、後から考えると不思議なほどに前向きな気持ちで眠りについたのだった。

第１５話：波乱と衝突と――その１（前書き）

とりあえず、今後は“迷宮の洞窟”ってところに向かってみようと決めたオイラ達は、木の上で夕ご飯のリンゴを食べた。
いつまでこんな大変な毎日を過ごすのか――不安になると、ホノオはおどけて励ましてくれた。
そんな明るさを妬ましく思ったりもしたけど、やっぱりありがたい。明日も何とか頑張れそうだな。
（語り：セナ）

第１５話：波乱と衝突と――その１

セナ達が逃走を開始した初日は様々な出来事が慌ただしく起こり、そしてその日もとうとう終わりを迎えた。広い“聖なる森”のどこかで、セナ、ホノオ、ヴァイス、シアン――救助隊“キズナ”の仲間達が、静かに眠っていた。

やがて朝陽が森を照らし、この惑星ガイアのポケモン達が行動を開始した。セナとホノオを消すために彼らを探す救助隊のポケモン達。そんな世間の動きなどお構いなしに森で遊ぶ、幼い子供のポケモン達。

そして、ヴァイス達もまた――。

この日の朝、一番に目を覚ましたのはヴァイスだった。セナとホノオを早く探しに行きたい一心で、旅に同行する仲間達をすぐに起こした。メルやシアン、アルルはすぐに起きたのだが、ブレロとブルルは寝ぼけている時間が長く、なかなか手がかかった。ソプラはというと――今現在、行動を開始してから一時間は経過した頃なのだが、いまだに機嫌が悪そうに目を半開きにして、７人の集団の最後尾をだらだらと歩いている。

セナ達に関する情報が全く得られない中で、一同はこのような作戦をとった。とりあえずは、超能力者ネイティオがいる“精霊の崖”を目指す。彼ならセナ達の居場所に関する何かしらの情報を持っているであろうと考えたからだ。そして、その崖までの道のりで情報収集をして、有力な情報を手にしたらそちらにすぐに向かうようにする。

皆で考えた末に決めた作戦だが、一つ、ヴァイスの不安の種になることがあった。

現在地から目的地の“精霊の崖”まではとても遠く、今からずっと走って向かっても今日中に着くことは難しいだろうとシアンは言う。普段は彼の発言など当てにならないが、以前シアンはホノオと共に、“精霊の崖”から“はるかぜ広場”を目指して旅をしていたことがある。今回ばかりは、彼の言葉に説得力があった。

どうにかして、早く“精霊の崖”にたどり着けないだろうか？先頭を歩きながら、ずっとこんなことを考えていた。

「そういえばさぁ」

ふと、話し始めたのはアルルだ。皆の視線が彼女に集まる。

「ボク達が昨日広場から出てくるときにガルーラおばさんにもらったこのバッグなんだけど――」

自分が肩から下げている黄色いバッグを皆に見せるようにして、アルルは話を続ける。

「この中には、いろんなアイテムが入ってるんだよね、ソプラ♪」

不機嫌なソプラに気を遣い、アルルはそう話しかける。しかし「ああ」としか返事をしないソプラに、皆が苦笑いをした。

「それよりアルル。そんなバッグ持ってて重くないかい？」

「重くないですよ」

メルが膨れたバッグを見て気遣うが、アルルはニコリと否定する。

「敬語は禁止って昨日言ったんだけどねぇ」

メルのこの言葉に、アルルはハッとした。そういえば、今自分はメルに敬語を使ってしまった。

少ししゅんとするアルルが可愛く思え、「気にしていないよ」と言うようにほほえんで見せた。そしてメルは、再び話題をバッグに戻す。

「いいや。そんな重いもんを女の子が持つもんじゃないね。こういう力仕事は――」

メルが視線で男性陣に合図をおくる。すでに赤いバッグを持っていることを忘れてヴァイスが「持とうか」と言おうとしたが、先を越された。

「アルル、かして。僕が持つ」

「おれっちが持つよ」

ブレロとブルルが、仲良く同時に言い出したのだ。一瞬キョトンとしたヴァイスだが、すぐに笑顔になった。

「え……？　い、いいのに、２人とも……」

遠慮して、アルルは戸惑う。そんな彼女を、ブレロとブルルが説得する。

「いや、実は僕達、広場でアイテムの“不思議玉”を色々買っちゃってさ」

「バッグを持つついでに、この中に入れちゃいたいと思ってね」

様々な色が淡くついた、いくつかの玉を見せながら、ブレロとブルルが説明する。

するとメルが話をまとめた。

「そんじゃ、一日おきに持ちな。今日はブレロが、明日はブルルが。あさってはまたブレロ――。いいね？」

メルのその言葉にブレロとブルルが笑顔でうなづくと、アルルは申しわけなさそうにブレロにバッグを渡した。

それからまたしばらく森を歩く。ヴァイスが例のことを考えていると、ふと、ブレロやアルル達が持ってきたアイテムの存在が気になり始めた。なにか役に立つものはないだろうか？

皆に休憩をとろうと提案し、ブレロに声をかけてバッグの中身を見せてもらった。

ありとあらゆる状態異常や力の消耗に対処できそうな、豊富な回復アイテム。そして、ブレロ達が広場で買ってきた――元々はヴァイス達に対する嫌がらせのために買った――様々な種類の“不思議玉”。それらをじっくりと見てみると、ふと、ヴァイスは閃いて立ち上がった。

「そうだ！」

そのヴァイスの言葉で、皆が視線を彼に向ける。

「この“集まれ玉”を使えば、セナやホノオに会えるかも！」

“集まれ玉”とは“不思議玉”の一種で、救助隊のチームのポケモンが同じ土地の中ではぐれてしまった時に使うと、全員集合できるというものだ。つまり、セナとホノオがまだこの“聖なる森”にいれば、“集まれ玉”の使用によりこの場にワープさせ、連れ戻すことができるのだ。

「すごーい！　さっすがうーたんだネ♪」

シアンが歓声を上げてヴァイスに抱きつく。

「もーっ！　うーたんって言わないでよぉ！」

その2人のやりとりを見て、皆が微笑む。セナとホノオに会えるかもしれないという希望が、彼らの気持ちを明るくさせたのだ。

薄い桃色の、ソフトボールほどの大きさの玉を掴むと、ヴァイスはシアンを体から離す。そして大きく振りかぶり、“集まれ玉”を思い切り地面にぶつけた。

キラキラと輝く桃色の光の粉が一同を包み込む。“集まれ玉”の効果が発揮されているようだった。祈るように両手を合わせ、ヴァイスは目を閉じた――。

やがて、光がやむ。ヴァイスが静かに目を開けると、がっかりした様子のみんなの顔が目に入った。その表情の意味が分かると、ヴァイスも思わずため息を。

「なぁんだ、失敗かよ……」

ソプラがうなだれて座り込むと、それにつられて他の皆もしょんぼりと座り込んだ――メルを除いて。

「落ち込むことないさ」

発言者のメルを見るために、皆が顔をあげる。

「確かに、セナ達を呼び戻すのには失敗したさ。でも、それで分かったことがあるだろう？」

「セナ達がもうこの森にいないってこと？」

ヴァイスの言葉にメルは頷き、さらに続けた。

「それだけじゃないさ。バッグから地図を出しな、ヴァイス」

ヴァイスが赤いバッグからガイアの地図を取り出して、丁寧に床に広げる。すぐに、地図は7人のポケモン達に囲まれた。

「アタイの家はねぇ、この“聖なる森”の南東に位置しているんだ。ちょうど、ここら辺さ」

地図の中でもかなり広い面積を占める緑。その右下のほうを、メルは指差す。

「セナとホノオが出て行ったのはおとといの夜中だから、移動時間は、昨日1日と今日が始まってからの数時間だけさ。つまり――」

「そうか！　セナ達が“聖なる森”を抜けられたとしたら、南か東くらいだよね。つまり、北や西に進んだ可能性は低いのか！」

ヴァイスが思わず声をあげると、メルは「その通り」と頷く。さらに補足説明をしようと口を開きかけると、アルルがポツリと話す。

「でも、南には“はるかぜ広場”があるから、多くの救助隊がいて危険なんだよね」

「そうそう！　アルル、アンタやるね！」

自分が言おうとしたことを先に言った。メルはアルルの推理力に感心して歓声をあげた。

「すごいやアルル！　じゃあ、セナ達は東に向かったってことなんだね？」

「う……うん、多分。自信はないけど……」

ヴァイスに誉められると、すぐに顔が赤くなる。小さな声で、アルルは答えた。

そんな彼女の様子を見ると、元々事情を知っているシアンとソプラだけでなく、メルやブレロやブルルも気がついてしまった――アルルの控えめな恋心に。

「よーし！　じゃあみんな、これから東に向かおう！」

唯一ヴァイスはそれに気がつかず、ひとりで話を進め、皆に気合いをかける。

雰囲気をぶち壊す彼に、非難の眼差しが集中する。

「ど、どうしたのみんな？　ボクなんかした？」

一瞬の沈黙。その後に重なるため息。

「……みんな、頑張ってセナさんとホノオさんを探そう？　ね？」

異様な雰囲気に耐えられなくなり、その場を無理に盛り上げようと必死のアルル。今度はそんな彼女に同情の眼差しが集中したが、アルルの頑張りに免じて、ひとまずやる気を出した一同だった。

「え？　何々、ボク何か悪いことしたの？」

ヴァイスだけが状況を理解できず、シアンやブレロを捕まえては問い詰める。

「知らなかったよ。お前がこうも鈍感だったなんて……」

ブレロの言葉に大きく首をひねったヴァイスなのだった。

この時の会話の――セナ達の居場所についての会話の一部が、まさか他の救助隊に聞かれていたなんて。しかも、詳細を聞き出すために、彼らに迫っている救助隊がいるなんて――。

彼らには、知る由がなかった。

ちょうど、ヴァイス達が東へと向かうことを決めた時刻のことだった。

ガイアの北東部。“はるかぜ広場”から遠く遠く離れたところに

“グリーンビレッジ”という村がある。いつもはのどかで美しいこの村に、突如悲鳴が響きわたったのだ。

数分前。どこからふらりとこの村にやってきた2人の小さなポケモンに、“グリーンビレッジ”の若き村長、メガニウム――四つん這いで、体が黄緑色の種族。長い首の周りにはピンク色の美しい花が咲いている――が優しく声をかけた。あどけない顔をしたその2人のポケモンに、「君達、どこから来たの?」と問いかけた。

「分からない」と声を揃えて返した、そのポケモン達。メガニウムは質問を変えた。

「じゃあ、この村に何をしに来たのかな?」

その言葉を聞いた途端、そのポケモン達はニヤリと笑った。あどけない、子供らしい可愛らしさが、一瞬で消え去った。

「この村のポケモンを、捕まえに来たんだ」

言い終わるとすぐに、2人のポケモンは強力な攻撃をメガニウムに放った。そして彼の叫び声が、平和な村に響きわたったのだ――。

村に現れた2人のポケモンは、村をめちゃくちゃに破壊して、村のポケモンをボロボロに傷つけた。

恐怖で家に隠れたポケモンもいたが、全ての家が木っ端みじんに破壊され、彼らも攻撃の対象になってしまった。

勇敢にも立ち向かうポケモンもいたが、小さな体の割に強すぎるその2人のポケモンに、あっという間にやられてしまった。

村にいたポケモン達が皆気絶してしまうと、2人のポケモンは、

一方が肩から下げているバッグから、野球ボールほどの小さなボールを取り出した。上半分は赤色で透き通っており、下半分は白い色をしている。

そのボールをはじめのメガニウムに投げつけると、メガニウムはボールから出てきた赤い光線に包まれる。そして、驚くほど小さく縮小され、すっぽりとボールの中に収まってしまった。

その作業を繰り返し、倒れたポケモンをボールに閉じ込めてはバッグに詰め込む。

ちょうど、持ってきたボールと村のポケモン達の数が合い、村のポケモン全てを捕獲し終えた――2人のポケモンは、そう思った。

しかし、村を後にしようとする彼らの耳に、突然子供のポケモンの声が届いた。

「な……何よ、これ……」

振り返ってみると、めちゃくちゃになった村を呆然と見つめる3人のポケモンがいた。

発言者である、オレンジ色の体のひよこポケモン、アチャモ。体が黄緑色で四つん這い、頭には大きな葉っぱがついているポケモン、チコリータ。そして、四つん這いで水色の体で、額に大きなひれがついているポケモン、ミズゴロウの3人だ。

この“グリーンビレッジ”に住んでいる3人は、事件が起こった時は村の外で遊んでいた。しかし騒ぎを聞きつけて、急いでここまで戻ってきたのだった。

ここで3人は、怪しげな雰囲気を放った2人のポケモンに気がつく。急いで駆け寄ると、アチャモは2人を怒鳴りつける。

「ちょっと、アンタ達！　ウチらの村に何したのよ！？」

「待ってよスザク、決めつけちゃだめ！」

ヒートアップするスザクと言う名のアチャモを、チコリータが必死に抑える。

「なぁ。オラ達の村がどうしてこうなったか、教えて欲しいだよ」

田舎なまりの口調のミズゴロウが、２人のポケモンに尋ねる。

「この村のポケモンを捕獲するのに、家が邪魔だったんだ。だから壊したまでだ」

冷たい笑みを浮かべて答えるのは、肩からバッグを下げている方のポケモンだ。その言葉に、青ざめるアチャモ達。

「“ポケモンの捕獲”って――。じゃあ、あたし達のお父さんやお母さんは！？　村のポケモンは！？」

チコリータに問い詰められると、バッグをあさる。そして、はじめに捕まえたメガニウムが入ったボールを、チコリータ達３人に見せつけた。

「お父さん……！」

赤い、透き通ったボールの壁越しに見えるのは、ボロボロに傷ついたメガニウムだった。チコリータの呼びかけにも反応しない。

「じゃあ、オラ達の父ちゃんも母ちゃんも……」

「あたし達の友達も、みんな……」

力なく呟くミズゴロウとアチャモを蔑んだ眼差しで見つめながら、

「ああそうだ」と言い放つのは、バッグを下げていない方のポケモンだ。

「ふざけないで！　みんなを取り返すわよ、ポプリ、ウォータ！！」

憤慨したアチャモが、ポプリと言う名のチコリータと、ウォータと言う名のミズゴロウに呼びかける。すると3人とも、思い切り攻撃を放とうと力をためるが――。

「うるさいガキだ」

バッグを持った方のポケモンがため息混じりに呟くと、2人のポケモンは軽く息を吸う。

攻撃が衝突してすぐに、2人のポケモンの攻撃がアチャモ達の攻撃をかき消し、彼らに直撃した。

悲鳴をあげた後に、アチャモ達3人は倒れ込む。

「ふふ。ボールが切れてて良かったな」

この場から去ろうとする2人のポケモンのその声を聞くと、力を振り絞って立ち上がった。

「村のみんなを……返してよ……」

弱々しいチコリータの声を聞くと、鼻で笑う2人。もちろん、捕らえたポケモンを解放する気などなさそうだ。

「ふん。取り返す力もない自分達を恨むんだな」

冷たい言葉を浴びせると、2人はどこかへ駆け出した。

「待ちなさい――キャッ！」

すぐにアチャモ達も後を追おうとしたが、傷がうずき、数歩駆けたら転んでしまった。

3人は歯を食いしばりながら、遠ざかる2人の誘拐犯を見据えた。その特徴を記憶に焼き付けると、その記憶と共に、村のポケモン達を取り返すための旅に出かけたのだった。

第１５話：波乱と衝突と――その１（後書き）

アチャモ、チコリータ、ミズゴロウの名前はチラリと出てきましたが、まだ覚えて頂く必要はございませんので種族名で語らせて頂いた今回の話です。

次回はセナ達も出ます。

第１５話：波乱と衝突と――その２（前書き）

“集まれ玉”ってアイテムはとても便利。同じ地域にいる、同じ救助隊チームのポケモン達を集められるんだから。でも、ボクがそれに気づいた時には、セナとホノオは“聖なる森”にはいなかった。

でも、お姉ちゃんとアルルの推理のおかげで、セナ達がここから東に向かったということが分かった。よーし、急がなくっちゃ。

（語り：ヴァイス）

第１５話：波乱と衝突と――その２

ヴァイス達が東へと向かい始めたその時。

「おい」

背後から聞こえる低い声に呼び止められ、一同は足を止めた。
振り返ってみると、そこにいたのは、エレキブル、サンダース、レントラーという種族の、３人のポケモンだった。

「なんだい、アンタ達」

もしかして、救助隊？　そう思って警戒しながら、メルが問う。

「俺達はゴールドランクの救助隊“ボルト”。お前達に聞きたいことがある」

威圧的な雰囲気を持つ、エレキブルの声。偉そうなその態度から、救助隊でありながらどこか悪そうな印象だった。

「お前達、セナとホノオの居場所を知っているんだろう？　俺達に教えろ」

サンダースのその言葉で、急に鼓動が速くなる。

「し、知らないよ、そんなの。ボク達だって、探しているんだから」

ヴァイスがぎこちなく答える。すると、レントラーが発言した。

「だったら方角だけでもいい。教えろ。知っているんだろう？」

ここでヴァイス達は悟る。さっきの会話を、聞かれていたと。

しかし、不自然な点も浮かぶ。会話を聞いていたのなら、自分達に聞かずとも東を目指すのではないか？

メルがその痛い矛盾点を問い詰めるが、返ってきたのは不敵な笑み。

「耳の良い俺とレントラーは、この森の中でチラリとお前達の話を聞いた。そこで分かったのは、それがセナとホノオの居場所についての話だということと、東西南北、方角が会話の中で多用されていたことだけだ」

「方角の名前が出過ぎていて、結局場所は特定できなかった。しかし、声がした方に向かってみると、お前達を見つけられたんだ」

サンダース、レントラーが順に話す。

確かに、話が聞き取りづらい時は、断片的な単語のみが頭に残ることはある。彼らの言葉には、偽りはないようだ。

「居場所を聞きたかったんなら、“救助隊”だなんて名乗らない方が良かったんじゃないの？」

ブルルは“ボルト”の3人にそう指摘する。確かに彼らにとっては、救助隊は真逆の目的を持った集団である。

しかし今のガイアでは、セナ達を消す救助隊が多数派なのだ。ブルルの意見は、少し的を外していた。

「何！？　お前達はセナとホノオを殺さないのか？」

驚くエレキブル達は、どうやら救助隊“キズナ”の存在を知らなかったようだ。しかし、その乱暴な言葉にシアンはムッとする。

「シアンとヴァイスは、セナとホノオと同じ、救助隊“キズナ”の仲間なんだヨ！　お友達を消そうとするはずないじゃない！！」

その純粋な彼の言葉を聞くと、“ボルト”の3人は吹き出した。

「ガハハハ！！　馬鹿馬鹿しい。セナとホノオなんかの味方をして、なんのメリットがあるんだ？」

耳障りなエレキブルの笑い声に腹を立て、メルが怒鳴る。

「黙りな！　アンタ達こそ、セナやホノオを殺して何のメリットがあるんだい！？　『ガイアの破滅を食い止めるため』なんていうバカなこと信じてるんじゃないだろうね！？」

メルの言葉に強く頷き、ヴァイス達も“ボルト”の3人を責めるような眼差しを向けた。

「ふっ。そんな非現実的な言葉に騙されるほど、俺達は間抜けじゃねえ。俺達が欲しいのは金だよ、金。」

「か……ね……？」

サンダースの言葉で、思考が止まる。ヴァイスはゆっくりと、“金”という言葉を復唱した。　この3人は、“金”のためにセナとホノオを殺すの……？

「セナとホノオを殺した奴は、スイクンとホウオウから報酬がもら

えるんだ。ついでに、ガイアを破壊から守った英雄の称号も得られるってワケだ。素晴らしいメリットではないか！　ガハハハ！！」

順番がおかしい。ガイアを破壊から守るのが“ついで”で、目的は報酬……？

徐々に言葉の意味を理解し、ヴァイスは右手をきつく握る。メルもシアンも、ソプラもアルルも、ブレロとブルルも、皆、抑えきれない怒りを感じた。

「だからさ、俺達にセナ達の場所を教えろってんだ。方角だけで許してやるから――」

レントラーのセリフを遮るのは、彼の頬を強打した燃え盛る拳――ヴァイスの“炎のパンチ”だった。

「あなた達なんかに、セナとホノオは殺させない！！　考えを変えないなら、ここで倒すからね！」

声を荒げるヴァイス。そんな彼とその仲間達を、鋭くにらみつけるレントラー。

「ふん。ゴールドランクの救助隊にかなうと思っているのか？　馬鹿馬鹿しい」

冷たくこう呟くと、その後にエレキブルが続いた。

「覚悟しろ。必ずお前達から情報をはかせてやるからな！」

その言葉が、戦闘を開始する合図となった。

一方のセナとホノオは、“聖なる森”を東に抜けてしばらく先にある“渓流の谷”という土地を歩いていた。――“迷宮の洞窟”に行くまでに通らなくてはならない土地である。

地名に“谷”とついているからには、当然高低差の激しい地域であり、現在彼らは上り坂を歩いている。地面はほとんどゴツゴツした岩に覆われていて、歩き心地が悪い。時折見える土壌からは草花がたくましく生えている。そして印象的なのは、地面から突き出した巨大な岩の数々だ。時には森の木のように細く、時には壁のようにどっしりと構えている。身を隠すのに役立ちそうだと、セナは考えた。

また、地図を見ると、“渓流の谷”の最高高度の場所には大きな谷と、その下を流れる急な流れの川があることがわかる。昔誰かが造った木製の橋のおかげで、向こう岸に渡れるようになっているらしい。

このように、なかなか居心地が悪い場所であるため、“聖なる森”よりもだいぶ住んでいるポケモンが少ない。いたとしても、この土地に住み着いている、世間知らずなポケモンだろう。

こう考えたセナとホノオは、一応は注意を払い、しかしいくらか油断しがちに歩いていた。

後々考えると、軽率な行動だった。自分達がそこそこの苦労をして登るこの上り坂を、いとも簡単に駆け抜けることができる種族のポケモンだっているのに――。

「う～。足がいてぇ……」

岩肌を踏みしめて歩く度に、凹凸が足の裏に食い込む。歩き疲れたホノオは、情けない声を上げた。

「オイラも。ちょっと休もうぜ？」

セナはそう言うと、なるべく平らな岩肌の上を選び、そこに座り込む。

「一応隠れた方がいいかな？」

ホノオが問う。

「いや、別に良いんじゃない？　そんなに長く休む訳じゃないし」

セナのこの返答に、ホノオは口をとがらせた。

「え～、いっぱい休もうよ～」

「我慢しろよな。隠れる場所を探す方が面倒くさいもん」

「セナのぐうたら～。ケチ～」

「お前が言うなよ……」

このような会話を交わし、すっかり気を抜いていた2人。まさかこの短時間の休憩で敵に見つかるとは、セナは微塵も考えていなかった。

「……ん？」

少しの沈黙の間、自分達が登ってきた方角から岩が少し崩れるような音がした。セナが不審に思って立ち上がると、ホノオはけげんな顔をした。

「なに？　どしたの？」

「誰か……こっちに向かってきているみたいだ！」

「えっ！？」

否定したくなるようなセナの言葉だが、次第に軽快な足音が聞こえ、それは大きくなってゆく。

「か、隠れる場所は！？」

「ない。だから大人しくしてろ。オイラ達に気づかずにどこかに行くかもしれないから」

慌てるホノオの言葉に、冷静に言葉を返すセナ。しかしその言動に見合わず、心は激しく揺れていた。

地面にうずくまり、なるべく遠くから見つからないようにした。そんなセナとホノオに、無情にも足音は近づく。

「ヤバいぜセナ。逃げた方がいいよ」

「今逃げ出したら足音でバレる」

自らの言葉を打ち消されて不満なホノオは、口をとがらせてセナ

を睨む。セナは心の中で、自分とホノオに「落ち着け」と話しかけた。

今までは駆け足で山を登ってきたような足音だったが、とうとうそれがゆっくりになり、確実にセナとホノオに向かってきていることが分かる。

見つかった。その思いから、絶望感を感じるホノオ。対するセナは、自分達が逃げるためのアイテムを探そうと、体を動かさずにバッグに手を突っ込んだ。

あからさまに怪しげな行動を見せるのは良くない。バッグの中を確認したかったのだが、体を余計に動かすと、自分が何か企んでいることが敵にばれてしまう。手探りでアイテムを選ぶ。

そして、小さな球体――“不思議玉”を手にする。これがどのような効果の“不思議玉”なのかは触れただけでは分からないが、イチかバチか、これを使ってみることにした――今の状況に適した効果であることを期待して。

足音がすぐ近くで止まる。相手は自分達がセナとホノオであるのかどうかを確認しているのかもしれない。

緊張感がピークに達する中、セナは一つの“不思議玉”を握りしめて思い切り立ち上がる。そして。

「食らえ!!」

何でも良い。敵から逃げられるような効果のものなら、何でも――。そのような思いを込めて、自分達のすぐそばに来たポケモンに“不思議玉”を投げつけた。

そのセナの行動に驚愕したのはホノオだ。さっき、大人しくしてろと言ったのはお前じゃねえか。

自らの手から離れた“不思議玉”の色を確認すると、しまった、と青ざめる。燃えるような赤色の、“日照り玉”だった。

“日照り玉”とは、たとえ現在の天気が雨だろうと雪だろうと、これを使ってからしばらくの間は真夏のような日差しの空模様に変えてしまうアイテムだ。このアイテムで日差しが強くなっている間は、炎タイプの技が強くなり、逆に水は弱くなる。

元はといえば、雨が嫌いなヴァイスのために準備したアイテムで——つまり、逃げることには全く役に立たないものなのだ。

セナが別のアイテムを探すためにバッグに再び手を突っ込む。それと同時に、“日照り玉”から空へと赤く光る粉が向かい、すぐに太陽の熱と光が強くなった。

「あーもう！！　アイテムなんかいいよもう！　逃げるぞ！」

意味のないセナの行動にイラつき、ホノオはセナの腕を乱暴に引っ張ってこの場から逃げようとした。

しかし、それを敵が見逃がしてくれるはずがなく——。

「逃がすか！　“炎の渦”！」

背中を向けたセナとホノオに、“日照り玉”による晴天の影響で強力になった“炎の渦”が迫る。

「うっ……！」

炎が体にきつく巻きつき、2人から苦しげな声が漏れた。

身動きがとれなくなったセナとホノオの前に、攻撃してきたポケモンとその仲間が現れる。

1人は、クリーム色で額から立派な角が生えた馬の容姿をしている。そのたてがみは、メラメラと燃える炎でできている。――炎タイプのポケモン、ギャロップだ。

ギャロップの右隣にいるのは、茶色い体から3つの長い首、そして2本の細い足。各首の先端には、長いくちばしを持った頭がついている。――鳥ポケモンの、ドードリオだ。

両者のタイプから判断すると、どうやら現在セナとホノオを締め付けている“炎の渦”は、ギャロップが使ったようだ。

「種族がゼニガメとヒコザル。そして我々から逃げようとした。……お前達はセナとホノオで間違いないな？」

ギャロップにそう問い詰められた。ひょっとすると、かなり慎重な性格なのか？　この時のセナは、そう思った。

もしかすると、別人のふりをしてやり過ごせたりして――。セナがチラリとそう考えたが、ホノオがギャロップの言葉に気を悪くして、答えてしまった。

「だったら何だってんだよ！　オレ達はお前達なんかに殺されねえからな！」

正々堂々、戦って逃げなければならなくなったらしい。セナは、攻撃――“水の波動”を放つために、軽く息を吸う。強く締め付けられているため、あまり深くは吸い込めなかった。ホノオは、締め付けられていなければ、今にもギャロップとドードリオに殴りかかりそうな顔をしていた。

そんな彼らを見ると、ギャロップとドードリオは蔑んだような眼

差しを向ける。恨みがこもった鋭いそれを見ると、思わずセナは怯んでしまった。

「よく言うぜ……。俺達から大切な者を奪った殺人鬼のくせによ！！」

ドードリオのその言葉が、セナの胸を鋭く刺す。オイラ達が、何かしたと言うのか？

セナがドードリオの言葉の意味を考えていたが、その考えは間もなく遮断される。

「ふざけんな！！　オレ達が何したって言うんだよ！　てめーらの顔なんか初めて見たぜ！」

ホノオがそう叫んだ直後、“炎の渦”の火力が格段に増し、セナ達の体をギリギリと強く締め付けた。

「うあっ……！！」

思わず悲鳴が漏れ、歯を食いしばる。炎タイプの技に強いセナとホノオだが、まとわりつく炎のせいで、体がヒリヒリと痛み出した。

熱い……。痛い……。苦しい……。それを表情で悲痛に語る2人を見ると、ギャロップとドードリオは満足そうな笑みを浮かべた。

「フフフ……。苦しんで死ねばいい。お前らが、俺達の弟にそうしたようにな！」

ギャロップの残酷な笑みが、言葉が、心にも痛い。セナは何となくだが、彼らの事情を把握できた。

セナとホノオを突き刺す矢のように、太陽の光が眩しく照りつけていた。

第１５話：波乱と衝突と――その２（後書き）

セナ&ホノオが再びピンチですが、ヴァイス達もなかなか大変なことになりました。
――この戦闘シーンが難しいんです（汗）

あ、そう言えば今回の話、ちょうど五十話目ですね。
完結したら、この倍以上になると思いますｗ

第１５話：波乱と衝突と――その３（前書き）

渓流の谷にて、オレ達はギャロップとドードリオに襲われた。
奴らは勝手にオレ達を恨んでくるし、セナはやたらと判断をミスするし。なんか、ムシャクシャするな。
（語り：ホノオ）

第15話：波乱と衝突と――その3

「……なぁ」

声を振り絞り、セナはギャロップとドードリオに問いかけた。

「あんた達の、弟って……ハァ、ハァ……も、もしかして……」

“炎の渦”に体力を奪われ、喘ぎながら話す。セナがそこまで話を進めると、ギャロップが憎悪の念を瞳に宿らせ、返答した。

「あぁ。俺とドードリオの弟はな、家の近くの川が氾濫した時の洪水に巻き込まれて死んだんだ」

「くっ……。それが……オレ達と、どう関係があるって言うんだ……」

表情を歪めてギャロップを睨みつけるホノオ。彼の言葉に答えたのはドードリオだ。

「誰が洪水を起こしたと思っているんだ、人殺し！　お前達のせいでガイアに災害が起きてな！　俺達の弟以外にも多くのポケモンが命を落としているんだ！　洪水の犠牲者だって、弟達、2人だけじゃない！　もっと多くのポケモンが死んでるんだぞ！！」

ドードリオの3つの頭が口々に怒鳴る。しまいには皆が涙ぐみ、それを見ると、胸が痛むセナだった。

本当にみんな、オイラ達が災害の原因だと思っているんだな……。でも、思えばそうじゃない証拠なんて、どこにもないしな……。次

第に弱気になってゆく。

「ふざけるな……」

ふと、セナの隣から声が聞こえる。ホノオは怒りで震え、低い声で話し始めた。

「オレ達が災害を起こしてる元凶だとか……“破壊の魔王”だとかいう証拠なんて……どこにもないだろ？　それなのに……お前達はオレ達のせいにして――オレ達に罪をなすりつけて……。それで、オレ達が死ねば満足か！？　もしてめーらの行動が間違ってたら……どう責任とるんだ人殺し！！」

満足に息が吸えなかったが、そのことすら忘れてホノオは力の限り怒鳴る。

言い終わった直後に激しく咳き込み、そしてすぐに、ギャロップが使っていた“炎の渦”の効果が切れた。炎が静かに消滅すると、セナとホノオは地面に倒れ込んだ。

「ハァ、ハァ、ハァ……」

しばし、2人の荒い息づかいのみがその場に響く。渦からは解放されたものの、照りつける日差しのせいで息苦しさが続く。

少し考え込んでいたギャロップだが、静かに話し出す。

「別に俺達は、独断でお前達を災害の原因だと決めつけているわけではない。スイクンからの依頼で――」

「スイクンだからか？　……スイクンが言ったことなら何でも本当

で、証拠がなくても認められるのか？」

ギャロップの言葉を遮り、威圧的な声でそう言うホノオ。少し体力が回復し、セナもホノオもふらふらと立ち上がった。

「黙れ！　お前らみたいなクソガキの言葉なんかより、スイクンの言葉の方が信憑性が高いのは当たり前だろう！！」

ドードリオの、３つのうちの１つの頭が早口で怒鳴りつけると、もう２つの頭が鋭いくちばしでセナとホノオを思い切り突いた。

「うわあーっ！！」

体がゴツゴツとかたい岩肌に押し付けられ、そのまま坂を下るように引きずられた。仰向けだったので、ホノオの背中が酷く痛む。甲羅があるセナは、後頭部や手足を傷つけた。

やがて体が止まり、２人はゆっくりと起き上がる。少し動くと痛みが走り、顔を歪めた。

そんな２人のもとに、ギャロップとドードリオが近づいてくる。その顔からは、はっきりとセナとホノオを消す意志がうかがえた。

今度こそ、戦って逃げなくては。そう決意し、セナは敵を見据えて大きく息を吸い込む。

ホノオは強く拳を握り、自らの体から激しい炎を出した。――ホノオの技、“火炎車”だ。セナが使った“日照り玉”の効果がまだ持続しているので、通常よりも強力である。

「ハァ、ハァ……。てめーらみたいな腐った奴、ぶっ潰してやる！！」

ホノオがそう叫ぶと、思わずセナはドキリとして攻撃準備をやめてしまった。ホノオが、憤慨してしまった。我を忘れてしまった。目的が――オイラ達が敵に攻撃する目的が、ホノオの中では変わっちまった。

焦ってホノオに話しかけようとしたが、間に合わなかった。

「“火炎車”！！」

ホノオは叫び、まずは先ほど自分達を突いたドードリオに向かう。燃え盛る炎を身にまとい、弾丸のような速さで突進した。

「ぐあっ……！」

ホノオの攻撃で思い切り突き飛ばされ、ドードリオは苦しげな声を上げた。

「この！“大文字”！」

それを見て黙ってはいられず、ギャロップは炎タイプの大技、“大文字”をホノオに放つ。炎で描いた巨大な“大”の字を相手にぶつける技だ。

それを鼻で笑うと、ホノオは正面から技をぶつけた。

「“火炎放射”！」

大粒の火の粉が辺りに飛び散る。少しの間押し合うが、やがてホノオの“火炎放射”が“大文字”の大きな大の字を引き裂き、ギャロップの頬を殴るように突き飛ばした。

現在ホノオの体力はかなり削られているが、特性の“猛火”――自分がピンチの時に、炎タイプの技の威力が跳ね上がる特性――が発動して逆に有利になっているようだ。本来、純粋な技の威力だけなら“大文字”は“火炎放射”よりも上なのだが、先ほどホノオの“火炎放射”が打ち勝ったのはそれも影響しているようだ。

「ホノオ、今のうちだ！　逃げるぞ！」

敵がよろめいているすきに、セナは逃げようとする。しかし、ホノオに声をかけるが応じない。

彼は拳に炎をまとわせ、起きあがろうとしているドードリオに迫ったのだ。

「うらぁ！　“炎のパンチ”！！」

ドードリオの胴体に、灼熱の拳がめり込む。

「うがあぁっ！！」

声にならないような叫び声をあげ、ドードリオは気を失う。それでもなお、ホノオはドードリオを睨みつけ、何度も何度も同じ場所を殴る。

彼の瞳に宿る殺気に一瞬ゾッとしたが、すぐにセナは止めにかかった。

「やめろ、ホノオ！　とっとと逃げるぞ！」

ホノオの利き腕の左腕にしがみつき、必死に攻撃をやめさせようとした。

そんなセナに向けられたのは、ホノオの殺気立った眼差し。

「放せ役立たず！！」

「わあっ！！」

左腕を思い切り振ってセナのバランスを崩させると、右手でセナの頬を殴りつけた。ホノオの利き手ではないが、セナを突き飛ばすには充分な威力だった。

「役……立たず……？」

座り込み、セナは呆然と呟く。オイラは――役立たず？　ホノオの言葉の意味を、よく考えた。

痛む頬に、そっと手を当てる。痛む心に、当てるものはなにもない。ギャロップに再び向かってゆくホノオを――遠ざかる彼を、引き止めるのが怖かった。

「くっ……“炎の渦”」

ふらふらとよろめきながら、ギャロップはホノオを束縛しようと“炎の渦”を放つ。しかしそれをさらりとかわし、ホノオは自身の左足に強い炎を宿した。

「“ブレイズキック”！」

「がぁっ……！！」

ギャロップの腹部を下から思い切り突き上げた。ギャロップの体は宙を舞い、かたい地面に叩きつけられた。

そんな彼に残酷な笑みを向け、ホノオが近寄る。ギャロップが逃げようと少しもがくが、起きあがる前に彼の腹部に再び強い衝撃が――。

「オレはなぁ、てめーらみたいな連中が大嫌いなんだよ。偉い奴に従ったら偉いん？　……なぁ？」

「うっ……ぐ……」

何度も腹を蹴りながら、ホノオがギャロップにきつい言葉を浴びせる。ギャロップのうめき声が、セナの心に響く。

怖い。ホノオを止めるのが。でも、もっと怖い。ホノオが誰かを殺してしまうことが。

勇気を振り絞り、再びホノオに向かった。

「やめてくれ、ホノオ！」

ホノオの体に思い切り突進し、バランスを崩させた。セナもバランスを崩し、そのまま2人で地面に引きずられた。

「くっ……。何しやがるんだ、バカセナ……」

気持ちがカッと熱くなるのを感じた。セナの考えが、ホノオには理解できなかった。頭の中が、真っ白になった。目の前の存在が、全て、倒すべき敵のように思えてしまった……。

ホノオはセナにつかみかかり、手加減なしに首を絞める。ホノオの指が、跡がつきそうなほどにセナの首に食い込んだ。

「お前はどっちの味方なんだ……。どうしてオレの邪魔をするんだ

？」

「……っ」

ホノオに問いつめられるが、首を絞められているのに言葉が喉から出てくるわけがない。苦しくて目をきつく閉じているので、ホノオの顔が見えない。表情が、分からない。

ホノオとセナのやりとりを、薄目をあけて見るギャロップ。現在地面に倒れている彼だが、セナがホノオを押し倒したお陰で、彼ら2人はギャロップの口元付近にいた。

チャンスを見つけ、深く息を吸う。

「そんなにいい子ぶりたいのか？　オレらの命よりそれが大事か！？」

不満をセナにぶつけるホノオ。カッとなったあまりに、セナの頭を地面に思い切り叩きつけた。

「あっ……！！」

首締めからは解放されたが、岩に頭が打ちつけられる痛みは酷いものだった。

薄く目を明けてみる。ホノオの顔を見ると、明らかに自分が敵視されていることがわかった。

友達が……。仲間が、おんなじ人間が、とても怖かった。

そんなセナにとっては、その一撃が救いとなった。

「“大文字”！！」

忘れ去られたギャロップが、灼熱の大の字をセナとホノオに押し付けたのだ。

「ぐあっ……！！」

すでにボロボロのセナとホノオは、悲痛な叫び声を重ねた。体が地面に叩きつけられ、そのまま炎の大の字に押さえつけられる――。

攻撃が終わると、自分達を、息を切らせたギャロップが見下ろしている。特にホノオには、一段と鋭い眼差しを向けていた。

セナもホノオも、体に力を込める。しかし、セナはホノオによる攻撃、ホノオは怒りにまかせて体を酷使したせいで、もう起き上がれなかった。

「ハァ、ハァ……。ようやく、俺達は、依頼を成功させられる……。犠牲者のために――！」

すでにボロボロのあちらも、途切れ途切れ、言葉を話す。

「クソっ……！」

悔しげなホノオの声が、セナの耳にも届く。諦めたら、駄目だ。そう決意すると、セナは少しずつ体を動かし、アイテムが入っている青いバッグに触れる。――手探りで適当なアイテムを使っても、先ほどの“日照り玉”のように失敗してしまう。バッグの底を掴んでひっくり返し、セナは地面にアイテムをばらまいた。

木の実やグミ――。多くのアイテムが地面に転がった。その中でも、球体をしていて転がりやすい、様々の“不思議玉”。ゆっくり

と、セナとホノオの顔の前に転がってきた。

「むっ……！」

何かたくらんでいる。そう悟り、ギャロップはとどめを刺そうと急いで息を吸う。しかし彼の体も無理はできぬ状態。先ほど腹を何度も蹴られた影響か、思い切り咳き込んだ。その拍子に、細かな火の粉がセナとホノオに降りかかる。

「っ……！　ホノオ……」

火の粉のわずかな熱で顔をしかめながらも、セナは声を振り絞りホノオに指示を出した。

「お前の、目の前に、転がった……“払いのけ玉”……。使って、くれないか？」

暗い青色の“不思議玉”を見ると、ホノオはそれを乱暴に掴み取る。すぐに仰向けに寝転がると、上空に向かって高々と放り投げた。深い青色が不思議な光を放ち、辺りを照らす。

落ち着いて深呼吸をするギャロップだが、“払いのけ玉”から放たれた光に照らされるとフッと姿を消す。それと同時に、倒れていたドードリオの体も、光がおさまる頃にはなくなっていた。

――決して、彼らを消滅させたわけではない。ホノオが使った“払いのけ玉”には、近くに迫った敵をどこかへワープさせる効果があるのだ。

難が去り、ホッと一息つくと、セナは精一杯手を伸ばして近くにあった回復アイテム“オレンの実”を1つ掴んだ。まずはそれをホ

ノオに与えようとすると、やはりホノオはセナの手からそれを乱暴に奪い取り、かたい木の実をガリガリとかじる。ほんの少しだが、セナは寂しさを感じた。

もう一度周りを見回してみるが、自分の手が届きそうな範囲に“オレンの実”はもうない。遠のく意識を、もう引き止めようとは思えなかった。セナは目を閉じ、ゆっくりと体から力を抜いた。

しかしその直後、頭にコツンと当たる何かが、セナの意識を引き止めた。

「ん」

傷が癒えたホノオが、セナにそれを取るように指図する。立ち上がっている彼の体勢から判断すると、どうやらホノオはそれを蹴ってセナによこしたようだ。

再び手を伸ばし、それを掴んでみる。青色で、かたく、小さな実――“オレンの実”だった。

「ありがと……」

言葉がうまく声にならないが、こう言ったつもりだった。

セナが“オレンの実”を食べ始めたのを確認すると、ホノオは冷たく顔を背ける。そして、ゆっくりとだが、どこかへと歩き出す。

急いで“オレンの実”を口に詰め込むセナ。甘さ、苦さ、酸っぱさ、辛さ、渋さ……。様々な味が混ざったその実を噛み砕くと、体の傷が癒えてゆく。――涙のせいだろうか？　ほんの少し、しょっぱい味がしたような気もした。

食べ終わると、遠くなったホノオの後ろ姿を追いかけた。しかし、彼に近づくのは、少し怖くて――5メートルほどの距離を空け、2人は身を隠すための岩を見つけるために歩き出した。

第１５話：波乱と衝突と――その４（前書き）

オイラ達を襲ってきたギャロップとドードリオは、災害で弟や仲間が亡くなったのをオイラ達のせいだと信じているらしい。無理のない解釈だけど――やっぱりホノオはその主張に腹を立てた。

いや、それだけじゃない。ホノオは、追っ手の２人を殺そうとした。もちろんオイラは止めにかかったけど、そしたらオイラが攻撃されて……。

なんとか追っ手から逃げられたからいいものの、気まずいな。

（語り：セナ）

第１５話：波乱と衝突と――その４

ヴァイス、シアン、メル、ソプラ、アルル、ブレロ、ブルル――共に旅をする仲間達が、攻撃を放とうと力をためる。

「みんな、いくよ！」

ヴァイスが合図をすると、７人の攻撃が重なり、敵――救助隊“ボルト”の３人に迫る。

バトルが今、始まった。

強力な、メルの“ハイドロポンプ”をベースに力強い攻撃が重なった。数も相手の倍以上。この攻撃が当たると、皆が確信した。

しかし、突然攻撃が勢いよく押される。そして、７人の攻撃を引き裂き、正面から強力な電撃が襲いかかった。

「うわっ！？」

「キャーッ！！」

思わず悲鳴を上げる７人。電気タイプのソプラとアルルでさえ苦痛で顔を歪めていた。電気が苦手な水タイプで、なおかつ防御力に乏しいシアンは、ひときわ目立った甲高い叫び声を上げた。

電撃がやむと、ヴァイス達７人はふらふらと立つ。すでに不安定なシアンは、ヴァイスとメルに支えられていた。

「なんだ？　その程度か」

レントラーが、蔑んだような眼差しを向ける。

「どんなに言葉でかっこいいことを言って、正義ぶってみても、負けるようじゃヒーローにはなれないぜ？」

挑発するようなエレキブルの言葉を聞くと、ヴァイスとメルは発言者を睨みつけながら策を練り始める。普通に勝負をしても、勝てる相手ではない。

「ここは“あの技”を使うか」

ポツリと呟くのはソプラ。彼女と目を合わせると、アルルは頷いた。

「“あの技”って？」

ソプラの意味ありげな言葉に引き寄せられるように、彼女に皆の視線が集まる。ヴァイスがソプラに問いかけたが、敵はソプラの返答を待ってはくれない。

「よそ見はダメだぜ。“１０万ボルト”！」

“ボルト”の3人が、先ほどの7人の一斉攻撃を破った技を放つ。迫る矢のような電撃にどう対処してよいのかわからず、“彼女”以外は目をつむる。

「“守る”！！」

とっさにメルが輝くシールドを作って7人を覆い、攻撃から身を守った。

「さあ、作戦タイムだよ！　手短にね」

シールドをはりながら、メルがヴァイス達に指示を出す。ドームのような形のシールドの周りを這うように、鋭い電撃が流れていた。

「あのね、ボクとソプラには“とっておきの技”があるんだ！」

「すごく強いんだけど、準備に時間がかかっちまうんだ」

アルルとソプラが、先ほどの意味ありげな言葉について説明した。

「そうかい。それであいつらは倒せそうかい？」

「あの技を食らって平気でいられる奴はいないぜ！　あいつらに効果は今ひとつだけど、その方が殺さずに済むからちょうどいいさ」

メルに答えたソプラのセリフに身震いしたのは、ヴァイス、シアン、ブレロ、ブルルの男性陣だ。ひきつった顔を互いに見合わせる。

「こ、“殺さずに済むから”って……」

ブレロが苦笑いしながら呟くと、ブルルも「何をする気だ？」と呟いて苦笑。シアンは「怖いヨ」と言い、ヴァイスに抱きついた。

「そこっ！　私語は慎む！」

「は、はいっ！！」

ひそひそと話していたところをメルに怒鳴られ、びくりと跳ね上

がった男性陣だった。

“ボルト”の3人はしつこく“10万ボルト”での攻撃を続けてくる。“守る”を続けるメルの顔が険しくなり、少し辛そうだった。

「作戦を言うから良く聞きな」

発言者のメルに視線が集まる。

「ソプラとアルルは“とっておきの技”の準備をすること。その間、2人を守るのがその他の仕事だよ。その他は臨機応変に攻撃にも回ること。――とにかくみんな、“とっておきの技”の発動に専念することだよ！」

「はい！！」

メルの指示を受けたみんなの返事が、きれいに重なった。

ソプラとアルルは技の準備を安全にするために、なるべく“ボルト”の3人から遠い位置に立つ。そして……

「“充電”！！」

2人で手をつなぎ、体に電気をためはじめた。

「そろそろシールドも限界だけど、あっちの攻撃がやみそうにないね……」

メルがそう呟くと不安がつのる、“ソプラとアルルの護衛係”。

「どうしよう……」

少しパニックになり弱音を吐くヴァイスだが、ここでメルが何か思いついたようだ。

「シアン！　“バブル光線”を使ってくれないかい？」

「えっ……？」

体力的にも厳しく、先ほどのやりとりのせいもあり、ずっとヴァイスに抱きついていたシアン。メルの言葉に、小さな声で反応した。

「なるべくアタイ達の周りに泡をたくさん浮かべるんだ！　いいね？」

シアンはコクリと頷き、息を吸う。

「“バブル光線”！」

シアンの体力が少ないせいか、特性の“激流”が発動していつもより多量の泡がでる。辺りにまんべんなく泡を浮かべるためには方向転換が必要なので、ふらつくシアンをヴァイスとブルルで支えた。

シアンが行動を始めたのを見届けたメルは、次の指示を出す。

「あとブレロ！　“水遊び”を使って仲間の体を濡らしてくれないかい？　急いで！」

「あ、うん！　“水遊び”！」

敵が電気技で攻撃してくるのに、どうしてわざわざ体を濡らすのか疑問だったが、ためらう時間はないようだ。ブレロは、まるでホースから出した水のような弱い水流で、仲間や地面を濡らした。

「わあっ！　濡れるのやだよー！」

ダメージにはならないものの、ヴァイスは顔をしかめた。

「我慢しな！　電気食らうよりましだからさ……」

いよいよ“守る”にも限界がきたようだ。メルはシールドを解除する覚悟をした。

（みんなの安全確保はできたね。アタイは“あの技”を使おう）

心に決めると指示を出す。

「“守る”を解除するから、ちょっと痛いだろうけど耐えてな！！」

ついにシールドが消え、“１０万ボルト”が7人を飲み込んだ。シアンもブレロも技を中断し、目をつむった。

「“ミラーコート”！」

メルが叫ぶと、それまで“ボルト”からヴァイス達の方へと一方通行だった攻撃が、往復になった。――メルが相手の攻撃を強く跳ね返したのだ。

「なっ……！」

“ボルト”の3人の声が重なる。メルが返したエネルギー波が正面から衝突し、少し後ずさった。

連続で放電し続けていた“ボルト”の3人だが、予想外の反撃に驚き、ひるんでしまった。

“10万ボルト”もここでやんだ。

「あれ？　あんまり痛くないよ？」

ヴァイスのその発言に、シアンも頷く。電撃が苦手な水タイプの彼が言うなら間違いない。

「シアンとブレロの技のおかげさ。空中を漂う泡や体を濡らす水にいくらか電気が流れたから、体そのものへのダメージは少ないのさ」

「なるほど！」

メルの解説にヴァイスが頷く。嫌々ながら、体を濡らした甲斐があったと思った。

「くそ……。小賢しい奴らだ」

“ボルト”のサンダースが、嫌悪の感情を込めて言う。彼らのダメージは多くはないのだが、頭にきたらしい。

「食らいなネエちゃん。“雷の牙”！」

帯電した牙をむき出しにして、サンダースがメルに襲いかかろうとした。

「ふふ……。いらっしゃい♪」

迫るサンダースに笑顔を向けるメルを見て、何か恐ろしいことを企んでいるのでは、と考えてしまうヴァイス。だが、彼の予感は当たるのだった。

「“メロメロ”！」

メルが、いわゆる投げキッスの動作をすると、可愛らしいピンクのハートが飛び出し、サンダースに当たる。

するとすぐにサンダースの突進が止まった。

「め、メルさん……」

常にたくましいイメージだったメルの意外な技――しかし割と様になっていて色気がある――に驚き、呆然とブルルが呟く。他のみんなも、珍しい光景に釘付けだった。

「駄目だ……。可愛いネエちゃんには攻撃できねえ……！」

魔法にかけられたように、普段は冷酷なサンダースがデレデレと笑う。頬を赤く染めて、うっとりとメルを見つめた。

「あら？　アタイは攻撃できるけど？」

「是非してくださぁい！　是非ぃ！！」

完全に、恐怖の技“メロメロ”の餌食になってしまった哀れなサンダース。

そんな彼に、メルは容赦なき一撃を。

「“アクアテール”！」

水の力をまとった尻尾を思い切りサンダースの頭に叩きつけた。

「ぶへっ！？」

さすがに痛覚は正常らしく、サンダースは奇声を上げた。

「女性って……恐ろしいな」

傍観者と化したブレロがボソッと呟く。

「世の中鈍感な方が得するのかもな……」

ブルルがこう口にした途端、シアンやブレロの眼差しもヴァイスに降り注がれた。

このような騒動の中でも、ソプラとアルルは着々と準備――“充電”を進める。通常のそれよりも、はるかに時間がかかるようだ。

戦場が異様な雰囲気に包まれていたが、ついにそれが破られる。メルがサンダースに、とどめの一撃“メガトンキック”を見舞おうとしたその時だった。

「調子こくなやクソ女ァ！！　“破壊光線”！」

エレキブルが怒鳴ると、白く輝く強力な光線を放ち、味方のサンダースもろとも攻撃した。

「くっ……！」
「ぐあぁっ！！」

顔をしかめるが悲鳴を殺すメル。彼女とは対照的に、サンダースは悲鳴を上げた。
ダメージがたまっていたこともあり、攻撃が終わると彼は倒れた。
――なんと、彼にとどめを刺したのは味方だったのだ。

「お姉ちゃん！」

しばらく攻撃をしてこなかったので、すっかり油断していた。そんな自分を責めながら、ヴァイスはメルに駆け寄った。
ブルルと、シアンを背負ったブレロもその後に続く。

「大丈夫！？」

体に傷を負い、うつぶせに倒れるメルに問いかけたのはブルルだ。

「アタイにかまうんじゃないよ！　仕事しな。ソプラとアルルを守るんだよ」

彼女らしい言葉を聞いて、ヴァイス達ははっとする。エレキブルは“破壊光線”を使った直後だから反動で動けないはずだが、レントラーは――。

ヴァイス達が気がつくと、レントラーはソプラとアルルを標的にしていた。彼女達を睨みながら、そちらに突進している。

「役立たずの男どもめ……！」

「ソプラ、いったん準備を中断しよう！　戦わなきゃ！」

ソプラとアルルのつないだ手が離れようとしたが、“彼”の一撃でその必要はなくなった。

「“炎の渦”！」

「ぐっ……」

ヴァイスがレントラーを炎できつく縛り、突進を許さなかったのだ。

身動きがとれなくなったレントラーは、その場で足に絡みつく渦から解放されようともがく。

「よし、やったぞヴァイス！」

ブレロとブルルが歓声を重ねる。そのままとどめを刺すのかと思いきや、ヴァイスはレントラーの元へ向かったのだ。

「ねえ」

自らより大柄なレントラーの顔を見上げながら、ヴァイスが問う。

「エレキブルがサンダースに攻撃したけど、あなた達のチームではこれが普通なの？」

「当たり前だ」

ヴァイスのまっすぐな眼差しと言葉を、レントラーは冷たくはね返す。

「あんな、“メロメロ”のせいで攻撃もできなくなった情けない状態じゃ、役にたたねえからな」

「いくら戦えないからって、仲間を捨てることないじゃない！」

ついにヴァイスが声を荒げた。

拳を強く握り、普段の穏やかな表情は捨て去っているものの、純粋な怒りだった。

ヴァイスの怒りに同調するように、レントラーに巻きつく炎の勢いが強くなる。

「ふ……。“捨てる”とは人聞きが悪いな」

少し表情を歪めたが、レントラーは不愉快な笑みを浮かべて話し出した。

「俺達が役に立たないと判断したのは、“メロメロのせいで攻撃ができなくなったサンダース”だ。奴の状態異常が回復しさえすれば、また共に戦うのだが」

「何、それ……」

ブレロに背負われているシアンの表情が変わる。それまで掴んでいたブレロの肩をさらに強く掴んだので、ブレロが少しだけ顔をしかめた。

「サンダースがかわいそうだヨ！　自分達の都合のいいように扱うなんて――」

「誤解をされちゃ困るなぁ、嬢ちゃん」

そう言ってこちらのやり取りに口を出してきたのは、“破壊光線”による反動が終わり、身動きがとれるようになったエレキブルだ。シアンが“嬢ちゃん”という言葉に気を悪くしたのは言うまでもない。

「それが、俺達の救助隊のルールなんだよ。より依頼を達成しやすくするためのな。俺やレントラーだってサンダースの立場になる時はある」

「誰が決めたノ、そんなルール。切り捨てられて悲しくないノ？」

ちょうどシアンのそのセリフが終わる時だった。レントラーにまとわりついていた“炎の渦”が消滅したのだ。

「合理的な方法をとるのに、個人の感情など関係ないのだ」

そう言うと、レントラーはさらに続けた。

「まあ最も、仲良しお子さま集団のくだらない救助隊、“キズナ”のお前達にはわからないだろうけどな」

その鋭い言葉の威力を、エレキブルはさらに上げる。

「結局、“キズナ”なんて美しい言葉を掲げておいて、リーダーはこの世界を破滅させる生き物、人間なんだもんな！　ガハハ、傑作傑作」

「リーダーだけじゃなく、もう1人いたよな。危ない救助隊だ」

エレキブルは下品で豪快な笑い声をあげ、レントラーは嘲笑じみた表情を見せる。

「黙れ……」

低い声をあげるのはブレロだ。

「お前達のような奴らに、“キズナ”をバカにする資格はない！」

こう断言する彼だが、この言葉を言うまでのわずかな時間内で、様々な迷いが生じていたのだ。

つい最近までヴァイスと敵対していたような自分達に、果たしてこの言い合いに参加する資格があるのか？　増してや、“キズナ”のメンバーのことも嫌っていたのに。

こんな思いが、今まで発言を控えさせていた。

しかし、レントラー達の話していることを聞くと、どうしても気持ちがおさえられなくなったのだ。

ブレロの後に、ブルルが続く。

「合理的とか利益とか、そんなことばっかり考えてるお前達とは、“キズナ”は違うんだ！」

「ブレロ、ブルル……」

手痛い言葉にしばし怯んでいたヴァイスとシアンが、安心したような表情でブレロとブルルを見た。

目が合うと、一瞬漂う穏やかな雰囲気。

しかし、もちろん敵は、穏やかになるどころではない。

「お前等みたいな現実を見ないクソガキ共を見ているのは気分が悪い……」

レントラーがそう言うと、エレキブルと共に蓄電を始め、バチバチと凶悪そうな音が轟く。

「くたばれ、クソガキ！」

その暴言と共に、ヴァイス達めがけて激しい電撃が放たれた。

第１５話：波乱と衝突と――その４（後書き）

お知らせです。

５月１６日、この小説のプロローグから第１話その２までを修正致しました。

初期――というか最近もなのですが（汗）、かなり文章が幼稚なので、少しずつ修正していきたいです。

プロローグに関しては、これまでこの小説に空いていた大きな設定の穴の埋め合わせをしておきました。

“設定の穴”ともうしますのは、「どうしてガイアのポケモン達は人間を知っているのか？」という問題点であります。

このことについて、プロローグに明記しましたので（大した理由ではないかもしれませんが、一応以前から考えていた設定です）、お手数をおかけしますが、よろしければプロローグだけでも読み返してくだされば幸いです。

第１５話：波乱と衝突と――その５（前書き）

セナとホノオの居場所の手掛かりを掴んだ僕達に、ゴールドランクの救助隊ボルトが襲いかかってきた。セナ達の居場所――といっても僕らは方角しか知らないけどね――を聞き出すつもりみたいだ。戦法も冷たいし、セナとホノオのことを悪く言うボルトが頭にきて、僕とブルルは自分達の以前の立場も忘れてボルトを怒鳴りつけてしまった。

それで、奴らを刺激しちゃったみたいだね。強力な電撃を放たれ、大ピンチになっちゃった！

（語り：ブレロ）

第15話：波乱と衝突と――その5

迫る電撃を見据え、ヴァイスは臆さず“火炎放射”を放つ。それを見たブレロもとっさに“種マシンガン”を放ち、ヴァイスを援護した。

真正面からぶつかり合った攻撃の勢力は一瞬釣り合うものの、刹那、敵の電撃がヴァイス達の攻撃を切り裂いた。

「うわ……！」

思わずこう叫び、ヴァイスとブレロは電撃から顔を背けた。ブルルは伏せ、ブレロに背負われているシアンはブレロにしがみついた。

まさにこの時だった。

「“王者の雷”！」

2人の少女の声が聞こえたかと思うと、ヴァイス達の後方から光の速さの電撃が放たれ、敵の電撃をいとも簡単に破る。

「なっ……！？」

正面から襲いかかるそれに驚き、エレキブルとレントラーは対抗しようと体に力を込める。しかし、彼らのその努力は一瞬で儚く散った――。

「こ、これが、とっておきの技……」

耳をふさぎたくなるような鋭い雷鳴が轟いている状況下。ヴァイスは呆然と呟くと、強力な“雷”――先程彼女達は“王者の雷”と言った――の発生源に目をやった。

これまでに“充電”を続け、小さな体に強力な電気をため込んだソプラとアルル。そして今、ソプラは元々最強の彼女の“雷”をさらに凄まじい威力で爆発させた。そこにさらに、アルルが“手助け”をしている。ソプラと共に放電して技の威力を高めるのはもちろん、どうやら彼女は電撃の方向のコントロールも担っているようだった。

ひとまずここまで把握したヴァイスだが、直後、さらなる事実を思い出す。

ソプラとアルル――すなわちプラスルとマイナンという種族が持つ特性は、“プラス”と“マイナス”……。互いが近くにいることにより、彼らの技の威力はさらに増すのだ。

普段のソプラの“雷”より、一体どれだけ威力が上がっているのだろうか？

考えた瞬間、ヴァイス、シアン、ブレロ、ブルルの4人は身震いした。味方の技ながら、想像するのも恐ろしい。

それが、ソプラとアルルのあわせ技“王者の雷”なのだった。

「ふう……。こんなもんだな」

ソプラがそう言うと同時に、彼女達は攻撃を止める。さすがにエネルギーの消耗が激しいらしく、2人でぺたりと地面に座り込んだ。

「すごかったじゃないか、2人とも！」

ヴァイス達４人がいまだに口を開けないような状況下、発言したのはメルだった。先程エレキブルの“破壊光線”を受けたが、それだけでやられる彼女ではない。軽快にソプラとアルルに歩み寄っていた。

「ありがとう、メルさん。あ、ボクらにしばらく触らないでね。多分感電させちゃうから……」

アルルが言うと、

「あら、ご忠告ありがとね。アルルが言わなかったら、アタイはアンタ達の頭をなでていたよ」

メルが笑いながら言った。

「ねえ、シアン」

ようやくヴァイスは口を開き、ブレロの背中から降りたシアンに話しかけた。

「なあに？」

「ボク達、何のために戦っていたんだっけ？」

ヴァイスの視線の先には、電気タイプと言えどもダメージを負い、うつぶせに倒れているエレキブルとレントラー。そして、はじめに倒れたサンダース。

「この３人がシアン達に、ホノオとセナの居場所をムリヤリ言わせようとしたからじゃないノ？」

「そうだよ。そうなんだけどさ……」

少しうつむくヴァイス。ブレロとブルルの視線も彼に集まった。

「それって、ここまでやることなのかな？　確かにこのエレキブル達は、考え方も酷いし、セナ達のいる方角なんか教えたくないけどさ……」

「いいんじゃないの？　やらなきゃ、僕達がやられる」

ブレロのその言葉も一理ある。しかし……。

何かもやもやした、しかし原因のわからない感覚を覚えたヴァイスであった。

「ヴァイスは難しく考えすぎだヨ～。さ、みんな。早くホノオとセナを探しに――」

シアンがのんきに発言し、そう言いかけた直後だった。

突如、シアンの体が後方へと吹っ飛ばされたのだ。敵からの飛び道具など確認できなかったのに。

「シアン！？」

すっかり相手を倒した気でいた一同だが、引き締まった声が重なった。

シアンが飛ばされた方に目を向けると、

「ハァ、ハァ……。油断したみたいだな、愚か者ども！」

倒れたはずのエレキブルが、一同の後ろに立っていたのだ。

「そんな。なんでだよ……」

自信満々だったソプラが、力なく呟いた。

「いやぁ、この俺にダメージを与えられただけすごいと思うぜ、嬢ちゃん達。だって――」

セリフを言いかけのエレキブルの姿が見えなくなる。その刹那、ソプラとアルルは衝撃を受けて弾き飛ばされた。――他ならぬ、エレキブルの体によって。

「わっ……！」

悲鳴を上げ、2人は地面に引きずられた。そんな彼女達を一瞥した後、エレキブルは停止し、まだ攻撃をされていないヴァイス達を見てセリフの続きを。

「俺の特性は、“電気エンジン”」

「そういうことかい……」

感心したような、しかし落胆の色が強い、メルのその言葉。意味が分からず、ブレロとブルルは首を傾げた。

「電気タイプの攻撃を受けたとき、本来ダメージになる電気エネルギーを自分のものにして、自らのスピードを上げる特性さ」

「だからシアン達にあんなに速い体当たりができたわけか」

「“あの雷”を受けても倒れないし」

ブレロとブルルはメルの説明に納得する。

「ガハハ、その通りだ。まぁそれでも、電気を吸収しきれずにダメージを受けちまったがな」

豪快に笑い飛ばした後、エレキブルはいかにも悪党らしい不気味な笑みを向ける。

「とにかく、大量の電気を体に吸収した今の俺は、無敵ってことだ。さあ……！」

エレキブルは、最も自分に近いところにいたメルの腕を掴む。

「放しな、変態！」

顔に嫌悪の念を浮かべてメルが振り払おうとするが、さすがに大人の♂ポケモンにはかなわない。

ならば“高速スピン”を使ってムリヤリ――それもかなわなかった。

「セナとホノオの居場所を教えろ！」

こう怒鳴った途端に、エレキブルはメルの体に強い電圧をかけた。

「うっ……！」

歪むメルの表情。苦手な電気技を受け、“高速スピン”どころではなくなってしまった。

「お姉ちゃん！」
「メルさん！」

叫ぶヴァイス達。すぐさまメルのための攻撃をはじめた。

「お姉ちゃんを放せ！　“火炎放射”！」

自らに迫る炎を見据えると、エレキブルは不気味な笑みを見せた。
そしてメルの腕を乱暴に引っ張り、自分と炎を隔てる壁にする。

「うわ！」

ヴァイスはそれを見て、すぐに攻撃を止めた。どうにか炎はメルに直撃せずに済んだが、危うく彼女を盾にされてしまうところだった。こう思うと、心臓が抜けてしまいそうな緊張を覚えた。

「ガハハ！　今の俺の力があれば、この姉ちゃんを自在に動かして、盾にできるってワケだ」

メルへの電撃はそのままに、エレキブルが言う。

「く……。逃げな、ヴァイス。みんなも……」

息があがり、目もうつろなメル。そんな姿を初めて見たヴァイス達は、かつてないほどの動揺に襲われた。
何か作戦はないか。何か作戦はないか。何か……。
心で何度もそう反復するも、思考がその先へと発展しなかった。

ちょうどその時。

「な、何をやっているんだ、お前達は！？」

その声が、戦場を沈めた。

一同――エレキブルに飛ばされたシアン、ソプラ、アルル。そして意識を取り戻したサンダース、レントラーも含む――は、声がした方に目をやる。

エレキブルはメルを解放する。途端にメルは地面にぐったりと座り込んだ。

声の主はギャロップ。その隣にはドードリオ。どちらも“オレンの実”で癒しきれなかった傷が体についているようすだった。

そう。彼らは今日、セナとホノオを見つけて倒そうとしていたあのポケモンだったのだ。

「こいつらが、セナとホノオがいる方角を知っているのに教えなかったんだ」

「……」

教えるのが――つまり、セナ達を倒すのがよしとされているこの世界。そんな状況に乗じて、エレキブルは自分達を正当化した。

反論の言葉も見つからず、ヴァイス達は心の中で悔しさを煮えたぎらせながら黙りこくる。

「奴らなら、さっき東の“渓流の谷”で見つけたぜ。逃がしちまったけど」

「本当か！？」

ドードリオの言葉に、レントラーが返す。

「ああ。俺達はホノオにズタズタにやられたから、ひとまず退却してきた」

「“オレンの実”で回復したのにこの傷だぜ？　それに何度も蹴られた腹が痛むな」

恨みを込めて、ドードリオとギャロップは言う。その彼らの眼差しが、ヴァイスの胸を締め付けた。

「大丈夫だ。俺達が必ずお前達の恨みを果たしてくるさ」

サンダースが言う言葉に、ヴァイス達は顔をしかめた。「正当化がお上手ですこと」と、誰にも聞かれないようにブルルが呟いた。

「ありがたいな。しかし、お前達も怪我をしているようだ。“オレンの実”をやるよ」

こう言ってギャロップは、エレキブル、レントラー、サンダース――救助隊“ボルト”の3人に“オレンの実”を手渡した。

「助かった。そこの“キズナ”の奴らに散々やられたもんでな」

エレキブルの笑みからは、ギャロップ達には快い感謝の念がうかがえた。

もちろん、ヴァイス達が感じ取ったのは――。

「それじゃ、早速俺達は行く」

「今日はもう長くないが、できれば明日中には……な」

レントラーとサンダースが言うと、“ボルト”の3人は東に駆け出す。普段はあまり足が速くないエレキブルも、特性の効果がまだ続き、颯爽と小さくなっていった。

「……」

その様子を、無言で見届けるヴァイス達。
もちろん、個々の中には怒りもあった。不満もあった。
だが、一番強かった感情は――。

「おい」

ギャロップとドードリオは、ヴァイス達7人を見下す。そして、ギャロップは低い威圧的な声で話し出した。

「お前達は、どうしてセナとホノオの味方をするのだ？」

「どうしてって、当たり前じゃない！」
「セナもホノオも、ボクの大切な友達だから……」

シアンとヴァイスが口々に答えた。

「思った通りの答えだな」

ギャロップは鼻で笑いながら、吐き捨てるように言う。
そして、ドードリオが続いた。

「ならば、もし、その“友達”が、誰かの命を奪っていたら……？」

「えっ？」

言葉の意味が、わからない。そんなヴァイス達7人の声が重なった。

「奴らが引き起こす災害のせいで、命を失ったポケモン達はたくさんいるのだ……」

洪水で亡くした自らの弟を思いながら、ギャロップが言う。

「セナ達が災害の原因だとは限らないだろ！？」

腹を立てたブレロ、ブルル、そしてソプラの声が重なった。

アルルは少しおどおどとして落ち着かない様子であり、メルは発言できる体調ではない。

「それだけではない！　俺達は今日奴らに遭遇した時、ホノオに殺されかけたんだぞ！」

ドードリオが怒鳴ると、その場が一瞬しんと静まり返った。

「はぁ！？　てめーらが言えたことかよ！？　クソザルだって命が危うい状況にいるんだから、しゃーねーだろ！」

ソプラが沈黙を破るが、返ってきたのは軽蔑的な眼差し。

「ははは、なるほど……。自分が生きるためならば、他の命は惜しくないってか」

こう呟くと、ギャロップとドードリオはヴァイス達に背中を向け

た。

「そうは言ってねえけど――」

「とにかく」

ソプラの反論を、ギャロップが遮った。

「忠告だ。余計な行動はするな。……自分達が安全でいたいのならな」

この言葉を言い残すと、ギャロップもドードリオも地面を強く蹴り、その場をあっという間に立ち去ってしまった。

この日も、ヴァイス達は様々な思いを感じた。怒りもあった。不満もあった。

一番強かった感情は、今のガイアの状況に対する呆れのような、はたまた戸惑いのようなものだった。

第１５話：波乱と衝突と――その５（後書き）

ソプラとアルルの技名“王者の雷”は、ソプラの誕生日に由来しています。詳しくは「キズナの救助隊レポート」で（笑）。

さて、今更になりますが、ユーザー登録をなさっていない方でも感想を書けるようになりましたね。

私も設定を変更してみましたので、お時間のある方はお気軽に感想をくださると励みになります（笑）。

……この内容の書き込みは二回目だぞ！　とおっしゃる方。番外編も読んで下さってありがとうございます↑

第１６話：選んだ“強さ”――その１（前書き）

アタシとアルルの最強の合わせ技、王者の雷。この技で、ボルトのアホ共を仕留めたはずだったんだけどな。エレキブルの特性のせいで、むしろプラスになっちまった。

結局、乱入してきた救助隊のせいでセナとクソザルの手掛かりがボルトにばれちまうし、その救助隊はクソザル達のことを悪く言うし……。

なんか、気分悪いな。

（語り：ソプラ）

＞ｉ１１９０３―４３４＜

第16話：選んだ“強さ”――その1

追っ手のギャロップとドードリオから逃げ、しばらく岩陰に身を隠していたセナ達。空に高くあがっていた太陽が西に傾き赤く染まるまで、セナとホノオの間には気まずい空気が流れる。少しでも言葉を発すると、心に針がささりそうな――そんな雰囲気だった。

不意に沈黙を破ったのはホノオだ。セナが肩から下げている“しぼんだ”青いバッグを見て、欠片のような言葉を発した。

「アイテムは？」

言葉が聞こえた途端、セナの肩が小さくはねる。

――アイテム？　ホノオが言っていることが、しばらく理解できなかった。

呆れたようにため息をつくと、ホノオは言葉の続きを言う。

「さっき逃げるときに、てめーがばらまいたアイテムはどこに行ったって言ってんだよ」

そこでハッと気がつく。

さっき――といっても、すでに数時間前だが――追っ手から逃げるためのアイテムを探すため、セナはアイテムを地面にばらまいた。ホノオが転がったアイテムをうまく使ったおかげでなんとか逃げられたわけだが、ホノオはセナに腹を立て、すぐに今いる岩陰まで歩いていってしまい、セナはそれを慌てて追いかけた。

それで、ばらまいたアイテムを拾うのを忘れてしまい、現在セナのバッグはしぼんでいるのだ。

「あっ……。アイテム拾うの忘れちまったみたいだ。オイラ拾ってくるよ」

「いらない。オレが行く」

ホノオが冷たく言い放つその言葉に一瞬ひるむが、「そうですか、お願いします」などと言うのは申し訳ない。

「じゃあオイラも一緒に――」

「来るなよ、邪魔だ」

ホノオは立ち上がると、セナからバッグを奪い取り、セナがアイテムを忘れてきた場所へとスタスタと歩いてゆく。

『放せ役立たず！！』――ホノオに言われた言葉が、胸をえぐった。

よし、これで全部だ。

数分歩いた後に問題の場所にやってきたホノオ。散らかった木の実や不思議玉を、バッグに詰め終えた。

元の場所に――セナが待つ場所に、戻るのがおっくうだった。奴の顔を見ると、なぜだかイライラしてくる。

さっきアイツが余計な真似をしなければ、オレ達はあそこまでピンチにはならなかった。ギャロップの執念の反撃、“大文字”を受

けなくて済んだはずだった。
相手は自分達の命を狙う敵なのに、そんな奴をかばったセナ――。
この時のホノオには、彼の考えが理解できなかった。

ふぅ、とため息をつくと、ホノオは膨れた青いバックを持ち、ゆっくりとセナの元へと向かった。

「あ、ありがと、ホノオ」

うつむいたまま、セナがホノオに声をかけた。ホノオは無言で彼の近くに青いバックを置き、少し離れて座り込む。

しばらくの、沈黙。何もせず、何も起こらず、辺りが暗くなる。
しかし、彼が静かだったのは表面だけ。ホノオの内心では、セナに対する不満が募り――この沈黙の間に、鋭利な言葉の武器を作ろうとしていた。

むしゃくしゃした気持ちを増幅させるようなこの空気に耐えられなくなり、ホノオが言葉を発しようとした。
それを遮ったのは、セナの言葉。

「なあ、ホノオ」

「あ？」

ホノオは刺々しく言葉を返す。

「オイラ達が敵に攻撃する意味……見失うんじゃねえぞ」

分かってはいた。自分の暴走が止まらなくなっていたことには、気がついていた。でも、それを認めたくなかった。

そんなホノオの反論が始まる。

「は？　ろくに敵に攻撃もしなかったような奴が何言ってんの？　むしろお前の行動は、敵にチャンスを作ってばっかりで……。何？　そんなに死にたいん？」

その言葉だけでも、十分に痛い。先ほどから控えめにおどおどとホノオに話しかけていたセナだが、完全に小さくなってしまった。

そんな彼に、ホノオは容赦なく追い討ちをかけた。

「オレ達が敵に攻撃することの何がいけないんだよ？　そうしないと逃げられないわけだし、そもそもあっちが先に攻撃してきたんだろ？」

別に、敵に攻撃すること自体を否定している訳ではない。ただ、ホノオのやり過ぎに不安を覚え、注意をしただけなのだ。

逃げるのに必要な、最低限の攻撃に抑えろ――こう伝えたかったが、勇気が出なかった。

「あーあー。これだから優等生は困る。そんなに、常に模範的な行動したいわけ？　『オイラは他人を傷つけられません』なんてきれい事言って、いい子でいたいわけ？」

「違っ……」

言葉がつっかえり、セナは小さくそうつぶやいただけ。

「違わねえや！　だってそうだろ!?　なんでオレの攻撃の邪魔をした!?　無事に生きてシアンやヴァイスのところに帰るのが最優先じゃなかったのかよ!?」

ホノオが声を荒げて怒鳴る。

言いたいことはあるが、伝えたい気持ちもあるが、言葉にならない。――ヴァイスに対する態度とはまた少し違う、複雑なセナの気持ち。

ホノオもホノオで複雑だった。

心のどこかでは、セナの言いたいことも、彼の気持ちも分かっていた。でも、怒りや戸惑いが、それをかき消してしまっていて――。

いつかの夜、ヴァイスと共に『セナを守る』と誓ったはずなのに。傷つきやすい彼のサポートをするために懸命だったのに。――そんな彼は、今はセナを傷つけるために、彼の苦手な鋭利な言葉を探していた。

「言っとくけどさ」

そのホノオの一言で、セナは形容しがたい恐怖を感じた。

「敵に攻撃するのをためらうようじゃ、本当に死ぬぜ？　ヴァイスやシアンだって、それを望んじゃいない」

『ヴァイスやシアンだって、それを望んじゃいない』――その言葉が、セナが言いたいことをうまくまとめてくれた。

言っても無駄かもしれない。でも、言わなきゃ。

ホノオの反撃の恐怖を無理やり押さえつけ、セナは小さい声で話し始めた。

「……でも。ヴァイスもシアンも、オイラ達が誰かを殺しちまうことなんてもっと望まないはずだ。たとえそれが、敵から逃げるためで、わざとではなくても。

だって、オイラ達は救助隊――」

「はっきり言わなきゃ分かんねえみたいだな……」

ホノオがセナの言葉を遮る。低く、震えた、威圧的な声だった。

怒りが思いやりの心を砕く。先ほどまではなんとか遠慮していた“セナの弱点”を、残酷にも、突きつけることにしてしまった。

「今日のオレ達のピンチは全部お前のせいだ！　休憩の時に隠れないから敵に見つかるし、意味わかんないタイミングで“日照り玉”使うし、敵じゃなくてオレに攻撃するし……。全部お前が悪いんだ！！」

ホノオはセナの肩を握りつぶすように掴み、体を乱暴に揺する。

痛い。でも、それに反応ができるほど心に余裕がなかった。

呆然と目を見開きながら、セナはホノオの言葉を心で繰り返す。

「確かに他のポケモンを殺していいわけがない。でも、今日のお前の行動は、オレを殺しかけたんだぞ！！　自分を棚に上げるんじゃねえ！　味方より敵が大事か！？」

今日は怒鳴りすぎたせいか、ホノオの声がわずかにかすれてきた。

今日は怒鳴られすぎたせいか、セナの心はひびだらけだった。

ついに言い放たれる、ホノオの“トドメ”。

「オレはお前のせいで死ぬのはまっぴらだからな！！」

――オイラは間違っていたのかな？

ホノオが手を離した途端に、セナは力なく考え出した。

ホノオは、“オイラのせい”で死にかけた――か。その通りかもな。

バカだよ、オイラ。今この世界には、ホノオしかオイラの存在を認めてくれる奴がいなかったのに。ホノオすら、オイラを認めてくれなくなっちまった。

オイラの居場所は、どこ？　何が正しくて、何が間違っているんだ？　誰を信じて、何のために生きればいい？

――もう、全てわからない。

怖い……。苦しい……。

でも、どうして辛いんだろう？

呆然とここまで考えた彼だが、ふと、何気なく考えたこのことが引っかかる。

どうして、辛くなるんだろう？

誰かに傷つけられたから？　――いや、そうじゃなくて。

どうしたら、辛くなくなるんだろう？　何があっても傷つかなくなるんだろう。

傷つくのは、どこだ？　心、だよな……。

この時、セナは悟る。――心なんかなければ、もっと楽に生きられるのではないか？

心があるから、傷つくんだ。心があるから、迷うんだ。

心がなければ、何も心配はいらない。居場所がなくても、物事の是非がわからなくても、誰も信じなくても――生きて、いけるじゃないか。

ほんの一瞬、セナはニヤリと笑う。その冷めた笑みを見た者は、誰もいなかった。

ホノオは不機嫌そうに地面を睨みつけていて、その場は沈黙に包まれていた。

ホノオを守ろう。セナはホノオを見るなりそう決意した。

意地に近い考え方だった。お前が安全ならいいんだろう？　生きれりゃいいんだろう？　――冷めた動機だった。

でも、オイラがホノオを“守って”やろう。そうすれば奴もご満悦だろうから。

もし自分がホノオの代わりに怪我でもしたら、ホノオはどんな反応するかな？　考えると、なぜだか笑えてきた。

悲しむだろうな、辛いかもな。心があるから。
——ほら、やっぱり生きるのに心は要らないんだよ。むしろ、邪魔だ。

敵から逃げるのも、ホノオを守るのも、体さえあればできることだ。会話だって、体があれば容易くこなせるだろう。
表情なんてものは、作ればいいんだ。かつてヴァイスには、自分の空元気は見事に見破られた。でもそれは、心のどこかに余計な感情があったからだ。心がない顔には、どんな表情も簡単に貼り付けられる。

覚悟は、いいか？
セナは自問自答する。

沈黙を破る言葉は、すでに用意していた。これが表にでた瞬間、オイラは、“変わる”。
弱くて悩みがちなオイラなんかとはおさらばだ。何があっても傷つかないオイラになれる。

オイラは、“強く”なる——。

第１６話：選んだ“強さ”――その２（前書き）

心が傷ついて辛いなら、いっそ心なんてなくなってしまえばいい。
そうすれば、オイラは強くなれるんだ。
（語り：セナ）

第16話：選んだ“強さ”――その2

言いたいことを全て爆発させ、しばし沈黙を続けていたホノオ。
黙っていると、ほんの少し不安になる。自分はさっき、あんなことを言って良かったのだろうか？
しかし、あれは正論なんだ。そう思い、心を落ち着かせた。

そんなとき、セナの準備が整う。セナはそっと息を吸い、ポツリと言葉を発した。

「ゴメンな」

静かな一言を聞いて、ホノオは顔を上げる。

「お前も不安だったんだよな。怖かったんだよな……。お前の気持ちもわかってやれなくて、本当に、ゴメン」

極力笑って、あっさりと言ったつもりだった。
しかし、さすがにまだ“心を捨て、強くなる”ことが様になっていなく、わずかに悲痛な感情が伝わってくる。
ホノオには、それが辛かった。

ホノオの心から、刺々しい感情が抜けてゆく。

「あのさ。オイラ、何があってもお前を守る。絶対に死なせない。……だから、安心してくれ。お前は死なないよ」

あ……。オレは、取り返しのつかないことをしてしまった……。
セナの言葉を聞き、これまでのやりとりを振り返ってみると、ホ

ノオは恐怖に駆られた。

常に、自分の存在意義を考えて、時にはそれを“作って”いた。過去の罪悪感をかき消すために、それまで以上に人に優しくなった。

誰かに必要とされることで、彼の心は成り立っていたのだ。

そんな少年、瀬那（セナ）の心を、オレは踏みにじってしまった。

お前が悪いんだ。

お前のせいで。

もし、セナのように不安定な心を持つ少年が、こんな――存在意義を否定するような――ことを言われたら。

どうなってしまうかはよく分かっていたのだ。オレは、セナがそれで傷つくと知っていて、それでも傷つけようとした。

取り返しの、つかないことをしてしまった……。

「ごめん、セナ……」

心から詫びる。ホノオは真っ直ぐにセナの目を見た。目が合うと、セナの瞳が揺れた。

「すごくイライラしてて、あんなこと言っちまって……。本当に、ごめん。

オレはお前がいなきゃ駄目だよ。だから、さっきのこと、忘れてくれ」

忘れたはずの心が、戻ってきて揺らぐ。オイラは今まで通りのオイラでいいのかな……？

酷く葛藤した。オイラは、どうあるべきなのか。

ホノオの目をよく見た。コイツと、これからどう付き合うべきだろうか。

これまでに彼と交わした言葉が、鮮明に蘇る。暖かな言葉もあった。彼のおかげで乗り越えた壁もあった。

しかし、この言葉が脳裏をよぎると、戻りかけた心が壊れた。

お前のせいで死ぬのはまっぴらだからな！！

――あ、やっぱり無理だ。こんなことを言われて、辛くないはずはない。

この時、セナは心底ホッとした。せっかくさっき悟った“素晴らしい”生き方を忘れてしまうところだった。

いよいよセナは、冷たくなった。“強く”なった。

ホノオの謝罪に返答する。

「いいよいいよ。気にしてないから」

うまく、言えているだろうか？　まだ少し、余計な感情が混じっているかもしれない。

「ごめん、本当に……」

ホノオは深々と頭を下げる。セナが許すか許さないかなんて関係なかった。ただ、やはりオレは酷いことを――。

ホノオはさらに続けた。

「オレのことなんか守らなくていいよ……。今日みたいに暴走しないように極力気をつけるからさ。また、いつも通り、助け合おうぜ。……な？」

悲痛なホノオのセリフ。だがそれは、セナに一切の影響を与えなかった。別に辛くない。とても楽だった。

すごいや、オイラ。心をなくしただけで、こんなにも強くなれたんだ。

今の自分に、満足だった。このままの自分でいたいと思った。

セナはホノオの顔を見ると、ニッコリと微笑む。そして、彼の言葉に返事をせずに、切り出した。

「今日は疲れたな。もう寝ようか」

「……」

じわりと涙があふれた。セナに、オレの言葉は届かない。

頭が凍り付くような恐怖を感じた。

必死に涙を隠そうとするホノオを見ても、別にセナは辛くなかった。心がなくてもよいのなら、彼を慰めようとした。

「泣くなよ、ホノオ。お前は悪くないんだぜ？　悪いのは全部オイラなんだからさ……」

「お前は、悪くねえよ……」

震えた声で、ホノオは反論する。

「本当に、お前は悪くないんだよ。オレが……、オレが、あんな酷いこと言ったから！」

感情的になるホノオを見て、再びセナは思う。やっぱり、感情が――心があると、辛いんだよな。

ホノオが哀れに見えた。

「大丈夫だよホノオ。オイラ気にしてないし、傷ついてもいない。オイラを笑わせるのがお前の役目じゃなかったん？　お前がそんなに泣いてちゃ駄目じゃん。……な？」

セナを見ると、きれいな笑顔を向けられる。でも、それは眩しすぎて少し鋭く、わずかにホノオの心を突き刺した。

「ふあぁ……。オイラもう眠いから寝るな。おやすみ」

いつもよりもだいぶ早いが、セナはそう言って目を閉じる。

はじめは眠気が少しもこなかったのだが、しばらく呼吸を繰り返すと、次第に意識がなくなってゆき、眠りに落ちた。

とても穏やかな気分だった。

そんな彼の様子を、ホノオはただ見ることしかできなかった。

オレの声はセナには届かないだろうし、このまま眠るような心情ではない。

大きくため息をつき、自分の過ちを反省し始めた。

――どうしてあの時、セナにあんな言葉を言ってしまったのだろう。ためらう気持ちもあったはずなのに。

セナは、どんな気持ちであの言葉を聞いたのかな？　想像はつくが、その凄まじい衝撃は形容しがたい。

オレは、セナの“親友”のつもりだった。でも――これでは友達ですらない。事実、オレは今日、セナを敵視したのだ。

軽い気持ちで“親友”という言葉を連呼していたかつての自分が、どうしようもなく恥ずかしかった。

弱い立場の者を傷つけ、おまけに暴力まで――。最低だ、オレ。

これじゃ、大嫌いだった親父と同じじゃん。

こう思ったとたん、ホノオの頭の中を思い出が駆ける。

酒が大好きでそれに多額の金を使う父親。それを注意した母親は、殴られる。焔（ホノオ）が母親を守ろうと立ち向かったこともあったが、まだ幼い彼はかなわなかった――。

ホノオは今日、殺意を込めてギャロップとドードリオに攻撃した。それを注意したセナは、殴られ、首を絞められた。そして、言葉の暴力でとどめを刺された――。

比較してみると、自分の方がよほど酷い気がした。

セナの過去の辛さを知った上で、セナにとって一番辛い言葉を平気で浴びせた。

その後のセナの顔なんか見ずに、あっちが謝るまで、気持ちを考えることすらしなかった。

セナの手助けの名目でガイアにやってきたのに、結局セナの心をズタズタに“破壊”したオレは、“魔王”のようだ……。

セナ……。

謝って済むことじゃないってわかってるよ。

でも、ごめんなさい。

言う資格はないってわかっているけど、お願いします。

もう一度オレに、本物の笑顔を見せてください。

目を閉じて、心の中で謝罪の言葉を呟くと、涙が頬を伝うのがわかった。

体を激しく動かし、思い切り怒鳴り、大粒の涙を流したこの1日。

精神的にも疲れがたまり、眠気がホノオを襲う。

セナ、ごめんなさい。悪いのはオレです。ごめんなさい……。

何度も何度も謝りながら、やがてホノオも眠りについた。

第１６話：選んだ“強さ”――その３（前書き）

オレは最低だ。
精神的に弱っているセナに、「お前のせい」だなんてキツい言葉をぶつけちまった。
言葉じゃ許してくれたけど、アイツ、絶対に気にしてる。
あんなこと、言わなきゃよかった。
（語り：ホノオ）

第16話：選んだ“強さ”――その3

ここは、どこだろう？　夢の中……なのかもな。

ふと気がつくと、セナは柔らかな光に包まれた、不思議な空間に立っていた。

「セナさん……」

聞き覚えのある声が聞こえた。穏やかだが、どこか冷めたような声。

すぐに、声の主がセナの目の前に現れた。光が渦巻くような、“仮の姿”――。声の主は、“ポケモン”だった。

「“ポケモン”……」

セナが呆然と呟くと、“ポケモン”は話し始めた。

「ふふふ。今日は大変面白いものを見せて頂きました。人間の本性、というものでしょうか……。顕著に表れていましたね」

「何のことだ？」

セナが問い返すと、“ポケモン”は冷たく話す。

「傑作ですよね。あなたを“親友”などと言っていても、あなたのことなど少しも考えていないのですよ。所詮は自分が大事」

さらに“ポケモン”は非難を続けた。

「ホノオさんだけではありません。あなただって、そうです。人間はみな、そうなのです。だから、争うのです。“あんな事件”を犯すのですよ」

「“あんな事件”？」

セナが問いかけるが、“ポケモン”はそれを冷たくあしらう。

「いいですね、記憶をなくした方はお気楽で。ワタシはあなたに教えるほど人間が好きではありませんので」

「……」

いつも気になるのに掴めないのだ。どうして“ポケモン”は人間を嫌うのか。そして、失った自分の記憶について。

「あなたも、ホノオさんなんて信用しないほうがいいですよ。今日、それがわかったでしょう？」

「……」

再びセナは沈黙する。確かに今日、ホノオに対して心を閉ざしたが、ここで「はい」と答えるのも、“ポケモン”の思うがままのようで、しゃくだった。

「互いにいがみ合い、その傷が癒えぬまま、立場を気にして上辺だけうまく付き合ってゆく、冷たい存在。それが、人間なのです」

そう言い残すと、“ポケモン”はフッと姿を消した。

「いがみ合い……癒えぬまま……上辺だけ……冷たい、存在……」

ポツリポツリと、“ポケモン”の言葉をうつむきながら断片的に復唱するセナ。

特に何も、考えていなかった。

そんな彼の耳に、また違った声が届く。

「セナ」

温かく、優しい声だった。セナが顔をあげると、目の前には救助隊“キズナ”のメンバー、ヒトカゲのヴァイスが立っていた。

「辛そうだね。大丈夫？」

ヴァイスが心配そうにセナの顔を覗き込む。目が合うと、本当に辛く感じてきた。先ほどまでは、何も感じなかったのに……。

「ボクね、セナにお手紙書いてきたんだ。読んでみて！」

そう言ってヴァイスが手渡してくるのは、いつかと同じ、黄緑色の便せん。

そっと受け取り、便せんから手紙を取り出してみた。

だがそこで、セナの手が止まる。折り畳まれた手紙を、開くのをためらった。

ひょっとしたら、この手紙を読むことで、オイラは“弱く”なる

かもしれない。ヴァイスの優しい言葉のせいで、心という障害物が復活してしまうかもしれない。

それでは何も、変えられない。同じことの繰り返し。無意味なことだ。

「ゴメン」

セナはそう呟くと、手紙を読まずにビリビリと引き裂いた。それも、一度ではなく、何度も何度も、細かく……。

「え……？」

戸惑いを隠せぬヴァイスに、セナは無表情で一言を放つ。

「オイラは“強く”なるんだ。こんな手紙なんか、要らない」

その言葉を聞くと、ヴァイスは今にも泣き出しそうな顔をした。そして、その表情のまま、言葉を残さずに消えていった――。

「ヴァイス……」

セナがそう呟いたのは、夢の中ではなかった。夜中に目が覚め、暗い空の下で、夢の内容を思い出しながら呟いたのだ。

夕方は天気が良かったのに、いつの間にか上空には厚い雲が。星や月の輝きをかき消し、さらには冷たい雨まで降らせていた。

雨宿りなどする場所もない、セナとホノオ。

しかし、体を冷やす雨が、セナには心地よく感じた。時間帯が夜中なので、ホノオは眠っている。

ここで、ふとセナの頭を夢の内容がよぎる。“ポケモン”との会話。そして、ヴァイスからの手紙。

セナは何気なくバッグに手を突っ込む。少し前から雨は降っていたらしく、バッグの中もしっとりと濡れていた。

そして、ふやけたヴァイスからの手紙を取り出した。

月明かりもないし、ホノオは寝ているときは尻尾の炎を消している。手紙を読む術がなく、しばらくただ便せんを眺めていた。

「っう……」

視界をにじませるのは雨だろうか、それとも……。よくわからないが、小さく嗚咽が漏れたのは確かだ。

心なんてないほうがいい。何度もそう痛感したはずなのに、何度か実行できたはずなのに、本当は、まだ迷っていた。

傷つきたくないけど、心を失うのは怖い。

もう一度、手紙を眺める。もしこの手紙を開いて読めば、オイラは心を取り戻すが、弱くなる。夢のように引き裂いてしまえば、感情を失う代わりに強くなれる。

そんな気がした。

どちらにしようか迷っていると、突然、姿は見えないが“ポケモン”の声が聞こえる。脳に声が直接響くような、不思議な感覚だった。

「そんな手紙なんか、破ってしまった方がいいですよ、セナさん。他人など、信じるだけ無駄です。あなただって、もう傷つきたくないのでしょう？“強く”、なりたいのでしょう？」

「うわっ！！」

“ポケモン”が言葉を言い終えた直後、急にセナは酷い頭痛に襲われる。とっさに頭を押さえると、その場にうずくまった。

手紙は投げ出され、地面にたまる水に浸った。

「手紙を、裂いてしまいなさい。そうすれば、頭痛から解放されますよ」

“ポケモン”が冷たく囁く声が聞こえた。頭が割れそうなほどの痛みに悶える中でも、鮮明に響くその声。

もはや、従わないことなどできなかった。

「うっ……！」

暗闇に慣れた目が手紙をとらえると、それを握るように掴んで引き寄せ、ためらいもなく引き裂いた。

びしょびしょに濡れた手紙は、音もなく、むなしく裂けてしまった。

そこで本当に、頭痛がおさまった。セナは息を切らせて、自分が引き裂いた手紙を見つめた。

「は……ははは……」

力のない笑い声が、自然と漏れる。これでもう、道は決まった。

オイラは何を悩んでいたんだろう。やっぱり、こっちの道を選ぶんじゃないか。

セナは立ち上がると、ゆっくりと後ろを向く。自分達の姿を隠してくれている岩肌が、彼を迎えた。

グッと、右手を握る。それを軽く岩肌に押し当てた。

そして、なんのためらいもなく思い切り拳を引き、そのまま岩を殴りつけた。

乾いた音が、一瞬、雨の音を打ち消す。

ニヤリと笑った後、セナはその場に力なくうずくまった。

右手を開こうとするが、うまく指は伸びないし、激痛が走る。手からにじんだ赤色は、雨がゆっくりと流してくれ、暗闇に溶けていった。

でも、これでいいんだ。

セナは満足げに笑う。

今の一撃には、全ての“感情”を込めたつもりだった。オイラは、ここに“心”を置いていく。

心が傷つくより、体の怪我の方がはるかに楽だと気がついた。

「ははははは……」

再び力なく笑うと、セナは右手を空に突き上げる。雨粒が負傷し

た拳をコツコツと叩き、拳はズキズキと痛み出した。

妙な開放感を感じて、セナは再び声を出して笑う。その声は雨の音と混じり、本来静かな夜を支配する。

オイラは、強くなれたんだ。

第１６話：選んだ“強さ”――その３（後書き）

３話に渡って書き上げましたが、これでこの第１６話もおしまいです。

なかなか皮肉で残酷な展開ですが、セナとホノオのこれからを見守って頂けたら嬉しいです。

第17話：2人の“好き”（前書き）

ヴァイスからもらった手紙も破いた以上、もう引き返すつもりはない。オイラは感情を無くして生きていく。
きっと、そっちの方が楽だから。
（語り：セナ）

＞i11901―434＜

第17話：2人の“好き”

時は少し戻って、こちらはセナ達の険悪な雰囲気など知る由もないヴァイス達。しかし、彼らとて今日は散々な目に遭ったわけで……。どこか重い雰囲気が漂っている。

エレキブル達“ボルト”との戦いが終わった後、彼らはしばらくその場に呆然と座り込んでいた。

気を張って戦っていたからだろうか、それとも――。

いずれにせよ、夕暮れ時に突如降り始めた雨に行動を――雨宿りを強いられるまで、ろくな会話を交わさなかったのだ。

こうして今現在に至る。

粒は小さいが冷たい雨から逃れるため、大きな木を見つけて雨宿りをしているヴァイス達。

このまま雨が降り続いたならば、今晩はこの木の下で寝ることになるだろう。

ある木の葉がのしかかる水滴の重みに耐えきれなくなる。雨粒に押さえつけられるように少しずつ、少しずつ垂れ下がると、とうとう1粒のしずくを落としてしまった。

直後、ヴァイスの尻尾の炎からジュッと音がして、炎は揺らいだ。雨の音しかしなかった空虚なその場の雰囲気が破られた。

ヴァイスの隣に腰を下ろしていたブレロは、ハスブレロという彼の種族がもつ、頭の上に乗っている大きなハスの葉――カッパの頭上の皿のようなもの――を、そっとヴァイスの炎の上にかざした。

そして、ため息をつき、一言。

「散々だったな、今日は……」

言葉なき同意。

「ゴメンね、みんな。アタイがしっかりしないから、あんなクズ共に――」

「悪いのはメルさんじゃないよ」

メルの言葉をアルルが遮った。

「ボク達の“王者の雷”が、エレキブルをパワーアップさせちゃったんだもん」

「特性は誤算だったな」

ため息をつく、アルルとソプラ。

「でも、エレキブルにダメージを与えられただけ凄いじゃない！」

「別におれっち達、お前達のこと責めてないからさ」

シアン、ブルルが2人を励ます。もちろん発言していないみんなも、考えは同じだった。

ヴァイスは空を見上げる。雨、雨、雨……。星のない夜空は、不機嫌そうに濁っている。

（ねえ、セナ。ホノオ）

心の中で、2人に話しかけてみた。

（2人が心配だよ。すごく強いポケモンに襲われなかった？　“ボルト”はそっちに行ってしまったのかな？）

空は繋がっている。ボクもセナも、同じ空を見ている。それなのに、ボクはセナに気持ちを伝えられない……。

ふとこう思い、ヴァイスはうつむく。雲に覆われた夜空なんて、もう見たくなかった。

星空は透き通り、ボクの気持ちがとけ込んでゆくようだ。星はボクの話を聞いてくれる。

でも、今の空は違うんだ。雲がボクの気持ちを跳ね返し、地面に叩きつけてしまう。

「……ヴァイス？」

気がつくと、シアンがヴァイスの顔をのぞき込んでいた。

「ボーっとしてどうしたのサ？」

シアンがこう言うと、みんなの眼差しがヴァイスに注がれた。

「あ……。あのさ、みんな。聞きたいことがあるんだ」

ヴァイスはぎこちなく話し始めた。

「今日のギャロップさん達の話を聞くと、セナもホノオも、本当に悪者扱いされてるんだなぁ……って思ったんだ。そして、そんな2

人を助けようとするボクらも悪。周りは敵ばかり」

「……」

ヴァイスに話しかける言葉がなく、みんな静かに話を聞く。

「だからさ、ボクらだって、安全ではないんだよ。因縁をつけられて襲われたりするかもしれない。
それでも、セナ達を追う？　みんなは……どう思う？」

「逆にアンタはどうしたいんだい、ヴァイス？」

メルにそう聞かれると、ヴァイスは即座に答えた。

「もちろんボクは、セナとホノオを助けたいよ。ただ、“キズナ”のメンバー以外のみんなまで巻き込むのも悪いかなって。
正直、ここまで深刻な状況だとは思わなくってさ」

ヴァイスの最後の言葉には、皆が同感だった。
弟みたいだから。好きだから。友達になったから……。そのような動機と、自分達の安全を、秤（はかり）に掛けなくてはならない。

「もちろん、アタイは行くね。セナ達を助けたいのはもちろんだけど、戦うのは得意なのさ」

真っ先に決断したのはメル。ヴァイスもこの返事は予測していたので、心強かった。

「アタシも。バトルには自信があるんだ。まあ、セナやクソザルを助けたくない訳じゃないし。……な、アルル」

「う、うん……」

素直さに欠けるソプラ。彼女がアルルに話を振ると、アルルは控えめに返事をする。

端から見れば、“ソプラに言われて返事をするアルル”は、彼女らしいかもしれない。しかし、この時のヴァイスはこれを気にとめた。

アルルには、本当にそんな大変な覚悟があるのだろうか？

「そっか、ありがとう。ブレロとブルルは？」

ひとまずヴァイスは微笑み、ブレロとブルルに話を振った。

「僕達は……」

ブレロが語尾をのばしながらブルルを見ると、しっかりと目が合った。頷き、ブレロが話し始めた。

「僕達は、他のみんなほど強くはない。正直、バトルは不安だよ。でも、それでもヴァイスについて行きたい」

「何だろうな……。ほら、おれっち達は、一応ヴァイスやシアンとはこうして打ち解けられた。でも、さんざん嫌がらせしてたセナはまだなんだよな」

話を聞くみんなの顔が真剣になる。

「セナとホノオとも、普通に話ができたらいいなって思う。だから、協力したい」

本当に、かつては敵対していた彼らはどこへ行ったのだろう。２人の優しい言葉に、ヴァイスの視界が少し涙で潤んだ。

「やったー！　じゃあ、全員ついてきてくれるんだネ！　ヴァイス、良かったネ～♪」

「う、うん！　ブレロとブルルもありがとう。じゃあ、明日からもまたよろしくね」

シアンの歓声で、ヴァイスの頬もゆるむ。一つだけ気になっていることもあったが、とりあえず話を終わらせた。

それからは、シアンはずっとその歓声のテンションのまま。特に雨が嫌いでもない彼が場の雰囲気を明るくし、時が過ぎていった。

やがて眠気に襲われる時間となった。

シアン、ソプラ、ブルル、ブレロ……。１人、また１人と眠りにつき、「早めに寝るんだよ」と言い残してとうとうメルも寝息をたてた。

残されたのは、２人。

「眠れないの？」

ヴァイスが聞くと、アルルの心臓が飛び上がった。

「う、うん」

小さく返事をすると、アルルは恥ずかしそうに目を伏せた。

「ヴァイスさんは……寝ないの？」

ささいな言葉だが、アルルには必死の一言だ。

「えーとね、うん。アルルにちょっと聞きたいことがあって」

このヴァイスの言葉で、アルルの胸はさらに高鳴る。

ヴァイスの“鈍感”さは充分すぎるほど心得ている。それでも……期待をしてしまうアルルがいた。

「あのね、アルル」

真剣なヴァイスの眼差しが向けられる。恥ずかしさがピークに達していたが、精一杯の努力でアルルはヴァイスと目を合わせた。

「アルルは、ボク達と同行することが怖くない？」

「え……？」

アルルは驚いてポカンと口を開いた。見透かされた。

「……うん。ちょっとだけ、怖いかな？」

小さな声で、アルルはさらに続ける。雨の音に消されてしまいそうだった。

「ソプラと一緒に頑張った“王者の雷”が通用しなくて、ちょっと残念だったんだ。あれが、ボクが使える一番強い技だから。

ソプラは1人でも強いけど、ボクは弱いよ。だから、ヴァイスさん達の足を引っ張っちゃいそうで」

ヴァイスと一緒にいたいのだが、迷惑をかけそう。それが心配な彼女だった。

「そっか……」

呟いた後、言葉を探す。

そしてヴァイスは話し出した。

「優しいね、アルル。自分の安全より、ボクらのことを考えて悩んでくれて」

「うん……」

まさかほめられるとは……。夜でよかったと、アルルはつくづく思った。顔の赤さを、誰にも知られないから。

素直にありがとうが言えたらどんなに良いだろう？　2文字が、アルルには限界だった。

「でも、そんなの心配しなくてもいいよ。

ずいぶん前に盗賊団“スライ”と戦ったとき、アルルのおかげでボクは助かった。だから大丈夫だよ！」

「うん……」

また、ありがとうが言えない。自分が無愛想に映っていないか、アルルは不安だった。

「あ、あとさ……」

ヴァイスの照れくさそうな表情は、恥ずかしさでうつむくアルルの目には映らなかった。

「あのバトルの時、ボク、アルルを守るって言ったのに守れなかったよね。ゴメン」

「えっ、えっ……。大丈夫だよ、そんなの」

そんな昔のことを真面目に謝るヴァイスに、少し困惑してしまった。

でもそれが、ボクがヴァイスさんを好きな理由――。

「あのさ。だから、ボク、今度はちゃんとアルルを守りたいな。これから危ないこともあるかもしれないから」

「うん……」

しばしの沈黙。

その後で、ヴァイスはしんみりと語りだした。

「ボクはいつも、誰かに守られてばっかりだったんだ。セナなんて、それで一度大怪我しちゃってさ……。あのホノオやシアンだって、ボクを気遣ってくれる。嬉しいけど、なんだか情けないよ」

「……」

“情けなくなんかない”などと言えればいいのに。ついに、“うん”も言えなくなってしまった。

「だから、ボクも誰かを守ってみたいんだ。それと……」

ヴァイスはここで覚悟をして、雲に覆われた空に顔を向けた。

「セナを見ていて思ったんだけど、優しい気持ちで誰かを大切にする姿って、すごくかっこいいなって。ボクも、そんなセナみたいな“強さ”が欲しいんだ」

今の空は、星空ほど寛容ではない。しかし、言葉がゆっくりと雲に染み渡るように、空にとけていった。

少しの沈黙。その後に、ヴァイスは照れて苦笑い。

「えへへ……なんか恥ずかしいことばっかり言っちゃった」

（ボクも……言ってみようかなぁ。“恥ずかしいこと”）

アルルがこう思ったとたん、心臓がずしりと重くなり、苦しくなるほど激しく暴れ始めた。

（言えたら……いいのにな）

胸の音が、雨の音をも遮っている。そんな気がした。

今言葉を発しても、自分の声がかき消されそうで不安。ヴァイスに何を伝えたいのか、自分でもわからなくなりそうで不安。

勇気が出ないのを、数々の不安のせいにしているアルルがいた。

「ボクもそろそろ寝ようかなぁ」

「あっ……」

ヴァイスが呟いた言葉。その後でアルルは、引きとめるような、切ない声を上げてしまった。

「うん？　どうしたの、アルル？」

微笑みながら、ヴァイスはアルルに目を向ける。逃げられない。アルルもヴァイスの目をじっと見る。表情を、じっと見る。

しばしの間、見つめ合った。ヴァイスは少し不思議そうな顔をしていたのだが、ニコニコと友好的な笑顔を見せていた。

――答えをもらわなくても、自分の気持ちを伝えなくても、答えはわかってしまった。アルルは目をそらす。

（やっぱりヴァイスさんは、まだ“好き”の2つの意味を知らないんだ）

友達を“好き”と思う気持ち。ヴァイスの“強さ”の定義や「守る」という発言から、この強さはうかがえた。

異性を“好き”と思う気持ち――。見つめ合っても恥じもしない彼を見て、こちらが欠けていることは理解できた。

「大丈夫、アルル？　ボーっとして」

ヴァイスがアルルの顔を覗き込んだ瞬間、気がついた。――恥ずかしいけど、嬉しい。

しかし、もしヴァイスが自分のことを異性として“好き”なら、こんな行動をするのだろうか？　ヴァイスが異性を意識するようになったら、これまでのような“誰にでも優しい”彼は見られるのだ

ろうか？

――ボクの答えも、結局まだ定まっていないのかもな。

こんな結論を導き出すと、妙に納得するアルルだった。

“好き”の２つ目の意味を知って、それでも純粋さを残すヴァイス。彼がそうなるまで、ボクは待っているんだ。

相手が２つ目の“好き”を知らないからこそ、そしてそれが分かったからこそ、気持ちがまっすぐ伝えられる。

おかしな勇気がアルルに芽生えた。さっきまでは言えなかったような言葉も、今なら言える。

「ヴァイスさん。これからも、ボクが“好き”な、優しいヴァイスさんでいてね」

雨の音にも心臓の音にも負けず、しっかりと言葉が届いたようだ。

ヴァイスが嬉しそうに頷いたのが、確かな証拠。

第17話：2人の“好き”（後書き）

今日でこの“絆の冒険記”は一周年を迎えました！
受験勉強と並行するので遅くなるかとは思いますが、二年目も頑張ります！

そして、今日更新する“キズナの救助隊レポート”では一周年企画をやっております。よろしければ、ご参加くださいませ。

第１８話：変わり果てた友情――その１（前書き）

実はボクは、ヴァイスさん達の旅に同行することに不安を感じていたんだ。弱いボクは、みんなに迷惑かけちゃいそうで。
でも、ヴァイスさんが励ましてくれて、嬉しかったな。

あ、あとね。ヴァイスさんって、まだ恋愛感情がないみたい。だから、言っちゃった。好きって。
今はまだ、本当の意味を知られなくてもいいよ。
（語り：アルル）

第18話：変わり果てた友情――その1

朝が来た。
ホノオが恐れた朝が――。

天気は相変わらずの雨。大きな粒がホノオを叩いていた。
明るくなった空気と、やかましく自己主張する雨粒たち。――これらに叩き起こされて、ホノオの1日は始まったのだった。

「ん……」

眠そうに目をこするホノオ。セナと会話を交わすのがなんとも気まずい気がしたが、覚悟を決めた。

「あ。おはよ、ホノオ」

隣でそんな声がして、ホノオはドキリとする。
もう、起きていたのか。

「あ、セナ……。おはよ」

ぎこちなく挨拶を返すホノオ。目を合わせるのが怖かったので、セナの首から下に目がいった。
ふと、セナの右手に目をやってみると……。赤い雫こそ雨で流されたものの、痛々しい傷が目に入った。

「そっ、その怪我は――」
「大丈夫だよ。大したことないから」

慌てて問おうとするホノオだが、セナの言葉でそれ以上の詮索はできなくなった。言葉は優しいはずなのに、どこか無機質に、ピシャリと言い放たれた気がした。

自分を大切にしろ！　普段なら、このように怒鳴れる自信があった。でも、今は……。

ホノオはうつむき、額に手を当てた。雨に打たれたせいだろうか、少し熱っぽい気がした。

「大丈夫か？　熱ある？」

今度はあちらが問う番だ。

「いや。大丈夫だよ」

強がりなんかではなかった。今のセナに弱みを見せて頼るのが、なぜかいけない気がした。

「そっか。無理するなよ」

“綺麗な”セナの笑顔が向けられる。でもそこには、かつてのような少年らしい純粋さはなかった。無理をして笑っている時のような複雑さもなかった。

そんなやり取りを交わした後、２人は一晩身を隠してくれていた岩に別れを告げて、東へと――“迷宮の洞窟”へと歩き始めた。

昨日から歩いているこの“渓流の谷”は、ほとんど岩や土でできたような土地だ。草花はかろうじて生えているものの、木はほとんどない。

木のない山は雨に弱く、崩れやすいという。“渓流の谷”とて例外でなく、地名には“谷”とついているものの、山と同じく高さのある土地。

早めに抜けよう。セナのその言葉により、2人は早足で歩いた。

最高高度の地点にたどり着いた。ぱっくりと大胆に割れた岩の間を流れているのは、今にも溢れそうなほどに暴れる濁流だった。

「うわ……」

ホノオが後ずさりすると、セナが右前の方を指差した。

「ほら、あっちに橋がある。渡ろう」

ホノオの先を歩くセナ。その後ろ姿を見て、ホノオは思った。

いつもはきれいな川が、一時的な雨による増水で濁っている。いつもは何だかんだで仲のよいオレ達も、一度のすれ違いで気まずくなった。

熱っぽさからボーっとしていたからなのかもしれない。ホノオは茶色く染まった川に親近感を抱いたりしながら、セナに続いて木製の橋を渡ってゆくのだった。

元々あまり生活には条件がよくないこの“渓流の谷”。それも、

気が滅入るような雨が降り、住人の岩タイプのポケモン達でさえも引っ込んでいる。
環境とは対照的な乾いた雰囲気を放ちつつ、無人の地域を2人はただ歩き続けた――。

橋を渡った後は、ひたすら下り坂。よってセナ達は、昼時には“渓流の谷”を抜け、岩だらけのこの土地とは対照的な、“広葉樹の森”を歩いていた。大きな葉をつけた木々が程よい間隔を開けて立っていて、地面には雑草や小さな花が。

そして不思議なことに、この森に入ってからすぐに、昨夜から降り続いていた雨もやんだ。

「ずいぶんと局所的な雨だな。これも災害の影響か」

妙に客観的な視点に立ち、セナが分析する。それは冷静さ故か、それとも無関心さ故なのか……。
ホノオはただ「うん」と返事をするだけだった。

「その災害を起こしているのはどこの誰だ?」

ふと、背後からこんな声がした。
セナは「来たか……」と言いたげに、冷静に振り返り、ホノオはびくりと飛び上がってから振り返った。

見ると、そこには4人組の救助隊がいた。
先ほどの言葉は、体毛の色は灰色と黒。口から牙をのぞかせてい

る犬のような容姿のポケモン、“ポチエナ”のものだ。
２人目のポケモンは、白がメインのリスのような容姿で、尻尾には水色のラインがある。“パチリス”だ。
３人目は、水色の丸い体に綿のような白い翼を持つ、わたどりポケモン“チルット”。
４人目のポケモンは、丸くて青い体だが、お腹は白い。ネズミのような耳と先端にボールみたいな球体がついた尻尾を持つ“マリル”だ。
４人とも小ぶりでわりと可愛らしく、迫力には欠けている。しかし彼らの表情からは、他の救助隊に負けないような、セナ達に対する敵意が伺えた。

「お前達、救助隊か？　オイラ達を消そうとするつもりか？」

「当たり前！　アンタ達にガイアは破壊させないんだから！」

セナの言葉に、パチリスが強気に言い返した。他の３人も同意するように頷き、じりじりとセナとホノオに詰め寄った。

「……そうか」

こう呟くと、セナは右手に力を込めた。すぐに、鋭く冷たく尖るつららが出現する。右手の怪我がうずいたが、彼は気にもとめなかった。

「やるぞ、ホノオ」

「お、おう」

状況に合わぬ、抑揚のないセナの声。戸惑いつつもホノオは返事

をし、左手に炎を宿した。

「覚悟！　“スパーク”！」

パチリスが、電気をまとってセナに突進してくる。電気技が苦手なセナに、弾丸のように迫った。

そんなパチリスをあざ笑うような表情で見たセナは、“高速スピン”を発動する。甲羅にこもった自分に触れたパチリスを、強い回転で弾き飛ばした。

「きゃっ！」

パチリスが飛ばされてきたのを見て、他の3人は当然ムキになる。

「パチリスによくも！　“乱れづき”！」

チルットはセナを何度も自らのくちばしで突こうとする。さすがに“高速スピン”を連続使用すると目が回ってしまうため、セナはつららを剣のように振り、くちばしを何度もはじいた。

あちらのほうが、やはり動きは身軽だ。つららの重みと右手の痛みが疲労となりセナに襲いかかる。

ここで“冷凍パンチ”によるつららを解除することにしたセナ。

「チャンス」とばかりにセナにくちばしを向けたチルットだが……。

「“水の波動”」

セナが発射したリングの形をした水は空気をうまく掻き分け、ものすごい速さでチルットを叩きつけた。悲鳴をあげたチルットは、先ほどのパチリスの近くまで吹っ飛ばされた。

一方のホノオは、マリルの“バブル光線”――弱点の水タイプ技――を、必死に“火の粉”で打ち消していた。
空気を強引に押しのけて迫る強固な泡の数々に、小さな火の玉をぶつけては相殺。苦手な技を食らうまいと必死なホノオには、周りをみる余裕などなかった。

「すきあり！　“噛みつく”！」

チャンスを見つけたポチエナは、“バブル光線”の相殺で必死のホノオに牙をむいた。

「わっ！？」

ポチエナに注意がいくと、マリルの攻撃を忘れてしまった。２人の攻撃をまともに受けてしまいそうな最悪な状況にホノオが陥った、その時だった。

（ホノオを守らなきゃ）

チルットを遠ざけて少し前からホノオの方を見ていたセナは、早く行動をとることができた。
とっさに駆け出すと、ホノオとポチエナの間に割って入る。そしてホノオを“バブル光線”の攻撃範囲外に押し倒した。

直後、ポチエナの鋭い牙がセナの左肩に食い込む。そして“バブル光線”はセナに降り注ぎ、衝撃を与えた。

右手の傷口に泡が押し当てられ、爆発するように勢いよくはじけた。

「あっ……！！」

悲痛な叫びを漏らし、セナの足元がふらつく。ちょうど“バブル光線”もやんだ頃、チャンスとばかりにポチエナはセナを押し倒した。

ポチエナはあごに力を入れ、首を左右に振りながらセナの肩に牙の痕を残す。赤色が、じわりと滲み出す。

「セナ……！」

自らをかばって悲惨な目に遭うセナを見て、ホノオは震えた声で叫ぶ。もちろんすぐに救済に向かった。

「“炎の渦”！」

ホノオはポチエナの背後から攻撃を仕掛け、炎でポチエナを縛り上げた。

「うっ……！？」

息が詰まったポチエナは、セナから離れる。その様子を見ると、ホノオはセナに駆け寄った。

「だっ、大丈夫かセ、ナ……」

思わず、言葉が詰まってしまった。セナがポチエナを睨みつける、その凍りついた眼差しを見たからだ。

第１８話：変わり果てた友情――その２（前書き）

やっぱり、オレとセナはどこかギクシャクした関係になっちまった。雨降りの“渓流の谷”は抜けたけど、気分は晴れないや。

そんな時、オレ達は救助隊に襲われる。セナはオレを守ってくれて、傷ついちまった。

そして……セナが敵に向けた、凍りついた眼差しが、怖い。

（語り：ホノオ）

第18話：変わり果てた友情――その2

「お、おい。セナ……？」

後ずさりしながら、ホノオはセナに震えた声で話しかける。小さく一歩。重々しくまた一歩足を引きずる。

当のセナは“炎の渦”に締め付けられたポチエナに軽蔑的な笑みを向けると、先ほど“バブル光線”で自分を攻撃したマリルの方を向いた。

「くそっ、まだ戦えるのか！」

悔しげに言うと、マリルは次の攻撃を始めた。

「“捨て身タックル”！」

セナにあまり効果のない水タイプの技を使うのをやめ、マリルは至近距離から猛突進を始める。まん丸で小さい体に見合わず、大きなパワーを秘めた攻撃だった。

十分にセナに接近すると、全体重をぶつけるべく地面を蹴り、セナめがけて突っ込んだ。

しかし、状況をよく見ていたセナは、マリルを引きつけてからほんの少し右に動くことで無駄なく攻撃をかわす。そしてひらりと身をひるがえした――右手からつららを生み出しながら。

「わっと……！」

攻撃をかわされたマリルはよろけ、まん丸の体が転げてしまわぬ

ように、短い手足をばたつかせてバランスをとっている。
マリルが今にも転びそうなその時、セナは右手を大きく振りかぶった。そして体重を右手に乗せて容赦なく繰り出した彼のパンチによりマリルの左足に鋭利なつららの衝撃が襲いかかる。

「ぐあぁっ……！！」

うめき声の混じったような悲痛な叫び声をあげると、ついにマリルはバランスを崩して倒れ込む。片足を負傷した彼には、コロンと丸い体を支えるのは不可能のようだった。何度も両腕に力を入れていたが、体を起こせないでいた。

そんなマリルを見下ろすセナの表情を見ると、ホノオは凍りつく。罪悪感もなにもない、淡泊な表情だった。逆に自分が敵に攻撃する気が失せてしまいそうな、そんなカオだった。

ホノオは怯み、セナはまだマリルの方を向いている、そんな時。

「“スピードスター”！」

パチリスの声が聞こえるとともに、セナとホノオに無数の星形の光線が迫る。弾丸のような勢いのそれらは、避けるスキを与えずに2人をとらえた。

「うあっ！！」

思わず顔をゆがめ、セナとホノオは衝撃に耐える。何度も痛みに襲われ、気が遠くなった。

パチリスの攻撃が終わると、2人はふらふらと立つ。今日は体調

が優れないホノオには体を支える気力がなく、今にも倒れそうだった。

「形勢逆転だね！」

得意げにそう言ったのはチルットだ。――一度セナによって吹っ飛ばされたパチリスとチルットだが、形勢を整えて反撃してきたようだ。

「覚悟！」

2人で声を揃えて言うと、パチリスは体に電撃をまとい、チルットは翼を広げて、共にセナに突っ込んできた。

「セナ！」

ホノオは思わず叫ぶ。すでに倒れそうな自分よりも厄介なセナが優先的に狙われたのだとわかり、彼をまた罪悪感が襲った。

チルットとパチリスにはかなりのスピード差があり、チルットは空気をかき分けてパチリスのずっと前を行く。そんな、ぐんぐん近づくチルットを見据えると、セナは今日頻出のつららを右手から生み出した。その“狙い”はただ一つ。セナは一歩も足を動かさなかった。

一瞬、白い綿毛が飛び散る。

チルットの右の翼がとらえたのはセナ自身ではなく、彼が即座に突き出したつららの頂点。生暖かい赤色がチルットの純白の翼に染み出した。

「うっ……うああっ！！」

その色の重大さを理解した途端、翼が引き裂かれそうな痛みを感じたチルット。片方の翼のみで宙に浮けるはずもなく、セナが手を下ろした途端に落下し、転げ回って悶え苦しんだ。

「ルット！！」

パチリスはやられたチルットの名を叫び、攻撃動作を解除して駆けつけた。

「ふっ」

セナが漏らした小さな声を聞いて、ホノオは“ある疑い”を持った。

もしかして、セナは……！

ホノオの胸がざわめく。パチリスに向かって歩いてゆくセナをじっと見ながら、願った。

どうか、“偶然”であってほしい。“思い違い”で、あってほしい……。

「きゃっ！」

すぐ目の前に立っていたセナに気がつくと、パチリスは怯えたように小さく悲鳴を上げた。セナの右手には、恐怖のつららが……。

震えながら後ずさるパチリスにペースをあわせ、セナは一歩一歩踏み出す。そして、右手を引いたセナを見て、パチリスは硬直する。鋭いつらら、鋭い表情が、パチリスを威圧して押さえつけたのだ。

（やめろ！！）

それを見ていたホノオは、心の中で叫ぶ。すると、昨日の出来事がホノオの脳裏をよぎる。敵に殺意を抱いたホノオを止めたセナの気持ちが、今更ながらよく理解できた。

（ごめん、セナ。頼むからやめてくれ！）

きつく目を閉じ、ホノオは願う。彼の想いを引き裂いたのは、直後に聞こえたパチリスの悲鳴だった――。

（まさか……！）

ホノオが目を開くと、心臓に釘が打たれたような衝撃が襲いかかった。先端が赤く色づくつららを手からぶら下げたセナが見下ろしているのは、“右足”を負傷したパチリス。そのそばにいるのは、片方の“翼”に赤い模様ができたチルット。先ほどのマリルは“左足”を……。

無情にも、ホノオが悟った“疑い”は“確信”へと変わってしまった。

「セナ――」

「狙っただろ？」

ホノオの言葉を遮ったのは、“炎の渦”から解放されたポチエナだ。灰色の体毛が所々焦げ、黒色になっている。

セナは発言者を見る。

「マルとパチの足に、ルットの翼……。お前、俺達が移動に使う場所を狙ってる」

ポチエナの責めるような言葉を聞き、セナの口角が上がる。

「ははは、ご名答。だってそこをぶっ壊せば、もうお前達は追ってこれないだろ？」

こう言った後、セナは近くにいたパチリスの足をぐりぐりと踏みつけ、チルットの赤い方の翼を数回蹴りつけた。

「きゃあぁっ！」
「ぐぅっ……！」

2人の悲鳴がポチエナの怒りに火をつけた。

「お前っ……！　よくそんな性格で“キズナ”のリーダーなんかやってたな!?　お前なんかに救助隊をやる資格はない!!」

そう言い放つと、ポチエナはセナに“突進”を仕掛ける。――セナに近づくことが危ないのは、よくわかっていた。しかし、直接攻撃しか持たぬ彼には、これが最善の、精一杯の攻撃なのだった。

（違う……。セナはそんな性格じゃなかった）

ポチエナの言葉が、ホノオに重くのしかかった。

（オレのせいで、セナはこうなったんだよ。セナは悪くなかった。立派なリーダーだった。なのに……）

呆然と考えながら、ホノオはポチエナの悲鳴を聞く。さらにポチエナの右の前足と左の後ろ足に打撃を加えた後、セナはマリルに追い討ちをかけた。

「変わり果てたよ、本当に……」

ホノオは寂しげに呟くと、酷いめまいに襲われる。とうとう両足で体を支えきれなくなり、ふらりと前に倒れた後に気を失った。

ようやく攻撃をやめ、セナは傷ついたポチエナ達４人を見下ろした。そして、呟く。

「オイラは今の性格が気に入ってんだよ」

その言葉を、ホノオが聞くことはなかった。

＞ｉ３０２２５―４３４＜

第１９話：悲劇に向かって――その１（前書き）

思った通り、感情を無くすと強くなれるみたいだな。
敵の命は奪わずに、移動手段を徹底的に封じる。こんな素晴らしい案だって思いついた。
オイラは、今のオイラの性格が好きだね。
（語り：セナ）

第19話：悲劇に向かって――その1

「ん……」

ポチエナ達の救助隊と戦って気を失ったホノオが、静かに目を覚ました。

「あ、起きたか」

セナは笑みを浮かべてそう言うと、ホノオに体力を回復する“オレンの実”を差し出した。

「お前が怪我したまんま倒れたから、安全そうなとこまで運んできたんだ。もう大丈夫。まだ体痛いだろうし、それ食えよ」

「……う、うん。ありがと」

ポチエナ達に向けていた悪魔のカオはどこへやら……。すっかり優しげな微笑みを浮かべているセナが、逆に怖かった。

びくびくと返事をすると、体の傷を癒すべく、ホノオは申しわけなさそうにオレンの実をかじる。体の傷は癒えていったが、微熱は下がってくれなかった。

食べ終わると、ため息をつき、額に手を当てる。

「やっぱり体調良くないんだろ。大丈夫か？」

ホノオを気遣うセナの言葉。しかしホノオは、セナのその言葉を素直に受け取れなかった。――無理もない。

「……お前さ」

ホノオは地面を見つめながら、セナに小さな声で話しかける。

「オレのちょっとの熱なんか気にするのに、どうしてさっきは“あんなこと”を？　その……。おかしくないか？」

勇気を出して聞いたのはいいが、セナの返答が怖い。頭が痛み出すのを感じながら、ホノオは思った。

昨日のセナも、こんな気持ちだったのかな？

「何がおかしいって？」

笑い声を含むセナの口調。ホノオは、自分が嘲笑されているような心地がした。

「だって、オイラ達はたくさんの敵に命を狙われているんだぜ？死なない為には、機会があったら敵を減らさなきゃ。……“敵の命を奪う”以外の方法でな」

最後の言葉を聞くと、ホノオの心は罪悪感に切りつけられた。やっぱり自分には、セナの行動に口出しする資格などないのだ。

「……ごめん」

呟くと共に、ホノオは思い出す。確かに昨日、自分は“敵の命を奪おうと”してしまった。カッとなって、とにかく目の前の敵を消し去りたかった。

セナの行動よりも、幾分も重い罪だった。

「謝るなんて、“らしく”ないな。だいたい今、謝る必要ないじゃん」

――謝らないことがオレ“らしい”のだろうか？　セナが思うオレは、何があっても悪びれないような奴なのだろうか？

何気ない言葉の裏に、とげがある。鮮明な苦味がある。

セナの言葉を悪くとらえてしまうホノオだったが、仕方がなかった。セナの“気持ち”を読みとれなかったから……。

「……行こうか」

ホノオが小さく呟いた言葉を、セナは聞き取れなかったようだ。首を傾げ、ホノオの顔をじっと見ている。

ため息をつくと、ホノオはセナの顔を見て、彼に声を届けた。

「もう、行こう。オレの体調は大丈夫だからさ。もう休まなくてもいいや」

「え？　そうか？　なんか顔色悪いけど」

セナの“形だけの”気遣いが、だんだん気に障るようになってきた。

セナは、本当はオレの心配などしていない。上辺だけでも付き合いを円滑にするための、“道具としての”思いやりなのだ。オレを守ろうとするのだって、きっと……。

心でこんなことを愚痴ってみると、どんどん気持ちが沈むホノオ。しかし、元はといえば自分が悪いのであって――。この思考の繰り返しだった。

「いいって。この程度の熱なんか気にすんのは情けないし、本当に大丈夫だからさ」

「そっか、わかった」

隠すつもりだったのに、ホノオの言葉には苛立ちの感情がわずかににじみ出てしまった。返ってくるのは抑揚のないセナの返事。

「じゃあ、行こう」

セナはそう言うと、今まで自分達の身を隠してくれていた長い雑草をかき分け、茂みの外の様子をうかがう。救助隊のポケモンがいないとわかると振り返り、ホノオを見て頷いた。そして2人は、また東へと歩き始める。

どれくらい、無言の時が経過したのだろうか。ひたすら草を踏みしめて歩く音だけが、静かに、明るい森に響いた。

このまま救助隊に見つからなければ、どれだけいいだろうか。気まずいことには変わりないだろうが、誰も傷つかなくて済むんだ。

こんなホノオの想いが叶うはずもなく――。

「あっ、セナとホノオだ！」

……あぁ、再び、繰り返される。

背後から聞こえる救助隊のポケモンの声。振り返るセナの冷淡な眼差し。それらを見たホノオは、心を蝕む恐怖におののく。

壊れてゆくセナを、そして救助隊のポケモン達の悲劇を、もう見

たくなかった。

時は戻って、この日の朝。

昨夜しとしとと降った雨が雑草を柔らかく濡らしていたが、“聖なる森”は朝陽に包まれていた。

昨日の“ボルト”の件が気がかりで仕方がなかったヴァイス達は、この朝はソプラも例外でなく早く目覚める。そしてまずは、セナ達の目撃情報があった“渓流の谷”へと急ぐのであった。

「でもさぁ」

森を歩きながらブルルは話し出す。

――彼が肩から下げている黄色いバッグは、ソプラとアルルが旅立ちの際にガルーラおばちゃんからもらったものだ。ブレロとブルルが交代でこのアイテムの入ったバッグを持つことになっており、今日はブルルの番なのだ。

「とりあえず“渓流の谷”までは目撃情報があるからいいよ。でも、そのあとセナ達はどこへ行ったんだろうな?」

みんなが「うーん」と声を出してうなる。ヴァイスは自らのバッグから地図を取り出した。

「そうだねぇ……。“渓流の谷”は、“みどりの草原”、“広葉樹の森”、“どんぐり山”の3つの土地に繋がっているんだ。セナ達

は、どこへ行ったのかな？」

再びうなる一同。

――至る所に“道”がある地球と違い、ガイアは自然のままの土地も多い惑星だ。旅路とはしばしば道なき道であり、いくらでも多様化できるのだ。

「まあまあ、とりあえず早く“渓流の谷”に行っちゃおうヨ！」

考えるのに飽きたシアンが言うと、

「そうだね。もしかしたら、そこに目撃者がいるかもしれない」

と、メル。

「それに、セナ達にもしものことがある前に、ボクらが助けに行かなきゃね！」

“ボルト”を思い浮かべ、何かにせき立てられるようにヴァイスが言った。

「うん。行こう」

ブレロの言葉で、皆が走り出した。

“渓流の谷”に近づくにつれて、気がかりなことがあった。彼らが向かう先の上空付近には、真っ黒な雲が。

「天気が悪そうだな」

ソプラの言葉に表情が曇るが、それでも足を止めない一同だった。

悪い予感は、当たった。

“聖なる森”の木々に別れを告げ、地面の雑草も岩と岩の隙間から申し訳程度に生えている土地――“渓流の谷”に足を踏み入れた途端に、彼らは雨粒に身を叩かれたのだ。

「うわあ！」

炎タイプのヒトカゲであるヴァイスは思わず顔をしかめる。彼は雨を嫌うのだ。

彼の尻尾にともる、命の象徴である炎が雨粒と衝突し、蒸気が音を立てて立ち上る。――もっともそれは、雨に消されるほど柔な炎ではないのだが。

「これはまたすごい雨だね」

空に向かってため息をつき、メルが言う。

「大丈夫？　ヴァイスさん」

アルルがヴァイスの炎の少し上に手をかざし、雨粒から守る。

その姿に、もちろん驚くソプラとシアン。アルルは自らの内気さを知っている彼らのその反応を予測していたため、ソプラとシアンを一瞥（いちべつ）してクスリと笑った。今度は不思議そうな顔をして、ソプラとシアンが目を合わせる。

「ありがとう、アルル。でもいいよ。ちょっと熱いでしょ？」

「大丈夫。暖かいよ」

そんな、いい雰囲気のヴァイスとアルルに、ブレロは少し申し訳なさそうに話しかけた。

「いい雰囲気のところ悪いんだけどさ。僕の頭の蓮の葉でヴァイスの炎を守るよ。アルルも、そのままじゃ歩きづらいだろうし……」

ブレロが言葉を切ると、ブルルがアルルに近寄り、そっと耳打ちした。

「ほら、ヴァイスの後ろよりも横にいた方が話がしやすいだろ？」

ハッとアルルが顔を上げると、ブレロとブルルの優しい笑顔が目に入る。……やっぱり、ちょっと恥ずかしい。

「あ、ありがとう」

アルルが手をおろすのと同時に、ブレロの頭の蓮の葉がヴァイスの炎と雨粒を隔てた。

おおむね幸せな、彼らの今の状況。しかしこの日、彼らは悲劇に遭遇してしまうのである。

第１９話：悲劇に向かって――その２（前書き）

セナの残酷な行動、敵に対する冷たい視線……。そんなことを思い出すと、アイツがオレに向ける笑顔さえ恐ろしくなる。

少し前まで、友達だったのにな。……いや、それもオレの思い込みだったのかな……。

（語り：ホノオ）

第19話：悲劇に向かって――その2

どんよりとした空、勢いの弱まらぬ雨の音。灰色の空気に、明るい鼻歌の音色が色を付けた。

「いい曲だね、それ」

ヴァイスが後ろを振り返り、歌い手のブレロを見て微笑む。

「シアンも好き～♪　なんだかワクワクするネ」

「ありがとう」

シアンにも誉められ、少し恥ずかしそうに礼を言うブレロだった。

「ブレロは雨の日大好きなんだよ。機嫌がよくなって、いっつも鼻歌歌ってるもん」

長いつきあいのブルルがそう説明すると、ブレロは、

「だって、僕の特性は“雨受け皿”だもん。雨に当たると体調が良くなるから、快適なんだ」

さらに続けた。

「でも、雨の日ってジメジメしているから、キライだって言うポケモンが多いよな」

「シアンは雨がだーいすきだヨ！　晴れの日も曇りの日も、みーん

な好き！」

シアンがブレロにそういうと、

「アタイも雨が好きだね。水ポケだからって言うのもあるけど、ほら、雨の音って、なかなかいいじゃないか」

と、メル。その言葉に、

「へー！　メルさんって意外と風流心あるなぁ」

歯に衣着せぬブルルの失言。

「あら、悪いかい？」

メルが、底知れぬ恐ろしさを含んだ微笑を湛(たた)えて問うと、

「とっ、とんでもないです！」

と、ブルルは飛び上がった。その姿に、皆は大笑い。

「アタシも雨は好きだぜ。だって、アタシの必殺“雷”が、絶対に命中するだろ？　フフフ……」

こちらは、身震いするほど恐ろしく笑うソプラ。

「ソプラ、怖い。怖いよ」

シアンが怯えてヴァイスに抱きつく中、アルルはソプラに控えめに指摘した。

「でもサ、やっぱりヴァイスは雨が嫌いだよネ」

シアンがヴァイスに話を振る。

「えーと、うん。雨って寂しいし、雷は怖いから、“ひとりぼっちの雨”は大嫌い。でも」

一度言葉を区切り、皆の顔を見回した。

「“みんながいる雨”って嫌いじゃないかも。なんだか、暖かいから」

「ウン、そっか」

シアンがそう言葉を返したきり、会話が途切れてしまった。雨が岩肌を叩く音だけが、聞こえる。

「あっ、ごめんね、変なこと言って。あのさ――」

「そうだな」

ヴァイスの言葉を遮ったのはブレロだ。

「そういう暖かさが、世界を敵に回してるセナとホノオにも、早く伝わればいいけどな」

慣れぬことを言ってみると、なんだか恥ずかしい。ブレロは苦笑いを浮かべ、

「なんてね。ま、要するに、セナとホノオを早く見つけようぜって

ことさ」

そうして一同は足を早めた。ゴツゴツとした岩が寝転がっている斜面を、ひたすら登る。

目の前の光景に、一同は言葉を失った。

ようやく“渓流の谷”の半分以上を歩いた彼らを待ち受けていたのは、大蛇のごとく荒れ狂う、茶色く濁った濁流。セナ達がここを通ったときよりも遥かに勢いの増したそれは、架かっていた木製の橋を木っ端みじんに砕いてしまっていた。

（ひどい増水。おそらく雨がひどいのは、この“渓流の谷”だけじゃなく、この川の流域の、もっと上流の地域もなんだろうけど……。にしても、異常な雨だね）

言葉には出さず、メルはこう悟ると息をのんだ。

「ど、どうする？　橋もないし、渡れないよね」

アルルが言うと、

「水タイプの僕でも、簡単に流されちゃうよ」

とブルル。まさにカッパの川流れである。

「シアンも怖いヨー」

情けない声を上げ、シアンは怯える。頼みのメルも、険しい表情で「うーん」と唸っていた。

そんな中、ヴァイスは妙な胸騒ぎを覚えた。

（なんだろう。何か、とても嫌な感じがするよ……。前にも、こんな気持ちを抱いた気が――）

彼がそう考えていた、まさにその時。

悪夢が幕を開けた。

地盤の緩いこの土地で、大地が暴れるかのような、酷い地震が起こったのだ。

「うわっ！」

悲鳴を上げ、みんながその場にしゃがみこむ。突然の事態に、すっかりパニックに陥っていた。

そんな彼らに容赦なく追い討ちをかけるのは――彼らが今いるところより少し上流の地点から聞こえた爆発音。

とっさにそちらを見ると、息が詰まった。心臓が飛び上がった。

崩れた土砂が濁流と混ざり、川の幅を無視して彼らに迫ってくる。

――そんな状況を見た次の瞬間には、ヴァイス達7人の姿は押し流され、その場から消え失せていた。

さっき自分が感じた危機感。あれは、救助隊の昇格試験の時の、

邪魔者の気配への危機感に似ていたんだ。身を切り裂く緊張感。あの感じに――。

ヴァイスがそれに気がついたのは、岩の破片が牙をむく濁流に噛みつかれる、ほんの少しだけ前だった。

この日の夜のことだ。

相変わらずの間柄のセナとホノオは、“広葉樹の森”に長々と生い茂った雑草に身を隠し、ここで1日を終えようとしていた。

今日は多くの救助隊と遭遇し、あまり大きくないはずのこの森を抜けることはできなかった。それでも明日には、この森を抜けて目的地の“迷宮の洞窟”につけるだろう。

セナのこの判断により、今のこの状況がある。2人は、地面の雑草の上に腰を下ろしていた。

「はぁ……」

ホノオは心身の疲労をため息に乗せて吐き出す。そして目をつむったが、今日の出来事がフラッシュバックし、すぐにハッと目を開けた。

足や翼を痛めて悶える追っ手のポケモン達。そして、残酷な赤いしぶきに染まった雑草、セナのつらら……。

思い出すだけで目眩(めまい)がして、ホノオは額に手を当てた。体がカッカと熱い。やはり風邪を引いたようだ。

「おい、大丈夫か？　やっぱり今日、無理したろ？」

セナの言葉に対して、ホノオはまた嫌悪感を抱く。自分が悪いと分かっているが、しかし、自分の昨日の言葉は、こんなにもセナを変えるほどのものだっただろうか？

こんな疑問も強く渦巻き、ホノオはまた刺のある態度をとってしまうのであった。

「いらないよ、そんな演技。心配も何もしてねえくせに」

ツンとそっぽを向き、口をとがらせた。

セナは一言も話さず、その場は沈黙に支配される。やはり居心地が悪くなり、ホノオはいったん心を落ち着かせてからセナに幾分かやんわりと話しかけた。

「あのさ。確かに自分達の安全が大事だったら、敵を潰すのが一番だぜ。でもさ、躊躇（ためら）いもなくそんなことするのって、やっぱり間違ってるんじゃない？

それにお前……悲しく、ないのか？」

「“悲しい”って何？」

帰ってきた言葉にホノオは愕然（がくぜん）とする。

「“悲しい”ことが、“間違っている”ことなの？」

生気のない笑みを浮かべ、さらにセナは続ける。

「なあ、“間違っている”ことって、どんなこと？」

責め立てるようなセナの視線が、ホノオに突き刺さった。

「それは……」

“悲しい”という感情も、“間違っている”こと――すなわち善悪の判断も、感覚として備わるものだ。セナが納得のいくようにこれらを言葉で表す自信など、ホノオにはなかった。

「はっ。バカみてえ。自分のわからないことを、よく他人に言えるな？」

嘲笑（ちょうしょう）じみた表情を浮かべ、セナは言い放つ。

「……ごめん」

手は尽くしたつもりだ。でも、もう自分にはセナを元に戻すことなど不可能のようだ。

怖い、悔しい、“悲しい”……。ホノオは堅く拳を握り、溢れそうな感情を押さえつけた。

脳裏に浮かぶのは、人間の頃からの付き合いだった、セナの――そして瀬那（セナ）の、様々な表情だった。

二度と見られないのだろうか？　よく通る声ではつらつと指示を出し、仲間に優しく微笑んで見せた。おどけるのは大得意で、彼の周りは笑いが絶えなかった。頑固者で腹を立てることもあったが、悲しみに震え泣き出すこともあった。――そんなセナの姿は、もう見ることができないのだろうか？

こう考えてみると、永遠（とわ）に打ち破れぬ壁が2人を隔ててしまったような心地になるホノオだった。

一方セナは、答えの出せない問いを頭の中でぐるぐると回していた。

善と悪の違いは？　悲しいと嬉しいの違いは？　敵と味方の違いは？　……今やセナは、あらゆるものを判断する心を失っていた。

善人だって悪人だって、このガイアで生きているんだから同じ。悲しくても嬉しくても、そんなの生き死にには関係ないのだから。敵も味方も、所詮は他人。……こんな考え方が、セナの中に固められてゆくのだった。

しまいには、彼らにとって最も大切な――“彼らのただ一つの目的であること”すら、意味をなさない気がしてしまったのだ。

オイラハ、ナニモワカラナイ。

長い長い夜が明け、２人はまた動き出す。

第１９話：悲劇に向かって――その２（後書き）

うん……なかなか更新するのに覚悟がいる内容でした（汗）。

第２０話：運命の敵――その１（前書き）

雨降りの渓流の谷で、ボク達の足は止まった。目の前に、ものすごい濁流が現れたんだもの。

今にも溢れそうなそれを、もっと警戒しておくべきだったよ。

突然、大きな爆発音が響いた。あっという間に、濁流はボクらを飲み込んだ……。

（語り：ヴァイス）

第２０話：運命の敵――その１

「ガハハハ！　やっと掴んだぞ！」

豪快に、下品に笑い飛ばす１人のポケモンの後に２人のポケモンが続き、彼らは“広葉樹の森”の中を、雑草をかき分けながら足早に進んでいた。

彼らの種族は、エレキブル、レントラー、サンダース。――そう。彼らはセナ達の命を狙い、スイクンやホウオウから褒美をもらうことが目的の救助隊、“ボルト”のメンバーなのだ。

２日前に、ギャロップとドードリオから、「セナとホノオを“渓流の谷”で見かけた」という情報を手にした“ボルト”の３人。早速“渓流の谷”に向かった彼らだが、困ったことになった。この地を後にしたセナとホノオが、どちらへ向かったのかわからなかったのだ。

しかし、情報がないからと言って黙っていては物事は進まない。彼らは“渓流の谷”を後にして南に進み、“どんぐり山”で捜索を開始した。

だが、有力な情報も得られぬまま時は過ぎ、彼らは“広葉樹の森”へと向かった。これが彼らに幸運をもたらしたのだ。

この森の入り口で一夜を明かした彼らは、今日の早朝、地面に倒れて苦しんでいる４人組の救助隊に出会った。そのメンバーは、ポチエナ、パチリス、チルット、マリル。“ボルト”が彼らにセナ達のことを尋ねると、彼らがセナ達に遭遇したことを知る。そして森を進むうちに出会う、何人もの傷ついたポケモン達がセナにやられたと言い……。

こうして彼らはとうとうセナ達の居場所をつかみ、現在に至るの

であった。

「手間かけやがって、まったく」

レントラーが面倒くさそうに漏らす。

「さて、早いとこ奴らをしとめるぞ」

サンダースが言うと、“ボルト”の３人は駆け出した。

木々の間隔も広くなってきた、“広葉樹の森”の東端でのこと。とうとう目的地の“迷宮の洞窟”のすぐ近くまで来たセナとホノオだが、彼らを襲ったのは悪夢。昨日セナが怪我を負わせた救助隊員のポケモン達の被害が噂となって広まり、１組、２組、３組……複数の救助隊が、セナ達を倒しに来たのだ。１０人は軽く越えている敵の数。

「これだけの数が相手だ。お前達には勝ち目はない」

追っ手のポケモン達のうちの１人の、コドラという種族のポケモンが言う。コドラは、黒色の体が銀色に光る鋼鉄の鎧（よろい）に覆われた、四つんばいのポケモンだ。

ここで、セナは何か考えがあるかのような、不敵な笑みを浮かべた。今まで使ったことのない技だが、きっと大丈夫。“あれ”なら、敵を一掃できる。

軽く息を吸うと、セナは行動にでた。

「“波乗り”」

セナが両手を振り上げると同時に、彼が立っているより少し前方の地面から水が吹き出した。そして、セナが両手を敵の方向に振り下ろすと、柱のようだった水は操られ、波のごとく追っ手の救助隊員達に襲いかかった。

攻撃は大成功。全ての敵に技が降りかかったのを見て、セナとホノオは敵に背を向けて逃げようとした。

しかし……。

「逃がさないぞ！」

セナの攻撃の直後にこんな声が聞こえ、すぐに緑色のツルがセナとホノオに向かって伸びてきた。そして、ツル――ポケモンの技“ツルのムチ”は、セナとホノオを捉えた。

「へん！　捕まえた！」

声の――そしてツルの主は、背中に赤いつぼみを背負った水色の体のポケモン、フシギソウである。四つんばいの体には、藍色の斑模様がある。

草タイプの彼には、セナの水タイプの技によるダメージは皆無のようだ。

フシギソウが足を踏ん張り、ツルに力を込める。強く締め付けられたセナとホノオは、苦しげな声を上げた。

「よし、“葉っぱカッター”！」

身動きのとれぬ2人に、フシギソウは無数の鋭利な葉を飛ばす。

「うあっ……！」

炎タイプのホノオの傷は浅かったが、水タイプで、草の技が苦手なセナは深い傷を負った。切り傷がつけられる痛みは激しく、思わず悲鳴を上げた。

“葉っぱカッター”が終わるとツルが緩み、2人は地面に崩れる。

「おい。大丈夫かセナ！？」

すぐに立ち上がったホノオがセナに声をかける。すると、答えるように、セナもふらふらと立ち上がった。

敵を見ると、セナの“波乗り”で衝撃を受けた彼らも、ほとんど体勢を整えていた。唯一、岩タイプであるコドラは辛そうに呼吸を荒げていた。

「次は僕だ！　“潮水”！」

頭に一本の角を持つ、純白のアシカの姿のポケモン――ジュゴンはこう言うと、口から塩分を含む水を思い切り発射した。

「“守る”！」

迫る水流を、セナが阻止する。淡く光るシールドに、水流が衝突した。

しかしあちらも攻撃をやめようとしない。しばらく“守る”を維持し続けたセナだが、ダメージのせいもあり、ついに限界が来た。“潮水”が、セナとホノオの体を強く打つ。

「ぐあぁっ！！」

水の技が苦手なホノオはもちろん、セナも苦痛に顔をゆがめる。――“潮水”は、ダメージを負ったポケモンには残酷な技。深い傷口から塩分がしみて、激痛を与えるのだ。

「これでようやく、ガイアに平和が訪れるんだ。今までさんざん荒らしやがって」

手痛いダメージを負い、絶体絶命のセナとホノオに、アーボックというポケモンが言う。アーボックは、コブラのように膨れた腹部に鬼のような顔の模様がついている毒蛇ポケモンだ。

彼が言葉を言い終えると、追っ手のポケモン達それぞれが体に力を込め始めた。――みな一斉に、エネルギー弾を放つつもりなのだろう。徐々に彼らの体は光に包まれていった。

セナは両手を広げ、ホノオの前に立つ。技の“守る”はすでに過剰使用のために使えなくなっていたが、やはりホノオを“守る”つもりなのだった。

「やめろよセナ！　もういいってば！」

悲鳴に近いホノオの声が響いた。２人で一緒の方がマシ。そんな考えが、ホノオの頭に浮かんだ。

――辺りに爆発音が響く。

体が宙に投げ出されたのは、セナとホノオ――ではなく、追っ手のポケモン達だった。

「えっ？」

鋭く光る電撃が、目の前の敵を一斉に弾き飛ばした。そんな光景を見て、ホノオは戸惑いの声を漏らす。

電撃。もしかしてソプラか？　そんな彼の期待は、最悪な形で敗れ去った。

ガサリと、茂みが揺れる。

「危ねえ危ねえ。あやうく手柄を取られるところだったぜ」

ニヤリと笑みを浮かべながら、そして不愉快な言葉を発しながら、姿を現したのは、エレキブル、レントラー、サンダース。とうとう救助隊“ボルト”がセナとホノオを見つけたのだった。

「おう、お前たち。辛いところを、悪いな。死期を遅らせちまって」

「今すぐに、俺達が“楽にしてやる”からよ」

レントラー、サンダースが言うと、３人は体に電気をため始めた。“充電”をすることで、弱って動きの遅いセナとホノオを、一発でしとめるつもりなのだ。

彼らの口元を見ると、笑みを浮かべていることがわかり、ホノオは底知れぬ恐怖に震える。もう、終わりだ……。心が折れ、諦めか

け、ホノオはうつむき地面にしゃがみこんだ。

一方のセナは、フッと笑う。こんな時まで異常に冷静な自分がおかしくて仕方がなかった。

セナは“ボルト”の3人を見る。彼らはしっかりと、セナとホノオを見据えていた。

「バーカ」

セナは小さく呟くと、口を大きく開けて目をこすり、眠そうに“あくび”を繰り出した。

「しまった……！」

戦い慣れしている“ボルト”の3人は、すぐに悟る。技の“あくび”を使われた、と。それが災いして、つい攻撃動作を解除してしまったのだった。

「くそ……眠、い……」

体から力が抜け、“ボルト”の3人はふらりと倒れ込む。

「ホノオ」

セナはホノオに呼びかけ、しゃがみ込んでいる彼の肩をたたく。ホノオはびくりと反応して、セナを振り返った。

「もう大丈夫だ。奴らは寝てる。さ、早く行くぞ」

そう言って、手をさしのべてくれた。

「あ、うん。ありがと……」

もうだめだと諦めかけた命が救われたのだ、これほど嬉しいことはない。ない、はずなのに……。素直に喜べぬ今のホノオは、抑揚なく呟いて、セナの手を借り立ち上がる。

そして2人は、体の痛みに耐えながら、回復よりも、まずはその場を離れることを第一として、懸命に東へと歩き出した。

努力が報われた思いだった。目的の“迷宮の洞窟”は、すぐに彼らの目の前に現れたのだ。

盛り上がった大地があんぐりと口を開けている。深い、深い迷いの道へと彼らを引き寄せようとしているようだ。――洞窟の入り口は、そんな雰囲気を醸し出していた。

「頑張ろ、ホノオ。休憩はもうちょい後だ」

喘ぎながらセナが言うと、ホノオは無言で頷く。そして、洞窟へと足を踏み入れた。

第２０話：運命の敵――その１（後書き）

うーん、あまりにも“ボルト”が悪いキャラになってしまいました。

エレキブル、レントラー、サンダース好きの読者様、申し訳ないですｍ（＿＿）ｍ

作者はこの三種族、嫌いじゃない――というか、むしろ好きです。ただ、彼らのかっこよさ、パワフルさがこの役柄に合っていたというか……とにかくごめんなさい（汗）。

“ボルト”のエレキブル、レントラー、サンダースはこの小説では悪役ですが、ちゃんとガイアには優しいエレキブル等も生息していますので……。

あくまでも一例ととらえ、どうかこの三種族を嫌いにならないで下さいね。

第２０話：運命の敵――その２（前書き）

とうとう多くの敵に囲まれ、大ピンチになったオレ達。そんな時、多くの救助隊ポケモン達が一斉に倒された。

が、倒してくれた奴らも、結局は敵。手柄を立てたかっただけのようだな。

とりあえず、セナのおかげでこいつらから逃げられたけど、かなり手ごわい相手だな……。

（語り：ホノオ）

第２０話：運命の敵――その２

チリンチリンと、“広葉樹の森”に鈴の音が響く。高く透き通る、心が洗われるような美しい音は、ポケモンの技である“癒しの鈴”による音だった。

「ん……？」

その音を聞くと、セナの技で眠らされていた“ボルト”の３人は目を覚ます。――この音にはポケモンの技による状態異常を治癒する効果があり、それ故彼らの眠り状態が解除されたのだ。

「……って、ください」

“ボルト”の電撃にやられた救助隊のポケモン達の中から、こんな弱々しい声が聞こえた。

「行って、ください」

今度ははっきりと周りに届く声量だった。声の主は、体は黄色で耳は紫。猫のような容姿のポケモン、エネコロロだった。

“癒しの鈴”の使用主でもある彼女は、ダメージで起こすことができない体で、必死に“ボルト”に呼びかける。

「あなた達の、力なら、きっとセナと、ホノオを、倒せる……。お願い。私達の分まで、頑張って……」

自分達を攻撃したような相手に、期待を込めて協力する――。考えにくいことではあるが、今のガイアでは至って自然な発想なのだ

った。“何にもまして、優先すべきこと”があるからだ。

エネコロロが気を失うのを見ると、“ボルト”の3人は礼も言わずに立ちあがる。そして、

「奴らはどこへ向かった?」

欲望に満ちたその言葉は、エレキブルのものだった。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

弾む呼吸が、薄暗い洞窟に響く。

セナ達は、洞窟に入ってから少し歩いた。その名に“迷宮”という言葉を含んでいるこの洞窟だが、まだ一切の通路の複雑化がなく、一本道。それでも、入り口の光が小さくなったことに安心し、彼らは傷だらけの体を休めた。

体からにじみ出る液体は赤色。すぐにでも怪我を治そうと、セナは青いバッグに手を突っ込んだ。

もう、ヴァイスの手紙など入っていない、冷たくもの寂しい空間。セナはそこから、傷を癒す“オレンの実”を取り出した。

「ほら……。怪我治そうぜ」

そう言ってオレンを手渡すセナに、

「ああ。ありがとう」

抑揚なく返事をするホノオ。

手渡す瞬間、わずかに2人の手が触れあう。なんとも気まずい気持ちになり、セナは申し訳無さそうに自分の手を素早く引っ込めた。そしてまた、寒色――冷めた青色――のバッグから、寒色の木の実“オレンの実”を取り出す。

ホノオはセナがオレンを取り出すのをじっと待った。セナを待たずに先に食べるのが、犯すことのできぬ大罪のように――大げさな表現だが本当に――思えたのだ。

セナはオレンをうつろな目で眺め、ため息をつく。なぜかつられて、ホノオもため息をついた、その時だった。

ザッ……と、洞窟の入り口の地面が蹴られたような、擦れた音がした。「まさか」と思って入り口の方向を見ると……。逆光により鮮やかな洞窟外と対比された、黒い3つの影が揺れていた。

「ガハハハ！　見つけたぞ、小僧ども！」

間違いない。3人の追っ手はさっきの奴ら。セナとホノオがそう悟ったきっかけとなったそのセリフは、荒々しくて品がない。

3つの影は、セナとホノオにじわじわと恐怖を与えるように、ゆっくりと近寄ってきた。

「うわっ……」

2人は小さく声を漏らし、逃げるために立ち上がろうと、体に力を込める。しかし、一度緊張感を抜いたその体には、この状態の変化に対応することは難しいようで……。うまく力が入らなかった。

「あれで逃げたつもりか？　おチビちゃん達」

馬鹿にするようなレントラーの言葉に、セナとホノオは首を傾げた。

そしてサンダースがククク……と怪しく笑い、

「真っ赤な血の道しるべをありがとう」

その言葉に、セナとホノオはしまった、と思った。

現場から遠ざかることに思考が支配され、傷に耐えながらここまで必死に歩いてきた。それが逆効果になるとは――皮肉な結果だった。

洞窟の壁を借りて、セナとホノオはようやく立ち上がることができた。しかし、表情は険しい。

「せっかくだから、自己紹介でもするよ」

と、レントラー。ついに“ボルト”の3人がセナ達の目の前まで来た。セナの呼吸が激しい故に“あくび”が使えそうにないことに気がつくと、邪魔の入らないこの状況下で、余裕の表情だ。

「俺達はゴールドランクの救助隊、“ボルト”。ガイアのため、そして“自分達の”ためにもお前達を倒しに来た、正義の救助隊さ」

“正義の”。その言葉を強調してエレキブルが言うと、レントラーとサンダースの口角が不気味につり上がった。

“自分達のため”という言葉の真意が気がかりだったが、それをセナ達が問う時間までは、さすがに与えてくれないようだった。

「おうチビ。さっきはよくも眠らせてくれたな」

レントラーに睨まれると、セナの体はビクリと硬直した。先ほどまでの冷静さを押さえつけてしまうような、鋭いまなざし。

「もう俺達からは逃げられないぜぇ。覚悟！」

エレキブルが言うと、“ボルト”の3人は体に力を込め、強力な電撃を放った。

「“守る”！」

セナは反射的に“守る”を繰り出し、輝くシールドで自身とホノオの身を守った。

「お前“も”そうくるか……。だが、シールドが壊れるのも時間の問題だ」

と、2日前の戦いでのメルを思い出しながら言うレントラー。どうやら、セナの“守る”の効果が切れるまで攻撃を続けるつもりのようだ。

絶体絶命のセナ達だが、セナは再び自分におかしな冷静さが戻りつつあるのを感じた。電撃に臆するホノオをよそに、セナは作戦を決行した。

足に力を込めると、セナは思い切り跳ね上がった。そして、すばやく甲羅に身を隠し、“高速スピン”を繰り出す。

その様子をポカンと口を開けて見るホノオだが、何か考えがあるのだということは容易にわかり、安堵（あんど）する。

鋭く甲羅を回転させてすぐに、セナは“守る”を解除。そしてそれと同時に、“高速スピン”をしながら“水鉄砲”を繰り出し、辺りに水をまき散らした。セナの体力が少ないおかげか、特性“激流”が働いて水の量が多い。

刹那、敵の電撃がシールドを突破する――が、電気はまっすぐにセナ達に向かわず、宙に舞う水しぶきにも分散して襲いかかった。

「あれ……？」

予想外の刺激の少なさに、ホノオは驚く。しかし一瞬の後に理由がわかり、セナの作戦に感心するのだった。

「ちっ……。“また”その戦法か」

不愉快そうに舌打ちし、レントラーが言う。やや長めの放電時間に疲れたのか、少し息を切らしていた。

「はぁ、はぁ……。“波乗り”」

傷ついた体での、連続攻撃。顔をしかめ、息を切らしながら、セナはこの日初めて成功させた大技を繰り出した。

地面から激流が吹き出し、“ボルト”の3人の体を飲み込む。そして、勢いよく洞窟の外へと押し流してしまった。

「よし、今のうちに……逃げるぞ」

セナの言葉に、ホノオが頷く。これで安心、とは言えない相手なのは承知であった。

セナとホノオは怪我の治癒のために、先ほど食べ損ねた“オレンの実”を一口かじる。深い傷はほとんど治らないし、昨日から続くホノオの体調不良も相変わらず。しかし、軽く走ることは可能になった。

ここで、オレンを右手で握りしめながら、回復しつつ足を進める方法をとる。また一口オレンをかじり、駆け足で洞窟を進んだ。

まだ傷はほとんど癒えていない。2人が“オレンの実”を3度かじった、その時だった。

背後に気配を感じたその瞬間、セナは右肩を掴まれた。

「！」

ハッと振り返ると、そこにはやはり、いた。しつこいほどに脳裏に焼き付く不気味な笑みの3人が。執拗にセナとホノオを狙う、“ボルト”の3人が。

――セナの肩を掴むエレキブルの体が、淡い黄色の光に包まれている。これは、特性“電気エンジン”。どうやらエレキブルは、レントラーとサンダースから電気の力を受け、気配を察知する十分な時間も与えずにセナ達に接近したのだ。少しだけ遅れて、レントラーとサンダースが追いついてきた。

とっさにセナはエレキブルの手を払おうとするが、強い握力に逆らえなかった。水技で抵抗しようとセナが小さく息を吸ったその瞬間……。

「“１０万ボルト”」

エレキブルが右手から強力な電撃を発し、セナの体を這わせた。

「ぐあぁっ……！！」

苦手な電気技――しかも高威力――を受け、セナは言葉にならぬ悲鳴をあげた。

「セナ！」

すぐそばでそれを見るホノオ。状況のせいか、体調不良のせいか……ひどい動悸（どうき）がする。

ここしばらくはまともな表情を見せなかったセナの顔が、苦痛で歪んでいる。――違う。オレが見たいのは、こんな表情のセナじゃない。

決意し、ホノオはセナを助ける行動に出た。

左足に燃え盛る炎を宿し、思い切り地面を蹴る。そして、体重を左足に集中させて、エレキブルを蹴りつけた。

「ぐっ……！」

ホノオの技“ブレイズキック”がエレキブルの頬を突き飛ばすと、エレキブルはうめき声を上げてセナから手を離した。同時に、放電中のエレキブルに触れたホノオも電気の刺激を感じて顔を歪めた。

解放されたセナは、その場にひざをつけてしゃがみこみ、激しい呼吸を繰り返した。

「このっ……！」

エレキブル、そしてレントラーとサンダースが反撃しようと放電

準備をしたが、

「“火炎放射”！」

何かに突き動かされたように、ホノオはすぐに“ボルト”に攻撃を仕掛けた。限界など、とうに越していた。不快な頭痛を感じていた。それすらも忘れさせるような、何かに――。

「逃げるぞ！」

“ボルト”がよろめいている隙を見て、セナがホノオに声をかけて走り出す。

――しかし。

限界を、感じていた。

こちらはボロボロだが、あちらが技の一発や二発で屈しないのは明らかだったから。

それでも逃げる道を選んだのは……それしかする事がなかったからなのかもしれない。

「あのクソガキども……」

体力に余裕があるとはいえ、何度も逃走を試みるセナとホノオに対して憤慨し、エレキブルは舌打ちして呟く。レントラー、サンダースも苛立ちで心が煮えたぎり、興奮で息を荒げていた。

3人は、“とどめ”の“充電”を始める。

一方のセナとホノオは、ふらふらと頼りない足取りで、それでも必死に逃げる。なるべく敵から遠ざかるために――。

「うぁっ……！」

1人の足がもつれ、前のめりに倒れる。

「ホノオ！」

セナが振り返ると、呼吸を荒げたホノオが、苦しげに横たわっている。体調も極めて悪いのだろう。真っ赤に頬を染め、高熱にうなされていた。

「フフフ。ちょうどいいぜ……。今のうちにしとめるとするか」

サンダースが言うと、“充電”の済んだ“ボルト”が、前方の倒れたホノオを見てニヤリと笑う。

今度は決して逃げられぬよう、1人ずつしとめるつもりなのだ。

サンダースの言葉を聞くと、ホノオは苦しそうな表情のまま、一瞬、ふっと笑う。

そういうことなら、好都合。死ぬのは――死ぬべき者は、オレなんだ。

その直後だった。

「まずはお前が死ね！」

エレキブルの言葉とともに、強力な電力を圧縮した、細く、鋭く、眩しい“死の光線”が放たれ――

そしてそれは、1人の少年の体を貫いたのだった。

第２０話：運命の敵――その２（後書き）

お知らせです。
スケジュールがちょいと厳しいのと、余計なことは言えないシリアス展開のため、しばらくの間は頂いた感想への返信は少々簡潔にさせていただきますね。
ご了承下さい。

第２１話：破壊の焔（前書き）

一度は逃げられたが、やっとセナとホノオを追い詰めた。ボロボロの体で必死に抵抗してくるのは腹立たしいが……無駄だ。
そしてとうとう、俺達は獲物を仕留めたぞ！　これで報酬は俺達のものだ！
（語り：ボルトのエレキブル）

第２１話：破壊の焔

電撃が１人の少年の身を引きちぎるように、獰猛（どうもう）に襲いかかった。

耳をつんざく霹靂（へきれき）。

もう１人の少年の目は、衝撃で見開かれている。

執拗（しつよう）に少年を噛みちぎり、蝕む電流は、少年が地に崩れるとともに食べ尽くした獲物に飽き、消えていった。

「あ……あ……！」

おぞましい光景に、心と体が凍りつく。声にならぬ声を上げて、“死の光線”から免れた少年は、体を起こし、けだるい体を無理やり動かして、ボロボロに傷ついた少年の元へと向かった。

「セ……セナ……」

やっとの思いでたどり着き、声を絞り出した少年――ホノオは、自分をかばった少年――セナの名を呼び、そっと彼の体に触れた。まだセナに残る電気が、ホノオを威嚇するようにパチリと音を立てた。

――先ほどホノオが狙われた時、セナは思ったのだ。

もう、楽になりたい。命なんか、欲しい奴にくれてやる。

そうして、損傷した体が信じられない速さで動き、引き寄せられ

るように電撃を受けたのだった――。

「おい、セナ……」

焼け焦げて、潤いの失せたセナの肌を見ながら、ホノオは呼びかける。セナはかろうじて息はしているものの、答える体力などなさそうだった。

「ガハハハ！　ついにしとめたぞ！　報酬は俺らのものだ！」

エレキブルが下品な大声で笑いながら、セナとホノオに近寄ってくる。

「報、酬……？」

ホノオは訳が分からず、エレキブルの言葉を復唱する。

「ああ、報酬。お前らを殺したら、スイクンやホウオウからいいもんが貰えるんだよ」

と、レントラー。

「しかし、そいつも馬鹿な奴だ。自ら進んで俺達の金になるとは……ククク」

セナを蔑み、サンダースが言う。

モウ、ワケガワカラナイ。

「報酬……。セナは、お前達の金になるのか？　オレらの命は、お前達の利益のために……？」

ホノオが乾ききった声でポツリポツリと言う。

「まあ、そんなところだ。もっとも、お前達はガイアにいらない存在だからな。俺達の利益はみんなの利益に――」

「ふざけんな」

レントラーの言葉を遮り、威圧的な低い声でホノオが言う。

ふつふつと沸き上がる憎しみが、心と体に満ちてゆく――。

憎い。
憎い。
キエテシマエ。

「安心しろ。すぐにお前も、お友達に会えるからよ」

サンダースの言葉で再び“充電”を始めた“ボルト”の3人だが、彼らを怯ませる出来事が起こった。

セナの青いバッグの中から、不気味な血の色を連想させる、深紅に染まった“ホーリークリスタ”――かつてセナがスイクンから授かった、勇者の証の護身アイテム――が、ふわりと漂う。

憎しみに共鳴するようにホノオに引き寄せられたそれは、ホノオの目の前に浮かんだ。

「……」

何気なく、ホノオは水晶に手を伸ばし、そっと手をふれる。すると――水晶からホノオへと、血塗られた光が乗り移るのだった。

「な、なんだ……？」

と、エレキブル。不気味な光景に、つい呆然とする“ボルト”だった。

光をホノオに移した水晶は、コトリと音を立てて地面に落ちた。

「……ね……」

低く、ボソボソとした声で、ホノオが呟く。

「あ？」

エレキブルが問う声に、

「しね……死ね！！」

こう怒鳴るホノオの姿に、“ボルト”の3人は戦慄（せんりつ）を覚えた。

真っ赤な破壊のオーラを身にまとい、瞳はどす黒い血の色の光に支配されている。そして、鬼のような憤怒の形相を浮かべた顔からは、ホノオの面影が感じられなかった。つい先ほどまでの体の傷も、元々なかったものであるかのように、消え去っていた。

第六感がざわめき、顔が強張る。

「なっ、何のつもりだ……？」

虚勢を張ろうと絞り出したエレキブルの声も、もはやかすれていた。

「“破壊の焔（ホノオ）”」

ホノオの声が重く響く。

ホノオがスッと左手を“ボルト”の3人に向けると――その小さな手のひらから、轟音とともに火柱が噴き出した。

エレキブル達“ボルト”の3人がそれを見たのは、ほんの一瞬。地獄の業火の熱を感じ“られた”のもまた、ほんの一瞬。

ひどい熱だった。魂が追い出された“ボルト”の3人の体から、爆発でも起こしたかのように、灼熱の湯気や水蒸気が弾けたのだから。

「ハハハハハハ！！」

狂気の高笑いの後に、ホノオはさらに左手に力を込める。

ひどい熱だった。白い煙は灰色になり、やがて黒色と化し、生き物は完全なるモノへと、変わり果ててしまったのだから――。

ピタリと、ホノオの攻撃が止む。ホノオは左手を下ろすと、目の前の光景を傍観した。

もくもくと立ち込める煙。それが徐々に晴れるが、前を見てもなにもない。

――否。目を凝らすと、地面には輝きの失せた黒色。所々に、砕

けた白色の破片が混じっている。
黄色や青の体毛に、真っ赤な体液。それが、モノクローム――“こうなった”のだ。

「え……」

徐々にわかり始めた。自分は“傍観者”ではないと。

「嘘……だろ？」

そしてわかった。自分が“当事者”なのだと。

頭と心臓と足と……。あらゆる部位が、重い。
エレキブルとレントラーとサンダースと……。幾多の罪が、重い。

小さく震えながら、大きく戦慄しながら、ホノオは小さく呟いた。

“破壊の、ホノオ”。

第２１話：破壊の焔（後書き）

「えっ？」と思った方は、前話のラストを見てみて下さい。

――そしてそれは、１人の“少年”の体を貫いたのだった。――

ええ、“ホノオが”攻撃を受けたとは、一切記述していないのです。

……嫌な奴でごめんなさいね（＾―＾；）

しかしまあ……ホノオもやってしまいました（汗）。

第２２話：よみがえる心、滅びゆく体（前書き）

オレをかばったセナが、瀕死の重傷を負った。ここでボルトのクズ共は、オレ達に目的を明かした。……オレとセナを殺したらもらえる報酬が奴らの目的。正義感なんて、ない。

ぶっ殺してやる。

そう思ったら、オレは“破壊の焔”って技を発動し……本当に、ボルトの奴らを……

（語り：ホノオ）

第２２話：よみがえる心、滅びゆく体

暗い、暗い空間。目を凝らして前を見てみても、ひたすらに黒。
――そんな空間に、セナは立ち尽くしていた。別に怖くはない。むしろ、この空間に親しみを感じていた。
おそらくこれは夢なのだ。誰から教えられたわけでもなく、セナがおぼろげにこう悟った、その時だった。

「セナ……」

セナの背後から、可愛らしい少年の、ほんの少し遠慮がちな声が聞こえたのだ。
面倒くさそうにセナが振り返ると、そこにいたのは寂しげな表情のヴァイス。光もないこの空間の中に、彼とセナの姿だけはクッキリと浮かんでいた。

セナはため息をつき、ヴァイスから目をそらした。ヴァイスの説教なんて聞きたくなかった。

「ねえ、セナ」

ヴァイスが静かに話し始める。――うるさい。

「本当に、心をなくしたままでいいの？　ボクは嫌だよ……」

顔は見ていなくても、表情のわかる声。――うるさい。

「悩み事があるなら、ボクが聞くから。また、いつもみたいな優しいセナに戻って――」

「うるさい！」

うっとうしいこの存在を、目の前から消し去りたかった。セナは、“水のはどう”を放ち、ヴァイスにぶつける。輪の形の水が、勢いよくヴァイスの体に当たった。

「うあっ！」

夢の中と言えど、水が苦手なヴァイスは悲鳴を上げて倒れ込んだ。――いい気味だ。

セナはくるりとヴァイスに背を向け、スタスタとその場を去ろうとした。

「ま、待ってよ！」

なかなかのダメージを負ったはずのヴァイスだが、気力で立ち上がる。そして、セナの後ろ姿をギュッと抱きしめた。

「や、やめっ……」

抵抗しようとした。ヴァイスを振り払おうとした。……でも、ヴァイスの優しい、そして大きなぬくもりに、力を奪われるような――そんな心地がして、セナは足を止めてしまった。

「セナがいなかったら、今のボクはいないんだ！　ボクの心を強くしてくれたキミの心がなくなるのは、嫌だよ……」

「……うるせえよ。オイラの立場なんて……オイラがこうなった理由なんて、知らないくせに」

ヴァイスの言葉に、セナはいらだつように言葉を返した。

「その理由、ボクに教えてくれる？」

ほんの少し考えた後、セナは、

「嫌だ。どうせお前にゃ、オイラの考えなんか理解できないだろうよ。所詮は他人事なんだから」

冷たく言葉を返した。

「そんな……。そんなことないよ！　他人事だなんて思わない！　キミがボクをどう思っても、セナはボクの、大切な友達なんだよ！」

ヴァイスの温かな涙が、セナの右肩に落ちた。その瞬間だった。セナの中を、幾多の思い出が駆けめぐり始めた。

“小さな森”でヴァイスと出会い、地震のせいで洞窟に迷い込み、イシツブテ達からキャタピードルを救い出し……。そしてあの日、ヴァイスと救助隊“キズナ”を結成したのだった。

頼れるものが一切なかったこのガイアで、ヴァイスの存在にとても惹かれたのを覚えている。

ブレロやブルルの邪魔が入りながらも、おおむね順調な救助隊生活だった。しかしそんな中で、セナはおかしな夢のせいで眠れず、疲れ果て……。セナの異変に気がつき、手をさしのべてくれたのは、ヴァイスだった。

ヴァイスに心を許した瞬間の心地よさが、少し恋しくなった。

ホノオを探す旅先で、メルと出会った、あの日。ヴァイスの過去を知った。

悲しくて、切なくて……だけど、少しだけ嬉しかった。オイラは、ヴァイスにとって大切な存在なんだ。そう確かめられたから。

スイクンとの死闘では、大切なヴァイスを命を懸けて守った。しかし、それが原因で、ヴァイスと喧嘩をして……。

互いを大切に思っているのに、どうしてすれ違うのだろう？　悩み、苦しんだのも、今ではよい思い出。結局、仲直りでヴァイスとの仲は深まったのだから。

ホノオ、シアンと出会ってからは、さらに愉快な救助隊生活が始まった。４人での初めての仕事は、盗賊団“スライ”の逮捕。

“スライ”のリーダー、ハッサムには、力を尽くしても勝てなかった。悔しくて、情けなくて、自己嫌悪に陥った。

でも、ヴァイスもホノオもシアンも、こんなオイラを認めてくれて……涙が止まらなかった。

“キズナ”の初めての昇格試験。謎の邪魔が入って、困難だらけだった。

ヴァイスの父――レッドさんのことをホノオとシアンに初めて打ち明けたら、２人とも快くレッドさん達の捜索に同意してくれたっけ。

あの時は、自分のことのように嬉しかった。

せっかくヴァイスの父探しを始めたのに、この日は悪夢に襲われた。スイクンに、オイラとホノオ――すなわち人間は、消されそうになった。

この日の夜だったな。ヴァイス達に迷惑かけないように、独りで

みんなの元を去ったんだ。ホノオがついてきてくれて、オイラの存在を認めてくれて……嬉しかった。

ヴァイスの手紙を読んだとき、凄く、寂しくなったな。

ホノオと共に、何だかんだで上手く逃亡生活を続けていた。自分達がいつまで笑っていられるか……。先の見えぬ困難に弱気になるオイラを、ホノオが元気づけてくれた。

オイラ達なら大丈夫。そう信じられた。信じていたのに……。

ホノオと意見が食い違った。敵の理不尽な主張に怒ったホノオは敵を殺そうとして、オイラが止めた。でも、オイラが攻撃されて……。

そこから、崩壊が始まったんだ……。

――色々な出来事を、セナは鮮明に思い出した。たくさん笑って、たくさん泣いた。――常に、思い出は感情を、心を伴っていたのだ。

ヴァイスの暖かさが、それを思い出させてくれた気がした。

「……ホノオと、喧嘩した」

セナは抑揚なく、ポツリと話し始める。ヴァイスが求めた、“理由”についての話だった。

「ホノオに言われたことが、凄く悲しくて、怖くて……。敵だらけのこの世界で、ホノオまでオイラを認めてくれないのかなって思うと、居場所を見失って……」

「うん」

ヴァイスは相づちをうちながらセナの話を聞く。

「それで、“心”が……“感情”がなければ、辛くもないなって思って……」

小刻みに、セナの体が震える。ヴァイスはいったんセナから離れ、彼の正面に回り込んだ。

セナが、泣いていた。

悔しそうに。また、悲しそうに。

そこには、確かに感情があった。心が、あった。

「それで……お前から、もらった手紙……破いちまった。それまで、本当に大切に、してたのに……」

「そっか……。辛かったよね。手紙なら、大丈夫だから……」

誰かに優しい言葉をかけてもらったのは、本当に久しぶりのような気がした。バラバラに砕けた心が、再び、完全に満たされてゆくのを感じた……。

「うっ……うわあぁーっ！　ヴァイス、ごめん……！　ごめんな……」

封印していた感情が爆発した。セナはらしくもなくヴァイスに抱きつき、泣き崩れたのだった。

＞ｉ３７１４９―４３４＜

「大丈夫？　セナ」

だいぶ嗚咽もおさまり、セナが落ち着いてきた頃。ヴァイスは優しく微笑んで、セナに話しかけた。

「あっ……ごめん！」

ここでようやく、彼の照れ屋な一面が戻ってきたようだ。羞恥で顔を赤く染め、パッとヴァイスの体から離れた。――また、気がつくと、真っ暗だった周りが、柔らかな黄色の光で包まれていた。

「あのさあ、ヴァイス」

恥ずかしそうに、小さな声でセナは話す。

「ありがとう。本当に……」

「うん」

うつむき礼を言うセナに、ヴァイスは嬉しそうに答えた。その後、少し表情を曇らせ、

「セナはいっつも独りで抱え込んじゃうから壊れちゃうんだよ？もっとみんなを頼って……それが無理なら、難しく考えるのはやめようよ」

優しさの中に、厳しさを含んだ声だった。

「ごめん……。なるべく気をつけ……たいんだけどさ」

セナは悲しげな表情を浮かべた。

「もうホノオに嫌われちゃってるんだろうな、オイラ。だから、アイツに頼るのは申し訳ないから……」

「バカ！」

セナの言葉を、ヴァイスが遮る。穏やかな彼が怒鳴ったのを聞いたのは、おそらく喧嘩をした時以来だろう。

「ホノオが今のキミを嫌いって言うと思う？　キミはもう、昔のような優しいセナにもどったんだから……自信もってよ。お願い」

「うん……」

ヴァイスの懇願（こんがん）に、セナは弱々しく答える。しばしの沈黙が訪れた。

「うーん、そうだね……」

不意に、ヴァイスが話し出す。

「セナのこれからの課題は、自信を持つことだね！」

爽やかな表情のヴァイス。前向きな言葉。――しかしセナは、彼のセリフから絶望の一言を見いだしてしまった。

“これから”。

黙りこくるセナを励まそうと、ヴァイスはさらに明るく話す。

「ボク達も今大変だけど、頑張って生きるよ！　だからセナも、辛いだろうけど、“これから”も頑張って！」

「……ごめん、ヴァイス」

再び“これから”という言葉を耳にする。――辛い宣告だけど、ヴァイスに真実を伝えなくては。

「ごめん。オイラにはもう、“これから”はないんだ」

重く放つ一言。一瞬の沈黙。

「えっ……。え？　どういうこと？」

不安げな、しかしまだ笑みが消えぬヴァイスの顔。冗談であることを、期待したからなのかもしれない。

「ホノオをかばって、傷だらけの体に強い電撃を浴びちまったんだ。オイラ水タイプだから、あんな電撃を受けるとさすがにもう……」

「冗談、上手だね、セナ」

セナの残酷な宣告に、ヴァイスはぎこちなく言葉を返した。認めたくない。絶対に。

「“心がない体”なんて、いつか道具のように壊れちまう。どうして、もっと早く気がつけなかったんだろうな……」

「嘘。ねえ、嘘だって言ってよ！」

ヴァイスはセナの肩をつかみ、問いつめるように揺する。今にも泣き出しそうなヴァイスの顔を見るのが、とても辛かった。

「本当だよ。オイラは、愚かだった……」

自嘲（じちょう）しながら、セナはうつむき、呟く。

「そんな……。諦めないでよ！　死にたくないでしょ！？」

ヴァイスの手にさらに力が入り、彼らしくもなく、セナの肩を乱暴に揺すった。

肩の痛みが、そのままセナの心の痛みになる。

「今は死にたくない。絶対に。……でも。これは、自ら選んだような死なんだ。だから……」

「嫌だよ！　ねえ、死なないでよセナ！　セナ……！」

今度はヴァイスが泣き崩れる番だ。セナがどこにも行かないように、きつく抱きしめた。

しかし、運命は残酷なもので……。

セナとヴァイス。２人の体が淡い光で包まれる。彼らの夢に、終わりが来たのだ。

「ん……。そろそろお別れみたいだな」

ほんの少し震え、泣きそうな声でセナが言う。

ヴァイスはそれまで以上につよくセナを抱きしめようとしたが、両手が、セナの体をすり抜けてしまった。

「ホノオにも、お別れ言ってくるわ。お前が言ってくれたように、ホノオがオイラのこと嫌ってなきゃいいな……」

涙をごまかすために、セナはヴァイスに背を向けた。

「セナ……待ってよ……」

弱々しい声で、ヴァイスは大切な友達の名前を呼ぶ。

「2つだけ、お願いがあるんだ」

寂しさを振り切るように、セナは強く言葉を発した。

「1つ目。ホノオのことを探してほしい。アイツはあれで泣き虫だからさ、独りにさせとくのは不安なんだ。だから……ホノオのこと、頼んだ」

「うん……」

泣きながら、ヴァイスは返事をする。

「2つ目。できればでいいんだけど……。オイラとずっと、友達……でいてくれると嬉しいな」

「そんなの当たり前だよ！　だからセナは、もっと自信を持たなきゃ……」

あまりにも切ない、セナのお願い。ヴァイスは再びセナを叱るような、厳しい口調になった。

「アハハ……ありがとう」

最後の最後に叱られる自分が滑稽に思えた。少し笑うと、余計に寂しさが引き立つ。

体の光が強くなる。そろそろ、別れの時が来たようだ。

「じゃあな、ヴァイス。オイラ、お前に逢えて、よかっ……」

言葉の途中で、セナはフッと姿を消す。

行って、しまった。

「セナ？　セナ！？」

ヴァイスが叫ぶが、返事はない。さらに、この空間では自分の声が跳ね返ってくることもなく、むなしい気持ちになる。

ぽろぽろとこぼれ落ちる涙も、次第に手で触れられぬ、不確かなものとなってゆく。もうすぐ、ヴァイスの夢も終わるのだ。

「セナーっ！！」

精一杯、名前を叫ぶ。ヴァイスには、それしかできなかった。

第２２話：よみがえる心、滅びゆく体（後書き）

作者はこういう、“不思議な夢”というシチュエーションが好きだったりします（笑）。

セナが心を取り戻す過程、無理なく伝わったでしょうか……？

第２３話：生き残る者、死にゆく者（前書き）

瀕死のオイラは、夢を見た。暖かい夢。ヴァイスが出てくる夢。
夢の中のヴァイスのおかげで、オイラは心を――感情を、取り戻すことができた。……思いっきり泣いたのは、久しぶりだよ。
でも、これで一件落着とはいかない。オイラの体は、確実に死に向かっている。今更こんなことを願っても、遅いのは分かっている。
でも、もっと生きていたいよ……。
（語り：セナ）

第２３話：生き残る者、死にゆく者

「セナ……！！」

夢が終わると、ヴァイスは目覚めた先の世界で叫ぶ。――夢。セナが心を取り戻したあの暖かな夢を、ヴァイスも見ていたのだ。偶然だろうか、それとも必然なのだろうか……。

「あれ……？」

周りを見回してみると、濃い緑色のかたく尖った葉をつけた針葉樹が、程よく間隔を空けて生えている林。その中に、自分が――ヴァイスがいることがわかった。

木々は夕陽に照らされている。空はオレンジ色。そして、ヴァイスの身長では向こう岸が見えにくいような大河が、林の中をゆったりと流れていた。――潮の香りがする。どうやらこの川を少し下ると、海と川が溶け合う地帯のようだ。

前方に目を凝らしていたヴァイスだが、ふと、後ろを振り向く。そこには、ぐったりと倒れて気を失う、シアン、メル、ソプラ、アルル、ブレロ、ブルル――共に“渓流の谷”から流されてきた、仲間達がいた。

「ねえ、みんな。起きてよ！」

ヴァイスがシアンの体を揺すり、

「ねえ、起きてってば！」

何度も何度も呼びかけるが、１人として目を覚まさない。水タイプの、シアンとメル、ブレロさえも……。

彼らの体が暖かかったのにはホッとしたのだが、独りでは不安が募る、募る。

穏やかな川の流れを眺め、ヴァイスは

こんな河口まで流されてきたのかな。それとも……この川を渡ったら、いわゆる“あの世”なのかな。

そう独りで黙々と考えていた。

セナは、無事なのかな？

ヴァイスがセナのことを考え始めた、その時だった。

「起きたのか」

背後から低い声が聞こえ、ヴァイスは飛び上がった。

「うわわ……！」

とっさに後ろを向いて見ると――。

そこには、両手でいくつものリンゴを抱えた、１人のポケモンが立っていた。

体は緑色で腹部は赤色の、細身のトカゲのような容姿のポケモン。ヴァイスよりも背は大きい。――森トカゲポケモンの、“ジュプトル”という種族のポケモンだった。声質から判断すると、どうやら性別は♂らしい。

「もう飛び上がるほどの元気もあるのか」

独り言のように呟くと、ジュプトルはヴァイスと向かい合うように座り、地面にリンゴを置く。

そして一言、

「食え」

と、リンゴを指差した。

「えっ、あ、あの……」

突然の出来事に、ヴァイスは戸惑う。ジュプトルに何から聞こうか考えていると……。

「ん。浜辺を歩いていたら、お前達が倒れていた。だから俺が助けた」

非常に簡潔に、ジュプトルが状況を説明した。

「えっ……それは、どうも」

ぺこりとヴァイスが頭を下げて礼をするが、ジュプトルはそれに対して無反応。リンゴを1つ手に取ると、「ん」とヴァイスに差し出した。

「あ、うん。頂きます」

少しドキドキしながら、ヴァイスはリンゴを受け取る。ジュプトルの言動がいくらか素っ気ないもののように感じて、少し怖かった。

一口、リンゴをかじる。みずみずしく、甘酸っぱく、美味しかった。

「生きてる」

ポツリと呟くヴァイスに、

「ん？」

ジュプトルは聞き返す。

「ボク達、生きてるの？」

ヴァイスはジュプトルの目を見て尋ねた。

ジュプトルは当然のように頷き、

「何があったんだ？」

と質問してきた。

生きていることを疑う、不自然なヴァイスを見て、何かを察した故の質問だろう。しかし、ヴァイスがそれを理解するまでにおかしな間が空いた。

「あ……うん。あのね、ボク達は友達を探して旅をしていたんだけど、“渓流の谷”って所で大洪水に巻き込まれちゃって、流されて来たんだ」

「ん、そうか」

と頷いた後、さらに続けて

「よく生きているな、お前」

と、ジュプトルはしみじみとヴァイスを眺めながら言う。

――ヴァイスも、疑問だった。炎タイプで水は苦手な自分が、どうして今生きているのだろう？　いや、炎タイプではなくても、あの洪水からの生還は極めて難しい。それなのに全員息をしていて――さらに不可解なことに、アイテムが入っている赤と黄色のバッグも、２つとも手元にあるようだ。

この上なく奇跡的。この上なく嬉しい……はずなのだが。極めて不可解だ。

「うーん……」

ヴァイスはうなり、今生きている理由を考える。

ジュプトルに促されてもう一口リンゴを口にした瞬間だった。思い当たる出来事が頭に浮かんだ。

「ねえ」

「ん」

ヴァイスは、すがりつくような眼差しで、ジュプトルを見た。

「もしかして、今回ボク達が助かったせいで、このガイアの誰かの命が引き換えに失われたとか……ボク達の代わりに誰かが死んじゃったとか……そういうことって、あると思う？」

「どうして」

質問を質問で返されたが、無理もない。ヴァイスのこの仮説は、“夢”を知らない者にとってはあまりにも唐突なのだ。

「あのね。さっきまでボクが見ていた夢の中に、セナが出てきたんだけど……」

「誰だ、セナって？」

話し始めたヴァイスだが、ジュプトルの一言に驚愕（きょうがく）する。

「えっ！？　セナ知らないの！？　元人間で、今はホノオと一緒に救助隊に追われてる、あのセナだよ？」

「悪かったな、世間知らずで」

さらりと、それだけを返すジュプトルに、わずかな不信感を覚えるヴァイス。悪い意味であれだけ有名なセナを知らないなんて……。それに、さっきから言葉が無愛想だな。

あまり詳しく語るのはやめにして、おおざっぱに説明した。

「夢の中に苦しそうなセナが出てきたから、ボクが助けたんだ。でも、最後にセナは、自分の身が危険だって言ってた。だから、もしかしたら、って」

「そうか」

ジュプトルは答えると黙り込む。考え事をしているらしいその仕草を見ると、ヴァイスはジュプトルを信用できるような気もした。

「セナはお前にとって何なんだ？」

不意に、ジュプトルがヴァイスに聞く。

「友達だよ。大切な、友達」

ヴァイスのまっすぐな返答を聞き、ジュプトルは「ふむ」と頷き、さらに質問を。

「本当に、友達なのか？」

「えっ？」

ジュプトルの、質問の意図が汲み取れず、ヴァイスは戸惑った。

「友達。親友。相棒……。この手の言葉は、“誤用”する奴が多いんだ。愛とか運命とかもな」

なるほど確かにと、ジュプトルの考え方に感心し、少し考えてみた。

でも、やっぱり。

「うん。友達。セナとは友達だよ」

今度は自信ありげに、力強く肯定した。

「……ふーん」

この時のジュプトルの表情は、ヴァイスの心によく焼き付いた。

これまで無表情だった彼が、穏やかな微笑を浮かべていたのだ。

「ボクは弱虫だったけど、セナのおかげでいっぱい成長できた。いろんな困難を乗り越えてね、すごく仲がよくなったんだよ！」

ジュプトルの笑顔を見ると、嬉しくなったヴァイス。明るい声色でここまで話したのだが……思い出が明るいほど、不吉な予感のもたらす影は暗い。

「……でも、セナが命を狙われるようになって、ボクらは離れ離れ。セナ、大丈夫かなぁ……。さっきの夢、本当なのかなぁ……」

「心が通じ合っている者同士は、共通の夢を見やすいと言うな」

ジュプトルのその言葉が、ヴァイスには重い。

「じゃあ……やっぱり、セナは……」

今にも泣き出しそうな震えた声のヴァイス。それを見て、ジュプトルは熟考した後に口を開く。

「信じたようになる、とも言うな。物事は」

「え……？」

ジュプトルの言葉の意味がわからず、ヴァイスは首を傾げた。

「お前がその……セナ？　の無事を信じれば、無事なそいつが見つかる。逆もまたしかり」

「……よく、わかんないよ。確かにボクが見たのは、ただの夢だよ。でも、本当に嫌な予感もするし……でも、ただの夢、なんだけど……」

想いが揺れる。次第にうつむき、声が小さくなっていった。

「お前に嫌な予感を抱かせるためにその夢があった。お前がそれを信じる道を行けば、夢の通りの結果になる。そういう考えもある」

ここまで言うと、ジュプトルは長いため息をつき、夕焼け空を見上げた。

「難しいよ。ボクには、わからないや」

口をとがらせて言うと、ヴァイスは食べかけのリンゴを地面に置いた。

「俺も、わからなかったよ。初めてこんな考えを教えてもらった時は」

遠い目をして、しみじみと呟くジュプトルに、ヴァイスは何故か親近感を覚えた。

「いつか、わかるときが来る」

「ふうん……」

ゆっくりとリンゴを拾い、再び口に運んだ。心なしか、さっきと少しだけ違う味がした。

「ごちそうさま」

考え事をしながら、ゆっくりとリンゴをかじっていたヴァイスだが、とうとう食べ終え、ジュプトルに笑顔を向けて礼を言った。

「ん」

ジュプトルは空からヴァイスへと視線を移す。

「あの。ありがとう」

「ん？」

「元気づけようとしてくれて。嬉しかったよ！」

「……」

照れくさそうに、ぷいと視線をそらすジュプトルを見ると、セナを思い出した。

セナも、お礼を言われたり、ほめられたりするのが苦手だったな。セナ……元気かな？

ジュプトルが言うようにセナの無事を信じることは、少し難しい。不吉な予感が怖いけど……“信じたい”。そう思った。

次第に夕陽も沈み、空が暗くなる。そして、一番星がきらめく頃。

「みんなも起きないし、ボク、ここで寝ようかなぁ。まだちょっと、

具合も良くないや」

普段よりも少し勢いの弱い尻尾の炎を見て――そして、考え事から逃避したくて、ヴァイスはゴロンと寝転がった。

「今日はあり、がとう……」

すぐに眠気に襲われ、消えるように呟くと、ヴァイスはまぶたを下ろす。

そんな彼を、ジュプトルはしばし無言で見つめる。辺りの暗さのせいか、その表情は、わからない。

そしてやがて、満天の星の下で、眠りにつくのだった。

第２３話：生き残る者、死にゆく者（後書き）

今回の話については……口を滑らせるとネタバレしてしまいそうなので（笑）、感想の返信は簡潔にさせて頂きます。

第２４話：友達（前書き）

セナが死に瀕している。夢の中でそう言われちゃって、ボクはとても不安になったんだ。

目が覚めたら、気が付いた。濁流にのまれたはずなのに、ボクらはみんな生きている。どうやらジュプトルさんが助けてくれたみたい。

ジュプトルさんはすごく無口だけど、ボクの夢の不安を聞いてくれた。

少し安心したけど、やっぱりセナの安否が気になるよ。

（語り：ヴァイス）

第２４話：友達

暖かな夢から覚めたセナは、ゆっくりと目を開けた。
焼け焦げてボロボロの体では、呼吸をするのにも必死。浅く息を吸い、わずかに体が動くだけで、酷い痛みに襲われた。

「あ……セナ！」

心が次々と衝撃に襲われ、放心していたホノオだが、セナの目覚めにハッと反応した。セナさえ無事なら少しだけ救われた――そんな気がしたのだ。
ホノオは急いで青いバッグから青い木の実を取り出してセナに差し出し、

「ほら、“オレンの実”だ。早く食べ――」

その言葉は、セナがかすかに首を振り、無言で遮った。
もう自分には、木の実を食べる体力すらないと分かっていたから――。

「えっ……」

ホノオが戸惑っていると、セナは声を絞り出してホノオに話しかけた。

「ホノオ……ごめんな。最期の、力は……お別れを、言うため、に……」

かすれていて儚(はかな)い、とても苦しそうな声だった。でも、久しぶり

に“感情”を――“心”を感じられた声だった。

「な、何言ってんだよ、バカ！」

“最期”。そして、“お別れ”……。それらの言葉はホノオに深々と刺さり、そして彼を焦らせた。

「ホノオ。今まで、ありがと……。あと、ごめん。お前を、傷つける、ようなこと……ばっかり、で……」

いつものセナだ。

まず、ホノオはこう思った。辛いはずなのに、無理やり微かな笑みを浮かべている。謝ってばかりなのは悪い癖だが、それでも、ここにいるのは、“オレがよく知っている”、繊細な心を有したセナだ。

「謝るなよ、オレは大丈夫だからさ……。お前こそ、オレのせいで苦しんで……ごめんな、セナ」

ホノオの言葉の後で、セナは透き通った、心から嬉しそうな表情を見せて頷いた。つられてホノオも笑顔になるが……頬を涙が伝うのは、なぜだろう？

「ほら、せっかく仲直りできたんだから、早くその怪我治せ。オレン、食べろよ」

ホノオが固い“オレンの実”を2つに割り、セナの口元へ持って行く。しかしセナは目を閉じ、悲しげに首を振った。――息を吸うことや、話すことにも精一杯なのだ。食べ物を飲み込む力は、もはや残されていなさそうだ。

ポトリと、ホノオの手からオレンのかけらが落ちる。迫る残酷な運命の気配を感じ、いよいよホノオの視界は涙で満たされるのだった。

「そんな……。行くなよ、セナ」

ホノオの震えた声が、洞窟に響き渡る。セナも自分を待つ運命を強く自覚し、表情を一瞬曇らせた。

――しかし。自分がさんざん悲しませたホノオと、悲しい別れなどしたくない。涙をこらえ、セナは“笑顔”を見せた。

「なぁ、ホノオ。1つだけ、聞きたいことが……」

「何だよ?」

セナの声が聞こえると、ホノオは涙を拭いてセナを見る。また、セナにつられて笑顔になった。

「お前、にとって……オイラは……“友達”、かなぁ?」

まずはじめに、ホノオは驚いた。そして言葉の意味を理解すると、本当に、嬉しかった。

“友達”、ましてや“親友”という言葉は、セナは決して口にしなかったのだ。――否定されるのが怖いからなのかもしれない。そう考えると切なくなることもあった。

そんな彼が、今――。これは本当に、嬉しかった。

「ああ。友達だ。本当に大切な……」

力強くホノオが返すと、セナは確かめるように、さらに質問を重ねた。

「オイラが、ここ、で……死んじまっても……ずっと？」

返事に迷った。“友達”と“別れ”。その両方を、肯定、もしくは否定しなければならない。

ホノオの返事が遅れると、セナは切なそうに笑い、

「ごめん……。変なこと、聞いて」

そう言って、“目を閉じようと”した。

「待てよ、セナ！」

とっさにホノオが呼びかけると、閉じかかったセナの目がゆっくりと開く。

「何があっても、オレ達はずっと友達。約束するから」

ホノオが両手でセナの右手を握ると、セナも微弱な力で指を動かし、握り返した。

「いいの……？」

「ああ。もちろん！」

悲しみと喜びのピークに達し、ぼろぼろと涙を流しながらニッコリと笑うホノオ。意味の分からない、めちゃくちゃな顔をしているんだろうな……。こう思うと、少し恥ずかしい気もした。

セナはくすぐったそうに笑い、心から幸福（しあわせ）そうな顔をした。

「ありがとう。これで、オイラ……安心、して……逝け……」

別れはあまりにも突然だった。眠いときのように徐々に目を閉じ、ろれつが回らなくなったセナ。言葉を言い切らぬまま、フッと体から力が抜けてしまった。ホノオの両手からセナの右手がスルリと抜け、微かな音を立てて地面に落ちた。

セナは、逝ってしまった。

「おい。嘘だろ……？」

現実がホノオに牙をむく。ひどく動揺した声色でホノオは呟くと、セナの頬をさわる。傷だらけの頬はまだ暖かいが、セナは一切の反応を示さない。軽く、頬を叩いてみた。つついてみた。つねってみた……。

セナは、動かなかった。

「セナ……」

洞窟のヒヤリとした空気にひっかき傷をつけるように、ホノオの声は、重く響きわたった――。

第２５話：銀の針（前書き）

できることなら生きたかった。でも、いいんだ。
ホノオと仲直りできて、“友達”って言ってもらえた。本当によかった……。
ホノオ。ヴァイス、シアン……。みんな。今までありがとう。
さよなら。
（語り：セナ）

第２５話：銀の針

焦げ臭かった空気が、少しずつ薄れてゆく。
温かかった友達の体は、少しずつ冷たくなる。

――ここ“迷宮の洞窟”にて、４つもの命の終わりを見たホノオは、独りで沈黙の空間に立ち尽くしていた。

「――破壊の、焔」

ふと、ポツリと呟く。ホノオは悟ってしまったのだ。自分の、この世界における立場を。

「オレは……“破壊の魔王”」

誰も聞くことのない言葉が、やけに重く響いた。

きっと、そうなんだ……。ホノオがそう確信した要因は、１つではなかった。
恐ろしい破壊力を有した、不気味な技。複数の命を一瞬で消し去った、罪深い技。そんな“破壊の焔”を、オレは発動してしまった。
――あたかも、昔から使い方を知っていたかのように、自然に。
また、命を破壊するその瞬間のことを思い出すと、恐怖で震えが止まらない。オレはあの時、一切のためらいの感情を持たなかった。むしろ、スカッとして、愉快で……。声高らかに笑ってしまった。

そして、最大の罪悪感はなんと言っても……。
ホノオはため息をつき、セナを見つめた。

セナを滅ぼしたのは、オレだ。と、ホノオは強く感じる。
感情を踏みにじって、心を失わせた。――そもそも考えてみれば、セナと喧嘩した原因となった、あのギャロップ達との戦い。あの時すでに、オレの中では“命を奪おう”という最低な発想が芽生えていたではないか。
そして決定的なのは、セナは、おそらく“救いの勇者”であること。世界を破壊に導くオレと、反対の立場であること。
黒幕が善玉を滅ぼす。例え故意ではなくても、自然な流れではないか……。

気がつけば、再び涙があふれる。ホノオは絶望的な気持ちに襲われ、崩れるように地面に膝をついた。

「……ごめん」

自然と漏れるのは、いくら言っても足りない謝罪の言葉。

「ごめんな、セナ……」

なに謝ってんだよ？
ははは、いいって！
バーカ、泣くなよ。ひっどい顔してるぜ？
――そんな言葉は、息をしていない彼からは返ってこない。

「くそ……。なんでだよ……」

震えた声が、響く。答える者は、だれもいない。

「なんで、オレじゃないんだよ……。なんでお前が死ぬんだよ！？」

セナを怒鳴りつけるが、彼はもう臆さない。幸せそうな最期の顔が、悲しさを引き立てた。

「オレが消えれば、全て終わるんだ……。なのに……なのに！　うっ……。うわあああぁーっ！！」

とうとうホノオは泣き崩れ、誰にも聞かれぬ叫びを響かせた。――どうにでもなれ。いっそ、このままオレも――そんな思いが爆発し、声はすぐに酷くかすれた。

――どれほど泣いただろうか？　少し頭が痛くなる。

深呼吸をして、気持ちを落ち着かせたホノオは、覚悟を決めた。泣いてばかりいても仕方がない。オレは、オレの手で、“ガイアを救う”んだ。

決意を胸に、セナが身につけていた――今は地面に投げ出されている青いバッグの中に手を突っ込む。ついでに自分の近くにあった“ホーリークリスタ”は、バッグの中に戻しておいた。

チクリと手に刺さる感覚。探していたものが、あった。

ホノオは攻撃アイテムの“銀の針”を取り出す。――“銀の針”は、その名に“針”とあるものの、尖っていない部分の直径は3センチ程はある、とても太い、しかし先端は鋭利な道具だ。銀色に光るそれを、ポケモン達は主に投げて攻撃に使うため、これほどの太さが必要なのだ。

その残酷な冷たさを感じると、ホノオは少しだけ身を震わせた。だが、やらなくてはならない。

震える左手で針を持つと、いよいよ心臓が暴れる。そしてホノオは、その心臓の上にそっと針の先端を当てた。
チクリと胸を刺す痛みにわずかに顔をしかめた後、ホノオは針に右手も添えた。

ガイアの多くの救助隊のポケモン達の願いが、今、実現するんだ。こう考えると、ホノオは皮肉な笑みを浮かべた。

震える両手を強く握り、ホノオは目を閉じて一度深呼吸する。そして、静かに目を開けた。

第２６話：命の神殿――その１（前書き）

破壊の焔……セナの死……。オレこそが、この世界の災いの元だったんだな。

救助隊よ、今までご苦労さん。オレはこの銀の針で、自ら命を絶つことにするよ。

（語り：ホノオ）

第２６話：命の神殿――その１

ふわり、ふわり。
セナはふと気がつくと、何か柔らかいものの上に仰向けに倒れていた。

「ん……ここは？」

ムクリと上体を起こし、座った状態で辺りを見回してみる。

自分が今座っているのは、真っ白な雲の上。ふかふかして綿のように柔らかいそれは、あたり一面に広がっていた。
――ここが、死後の世界。“天国”って奴だろうか？

自分が命を失ったことを、セナはふと思い出した。

「ホノオ……？　ヴァイス。シアン……」

試しに仲間の名を呼ぶが、晴れ渡る青空に声が溶けては消えてゆく。

むなしい気持ちになり、セナは立ち上がる。そして何気なく、再び辺りをぐるりと見回した時だった。

「……ん？」

座っていた態勢の時とは真逆の方向を向いてみると、遠くにキラリと輝く何かが見えた。

「何だろう？」

引き寄せられるように、セナはそちらへと向かう。何か不思議な興味がそそられる気がした。

少し近づくと、それが何なのかわかってきた。――さほど大きい造りではないのだが、立派な、純白の神殿だった。何本も立つ丈夫そうな柱は、控えめな金色のラインで上品に装飾されている。そして、平らな屋根は厚みがあり、羽をかたどった金色で装飾されている。

先ほどの光は、この金色に日光が反射したものなのだった。

どこか神々しい様子に、心が惹かれる。セナは夢中でその神殿へと駆けだしたのだった。

ついにたどり着いたセナは、４・５段の階段のような段差をのぼり、柱と柱の間から神殿に入った。

外観と同じく、神殿の内部も純白が主である。そしてその白は、その神殿の主をより引き立てるのに役立っているようだった。

セナの左手。さらなる２・３の段差の上で、虹色の翼を丁寧にたたんだポケモンが、セナをじっと見ていた。

その後ろには、これまた白に映える、古びた茶色の巨大な扉。金で細かな装飾がなされていた。

――あの扉の向こうが、きっと――

直感的にそう思うと、セナは扉の前に上品に立つポケモンの元へと急いだ。

「こんにちは、セナ」

美しく透き通る優しい声に呼ばれ、セナは段差の途中で思わず足を止めた。

「え？　オイラの名前、知ってるの？」

セナの問いかけに、そのポケモンは長い首を少し下げて頷く。体は主に赤色の、鳥――というよりは、不死鳥とでも表現したほうが適切そうな、神々しい容姿のポケモンだった。赤色だけでなく白、緑、黄色。鮮やかな色を放つ羽根を有している。黄色のくちばしが、黄金のように映える。

「ガイアのポケモン達のことなら、みんな知っていますよ」

穏やかな表情で、ていねいな口調で、そのポケモンは付け足す。

セナは丁寧に残りの段差をのぼり、そのポケモンに近寄る。かなりの体格差。小さな種族――ゼニガメのセナは、大きなそのポケモンの顔を見上げた。

「自己紹介が済んでいませんね。私の名は、ホウオウ。ガイアの全ての生命を司る者です」

ホウオウ。

その言葉は、スイクンから何度も聞いた。

「アンタが、ホウオウか……」

と、セナ。

ここで、セナは思い出す。今までスイクンに、オイラが“救いの勇者”か“破壊の魔王”かを判断させていたのが、このホウオウ。そして――スイクンとの2度目の戦いで、スイクンは言っていた。オイラは――オイラ達は、ガイアを滅ぼす“破壊の魔王”。それをスイクンに指摘したのが、ホウオウだと。

この考えが浮かぶと、セナはホウオウにわずかな恐怖心を抱く。敵か味方かわからぬこの存在が使う敬語の丁寧さが、やけに恐ろしかった。

そんな、顔を強ばらせるセナを見ると、ホウオウは悲しげな表情を浮かべた。

「そうですね……。お前が私を恐れるのも、無理はないです」

ため息をつくと、ホウオウはさらに続けた。

「しかし、信じてほしい。私はお前の味方です」

「は、はぁ。どうも」

嘘をついているようにはとても見えないホウオウの振る舞いに、セナは安心するのだった。いくらか緊張感が抜ける。

「辛かったでしょう。多くの者に命を狙われ、何を信ずればよいのかもわからなかった」

「……うん」

セナのことを全てわかりきっているような、悲痛な表情のホウオウに、セナは心を許せる気がした。

「それも、何もかも……スイクンの身に起こった異変のせいなのですよ」

そうか。やはり、あのスイクンの異常なまでの態度の変化にはわけがあるのか。

――ということは。

「なあ、ホウオウ。オイラは、“破壊の魔王”って奴、なのかな？」

すがるような顔つきで聞くセナに、ホウオウは微笑んで答える。

「いいえ、違います。――最も、“破壊の魔王”が誰であるかは、まだ私もわかりませんが――。お前は、その逆の立場。自信を持ってもよいのです」

「そうか……よかった」

ホッとして、体から力が抜けた。自分という存在が肯定されると、とても体が軽い。

「お前には、ガイアを――そして、スイクンを救う使命があります。しかし……今こうしてここにいることが、何を表しているかはわかりますね？」

絶望を、突きつけられた。

「ああ……。オイラは死んだ。死んだ」

自分に言い聞かせるように、2度繰り返す。背負った使命も何もかも、果たせずにオイラは散った。

自分の無力さが、悔しい。自分を信じてくれた、ホウオウに申し訳ない。

「ごめん、ホウオウ……。オイラがしっかりしないから……」

拳を強く握りしめ、悔しさに震えるセナ。自分に対する怒りや憎しみが強く燃え上がった。

「そう、自分を責めるのはおやめなさい。お前の悪い癖です」

優しく、厳しい口調で注意される。その言葉からは、大きな愛情をも感じられた。

しかし当然、これで納得するセナではない。ホウオウも理解済みのようで、やれやれと首を振ると、話し始めた。

「私からお前に、お願いがあります」

改まるホウオウの言葉で、うつむいていたセナは顔を上げた。

「まずはスイクンを……スイクンを、助けて下さい」

声に感情が強くこもっていて、思わず胸を打たれた。しかし、問題がある。

「助けろと言われても、死んだオイラにゃどうしようもないさ……」

ため息をつき、セナは再び自虐的になった。

「もちろん、命がなければ成し遂げられませんよ。ですから……」

「生き返ろってのか？　オイラに？」

セナが強い口調で聞くと、

「乱暴に言ってしまえば、そうなります」

とホウオウ。

「そんなの、おかしいよ……」

複雑な笑みを浮かべ、セナは話し始めた。

「いくらガイアやスイクンを救う使命があるからって、オイラだけが生き返るなんて不平等すぎる。それに……オイラは自ら命を捨てたような奴なんだぜ。オイラなんかを生き返らせるなら……そうだな。ヴァイスの母さんや、姉貴のいとこを生き返らせてほしい。オイラなんかよりも、再び生きる価値があるポケモンは、わんさかいるはずなのにさ……」

その答えを、複雑な表情を浮かべてホウオウは聞く。

「もちろん、“お前が使命を背負っているから”。これだけの理由でお前を生き返らせるなど、軽率なことはしません」

と、ホウオウ。さらに続けた。

「また、過去にも使命のために生き返ってもらったポケモンはいましたが……彼らも、今のお前と同じことを言いました。『自分達だけ生き返るのは、おかしい』、と。

この言葉があってこそ、私は蘇生を許したのです。命の価値を理解しているからこその言葉です。

お前は今、その権利を手にしました。――過去の勇者達よりもいささか自虐的なようですが。お願いです。命の価値を理解しているのなら、お前の命で多くのガイアの命を救って欲しいのです！」

ガイアでは“命の神”と呼ばれるホウオウ。その偉大な存在が今、ちっぽけな自分の――セナの前で頭を下げている。

「うん、わかった。本当に、オイラにガイアやスイクンが救えるのなら、もう一度頑張らせてくれ」

ホウオウに申し訳なくなり、とっさにセナは答える――が、不安は拭えない。

本当に自分に、そんな大きな力があるのだろうか？

「ありがとうございます、セナ！　責任感の強いお前なら、そう言ってくれると思いましたよ」

こう言うと、ホウオウは閉じていた自らの翼を広げる。鮮やかで美しい、堂々と大きな翼がセナを圧倒した。

そしてホウオウが意識を集中させると、自らの目の前に、黄金に輝く光の羽根を形作った。

生み出された羽根は、ひらりひらりと宙を舞い、セナの足元に着

地した。

「さあ、セナ。その羽根を手にするのです。そうすることで、お前の魂は身体へと戻ります」

いよいよ、元の場所に――自分の身体に戻れる時が来たらしい。

セナは、覚悟を決めようとする。どんな困難にも負けず、スイクンやガイアを救う、覚悟を決め――ようとするが。いつまで経っても、羽根に触れる勇気が湧かない。

「どうしたのです？」

「あ、いや、あのさ……」

決まり悪そうに、セナが話し出した。

「本当に、オイラでいいのかな？　オイラなんかよりも強い奴っていくらでもいるのに、本当にオイラがガイアやスイクンを救えるのかな……って。不安だし、自信ないや」

「……もっと自信を持ったらどうです？」

とがめるような口調でホウオウが言うと、セナは、

「そう。自信なんだよな。オイラにゃ自信がないんだ。だって、ついさっきまで、困難に屈して心を捨ててたような人間なんだぜ？こんなの、信じられるわけないじゃん」

「いい加減にしなさい！」

ホウオウの怒声に、思わずセナはビクリと飛び上がった。

「お前自身がお前を否定するから、お前は滅びゆくのです。お前の失敗や過ちは、全てお前の自信のなさが原因なのですよ！」

「……うん。でも、今のオイラには、自信を持てる要素が何ひとつない。だから……」

覚悟を決めて、セナはホウオウの瞳を見つめた。

「今ここで、“自信をつけて”帰りたいんだ」

第２６話：命の神殿――その２（前書き）

死んだオイラがたどりついたのは、命の神殿。そこでホウオウに出会ったんだけど――どうやら、ホウオウはオイラ達の味方らしいな。

スイクンとガイアを守るために、オイラはもう一度生きることを許可されたんだけど、決心がつかないや。

オイラには、自信がない。でも、自信が欲しい。

（語り：セナ）

第２６話：命の神殿――その２

「どういう、ことです？」

――今ここで、“自信をつけて”帰りたいんだ

謎めいたセナの言葉の真意がわからずに、ホウオウは首を傾げた。

「今の、この自信がない状態で元の場所――身体に戻っても、オイラは使命を果たす前にまた終わっちまう気がする。だから、自信が欲しい」

そして、セナは深々とホウオウに頭を下げながら、

「だから……頼む、ホウオウ！　オイラと真剣にバトルして欲しいんだ！」

セナの大きな声が響きわたる。その音の余韻が失せた頃、ようやくホウオウが口を開いた。

「何を、言っているのです？」

冗談ととらえたのか、微笑を含む声だった。

「気持ちはわかりますが、私は伝説のポケモン。並大抵のポケモンが、私にかなうはずありませんよ」

「でも！」

ホウオウの言葉を打ち消すように、セナは叫ぶ。

「アンタができないことを、オイラはやりにいくわけだ。だから、アンタを超えなきゃ！」

「馬鹿にしているのですか！？」

再びホウオウが声を荒げた。

「私にスイクンやガイアを救う力がないわけではありません。この“命の神殿”での、命の管理の仕事が忙しいのであって……」

一拍置き、話を続けた。

「そもそも、あなたの使命に必要な能力は、“力”だけではないのですよ。バトルに勝てばよい――そんな短絡的な考え方はおやめなさい」

あきれたようにホウオウはため息をつき、うつむく。

それでも、諦めきれないセナがいた。

「わかってる。でも、バトルは“力”だけでするもんじゃない。“心”だって、十分強くなきゃ」

ホウオウが顔を上げると、セナは再び強く訴えた。

「頼むよ、ホウオウ！　オイラは本当の“強さ”が欲しいんだよ！」

「しかし、その“強さ”は今すぐ必要なのですか？　焦りは禁物ですよ。私は、お前が決戦の時までにその“強さ”を得ることを見越して――」

「“水の波動”！」

ホウオウの言葉を遮り、セナは攻撃を繰り出した。輪の形の水が空気を掻いて勢いづき、ホウオウの顔を叩きつけた。

「くっ……な、何をするのです！」

さすがの伝説のポケモンも、顔に技を受けてよろめく。

「オイラは真剣なんだ……」

ホウオウを睨みつけながら、セナはじりじりとホウオウに近寄った。

「……仕方がないですね。逆に私に負けて自信をなくしても……知りませんよ！」

言葉とともに、ホウオウは翼を思い切りはためかせ、強風を起こした。相手を遠くへ吹き飛ばす技、“吹き飛ばし”だ。

「わあっ！」

木の葉のように軽々と風に連れ去られ、セナの体は長く宙を舞う。そして、“命の神殿”の柱の間を通り抜けると、外の雲に体を叩きつけられた。

「う……すごい風……」

柔らかな雲の地面のため、ほとんど衝撃はなかった。しかし、体

をどうにも動かせない強風は、脅威的であった。

“命の神殿”から、ホウオウが宙を滑るように飛び出してくる。セナに何か攻撃を仕掛けようとしているのは明らかだった。

「“風おこし”！」

ホウオウは両方の翼を叩きつけるように合わせ、強い風の衝撃波を生み出した。渦を巻くような風が、避ける間もなくセナに迫る。

ここでセナは、何を思ったのか、風に向かって突っ込んでゆく。そして、風に飲み込まれた瞬間に甲羅に身を隠し……

「“高速スピン”！」

風の流れに逆らった方向に強く回転し、攻撃を打ち消した。

「思ったよりはやりますね……。しかし、これは避けられませんよ！」

すると、ホウオウは瞳をぼうっと光らせてセナを見つめた。

「う！」

頭痛を感じたセナは、頭を押さえて苦しみ出す。しだいに全身に、神経が焼けるような、酷い痛みが広がった。

「うあっ――！」

「“神通力”です。さあ、諦めるなら今のうちですよ？」

叫ぶようなうめき声をあげるセナに、ホウオウは語りかける。

「あっ……諦める、もんか……っ」

言葉に出すことで、気持ちを強く保つ。全身を襲う痛みは、体を少しでも動かすとセナに牙をむいた。

「強がらなくてもよいのですよ。“風おこし”に飛び込んだ勇気があれば、十分です」

とどめを刺すように、ホウオウは両目をカッと光らせた。

「ぐあぁっ！！」

身を焼くような痛みに、セナは鋭く悲鳴をあげて崩れるように倒れ込む。しかし、それと同時に、

――今、ここでホウオウに攻撃しないと、オイラは負ける！　オイラは、勝つんだ！

強い思いがセナを支配した。

激痛に耐えながら、必死に立ち上がる。そして、痛みを攻撃に変えるかのように、セナはイチかバチか、最近成功させたばかりの技を繰り出した。

「“波乗り”！」

雲から幾多の強い水流が吹き出し、ホウオウに襲いかかった。

「くっ！」

身を叩きつける水流の勢いに、ホウオウは歯を食いしばる。伝説のポケモンといえど、炎タイプのホウオウが苦手な水タイプの技はやはりこたえるようだった。

「や、やりますね……」

セナの攻撃が終わると、少し息を荒げたホウオウがセナを見て言う。しかし……

「はぁっ、はぁっ……」

無理が祟(たた)ったのだろう。セナはその場にうずくまり、顔をしかめて呼吸を繰り返した。

「まだ、戦う意志はありますか？」

ホウオウの言葉に、

「はぁ、はぁっ……誰が、諦めるか……」

息も絶え絶えに、セナは言葉だけは強気の態度をとる。

「ならば、仕方ありませんね……」

ホウオウは言うと、深く息を吸う。そして、

「“大文字(だいもんじ)”！」

情け容赦のない巨大な“大”の字の形の炎が、セナに襲いかかっ

た。が、その瞬間だった。
セナから、お返しと言わんばかりに強力な光線が放たれ、ホウオウを捕らえたのだ。

「うっ……！」

たまらずホウオウは攻撃を解除する。すると、体がボロボロに焼け焦げたセナが得意げに、

「“ミラー……コート”」

そう言うと、ニッと笑った。

「っ……なかなかの反撃ですね。ですが」

と言うと、ホウオウの体が白く光り始める。そして、セナの攻撃によりついた傷が、消えていった。

「残念ですね、セナ。“自己再生”です」

セナに見せつけるように、ホウオウは元気になった翼を動かす。そして、彼が諦めるのを誘ったのだが……

「アンタ……“も”、回復、技……か」

喘ぎながら、しかし笑いながらセナは言う。その言葉にホウオウが首を傾げたその時だった。
セナが、その体に明るい水色の、水のエネルギーでできた輪“アクアリング”をまとった。

「へっへへ……オイラだって、回復技くらい、持ってるんだ」

と、彼は言うものの、“アクアリング”は“自己再生”ほどの即効性はなく、少しずつ体力を回復する技だ。ホウオウのような動きはまだできそうにないが、それでも力を振り絞って立ち上がると、笑顔を消し、真剣にホウオウの目を見つめた。

「……わかりました」

瞳の奥に燃える、強固な意志。セナのそれを感じ取ると、ホウオウは静かに頷いた。

「お前がそのつもりなら、いいでしょう。私は全力で協力します！」

直後、ホウオウの目つきが――否、それだけではなく、彼がまとっていた優美な雰囲気がガラリと変わる。セナを押さえつけるような、“命の神”の威厳を放つ。

ビリビリと肌が痺れそうなほどの“プレッシャー”を感じながら、しかしセナは強気の笑みを浮かべた。

「いいねぇ。やっぱりそうこなくっちゃ！」

第２６話：命の神殿――その３（前書き）

自信が欲しい。それを理由に、セナは私に勝負を仕掛けてきました。

きつい攻撃を何度か浴びせて様子を見てみましたが、意地でも諦めない姿勢は評価するに値しますね。

彼の本気が分かった以上、こちらも本気を出すのが礼儀です。

（語り：ホウオウ）

第２６話：命の神殿――その３

水エネルギーでできている、輝く水色の光の輪――“アクアリング”のお陰で、セナはようやく体を動かせる程に体力を回復させた。まだ多少息はあがっているが、“アクアリング”の効果が続くお陰で、それも回復しつつあった。

「はぁ、はぁ……。よし！」

セナは気合いを入れると、ホウオウに再び立ち向かう。

「“水の波動”！」

輪の形の水を勢いよくホウオウに向けて発射した。

しかし直後、セナはホウオウの不自然な態度に首を傾げた。ホウオウは攻撃を避けようとせず、さらに目を閉じ始めたのだ。当然セナの攻撃は命中するが――ホウオウは表情を一切歪めない。先ほどは効いたはずの“水の波動”が頬を叩きつけても、よろめきもしない。

「えっ……？」

セナが思わず疑問の声を漏らすと、ホウオウはスッと目を開けた。

「ちっとも痛くはありません。……驚きましたか？“瞑想”をして、特殊攻撃力と特殊防御力を上げたのですよ」

こうセナに説明すると、不敵な笑みを浮かべた。

「しまった……。だから目を瞑ったのか」

並大抵の特殊攻撃――例えば“水鉄砲”や“水の波動”――は通用しないとわかると、セナはホウオウに向かって駆け出す。

「そんなら物理攻撃で攻める！」

ホウオウに近寄ると思い切り飛び跳ね、尻尾に水のエネルギーを込めた。

「“アクアテール”！」

そしてホウオウの右翼めがけて尻尾を振り下ろすが、

「ふふふ。スキの多い攻撃ですね」

ホウオウは軽々とセナの攻撃をかわした。当たるはずの攻撃が外れ、セナはバランスを崩して落ちゆく。それを、ホウオウは見逃してくれなかった。

「“鋼の翼”！」

柔らかな羽の生えた翼を鋼のように硬化させると、ホウオウはその右翼でセナの腹を突き上げるように叩きつけ、セナの体を上空へと放り投げた。

「ぐっ！」

セナは苦しげな声を上げると、衝撃に顔をゆがめた。そして背中を地面に向け、体は無防備に空高く浮く。

ホウオウはすぐにセナの後を追い、そして追い越し、上昇から下降へと移ろうとしているためにピタリと止まったセナの体を見下ろした。そして、体を真紅に輝かせると全身に炎をまとい、神聖なる炎の不死鳥と化す。

「かくごなさい、セナ！　“聖なる炎”！」

そう言うと、セナめがけて急降下を始めた。

息を吸う間もないその攻撃に、セナは水技では対抗することもできず……。セナの腹部を、ホウオウの燃え盛るくちばしがとらえた。

「うあっ……！」

耐え難い衝撃に、身を焼くような激しい炎の熱。セナは苦痛の悲鳴をあげ、気を保つのにも必死の様子だ。

ホウオウはセナの体を地面に押し付けるようにそのまま降下する。そして、セナが気を失いそうなほどに落下速度が加速したその時、ホウオウは翼を鋭く振り抜き、セナの体を地面に突き落とした。

地面は柔らかな雲でできているが、さすがにセナの体が隕石のごとく墜落したこの衝撃は吸収しきれなかったらしい。セナの体は一度バウンドし、再びうつ伏せに地面に叩きつけられた。

ここで無情にも、セナの“アクアリング”の効果が切れる。

「うぅ……っ」

翼やくちばしの打撃で、体はズキズキと痛む。その上、“聖なる炎”の炎の力は凄まじく、セナは全身を熱で焦がされた。うめき声を上げつつも立ち上がろうとするセナだが、ホウオウはそれを許し

てくれなかった。
セナが震える両腕で、必死に上半身を起こしたその時。
「“破壊光線”！」
背後から声が聞こえた直後、セナの体は再び空中に投げ出された。
鋭く光る光線が、セナの身を引き裂くように襲いかかる。“瞑想”の効果で、通常よりもさらに強力な“破壊光線”だった。
「うあぁぁーっ！！」
こらえていた悲鳴が、とうとう辺りに響き渡る。光線がセナを貫いたのはほんの少しの時間だったが、セナには永遠のごとく長く感じられた。
――“破壊光線”の光が宙に分散すると、セナは力なく倒れる。
体に力を込めようとした。再び立ち上がり、戦おうとしたのだが……わずかに指先が動くだけだった。
（やっぱり、かなわなかったか……）
とうとう、強かった意志も折れかける。
（カッコ悪いな、オイラ。自分でバトルを申し込んだのに、こんなにあっさりやられるなんて）
うすく開いていた目も、静かに閉じてしまった。
（なにやってんだか……）

自信が欲しいから始めたバトルなのに、結局、セナは自分に嫌悪感を抱くのだった。

「お前は、よく頑張りましたよ。自信を持ちなさい」

戦いの終わりを、ホウオウは優しく告げた。わずかに息が弾んでいるのは、反動の大きい“破壊光線”を使ったからだろう。

「そろそろ、体へ――ホノオの元へと戻るときです」

ホノオ。その言葉に、セナはわずかに反応し、ピクリと指を動かす。――頑張れ！　ホノオがそう応援してくれているような、そんな気がした。

「うあっ……！　くっ、ううっ……！」

体があげる悲鳴に歯を食いしばりつつ、再び全身に力を込めた。すると――頑張って！　頑張ってネ！　ヴァイスとシアンの声がした気がした。

（みんな……！）

再び、想いが強くなる。オイラは、この戦いで“強く”なるんだ。そして、一回り大きくなって、みんなの元へ帰るんだ。

大きな勇気が、セナを支えた。

「む、無理しないでください！　今、回復してあげ――！」

無茶をするセナに焦って話しかけたホウオウだが、話の途中で不自然に言葉を切った。そして、

「くっ……。お前、いつ“毒々”を使ったのです？」

苦しげに呼吸を荒げながら、ホウオウはセナに問いかけた。

やっと、効果が出たか。セナは満足げにふっと笑みを浮かべた。そして――このことがセナを勇気づけ、とうとう上体を起こし、ホウオウの顔を見上げた。

「“聖なる炎”を、食らった、時さ。ただやられるのも……しゃくだからな」

痛々しいが、誇らしげな声色でセナは言うと、ここでついに、膝を地面について腹を浮かせた。

「うっ……！　悪いけど……勝たせて、もらう、からな……！」

時折激痛に悲鳴を上げつつ、セナは強く言い放つ。そして。どこからこんな力が湧いてきたのか、ついに足の裏で地面をしっかりと踏みつけ、不安定だが立ち上がった。

「なっ……。まだやるのですか！？」

実質は魂だけのセナだが、ここ、“命の神殿”では生前と変わらぬ感覚であるはず。それなのに、壊れそうな体が立ち上がった――これはホウオウにとっても衝撃的だった。

「当たり前だ……。オイラは、絶対に……絶対に、諦めない！」

セナが力強く言い放った、その瞬間だった。セナの体が、深い青

色に光り輝いたのだ。

「こ、この力は――！？」

目を見開くホウオウ。セナの中で目覚める、不思議な力を感じたのだ。

セナ自身も光の正体はわからず、はじめのうちは驚いている様子だった。しかし、湧き上がる強固な感情に気がつくと、キュッと表情を引き締めた。

すると、未知なる技の組み合わせが、脳裏に浮かんだ。今なら、いける。不思議な自信がセナを勇気づけた。

「いくぞ……ホウオウ」

目を閉じ、軽く息を吸うと、セナは“はじめの技”を発動する。

「“波乗り”！」

地面から、幾多の水流が噴き出す。体力が限界のセナだからこそ、特性“激流”が発動したため、凄まじい水圧だった。

この水流が束になり、津波のように襲いかかってくるのだろう。そう予測したホウオウは、策を練った。

「“見切り”！」

神経を研ぎ澄ませ、ホウオウは“波乗り”を回避する準備をした。

水流がホウオウめがけて向きを変えようとした、その瞬間だった。

「“吹雪”！」

これまで使ったこともない技を、セナは躊躇(ためら)いなく繰り出す。もちろん、技が失敗することもなく……。

あっという間に辺りを凍てつく嵐が支配し、真っ白な雪が視界を濁した。ホウオウに襲いかかろうとしていた水流は瞬時に凍り付き、巨大な氷の柱と化した。

セナの体の青色の光が強くなる。しかしそれと共に、体を蝕(むしば)む傷の痛みが牙をむいた。それでも、過酷な激痛に負けなかったのは、胸の奥で励ましてくれる友達がいたから。みんなが支えてくれているような、暖かさに包まれたから――。

みんなに支えられて、オイラは生きるんだ。

みんなを支えて、オイラは生きるんだ。

――確かに今、セナは生きる意味を見つけた。

「食らえ、ホウオウ。これが……オイラの全てだ！」

カッと、セナの体が閃光(せんこう)を放つと、氷の柱がバラバラに砕け、鋭利に尖る。そしてそれは、荒れ狂う猛吹雪に乗ってホウオウに襲いかかった。――どこかで見たようなこの技。スイクンの“クリスタルストーム”を、セナは氷で再現したのだった。

「“アイスストーム”！！」

勇気。

根性。

自信。

思い出。

そして、絆(ともだち)。

自分を支える全てのモノへの想いを、輝く氷の破片に乗せた。

「くっ、“オーバーヒート”！」

氷を溶かしてしまおうと、ホウオウは全身から高熱を発する。しかし、吹雪の冷たさが熱を冷やし、ついに翼を切りつける痛みを感じた。

「！」

それをきっかけに、2度目、3度目……。顔をしかめながら、ホウオウは確かに負けを悟った――。

“吹雪”が止むと、全てが地に落ちる。

無数の氷の破片。傷を負ったホウオウ。そして、青色の光は消え失せた、ボロボロのセナ。

ホウオウがわずかに体を動かした直後、高く鳴り響く透明な鈴の音が沈黙を破った。そして、セナとホウオウの怪我は、きれいに消え去る。

ホウオウが、残った力で彼の持つ回復能力“祝福の鈴”を発動させたのだ。そのことが意味するのは、戦いの終結。――さらに言うと、ホウオウが負けを認めたのだ。

パチリと目を開けると、セナは飛び上がるように起き上がった。

「あれっ！？」

記憶が、先ほどの技“アイスストーム”の途中でとぎれている……。そんなセナにとって、体の痛みが消え去っているこの状態は唐突で、思わず間抜けな声を上げた。そして顔を上げると、目の前には優しい笑みを浮かべたホウオウがいる。

「あれ……ホウオウ？　バトルは？　あの後、どうなっちゃったの？」

早口で質問を重ねるセナを見ると、ホウオウはクスリと笑った。そして、答える。

「セナ。私の負けです。素晴らしい攻撃でしたよ、お前の“アイスストーム”」

「えっ……。本当に！？　本当に、オイラはそんなにすごい技を！？」

セナの反応に、ホウオウは首を傾げる。

「え？　覚えていないのですか？」

すると、セナは照れくさそうに目線をそらした。

「いや、覚えてるんだけど……その、オイラにあんな力があったんだって、まだイマイチ信じられないというか……」

「ふふふ。あれは正真正銘、お前の力ですよ。強い“心”は、時に“力”に変わるのです」

ホウオウが言うと、セナは嬉しそうな、恥ずかしそうな表情を浮かべた。

「そっか……やった！　オイラ、完全に心を取り戻したんだ！」

やがて、夢見心地な感覚も実感に変わり、弾けるような嬉しさに背中を押されたセナは歓喜の声を上げた。

「わかりましたね？　自信と心の大切さを……」

「うん……。うん！　えっへへ、やったやったぁ！」

子供らしくはしゃぐセナを見て、ホウオウは表情を緩めた。が、少し後に、引き締まった表情で言う。

「ただ、お前の“心の力”はまだまだ不完全です。ですから、例え失敗を繰り返すことがあっても、自信をなくしてはいけませんよ」

「あ……うん。気をつける」

浮かれていたセナも、気を引き締めて、ホウオウの言葉を心で復唱した。

「では……」

と、瞳を閉じると、ホウオウは再び、金色に輝く光の羽根を作り出した。

これに触れると、オイラは居場所に――ホノオの、そしていずれはみんなのいる場所に――戻れる。

嬉しさが胸を満たすと、ほんの少し視界がにじんだ。

「さあ、その羽根に触れなさい」

ホウオウに促され、セナはそっとそれに手を触れた。すると、羽根の金色の光がセナに移り、セナの体はまばゆい光に包まれた。

「本当にありがとう、ホウオウ。オイラ、頑張ってくるからな！」

ホウオウの元を去ることを自覚し、ほんの少し寂しい気もした。セナは最後に力強くこう言うと、彼の姿はその場から消えた。

――元の場所に、幾多の命が活躍する場所、ガイアに帰って行ったのだった。

「頑張るのですよ、セナ。自分と、仲間を信じて……」

ホウオウは足元の雲を見つめて、しみじみと言う。そして、セナとバトルを繰り広げたこの場から、元いた神殿――“命の神殿”へ向かって静かに飛翔したのだった。

第２７話：ただいまとおかえり（前書き）

彼が何らかの力を秘めていることは分かっていたのですが、まさかこれほどまでとは……。私に追い詰められたセナは、仲間を思い出して再び立ち上がりました。

彼の全てを乗せたアイスストーム。これには完敗ですね。

無事、ガイアに戻っていったセナ。そしてその仲間たち。彼らの活躍に、これからも期待しましょう。

（語り：ホウオウ）

第27話：ただいまとおかえり

冷たい空気が漂う洞窟の中で、とうとうホノオは決心した。“銀の針”で、自分の心臓を突き刺す決心を。そして、“破壊の魔王”をその手で消す決心を。

一度閉じて、開いた目を、再びギュッと閉じた。そして、針を思い切り突き刺すために、一度胸から針の先端を離し、腕を伸ばしたその瞬間のことだった。

セナの体が突如、金色の光に包まれたのだ。

「えっ……！？」

針を持つ腕の力を緩め、ホノオは光り輝くセナの体に目を向けた。酷かった体の傷は、あっという間に治ってゆく。

まさか……。まさか！　期待に顔を輝かせ、ホノオは一歩セナに歩み寄る。左手から、“銀の針”がスルリと抜け、地面に向かって落ちてゆく。――そして、キン、と高く金属音が鳴り響くと、セナの体の光がピタリと収まった。

自分の罪。正体……。そんな重大なオハナシも、今のホノオは忘れ去った。

「おい、セナ？」

夢中で一言を放つと、セナの両目がパチリと開いた。そして体を起こすと、

「あ……ホノオ！」

かつてのように嬉しそうに、セナがホノオの名を呼んでくれたのだった。

「セナ！！」

涙よりも先に、体が動き出した。バッとセナに近寄ると、ホノオは恥ずかしげもなくセナに思い切り抱きつく。セナも初めはただただ嬉しくて、両手を広げてホノオを迎えたのだが……

「良かった……。良かった！　ごめんな、セナぁ……！」

元々力の強いホノオが、泣きじゃくりながら手加減無く抱きつく。ギュッと首に手を回されるとさすがにセナも苦しくなり、

「うぐぐ……！　離せホノオ。苦しいって！」

叫びの混じった声で文句をぶつけた。

ハッと我に返ると、ホノオは焦って体を離す。一拍遅れて羞恥（しゅうち）の感情に襲われた。

「へへ、悪い悪い」

ホノオは涙を拭い、照れくさそうな笑顔を浮かべてセナを見た。

すると、自分と全く同じ表情の彼を見て思わず吹き出しそうになった……が、ぐっと我慢。

「お前、あの後大丈夫だったのか？」

と、何気ない口調でセナは聞く。“あの後”とは、セナがやられた後のこと。――ホノオ独りが残され、“ボルト”に襲われた時のこと。

“破壊の焔”。それを思い出したホノオは、気まずそうに沈黙した。――本当のことを、言わなきゃならないのかな？

「ホノオ？」

セナが不思議そうに首を傾げたのでホノオは急かされ、覚悟も半ばに語り始めた。――自らがモノクロへと変えた3人の姿を、震えた指で示しながら。

「お前が倒された後、その……青いバッグから、“ホーリークリスタ”が出てきて、それで――」

「そうか……。“ホーリークリスタ”が、2度目の力を使ったのか」

ホノオの言葉をセナが遮る。が、非常に都合のよい解釈だった。ここで正直になれるかどうか、オレの勇気が試されている。そう、ホノオは思った。

「いや、その……。う、うん。そうなんだ……」

オレは、弱虫で嘘つきだった。激しい罪悪感がのしかかる。

「そっか。……辛かったろ？　とんでもないモンを見ちまったんだから」

現在の“ボルト”の姿を見るだけで、容易におぞましい光景を想

定できた。そんなセナは、ホノオの心の傷を気遣う。

「う、うん……」

加害者はオレなのに、何も知らないセナは――。悔しさと罪悪感が、ホノオに“辛そうな”返事をさせた。それは決してセナが案じているような、衝撃的な光景に傷つけられた辛さなどではないのだが……。

「仕方なかったんだ。お前は気にするな」

と言って、セナはホノオの肩に手を置く。その温かさが、とても、とても痛かった。

――もちろん、例え敵とはいえ、命を奪うなど許されない。それは、セナも充分心得ていた。

でも、忘れさせてあげたほうが、ホノオの為になる。そう考えたセナは、少々後ろめたくも、あえてすぐに話を変えた。

なぜか全快しているホノオの怪我と風邪についても、“ホーリークリスタ”のお陰、ということにして自分を納得させた。

「とにかく、このセナ様がお前のために返ってきたんだぞ？　喜べ喜べ！」

と、調子よくホノオの肩をポンポン叩いた。

もう、引き返せない。そう悟ったホノオは、罪悪感を無理やりかき消した。セナを悩ませない為にも、オレは今までのように明るく振る舞わなくてはならない。そう正当化すると、確かにその通りのような気もした。

「あ……。ああ！」

ニッと笑うと、ホノオはようやく曇りの薄れた笑顔を見せた。

それを見て、セナはホッと安心する。ようやく、気兼ねない会話を交わせる。弾む心で、改まってセナは咳払いをして一言。

「ホノオ、ただいま！」

元気なセナの声が、洞窟に響いた。

「……おかえり、セナ！」

生き生きとしたホノオの返事が響く。

「えへへ……ただいま！」

と、再びセナ。

「へへっ、おかえり！」

ホノオの返答。

「ただいまただいま！」

「おかえりおかえり！」

「ただいまただいまただいま……」

「もういいよっ！」

と、ふざけ合ってみると、あの笑いがこらえきれない感覚が蘇（よみがえ）った。

「アハハハハ……！」

声を重ねて、2人は笑う。居心地のよいこの関係が、とても懐かしかった――。

「はぁー。笑いすぎて腹が痛い」

一段落してため息をつくと、セナが言う。

「オレもー。お前が笑わせるから悪いんだぜ？」

と、ホノオが“温かな”喧嘩を仕掛けると、

「いいや。オイラは悪くないね」

おどけて頬を膨らませつつ、セナは言い返す。

「何をーっ！　はじめにふざけたお前が悪い！」

ホノオが言うと、セナは何かを企んだようにニヤリと笑みを浮かべた。

「わかったわかった。んじゃ、悪いのはお前じゃなくて、“笑えるほどおかしいお前のツラ”ってことにしようじゃないの。はい、お

あいこおあいこー」

その言葉に、

「はぁー、ショックー！　セナに酷いこと言われてオレ超泣きそう～！　もう！　イジメは駄目だヨ！　謝りなヨ！」

途中から無理に高い声を出し、シアンの真似をしながらホノオが言うと、

「ぐすん……。ボク、いじめてないのにホノオにいじめっ子って言われたよぉ～……」

と、セナはヴァイスの泣き真似で対抗した。

「エッ……。ごめんネ、ヴァイス！　ヴァイスはいじめっ子じゃない――けど！」

途中で声を元に戻すと、ホノオは素早くセナの背後に移動し、背中にのしかかった。

「セナはいじめっ子～！　さーあ、謝れ謝れ～！」

そう言うと、セナの首や腕を思い切りくすぐった。

「きゃうっ！」

突然襲いかかる感覚に驚き、セナはおかしな声を上げた。とっさに“高速スピン”で抵抗しようとしたが、ついつい身をよじってしまい、体にうまく力が入らない。ムキになって笑いをこらえてみよ

うとするものの……

「きゃはははは！　やめっ、やめろ～っ！」

すぐにセナは限界に達し、洞窟にかん高い声が響いた。

「ちゃんと謝ったら許してやるけど～？」

と、ホノオ。その強気な笑みも、久しぶりに見せたものだった。

「ごめっ……くふふっ、ごめんごめん！」

必死にセナが叫ぶが、

「“なさい”は？」

と、ホノオは悪乗りを続ける。

「ふえぇ！？　なっ、なさい！」

「そうじゃなくてぇ……」

「ははっ！　ごめ……ごめんなさーい！」

「ほい、合格～♪」

ようやくホノオはくすぐるのをやめ、セナの背中から飛び降りた。

そして、

「よしゃーっ！　オレの勝ちー！」

などとはしゃぎながら、両手を振り上げて歓声を上げた。が、次の瞬間。

「はうっ……あっ、あはははは！　ちょっ、やめろよっバカ！」

今度はホノオが笑い転げる番だった。気を抜いた彼を襲ったのは、セナの復讐。

「なあんだ。ホノオちゃんも弱いじゃ～ん♪」

気味の良い仕返しにニヤリとしながら、セナはホノオのわき腹やお腹をコチョコチョとくすぐる。――身をよじって苦しそうに笑うホノオを見ると、セナはつくづく、自分に甲羅があってよかった……と思うのだった。

「やめっ――ひゃはっ、ははは……！　こ、このっ！」

力を振り絞って、ホノオは左手で思い切りセナを振り払った。

「あだっ！」

仰向けに体を倒され、セナは奇声を上げる。頭を痛そうにさすりながら上半身を起こした、その時だった。

自分のすぐそばで、ホノオの尻尾に灯る炎の光を反射した何かが、キラリと光ったのを見つけた。ヨイショと声を上げながら、体をひねってそれを掴んでみると……。

ヒヤリと冷たい感覚。それは、“銀の針”だった。

「……」

セナは“銀の針”を寂しげな表情で見つめる。どうして、何のために、青いバッグの中からこんなものが出されているのか……。その理由は――“本当の理由”をバッチリ当てるのは当然セナには不可能であるが――、容易に予測できた。

「はぁ、はぁ……。このっ！　１００倍返しにしてや――」

倒れ込んだホノオが起き上がり、セナにさらなる仕返しをしようとしたが、セナが“銀の針”を持っているのを見ると、言葉を失った。

見られて、しまった。

一方のセナは、自分の過ちを改めて突きつけられた。

もう、楽になりたい。――そんな間違った動機でオイラが死を選んだせいで、ホノオは……。残されたホノオはどれほど辛かったのだろう？　独りで心細かっただろうな……。オイラの後を追いたくなるほど、責任を感じたんだろうな……。

セナの中に“ごめん”が溢れ、それは涙に変わった。

「セナ……」

「ごめんな、ホノオ」

ホノオの声を、セナはかき消した。

「ごめん。オイラ今まで、本当にお前に悪いことしてたよな……。ちょっと辛かっただけなのに、ひねくれて、心を捨てようとして……。残酷なこともしたし、独りでお前の元から消え去った。支え合うべきだったのに……ごめん」

悔しそうにホノオの辛さの象徴――“銀の針”を握りしめ、セナは心からの謝罪をする。

「……謝るなよ、バカ」

ホノオはさらに続ける。

「元々はオレが、敵を殺そうなんて、間違った考えをしたからだよ……。お前がせっかく勇気を出してオレを止めてくれたのに、オレはその勇気をも粉々に砕くような、酷い言葉を言っちまったんだ……」

「でも、オイラのせいで、お前はこんな……」

“銀の針”を見つめて反論するセナに、ホノオはうつむいて言う。

「もう、やめてくれ……。二度と、“オイラのせい”とか言うなよ……。辛いんだよ。あの時オレが“お前のせいだ”って怒鳴ったことを、責められてる気がしてさ」

「あ、うん……。ごめん」

「“ごめん”も禁止。今度言ったらぶん殴る」

「う、うん」

少しの間沈黙した後、セナは控えめに話し出す。先ほどまでのふざけた雰囲気が、すっかり静まりかえっていた。

「あのさ、ホノオ」

「ん？」

「その……。もう二度と、離ればなれにならないようにしたいな、って思ってさ。そうなったら、いいよな」

照れながらセナが言うその言葉に、ホノオはハッとする。

――わからないからだ。“破壊の魔王”である自分が、セナと一緒にいて良いのかどうか。セナを再び破壊に導くかもしれない自分と一緒にいて、セナは幸せなのかどうか。

「……あれ、ホノオ？」

不安げに、セナは聞き返す。

「セナ。あのさ」

真剣な眼差しで、改まってホノオは言う。

「オレがもし、お前を破壊に導く存在だったらどうする？　オレ、お前と一緒にいて良いのかなぁ？」

勇気を振り絞り、聞いてみた。――でも、“破壊の魔王”という言葉は出せなかった。

「バーカ。ありもしない“もし”を聞くんじゃねえよ」

と、セナは舌を出して言う。

「オイラはお前が必要だから、離ればなれになりたくないなんて、照れることをわざわざ言ってやったんだ。お前に、一緒にいてくれって言ってんの。わかる？　お猿さん。ことばもわからなくなっちゃったんでちゅかー？」

こう馬鹿にされると、どうもホノオは悩みも忘れて反撃に走ってしまうらしい。自分の単純さに気がついて苦笑いしながらも、

「あっ、思い出した。オレ、お前に仕返ししようとしてたんだった♪」

と、セナに詰め寄った。

「げっ、マジで！？」

ふざけた表情が、真剣にこわばる。さすがにもう、くすぐられるのは嫌そうだ。

「ふぁあ……。
オイラもう寝るから攻撃しないで。お休みぃ」

と、あくびをして仰向けに寝転がり目を閉じるが、

「あれー？　ホントに寝たのかしらー？」

と、ホノオはセナの尻尾を軽くつついた。

「ひゃうっ！」

変な声を漏らし、セナはピクリと身を動かした。

「おー寝た寝た。じゃあくすぐられても笑わない……よなぁ？」

と、ホノオはセナの尻尾に両手を伸ばしたのだが……。

「あれ……なんか、眠、い……」

不意に襲った激しい眠気に屈し、ふらりとうつ伏せに倒れたのだった。

「にひひ♪　必殺“あくび”、大成功！」

密かに技を使ってホノオを眠らせたセナは体を起こして、眠ったホノオを見つける。

そして、クスクスとおかしそうに笑うのだった。

しかし、すぐに笑顔を消して一言。

「お前らしくもないこと言うなよ」

誰にも聞かれず、言葉は消えた。

第２８話：ガイアの伝説――その１（前書き）

無事、オイラは生き返ることができた。ホノオと前みたいにふざけあえて、なんだか安心した。

……ただ、銀の針がどうも心に突き刺さるんだよね。ホノオには、本当に悪いことをした。

とにかく、これからもよろしく。ホノオ。

（語り：セナ）

第２８話：ガイアの伝説――その１

冷め切った感情が暖かさを取り戻し、秘めていた強さを発揮したセナの１日。奪われた友の復活を心から喜ぶ一方で、自分が命を奪った罪悪感、そして恐怖を胸に秘めたホノオの１日。

特別に長く感じた１日だったが、やはり時間は無限ではないらしく、どこか空気に余韻を残したまま日にちをまたいだ。

朝陽が昇らない、暗い洞窟内。しかし、彼らの体内時計は目覚めに向かって準備を始めていた。

その時だった。セナが夢の中で、ホウオウに語りかけられたのは。

「セナ」

周囲の様子に気を配っている余裕はセナにはなかった。ただ、呼びかけるホウオウの声を聞いたとたんに、身が引き締まった。ホウオウの姿は、見えない。

「ホウオウか？」

「ええ、そうです」

セナの確認に答えると、ホウオウは一拍置いて話し始めた。

「昨日はお前とのバトルに真剣になりすぎたせいで、私としたことが……お前に伝えるべき情報を伝え忘れまして。それで、お前の夢の中にテレパシーで干渉しているのですよ」

「伝えるべき情報？」

「ええ。だってお前達。この“迷宮の洞窟”を抜けた後に目指す場所を決めていないでしょう」

「ま、確かに……」

昨日セナはホウオウに、スイクンを助けてほしい、と言われた。しかし、そのためにどこにゆけばよいのか分かっていない。

「実は、私にもスイクンの居場所が分かりません。何故でしょう……ここしばらくの間、スイクンにうまくテレパシーが送れないのです。それで、連絡が取れなくて」

「そうか。なんか、不安だな……」

どこか不気味さを感じさせる情報だった。

「でも、手がかりはあります。“灼熱の火山”に向かってください。そこにいる“エンテイ”というポケモンに会えば、スイクンの捜索が楽になることでしょう」

「“灼熱の火山”、“エンテイ”……。よし、分かった。ありがとな」

キーワードを心に刻み込んで、セナは頷いた。そして、セナは夢が終わりに近づいたのを感じ、ホウオウに別れを告げようとしたとき。

「……セナ」

再びホウオウに呼ばれた。

「謝らせてください。私は昨日、お前に1つ嘘をつきました」

「え？　嘘、って……」

首を傾げるセナに、ホウオウは戸惑いながら話を進める。

「本当はもう、私は“破壊の魔王”の正体を知っているのです。しかし、決まりがありまして……。私のような階級の高い伝説のポケモンは、運命に定められた範囲内でしか、ガイアに干渉することができません。ですから、正体を言うことが許されなかった」

「いいよ、別に言わなくても。それくらいはオイラがなんとかしなきゃ」

「そう言って頂けると良いのですが――」

少し、間が空く。ホウオウがまだ何か言いたそうな様子なので、セナは耳を澄ませてじっと待った。

「セナ。これから私が言うことを、よく心得ておきなさい」

「何だよ？」

「本当はこれも、伝えることは規則に反するのかも知れません。でも、言わずに後悔したくありません。私だって、心を持ったポケモンなのですから」

「な、何？」

なかなか本題に入らないので、セナは少し不安な気持ちに襲われた。

「いいですか？　真実を知ることが、いつも幸せとは限りません。とうに分かっているとは思いますがね、念のため」

「えっ、それって……？」

案の定、セナの不安な気持ちは煽（あお）られた。しかし、聞き返した途端に、ホウオウと連絡がとれなくなる。夢が、覚める――。

「はぁ～」

目が覚めると、セナは体を起こし、ため息。深い、謎の意味がこもっていそうなあのホウオウの言葉を、何度も繰り返した。

（真実を知ることが、幸せとは限らない……か。つまり、オイラは“破壊の魔王”の存在を知っちゃ――）

「よっ、セナ。おはよー！」

ホノオの元気な声で、セナの思考が遮られた。セナより一足先に、彼は起きていたらしい。思い返すと、さっきからホノオの尾に灯る炎のお陰で洞窟がほんのり明るかったような気がした。

「あ、あぁ。おーす、ホノオ！」

ひとまずホウオウのことを忘れ、セナは元気に振る舞う。しかしホノオは先ほどのため息を見逃さなかった。

「どした？　まだ何か悩みあるん？」

「いや、悩んじゃいないさ。ただ――」

と、セナはホウオウからのテレパシーの情報――すなわち自分達の次の目的地――をホノオに伝えた（昨日の“命の神殿”での体験など、大まかなホウオウの情報は昨日のうちにホノオに伝えていた）。もちろん、“ため息の元”は奥底に隠して。

「そっか。“灼熱の火山”に行って“エンテイ”に会えば、スイクンを見つける手がかりが得られるのか」

セナの簡潔な説明のお陰で、ホノオも正確に把握したようだ。

「ああ。頑張ろうぜ、ホノオちゃん！」

と、何気なくセナが呼びかけると、ホノオは首を傾げた。

「あれ？　どしたの？」

「……いや。お前さ、昨日から時々オレのこと“ホノオちゃん”って呼ぶだろ？」

「あ、あぁ。深い意味はないぜ、何となくだよ。別にシアンに“ちゃん”づけするときみたいな嫌がらせじゃないんだけど……なんでだろな？」

「いやぁ、嫌がらせだとは思っちゃいないんだけどさ。ただ、その呼び名、人間の時にたまにお前が使ってたやつだから……」

ホノオが言うと、セナはニコリと顔を輝かせた。

「そっか！　オイラ、少しずつ記憶を取り戻しているのかも。……よっし！」

「そう……なのかもな」

喜ぶセナ。しかしホノオは、いまいち反応が薄い。彼との人間としての思い出も、いずれ思い出せるかもしれないのに。

少々不審に思ったセナだが、昨日ホノオを襲った精神的ダメージが癒えていないのだと考えると、納得した。

笑ってるのも、今のホノオにとっては辛いのかも、と思う。

「まっ、全ては順調、順調！　今日も張り切って行こうぜ、“ホノオちゃん”！　アーユーレディ？」

「なっ……。オレは“レディ”じゃねぇ！　れっきとした男だ！」

「は……！？」

セナのはつらつとした号令で盛り上がるかと思いきや、“ｒｅａｄｙ”と“ｌａｄｙ”――。ホノオの勘違いのせいで、どこか抜けた始まりになってしまった。

一方その頃。濁流（だくりゅう）に飲まれた後、昨日無事に目を覚ましたヴァイスが、静かに目を覚ました。辺りには、河口付近の広い川、針葉樹。潮風が漂っている。――昨日目覚めた場所だった。

キョロキョロと見回してみると、昨日のジュプトルがあぐらをかいて座り、じっとこっちを見ていることに気がついた。

「うわぁ！　びっくりしたぁ。もう起きてたんだね。おはよう」

ヴァイスが人懐っこい笑顔を浮かべてジュプトルに話しかけるが、彼はちょいと頭を下げただけ。昨日からの口数が少ない印象もあったので、ヴァイスはこのジュプトルの声を忘れてしまった。

「ウーン……」

誰かがうなる。一瞬ヴァイスは、あれ!?　このジュプトルってこんなに高くて可愛い声だったかな？　――などと錯覚するが、すぐに気がつく。高くて可愛い声と言ったら……。

「あ、ヴァイス！　おはよう♪」

やはりシアンだった。自分達が濁流に流されたのをすっかり忘れたかのような、のん気な一言。ヴァイスは苦笑いするが、シアンらしいな、とホッとする。

その直後、いくつもの“おはよう”と、自分達が助かっている事に対する歓喜の声があがった。メル、ソプラ、アルル、ブレロ、ブルル。みんな、無事だったのだ。――最も、炎タイプのヴァイスが生存しているのなら、不思議ではないのだが。

しばらく一同が賑やかだったので、寡黙（かもく）な彼はなかなか気付かれない。

「……あら？　アンタは誰だい？」

ヴァイスすらジュプトルの事を忘れかけたとき、ようやくメルがジュプトルに気がついた。

そう言えば、まだこのジュプトルの名前を聞いていないな、とヴァイスは思う。

皆が静まり返り、ジュプトルに注目した。

「俺の名前は“ネロ”。流されてきたお前達を見つけた」

あっ、そうか。こんな低くて落ち着いた声だったな。――これがヴァイスの素直な感想だ。

「そうかい。感謝するよ」

「ありがとうございました」

「カッコいい名前だネ！」

メルの後に一同は（ヴァイスも再び）感謝の言葉を重ねたが、シアンの甲高い声が1つだけ浮いていた。

「ん。別に。ついでだから」

照れくさいのか、愛想が悪いのか。ネロと名乗ったジュプトルは、ヴァイス達と目を合わせずに短い言葉を返す。

「“ついで”って、なんのついでナノ？　教えて教えて！」

どこか話しかけにくい雰囲気を放つネロにも積極的なシアンは、この時ばかりは皆の尊敬の的になった。

「名前」

ネロのぶつ切りの言葉が何を要求するのか、メルでさえもピンと来なかった。

「教えろ。お前達の名前」

そう言えば、まだこちらが名乗ってなかった。ハッと気づいたヴァイスはすぐに口を開き、

「ボ――」

「シアンはネ、“シアン”っていうんだヨ♪」

名乗ろうとした途端、シアンにかき消された。

「あ。アタイは“メル”ってんだ」

「アタシは“ソプラ”」

「ボクは“アルル”。あっ、ボクもソプラも、女の子なんだ」

ヴァイスの言葉があまりにも呆気なく消されて聞こえなかったため、女性陣も遠慮なく言葉を重ねた。性別誤認による“犠牲者”を減らすために、アルルはやや詳細な自己紹介を。

「僕は“ブレロ”で、」

「オレっちは“ブルル”。それで……」

と、ブルル達はヴァイスに視線を送り、うまくバトンを渡してくれた。

「ボクは“ヴァイス”だよ」

思えば昨日からの付き合いだったネロに、ヴァイスはようやく名前を教えることができた。

「ん？　“ヴァイス”？」

珍しくネロが疑問の表情をつくり、聞き返してきた。

「うん、“ヴァイス”。おかしい名前かな？」

「いや、別に。よく聞こえなかっただけだ」

ネロは目を合わせずに、そう答えた。

「ねえ、ネロ」

ヴァイスとネロの会話が終わるとすぐに、メルが待ちわびていたようにネロに声をかけた。右手には、ヴァイスの赤いバッグから取り出した地図が。

ネロは動揺したような、ギョッとしたような反応を見せた。

「……あら、驚かせちゃったかい？」

「いや、別に。ただ、名前で呼ばれるのに不慣れなだけだ」

メルは予想もしていなかったネロの返答に少々戸惑うが、

「そうかい。じゃ、なんて呼べばいいんだい？」

「いや、名前でも構わない。直に慣れる」

「……そうかい。じゃ、ネロで」

結局、呼び名の話もすぐに終わり、本題に入る。

「ねぇ。ここがどこだか分かるかい？　アタイ達は“渓流の谷”から流されてきたんだけど」

と、メルが地図を地面に広げ、指差しながら説明する。

「ん」

と一言だけ返事をし、ネロはしゃがんで地図の北東部を指差す。

「“風の松林”、か」

ネロが示す地名を地図から読み取り、ブレロが呟いた。

「ずいぶん流されたな。これからどうやってクソザルとセナを探そうか……」

ソプラがさらりと口にした“クソザル”という言葉に、ネロは一瞬驚いたようだ。

「ここまで大胆に流されちゃったら、もうネイティオに聞きに行った方が正確だよな」

ブルルの言葉に、皆が頷いた。そもそも今までは、たまたまネイティオを頼らなくとも場所の見当がついたから、迷わず東に進んで

いたのであって――。

「じゃ、ネイティオさんがいる“精霊の崖”を目指そうか。かなり遠くまで流されちゃったけど……頑張ろう！」

と言ったのはアルル。やや内向的な彼女のこの言葉には皆が驚き半分、喜び半分といった反応を見せたが、残念ながらヴァイスは、アルルの言葉――と言うよりはこの会話全般をよく聞いていなかったようだ。

理由はもちろん、昨日みたセナの夢。

（みんな、セナとホノオ探しを頑張ってくれている。だけど……セナはもしかして、もう……）

あまりにもリアルな夢。その嫌な予感が拭えなかった。

「ヴァイス～？　どうしたノ～？」

シアンが静かなヴァイスを不思議に思い、声をかけた。そこで、ハッと我に返る。

「あ、いやぁ。何でもないよ。ただ、セナ達が無事だといいなぁ、って」

なんとかちぐはぐな言葉を繋ぐと、

「セナとホノオは強いから、大丈夫だよヴァイス」

「仲もいいし、協力してうまくやってるさ、きっと」

ブレロ、ブルルが励ましてくれた。

「そもそも、アタイ達がこんなに奇跡的な生還を果たしたんだ。セナ達だって、ちょっとやそっとの困難にゃ負けないさ」

と、メル。確かに、今自分達が生きている事が不思議。でも、あんな酷い目にあっても生きている。

（そうだよね。きっと、大丈夫だよ）

自分に言い聞かせると、

「そうだよね。ありがとう！　それじゃ、行こう」

表面上は、いつも通りのヴァイスになった。

「ネロ、ありがとうね。アタイ達はもう行くよ」

メルがネロに別れを告げると、皆がネロに手を振ろうとするが、

「俺も行く。ついでに」

と、ヴァイス達と共に歩き出した。

「あっ、そう言えば。“ついで”って、なんのついでナノ？」

ネロの言葉を聞くと、しつこいまでの好奇心でシアンは尋ねる。上目遣いでアピールしているが、ネロのような無関心そうな性格の者には効果が薄そうだ。

しかし、観念したように少し肩をすくめると、ネロは一言で答えた。

「調査」

第２８話：ガイアの伝説――その２（前書き）

ボクらを助けてくれたジュプトルさんは、“ネロ”っていうお名前みたい。とっても無口で、なんだか不思議なポケモンだなあ。

ところでネロさんは、“調査”のついでにボクらを助けてくれたみたいなんだけど……。調査って、なんだろう？

（語り：ヴァイス）

第２８話：ガイアの伝説――その２

初めは真っ直ぐな一本道だった洞窟が、次第にセナとホノオに選択権を与え始めた。右、左、時には３択のうちの真ん中を選び、２人は“迷宮の洞窟”を進む。直感で道を選んだ割には、行き先が詰まることは、まだない。――行き止まりなど、ないのかもしれないな。２人がこう思った少しだけ後のこと。

やはり。行き止まりはあった。

２択の分かれ道の左側へと適当に進む。油断していたセナとホノオの前に、岩の壁が立ちはだかった。

「あちゃ……行き止まりか」

と、セナ。ホノオの「戻ろうぜ」の一声で２人は引き返し、先ほど選ばなかった右側を進む。――すると、次の分かれ道がセナ達を迎えた。セーフ。

だがしかし、先ほどの分かれ道こそが、彼らの“行き止まり奮闘記”の幕開けだったのだ。

しばらくはそんな調子で、２択、時には３択の分かれ道を、ひたすら確かめながら進んでいった。ホノオが「面倒だな」と顔で訴えていたが、それしか前に進む方法がなかったのは明らかだった。

そんなとき、事件は起きる。４択の分かれ道……。

「うげっ、マジ……？」

心底嫌そうな顔でホノオが言うと、セナは苦笑いした。

「はは……。どうする？　とりあえず、右から行ってみます？」

セナの言葉にホノオが頷き、面倒なことこの上ない歩みを進めた。

ようやく右から3番目の通路から次の分岐点に至ったのだが、なんと今度の分かれ道は5択だった。そこも苦労して突破したが、どこまで行っても4択5択が2人に襲いかかる。――それはそれは、取り立てて書き付けるところもないような地味な苦戦であった。

「よし……この、残った道が、正解だ」

「……あぁ」

5択の分かれ道の最後の1つの道を、2人が通ったときだった。次に彼らを迎えた分岐点の数は……10。

「いーち、にーぃ、さーん……もう嫌」

カウントを放棄したセナは、やけ気味にその場に腰を下ろした。ホノオも、絶望で身体から力が抜けたようで、へろへろと地面に座り込んだ。

「……なぁ。セナ？」

「……ん、どした？」

力ない会話が始まる。

「き、休憩……」

「言われなくても……」

しばらく間が空き、

「ゆっくり行こうぜ。そのつもりで――敵もいないし安全だから、休むために来たんだろ？　ここに」

セナが言うが、ホノオはやや不安がちに、ゆっくりと考えながら返す。

「ゆっくり行くのはいいさ。ただ、いつになったら抜け出せるんだよ？　食い物ある？　飢え死にはゴメンだ……。あ、せめて洞窟の中に湖でもあればな……。あるかな、湖？」

「一度にあれこれ聞くなよ……」

呆れた後に、セナはバッグから地図を取り出して答え始めた。

「この“迷宮の洞窟”は、そんなに長い洞窟じゃない。ただ、道があまりにも複雑なんだよな。仮に一発でスパパーンと正解の道を選び続けたら、１日もかからずに脱出成功だ。ただ、迷い続けたら……いつ出られるのやら？　分かれ道が１０本だから、１０日だったりして……」

「この先分かれ道が１００本だったら？」

「……１００日？」

「ははは……」

「はは、ケッサク」

笑えない冗談に、乾いた笑いが。しかし、１００本分かれ道も全否定できないこの洞窟は、つくづく恐ろしい。

セナはホノオの質問責めにまた答える。

「湖なんてある訳ないし、仮にあったとしても、こんな洞窟の中にキレイな飲める水があるか？　そりゃあ、ただの巨大水たまりだよ」

「じゃあ食べ物……」

「ん、そうだったな。うーんと、バッグの中のアイテムは、オレンは３個。モモンが２個。麻痺直しのクラボが１個。あとリンゴが６つ。後は……攻撃アイテムなら、“ゴローンの石”が１０個。“銀の針”が３本。“爆裂の種”が３つ。……不思議玉なら、“払いのけ玉”と“バクスイ玉”、“光の玉”……それぞれ１個ずつ。つまり、食べられるアイテムは１２個で、２人で割れば６個。“爆裂の種”なんて食えたもんじゃないし、腹の足しにならないよ」

「うん。２人で割らなければ間に合うのか……」

ホノオが深刻にうつむいて言う恐ろしい言葉にセナはゾッとして、裏返った声でホノオに話しかけた。

「おいおい、仲良く行きましょうよ！」

「……いや。オレはいいから、お前が全部食え」

血みどろの食べ物横取り宣言かと思いきや、ホノオは自らの食べ物をセナに譲るという。

「……バカ。昨日言ったばかりだろ！　オイラはお前がいなきゃ嫌だからな。だからお前も食え！」

少し照れながらもセナはホノオを思って怒鳴りだした。すると、当のホノオはまさかのリアクションを。

「あっははは！　騙されたー！」

セナを指さして笑い始めた。

「ただの冗談だったのに、すっげー本気にするのな。ホント、お前はお堅いんだからっ」

満開の笑みは、騙されたセナには憎たらしく映った。

「だっ、だって！」

「でもさ、」

セナの反論をホノオが遮る。しかし、“だって”の続きを考えていなかったセナにとっては都合がよかった。

「お前からこーんなストレートな言葉が聞けるとはな。『オイラはお前がいなきゃ嫌だからな』……か。素直になったねぇ、お前も」

言葉を心の中で繰り返すと、セナの中に恥ずかしさが溢れた。し

かし、あのまっすぐな言いまわしにも理由があったのだった。

「うるせえな。少し照れても、伝えたいことは伝えておかないと、後悔するかもしれない。伝える機会がなくなる怖さを知って気がついただけだよ」

「そっか……」

命の終わり時に悟ったことをセナが伝えると、ホノオは少ししんみりとうつむき、

「ま、何はともあれ、大きな進歩だ！　サメハダ岩に帰ったら、ヴァイスにもいっぱい愛を振りまけよ」

明るく、そして後半は気持ち悪く。

「てめーみたいな気持ちの悪いセリフは言わねえよ」

「オレがいつ気持ちの悪い言葉を行った!?」

「さあ？　でもなんとなく」

「なんだよ、なんとなくって！」

そんな、くだらない会話を交わしていたときだった。突如、セナは睡魔に襲われる。

「ふぁあ……」

「むっ、お得意の“あくび”か!?」

「いや、技じゃなくて、なんだろ、急に、眠く……」

まぶたを下ろそうとするセナを見て、一瞬、ホノオの顔はこわばる。昨日、眠るように息を引き取ったセナを見たからだ。

「おいっ、死ぬなよ、セナ！？」

必死に頬を叩くが、セナはとうとう目を閉じた。

が。きちんと呼吸をしているし、体温から命の温もりを感じられた。

「なんだよ、ビックリさせるなよ」

ホッとして呟くと、ホノオはセナの顔をじっと見る。そして、先ほどのセナの言葉を思い出した。

オイラはお前がいなきゃ嫌だからな。

（セナ。オレ、生きていていいんだよな？　お前が許可してくれるんなら、いいんだよな……？）

昨日、３つの命を焼き尽くした焔。それを放った左手を、ホノオは凝視した。

一方のヴァイス達。

ネロが放った謎の言葉、“調査”を聞いた後のことだ。

「ねえねえ、調査って何の調査ナノ？　教えて♪　ね、ねっ♪」

言葉の意味の推理にかかろうとした者や、ネロに聞き返す勇気はない者。そんな残りの仲間にお構いなく、シアンがネロに甘えて聞き出した。

「ん。こっち」

とだけ言うと、ネロはみんなに背中を向けて歩き出した。

「まってヨ～！」

シアンの言葉の後に、ヴァイス達はネロの後を追い始めた。

「で、どこにいくんだろうね？」

と、ヴァイス。シアンはネロにあれこれと話しかけているため、残りのメンバーが歩きながら話し合っている。

「お化け屋敷かな？　それとも……呪いの洋館？」

「ふえぇ、怖いよ……！」

ブレロのふざけた言葉に、アルルがふるえて怖がった。

「大丈夫、アルル。そん時はヴァイスが助けるからさ♪」

ブルルが言うが、

「ボクも、お化け怖いよ……」

とヴァイス。

ブルル達は、ヴァイスは「うん」と恥じらいもせずに即答すると思っていたため、期待はずれの言葉に呆れ果てたようだ。

「シャキッとしろよ、情けねぇなぁ」

そう言うソプラの方が、むしろ男らしい。――なんて言葉を彼女にかけたら、例えそれがほめ言葉であっても雷で射抜かれるだろう。

「セナに会ってからのお前は変わったと思ったのにな……」

「根本的には変わってない……」

ブレロとブルルは苦笑い。ソプラが豪快に笑い飛ばしたことで、その場は賑やかな笑い声で溢れた。

「あはは！」

と笑いながら、メルは両手で広げた地図に目を通し、首を傾げた。ネロの話や態度からは、目的地はそう遠くないことが分かる。しかし地図には、それらしきものが載っていないのだ（最もその地図は、例えばポケモン達個々の家が載っているような詳しいものではないのだが）。

（地図にない場所……？　まさかね）

「ん。あれだ」

ネロは不意に前方を指差す。針葉樹の細い幹が重なった隙間から、

何やら建物が見えた。

「うわっ、すごい！」

「なんだろ？　行こうぜ！」

メルとネロを除くみんなは、子供らしさ全開の反応を見せ、ネロの目的地に向かって走り出した。

その様子を見たネロは、ポツリと一言、メルへ投げかけた。

「元気だな」

「まあね」

一拍おいて、

「いいことだ」

と、優しく大人びた笑顔でネロは言う。メルは初めてネロとまともな会話ができたような気がして、少し嬉しくなった。

「アンタ、笑っていればもっとカッコいいのにね」

「“もっと”？」

しまった、とメル。余計なことを言ってしまった。

「あっ、いや。うん、何でもないよ。それより、行こっ。みんなを待たせちゃう！」

「ああ」

焦って言葉を重ね、メルは駆け出し、ネロが後を追う。もっと話していたかったような、早くその場から逃げ出したかったような、不思議な会話をメルは終わらせたのだった。

遠くから見えた建物が近づく度に、メルはあることを確信した。そして、いよいよその建物を前にした。

「すごいね、お姉ちゃん！」

ヴァイスの歓声は、この建物への賞賛だろうか。それともお化け屋敷ではなかった安堵だろうか。

「ああ」

返事をして、メルは隅々まで建物に目を通す。

その建物は、温かみを帯びた、年代を感じさせるような色をしている。白と黄土色と茶色を混ぜたような、そんな色だ。太い柱に支えられ、ガッシリと丈夫な壁で内部を覆い（しかし正面からは見えない場所は一部壁がない）、高さがかなりある。屋根は平らで、全体的に直方体のような形である。正面には重そうなドアが。

（何度も本で読んだ、何度も挿し絵で見た、あの場所だ……）

メルは驚くとともに、表情を輝かせた。

第２８話：ガイアの伝説――その３（前書き）

アタイ達は、ネロの調査についていくことになった。シアンがわがまま言うからね。

ネロは無口で無表情だけど、笑っているとなかなかカッコいい――コホン、なんでもないよ。

さて、愉快な仲間たちと共に調査の現場に到着したわけだが……この場所を、アタイは知っている。

（語り：メル）

第２８話：ガイアの伝説――その３

みんなが建物の前に集合した。不思議な雰囲気をまとったその建物に見とれ、シアンでさえも黙っている。静かなその場に音を立てたのはネロ。重い扉を開けると、建物の内部がみんなを迎えた。

正方形の形をした建物。ネロが開けた扉の反対側には壁がなく、外からの光が差し込んでいる。さらに中央には、大きな円の内部に立派なポケモンの姿――もちろんヴァイス達はその種族を知らない――が描かれている。その図形はぼうっ、と不思議な光を放つ。どうやら、何か意味のある魔法陣らしい。外部の光と魔法陣の光が建物を照らし、扉を閉じても辺りは明るかった。

「うわー、すごーい！」

シアンが歓声を上げると、メルが呟く。

「ここは……“神秘の遺跡”だね」

すぐにメルに視線が集中する。

「メルさん、ここ知ってるの！？」

声をそろえてブレロとブルル。

「あぁ。アタイが小さい頃、父さんにガイアの神話の本をもらってね。その神話の舞台の多くは、この“神秘の遺跡”なんだ」

「へぇー！　どんな話なの？」

ブレロがメルの話に食いつく。メルがみんなを見回すと、目が輝いていた。ネロでさえも、メルが語ろうとする神話に興味を示していた。

「そうだね。例えば……」

と、メルは、ガイア誕生のエピソードについて語り始めた。

遥か昔のこと。なにもない宇宙に、突然2人のポケモンが誕生した。その名は“アルセウス”と“ミュウ”。しばらくは2人だけで広い宇宙に暮らしていたが、当然退屈してしまう。そこで2人は、“世界”を――ガイアを創ることにした。

まず、アルセウスがガイアの本体をつくり、豊かな自然を産んだ。その後、2人は力を合わせて数人のポケモンをつくった。ルギア、ホウオウ、ディアルガ、パルキア……などと言った、“伝説のポケモン”だ。

しかしそこで、ガイアの本体をつくったアルセウスは疲れ、数億年単位の眠りについた。彼（アルセウスには性別がないのだが）が眠っている場所が、この“神秘の遺跡”の魔法陣の下だと言われている。

余力のあるミュウは、時空のねじれる宇宙を旅し、他の惑星を見て回った。その時、生命にあふれる豊かな惑星をいくつか発見したのだった。

ガイアに帰ったミュウは早速、旅の途中で見つけた生き物達を参考にし、ホウオウと協力して、ガイアに多くの生き物をうみだした。

こうしてポケモンが生まれて、現在のガイアがあるのである。

「へぇ……。ガイアを創造したアルセウスが、この下で眠っているのかぁ」

魔法陣を見ながら、関心の声を上げるのはアルルだ。

「いつ起きるんだろうな」

と、ソプラ。もちろん、答えを知るものはいなかった。

「ねぇ、メルさん。セナさん達を襲ったスイクンに関する神話はないの？」

アルルが言うと、

「あぁ、そういえば……」

メルはまた話し始めた。

ガイアにポケモン達が誕生して、しばらくは皆が仲良く暮らしていた。ところがある時、ガイアの南に住むポケモン達と北に住むポケモン達の間に争いが起こった。

その争いを止めるために立ち上がったのは、ちょうど南北の境界に住んでいた3人のポケモン――シャワーズ、サンダース、ブースターだ。3人の熱心な、時には体を張った呼びかけによって南北の争いは止んだ。

しかし、その活動で負った傷や毒のせいで、3人は若くして命を

失った。ちょうどそのときだった。平和になった世界に再び混乱が訪れたのは。

突然空からやってきた、レジロック、レジアイス、レジスチルという3人のポケモンが、ガイアで暴れ始めたのだ。

ガイアのポケモン達が力を合わせて戦うが、とてもかなわなかった。そこでホウオウは、シャワーズをスイクンに。サンダースをライコウに。ブースターをエンテイに、それぞれ生まれ変わらせ、3人は再びガイアを救ったのだった。

その決戦の場所が、ここだったのだ。

「わぁ、カッコいいネ！」

歓声を上げるシアンだが、一方でヴァイスは不安を感じた。

（スイクンがそんなにすごいポケモンだから、みんなセナやホノオが悪いと思うんだ。それより、セナは――）

ヴァイスが考え事をしているうちに、みんなの話は進む。

「他にもあるんだけどね、忘れちゃったよ。それで、ネロはここでどんな調査をしてるんだい？」

メルがネロに話をふると、答え始めた。

「俺は最近この場所を見つけた。ここには魔法陣の他にも不思議なものが多くある。もしかしたら、今ガイアに起こっている異変の謎に関係しているものがあるかもしれない」

「なるほど……」

メルが相づちをうち、ブレロはさらにネロに尋ねた。

「魔法陣以外にも、何かあるの？」

ネロは行動で答えた。「ん」と外を指をさして、扉の反対側に進んでいく。一拍遅れてみんなが続き、さらにワンテンポ遅れてヴァイスが続いた。

日の光が８人みんなを照らす。

外にでると、不思議な記号が描かれた、ポツンと立つ石板があった。その下には、大きなバツ印が。

「これ。解読できたらいいのだが……」

ネロの視線の先の石板には、小さな突起がいくつもある。規則性があるようでないような……。

「よーし、わかった。ちょっとみんなで考えてみようか」

メルの言葉で、８人の視線が石板に集まった。

――結局、「点をたどれば文字や絵になるのでは？」とか「逆立ちして見れば文字が見えたりして」という意見は出たものの、やはり石板の模様の謎はなかなか解けない。

「うーん……」

メルがうなると、他のメンバーもつられてうなる。その場の空気が停滞しているその時、

「ん。いないな……」

ネロの一声で、みんなが気がついた。

「あっ、そう言えばシアンさんが……」

「やっぱり。シアンは飽きるよな、こういう作業は」

アルルの後に、呆れ気味にソプラが呟いた。

「きっとお花でも探しに行ったんだね。ボク、探しに行くよ！」

正直、石板の謎を考える気がしていなかったヴァイスが、その場を飛び出してシアンのもとへ向かった。

シアンは“神秘の遺跡”からそう遠くないところにいた。生えている花や草で、冠を作っているところを、ヴァイスが発見したのだ。

「やっほー、シアン。お花、大好きなんだね」

ヴァイスがシアンの背後から近づき、優しく声をかけた。

「あっ、ヴァイス。……ウン、お花大好きだヨ！　遺跡にいても暇だから、ちょっとお花を探しにきたノ」

シアンがそこまで言うと、ヴァイスはシアンの隣に腰を下ろした。
森の木々の葉の間からのぞく青空を見つめ、ため息を1つ。

「ねえ、シアン」

少しぎこちなく、ヴァイスは話し始めた。

自分のリアルな夢にセナが出てきて、別れを告げられたこと。それでヴァイスは、1人で不安を抱えていたこと。そして、ヴァイスが推測する、自分達が濁流に流されても生きていた理由――セナが“助けてくれた”のではないかということ……。

話し終えて目が潤むヴァイスを、シアンはじっと見つめた。

「すごく、いやな予感がするんだ。セナの身に何かあったんじゃないかって、不安で……」

抑揚のないかすれた声で言うと、ヴァイスは静かに泣き出した。

「ヴァイスの気持ち、よくわかるヨ……。怖い夢を見ちゃったら、シアンもいやな予感がするモン」

珍しくしんみりと同意し、シアンはヴァイスを慰める。

「でも、ヴァイス。信じたいことを信じちゃ、だめナノ？」

「えっ……？」

信じたいことを信じる――。シアンの言葉の意味が、ヴァイスには分からない。

「だって、ヴァイスが不安がっても安心しても、セナやホノオの今は変わらないんだヨ？　だったら、ヴァイスが前向きに考えた方が、シアンもセナも嬉しいヨ♪」

一理ある。しかし、そんな単純なものだろうか？　シアンの言葉をイマイチ素直に受け取れないヴァイスだった。

「シアンってネ、お花が大好きだから、雪山や岩場でも、ついついお花をさがしちゃうんだ。おかしいよネ？　でも、崖にお花が生えているのを見つけたときもあるノ」

シアンの幼い語り口調に、ヴァイスは静かに耳を傾けていた。

「そのお花を取ろうとしたとき、崖から落ちそうになっちゃったんだ。その時に、ホノオが助けてくれたノ♪　だからホノオを初めて見たときは“カッコいい”って思ったんだけどネ。ホントはすごくおバカさんなんだって、すぐに分かっちゃったノ～」

どんどん話は脱線し、主題はいつの間にかホノオの笑い話に。でも、くだらないことを楽しげに話すシアンを見ていると、不思議と憂鬱な感情がなくなっていった。

シアンはずいぶんと長く語ったあと、

「ふぅ。もうネタギレだヨ」

と、ホノオの話を締めくくると、ようやく本題を思い出したようだ。

「シアンはセナもホノオも無事だって信じてるヨ！　だって、そっちの方がうれしいモン♪」

純粋なシアンの笑顔を見て、ヴァイスの顔にも素直な微笑みが戻った。

（セナはボクの友達。そう、夢で約束したんだ。友達なんだから、ボクはセナを信じなきゃ！　……信じたい！）

迷いが晴れた。再び、希望を持って旅を続けられそうだ。

「ありがとう、シアン！　ボク、もう大丈夫だよ」

ヴァイスが元気に言うと、シアンは先ほどまで作っていた花の冠を、ヴァイスの頭にそっと乗せた。そして、ピョンと跳ねるように立ち上がった。

「ヴァイスにあげる♪」

「ありがとう」

言葉を交わし、クスリと笑うと、２人はみんなが待つ“神秘の遺跡”へと向かう。

＞ｉ３０２２４―４３４＜

密かに、今日のヴァイスに元気がないことを気にしていたアルルだったが、花の冠を頭に乗せた彼が笑顔で戻ってきたため、つられて満開の笑顔になった。

第２８話：ガイアの伝説――その３（後書き）

一度、ガイアの伝説や成り立ちなんかを書いてみたく、今回の話ができました。伝説のポケモンに多数のオリジナル（実は既出だったりして？）設定がありますが、ご了承くださいませ。

しかし、８人同時に動かすのは大変です。しばらく更新してない時期もありましたので、一応ここで名前と種族の確認を……。

ヴァイス：ヒトカゲ
シアン：ポッチャマ
メル：カメール
ソプラ：プラスル
アルル：マイナン
ブレロ：ハスブレロ
ブルル：ブルー
ネロ：ジュプトル

こんな感じです！

第２９話：夢の秘密（前書き）

ネロさんに案内してもらった神秘の遺跡では、ガイアの伝説を聞いたり調査をしたり、色々やったヨ。でも、一番楽しかったのはきれいなお花を探すことカナ？

ヴァイスが嫌な夢を見て元気がないみたいだけど、シアンやヴァイスが落ち込んじゃったらきっとセナやホノオも悲しむヨ……。だから、お花のかんむりをあげるから、元気出して。ネ♪

（語り：シアン）

第２９話：夢の秘密

自分の存在。当たり前のようで、一番分からない。――いや。分かっているが、認めたくないだけだろうか？

などと、セナが眠ってしまった後も、ホノオはぐるぐると考え事をした。深刻に考え込むことに慣れていない彼は、ため息を連発し、何度もセナの寝顔を眺めた。

その一方、突然眠りだしたセナは、夢の中で、光が集まり渦を巻いている姿――“ポケモン”に出会った。

「またお前か……。どうしてオイラの夢にばっかり出てくるわけ？」

“ポケモン”の出現に少しいやな予感がしたセナは、眉をひそめて問う。

「まあ、そんなに怒らずに。これからあなたに、夢の世界ではなくて実際の世界でお会いしようと思っているのですから」

「えっ？　どういうこと？」

「ワタシが、この洞窟の案内をして差し上げます」

「……え。うそ？」

人間嫌いの“ポケモン”が道案内という展開に違和感を感じ、セナは疑いの感情を示した。

「そのついでに、先ほどのあなたの疑問――どうしてワタシはあなたの夢に現れるのか、についてお答えしますよ。
ワタシのことを信じられないのなら、そうですね。今あなた達が足止めされているその分かれ道の、右から5番目を選んでみてください。待っていますから」

「えっ、ちょっ……」

“ポケモン”は淡々と、余計な間を空けずに説明を続けた。セナが言葉を挟む時間も与えず、会話は打ち切られ、セナは眠りから覚める……。

「おっ、起きたのか」

少しの間眠っていたセナの目覚めに気がつき、ホノオが声をかけた。

「あぁ。“ちょいと厄介そうなお姉さん”から、いいこと教えてもらった」

セナはそう言うと、“ポケモン”に言われた通り、右から5番目の分かれ道を進み始めた。訳は分からぬまま、ホノオもついて行く。
少し歩くと、約束通り待っていた。渦を巻く光の集まり――仮の姿の“ポケモン”が。

「おいセナ。こいつは“ちょいと”じゃなくて、“だいぶ厄介そうなお姉さん”じゃない？」

“ポケモン”をよく思っていないホノオが言うと、

「ん。そうかも知んないな」

サラリとセナは答えた。そして、“ポケモン”に話しかけた。

「嘘をついてる訳じゃないみたいだな。さて。案内してくださらない？」

「分かりました」

セナの言葉に一言で答えると、“ポケモン”は洞窟を進み始めた。ホノオは訳の分からぬ展開に困惑していたが、セナがホノオに微笑んでみせると、いくらか安心したようだ。大人しくついて来た。

数えるのも嫌になるくらいの分かれ道の数。恐らく１０択よりも多かっただろう。そんな道を“ポケモン”は迷うことなく選択し、どんどんと前に進んだ。普通に進むとかなりの時間がかかりそうな道を、サクサクとクリアしてゆく。

セナは何度か“ポケモン”に話しかけたのだが、答えが素っ気なく、会話が続かない。雰囲気が重いためホノオとの会話を試みたが、ばかばかしい話をしていると、“ポケモン”に置いて行かれそうになる。しばらく歩いているうちに、一行は完全に無口になった。

こうしてかなりの道のりを淡々と歩いていた時だった。洞窟の中に居るということを忘れさせるような、美しい風景が目の前に広がった。

洞窟の壁がほんのりと明るい光を放っている。さらに、背の低い木々が生え、虹色の実をつけていた。見たこともないような、複雑で綺麗な形をした花も生えている。シアンが見たら、絶対に喜ぶ。幻想的で、不思議と落ち着く光景だった。

「うわぁ……」

セナとホノオが声を重ねる。これ以上の発言ができなかった。

「疲れているでしょうし、ここでゆっくりと休むといいですよ。虹色の木の実は食べられますから」

と言うと、さらに“ポケモン”は続けた。

「さて。セナさんの疑問に答えましょうかね」

そこでセナはハッとして、“ポケモン”の方を向いた。それを確認すると、“ポケモン”は語り始める。

「ワタシがセナさんの夢に現れる理由、ですか。それは、セナさんの夢には容易に干渉できるからです」

「夢に……干渉？」

ピンと来ないようで、セナは首を傾げた。ホノオは腕を組んで“ポケモン”の話を聞いている。

「えぇ、干渉。あなたの夢の登場人物になる、ということです」

“ポケモン”の説明を聞いても、ホノオはちんぷんかんぷんのようだ。セナは理解したらしく、会話をつなげる。

「なるほど。じゃあ、これまでオイラが見た“ポケモン”がでる夢は、全部お前が意図的に見せていたということか」

「その通りです」

「なるほどね。だいたい分かった。でもさ、もう一つ質問。どうしてオイラの夢は干渉しやすいの？」

セナのこの言葉の後、少し間が空いた。そして“ポケモン”は答え始めた。

「あなたの夢に干渉しているのは、ワタシだけではありませんよ。ホウオウさんもそうですし、もっと身近な存在でも……」

“ポケモン”は言葉を区切り、わずかにホノオに向かって体を動かした。

「え、オレ？」

訳も分からずに自分を指差すホノオだが、セナはピンと来たようだ。

（そうだ。まだヴァイスと2人で“キズナ”の活動をしていたとき、ホノオは夢の中に出てきた。何度もオイラを助けてくれたっけ……。それから、ヴァイスも夢に出て来たな。お陰でオイラは自分を取り戻して……）

「ヴァイスさんやホノオさんはワタシとは違い、意識的にセナさんの夢に干渉することはできません。しかし、彼らが強く“セナさんを助けたい”と思うことで、そのような現象が起きているのです」

「うーん……。だいたい分かった。でも、まだ何かスッキリしないんだよな」

「それはそうですよ、セナさん。ワタシは先ほどのあなたの“どうしてセナさんの夢には干渉しやすいのか”という質問に答えていないのですから」

一拍置き、“ポケモン”はまた話し始めた。

「まずは事実から述べましょう。セナさん。あなたは、記憶を完全に無くしたのではありません」

「えっ!?」

相変わらず淡々と話を進める“ポケモン”だったが、話の内容は衝撃が大きい。セナとホノオは、思わず驚きの声を上げた。

「そっ、それじゃあ、意外と簡単に記憶が取り戻せたりするわけ!?」

興奮気味に言うセナの熱を覚ますように、“ポケモン”は冷静な口調で続けた。

「いいえ。だって、あなたの記憶に鍵をかけたのは、あなた自身なのですから」

「……」

セナもホノオも黙り込む。しかし、先ほどまではちっとも話を理解できていなかったホノオが、何か分かったような顔をしていた。

「あなたがポケモンになった直後は、実は記憶があったのです。し

かしあなたは、辛い記憶を夢の中に封印しました。……どうしてこんなことができるのか。ワタシにも正確なことは分かりませんが、多分、セナさんはポケモンになったとき、“心”を力に変える、不思議な能力を手にしたのだと思います」

心を力に変える――。ピンとくることがあった。ホウオウとバトルしたとき、何か不思議な力が宿った感じがした。

「じゃあ、オイラはその力を使って、自分で記憶を封印したわけだ」

「ええ。当然、記憶の封印にはものすごいエネルギーを使用します。だからあなたは、自分の能力をうまく使いこなせないのです」

「……そっか」

「ここからは、ワタシの推測になりますが、つまり、セナさんの夢の中は、感情が入り乱れる不安定な場所。だから、幾多の争いが起こるのですよ。セナさんの“記憶を封印したことに対する罪悪感”と、ホノオさんの“セナさんの嫌な記憶を消してしまいたいという気持ち”が戦ったり、セナさんの“心までも封印しようとする気持ち”と、ヴァイスさんの“セナさんの心を大切に思う気持ち”が戦ったり……」

「……なんか、意外と壮大なんだな、オイラの夢って」

「ええ、それはもう。ワタシ“達”も、注目しています。しかし、気をつけてくださいね」

「何を？」

ホノオはすっかり黙り込み、セナと“ポケモン”のみで会話を進めてゆく。

「あなたの夢に干渉できるのは、味方だけではありませんから。現に一度――」

と言い終わると、“ポケモン”はまたホノオに注目する。が、その視線の解釈が、セナとホノオで大きく違ってしまった。

（そっか。そういえば、オイラ達がスイクンに襲われる前の日、オイラとホノオは悪夢をみた。あれは、何者かの干渉なのか……？）

セナの解釈はこの通りなのに対して、

（オレが――セナの敵“破壊の魔王”が、すでにセナの夢に干渉していたんだと言いたいんだろ。どうりで嫌に親切だった訳だ……）

ホノオは嫌な予感が拭えず、会話の流れを断ち切ることを試みた。

「オレからも1つ質問。お前は……“ポケモン”は、オレ達の味方？　それとも敵かよ？」

唐突な話題の転換に、セナも“ポケモン”も「えっ」と声を重ねてホノオを見た。変な沈黙が訪れたが、それを破ったのは“ポケモン”。

「分かりません」

「はっ……！？　分からないって、どういうことだよ！？」

今度はセナがだんまりの立場になった。

「ワタシは基本的に、運命に従ってあなた達に干渉しています。時にはあなた達の利益になる行動もしますが、やはり人間は大嫌いです。ですから、つい予定以上に冷たい態度になってしまう」

「ふん。いつもいつも人間を馬鹿にしといて、結局お前もワガママな気分屋じゃないか。だいたいなぁ、人間が悪でポケモンは善!?　そんな馬鹿なこと主張するお前がどうかしてる!」

「おい、ホノオ!」

怒りに満ちて暴走するホノオを、セナは止めようとする。しかし、ホノオが止まるはずもなく……。

「人間だっていい奴はいるし、ポケモンだって最悪な奴もいるんだ。金さえもらえれば、命を奪うような奴もな!　お前の過去なんか知ったこっちゃないけど、たまたま悪い人間を見ただけで偏見を持つのはやめろ!」

一理あると思い、セナはホノオに思い通りに話をさせることにした。

「……少しでも心を開いたワタシが間違っていたようですね……」

今まで聞いたこともない“ポケモン”の震えた声に、セナはギョッとする。怒り、悔しさ、憎しみが、表情の分からぬ姿の彼女から強く伝わってきた。

「あなたごときが分かることを、ワタシが分からないわけないでし

ょう!?　確かに偏見はよくありませんが、それを踏まえてもワタシは人間が許せません。確かにワタシにも非がありますが、でも……！　でも……」

“ワタシにも非がある”という言葉に裏がある気がしたものの、セナは何故か同情してしまった。何か神秘的な雰囲気を持つ、謎の存在“ポケモン”。しかし彼女も、譲れない感情を持つ1人のポケモンだったのだ。

今日何度目かの沈黙の後、“ポケモン”は、いつもの通り冷たく呟いた。

「もうすぐ洞窟は抜けられますし、ワタシの道案内はここまでにさせてもらいます。さようなら」

それだけを言うと、光の渦、すなわち“ポケモン”はスッと消えてしまった。

それからどこかぎこちない雰囲気が漂ったが、とりあえず辺りの木になっていた虹色の実を食べることにしたセナとホノオ。6つほど食料としてバッグに詰め込んだ後、自分達が今食べる分を収穫し、地面に腰を下ろした。

カラフルで綺麗だが味は怪しそうな木の実をかじった後、2人は無言になった。木の実は甘酸っぱくて香りが良く、意外だがとても美味しかった。夢中になって食べている間は、言葉が何一つ浮かばなかった。

そして、食べ終えてしばらくした後、ようやくセナが言葉を発し

た。

「なあホノオ」

「ん？」

「オイラの過去って、どんな感じだったの？」

ホノオがギクリとセナから目をそらした。セナは慌てて付け足す。

「あ、いや。“ポケモン”の話を聞いたから、大体のことは想像つくよ。あんまりいい話じゃないんだろ？　……でもさ、オイラは今、記憶の封印に能力を使っちゃってる訳だ。だから、記憶が戻れば強くなれるんじゃないかと思ってさ」

「……」

「覚悟は出来てるんだ。頼むよ、ホノオ。どんな能力が開花するのかは知らないけど、きっと今よりも旅が楽に――」

「うるさいな！！」

熱心に説得するセナを、ホノオは怒鳴りつけた。

「お前が自分で勝手に封印した記憶なんだから、自業自得だろ！？だいたいなぁ、強けりゃいいって問題じゃないんだよ！」

そう。強さは時に災いをもたらす。それをよく分かっていたホノオは、左手を握りしめながらセナに言い放つ。洞窟に声が響き、気まずい余韻が場を支配した。

「……ごめん。やっぱり、オレ……」

ついさっきまで威勢が良すぎたくらいなのに、急にホノオはしおれだした。

「なんでオレって、感情を抑えられないんだろ？　さっきだって、ついカッとなって“ポケモン”を怒鳴りつけたしさ。ごめんな。迷惑な奴で」

「えっ……」

悲しげな笑みを浮かべるホノオを見て、セナはただ戸惑うばかり。弱気なホノオにかける言葉が見つからなかった。

「なーんて。オレが落ち込んでたって、お前を困らせちまうだけだからな。元気出さないとな！」

今度は急に、ニッと眩しく笑うホノオだが、セナはホノオが作り笑いを覚えたことに悲痛な想いを感じずにはいられなかった。

いつもホノオに励ましてもらっているくせに、落ち込んだホノオにうまく言葉をかけられない。セナは何かもやもやした気持ちを抱え、今更ながら都合のよい言葉を探す。なぜだろう。成績のよくないホノオよりは、セナの方が言葉を知っているはずなのに、セナの辞書には不器用な励ましの言葉すら載っていなかった。

一方のヴァイス達は、“神秘の遺跡”の謎を何一つ解けず、結局この場所で夕暮れ時を迎えた。

「ごめんね、ネロ。助けてもらったのに、力になれなかったね」
謎解きにはそれなりの自信があったメルがしょんぼりと言う。
「いや、別にいい」
短く、しかし怒った様子は微塵(みじん)もなく、ネロは返した。
「ネロさんは、これからどうするの？　やっぱりお家に帰る？」
質問したのはヴァイスだ。彼の頭には、まだシアンがくれた花の冠が乗っていた。
「家はないから帰らない」
サラリとネロは言うが、大事(おおごと)である。この世界で“家”と言うと、物件としての家ではなく、居場所としての“すみか”を指すのだが、それもないということだ。常に旅をしながら生活する種族も確かにいるのだが……。
「えーっ、お家がないノ!?　じゃあ、家族は!?」
決して誰も聞かないことをずけずけと聞くのはシアンだ。
「わわっ、ネロさんごめんなさい！」
「今やっつけますから！」
ブレロとブルルが慌ててシアンに一発加えようとすると、

「いない」

ネロの答えが返ってきた。わずかに目を細め、ネロは夕陽を見つめる。

「そっか。ボクと同じだね。ボクのお母さんは死んじゃって、お父さんは行方不明なんだ」

「そうか」

ヴァイスとネロの間に何か特別な空気が流れたのを、シアン以外のメンバーは感じた。

「俺は……」

ネロが話し出す。視線を下に落とし、夕陽のせいで目立たなかったが顔を赤く染めながら。

「俺はお前達に同行したい。この遺跡を調べるよりも、もっと多くのことがわかる気がする」

ヴァイスの目が輝いたとき、答えが決まった。

かくしてジュプトルのネロも仲間に加え、８人という大人数になったヴァイス達の旅。彼らはこの日、遺跡の近くの草原で、月を見ながら夜を過ごした。

他のみんなが寝静まった後、ネロは枯れ果てた一輪の花をじっとみつめていた。――どうやら彼は、この花を持ち歩いていたらしい。

そして、一言、

「やっと見つけた」

と呟いた。

第２９話：夢の秘密（後書き）

実はセナの記憶がないのはセナ自身が原因だという、ややこしいことになりました。

上手く伝わるように説明できているか、少し不安です（＾＾；）。
活動再開後は文章が上手く書けてない気がしてます；

第３０話：左手の焔――その１（前書き）

珍しく、“ポケモン”がオイラ達の味方をしてくれた。奴の案内で、どうにか迷宮の洞窟を進むことができた。

さらに、どういう風の吹き回しだろうか。“ポケモン”は、オイラの記憶について、色々と教えてくれた。――なんとオイラは、自分自身で記憶を封印したらしい！　そして、封印に力を使っていなかったら、もっと強かったそうな。

だから、ホノオにお願いしたんだ。オイラは記憶を取り戻して、強くなりたかったから。でも、ホノオに怒鳴られちまった。

――と思ったら、ホノオは弱音を吐いて作り笑い。色々と、ショックだったんだろうな。

（語り：セナ）

第３０話：左手の焔――その１

“ポケモン”との接触の後に眠りにつき、セナとホノオは次の日を迎えた。朝は虹色の実をかじり、腹を満たした。

「もうすぐこの“迷宮の洞窟”から抜けられるって、昨日“ポケモン”が言ってたよな。洞窟から出る覚悟はできてるか？　もう、ここみたいに安全じゃないけど」

セナの言葉を聞くと、ホノオは考え込んだ。

（そうだ。洞窟から出れば、オレ達はまた救助隊と戦うだろう。暴走しない自信は、ないや。オレの感情とか、力とか……）

「あれ、怖いの？　ホノオちゃん」

ホノオがなかなか返事をしないので、セナが挑発してみる。

「んなわけないだろ？　バーカ！」

やはりホノオの反応は早く、ややうつむいていた顔をシャキッと上げた。――セナに自分の正体がバレたら、一緒に居られなくなるだろう。そんな、覚悟とともに。

こうして２人は洞窟を進む。いくつかの分かれ道に出会ったが、一つ一つ丁寧に先を確かめ、とうとう前方に光が見えた。

「おっ、久々の光だ！」

実際にはセナとホノオは“迷宮の洞窟”には1日半ほどしか居なかったのだが、体験した出来事はどれも印象的で、長いことのように感じられた。セナは歓喜の声を上げて、光に向かって走り出す。ホノオには、その光は少しまぶしすぎるように感じた。

洞窟を出ると、そこは海沿いの崖だった。洞窟の出口に合わせて崖を削って道を造ったらしく、上を見上げると崖の頂上。ゴツゴツとした岩が乗っていた。

「うわぁ、道が細いな。落ちちゃいそうだ」

「気をつけろよ、セナ。お前はすぐに転ぶんだからさ」

と会話をして、セナとホノオは歩き始めた。通路から海面まではなかなかの高さがあり、緊張が走る。少し顔をこわばらせ、無言で2人は進んだ。

しばらくすると、狭かった道がグッと広くなった。ここなら、もし襲われても戦えそうだ。セナがそう思った、ちょうどそのときだった。前方から、ポケモンが歩いてくるのを発見したのだ。3人くらいで、黄緑色とオレンジ色と水色。……あれは、チコリータとアチャモとミズゴロウだ。

「げっ、救助隊か?」

「どうする? 道は一本だし、戻るのもちょっとなぁ……」

立ち止まり、セナとホノオは作戦を練る。しかし、そうこうしているうちに、3人のポケモンはセナ達に向かって走ってきた。

「うわ……！」

声を重ねてセナとホノオは来た道を走って戻った。しかしここで、ホノオの忠告通りにセナが転んでしまう。

「おいセナ、大丈夫か！？」

「あぁ！」

セナはすぐに立ち上がり、2人は再び逃げようとするが……

「逃がさないよ！」

チコリータが言うと、首から“つるのムチ”を伸ばし、セナとホノオを捕らえた。

「わっ！」

足を止められた2人に、チコリータ達が追いついた。今すぐ攻撃を食らう覚悟をした2人だったが、追っ手のアチャモから出た言葉は意外なものだった。

「ようやく見つけたわ。大人しくみんなを返しなさい！」

「……え？」

みんなを返す？　意味が分からなかった。“みんな”って、誰だろう。

そんなセナ達の顔を見て、アチャモは怒鳴り声をあげた。

「とぼけるんじゃないわよ！　アンタ達がウチらの村からさらっていったポケモン達を返しなさいって言ってんのよ！」

「ちょ、ちょっと待て！　オイラ達がいつそんなことを！？」

身に覚えのない災害について責められるのは慣れっこ（と言うとおかしな言い回しになるが）のセナ達だったが、これには焦りを感じた。自分達が、直接の加害者にされている――？

「オラ達が誰だか忘れただ？　“グリーンビレッジ”でおめぇ達を止めようとしてやられたポケモンだあよ」

なまった口調のミズゴロウがそう言うが、やはり身に覚えがない。セナとホノオが顔を見合わせて首を傾げると、チコリータが話し出した。

「あたし達分かってるよ。ゼニガメくんが持ってるそのバッグに、あたし達の村のポケモンのみんなを閉じこめているんだよね？」

「はぁ？　バッグにポケモンを！？」

確かに見た目以上に多くの物が入るバッグだが、いくらなんでもポケモンなんて1人も入れられるはずがない。セナとホノオは驚くが、チコリータは当然のように頷いた。

「そうだよ。ねぇ、今すぐみんなを返してくれるんだったら、あたし達はキミ達を放してあげる。だから、お願い！」

チコリータは頭を下げるが、いない者を返せるはずがない。怒りを買うことを覚悟で、セナは返答する。ホノオは理不尽さに対する

不満を押し殺すのに必死で、それどころではなかった。

「オイラのバッグの中には、ポケモンなんて入っていない。それに、オイラ達はポケモンの誘拐なんかしてない。本当だよ」

「よくもそんな下手な嘘がつけるわね！？　あのときウチらの村を襲ったのは、ヒコザルと青いバッグを肩から下げたゼニガメ。つまりアンタ達なのよ！」

自分達と犯人の外見が酷似しすぎている。アチャモが犯人の特徴を叫ぶと、セナは不気味な衝撃を覚えた。

「手荒なことはしたくなかったんだけど、村のみんなのためなら仕方がないね……。キミ達からみんなを取り返すから、覚悟してね！」

とチコリータは言うと、攻撃を繰り出した。

“葉っぱカッター！”」

無数の鋭利な葉が、セナとホノオを斬りつけた。草タイプの技が苦手なセナの傷は深く、いきなり酷いダメージを受けた。“つるのムチ”による拘束が解除されると、セナは崩れるように地面にひざをついた。

「だっ、大丈夫か！？」

「ぐっ……。大、丈夫……」

痛む足に力を入れると、セナは立ち上がった。

「何するんだよ！？　オレ達は誘拐なんてしてないって言ってるだろ！」

ホノオは怒鳴るが、どうやらあちらの考えは変わらないらしく、主張は伝わらなかった。

「まだ認めないつもりね。やるわよウォータ！　“火の粉”！」

「“水鉄砲”！」

今度はアチャモがセナに、ミズゴロウはホノオに攻撃を仕掛けた。

「うわあ！」

水タイプの技が苦手なホノオも、すでに傷の深いセナも悲鳴を重ねた。相手は3人ともそれなりの強さで、こちらに攻撃を仕掛ける理由が見つからないため苦戦を強いられた。

（状況がまだよく分からねえや。オイラ達が誘拐犯で、ポケモン達をバッグに閉じこめている！？　何を考えているんだ、こいつらは……）

倒れた体を起こしながら、セナは状況を整理しようとする。しかし、明確な答えがでないうちに相手が動き出した。

「“マジカルリーフ”！」

「“炎の渦”！」

「“泥かけ”！」

セナとホノオに一斉攻撃が迫る。しかもまたしても、2人の弱点

を突くタイプの技がある。食らうものかと必死に反撃した。

「“水の波動”！」
「“火炎放射”！」

数では劣るものの、過酷な戦いを続けてきたセナ達の技の威力が勝り、チコリータ達の技を押し切る。さらに、図らずもあちらにダメージを与えてしまった。

「きゃっ！」
「うわっ！」

3人は悲鳴を重ね、体勢を整えるとセナとホノオを睨みつけた。

「やっぱり強いね！　でも、そろそろ効いてきたはず……」

チコリータのその言葉で嫌な予感がした瞬間だった。突然セナとホノオは息苦しさとめまいを感じた。

「うっ……」

「よかった、やっぱり！　初めの“葉っぱカッター”にね、“毒の粉”を塗ってあったの」

呼吸を荒げるセナとホノオを見ると、チコリータは得意げな顔をして2人に歩み寄った。

「……バッグの、中身を……見せれば、いい、んだろ？」

セナは言うとバッグをひっくり返し、“オレンの実”などのアイ

テムをばらまいた。あまり他のポケモンには見せたくなかったが、“ホーリークリスタ”までも隠さなかった。
これで誤解は解かれるだろうと2人は安堵する。しかし……

「無実のフリしたって騙されないわよ！　じゃあウチらの村のポケモン達は、もうアンタ達のアジトにでも隠してるのね!?　さぁ、その隠している場所を教えなさい！」

バッグの中身がポケモンでないことを示したところで疑いが晴れないばかりか、提供不可能な要求をアチャモに求められた。

「知るかよ……そんな、場所。だ、から、オレ達は……」

だいぶ毒が回ってしまい、ホノオは声を振り絞って訴えた。それでも変わらぬあちらの態度に、徐々にホノオの中で怒りが膨らんでいった。

「言わねえなら言うまで攻撃するだあよ！　“渦潮”！」
「“つるのムチ”！」

再び相手は弱点を突く。ミズゴロウは水を操ってホノオを締め付けようとし、チコリータは植物のツルを伸ばしてセナを締め付けようとする。セナはとっさに“守る”を発動して、自分達の身を攻撃から守った。

「なぁ……ホノオ」
「ん?」

ひとまず相手の攻撃を防ぎきった後も“守る”を維持し続け、セ

ナはホノオに話しかけた。

「お前、だけでも、逃げら、れない、かな？」

この言葉を聞いた瞬間、ホノオの心臓が強く動き出した。原因は毒やダメージによる苦しさではない。何かがホノオの中で目覚めるのを感じた。

「バカ、言うなよ……」

「大丈、夫。オイラは、上手く、やるから、さ……」

悲痛なセナの言葉。――彼は死の恐怖を誰よりも知っているはず。それなのに、自分よりもホノオのことを考えて――。セナにこんな言葉を言わせた奴は誰だ？

ホノオがチコリータ、アチャモ、ミズゴロウを睨みつけると、３人は怯える。その直後、“ホーリークリスタ”が血のような赤色の光を放った。

「えっ……？」

セナは戸惑いの声と共に、“守る”を解除する。すると、今まで“守る”のシールドの外にあった水晶が、ホノオの元へと不気味に飛んできた。

「安心しろ、セナ」

そう言うホノオの口調は、とても刺々しい。

「消えるのはお前じゃなくて、あいつらなんだよ」

ホノオは水晶を手に取る。すると、ホノオに残酷さを連想させる赤い光が乗り移り、ホノオの瞳がどす黒い血の色に輝く。目つきは鬼のように鋭く――。

“ボルト”の命を奪った時と全く変わらない様子の彼が、ここにいた。

第３０話：左手の焔――その１（後書き）

チコリータ達の事情については、“第１５話：波乱と衝突と――その１”を参考にしてください。

ようやくここまで来たなぁｗ

第３０話：左手の焔――その２（前書き）

やっと、この前のゼニガメとヒコザルを見つけたわ。
ウチらの村の仲間をどこかに隠しておいて、平気で嘘を貫き通すようね。
容赦なくやらせてもらったけど、嫌な予感がするわ。なによ、このヒコザルの、不気味な力……。
（語り：スザク）

第３０話：左手の焔――その２

「ホノオ……？」

目の前にいるのは、セナの知っているホノオではない。燃えるように赤く光る体からは強烈な熱が感じられ、ホノオの力を物語っていた。

「なっ、何なのよ……！」

一歩後退しながら、アチャモは震えた声で言う。チコリータもミズゴロウも、身を寄せ合って怯えた表情を見せた。

「食らえ……」

と言うと、ホノオは左手をスッと前にのばし、手のひらをチコリータ達に向けた。その瞬間だった。地面が低くうなり声をあげ、周囲や崖の上にある岩が振動する音が聞こえた。――ホノオに集まった強力な破壊の力が、自然にも影響を与えていたのだ。

「ホノオ、やめろよ！　落ち着けって！」

セナは慌ててホノオの攻撃動作を解除しようとする。伸ばした左手にしがみつこうとしたのだが、ホノオの体は燃え盛る炎を纏ったように熱く、触れたセナの身も焦がした。セナは反射的にホノオから離れるものの、高熱による痛みは矢のようにセナを刺す。

「ぐあぁっ……！」

セナの痛々しい悲鳴は、今のホノオには届かなかった。思わずセナとホノオから目をそらすチコリータ達を、ホノオは冷酷な眼差しで突き刺した。

フッと鼻で笑うと、とうとうホノオは技の発動にかかる。体力も限界のセナは、呼吸を荒げつつホノオに祈るような眼差しを向けた。

「“破壊の――」

と、言いかけたときだった。先ほどからホノオの力の影響を受けていたせいか、とうとうセナ達の上方の崖が、削ぎ取られるように大胆に崩れたのだ。巨大な岩の塊が、小さな5人のポケモン達にのし掛かろうとする。段々と影が色濃くなるにつれて、恐怖も濃くなっていった。こんなものが降ってきたら、みんなおしまいだ。

「わあぁーっ！」

ホノオ以外の4人の叫び声が重なる。誰もがもうダメだと思ったが――

「――焔”」

ホノオは手のひらを上に向け、落ちてくる岩に攻撃をぶつけた。その瞬間を、セナは忘れはしない。

小さなホノオの手のひらから、光のように速く進む、巨大な炎の塊が発射され、岩を射抜く。岩は炎に触れた瞬間に破壊され、一瞬で粉々に砕け散ってしまった。もはや岩ではなく、砂と呼べるほどに。

「なん……だ、これ……」

毒やダメージでボロボロの体が、恐怖で震えるのを感じた。あんなものが、もしチコリータ達に当たっていたら……。

――ホノオの攻撃が終わると、サラサラと砂――すなわち先ほどまでの巨大な岩石が、セナ達に降りかかった。シンと辺りが静まりかえる中でホノオを見ると、彼が宿っていた赤い光が消えてゆき、体の傷も消えていた。

「……あ……」

見られた。セナに、あの技を。

ハッと、ホノオは我に返る。小さな左手を見ると、大きく震えている。

「……ホノオ？」

頭の中が真っ白なホノオ。自分の名を呼ぶセナの声を背中に受けると恐怖に駆られた。セナの表情は分からない。感情を読み取る余裕なんてなかった。それでも彼の心には、自分を冷ややかな目で蔑（さげす）むセナがいた。もう二度と“友達”とは呼べないセナがいた。

「……ゴメン」

生気のない声で別れを告げ、ホノオは地面を強く蹴って走り出した。持ち前の俊足を最大に生かし、あっという間に洞窟の反対側へと姿を消した。

「まっ……待て、ホノオ！」

慌ててセナも後を追おうとするものの、一歩踏み出すとふらつき、

倒れ込む。今や邪魔な重りとなったバッグを投げ捨てると、セナは再び立ち上がった。セナには毒や体力の回復を考える余裕はなかった。ホノオを見失い、チコリータ達に追われている今、考えられるのはとにかく前進することだけ。

「なんだか分からないけど、今がチャンスかしらね。あれだけ急いでるのなら、すぐに白状するわよ」

まだわずかに声が震えるものの、徐々に冷静さを取り戻したアチャモが言う。しかし、

「待って、スザク」

と、チコリータは止めた。

「あたし、あの2人が本当に悪いポケモンなのかな、って思って……」

「悪いに決まってるじゃない！　ウチらの仲間をさらって、村もボロボロにして。今なんて、ウチらのこと殺そうとしたのよ!?」

アチャモはチコリータに怒鳴り声をあげて主張した。チコリータはビクリと体を震わせた。アチャモはため息をつき、ミズゴロウを睨む。

「アンタはどう思うのよ？　ウォータ」

「えぇっ!?　オラはぁ～……。オラは、えと、ポプリに賛成だ」

と答え、ミズゴロウは視線をセナに移した。何度も転び、時間と

ともに体力が削られている彼は、まだほとんど前進できていない。一歩踏み出し、ふらつき、なんとか転ばずに踏ん張ったものの、次の一歩で崩れるように倒れ、起き上がれず……。

「あっ！　大変！」

黙って見ていられなくなり、チコリータはセナに駆け寄っていった。

「なぁ、スザク」

ミズゴロウはアチャモに話しかけた。

「オラ達の村に奴らが来たとき、奴らはもっと無感動だった気がするだ。今出会ったゼニガメとヒコザルには、ちゃんと感情がある。何より、オラ、なんだかゼニガメを見捨てられないだよ！」

と言うと、ミズゴロウもセナに駆け寄る。

「……フン。勝手にしなさいよ」

そう言いながらも、アチャモは歩いてミズゴロウ達の後を追った。

「ホノオ……」

息を弾ませ、セナは呟く。何故かホノオを1人にしてはいけない気がして、体に鞭打って立ち上がった。が、大きな尻尾で体を支え、なんとか立っているだけ。歩くことはできそうにない。

「待って！」

背後から聞こえたのはチコリータの声だった。セナは逃げようとしたのだが、まるで背中を押されて倒れたかのように見えた。

チコリータは持ち歩いていた“オレンの実”と“モモンの実”をつるで持ち、セナの前に立った。そして、セナに木の実を差し出す。

「怪我させちゃって、本当にごめんね。はい、この木の実で治して」

セナの傷を見ると、チコリータは目に涙をためた。しかしセナは顔を上げず、必死に腕に力を入れる。

「フン。今度、は……毒入り、木の、実、です……か？　邪魔だから、どいて、くれ」

セナ達の言い分を微塵（みじん）も信じなかったのに、自分達だけ信用されようなんて、都合のよい話かもしれない。しかし、本気で助けようとする思いが跳ね返されたのは、チコリータにとっては辛かった。先ほどまでのセナ達の痛みを、彼女は知った。

「悪かった。許してけろ！　オラ達――」

「あぁもう、さっさと食べなさい！」

ミズゴロウがセナに呼びかけたが、言葉の途中でアチャモが行動に出る。木の実を無理やりセナの口に押し込んだ。

「むぐっ……！」

食べるものかと思ったが、口がふさがり苦しくなる。窒息するの

も避けたかったので、仕方なしにセナは木の実を噛み砕いて飲み込んだ。
毒の苦しみは抜け、体の痛みも消えた。しばらく警戒を続けたが、痺れや眠気などの状態異常は起こらなかった。

「ほら、何ともないじゃない」

セナはアチャモの言葉の後に、今度はまっすぐに安定した様子で立ち上がった。

「ありがと」

まだチコリータ達を信用しきれずに、目をそらしてセナは礼を言った。

「ううん。あたし達が一方的にキミを傷つけちゃったんだもん。ごめんね」

「ごめんだよ」

チコリータとミズゴロウは頭を下げてセナに謝罪した。アチャモは反省した素振りを見せなかったが、今のセナはそんなことは気にならなかった。

「分かった。じゃあな。オイラ、アイツを追いかけなきゃ！」

「あっ……」

一言もかける間もなく、セナは駆けだしてしまった。ホノオに比べてだいぶ遅いのだが、精一杯地面を蹴って走った。

少し走ったが、まだまだ海沿いの岩場という地形が続く。テンポよく呼吸をしながら、セナは考え事を。

（“迷宮の洞窟”での事件以来、なんかおかしかったんだよな、アイツ。どこに行った……？　そりゃ、オイラの目の前であんな技を使っちまえば、オイラの反応が怖いだろうけど）

ここまで考えると、これまでのホノオとの思い出がセナの脳裏をよぎる。時には凹むけど、基本的には自信に満ちていたホノオ。何度もセナを励ましてくれたホノオ。以前は実は、セナはホノオが少し怖かった。決定的に仲が崩れた時もあった。でも、悪い思い出は全て和解の喜びに変わり、セナの心を傷つけることはもうない。

――いや、１つだけ、セナにとって苦しい思い出が残っていた。“銀の針”で、命を絶とうとしたホノオ。あの罪悪感は忘れがたい。

（“銀の針”……。まさか！）

なんとなくだがホノオの居場所に見当がついた。セナは辺りを見回し、確信する。そして、さらに速度を上げて走り出した。

洞窟を抜けたばかりの場所は、岩場にできたただの細い一本道。しかし、道は広くなり、枝分かれし、上り坂と下り坂ができて……。こうして入り組んだ道をただただ上に登り、ホノオは崖の頂上にたどり着いた。さすがに息が切れた彼は、ため息をついて崖に腰をかけた。

非常に高さのある崖。“サメハダ岩”も崖にある場所だが、ここ

はそんな平和な場所ではない。もしこの崖から飛び降りると、海に叩きつけられただけでも命が危ういだろう。さらに崖の下には、尖った岩がゴツゴツと並んでいて、落ちたら……。

ほんの一瞬だけ、ホノオに飛び降りる“勇気”が湧いた。しかし、行動に移す前に、勇気は消え失せた。

「……ごめんなさい」

焦点の合わぬ目で左手に目をやると、ホノオは呟いた。

いくら対象が私利私欲のために自分達を狙った救助隊“ボルト”とはいえ、誰かの命を奪う体験をするには、ホノオは幼すぎた。

（そもそも、初めて“命を奪おう”としたのは、セナと喧嘩したギャロップ達との戦いだった。セナが止めてくれなかったら、あのときすでに、オレは罪を犯していただろう。

そしてオレは、本当に誰かを殺ってしまった後、セナにそれを隠してしまった。ずっと隠し通せたらいいな、なんて、都合のいいこと考えて……。今日、とうとうバレたけどね。オレの力も、そして多分、正体も。

もう、セナに合わせる顔がないや。そして、シアンやヴァイス達にも）

こんなことを考えていると、涙が溢れて止まらない。ガイアに自分の居場所はない。むしろ自分は災いの元。ならば、死んでしまえばいい。でも、それは怖くて。せめて死に近いこの崖に座ることで、いつでも死ねる状況を作り、価値無き自分を慰めて……。

「最低……。オレなんか、死ねばいいのに……。早く……早く飛び降りろよ……」

涙は眩しく輝きながら、次々と海に飛び込む。涙の主は、後を追うように自分に言い聞かせるが、なかなか行動に移せないでいた。

そんなときだった。聞きたいような、聞きたくないような声が聞こえたのは。

「よぉ、ホノオ。ここにいたのか」

第３０話：左手の焔――その２（後書き）

この小説を書き始めてすぐの頃は「あまりお下品な、残酷な言葉は使わない」という意識で執筆しておりました。ただ、それではどうも（私の力量では）リアリティーが出ないし、何より「口が悪い」設定のホノオが穏やかになって個性がなくなり……。

今回の話には、乱暴な言葉が多かったのですが（いや、今回だけではないですがねｗ）、お許しいただけるとありがたいです。

第３０話：左手の焔――その３（前書き）

そもそも、隠そうとしていたこと自体が間違いだったんだ。
とうとう、オレの力が、セナにばれちまった。
もう、こいつのそばには居られないな……。
（語り：ホノオ）

第３０話：左手の焔――その３

セナの声。背後から聞こえた瞬間、ホノオの心臓が飛び上がった。

「どうしたんだよ、ホノオ？　いきなり走ってどこか行きやがって……」

何事も無かったかのようにセナは話しかけるが、ホノオの警戒は解けない。第一、セナと再会なんてしたくなかった。

「どうしてここに？」

涙を拭うとホノオはぎこちなく尋ねた。

「んー、直感。なんか当たっちゃったみたいだなっ」

えへへ、とセナは笑い声をあげたが、

「当たりじゃない。ハズレだ！」

突然ホノオは声を張り上げて叫んだ。そして振り向くと、すぐ後ろにいたセナを睨みつけた。

「おい。今すぐオレを殺せ。さもないとオレがお前を殺す」

と言うと、ホノオは左手に炎を宿らせて“炎のパンチ”の用意をした。

「嫌だね。オイラはお前を殺さないよ」

「フン。同情はよせ。お前、さっきのオレの力を見ただろ？　今のオレはなぁ、命の1つや2つくらい一瞬で奪えるんだよ」

「それがどうした？　力があるのと実行に移すのとはまた別の話だ。お前がオイラのこと、殺せるわけ無いもん」

疑いなき真っ直ぐな眼差しが、とても痛い。セナの自分に対する信頼を、徹底的に潰さなくては。ホノオは強くそう感じた。

「いつもいつも、お前は正義ぶりやがって……！　ムカつくんだよ、そういう偽善的な奴は！」

言葉でセナにダメージを与えた後、ホノオは振りかぶってセナの頬を殴りつけた。小さな体は宙を舞い、地面に叩きつけられる。

「い、いてぇな……」

セナは頬をさするものの、笑みを崩さない。ますますホノオは躍起になった。崖から離れ、飛ばされたセナに近寄った。

「忠告だ。死にたくなければオレを殺せ」

セナは少し考えた後、ホノオの威圧的な態度を跳ね返すように明るく言う。

「んー。やっぱりお前にゃ、オイラは殺せないと思う。だってお前さ、何だかんだでいい奴だもん」

“いい奴”!?　理不尽な要求を突きつけて、思い切り殴ったこ

のオレが!?　ホノオにはセナが理解できなかった。そして、思い通りに動かない彼を憎く感じた。

左手だけでなく、右手にも炎を宿す。そして、全体重を乗せてセナを殴りつけた。さすがに笑顔を崩したセナを、さらに両手で何度も殴った。

「おい。これがお前の言う“いい奴”か？　これでもオレは“いい奴”なのか!?　あ!?」

セナにのしかかって殴り続けながら、ホノオは問う。もちろんセナに口を利く余裕はない。腫れる頬、呼吸を妨げる腹への衝撃、炎の熱……。耐えることに必死だった。

一度、ホノオは攻撃を止めた。セナの荒い息づかいだけが場に響く。拳の炎の火力を増し、ホノオはセナを脅した。

「最後のチャンスだ。ボロボロになった今なら、お前は特性“激流”を使えるだろう。オレを殺さなかったら、命はないと思え」

セナは首の動きで答えを返す。わずかに左右に動く頭。答えはノー。殺せない。

「なんでだよ……」

うまく声が出せず、かすれてしまった。ホノオは今度は、手に炎をまとったままセナの首を締め付けた。顔はしかめるものの、セナは抵抗しようとしない。

「どうして……？　オレはお前に攻撃してるし、今までも何度もお前に攻撃した。オレのことなんか、嫌ってくれればいいのに……」

セナの首に触れている両手が、振動を感知する。左右に動く振動を。

辛くなって、ホノオはとっさに両手を放した。

「なぁ、セナ。頼むよ。オレは嫌な奴なんだからさ。オレのせいで、お前はまたボロボロなんだからさ。嫌ってくれよ……」

気がつけば、ホノオは震えながら泣いている。セナは視界がぼやけると共に、仰向けの体を起こした。たまった涙が頬の傷に触れ、痛みを感じて苦笑い。

「ホノオ。まず、そこどけ」

苦笑いのままセナが言うと、ホノオは慌ててセナの上から降りた。これでようやくセナは深く息を吸えるようになり、彼が呼吸を整える間に沈黙が訪れた。

「……ふぅ。言ったとおり」

だいぶ落ち着くと、セナは笑顔でホノオに話しかけた。

「やっぱり、お前はオイラを殺せなかった。だってさ、好き好んで命を奪うような奴じゃないからな」

「でも、オレは……」

うつむくホノオに、セナは優しく微笑んでみせた。

「分かってる。オイラに言えず、1人で悩んでたんだろ？　らしくないぞ？」

「……」

「悩みがあったら何でも聞くから……ボクはセナの味方だから……って、ヴァイスがよく言ってくれたんだ。すごく嬉しかったんだけど、オイラはなかなかそういう素直な言動できなくてさ。でも、今ならオイラがヴァイスの立場になれる気がする。そう思うと……なんかオイラ、すごく嬉しいんだよね！」

ホノオの心の奥にずっと根付いていた不安な感情が、嘘のように消えていった。自分をどこまでも信じてくれる存在がこんなにも心強いということを、ホノオは初めて実感した。

「あ、りがと……セナ」

こうしてホノオは、“迷宮の洞窟”での事件以降の出来事や悩みを全てセナに話した。

“ボルト”の命を奪ったのが、水晶に触れた瞬間に覚えた技“破壊の焔”だということ。ホノオはその時、自分が“破壊の魔王”だと悟ったこと。また突然発動するかもしれない“破壊の焔”に怯えながら、自分の感情のコントロールを試みたこと。しかし、“ポケモン”やセナに怒りを見せてしまい、さらに自分が嫌いになったこと。セナが目の前で命を落とす瞬間を2度と見たくなくて、気がついたらさっきも“破壊の焔”を使っていたこと。そして、それを見たセナが自分から離れてゆくのを恐れたこと……。

情けないなと思いつつ、ホノオは涙をこらえずに話を続けた。

「そうか……」

話が終わると、セナはそう言ってホノオの肩を軽く叩く。

「だいぶスッキリしたろ？」

「うん。お陰でな」

涙を拭いて、ホノオはセナを見る。明るい笑顔が伝染した。

「でもさ……いいのか？」

すぐに表情を暗くして、うつむいたホノオが問う。

「オレは“破壊の魔王”。それに、“破壊の焔”やオレの感情もいつ爆発するか分からない。絶対に、お前に迷惑かけると思うぜ？」

ホノオが言い終わってセナを見ると、彼はクスクス笑っていた。

「大〜丈夫だよ！　お前が消えちまう方が迷惑だ。だからさ、お前は今まで通り、明るくバカなアホノオ君でいればいいんでぇ」

スッと肩の力が抜けた。そうか。コイツに遠慮は無用だった。

「分かったよっ」

ホノオがニッと笑うと、セナは吹き出す。

「ぷっ。お前、目が真っ赤！　泣きすぎだろ〜！」

「う、うるさい！　騒ぐな！」

いつも通りの言葉を交わし、バカ騒ぎをしていた。そんな時だった。

「あの～……」

大きな岩の陰から、ポケモンの声が聞こえた。

「誰だ？」

セナとホノオが声をそろえてそちらを向くと、３人のポケモンが姿を現した。チコリータ、アチャモ、ミズゴロウ。先ほど襲ってきたメンバーだったので、ホノオの警戒レベルは跳ね上がる。

「おー。お前らか。どうした？　何かあったのか――って、あぁぁ！！」

途中まで冷静だったのだが、チコリータが持つセナの青いバッグを見ると反応が強くなった。

「はい、バッグ。忘れ物だよ」

チコリータが微笑んでセナにバッグを手渡す。

「届けてくれたのか。サンキュー！　さっ、オレンはどこだ～？　あったー！」

セナはすぐにバッグをあさり、体力を回復する“オレンの実”を見つけた。オレンを口にすると、ホノオにつけられた傷もすぐに消えていった。

「あの……。ゼニガメ、ヒコザル。本当に悪かっただ」

ミズゴロウが言うと、チコリータと共に頭を下げた。セナとホノオが顔を見合わせると、ミズゴロウ達はセナ達を襲った理由の説明を始めた。

彼らの住んでいた村、“グリーンビレッジ”に現れたゼニガメとヒコザルが、村をめちゃくちゃにした。そして、村のポケモン達を、上は赤、下は白の“ボール”に捕らえ、バッグに入れてさらった。助かったチコリータ、ミズゴロウ、アチャモはポケモン達を取り返そうとしたが、圧倒的な強さの2人に歯が立たなかった。そうして3人は、村のポケモン達を取り返す旅にでたのだ。

「ゼニガメと、ヒコザル！？」

犯人の特徴を聞くと、セナは驚いて声を上げた（実はチコリータ達に襲われている時にも犯人の特徴を聞いていたのだが、この時は冷静さに欠けていたため深く考えられなかった）。

「うん。だからあたし達、キミ達が犯人だって決めつけちゃった。こんなにいい人が犯人なわけないよね。ごめん」

「事情は分かった。それに、犯人とオレ達の特徴がここまで似てるんだから、しょうがない。許してやるよ」

チコリータの謝罪に、ホノオは優しい表情で答える。チコリータ、ミズゴロウがセナ、ホノオと親しくなる一方、アチャモはまだセナ達を疑いの目で見ていた。

「ねえねえ、キミ達のお名前を教えてくれない？　あたしは“ポプリ”っていうの」

チコリータのポプリが名乗ると、ミズゴロウも名乗る。

「オラは“ウォータ”だよ。そんで、こっちのが……」

ミズゴロウのウォータは、アチャモに視線を送る。アチャモはしぶしぶ名乗った。

「“スザク”よ」

スザクの心がこもっていない自己紹介で少し盛り下がったが、セナとホノオも名前を告げた。

「オイラはセナで、」

「オレはホノオ。よろしく」

笑顔のセナとホノオを見ると、ポプリは心底嬉しそうに目を輝かせた。

「セナくんとホノオくんだね。よろしく！」

明るく元気だが温かみのあるその笑顔が、やけにセナの胸に焼き付いた。

「なぁ。セナとホノオは、どこに住んでるだ？」

ウォータが親しげな様子でセナ達に質問する。

「“はるかぜ広場”の近くだよ」

「ええっ、すごく遠いね！」

「何か用事があるだか？」

セナの答えに、ポプリとウォータは驚いた。彼らは救助隊でもないし、まだ子供。セナ達の事情を知らないらしい。

「色々と大変な事件に巻き込まれてね。……話、聞きたい？」

5人以外のポケモンの気配が一切無かったので、セナとホノオは、命を狙われて旅に出たことを説明した。前置きとして“キズナ”を紹介し、互いの傷に触れない程度に戦闘や苦悩の話を交えながら。

「――ふうん」

セナ達の話が終わった後、スザクが他人事のように相づちを打った。実際に他人事だが。

「大変だったんだね……」

「かわいそうだよ……」

こちらは目を潤ませて同情する、ポプリとウォータ。これにはセナとホノオもギョッとした。

「ねえ、セナくん。ホノオくん」

と、ポプリ。

「あたし達も、セナくんとホノオくんの旅に同行しちゃダメかな？」

「えっ！？」

セナとホノオも十分に驚いたのだが、一番声が大きいのはスザクだった。

「バカ！　何言ってるのよポプリ！」

と、スザクはポプリを怒鳴りつけた。

「アンタ達はこいつらを信じたんでしょうけど、ウチは信じてないのよ！　だいたいさっき、ウチらはホノオに殺されそうになった。それなのに、どうしてウチらがこの２人の危険な旅に同行しなきゃならないわけ！？」

“破壊の焔”について触れられると、ホノオは決まり悪そうにセナを見る。そして視線で「ゴメン」と呟いた。

「でも、スザク。セナくんとホノオくんに先に攻撃しちゃったのはあたし達なんだよ？」

「そうだ。お詫びもかねて同行するだよ！」

ポプリ、ウォータは必死にスザクに説得する。仲間が増えるのは嬉しいが、さすがにセナも申し訳なくなった。

「ポプリ、ウォータ。もういいよ。命がけの旅なんだし、何かあったら大変だし……」

「でも、あたしだって、命をかける覚悟をして旅に出たんだもん！
それに……“グリーンビレッジ”を襲ったポケモンとセナくん達は、何か関係があるんじゃないかな？」

（確かに……！）

ポプリの仮説に納得し、セナとホノオは目を合わせた。ゼニガメとヒコザル。青いバッグ……。セナ達が悪い意味で有名だからこそ、疑ってしまう。意図的にセナ達を真似たのではないか、と。

「だから、あたしはセナくんとホノオくんの旅について行くよ！」

「オラも！」

ポプリとウォータの真剣な眼差しが突き刺さると、スザクは彼らから目をそらす。そして、面倒くさそうにため息をついた。

「はぁ、呆れたわ。バカが付くほどのお人好しね、アンタ達。……1人旅なんてゴメンだし、仕方ないからウチもついて行ってあげる」

相変わらず生意気な口調のスザクに、セナとホノオは苦笑い。これは、ソプラの数倍癖のある女だな――と、ホノオは思った。

ポプリとウォータは嬉しそうに、キラキラと輝く目をスザクに向けた。が、スザクの話には続きがあった。

「ただし、もしセナとホノオの追っ手に襲われてピンチになったら、ウチは即、戦闘から離脱するわよ。そこまで付き合いきれないわ。そしてアンタ」

スザクはホノオを睨む。

「あんな危険な技を今度ぶっ放したら、ウチは容赦しないから」

ホノオは脅されたように（事実脅されたが）コクコクと頷いた。

「じゃ、決まりだね！　セナくん、ホノオくん。これからよろしく！」

「よろしく頼むだよ！」

ポプリとウォータは一方的に決めるが、まだ納得しきれていないセナとホノオだった。

「よろしくと言いたいが、お前達、覚悟はできてるの？」

少し厳しい口調でセナは尋ねた。常に命を狙われる苦痛など、経験しなければ分かりっこない。救助隊員でないこの3人ならなおさらだ。

「あたし達ね、犯人から村のみんなを取り返そうと戦ったんだけど、すぐにやられちゃったの。だから、たくさん戦って強くならなきゃ」

「オラ達、もっともっと強くならなきゃなんねぇ。だから、一緒に戦わせてけろ！」

熱心なポプリとウォータの視線に偽りはない。とうとうセナとホノオは押し切られた。

「よーし、分かった。大いに頼らせてもらおう！　ただし、危なくなったらスザクのように逃げろよ。いいな？」

チラリとスザクに皮肉を言いながら、ホノオは苦笑いでポプリ達に告げた。

「うん！」

素直な2人の声を背に受け、夕暮れの空にキャモメが羽ばたいた。

第３０話：左手の焔――その３（後書き）

珍しく盛大に病んでたホノオですｗ　セナが支えに回るのも珍しいｗ

実は以前のセナは、心のどこかで少しホノオを怖がっていましたが、ようやくセナがホノオに歩み寄り、仲良くなったかなぁ……という感じですｗ

第３１話：見張り番（前書き）

いつもは単純で前向きなホノオだけど、さすがに前回まではかなり悩まされたみたいだな。

いつもは不器用なオイラだけど、前回はちょっと頑張ってみた。

ホノオがまた心を開いてくれて、ホッとしたな。

ポプリ、ウォータ、スザクも、オイラ達に味方してくれるらしい。

まぁ、スザクはあまり乗り気じゃないみたいだけどね。

さてさて。今回は、そんなドタバタな１日の夜のお話。ホノオには、何やら考えがあるみたいだが……。

（語り：セナ）

第３１話：見張り番

チコリータのポプリ、ミズゴロウのウォータ、そしてアチャモのスザク。３人がセナ達の旅に加わったのは夕暮れ時であるが、一同はこの日、それ以上歩みを進めずに、岩場の高所（もちろん、寝相の悪いセナやホノオでも崖から落ちなさそうな、安全な場所）で夜を過ごすことになった。日暮れ前にセナの地図を見ながら、セナ達の目的地（エンテイのいる“灼熱の火山”）やこの辺りの岩場エリア（“海辺の岩場”というらしい）の広さを踏まえて検討した結果である。

セナとホノオが“迷宮の洞窟”で採ってきた虹色の木の実をみんなで頬張りながら、５人……いや、スザクを抜かした４人は会話に花を咲かせた。セナとホノオは、ヴァイスやシアンやメル等、仲間のことを話す。ポプリとウォータは、村の友達や家族のことを話す。少し寂しさや切なさを感じたが、この話題により目標に対する意欲を上げたのだった。

そうして一通り話したところで、すでにスザクが眠っていることに気がついた。後を追うようにみんな寝転がり、空に輝く星を眺めた。

しばらくすると、かすかに誰かの寝息が聞こえてくる。それを確認したホノオはムクリと体を起こした。そして、目を閉じているセナを見て話しかけた。

「おい、セナ」

「……んぅ？　ホノ、オ？」

眠りに落ちる１秒前。そんな様子のセナの声を聞くと、ホノオは

“セナの眠気を覚ます”ことにした。

「オレ、スザクのこと好きになったみたいなんだ……」

「はぁ……それは、良かっ……うぇ！？　嘘ぉ！？」

セナは予想以上の反応を見せた。ガバッと身を起こし、ホノオの肩を揺すって問い詰めた。

「あっはっは！　嘘だよ～だ！」

「なんだよ、心臓に悪いな……」

舌を出しておどけるホノオに、セナは苦笑い。……しかし、こんな失礼なやり取りがスザクに知られていたらと考えると、恐ろしいものである。セナとホノオは慌ててスザクを見るが、話を聞いていた様子は感じられなかった。ホッと、安堵のため息をもらす。

「ま、嫌いじゃないけどね。ああいう奴」

一応ホノオはフォローしておいた。嘘ではないのだが。

「ま、それは置いといて。オレ達交代で見張りでもしないか？」

「見張り？」

ホノオの提案をセナは聞き返す。

「あぁ、見張り。この岩場はあまりポケモンが通らないみたいだが、隠れる場所がないだろ？　もし空から救助隊のポケモンに見つかっ

たら、マズそうだし」

「あれれ？　お前、本当にアホのホノオ君？」

セナはホノオをけなしながら、アイデアは褒めた。

「悪かったね、天才セナにも思いつかないような素晴らしい名案を思いついてしまって」

ホノオは皮肉たっぷりに、セナと自分のアイデアを褒めた。

「……と、バカなやり取りはこの辺にして。やっぱりさ、ポプリ達を危ない目に遭わせるのはよくないだろ？　だから、見張りはオレ達が責任もってやればよし！　どうよ？」

「分かった。やってやるよ！」

セナの了解を得て、ホノオはホッとしたようだ。

「よーし。まずはオレが見張り番やるから、お前は寝てろ。しばらくしたら起こすからさ」

「へい、親分」

ふざけた返事をして仰向けになるセナに、ホノオが念を押した。

「いいか？　オレが起こしたときには絶対に起きろよな。もし起きなかったら……どうしよっかなぁ～。ポプリ達の前で、お前の恥ずかしい過去話でも披露しようかなぁ～」

悪戯（いたずら）っぽいホノオの笑みを見ると、セナはゾッとした。起こされたら、絶対に起きる！　セナは体にそう刻み込んだ。

「それとさ。今日は、ありがとな」

「ん？」

セナが目を閉じた直後聞こえたのは、ホノオのお礼。セナは再び体を起こした。

「まさかお前に元気づけられるなんて思わなかったよ。オレ、自分が本当に生きていて良いのか、ずっと悩んでた」

「……うん」

「でもさ、お前が許可してくれた命なんだ。胸張って、奴らの――“ボルト”の分まで生きようと思う。そう決めたら、すごく気が楽になったんだ」

「そっか。少しはオイラ、お前の役にたてたんだな」

「少しどころじゃねえよ。本当に、感謝してる」

さすがに照れて、セナは言葉を返せなくなった。日は出ていないが月明かりが輝き、セナの様子はホノオにも伝わったようだ。

「もーぅ、照れ屋さんなんだからっ！」

やや無理をして出した高い声で、ホノオは女口調で言う。そして、セナの頬をツンツンとつつき、からかい始めた。

「やっ、止めろよ！」

恥ずかしくなり、セナはホノオの手を振り払った。一瞬シンと静寂が訪れたが、それが逆におかしく、２人でニヤニヤと笑った。

「とりあえず、お前が起こすまではオイラ寝るぜ。おやすみ」

「あぁ、おやすみ」

挨拶をかわすとすぐ、セナは眠りだした。そしてホノオは、夜空の下で見張りを続けるのだった。

ホノオが見張りを始めてから数時間。夜も後半戦の時分に、ホノオはセナを起こしにかかった。

「セナ……おい、起きろ」

「むぅ……。にゃに、ほのー……。まだおいら、ねむ……」

意識はあるものの、セナは起きるのを渋っている。今晩一睡もせずにクタクタなホノオは、粘り強くセナに話しかける。

「あーあ。そんじゃ、お前の過去話披露は決定だな」

「ん～……。かってにはなしなしゃいよ……」

しぶとい奴。カチンときたホノオは、セナの尻尾に手を伸ばす。

そして、手加減なしに尻尾をつねった。

「あだだだッ！？」

とっさにセナは跳ね上がり、目もパッチリ覚めたらしい。涙ですこし潤んでいたが。

「さっ、セナ。見張り番。後は頼んだぜ～」

何事も無かったかのように言うと、ホノオはあくびをして仰向けに寝転がった。

「あー、痛い痛い……」

尻尾がまだヒリヒリと痛むことを1人で愚痴り、セナは立ち上がって見張りをした。座りながらの見張りでは、寝てしまいそうだったから。

「上空、異常なーし。前方、異常なーし」

小さな独り言と共に、指差し確認をしながらセナは見張りをする。

「後方、」と言いかけたときだった。誰かがセナの右肩にちょんちょんと触れた。

「だっ、誰だ！？」

セナが振り返るが、怪しい人影は見えない。そばにいるのは仲間のみ。

「……後方、異常あり」

呟くと、セナは肩に触った者の気配を読み取ろうと、意識を後方に集中させた。しかし、足音1つしないのに、今度は左肩を軽く叩かれた。

「うわ！？」

つい小さな悲鳴を上げて振り向くが、やはり背後には誰もいない。

（まさか、この岩場で亡くなったポケモンのお化け……！？　いやいや、そんな、非科学的な。オイラはそう言うのは信じない主義――）

焦って1人でぐるぐると考え事をしていると、また誰かに触れられる。しかも、尻尾を。

「にゃはは！？」

くすぐったくなり、尻尾を振って、尻尾に触れているものを振り払う。ホッと一安心した瞬間だった。背後から、クスクスと笑う声が聞こえてきた。

（こっ、これは本当に、幽霊……！？）

と思うと、背筋に寒気が走る。しかし、その時、

「セーナくん♪」

名前を呼ぶ、聞いたことのある声。

「なあんだ、ポプリか」

セナが振り向くと、ポプリは寝る姿勢（うつ伏せ）のまま、視線を向けていた。目が合うとぴょこんと跳ねるように立ち上がり、セナの隣に座った。

「えへへー。ビックリした？」

「い、いいや、別にっ」

ポプリの問に、セナは必死に嘘をついた。しかし、悲鳴を上げた以上は誤魔化せない。ポプリはまたクスクスと笑う。

「今起きたの？　ポプリ」

話題転換を試みたセナの問いに、ポプリは予想外の返答をした。

「ううん。実はずっと。色々と考えることがあったし、それに、セナくんと2人でお話ししてみたくって」

「えっ……！？」

どう反応してよいのか分からず、セナは大いに戸惑う。鼓動が少しテンポアップするのを感じた。そんな様子のセナに天使の笑みを見せると、ポプリは話し始めた。

「今日のセナくんとホノオくんの会話、実はあたし達も聞いてたんだ。……ホノオくん、辛そうだったね」

（なあんだ、ホノオの事情を聞きたいだけかぁ……あれ？　なんで

オイラがガッカリする必要があるんだ？）

セナの答えが遅れると、ポプリは顔を覗き込む。慌ててセナは言葉を返した。

「あ、あぁ、うん」

一拍置いて付け足す。

「アイツ、元々は単純で、めったに悩まない奴だったんだ。さすがにオイラも戸惑っちまった」

「そっか……。でも、すごいよね、セナくん」

「うんうん、アイツはすご――って、オイラ！？」

テンポよく会話をしていた2人だったが、セナがテンポを乱す。

「うん、セナくん。だって、ホノオくんのことをすごく真っすぐに信じて、攻撃されても優しく接して……。かっこよかったなぁ」

「そ、そそそんなことないって！！」

褒められると顔を真っ赤にし、セナはぶんぶん首を振って否定した。

「オイラさ、これまでアイツにすごく迷惑かけてきた。喧嘩もしてさ。でも、それを乗り越えて信頼しあえる仲になった。……だからさ、アイツが災害の原因でも、仲良くしたくて」

「そっかぁ……。仲間思いなんだね。セナくんも、ホノオくんも！」

「あ、いやぁ……オイラは、別に……」

今が夜でよかった、とセナは思う。照れて顔は真っ赤。調理ができそうなほど熱く感じた。

「ふふっ、照れ屋さんなんだぁ」

ポプリがおもしろそうに笑うと、セナはうつむいた。心臓の音がうるさく感じる。

（おかしいな……。少しは素直に物言えるようになったはずなのに……）

セナがいつまでもだんまりなので、ポプリは話題を変えた。

「ごめんネ、からかっちゃって。話題を変えるよ。えーとね、スザクのことなんだけど、なんというか……ちょっと冷たいけど、気にしないで付き合ってあげて欲しいの」

「あ、あぁ。スザクね。確かにアイツは変わってるけど、別に嫌じゃないよ」

「よかったぁ」

ポプリは柔らかい笑顔のあと、少し表情を暗くした。

「スザクね、お父さんいないんだ」

「え！？」

思わず鋭い声を上げて驚いたセナ。慌ててみんなを見るが、幸い誰も起こしていないらしい。安堵のため息をついた。

「あっ、でも、亡くなった訳じゃないの。ただ、スザクとスザクのお母さんを裏切って、村の外のポケモンと浮気して……。スザクの両親、別れちゃったの。それ以来、スザクは他人を信じられない性格になっちゃったんだ。今は当時より良くなってきたんだけど、それでも、男嫌いが治らなくてね。ウォータは例外だけど」

「そうか……」

離婚か。確かもう1人、そういう思いをした奴がいたような……。

「あっ、これは秘密の話だよ！　スザクも傷ついてるから」

“秘密の話”。なんだかムズムズするような、不思議な響きだ。セナはしっかりと頷き、ポツリと話し出した。

「今から話すことも、秘密な。実はさ、ホノオもなんだよね。両親の離婚。アイツは明るすぎるくらいに振る舞ってるけど、やっぱりそれが原因なのかな――時々さ、“大人”とか“世間の常識”に、猛烈に反発するんだ。いや、最近じゃ“時々”とは言えないんだけどね」

セナの話が終わると、2人は眠っているホノオとスザクを見る。深い眠りについているようで、ゆっくりと呼吸を繰り返していた。

「ホノオくん、立派だなぁ。こんなに明るく振る舞えるのって、す

ごいよね！」

「あぁ」

セナとポプリは目を合わせて、ニコリと笑った。

「よおし。じゃああたし達も、セナくんやホノオくんを見習って、頑張らないと！　絶対……ふわぁ……絶対、村のみんなを見つけ……」

今は真夜中。今夜はろくに眠っていなかったポプリに、とうとう眠気が襲いかかった。

「もう寝たら？　オイラ、しっかり見張っとくからさ」

「うん、そうするね。おやすみ、セナくん……」

というと、ポプリはセナの隣で眠りについた。1人になったセナは、心の中でホウオウと“ポケモン”に話しかけた。

（今日の“破壊の焔”、オイラとの喧嘩、タイミングの良すぎる――本来なら“悪すぎる”というべきだが――岩雪崩、そして、ホノオはもう1人の人間。“破壊の魔王”は地球から――つまりは人間だろうから、ホノオこそが、そうなんだろうな。それは、認める。でもさ、お願いだ）

夜空に浮かぶ満月を、セナは真剣に見つめる。ここしばらく洞窟や空の見えない状況下にいたので、とても久しぶりのような気がした。

（オイラに“心を力に変える能力”があるとすれば、自分の心に嘘をついちゃいけないと思うんだ。だから……。ホノオが災害の原因でも、友達であることには変わりないから。今まで通り、仲良くしたかったんだ。使命を背負っておいて、自分勝手な判断かもしれないけど、許してほしい）

夜空は一切表情を変えずにセナを見下ろす。セナが視線を前方に戻すと、右腕に温かい何かが触れた。

そっと顔を向けると、ポプリがセナに寄り添って眠っている。顔がまた赤くなり、心臓が駆け出すと、セナは未知の感情を覚えた。

セナは朝まで眠ることなく起きていたのだが、正直なところ、見張りどころではなかったようだ。どうしてこんなに動揺するのか、自分の中で結論を出せずにいた。

＞ｉ３０２２６―４３４＜

第３１話：見張り番（後書き）

前書きで新たな試み（？）をしてみましたｗ　以前の“前回のあらすじ”よりも、キャラ目線の方がくどくならないかなぁ……と思いますが、どうでしょうか？

好評でしたら、今までの前書きも編集したいと考えておりますｗ

よろしければ、ご意見お聞かせください。

第３２話：陰（前書き）

あたしとウォータとスザクは、セナくんとホノオくんの危険な旅に同行することを決めたの。その日の夜、セナくん達は見張りをしてくれていたんだ。

あたしはちょっと夜更かしして、照れ屋さんのセナくんといっぱいお話ししちゃった！　ホノオくんのこと、スザクのこと……。みんなそれぞれつらい思いをしてるけど、頑張っているんだね。

あたしも家族や村の友達が心配だけど、頑張ろう！

（語り：ポプリ）

第３２話：陰

時は戻るが、セナとホノオが“迷宮の洞窟”を出た頃のこと。暗い一室に、彼らは集合していた。

巨大なモニター、背もたれがついた黒い椅子。その周りに集まるのは、９人のポケモン達。彼らが部屋の隅（すみ）にある、今“は”魂なき体が入った透明の容器を見ると、彼らにテレパシー（を実際に音声化したもの）が届いた。

「皆さん集まりましたね」

低く不気味に落ち着いたその声の主の敬語は、どこか嫌みたらしい。しかし、声が聞こえた途端に９人のポケモン達はシャキッと背筋を伸ばした。

「はい、マスター。ところで、ご用件というのは……？」

９人のポケモンのうちの１人が代表して答えた。彼らは声の主を“マスター”と呼ぶようだ。

「あなた達も察しがつくでしょう。セナの――美波瀬那（みなみせな）のこと……それから、彼の仲間達のことですよ」

９人は薄々感づいていたようで、やはり……と言いたげにうなる。そして、先ほどとは違う１人が独り言のように発言した。

「作戦は上手く進み、一時は奴の生命反応が消えた。それなのに、なぜ……？」

「彼が秘めている能力……実態は完全に掴めませんが、実に恐ろしい。私の計画にとって有害な危険因子です。そして何より、彼には“小さな恩と大きな恨み”がありますからね。……憎い。なんとしても潰したいのです。これまでは彼が苦しむ姿を見るのが楽しかったのですが、こうも何度も立ち上がられると……見ていて腹立たしいですね」

“マスター”が言うと、９人の部下達は何度か頷く。

「また、彼を精神的に支える可能性のある味方もまた、危険因子です。心が強化されることが、何よりも厄介ですから」

そこで一呼吸置き、“マスター”は続けた。

「そこであなた達には、彼らの消去をお願いしたいのです。一般の救助隊もよく動いてくれましたがね、やはり効果的な動きを期待できるのは、私が見込んだあなた達だけですよ」

「それは光栄です」

“マスター”の意見に、数名が頭を下げ、声を重ねて言う。

「消去といいますと……セナやホノオだけでなく、ヴァイスやシアン。そしてその同伴者のメルなど……が対象ですね？」

冷静な１人の部下が確認をすると、“マスター”は小さく笑みを漏らした後に言い放つ。

「ええ、もちろんです。１人残らずやっておしまいなさい」

冷酷な響きが、部屋に響いた。余韻が消えると“マスター”は再び話を続けた。

「最も、彼らが壊れるのも――そして彼らを壊すのも、容易ですがね。子供はね、もろいんですよ。我々の想像以上にね」

悪質な響きの声は、部下達の表情に影響を及ぼす。先ほどまでは“マスター”の前でかしこまっていた彼らが、1人残らず狂気の笑みを浮かべていた。

「それともう1つ、頼みがあります」

“マスター”が言うと、部下の表情が引き締まった。

「彼――セナの記憶の解析は進んでいることかと思います。そこで、あなた達にも考えてほしい。セナの記憶は、失ったままがよいでしょうか？　それとも、辛い記憶を思い出させ、彼を壊しましょうか？　……いや、あなた達が無事に彼を消去してくれるでしょうが、やはり念を入れておこうと思いましてね」

「なるほど。それは難しい選択ですね……」

部下の1人が、腕を組みながら話す。

「セナは嫌な記憶を封印しているから、自らの“能力”を生かせていない。ですから、奴の記憶が戻れば封印は必要なく、“能力”は目覚めます。しかし奴は、“事件”の記憶に対して罪悪感と責任を感じている。それほどの事件を自分が封印し、忘れていたと分かると――ほぼ確実に、奴は使い物にならないでしょうね。再び立ち上がるリスクはありますが」

「なるほど。セナが立ち上がる危険をなくすために、仲間も潰す必要があるのですね」

別の部下がそう言うと、皆の頭が上下した。

「そういうことです。期待していますよ。私もこれから、新たな“協力者”を“作りに”行きますので。では、行動を開始してください」

テレパシーが途絶えると、部下はみな陰のある笑みを浮かべる。そして、

「行くぞ」

1人の声が上がると、一斉に動き出した。

それから少し時間は進んで、その日の夜中のこと。セナやホノオが見張りを続けるこの時間帯に、ヴァイス達に同行しているジュプトルのネロが、再び枯れた花を眺めている。皆が眠る中、花が秘める思い出に浸っていた。

――この……この、綺麗な花を――。

最後の声が、鮮明に思い出された。自分が尊敬したポケモンは、尊敬した瞬間に姿を消した。

ため息1つ。まだまだ眠れなかったネロは、長い夜を迎えることとなった。

第３２話：陰（後書き）

今回の話は冒険記最短ですねｗ　どうしても、セナ達のドタバタトーク（？）をあの後に繋げられなくて……ｗ

最近更新が多いのは、
・受験期の停滞の分を取り戻したい
・早く“キズナ”が集合したほのぼの話を書きたい
という理由が主です。

とりあえず、
・読むのが負担になった際は、潔く捨てていただいて構いません↑
・そのときの最新話に追いついていない方。途中までの感想も大歓迎です↑↑
……調子乗ってごめんなさいｍ（＿＿）ｍ

最後に。前書きの形式を、キャラによる語りに変更させて頂きますね。ご意見下さった皆様、ありがとうございました！

第３３話：“木の実の森”にて――その１（前書き）

遠回りの攻撃が通用しないのならば、仕方ないですね……。直接消すしかないでしょう。

読者の皆さんにも、ぜひ考えて頂きたい。セナを潰す方法を……。

（語り：“マスター”）

第３３話：“木の実の森”にて――その１

自分達の生死に関わる怪しい会議が開かれたことなど知る由もなく、ヴァイス達はひたすら“精霊の崖”を目指していた。――ネイティオに会い、セナとホノオの場所を特定してもらうために。

怪しい会議の次の日のことだった。彼らは発色の強い花が多く咲いた、ジャングルのような森を歩いていた。生えている木々の幹は太く、多彩な多肉植物も森を彩っている。

ワイルドな雰囲気が漂うその森の中に、やや不似合いなものがあった。それに目をやり話し始めたのは、ハスブレロのブレロだった。

「なぁヴァイス。お前、いつまでその花の冠をつけてるつもり？」

ブレロが指さすのは、ヒトカゲ――ヴァイスのオレンジ色の頭にちょこんと乗った、ふんわりとした可愛らしい花の冠。先日シアンが作って、ヴァイスにあげたものだ。

「え？　あはは、どうしようかなぁ。せっかくシアンが作ってくれたから、大切にしたくって」

冠を手に取りながら、ヴァイスが言う。すると、種族がポッチャマなのでヴァイスより背が低いシアンが、ヴァイスを上目遣いで見て甘える。

「ヴァイス、大切にしてくれてありがとネ♪」

それを見たブルーのブルルは、

「まったく……お前にかなうほど可愛い女の子なんて、なかなかいないよな」

と発言。実はシアンは男の子なので、これはもちろん皮肉である。

「もーっ、またブルルがいじめるぅ！」

「“また”ってなんだよ、“また”って！」

シアンとブルルが言い合う中、ブルル――そしてブレロに痛い言葉を浴びせたのは、カメールのメル。

「あら。昔はいじめっ子だったのにねぇ」

「……」

冗談半分の口調で言われたので傷つかなかったものの、返す言葉がなくなったブレロとブルル。以前はヴァイスに焼き餅を焼き、イタズラを繰り返していたからだ。

大人しくなった彼らに追い討ちをかけたのは、プラスルのソプラ。一方的にマイナンのアルルと腕を組みながら、

「それに、シアンよりも可愛い女の子なんて、ここにいるだろ？なっ、ブレロ、ブルル♪」

口調は荒いが、ソプラは女の子。そして、この言葉は冗談なのかもしれないが、やや自己主張が強そうだ。

「えぇっ？　ボクは、そんな……」

一人称はボクだが、女の子であるアルル。ソプラの言葉を謙虚に否定するが、シアンの（この場合は“女の子としての”）可愛らしさを肯定していることになってしまうので、あまりよろしくないフォローだ。

「はい……そうでした」

権力にはめっぽう弱いらしい。それとも、ソプラの凶暴さを恐れたのか……。いずれにせよ、ブレロもブルルも小さくなって、素直に肯定した。

この一連のやり取りを、一言も言葉を発しないで見つめる者がいた。ジュプトルのネロだ。ヴァイス一行の８人旅のメンバー中で最近仲間になった彼は、寡黙（かもく）で少し謎めいている。

そんな彼の様子に気がついたメルは、明るくネロに話しかけた。

「珍しい植物がいっぱいだねぇ」

「そうか？」

返ってきたのは意外な言葉。

「ん？　ネロは馴染みがあるのかい？　こういう多肉植物とか、色の濃い花とか……」

「ん。俺、ガイアの各地を旅してたから。そしたらお前達に会った」

ネロにしては、これでもよくしゃべった方だ。それにしてもさっきから、意外なことをさらりと言ってのける。

「そうかい。旅は楽しかったかい？」

と、メル。

「ん、まぁ。だが、お遊びの旅じゃなかった。俺は強くならなければいけない……」

いつにもまして表情が険しいネロ。何かよからぬ思い出を感じたメルは、話題を変えた。

「どうだい？　アタイ達の旅のメンバーは。なかなか愉快だろう？」

ふざけるシアン。突っ込みのブレロ、ブルル、ソプラ。そして苦笑いするヴァイス、アルル……。それぞれ個性や想いを持ったメンバーを、メルは誇らしげに見る。

「ん。1人旅も好きだが、こういうのも、良いものだな」

ネロの表情が柔らかくなるのを見ると、メルは心の底から安心した。

一方この日の昼時、岩場を突破したセナ達は“木の実の森”の入り口に到達した。――“木の実の森”は、オレンやモモンはもちろんのこと、珍しい木の実も数多くなっている森である。木と木の間には十分な空間があり、木々は大地の栄養をたっぷりと吸って立派に育っている。

「さて、“灼熱の火山”に行くにはこの森を通ると早いんだけど……。その前に、オイラから1つ提案がある」

セナに視線が集まると、彼は説明を始めた。

セナの提案とは、“今いる5人を2つのチームに分けて行動しないか”ということだった。もちろん、セナとホノオは別々のチームに分ける。

多くの救助隊がセナ達を探すときに一番の手がかりになるのは、“ゼニガメとヒコザルの2人組”という情報なのは確実である。だから、そのペアを崩してみてはどうだ――と言うのだ。

非常に便利な案ではあるが、難点もある。難点その1。確かにセナとホノオの存在が見た目でバレることはない。しかし、見た目以外――例えば波動や声――で正体を見抜くポケモンがいない保証はない。難点その2。万が一正体がバレてしまった場合、2チームに分かれていることでメンバーが少ないため、戦闘が厳しい。難点その3。チーム分けしたほうが襲われにくいとはいえ、彼ら5人は同じ目的地を目指す仲間。離ればなれになるのは精神的によくないし、それはそれで不便なこともあるだろう。

「――だからさ、とりあえずこの木の実の森の中では、2チームに分かれて進まないか？　確かに森の木と木の間に空間はあるけど、戦闘できるほど広くないし、5人行動じゃかえって動きにくいと思うんだ。……この森はそんなに大きくないから、夕方くらいに出口で集合しよう」

とりあえず、セナの言葉に皆が頷く。その直後、

「チーム分けはどうするのよ？」

と、今日も口数の少なかったスザクが言った。やや不機嫌そうな口調だ。――最も、少なくともセナ達に出会ってからはいつもこの調子だが。

「んー、テキトーでいいや、オレは。お前と離れさえすればっ」

ホノオがセナを見ながら、冗談混じりで言う。しかし、彼の言う通り、あまり凝ってチームを決める必要はないだろう。セナとウォータが声を合わせて「うーん」と言った直後、ポプリが声を上げた。

「じ、じゃあ、今の立ち位置で決めちゃおうよ！」

現在、ポプリ、セナ、ホノオ、ウォータ、スザクという並び方で、円形になっている。ポプリは発言の後、少しセナに歩み寄った。

「あたしとセナくんが一緒で、ホノオくんとウォータとスザクが一緒！　……ダメかな？」

（ふむ、なるほど。ホノオとスザクが一緒ね）

夜中の見張り時の会話で、ホノオとスザクの境遇の共通点を知ったセナは、ポプリが配慮して彼らを一緒にしたのだと解釈した。

「オイラはそれでいいかな？」
「オレもさんせーい」
「問題ないだよ！」
「しょうがないわね」

４人の了解が得られたところで、木の実の森の探索が始まった――。

こちらはセナ、ポプリチーム。ホノオチームと別れてすぐ、ポプリは何かを探すように、辺りの木々にせわしなく目をやった。

「何か探してるの？」

「“リンドの実”だよ」

セナの問いに、ポプリは答える。リンドの実。聞いたことのない木の実だ。セナが辺りを見回してみると、なるほど見たこともない、セナにとっては奇妙な形の木の実がたくさんなっていた。

「リンドって何色？」

「黄緑色だよ……あっ、あった！」

セナがリンドの特徴を聞いて一緒に探そうとしたその時、ポプリはリンドを見つけたようだ。“ツルのムチ”のツルを使って、木の実を収穫する。ポプリがもぎ取ってセナに見せたその木の実は、ポプリが言ったとおりの黄緑色で、エンドウ豆のようなさやに丸くて大きな実が3つほど入っていた。

「……これ、食えるの？」

「うん。食べてみる？」

セナの発言をおかしそうに笑うと、ポプリはセナにリンドの実を

差し出した。セナはさやから丸い実を取り出し、パクリと口に入れてみた。初めての木の実をよく味わってみる。

「……んー、なんか、植物特有の青臭い味がする。オイラは嫌いじゃないけどね。これは、好き嫌いが分かれる味だなぁ」

と、素直な感想を漏らした。

「そうだね。この森にはもっと美味しい木の実がいっぱいあるし、リンドは味はイマイチかも――体にいいんだけどね。でも、リンドの実の凄いところは味じゃないんだよ！」

得意げに言うと、ポプリはリンドの木からもう1つリンドの実を収穫した。そして、「待っててね」と言うと、そこらの木にしがみついていた植物のツルを丁寧に折る。そして、ツルにリンドの実をくくりつけ、生えていた花を飾りとして器用にツルに編み込み……。あっという間に、きれいなネックレスが完成した。

セナがその手つきに感心していると、ポプリはセナの頭からネックレスを通した。

「はい、あげるっ」

「え……う、うん」

満面の笑みのポプリに、戸惑うセナ。

「セナくん、草タイプの技が苦手だよね？　リンドの実ってね、苦手な草タイプの技を受けたとき、一度だけ身を守ってくれるの。すごいよね？」

「へぇ……」

感心のあまりこれしかコメントできなかった。こんなに便利な木の実があったんだな――と、新たな世界が広がった気分になるセナだった。

「あのね、セナくん」

急に真剣になったポプリの口調に、セナは気を引き締めた。

「昨日は、本当にごめんなさい！」

「……へ？」

「キミ達を犯人だって決めつけて、一方的に攻撃しちゃって……。あたしの“葉っぱカッター”で傷ついたセナくんを思い出すと、あたし……何度謝っても辛くて……」

うつむき、頭に生えている葉っぱがしゅんと垂れているポプリ。彼女を見ていると、なんだか気の毒に思えてくるセナだった。

「うーん、確かに痛かったなぁ。あの毒入り“葉っぱカッター”」

「うん……。ごめんね」

「でもさ、別にオイラ怒っちゃいないし、とにかく……大丈夫だから、気にしないで欲しい」

やや柔らかな表情でセナが言うと、ポプリの目線が少しあがってセナに向けられる。

「お前はもう仲間だろ？　だから、これからオイラを助けてくれりゃあそれでいい。……こんな風にな」

リンドの実のネックレスをポプリに見せながらセナが言うと、暗かったポプリの顔に笑みが戻った。

「あっ、ありがとう！　セナくん。……そのネックレス、大切にしてね」

「う……うん」

急にキラキラ輝く笑顔を見せられたので、思わず戸惑いの混じった返事をしてしまった。ペースを乱すセナを見ると、ポプリはまたおかしそうに笑う。

「ふふふ。じゃあ、行こうかセナくん。あたしが美味しい木の実を教えてあげるよ」

「あっ、待てよ！」

駆けだしたポプリをセナが追おうとしたのだが……巨大な木の根につまづき、大転倒。くるりと前転して仰向けになり、いてて、と呟く。

「大丈夫？」

「うん……大丈夫。いつものことなんだ……うん」

セナが恥ずかしそうに顔を赤らめて起き上がると、２人は歩みを

進めた。

第３３話：“木の実の森”にて――その１（後書き）

ヴァイス達８人みんなの個性を生かせていない気がする……。キャラがごっちゃになってしまった方、その他問題点を発見した方…ぜひ遠慮なくご指摘くださいねｗ

第３３話：“木の実の森”にて――その２（前書き）

やってきたのは木の実の森！　セナの提案で、オレ達は２チームに分かれて行動することになった。セナとポプリがペア。オレはスザクとウォータと一緒。……平和すぎるセナチームが羨ましいぜ。

さて。今回のオレ達のパートは、気まずさ８０％、辛さ１５０％でお送りします！　……え？　何の話かって？　い、言わせないでくれたまえ……。

（語り：ホノオ）

第３３話：“木の実の森”にて――その２

一方、ホノオチーム。

「ふぅ～。いい天気だな。ウォータ、スザク」

セナ達と分かれた直後、ホノオはとりあえず当たり障りのない話をする。

「あぁ。ポカポカして気持ちいいだよ～！」

と、返事をするのはミズゴロウのウォータ。アチャモのスザクはというと――もちろん、完全無視。

「なあ。お前達の故郷のグリーンビレッジってどんなところだったの？　良ければ教えてくれ」

諦め悪く、ホノオは言葉を重ねた。

「緑豊かで、住んでるポケモンも優しくて、いいところだよ～！　それに――」

「やめなさい……」

機嫌よく答えるウォータの言葉を、スザクは遮った。

「昨日言ったでしょ？　ウチらの村は、今はボロボロなんだから……。嫌なこと思い出させないで」

「ご、ごめん」

怒りにふるえるスザクに威圧され、ホノオは小さくなって謝罪。しかし、その“ごめん”は届かなかったようで、スザクは、

「ほんと、デリカシーのない奴。最低」

ツンとそっぽを向き、冷たい言葉を平気で放つ。

「……」

ホノオが気まずそうにウォータを見ると、彼は申し訳なさそうに頭を下げた。しばし2人は石化（あくまでも比喩だが）し、スザクはため息をついて地面をにらむ。

（手強いぞ、この女……）

なんとかスザクの心を開こうとあれこれ考えてみたものの、ホノオには良い案が浮かばない。ウォータも、自分にはここまで冷たくないスザクに対する対処法が浮かばないらしい。

（口は災害のナントカって言うし……何でも適当に話せばいいってもんじゃねえな）

それを言うなら“口は災いの元”。とにかく足を進めよう、セナやポプリとの合流地点に早く着いてしまおう――そう思ったホノオが一歩を踏み出すと、この奇妙な沈黙に包まれた3人組は、再び歩き出した。

無言で歩き始めてからどれくらい経っただろうか。ホノオが懸命

に言葉を探し、不適切な表現がないように配慮し、しかし結局スザク様の反撃を食らわない保証のある言葉が見つからず――と苦戦している中、突然歓声を上げたのはウォータ。

「あーっ！　オラの大好きなマトマの実だぁよ！」

と、今までの沈黙が嘘のように目を輝かせ、前方の木に向かって猛ダッシュ。ここでホノオは、この森に幾多の木の実がなっているということを久々に思い出したのであった。

ホノオは小走りで後を追い、スザクはまたため息をついて面倒くさそうに歩いてウォータを追った。

「えいっ、とおっ！」

かけ声とともに、ウォータは地面を強く蹴ってマトマの木の枝に手（前足）を伸ばす。しかし、普段４足歩行の彼は、どうも高く飛び跳ねるのが苦手なようだった。

「ん～！　枝が高い……。採れないだよ～！」

悔しそうに言うウォータに、

「木登りなら任せろっ！」

とホノオ。スルスルと木に登り、木の枝の上に立ち、真っ赤に熟れるマトマをもぎ取った。

「うまくキャッチしろよ！」

と言うと、柔らかな実をウォータめがけて落とした。ウォータは

意外とうまくキャッチする。それは良いのだが、彼は欲張って、ホノオに15個ものマトマを要求した。

「わぁ～、ありがとう、ホノオ！」

木から降りてきたホノオに向かって、ウォータは満面の笑みを見せた。ホノオは、自分の行いが数倍にも膨れ上がって感謝されることに若干の戸惑いを覚える。

「いただきまーすっ！」

と元気に挨拶し、ウォータはマトマにかぶりつく。あっという間に1つを平らげた後、

「あぁ……美味しいだ。オラは幸せだよぉ……」

大袈裟なまでにうっとりとした表情を浮かべる。

「そんなに美味しいの？」

マトマに興味を持ち、ホノオはマトマの山から1つを手に取る。トマトに先の丸いトゲが幾つかついたような……そんな外観だ。

「あぁ、最高だよぉ。オメェも食べてみるだ。スザクも、1つ食べねぇか？」

ウォータは機嫌良さそうに、ホノオとスザクにマトマをすすめる。スザクはまたまたため息をつき、

「ウチ、それ嫌い」

一方のホノオは、ウォータが絶賛するマトマの味に期待し、目を輝かせた。

（トマトみたいだし、酸っぱいのかな？　甘いかもしれないな……）

どっちにしろ美味しそうだ……と、食べる前からホノオは幸せそうな顔をしている。ウォータが２つ目に手を伸ばしたのを見ると、

「じゃ、遠慮なくいただきー！」

元気に宣言し、ホノオは頭から突っ込むようにマトマにかじり付いた。

飲み込んで一拍すると、突然頭が真っ白になる。

――辛い！！

「うぎゃあぁっ！　辛い辛い辛いぃ……っ！！」

予想外の味に奇襲され、ホノオは地面を転がってわめきだした。

「そうかぁ？　確かにちょっとピリッとするけど、それがまたいいだよ～」

と、２つ目を平らげたウォータ。

――正直“ピリッ”どころでは済まされない味を、マトマは持っている。多種多様な木の実の中でも、マトマはかなり辛い方だ。それ故にこの世界には、マトマの実をいくつ食べられるか、という競技もあるらしい。

と、客観的に見ても強烈な辛さのマトマだが、それをホノオが食べたのが問題。実は彼は、辛いものが大の苦手なのだ。

「あーあ。アンタのおかしな味覚にも呆れたわ、ほんと」

スザクの目線の先には、３つ目を手に取りつつホノオを心配そうに見つめているウォータが。

「オラはおかしくないだよ！　マトマの美味しさがわからないオメェ達がおかしいだ！」

自分の舌とマトマの味を一途に信じるウォータに、スザクは怪訝（けげん）な表情を見せた。

「ううぅ……」

耐え難い辛さに襲われている上に、マトマが通った喉に激痛が走り、ホノオは声にならないうめきを上げている。

後にホノオは言う。「まさか木の実を食べて死にかけるとは……」と。

場面は再びセナとポプリについて。

ポプリオススメの木の実を食べながら、２人はのんびり森を歩いていた。例の３人組とは比べものにならない平和な光景が、ここにあった。

「うわぁ、これ美味しい！」

とセナが言うのは、まん丸でピンクの木の実、ゴスの実。甘味が強いのだが、わずかな苦味がしつこさを和らげる、食べやすい木の

実だ。

「セナくんって、ちっちゃいのによく食べるんだねっ」

可笑しそうに笑うポプリの言葉を聞き、セナは沈黙してしまった。食い意地を指摘されるだけでも恥ずかしいのに、“ちっちゃい”と言われるのは大打撃。

（オイラ、ポプリにも“弟みたい”とか思われてるのかな……？）

年長者のメルにそう思われる分にはいい。でも、同じくらいの年齢のポプリにこう思われるのは、ちょっと男の子として情けない。そして、なぜだかちょっと切ない。

「あ、ごめんね。……気にしてた？」

ポプリに気を使われると、ますます自分が情けなくなった。

「う、ううん、大丈夫！」

とっさに笑顔を作ったセナは、背筋をピンとのばし、わずかながら身長をかせいだ。気まずいので話題を作る。

「ポプリって、木の実に詳しいな」

この森に入ってから、美味しい木の実やマズい木の実。便利な木の実や食用木の実。――あれこれ教えてくれたのはポプリだった。そんな彼女に、セナは感心していたのだ。

「えへへ、ありがとう。あたし、植物が大好きでね、木の実だけじ

ゃなくてお花にも詳しいんだ」

「へぇ……」

「セナくん、“クロユリ”ってお花、知ってる？」

「いや、知らないや」

「そっか。あのね、花言葉って、たいていは“愛”とか“夢”とか、素敵な言葉なんだ。クロユリにも愛って花言葉があるんだけど、それだけじゃないんだよ」

一拍置いて、ポプリは声のトーンを落として言う。

「“呪い”」

一瞬、ゾクリと寒気がした。こんな不気味な花言葉があるとは……。

「……なんか、怖いね」

「うん、ちょっとね。でも、あたしはクロユリも大好き！　不思議なくらい真っ黒で、見てると吸い込まれそうになるの。そんな魅力があるお花なんだ」

キラキラ光るポプリの笑顔に照らされると、セナのクロユリに対するマイナスイメージも和らいだ。

「それからね、あたし、一度みてみたいお花があるんだ」

ポプリのお花トークは止まらなかったが、花にも負けない可愛らしい笑顔がそこにあったので、セナとしても全く迷惑ではなかった。

「“ライメ”ってお花なんだ。赤と黄色の花びらでね、鮮やかな発色がとてもきれいなの。花言葉は“みんながいる幸せ”。本当に珍しくて、なかなか見つからないお花なんだけどね、こんな言い伝えがあるんだ。――ライメの花を身に付けていると、大切なポケモンとずっといっしょにいられるんだって」

思わずセナは赤面して顔を地面に向けた。理由を明確に出すことはできなかったが、

（女の子とこんな話をするのって、慣れてないからなぁ……）

と、照れのせいにしておいた。

「大切な村の仲間が離れるのって、本当に寂しいこと……。だから、このお花が欲しいの」

笑顔の上に切なさを軽く乗せるポプリ。はっとして顔を上げるセナ。なぜだかポプリ以上の切なさを感じた。

「あっ、なんか暗くなっちゃってごめんねっ！　あたし、大丈夫だから」

「うん」

もっと柔らかい言葉があっただろうに……。うんしか言えない自分を嘆くセナだった。

「ねえ、セナくん」

「なに？」

ポプリの口から出たのは、簡単なようで難しい質問だった。

「セナくんにとって、“幸せ”って何？」

「えっ……？」

思わず戸惑うセナ。ポプリの口調は気軽なものだったが、問われているものは大層なもので、少し重い。

「そうだな……。うーん……」

あれこれと考えていると、ふとライメの花言葉が思い浮かぶ。みんながいる幸せ。……これだ。

「ライメの花言葉には、共感できるな。何というか……仲の良いみんながいるって、すごく嬉しくて……。でも、一度そんな状況を失わないと気がつけない、悲しい幸せ」

ヴァイス、シアン。彼らと共に過ごした救助隊生活が鮮明に思い出される。もうだいぶ前のことのように思えるのに、である。

「オイラさ、こうして追われる身になる前の、救助隊生活が幸せだったと思う。すぐそばに、たくさんの理解者がいて。広場のみんなにも感謝されてさ」

セナを見つめるポプリの瞳は悲しげに光る。２人とも、とても“

幸せ”を語りあう表情には見えない。

「それなのにさ。あの時のオイラはそれを楽しむ余裕に欠けていたんだよね。リーダーだからしっかりしなきゃ。強くならなきゃ……ってね。こんなことになるんだったら、もっと楽しんでおけば良かったなぁ……」

先ほどまでは、美味しく色とりどりの木の実がなるこの森に魅力を感じていたセナ。だが今は、あの日々に勝るものはないと強く感じていた。心の中でヴァイスの声が響くと泣きそうになる――が、ぐっとがまん。

話し終えて、ふと、セナは気がつく。どうしてオイラは、昨日会ったばかりのポプリにこんなに素直なことを言えているんだろう？気になりだしたら、顔の赤みが引かなくなった。

「そっか……」

今にも泣き出しそうな顔で、ポプリが同情している。

「ごっ、ごめん。ちょっと頭がおかしくなってたみたい」

慌てて苦笑いし、セナは照れ隠しをした。そんな彼を見るとポプリは微笑み、話し始めた。

「あたしもね、セナくんと考えが似ているんだ。“一緒にいたい”と思えるポケモンに出会えて、本当にそのポケモンと一緒にいられる時って、すごく幸せ」

「うん。そうだよな」

相づちをうつセナは、ここでポプリの異変に気がついた。微笑しているのには変わりないが、目線がどこかせわしなく、頬を赤く染めている。

「だからね、あたしは今、幸せだよ」

「えっ？」

それって――？

セナがポプリの言葉の意味を理解する、ほんの少し前のこと。

「セナくん。あのね。あたし、セナくんのことが……す、好きっ！」

セナの全身が完全に固まる。持ち主の静止により、セナが首から下げているリンドのペンダントの揺れが目立った。

第３３話：“木の実の森”にて――その２（後書き）

ウォータの口調が自分でもよく分かりません↑

ホノオが辛いもの苦手だという設定は、意外に思う方も多いかも知れませんねｗ　ウォータの味覚がオカシイのはしっくりきそうですが↑

……ちなみに、この小説上の味の好みは、性格とは関係ないです。そもそも、ゲームにない性格のやつばっかりｗ

“クロユリ”は実在する花です。私が花言葉を調べるのにハマっていた時に見つけたのですが、なんだかつまらないホラーを見るよりも寒気がしましたｗ

“ライメ”は架空の花。花言葉が“みんながいる幸せ”ということで、世界のいろんな国の“幸せ”を調べた結果、リトアニア語の幸せ――ライメが一番可愛らしかったので、お花の名前にしちゃいましたｗ

ちなみにライメの色ですが、茎や葉は緑なので、花びらは黄色と赤にして……。リトアニアの国旗カラーにしてみました。

……要は、少しマイナーな言語を使いたかったんです↑

さて、爆弾発言をしたポプリに、セナはどんな反応を見せるのか――。それはまた、次回で（笑）

今回、あとがき長くなりましたね（＾＾；）

第３３話：“木の実の森”にて――その３（前書き）

あんなことを言われたら、それ以外の記憶が一瞬で飛んでいっちまうよ。

お、オイラが、す、き……だって！？

（語り：セナ）

第３３話：“木の実の森”にて――その３

突然の先制攻撃を受けて直立不動のセナ。彼の思考回路がめちゃくちゃな中、ポプリは丁寧に言葉を紡いだ。

「あっ……ごめんね、いきなり。セナくんがあたしをどう思っていてもいいんだ。ただ、気持ちを知ってほしかっただけなの」

照れで頭を下げ、上目遣いでポプリは思いを語る。

オイラなんかのどこが――？　セナの言葉無き問いに、ポプリは答えた。

「セナくんに初めて会った日……ホノオくんが暴走しちゃったよね。その時のセナくんの行動が素敵だな、って。本当に一途に友達を信じられる、優しい子だなって思ったの。……この時はまだ、“好き”っていうより“尊敬している”気持ちの方が強かったかな」

ただ普通にほめられただけでも照れて真っ赤になるセナは、体から魂が抜けて完全に固まりそうになったり、嬉しさと恥ずかしさが爆薬になって大空に発射されそうになったりと忙しかった。そんな彼を見てポプリは可愛らしくクスッと笑い、話を続けた。

「それで、セナくんのことをもっと知りたくて色々とお話ししてみたら、怪我させたあたしに嫌な顔１つしないでくれて、嬉しかった。それに……実は照れ屋さんだったり、食いしん坊さんだったり。そんな意外な一面が可愛いなぁって……」

言い終えると、ポプリは右前足で顔を覆った。

「うわぁ、なんか恥ずかしいよ……。ごめんね。もっと、うまく……言えると思ったんだけどな……」

十分すぎるほど上手く言えている、とセナは思った。さて、問題なのはここからだ。セナのターンが回ってきた。

（どどどどうしよう……！　な、なんて言えば良いんだろう……）

見事なダイレクトアタックを決めたポプリだが、さすがにセナの足元よりも手前の地面に視線を落とし、これ以上の言葉は言えないようだ。セナは、ポプリからもらったネックレスについているリンドの実にそっと触る。少しは落ち着こうかと思ったのだが、ゴローニャに“体当たり”を繰り出すような効果しかなかった。――いや、“電気ショック”かもしれない。

（お、オイラのことが、すっ、好き!?　それってやっぱり、“友達として”じゃなくて――？）

そうでないのはポプリの様子を見ると明らかだった。“男の子として”、である。

（オイラは……どうなんだろう？　ポプリのことを、オイラはどう思っている？）

そんなことを思うと、心臓が一瞬のうちに一生分の拍動を終えて止まってしまいそうだった。

恋は、ドキドキするもの。しかし、ドキドキすればそれは恋なのかと言われると、そうとも限らなくて。

身に危険が迫るとドキドキするし、セナの場合は、同性の友達に

ちょっとほめられただけで照れて頬が赤く色づく。

ならばこれは――ポプリに好きと言われ赤面し、心臓が全力疾走しているこの状況は――恋なのか？

確かに、ポプリと話をするのはとても楽しいし、それでいてくすぐったいような、異質な感情を覚えた。しかし――。もしそれが、ポプリ以外の女の子だったらどうなのか？　“女の子と2人っきりで話をする”という行為そのものが、何かそういった異質な感情を秘めているのではないか？　それを検証できる体験は、残念ながらセナにはまだない。

それにそもそも、ほめ言葉に弱い自分がこんな告白じみたこと（いや、本物の告白である）を言われて、動揺しないはずがない。心臓の揺れもこれが規定値なのではないか？

このドキドキは、いつから始まったんだろう？　どれくらい速く、強くドキドキすれば、恋と呼べるんだろう？

“好き”って気持ちは、分かるようでよく分からない……。

――この時のセナはおそらく、潜在意識の下でこんなことを考えていたのだろう。そうでもなければ、こんな真っ白な頭から身に覚えのない言葉が出てくるはずはない。

「あの、さ。ポプリ」

口調こそぎこちないものの、彼が後から考えてみると、この時のセナは器用で無難な言葉を返していた。――憎たらしいほどに。

「オイラ、お前のこと……友達、としては、好き……だ、と、思う。うん。でも……その……恋、とか、“好き”、とか……まだちょっと、よく分からないというか……」

ここまで話すと、さっきまでの完全パニックモードから少し抜け出せた。苦笑いを浮かべる余裕ができたのだ。

「えと……ごめんな。オイラまだ、“好き”って気持ちが分かるほど、大人じゃ……ないみたい、多分」

これが、セナの答えだった。ポプリを否定はしていない——むしろ友達としては肯定したものの、やはり罪悪感は強く感じた。

「そっか。……ふふっ、なんだかセナくんらしい答えだね」

寂しげな様子などは一切なく、どこか吹っ切れたのか……。とにかく爽やかな表情のポプリがセナを真っ直ぐに見つめていた。

「あっ、ごっ、ごめん……。お前は悪くないんだ、全然。悪いのはオイラだし……」

余計に罪悪感に襲われて焦るセナに、

「いいよいいよっ！　あたし、そういう子供っぽいセナくんも大好き！　だからさ、今のことは気にしないで欲しいな。……でも、セナくんは優しいから、気にしちゃうと思うけど」

「う、うん……」

ポプリの、柔らかだが明るい光に包まれた瞬間、セナは小さな痛みを胸に感じた。また心臓が駆け出す。今度は、少し苦しい。

「セナくんが、あたしを友達って言ってくれて、すごく嬉しかった

よ！　ありがとう。だから元気出してっ。ほら、ゴスの実を探しに行こう！」

と言うと、ポプリはセナを導くように走り出した。

「わっ、待てよ！」

叫ぶと、セナはポプリの後を追う。リンドの実の揺れを感じると、心が苦しくなった。

一時は胸の高鳴りで死にそうになったセナだが、その一方で、ホノオはマトマの酷い辛さで死にそうになった。

彼に甘い木の実を食べさせるなどしてどうにか復活させると、ホノオ、ウォータ、スザクの３人は再び森を歩き出す。――タイムロスが大きかったので、急ぎ足で。

「う～……。まだ喉も腹も痛い……」

ホノオは恨みを込めてウォータを睨みつけながら言う。マトマの刺激によりのどを痛めたので、声はひどくかすれている。

「悪かっただ、ホノオ。オラはマトマが大好きだから、まさかそんなに嫌がるとは思わなかっただよ～」

と、１２個ものマトマをあっという間に平らげた怪物ミズゴロウが返答する。

「さらに辛い“ノワキの実”って奴も大好きなんだども……どこかになってないかぁ？」

その発言を耳にしただけで、ホノオは記憶に深く刻まれた辛さを再び思い出し、顔をしかめていた。

（もし、さっきのマトマよりもノワキが先に見つかっていたら……オレはそっちを食わされていたのであって……）

寒気がした。

「うぅ……。スザク。ウォータってまだ小さいときからこんなだったのか？」

ウォータをエモノにして話の種を作ってみた。なかなかいいアイデアだとホノオは思ったのだが……。

「アンタには関係ないでしょ」

「いやいや、だって、オレ達仲間だし。教えてよ」

「嫌よ」

「どうして？」

「面倒くさいから。他にまだ理由が必要なワケ？」

「……」

「……」

と、会話は終了。

再び、言葉無き3人の行進が始まるのだが。一行に嫌な意味の賑やかさをプラスする役目がまたウォータに回ってきたのが厄介だった。

ホノオ達が森を歩いていると、たまたま2人のポケモンに遭遇し、バッチリ目があった。種族はキノガッサとコノハナ。どちらも草タイプを持ち、姿が森によくなじんでいる。

救助隊の可能性が高いため、ホノオはすぐに目をそらしたのだが、

「ねえ、君達！」

と、キノガッサが声をかけてきた。ギクリとしながらも、

（他人のフリ、他人のフリ……。オレはホノオじゃないんだ……）

と言い聞かせて平然と視線を向けた――時だった。

「あっ、2人とも。コイツはヒコザルだども、例の追われているホノオだなんてことは断じてないだよ！」

バカ！　と、ホノオとスザクが口パクする。

「ん？　君達、怪しい……」

それは当然である。まだあちらが救助隊かどうかも分からないの

に、進んで無実を主張するのは、怪しい。――むしろ、ボロが出たに等しい。

「いっ、いやいやいや！　怪しくないですって！　僕は普通のヒコザルですよぅ！」

可能な限りの敬語を使ってホノオが取り繕うが、もはや隠しきれない焦りが浮かんでいた。喉の調子が良くないことも手伝って、声が無惨に裏返っている。

キノガッサとコノハナはニンマリと笑う。

「そうか、お前はホノオなのか……。じゃあ、ゼニガメになったセナはどこだ？」

キノガッサに言われると、戦闘は避けられないと悟る。ホノオはスザクを見、ウォータを睨み、

「お前達、先に行け。オレが何とかするさ」

と発言。スザクは遠慮なくその場を撤退し、罪悪感の足りない（というか、自分の発言の何が悪かったのか分かっていない）ウォータは遠慮がちにスザクの後をついて行った。

「セナ？　さあ、知らんな、そんな奴」

ここまで来てとぼけるホノオは、明らかに相手をからかっている。

「ふん、いいさ。なら、お前から無理やり聞き出す！」

と言うとコノハナは尖った無数の種を勢いよく発射した。“種マ

シンガン”だ。ホノオは身軽に攻撃を避け、相手を軽く“火炎放射”で撃退――しようとしたのだが。脳裏を悪夢がよぎり、炎タイプの技を使うのを躊躇った。

“破壊の焔”。命をも奪うあの炎の記憶は、ホノオが炎タイプの技を使う気力を燃やしてしまった。

その一瞬のスキを、相手は待ってくれない。

「“マッハパンチ”！」

キノガッサの右腕が鋭く伸び、ホノオの腹部を殴りつけた。

「うぐっ……！」

顔をしかめて、その後咳き込む。

「あっ、ホノオ！」

遠くで見ていたウォータが思わず駆け寄ろうとしたが、ホノオはそれを止める。

「じゃあ、いいよ。炎技が怖くたって……！」

と言うと、ホノオは素早さと小回りを生かしてキノガッサの背後に回り込み、左足を思い切り後ろに引く。そして、

「“メガトンキック”！」

背中を思い切り蹴ってやると、キノガッサはうつ伏せに地面に引きずられた。

「このっ……！」

とコノハナが振り向いたが、ホノオのスタンバイはオッケー。

「“メガトンパンチ”！」

今度は力自慢の利き腕で思い切りコノハナの腹を殴り、そうして敵2人を気絶させたホノオだった。

ホッとため息をつき、一応敵2人に謝ると、ホノオはそそくさとその場を離れた。そして、ウォータとスザクに合流する。

「あっ、ホノオ！　良かっただよ～！」

と、へらへら口調で言うウォータに、雷が落ちた。

「このバカヤローっ！！」

「ひいぃっ！？」

たまたま敵が弱かったから良いものの、これが強かったら……。

そう考えると、この空気の読めないミズゴロウを感情混じりで叱るホノオであった。

第３３話：“木の実の森”にて――その３（後書き）

妙に展開の早い告白をやってのけたエースアタッカー（↑）、ポプリちゃんですが、ここまでこの小説を読んで下さった皆様なら、「でも、キャラにクソ厳しいこの作者が、こんな甘い展開を許すか？」……などと感づいていたかもしれませんね（笑）。と言うわけで、混乱状態のセナがとっさに生み出した言葉がアレです。

“破壊の焔”に辛いものにウォータに……。ホノオのトラウマがどんどん増えている気がしますｗ　個人的には、格闘技ホノオをたまにはカッコ良く書いてやりたいなぁ～と思っているので、こんなホノオをこれからもよろしくです（↑）

ウォータは……ホノオ以上のアホキャラになりそうな予感。ところで、マトマよりも辛い木の実って、ノワキの実で正しいんですよね（＾＾；）？　ノメルだっけ？↑

ではでは、また次回お会いしましょう！

第３３話：“木の実の森”にて――その４（前書き）

マトマなんかをバクバク食べてる時点でおかしいけど、ほんと、ウォータはバカね。余計なことをベラベラ言うから、救助隊に目をつけられたじゃない。

まあ、救助隊なんてウチには関係ないわ。

（語り：スザク）

第３３話：“木の実の森”にて――その４

告白など無かったかのようにサラリと振る舞うポプリを見ていると、次第に頭が冷えてきたセナ。木の実である程度腹を満たすと、これからの旅に必要な木の実を集めることにした。オレンがたくさん。モモンやクラボ等の状態異常回復も十分に。

「えへへ、いっぱい集めたねっ！　重くない？」

ポプリがセナの膨れたバッグを見て話しかける。

「これでしばらく安心だな。重くないから大丈夫さ」

セナとポプリは満足そうな笑顔を見せ合った。――表面上では。

冷静になったセナは、強い罪悪感とわずかな後悔に襲われていた。オイラはまだ“好き”という感情が分からない。――はて、本当にそうだろうか？

ポプリの笑顔につられて笑顔になって、心が弾んで。でも、ちょっと苦しい。……言葉にするとたちまち輝きが失せてしまう、不思議な感情を抱いた。

（どうしてさっき、あんな答えが出てきたんだろう。オイラは、ポプリのこと……）

冷静さが疑いの心に変わると、再びセナの気持ちがざわついた。

森の木々の間隔が広くなり、夕焼けの色が草を照らす。セナとポプリが森を抜けて草原に出ると、例の3人組が地面に座っていた。

「あっ、みんな！」

嬉しそうなポプリの声に振り向いた顔ぶれ。ウォータは満面の笑みを浮かべ、スザクは無表情。ホノオに至ってはやつれた表情をしていた。

「あ……セナ、ポプリ……」

かすれた生気のない声でホノオが言うと、セナとポプリはギョッとして顔を見合わせた。

「ど、どしたの、ホノオ？」

「ちょっと色々あってな……」

苦笑いが痛々しいホノオを見て、ポプリが“察して”頭を下げた。

「ごめんね、ホノオくん。大変だったよね……」

「ああ……」

ポプリとホノオ、そしてスザクがチラリとウォータを見、セナはその視線を追った。

「なっ……なんだよ？　オラが何かしただか！？」

一切感づかないウォータに、4人のため息が重なった。

結局この日、セナ達は少しだけ来た道を戻り、木の実の森の中で夜を明かすことにした。見晴らしの良い草原で夜を明かすのは危険だからだ。食事と雑談を終え、セナとホノオを除く3人は目を閉じた。

「おい、ホノオ。その……何があったんだ？」

オレンの実を食べて少し声の調子が戻ったホノオに視線を向け、セナが言う。

「いや、ウォータに勧められて食べた木の実が……」

「マズかったの？」

「マズいというか、すごく辛かった」

「辛いの苦手？」

「大っ嫌い」

「へー、意外」

わずかな沈黙の後、

「災難だったな、ホノオ君。オイラはポプリに美味しい木の実を教えてもらったんだ。護身アイテムのリンドのネックレスももらった

し、よかったよかった」

「いいなぁー」

ネックレスをさわりながら、セナは得意げに言う。彼のしたことと言えば美味しそうに木の実を食べたことだけで、威張れる立場ではないのだが。でも何故だろう。不思議と嬉しかった。

「それに、ウォータの余計な一言のせいで救助隊に襲われるしさ」

「き、救助隊に!?　大丈夫だったのか!?」

セナは思わず大きな声を上げた。

「大丈夫だからここにいるんだろう。オレのパンチとキックで一撃だったさ」

と、今度はホノオが得意げになる。しかし、すぐに声のトーンを落とした。

「……あのさ、セナ。オレ、やっぱりちょっと怖い」

「何が?」

「炎タイプの技を使うこと。なんつーかさ、“火炎放射”使おうとしたら、“アレ”を思い出しちゃって……ね」

だいぶ明るく振る舞えているとはいえ、心を引き裂いた辛い記憶を忘れることができないようだ。

「この世界の災害がオレのせいだとすると、オレはこれ以上お前に迷惑かけないためにも、立派な戦力にならなきゃならない。だから、ためらっちゃいけないって……よーく分かってはいるんだけどね」

自嘲気味に笑うホノオを見ると、セナは悲しくなる。ホノオに消えない傷ができたことを、鮮明に思い知らされたから。

「ホノオ。信じてほしい。オイラは……えと、オイラ達は、何があっても友達だって、お前が言ってくれた。オイラは、そのつもりだから。お前は自信持って生きててくれればいい」

「……それもヴァイスに言われたことか？」

「う、うん」

ふふっ、とホノオは笑うと、表情の曇りが消えた。

「本当、変わったな、お前は。強くなったよ」

「そ、そうかな？」

「ああ。いいことだ」

大きく伸びをすると、ホノオは言った。

――オレも負けてらんない。前に進んで、強くならなきゃ。

この会話の後に、ホノオは眠りにつく。今日の見張りは、セナが前半、ホノオは後半だ。

セナはチラリとポプリを見る。今日も、まだ起きているのだろうか。オイラと話をするために。――期待して、そわそわして、でも、ちょっと申し訳なかった。

昨日みたいに、脅かそうとしているのかもしれない。と疑ったセナは、小声で呼びかけてみる。

「ポプリ。おい、ポプリ」

返ってくるのは寝息。演技かと疑ったが、しばらく経ってもポプリは起きる気配を見せない。

（ポプリ……元気に振る舞ってるけど、やっぱり気にしてるよな……）

実質、自分はポプリをふってしまったのだから。そう考えるほどに胸が痛んだ。

しばらく悶々と1人反省会を続けていたセナだが、そろそろホノオを起こすことにした。軽く肩を揺すって呼びかけると、ホノオはすぐに上体を起こした。

「よし、交代だなっ」

ホノオが言うと、セナは仰向けに寝転がる。そしてぼうっと考え事をしていると、目を閉じる前にため息が出てきた。

「……どした、セナ？　悩み事？」

ホノオに話しかけられ、慌ててセナは半開きの口を閉じた。

「い、いや別に――」

「あっ、わかったぁ」

セナの言葉を遮り、ホノオはニヤリと笑みを浮かべて言う。

「恋の悩み？」

「なッ……！？」

心臓とともに体が跳ね上がったセナは、仰向けの姿勢から一瞬で立ち上がった。

「なななんで、そんな……っ！」

ホノオは動揺するセナをおかしそうに指差した。

「ははっ、大当たり。だいたい分かるんだよな。だってお前さ、ポプリの話をやたらと楽しそうにするんだもん。恋する少年少女によくある行動よ」

「……」

無意識的にだが、確かに、そうだ。ホノオにポプリと木の実の話をし、得意げにしていた自分を思い出すと、無性に恥ずかしくなった。

セナの顔が真っ赤になる。

「で？　ポプリのどこが好きなん？」

からかう様子はあまりなく、ホノオの声は少し真剣な様子だった。だからだろう。セナがポツリポツリと素直に話し始めた。

「えと……っ、他人の気持ちを考えられる優しい奴、だからかな。それに、なんか一緒にいて楽しいというか……」

答えてから、気がついた。やっぱりオイラは、ポプリのことが好きだったんだ。

「ふむふむ。確かにいい奴だよな、ポプリは。素直で可愛いし」

とホノオは相づちをうつ。

「うん。しかも……オイラのこと、好きって言ってくれたんだ」

「ふむふむ。それはすご――ええっ！？」

突然のセナの言葉に、ホノオは心底驚いたようだ。無理はない。

「ちょっ、マジっ！？　オッケーしたの？　ねえ、ねえっ！」

「……いや。その……」

「だよな。うまくいってたら、悩まないもんな」

「……うん」

一呼吸置き、ポプリをちらりと見、セナは反省しつつ話し始めた。

「いつからポプリに好意を抱いていたかはわからないんだ。いつの間にか、気が付かないうちにそうなっていたというか……。だから、あんな逃げ方をしちまったわけだ」

「に、逃げ……？」

「うん……。ポプリに――ええと、ポプリが、その……“好き”って、言ってくれたとき、オイラ、すごく混乱しちゃってさ。“好き”って感情を理屈で考えたのが敗因だったのかもな」

「理屈じゃないのよ、恋は」

「ああ、その通りさ。混乱したオイラはどういうわけか、恋はドキドキしたり、顔が赤くなったりするものだって定義を作っちゃってさ。でも、緊張してもドキドキするし、照れると男の前でも顔が赤くなるし……。だから、あの時すごくドキドキしてたし顔も赤かったんだけど、それってポプリが好きだからなのか、それとも単に褒められて嬉しかったからなのか、わからなくなって」

うつむいてつっかえながら、セナは拙(つたな)い言葉で気持ちを表現した。

そして、全て話し終えると、エネルギーを使いすぎたのかぐったりとして呟く。

「ああ……。情けないよな、オイラって。せっかくポプリが勇気出して気持ちを伝えてくれたのに、なんで逃げたかなあ」

「なるほどねえ」

「最近ようやく自分の気持ちを素直に言えるようになったと思ったのにさ。お前の前じゃ、気持ち悪いくらいにベラベラと喋れるのにさ……。やっぱり変われないのかなぁ……」

どんどん弱気になり、喋り方ももごもごと自信なさそうだ。そんなセナに、ホノオは苦笑い。

「ばあか。そう簡単に人間変われないよ。焦らない、焦らない。ゆっくり変われればいいさ」

うつむいていたセナの顔が上がったのを確認すると、ホノオはニッと笑う。

「あっ、でも、ポプリにはいつか絶対気持ちを伝えろよな。そこは妥協(だきょう)しちゃダメだからな？」

その言葉に、セナは無言で頷く。そして眠そうに目をこすると、仰向けに寝転がった。

（なんだよ。お前だって成長してるじゃんか……）

心の中で小さくつぶやいた直後、セナは寝息を立て始めた。

第３３話：“木の実の森”にて――その４（後書き）

ほとんど会話だけの話になってしまいました；
でも、会話ってキャラの気持ちを表現するには欠かせないんですよね。物理的状況はほとんど変わりないですが、心理的状況は大きく進展してたりするんです。――と、言い訳させてください↑

第３４話：赤の光、青の光――その１（前書き）

なんと、セナはポプリのことが好きらしい！　しかも、ポプリはセナに告白したらしい！

しかーし、セナはポプリをふっちまったそうだ。呆れたけど……まぁ、セナらしいわな。

それにしても、人の恋路を見るのは楽しいねぇ。……え、オレの好きな奴？　うーん、アルルやポプリは女らしいけど――って、何言わすんだ！　アルルはヴァイスの嫁っ、ポプリはセナの嫁っ！

（語り：ホノオ）

第３４話：赤の光、青の光――その１

ポプリの告白のせいでセナの心臓が忙しかった１日。この日ヴァイス達は、衝撃的な噂に凍り付いたのであった。

ジャングルのような地域を抜けてしばらく歩き、それからまた普通の森を歩き、そして……荒れ果てた村を見て――。

現在は、普通の森の木々の下。ヴァイス達は、ここで夜を過ごすことにした。１人、２人と眠りにつく中で、ヴァイスは、日中にも散々仲間と話し合ったことについて考えていた。

（あの、破壊された村――グリーンビレッジ。破壊と誘拐の犯人が、セナとホノオだって？）

この情報は、旅の途中に行き交う救助隊から聞いた話だ。ヴァイス達は救助隊に詳しい話を聞き込める立場ではないため（セナ達の味方だ、とバレると厄介だからだ）、あくまでも小耳に挟んだ程度なのだが。

しかしこれだけは確実だ。救助隊員のポケモン達は、セナとホノオにますます悪いイメージを抱いている。

（だから、根拠のない悪い噂が広まるのかな？　セナ達がそんな酷いことするはずはないからね……）

一刻も早くセナとホノオを見つけ、自分達８人も戦力になりたい。強くそう思うと、次第にヴァイスは眠気に襲われていった。

――次の朝だった。セナ達が、忘れはしない敵に襲われたのは。

木の実の森を後にし、隠れる場所のない草原を大急ぎで抜けたセナ達は、昼下がりの現在、密林を歩いている。

「だいぶ気温が上がったよな」

セナが言うと、無視を貫くスザク以外の皆の頭が縦に動く。

「火山に近づいているからな」

とホノオ。

セナ達の目的地である“灼熱の火山”の周りは気温が高い。それ故火山をぐるりと囲むように木が生い茂り、現在歩いているような密林が出来上がるのである。

しかし、火山のふもと辺りは、もはや植物にとっての適温を通り越している。暑すぎるその地帯を、マグマが固まってできた、乾いた岩が支配している。

「オラ、暑いの苦手だよ～」

「あたしも～」

「うーん、オイラも……」

ウォータ、ポプリ、セナが口々に言う。激しい気温の変化が苦手な草タイプはもちろん、水タイプも、日が照っている所ではうまく実力が出せないのだ。

「今からそんな調子で大丈夫なのか？」

暑さにはめっぽう強いホノオが苦笑い。スザクは無言だが、涼し

い表情をしていた。

「ま、この密林なら救助隊に見つかりにくいだろうし、大丈夫だと思う」

セナのこの言葉が、後に空しい響きに変わる――。

「ウォータがまたバカなことをやらなきゃいいんだけどな」

「オラはバカじゃないだよー！」

木の実の森での事をまだ引きずるホノオに、ウォータは必死に否定。

「ホノオにバカって言われるウォータがかわいそうだぁよ」

と、ウォータの口調をまねていうセナ。ポプリからもらったリンドのネックレスをいじるのが癖になっているようだ。

「それはつまり、オレがバカだと？」

「もちろんですが何か？」

セナの返答に、ホノオは頬を膨らませた。

「なっ、お前……！　“バカって言った方がバカ”ってコトワザ知らねーのか！？　このバーカ！」

「そんなことわざありまっせぇ～ん♪　“バカって言った方がバカ”だなんてバカなこと言う奴がバカなんだ、バーカ！」

ここでスザクが疎ましげにため息をついて、珍しく言葉を発した。

「うるさいわね。バカバカしいこと言ってるんじゃないわよ」

スザクの言葉――会話の流れの通り“バカ”を多用――を聞くと、ポプリは密かに笑みを浮かべた。

そんな平和なひと時に、終わりが訪れる。――茂みが激しく揺れる音と共に。

「な、なんだ!?」

どんどん大きくなってゆく音を警戒し、セナ達が辺りを見回す。その直後だった。

“竜の波動”！」

声と共に飛んできたのは、速く強力な衝撃波だった。竜の波動の行き先は、たまたま使用者に1番近いところにいたポプリ。

「きゃっ！」

ポプリを捕えた瞬間、竜の波動は爆発したように弾け、ポプリを吹き飛ばす。そして、ポプリの背後にいたセナは、飛ばされたポプリと衝突した。

「なっ……！」

そばで見ていたホノオ達はしばし唖然とする。

「おい、ポプリ！　大丈夫か！？」

とっさにポプリに問いかけるセナに、

「うん……大丈夫。“光合成”で治せるから。……それより、ごめんねセナくん」

ポプリは少々無理をして返事をし、逆に自分がのしかかってしまったセナを気遣う。

――ここで2人は、互いの体がぺたりとくっついていることに気が付いた。照れながら、慌ててポプリは立ち上がる。セナは顔を赤らめて地面をじっと見ながら、ぴょんと跳ね上がるように立ち上がった。

ここで我に返り、セナは声を荒げて叫んだ。

「誰だ！！」

「救助隊。他に誰がいるのかな？」

間髪入れずに答えが返ってきた。比較的高い、女性の声だった。

直後、声がした方向の草むらからポケモンが現れた。体は水色で、首が細長い。そして、純白の綿のような翼を持つポケモン――チルタリスだ。

「ふっ、随分と下等な救助隊ですこと。オイラとホノオを狙おうとして、ポプリに当たっちまったんだろ？」

と、余裕を演じてセナが問う。この言葉を受けて、低い声が答えた。

「下等、か。それはどうかな？」

声と共に、茂みが２カ所揺れ――身のすくむような威圧感を放ちながら、２人のポケモンが現れた。

１人は、どっしりとした水色の四つん這いの体に多数のイボ。そして背中にたくましい葉と巨大な赤い花を背負っているポケモン――フシギバナ。

もうひとりは、クリーム色の狐のような容姿に、きりりとした瞳。そして９つの大きな尻尾が特徴のポケモン――キュウコンだ。

「うげっ……」

追っ手の救助隊の顔ぶれを確認すると、セナとホノオは嫌そうに顔をしかめた。救助隊に詳しくないポプリ達は首を傾げるも、すぐに、この追っ手が危険なのだと感づいたようだ。

「我々は、救助隊“ＫＦＣ”。このガイアの、数少ないマスターランクの救助隊のうちの１チームである」

名乗るのは、リーダーのキュウコン。――キュウコン、フシギバナ、チルタリス。イニシャルを取ってＫＦＣだ。

（そりゃ当然知ってるさ。でも……この密林の中、どうやってオイラ達を？）

最上級のマスターランクの救助隊を、“下等”とはとても言えな

い。しかし、救助隊ランクと捜索能力はまた別の話であり――セナに疑問が残った。

「ふむ。お主、疑問を感じておるのだな」

目を細め、ニヤリと笑みを作りながらキュウコンが言う。その怪しい様子を見て、セナ達の警戒心が強くなった。

「ならば、教えてやろう。――お主らの動きを封じてからな！」

キュウコンはこう言うと、瞳を怪しく光らせる。そして、無数の人魂のような炎を宙に出現させると、ゆらゆらと揺れるそれらをセナ達に近づけた。

「わぁっ、あちちち……っ！」

セナの右腕に炎が接触したとたん、彼の悲鳴が上がる。ジュッと、焼けるような音がした。

直にポプリとウォータの悲鳴も重なり、３人は必死に炎を振り払う。

「へん、オレには効かないねっ！」

と、ホノオが言うと、セナ、ポプリ、ウォータにまとわりつく炎を引き剥がし、殴る、蹴るで振り払う。少し遅れて、スザクも協力を始めた。

何とかセナ達は炎から解放された。が、火傷状態からは逃れられなかったようだ。ヒリヒリと襲う痛みに顔をしかめ、３人はぐったりと座り込む。

「おっ、おい！　大丈夫か！？」

無傷のホノオが3人を気遣うと、

「大丈夫」

とセナが答える。しかし、全然〝大丈夫〟には見えないセナ達を見てホノオが不安げな顔をすると、

「……作戦は練ってある。みんな、従って」

本当に小さな声で、一瞬だけ真剣な表情で、セナはこう言う。セナの正面にホノオがいるお陰で、敵にはこの言葉や表情はバレなかったようだ。

直後、セナは再び火傷に苦しみ出す。つられてポプリとウォータもうずくまった。

「おっ、おい！　みんな！」

セナの言葉でいくらか安心したホノオだが、それを悟られないように、緊迫感あふれる声色で呼びかけた。

「仲間を捨てて逃げればいいのに……。君、噂よりはずっと親切なんだね。それとも……それは仮面？」

威圧的な微笑を浮かべ、チルタリスはホノオに近寄る。だんだんと薄れる笑みに恐怖を感じながらも、ホノオはチルタリスを睨みつけた。

チルタリスが、ホノオまで後一歩のところまで近寄ったときだった。

「ねぇ、どうなの？　“破壊の焔”の使い手さん？」

「……！！」

この発言に、セナ達５人は皆凍りついた。

“ガイアを滅ぼす人間”、“破壊の魔王”。そんな不名誉な肩書きなら、今まで何度も押しつけられてきた。しかし――そんな肩書きを補強するような“あの技”を、どうして知っているのだろうか？

「岩場であの技を使う君を、目撃していた者がいたんだよ。空にね」

フシギバナが、一歩ホノオに歩み寄って言う。

「もちろん、あんな技を使う君を倒しに行こうなんて、馬鹿なことを考える奴はそういない。賢いそのポケモンが、救助隊に情報を広めてくれた」

ここでフシギバナはチラリとキュウコンを見る。するとキュウコンが軽く咳払いをし、話を引き継いだ。

セナ、ポプリ、ウォータは、相変わらず具合が悪そうにしている。スザクはそんな３人（正確にはポプリとウォータを重点的に）を心配そうに見つめている。――ホノオには、セナ達を気遣う余裕すらないようだ。体をこわばらせ、口を開こうとするキュウコンをじっと見ている。

「お主らを探していた我々がこの密林を通りかかったのは偶然だった。しかし、我には“気”――すなわち気配を感じる能力があるのだ。それで、密林に入るなり感じたのだ。邪悪な気配を」

「邪悪な……気配。それって……」

緊張といやな予感が最高潮に高まってしまう中、ホノオはカラカラな喉からかすれた声を出した。

「そう。もちろん邪悪な気配の元は君。“破壊の焔”で世界を壊す、君だよ。ホノオ君」

チルタリスのその言葉で、ホノオの頭は真っ白になった。――自分の気配のせいで、居場所がバレたのか。自分の邪悪な気配とやらは、そんなに強いものなのか。

ホノオは頭を抱え、立ち尽くす。その時だった。

「ふあぁ……」

と、セナは敵の目を見て、大きくあくびをした。話の緊張感を壊すようなその動作は、敵の注意を引きつけた。

「ハイハイ、話が長い長い。もう飽きちゃった。まっ要するに、オイラ達を狙いに来たってことでしょ。どーせ」

ケロッと笑いながら言うセナを、ホノオは――いや、ポプリ達も、驚いた表情で見た。

「ふん。話が長いのは喜ぶべきことだろう」

と、フシギバナ。さらに言葉を続けた。

「それだけお前達の寿命も延びたって……こと……ふあぁ」

突然フシギバナは大きな口を開けて、豪快にあくびをした。口を閉じると、重いまぶたと戦い始めた。

「えっ……？」

ホノオはセナの“作戦”を理解したようだが、ポプリ達はまだ。とうとうまぶたを閉じたフシギバナ、今にも目を閉じてしまいそうなキュウコン、さらには、目を閉じてカクカクと頷くように頭を上下させるチルタリス――そんな彼らを、戸惑いながら見ていた。

「よしっ、作戦成功！　ポプリ、“アロマセラピー”できるか？」

セナが“敵を油断させて眠らせる”作戦の成功を確信すると、テキパキと指示を出し始めた。

「う、うん！　いくよっ！」

ポプリが頭の葉をゆっくり、大きく振ると、辺りに爽やかな香りが広がる。その場が癒しの空気に満たされると、セナ、ポプリ、ウォータの火傷状態がスッと消えていった。

「わぁ……！　ポプリ、助かるだ！」

ウォータの言葉、セナの微笑み。ポプリはそれらに照れ笑いで返事をする。

「状態異常も治したし……。よしみんな。今のうちに逃げるぞ！」

と、セナが叫ぶと、5人は目を閉じている追っ手に背中を向け、草木をかき分けて逃げ出した。

――これで無事と判断したのは、甘い考えだった。光り輝くフシギバナの体に気がつくべきだったのだ。

「“ソーラービーム”！」

声に気づいた時には遅かった。無防備な背後を強力な光線で打たれ、小さなセナ達は弾き飛ばされた。

草タイプの技が苦手なセナとウォータは、うつぶせに倒れたまま動かない。逆にダメージの少ないホノオとポプリは、すぐにセナ達に駆け寄った。

「セナ！　ウォータ！」

「だっ、大丈夫！？」

必死の呼びかけに反応し、セナはわずかに指を動かす。――しかし、戦い慣れしていないウォータには、このダメージは大きかったようだ。体から力が抜けている。

「どうして……？　眠ったんじゃなかったの！？」

ポプリが振り返ると、そこにはニヤリと笑みを浮かべるＫＦＣの３人がいる。眠気など一切なさそうな、堂々とした立ち姿だ。

「愚かな。お主らは、我々の“演技”に騙されたのだ」

キュウコンの後に、チルタリスが続く。

「セナ君が“あくび”を使うことはもう有名よ？　だから私達、あらかじめ“カゴの実”を食べておいたの。お陰で眠気がこないのよね」

「じゃあ、さっき眠そうにしてたのは、嘘だったのか……！」

そのホノオの言葉に、またチルタリスが答える。

「ええ、その通りよ。さて……みんなに、もう1つ良いことを教えてあげるね」

チルタリスの意味ありげな発言に、元気のあるホノオ、ポプリ、スザクが身構えた。そして、フシギバナが、低く、よく響く声で告げた。

「今回の俺達の対象は、セナ、ホノオ……。お前達だけではない。お前達に関わった奴は全員だ。よって、ここにいる5人を処分する」

ここは風通しの悪い密林だが、セナとホノオの心には強い北風が吹く。

そして、先ほどからセナとホノオを避けがちだったスザクは、とうとう右足に力を入れた。

第３４話：赤の光、青の光――その１（後書き）

超シリアスな場面なのに、何故かネタを入れたくなってしまいましたｗ

ＫＦＣとか、もう“アレ”ですよねｗ　しかもこのまま行くと、チルタリスがチキンに該当しますねっ↑

そしてカゴの実の効果は、ポケダン仕様にしてみました。食べるとしばらくの間、眠らなくなるのです。

……ダークライ戦で多用したなぁｗ

第３４話：赤の光、青の光――その２（前書き）

密林を歩くオイラ達を襲うは救助隊ＫＦＣ。
オイラ達は“あくび”を使って逃げようとしたんだけど、奴らの眠ったふりに騙されちまった。……さすが、マスターランクの救助隊だな。悔しいけど。

しかも問題なのは、ＫＦＣの狙いはオイラとホノオだけじゃなく、オイラ達の同行者――ポプリとウォータとスザクも攻撃対象だということ。
ポプリ達までに危害が及ぶような事態は、絶対に避けるつもりだ。
（語り：セナ）

第３４話：赤の光、青の光――その２

「なっ……何、言ってんだ……」

必死に声を振り絞りながら、セナはうつ伏せに倒れている体を起こした。ややふらつきながらも、立ち上がる余裕はあるようだ。

「あら。君達のせいだよ。君達がもっと早く死んでくれていれば、こんな手段を使わなくてもよかったんだけどねぇ」

チルタリスは冷え切った微笑と共に言葉を放つ。彼女の発言は、セナやホノオを凍り付かせると同時に、スザクの決心を助けた。

突如、スザクは地面を蹴り、ホノオに向かって突進する。誰もがその行動に気がついてはいたが、唖然としてスザクを止められなかった。直後、スザクは飛び跳ね、ホノオに鋭利な足の爪を向けて飛びかかった。

「“切り裂く”！」

「う……っ！？」

スザクの様子をよく見ていたホノオだが、体が驚きについて行かず。とりあえず体をひねって回避しようとしたのだが間に合わず、スザクの爪はホノオの頬に浅い傷を付けた。

「ちょ……ちょっと、スザク……？」

震える声で名を呼ぶポプリの顔を、スザクはキッと睨みつけて言

い放つ。

「ウチはこいつらのせいで死ぬのは嫌。こいつらのせいでウチらまで狙われるんだったら、ウチもセナとホノオを倒すのに協力する」

「……」

突き刺さるような、重い言葉。しかし、確かにスザク達には、セナとホノオの味方をする義務などないのであって……。セナとホノオは、何も言えない。

「ふむ。いい判断だね、お嬢さん」

と、フシギバナ。そして彼がキュウコンとチルタリスを見ると、KFCの3人は怪しい笑みを浮かべた。

スザクはセナとホノオから逃げるように、KFCに歩み寄る。ポプリが悲しげにうつむいた、その時だった。

「ならば、我々に“協力”してもらおう！」

キュウコンが言った直後、フシギバナはツルのムチを伸ばす。そして、驚くスザクをきつく捕えた。

「きゃ……！」

「スザク！！」

悲鳴を上げるスザクの声に、心配するセナ達の声が重なる。

「彼女は人質。君達が私たちに攻撃しようものなら、彼女の命は無

いと思いなさい」

チルタリスの宣言に、スザクは凍りついた。フシギバナに火の粉を放とうとするが、締め付けられてうまく息が吸えない。

「くっ……。それがマスターランクの救助隊がやることか！？」

ホノオが声を荒げて叫ぶ。その音は、ソーラービームを受けてからずっと倒れていたウォータの意識を呼び戻した。

ホノオに返ってきたのは、ＫＦＣ３人の嘲笑（ちょうしょう）だった。

「お主達が何を言ってもきれいごとにしか聞こえぬのう」

と、キュウコン。それにフシギバナが続いた。

「我々のような救助隊が、処分の対象外のポケモンに手を出してはいけない――そう言いたいんだろう？」

「当たり前だ、バカ！」

ヒートアップするホノオを、セナ、ポプリ、ウォータはヒヤヒヤしながら眺めていた。

ホノオに答えるのはチルタリス。

「バカは君だよ。さっきも言ったでしょう？　今回はね、君達２人だけが対象じゃないの。――例えこのアチャモちゃんに、私たちに協力する意思があってもね、見逃すわけにはいかないんだ」

その言葉が、スザクの不安を煽（あお）る。――自分はセナとホノオを切り捨てた。今度は自分が切り捨てられても、文句は言えない――と。

「君達がもっと早く消えていてくれれば、アチャモちゃんたちも無事だったのにね。悪いのは、君達なんだよ」

「そんな……！」

ポプリはチルタリスに反論を始めた。

「あたしはそれでも、セナくんとホノオくんに会えたことを後悔しない！　２人はそれだけいい子なんだよ……！　悪い子じゃない！」

「そ、そうだよ……！」

普段朗らかなポプリの激怒を見ると、セナの胸がカッと熱くなった。傷ついたウォータも必死に参加し始め、セナもホノオもこんな状況にも関わらず、大きな目を少しの涙でうるおした。

「そうか……。では、これを受けてもそんなことが言えるかな！？」

フシギバナが言った途端に、セナ達の周りの地面から木が突き出した。太く、重量感があり、無数の棘（とげ）がはえているそれらは、セナ達の反対側に大きく反り返る。

「うわ……！」

今にも勢いをつけて倒れてきそうな木々を見、セナ、ホノオ、ポプリ、ウォータは恐怖で目をつむる。無意識のうちに、４人はピタリと身を寄せ合った。

「“ハードプラント”！」

木々は鞭のようにしなり、轟音と共に空気を切り裂きながら、小さな４人を容赦なく叩き潰そうとする。もうだめだと、諦めかけた時だった。

まばゆい緑色の輝きが、辺りに満ちる。

「えっ……？」

セナが恐々（こわごわ）と目を開けると、光の発生源が明らかになる。――ポプリがセナにくれた、リンドのネックレスだ。

リンドは、セナのように草タイプの技が苦手なポケモンが身に着けることで力を発揮する木の実。一度だけ、草タイプの技から身を守ってくれるのだ。

４人の命を奪いかけた棘だらけの木々は消滅し、同時にリンドの実も、光となり消えてゆく。少々切なくなるセナだが、命を助けた木の実に心から感謝した。ポプリに笑顔を見せてみると、倍返しの笑顔が返ってきた。

「くっ。まさかあの技が防がれるとは……」

ハードプラントは、草タイプの最強技で、覚えられるポケモンも限られている。それを、この一流救助隊員が放ったのに――。悔しげに、そして疲労で息を切らしながら、フシギバナが言った。

「でも、君たちのピンチには変わりないよ。さあ、覚悟してね！」

チルタリスは言うと、間髪入れずに攻撃を仕掛けてきた。綿のような翼を鋭く硬化し、水平に振って切りつける――“水平切り”だ。

「“守る”！」

セナはとっさにシールドを作り、攻撃を防いだ。４人が密着していたのも幸いし、全員の身を守ることができた。

「ふっ、甘いのう、チルタリス。“鬼火”」

今度はキュウコンが、再び揺らめく炎をセナ達に近づけた。セナとポプリは必死に逃げまどうが、ウォータは走り回るほどの体力を残していない。それに気が付いたホノオは、ウォータに迫る火の玉を懸命に振り払った。

ここでキュウコンは、バラバラになったセナとポプリに目を付けた。その視線に、セナは気が付く。

「ふふ。“大文字（だいもんじ）”！」

不敵にほほ笑んだ後、キュウコンはポプリに向かって燃え盛る巨大な大の字を発射した。

「危ない！」

鬼火に気を取られているポプリをかばうために、セナは強く地面を蹴った。途中で鬼火に当たり身を焦がしたが気にする余裕はなかった。

――直後、セナは大文字に叩き付けられ、熱で顔をしかめた。衝突音にハッとして、ポプリは振り返る。

「セナくん！！」

炎が消えた後、地面に崩れるセナに、ポプリは悲痛な声で呼びか

けた。

「大丈、夫だよ……ポプリ。大丈夫……」

ポプリを心配させないように、セナは笑顔を作ってよろよろと立ち上がる。炎タイプは得意な彼だが、火傷を負ったこともあり、痛々しい様子だった。

「なるほどねえ。分かったよ。じゃあ、“龍の息吹”！」

ニヤリと笑うと、チルタリスも“ポプリを”狙って光線を放った。

「あっ！」

恐怖で思わず顔をそむけてしまうポプリだが、やはり彼女は傷つかない。セナはとっさにポプリの前に立ち、小さな体をいっぱいに広げて攻撃を受けた。

「セナ！！」

ポプリよりも早く様子に気が付いたホノオは悲鳴のような声でセナに呼びかけた。キュウコンによる鬼火攻めもとっくに止んでいたので、思わずセナに駆け寄ろうとするが――

「“悪の波動”！」

今度はウォータが狙われた。キュウコンの放つ漆黒の衝撃波を確認すると、ホノオは舌打ちをしつつウォータの前に立ち、黒に叩き付けられた。

「ホノオ……」

ウォータの呼びかけに答える余裕もなく、ホノオは激しくせき込んだ。

「あはは、おかしい！　狙ってもいないのに、自分から攻撃を受けてくれるなんて！」

ポプリとウォータををかばって傷つくセナとホノオを、チルタリスは笑い飛ばす。ホノオの怒りが、一歩前進。

（そうよ……バカじゃないの？　せめて攻撃を相殺すればいいじゃないの……）

やられっぱなしで攻撃をしないセナとホノオに対し、スザクの疑問が募った。どうしてウチのような人質まで守ろうとするのよ――と。

ここで、フシギバナの葉っぱカッターがホノオを捕えた。やはり反撃一つせず、攻撃に耐えるのみ。

「反撃もしないとは……。そんなにこのアチャモが大事かい？」

ハードプラントの疲れが回復したフシギバナは、セナとホノオに見せつけるように、ツルでつかんだスザクを高々と持ち上げた。

「だって……オイラ達、の、せいで……」

酷いダメージを負っているセナが声を振り絞るが、

「セナ。ちょっと黙ってろ」

ホノオがセナの言葉を遮った。――初めのソーラービームの効果が薄かった分、セナよりは体力に余裕がありそうだ。

「オレ達のせいじゃない。お前達が、無害なポプリ達まで襲うのが悪いんだろ！？」

こぶしをきつく握り、ホノオは再び怒声を放つ。白々しく返答するのはチルタリスだ。

「だって、仕方ないじゃない。命令なんだから」

「命令？　スイクンのか！？」

ホノオは勢いよく“命令”という言葉に食いついた。もうろうとする意識の中、セナの嫌な予感が膨らんでゆく。

「ふっ、スイクンか。あんな間抜けな奴の言うことなど、聞く価値もない。我々が慕っているのは、もっと偉大で賢いお方じゃ」

（えっ？）

スイクン以外の者の命令――。セナは気になって仕方がなかったのだが、ホノオの注意は全く別のところに向けられた。

「……お前たちもか」

ホノオの声が怒りで震え始める。いよいよセナ達の緊張がピークに達した。

「お前たちも、偉い奴の言うこと聞いて、調子に乗りやがって……。救助隊のクズ共もみんなそうだ」

荒れた言葉づかいを合図に、ついにホノオは血を連想させる赤色のオーラをまとい始めた。鋭い目つきがＫＦＣを貫く。

「オレはそういう、偉い奴の言うことをホイホイ聞く連中が大っ嫌いなんだよ！！」

ホノオが強烈な熱をまとい始め、彼の足もとの草花が一瞬で焦げた。もはや引火もできないほど、完全に。

それを見ると、ＫＦＣの表情が一変した。フシギバナはとっさにスザクを放り投げると、急いでアイテムを探し始める。

「くっ、“破壊の焔”か」

“私たちの作戦”が裏目に出たようだね」

と言う彼らの言葉にセナの注意が傾いたが、刹那、ＫＦＣの３人は光と共に姿を消した。その場から逃げることができるアイテム“穴ぬけの玉”を使ったのだ。――迷いなき素早い撤退も、マスターランクの判断力なのだろう、とセナは考えた。

が、ここでセナ達はハッとする。こんな密林で破壊の焔を使われたら、何もかも燃え尽きてしまう。

「ホノオくん！」

「ホノオ！」

「やめなさいよ！」

ポプリ、ウォータ、そしてスザクまでもホノオに呼びかけるが、

「卑怯者……。逃げたな！？」

わめくホノオの怒りは止みそうにない。

（ホノオ……望まぬ暴走は止めてほしい！）

心の中でセナが強く願うと、変化が起きた。祈るようにきつく目を閉じていたセナだが、体に不思議な力が宿ったような感覚に驚いて目を開けると――この世では初めて、セナを落ち着いた青の光が包み込んでいたのだ。

ホノオは攻撃の対象が消えたことで行き場のない怒りを抱えている。今にも周囲を巻き込んで爆発でもしそうになった、その時。セナはホノオの前に立ち、そっとホノオと目を合わせた。そして、

「ホノオ。落ち着いて」

優しく一言ささやくと、セナの青い光がホノオを包み込む。

青の光は赤の光を静かに消し、ホノオの怒りも取り去った。

青の光が消える頃、ヒコザルは再び、明るい瞳に世界を映し出した。

第３４話：赤の光、青の光――その２（後書き）

前回、今回の“赤の光、青の光”ですが、以前は“殺戮の眼差し”というタイトルでした。

――なんというか、私が使用する“その１その２形式”の最大の問題は、タイトルによるネタバレなんですよね；　だって、前回から“赤の（ｒｙ”ってタイトルにしてしまっていたら、「ああ、次回“破壊の焔”発動ね」って容易に察することができそうですもの。

ですから、これからも今回で言う“殺戮の（ｒｙ”みたいな仮タイトルを使用することがあると思いますが、ご了承ください。

ちなみに“青の光”ってのはセナの力です――地味な発動なので分かりにくくなっちゃいましたが；

ちなみに、リンドの実の効果は、自己流の解釈になってしまいました。――というか、某ギャグファンタジー漫画の“リコの花”というアイテムの効果を参考に↑

――だってリンドは、草技を受けたら“回復する”んじゃなくて、“ダメージ軽減”ですからね。たまには食べずに効果を発揮する木の実があっていいんじゃないか？　と思いまして。

なんかセナ以外のキャラも守られちゃいましたが、それは、あの状況で器用にセナだけを守るのも逆に不自然かな――とおもったりしましてｗ

では、あとがき長くなっちゃいましたが、また次回～！

第３５話：分からない（前書き）

偉い奴の言うことなら何でも聞いて、ためらうことなく殺す対象を増やすのか――。ＫＦＣに腹を立てたオレは、また“あの技”を使いそうになっちまったんだ。技の発動を悟るなり、ＫＦＣは逃げて行きやがった。

そんな時、セナの体が青色に輝き始めた。そして、不思議な力でオレの怒りを鎮めてくれたんだ。

助かるけど、なんだったんだろう？

（語り：ホノオ）

第35話：分からない

（破壊の焔が、おさまった……？）

行き場のない怒りが嘘のように消えた後、ホノオは首を傾げた。“あの技”の発動未遂を物語るのは、ホノオの体から傷が消えているという事実のみ。

「ありがとう、セナ」

使った力の正体は分からないが、確かに自分を救ってくれた。そんなセナ――ホノオとは対照的に、体はボロボロである――に、ホノオが礼を言った時だった。

「良かった……ホノ、オ……」

頼りなく言葉が消えゆき、セナはふらりとバランスを崩した。

「あっ、セナくん！」

ポプリがとっさにツルのムチを伸ばして、セナの体を支えた。そして静かにセナを地面に寝かせる。

「セナ！」

ホノオとウォータが急いでセナの様子を覗き込む。苦手なソーラービームを受けた体を、ポプリを守るための盾に使った。その上に火傷を負い――苦しげに呼吸を繰り返す、危うい状態だった。

「大変！　お薬作らなきゃ！」

と言うと、ポプリは慌てて青色のバッグをあさる。体力を回復するオレンの実や、火傷を治すチーゴの実などを取り出すと、密林に生えていた木から大きな葉っぱを一枚取る。そして、木の実から果汁を搾り取り、葉っぱを皿にしてためた。

「へぇ。木の実で薬が作れるんだ」

と、安心した口調でホノオが言う。

「あぁ。木の実を食べられないときのための塗り薬だ。ポプリは調合が上手だぁよ」

と、ウォータが解説を。

（セナくん、ごめんね。あたしのせいで……）

セナの怪我に責任を感じたポプリは、涙を必死にこらえつつ手早く作業を進めた。

その場の雰囲気を突然変えたのは、スザクのため息だ。

「はぁ。バカみたい」

意識を失ったセナを見下ろし、彼女は呆れた目線を向けた。

「は？」

ややぶっきらぼうに、ホノオはスザクに聞き返す。ウォータはス

ザクをギョッとした表情で見つめ、ポプリはセナに薬を塗りつつ会話に耳を傾けた。

「なんで敵に反撃しなかったのよ、アンタ達」

「そりゃ、お前が人質だったからさ」

と、ホノオが戦闘を振り返りつつ返答した。

「だから、そこが理解できないの。ウチはアンタ達を切り捨てた。だったら、アンタ達がウチを守る理由なんてないじゃない。頭オカシイんじゃないの？」

スザクはホノオに背を向け、そっけない口調で言い放った。

「そうだな。確かにお前を守る必要なんかなかった。……でも、見捨てられなかったんだよな。オレ達、救助隊やってるしね」

微笑みつつ、ホノオはスザクに声をかけた。

ウォータと、セナの治療を終えたポプリは、ホノオとスザクを交互に見つめている。

セナの体の傷や火傷は、塗られた薬によって順調に回復していた。

「変。アンタ達、すごく変だわ」

心なしか、スザクの声は震えていた。

「他人になんか、裏切られて当たり前。ウチはそう思ってるから」

スザクが私的な思想を明かす珍しい様子に、ホノオは一瞬ドキッ

とした。そして、何か言葉を紡ごうとしたその時。

「う……」

セナの声が、みんなの注意を引きつけた。一斉に視線が注がれるが――

「えっ、セナ？」

「セナくん……？」

いくつもの疑問の声が重なる。原因はセナの表情にあった。

「う、ん……ん、わっ……！」

薬のお陰で怪我が治ったはずなのに、傷だらけの数分前よりもはるかに苦しそうな顔をしている。目をきつく閉じ、小さいが悲痛な叫びをあげていた。

（よく分かんねえけど、マズいぞ！）

胸に釘を刺されたような鋭い危機感に突き動かされ、ホノオはとっさにセナの体を激しく揺すった。

「おい、起きろ！」

必死に呼びかけると、セナの大きな目が見開かれた。そして、

「わああっ！」

と叫ぶと、彼は上体を起こす。

「ど、どうしただ……？」

驚いて怯むホノオの変わりにウォータが問うが、セナは呼吸を荒げ、聞こえていないように額に手を当てた。

――この日5人は、密林にて夜を迎えた。

見張りの時間になると、ウォータ、ポプリ、そして今日はいつもよりも素直だったスザクがすやすやと寝息をたてた。

「なあ、ホノオ」

まだ眠れぬセナは、ためらいがちにホノオに問いかける。

「ん？」

「こんなことを聞いたら、絶対に変な奴だって思われるだろうし、もしかしたら、お前に嫌な思いをさせちまうかもしれないんだけど……」

「なぁんだよ。言ってみなっ！」

回りくどいセナの物言いに不安をあおられつつも、ホノオは軽く言葉を返した。

「あ、うん、その……えと。お、オイラって、人間の時に、誰かを……こ、殺し、ちまったり、してないかなぁ、って」

ホノオの顔がこわばり、思考は完全に停止した。彼が動き出したのは、数１０秒後。

「当たり前だ。そんなひっどい経験をするのは、オレだけで十分だよ」

「ご、ごめん。もっと気を使った発言をすれば良かったな」

「“ごめん”は禁止」

「あ、そっか」

ホノオは会話の流れを一度ピシャリと断ち切ると、再び話し始めた。

「なんでまた、そんなことを？」

「あのさ。さっき気を失ってるときに、変な夢を見たんだけど――」

と、セナは説明を始めた。

――落ち着いた空間の中にある“箱”が、残酷な風景を切り取った。がれきの山、燃え尽きた街並み。心をえぐられるような衝撃を受けた――

「――あの夢を見てたとき、オイラ、すごく怖かったんだ。それに、なんでだろう。よく分かんないけど、“オイラのせいだ”って感じちゃって、辛かったんだ」

「そっか。疲れてるんだよ、きっと」

ホノオは強めの口調で言う。自分にも言い聞かせるように。

「お前があの“能力”を使うと、きっと物凄く疲れるんだと思う。だって、オレの暴走を止めたくらいなんだぜ？　だから、感謝してるけど、あんまり使わない方がいいと思う、あの力は」

「でも……」

と、不安げなセナ。

「あの青い光が何なのか、オイラもまだ分からないんだ。初めて使ったのは、あの世――確か“命の神殿”とか言ったな。そこで、ホウオウと戦った時なんだ。その時は、デメリットなんかなかったのに。

だから、自分で上手く発動をコントロールできないんだ」

「そっか……」

少しだけ考え込み、ホノオが返答する。

「そうだな。今日は、オレの“技”がきっかけで、お前の青い光が発動した。オレが原因なんだ。だからさ、オレ、もっと頑張って、自分の感情を上手く操れるようにするよ。

それとさ、」

ホノオは遠慮がちにセナを見る。

「オレの存在がやっかいになったら、いつでも言って欲しいんだ。お前に迷惑と思われながら、一緒に旅はしたくないから」

不思議と、悲しさをあまり含まぬ声だった。セナはホノオの覚悟を感じ取る。

「ああ、分かった。今はもちろん不要じゃないから、よろしく頼む」

「よし、了解。ありがとな」

この会話を終えると、セナはいったん眠りにつく。今日の見張りは、ホノオが前半、セナが後半だ。

（“ポケモン”によると、セナは、記憶を夢に封印したせいで自分の能力を上手く使えないんだったな）

と、ホノオなりの考察を始めた。

（だから逆に、能力を使うことで記憶が少しずつ蘇る。――封印が、解ける）

ため息を1つつくと、ホノオは決意した。

（オレの“破壊の焔”の暴走で、苦しい思いをするのはセナなんだ。だから、何とかして暴走しないようにしないと……）

やがて交代の時間がやってきて、ホノオがセナを起こす。今回はすんなり起きたセナの様子に、ホノオは大げさに驚いてみて、セナ

をからかった。そしてセナも大げさに不満げな顔をしてみると、ホノオは逃げるように眠りについた。

（あの夢は、なんだったんだろう。きっと……オイラの記憶、なんだろうな）

と、セナはセナで考え事を始める。

（記憶を失ってからずっと自分の過去が気になっていたけど、いざ手が届きそうになると、知るのが怖いものだな）

ここで大きなため息とともに、つい考えが声になってしまう。

「何者なんだよ、瀬那（セナ）って……」

目を閉じてみると、浮かぶのは夢の中で見た荒れ果てた光景。刹那、強い動悸（どうき）がセナを襲う。息苦しくなった彼が、深く呼吸をし始めた時だった。

「大丈夫、セナくん？」

と、ポプリの声がセナを呼んだ。

「……ポプリ」

今日はやけに素直な登場だな、とセナは思う。少し呼吸を整えてから、ポプリの方を向く。

「また起きてたのか」

「うん。……ダメかな？」

ポプリのその問いかけが、わずかにセナの胸に刺さった。

「いや、お前が眠くないならいいけど……」

「ありがとう」

しばらく2人は沈黙する。それから、ポプリはセナの様子が落ち着いたのを察して話し出した。

「今日はごめんね、セナくん」

と、悲しげな瞳でポプリはセナを見つめた。

「セナくんがあたしを守ってくれて嬉しかったんだけど、でも、悲しい気持ちの方が強かったな」

「……そっか」

ポプリと目を合わせるのが辛くなり、セナは視線をそらした。

「でもさ、オイラ達のせいでお前達まで命を狙われたんだぞ？　守るのは当たり前だよ。

それに……えと。お前がくれたリンドの実のお陰で、今日は助かった。その……あ、ありがとな」

だいぶ慣れてきたと思っていたが、“ありがとう”を言うのはやはり恥ずかしかった。セナが照れながら言うと、ポプリは例によってクスクス笑う。

「ふふっ。やっぱり、セナくんもホノオくんも優しいんだね。だから、スザクもちょっと心を開いてくれたみたい。こちらこそ、ありがとうね！」

礼を言われたとき、セナの中の舞い上がるような嬉しさを、苦しさがかき消してしまった。わずかに狡猾（こうかつ）な自分に気がついてしまったからだ。

――本当にポプリを大切に思うのならば、こんな危険な旅に同行させてはならない。スザクもウォータも、不用意に命を狙われることになってしまう。

だが好きだからこそ、ポプリと――そしてスザクとウォータとも、もっと一緒にいたくて。その気持ちが、とてもわがままな気持ちが、正しい判断をもみ消している。

（オイラは優しくなんかない。オイラは――美波瀬那は、卑怯で嫌な人間なんだ）

強く自分を憎む感情を、セナは久しぶりに抱いた。心に無数の棘（とげ）が生え、他者を全て遠ざけたくなるような――破壊的な衝動がセナを支配した。

「セナくん……？」

不機嫌そうな表情のセナに、ポプリは恐る恐る話しかけた。そんな彼女に、棘が刺さる。

「あのさぁ、誤解しないでくれる？　オイラは優しい奴なんかじゃない。お前が思ってる以上に、ずるくて嫌な奴なんだよ。

だからさ、誤解された上に好きになられても、迷惑なんだよね」

セナが冷たく言い放つと、ポプリはうつむき、今にも泣きそうな表情を必死にこらえた。もちろんセナにとっても、それは辛い様子だったのだが。

（いいんだ、これで。オイラのような奴なんかには、プラスの感情を抱く資格はない。誰かを好きになるなんて……できないんだ）

棘はセナにも深々と刺さり、溢れる血のごとく、セナは自分を責め始めた。

「ごめんね、セナくん……。あたしが一方的にセナくんを好きなだけなのに、しつこく話しかけちゃって……ごめんね」

どうしてポプリが謝るんだ。どうしてポプリが傷つくんだ……。と、疑問が渦を巻く。すると、棘も心も、何もかもが溶け合って混ざったような——いろんな色の絵の具を全部混ぜたなら、きっとこんな色になるのだろう——モヤモヤとしたよく分からない感情に襲われた。

セナはポプリの言葉に答えず、彼女に背を向けた。

再び動悸がして、セナは胸を押さえて荒い呼吸を繰り返した。やがて動悸はおさまるが、セナがポプリを振り返ると、ポプリはすでに眠っていた——セナに、背を向けて。

——自分が分からない。

ポケモンになって記憶をなくしてからは、過去の自分が分からない。よって、人格に境遇に……自分の全てが分からない。

そして、ポケモンになってからしばらく経った今でも、不安定す

ぎる自分の感情が分からない。数分後の自分がどんな感情を抱いているのか、それすら分からない。

「何なんだよ、もう……」

さっきまでは抱く好意と間逆の行為を取ったセナだが、今度は心の底からこみ上げてくる嘆きに従って、思い切り泣き始めた。

ごちゃごちゃになった気持ちがスッキリすることを期待したのだが、泣いても泣いても気分は晴れなかった。

やがて、セナの暗い気分を置いてけぼりにして、空は明るくなり始めた。

第３５話：分からない（後書き）

デメリット無きチート能力など私が書くはずがありません↑

さて、前書きの形式を変えてみてからだいぶ経ちましたが、それなりに好評を頂けてるので嬉しいですｗ

以前の前書きあらすじがくどかったので、試行錯誤の末に見つけた、独創的な形式かな――と、珍しく自負しております。――本当はもっと本文に自信を持ちたいのですがね（´・ω・`）

過去の前書きも少しずつ編集しているので、お時間のある方はご覧ください（笑）。

では、また次回！

第３６話：セナとポプリとホノオ（前書き）

“ポケモン”の言った通り。オイラの“能力”が発動すると、過去が少しだけ蘇(よみがえ)ってきた。

どんな過去かと聞かれても――思い出したくもないよ。

そのせいで“自分”がよく分からなくなって、ポプリにも酷いことを言っちまって……。

何なんだよ、もう……。

（語り：セナ）

第３６話：セナとポプリとホノオ

日にちが変わり、セナたちは今日も密林を歩く――はずだった。

その日の朝のこと。

泣き疲れたセナがうとうとし始めた頃、ポツリポツリと他のメンバーは目を覚まし始めた。

「あれ、寝てるぞ、こいつ」

と、ホノオがセナの顔を覗き込んで言う。いつもならここでクスクスと笑うはずのポプリは、今日は気まずそうにセナから目をそらした。そして、何気なくスザクとウォータの顔を見て、異変に気が付く。

「あれ、スザク……なんだかだるそうだね」

「ほんとだ」

ポプリの言葉とともにスザクを見たウォータも同意をする。ウォータと違って普段は寝起きの良いスザクが、今日はうつろな目で地面を見つめていた。

「大丈夫か？」

と、ホノオも彼女に歩み寄った。そこで、セナの目が覚める。――散々泣いたせいで目は赤く、輝きが失せていた。

「……なんでアンタが心配するのよ」

とホノオを威嚇するスザクだが、いつもより声に張りがなく、弱々しくも感じられた。

「あはは、なんでだろ」

と、苦笑いを浮かべつつも愛想よくホノオは返答した。スザクはため息とともに「勝手にしなさい」と呟き、ポプリを見て言う。

「少し熱っぽいかも。頭も痛いし」

「そっか……」

ポプリが相槌を打つ。そして、みんながスザクにかける言葉を探す、ほんの一瞬の沈黙を、セナは狙った。

「うーん……オイラも、ちょっと頭が痛いな」

苦笑いを浮かべ、頭を押さえつつセナは言う。

「今日はあんまり歩かないで、ゆっくり休まないか？」

「……あ、アンタに気を使われなくても……」

セナの言葉に反発するようにスザクは立ち上がるが、すぐにふらつき、尻餅をついた。

「……決まりだな」

ホノオはスザクの様子を見て言うと、地面に腰を下ろした。

――違う。オイラはスザクに気を使って――スザクが休みやすくなる環境を作るために、こう言ったんじゃない。

再び、セナの気持ちがざわつく。

自分の過去を知るのが怖くて、前に進みたくなくなった。ポプリとの関係が気まずくなり、口を開きたくなくなった。――ならば、仮病を使ってしまえばいい。

そう。動機はこんなにずるいのに。

ホノオまで、オイラを心配そうに見ている。

みんな、オイラを誤解している。

スザクはポプリの指示で草の上に寝転がり、セナは木の幹にもたれて座る。ホノオはウォータに「敵が来たらすぐにオレを起こせ」と言いつけ、あおむけに寝転がって体を休めた。日々の見張りに睡眠時間が削られ、疲れがたまっているようだ。――頼みのウォータもうとうとと眠りかけているが。

実質、まともに体を起こしているのはセナとポプリのみ。その場に気まずい沈黙が居座る。

「あ、あたし、薬草探してくるね」

気まずさに耐えきれなくなってか、ポプリはスザクにそう言うと、そそくさとその場を去った。

「はあ……」

密林を1人歩きながら、ポプリはため息をつく。

（あたし、セナくんを誤解してたのかなあ）

と、夜のやり取りを振り返った。

他人の長所や特徴をつかむことには、自信のあったポプリ。誰にでも物怖じせず、明るく話しかけることにも、自信があった。しかし、そんな自信が揺らぎ始めたのだ。

（セナくんは確かに仲間思いだと思うし、みんなに優しいと思う。……でも、あたしがセナくんに会ったのは、ほんの数日前。たったこれだけの付き合いで、他者の性格を決めつけちゃうのは……確かに、よくないよね）

ここまで考えると、ポプリは自らの行動を強く悔やむ。

（それなのに、“優しいから好き”なんて言っちゃったら、確かにセナくんも困っちゃうし……あたしのこと、“軽い”って思っちゃっても仕方がないのかなあ）

――だからさ、誤解された上に好きになられても、迷惑なんだよね。

昨日のセナの言葉が、嫌というほど鮮明に蘇ってきた。

（あたしがセナくんを好きでいることは、セナくんの迷惑になるんだよね。じゃあ……セナくんを大切に思うなら、セナくんを――嫌い、に、なった方がいいのかな）

きっとそうだ、と、ポプリは心の中で付け足す。そして、覚悟を決めて薬草を探し始めた。

しばらくして、ポプリは収穫とともにセナたちのもとへと戻ってきた。セナは泣き過ぎや悩み過ぎのせいでいよいよ本当に頭痛に襲われていた。

「はい、スザク。これを食べて」

と、ポプリはスザクに薄い茶色の根菜を差し出した。

「これ、“力の根っこ”って言うの。すごーく苦いんだけど、すごーく効き目があるんだよ」

スザクは根っこを受け取り、少しずつ食べ始めた。少々顔をしかめたが、苦い食べ物が好きな彼女は文句を言わずにそれを食した。

「えへへ、ごめんね、まずくて」
「いいわよ、別に。体調さえ治れば」

その言葉とともに、スザクは体を起こす。まださすがに全快とはいかないが、熱っぽさはずいぶん軽減された様子だった。

「……ん」

スザクはふと、くちばしでセナを指し示した。

「アイツの分は？」

だるそうに寝転がっているセナを見るとポプリの心も痛んだ。しかし、

「いらないよ、そんなの」

セナにも聞こえるように、わざと大きな声で言い放った。

結局、セナの頭痛はおさまらず、その日はろくに歩みを進めずに夜を迎えた。元気な者で手分けして木の実を探し、その日の夜ご飯とした。

そして、やがては睡眠と見張りの時間がやってくる。

「セナ。お前、今日は寝てろ。オレは日中にいっぱい寝たからさ」

とホノオが言うと、セナは無言で頷く。ため息とともにあおむけになり、目を閉じた。

（……ふう。夜通しで見張りか。ちょいとキツいけど、ま、いいか）

などとホノオが考えていると、彼を呼ぶ声がした。

「ホノオくん」

「ん？　ポプリか」

振り返ると、ポプリが見慣れぬ表情をしていた。いつもの笑顔が

なく、どこか落ち込んだ様子だった。

「ど、どうした？　そんな顔して……」

声に動揺をまとってホノオが問いかけると、ポプリはためらいがちに言う。

「あのね……ホノオくんに、相談があるんだ」

「へえ、セナがそんなことを？」

と、ホノオ。

「うん。それで、セナくんにどう接すればいいのわからなくなって……」

と、ポプリ。悩み――昨日のセナとポプリのやり取り――をホノオに話したことでいくらか楽になったようで、悲しげではあるが笑みを浮かべていた。

「はあー、アイツも気難しいんだよな、あれで」

大げさな口調で言うと、ホノオは苦笑いを浮かべた。

「それまで、セナにどう接してたの？」

「けっこう積極的に話しかけてたなあ。あたしの気持ちも隠さずに

伝えたよ」

「はは、そうかあ」

ホノオはおかしそうに話しかけた。

「ほんと、素直でオープンだよな、お前。ただの相談相手のオレにまで“セナが好き”だって隠さないしさ」

「うん。あたしね、素直に自分を表現すれば、どんな相手ともうまくコミュニケーションが取れるって、そう信じてたの。スザクだって、そうしてあたしに心を開いてくれた。でも、それも勘違いだったみたいだね……」

うつむくポプリに、ホノオは笑みを見せた。

「いいところなんだな、グリーンビレッジってさ」

「えっ？」

「人間だってポケモンだって、そんなにまっすぐなまま成長するのは難しいと思うよ。必ず、世の中に嫌気がさしたり、性格が曲がっちまったりする時が来る。だからさ、なんというか、きれいな世界を信じたまま大きくなれる、そんなグリーンビレッジがうらやましい」

「そっかぁ」

少しの沈黙を利用して、ホノオは考えをまとめる。そして言葉を紡いだ。

「ごめんな、セナがあんなで。アイツはちっとも素直じゃないし、感情と真逆の行動をするときだってあるし……フクザツな性格なんだ。でも、仕方がないんだよな。それが、アイツの育った環境なんだからさ」

ポプリが何か言いたげな、でも言葉が見つからないような、そんな顔をした。

「お察しの通り、セナは人間の時、まあいろいろとあったわけだ。そして、昨日のオレの技を打ち消した、セナの力を見ただろ？　あれを使うほど、人間だった時の記憶がよみがえるらしい。だから、今のセナはすごく不安定なんだよな」

「そっか……」

「えーと、つまりは思い出させたオレのせい。ごめんな」

笑みは浮かべるものの声に元気がないホノオに、ポプリは優しく言う。

「そんな、ホノオくんが謝ることないよ。……でも、そういう親切なところ、好きだな」

さすがにセナに対する“好き”とは違うらしい。それはわかっていつつも――期待などしていないはずだが、ホノオは思わず動揺した。ついつい顔が赤くなる。

「よっ、よせよ！　そんなこと言われたら、アイツじゃなくても恥ずかしくなるって」

「えへへ、ごめんねっ」

ここでようやく、2人の自然な笑顔がそろった。ホノオが話をまとめにかかる。

「まあとにかく。セナについては、お前は気にすることないさ。アイツはお前のこと嫌いじゃないみたいだから、自信持って話しかけても大丈夫――とはいかないか。やっぱり気まずいもんね」

「うん。あたしもセナくんに意地悪しちゃったしね。……あのね、ホノオくん」

ポプリは恥ずかしそうに言うと、先ほどスザクにあげた“力の根っこ”をホノオに手渡した。

「セナくんに、これを渡してほしいの。本当はセナくんの分も採ってきたのに、あたし、あげられなくて……そしたら、セナくんの体調も悪くなっちゃって……。ごめんねって、言ってくれるかな？」

複雑な感情を抱いた、というのが本音だが、ホノオはポプリを安心させるために精いっぱいの笑顔を向けた。

「ああ。わかった！」

ポプリはホノオに礼を言った後、安心したのかすぐに眠りについた。ここでホノオは、セナをじいっと観察する。そして、何か確信

した様子でセナのしっぽを何度もつついてみた。

「ひゃっ、あはは……！」

どうやら彼は起きていたらしい。やはりくすぐったいようで、普段はとても出さないような高い声で笑う。

「やっぱり、起きてたか」

「わ、分かったんなら……ふっ、や、やめろっバカ！　やめ、ハハハっ！」

セナが起きていることを確認した後も、しっぽをつつかれるたびに悲鳴をあげるセナの様子がおかしくて、ホノオはセナのしっぽをつつき続ける。

ホノオがセナで遊ぶのをやめると、セナはがばっと身を起こす。そしてホノオを睨み付けた。しかし同時に、なんだか思い切り笑ったのはずいぶんと久しぶりのような気がした。

「どうせお前のことだ。いろいろ考えて眠れなかったんだろう？」

「うっ、うるさいなバカ」

セナがそっぽを向くと、ホノオは今日何度目かの苦笑いを。

「ほら、これ食って元気出せ。ポプリが、お前に渡して欲しいって。……聞こえていたと思うけど、お前に謝ってたぞ、ポプリ」

と、ポプリからの“力の根っこ”を差し出した。

「……うん」

小さく頷くと、セナは根っこをかじるが、直後、

「うげ、苦いっ！！」

とっさに吐き出しそうになるのをぐっと我慢して、涙目になりながら一口を飲み干した。

「良薬は不味し、っていうだろ？」

「それを言うなら、良薬は口に苦し」

セナはむっと頬を膨らませて言うと、覚悟を決めて根っこを丸呑みした。噛む回数を減らすと、だいぶ楽に食べられた。非常に苦い薬だったが、そのかいあってかセナの頭痛がすぐにおさまった。

「大丈夫か？」

「うん」

しばらく沈黙した後、セナはため息をついて話し始めた。

「ポプリに酷いこと言っちゃったな」

「ああ、そうだな」

「でもさ、オイラってきっと、人間の時も嫌な奴だったんじゃないかなって思ってさ。……ポプリはすごくいい奴だから、釣り合わないよ」

「まーたお前はそういうことを言う」

自嘲気味に吐き捨てるセナに、ホノオは呆れた表情を見せた。

すると、セナの中に怒りがこみ上げる。コイツ、オイラのことなんかちっとも分かっていないくせに、と。

「なんとでも言え。お前みたいな適当な奴に分かってたまるかってんだ」

「適当……か。確かに昔はそうだったけど、さすがに誰かを殺しといて適当に生きるほど無責任じゃないね、オレは」

苛立った様子もなく、ホノオは穏やかに主張する。するとセナは、自身の暴走に再び気づかされたのだった。

「あっ、ごめん……」

セナはしゅんとしおれつつも、悔しさをぶつけるようにかたくこぶしを握った。

「お前だって辛い思いをしたのに、無神経なこと言っちまった。どうしてオイラ、こんなに自分勝手なんだろう?」

「まあ、落ち着けって」

ホノオはセナの肩をそっと叩いて言ってみるが、セナの視線も肩も下がったまま。

「困ったときはお互い様だ。何か悩んでたら、話聞くぞ?」

「……」

ホノオは救いの手を差し伸べるが、セナは頑(かたく)なに口を閉ざす。

「よーし分かった。じゃ、お前には悩み事なんて何もないんだな？そりゃあお気楽なことで……」

「ちっ、違っ……！」

と言いかけると、セナはしまったと口を閉じ、ホノオは誘導に成功してニヤリと笑った。

「しゃーないな。言えばいいんだろ？」

心の奥底では感謝しつつ、セナは悩みを話し始めた。

過去の記憶の欠片が蘇(よみがえ)ったときに感じた強い罪悪感。セナはそのせいで、自分が嫌な人間なのではないかと思い込んだ。

自分の過去が不安になればなるほど他者に攻撃的になり、自分を見失った。

そうしているうちに、周りのみんなが自分を“誤解”しているような気がして、とても心細かった。

――そんなことを、つまずきながらゆっくりと伝えた。

「そっか……」

ホノオは相槌を打ち、セナは恥ずかしさでホノオから目を背けている。

「そうだな。こんなことを言うのもなんだか敗北感があるけど……しゃーないなぁ」

と、ホノオにしては珍しく、回りくどく話を始める。

「何か困難に直面した時にさ、その苦しみや悲しみに“酔う”奴っているだろ？　悲劇の主人公ぶっちゃってるって感じ。オレは、ああいうのは大嫌いなんだよな。問題を解決しようとしないで、嘆くだけなんだもん。

でも、お前は違う。辛いことを“辛い”と受け止めて、逃げることなく真面目に向き合うだろ？　だから、オレは人間の時からお前を尊敬してた。必死に必死に困難と戦う姿が、なんか格好良く見えたんだよな」

珍しくホノオがうつむき、恥ずかしそうにしている。セナは、何かあふれそうな気持ちを必死に押さえつけていた。

「これだけは、忘れないで欲しい」

いつになく真剣なホノオの声に、セナは耳を傾けた。

「オレは、人間のお前を知ってる。それでもこうしてガイアに来て、お前に付き合ってやってんだ。だから……ちゃんと友達がいるんだからさ。お前が思ってるほど、お前は嫌な奴じゃない」

否定し続けた自分を、こうして肯定してもらえた。肩の荷がおりた瞬間に、セナは感情を押さえきれなくなった。

うん。そうだな。ありがとう。――そんな短い言葉すら上手く伝えられる形にならず、セナは無言でただただ泣き続けた。

昨夜スッキリしなかったのが嘘のように、今晩の涙は悩みを洗い

流してくれた。

そして、セナは決心する。

過去を知るのは、確かにまだ怖い。それでも、怖さを受け入れて覚悟した上で、前へ進んでいこう。

第３６話：セナとポプリとホノオ（後書き）

セナとホノオが励まし合ったり誰かに支えられたり、というシーンが超頻出になってますね；

決してネタ切れでワンパターン化してるのではないんです。命が危ない状況下では、そりゃあ悩みは増えるだろう……と、安全に暮らす私なりに考えた結果がこれです。

――という、長い言い訳コーナーでしたｗ

第37話：ネロの実力――その1（前書き）

ポプリはオレに、セナとの関係についての悩みを相談してきた。
セナはセナで、自分の過去やポプリとの関係について気にしていたみたいだ。

2人の悩みについては、ここでは詳しく触れないでおくよ。プライバシーは守らなきゃ。
とりあえず、オレってけっこう頼られてるみたい。悪くないかな。
（語り：ホノオ）

第37話：ネロの実力――その1

セナ達が、マスターランクの救助隊ＫＦＣに襲われたり、恋や記憶をめぐって悩んだりと忙しかった時……。ヴァイス達は、目的地である精霊の崖（そこで超能力者ネイティオに会い、セナとホノオの居場所を特定してもらうのが目的だ）へ、順調に近づいていた。

これは、セナとポプリがホノオにそれぞれの悩みを打ち明けた、次の日のこと。

「この森を抜けたら、小さな草原に出る。そして、その草原を抜けたら、“雷鳴の山”ってところを通るよ。それが、一番の近道だからね」

1日の始まりに、旅のメンバーはこの日の進路を確認する。カメールの女の子、メルは、地図を指しながらみんなに指示を出した。

「“雷鳴の山”ってどんなところなの？　お姉ちゃん」

可愛らしく首を傾げて問うのは、ヒトカゲのヴァイスだ。

「乾いた空気をまとった岩山だね。静電気が発生しやすいし、よく雷が落ちる」

メルのその説明に、

「きゃあ、電気怖いヨー！」

「僕、乾燥大嫌いなんだよね」

と、渋い顔をするのは、ポッチャマのシアンと、ハスブレロのブレロだ。2人とも、今のメルの説明に抵抗感を示したようだ。

「我慢しろよな2人とも。それでセナとホノオにすぐに会えりゃいいじゃん」

ブルルが呆れたようなため息をつく。ブレロは少々カチンときたようで、不満げに言い返した。

「なんだよ。僕は別に我慢しないとは言ってないぞ。ただちょっと文句を言っただけさ」

「ああそうだったのかい。誤解を招く文句は言わないで欲しいね」

と言い合った後でにらみ合いが始まる――が、直後。

「はいはい、喧嘩はやめるんだよ」

メルの一声。ブレロとブルルの小さな対立を、権力によって一瞬でかき消した。

「お姉ちゃん、慣れてるね……」

以前からホノオとシアンの喧嘩をピタリと止めていたメルに、ヴァイスは苦笑いで言った。

「さあて。まずはとっととこの森を抜けるんだよ」

「……雷鳴の山を通れば、今日にでも精霊の崖に着きそうだね。みんな、もう少しだから頑張ろう！」

メルとヴァイスが号令をかけると、皆が――ネロは1人落ち着いた表情だったが――笑顔で頷く。その場がやる気に満ちた。

こうしてヴァイス達は順調な速さで森を抜け、小さな草原に出る。ここで、問題が起こるのだった……。

「なんだか楽しそうだね、ヴァイスさん」

先頭に立って、弾むような足取りで草原を歩くヴァイスに、アルルがほほ笑んで話しかけた。

「うん、だって、精霊の崖までもう遠くないんだよ。もうすぐ、セナ達の居場所の手掛かりが掴めるんだもん！」

そのヴァイスの答えを聞くと、それぞれが考えを巡らせた。

そうだ、もうすぐセナとホノオに会えるんだ――と、嬉しくなるシアン。

これまでのヴァイス――それから、救助隊の攻撃を耐え抜いたと信じているセナとホノオの苦労を思うと、胸が熱くなるメル。

ヴァイスに共感しつつも、やはり彼は恋愛より友情なのだと再確認し、苦笑いのソプラとアルル。

かつて険悪な間柄であったセナとホノオに会い、仲直りをしたい。そう考えるとわくわくすると同時に、少し緊張するブレロとブルル……。

そしてネロも例外ではなく、心の中でヴァイスに話しかけた。

（そうだ。探していた誰かに会うことは、とても嬉しいことなんだ）

この時だった。

――ヴァイス。

と、どこからか優しい声が自分を呼ぶ。それに気がついたのは、ヴァイスだけだった。

「えっ？」

とヴァイスが言うと、皆も「えっ？」とヴァイスに目を向けた。

――ヴァイス。気をつけて。

優しいが不安げな声。先ほどよりも長いその言葉を聞くと、ヴァイスはその声の主に見当がついた。

が、しかし。そんなはずは……。

「お、お父さん……？」

まさかと迷いつつも、ヴァイスは呼びかけてみる。

「エッ、レッドさん！？」

シアンが甲高い声で驚くと、辺りを見回してみる。しかし、見晴らしの良いこの草原に、レッド――ヴァイスの父親のリザードン――は見当たらなかった。

「どうしたんだ、ヴァイス？」

ブレロが不思議そうに言うと、メルとネロを除いた皆がヴァイス

に注目した。

「……いや、たぶん気のせいだよ。お父さんの声がね、さっき一瞬だけ聞こえたような気がしたの。“気をつけて”って」

「えっ……」

意味ありげな、そして少々不吉なヴァイスの言葉に、シアン達の表情がかたくなる。すると、メルが静かに発言した。

「どうやらその忠告は、本当かもしれないね。嫌な予感がする」

「ああ」

メルの言葉にネロも同意すると、説得力がさらに上がる。そして、2人は何かの気配を感じ取るように、じっと目を閉じた。

「心配するな」

不意に、ネロはヴァイスに話しかけた。

「お前の父さんがお前に味方している証拠だと思え」

「えっ……？」

ネロのその言葉を理解できないヴァイスは、何かをネロに聞き返そうとする。しかし、それを許さぬ事態が発生するのだった。

「……！“守る”！」

何かを察知したメルは、とっさにシールドを展開して味方を守る。するとすぐに、上空から激しく降り注ぐ“破壊光線”がシールドに衝突した。目が痛くなるような光が飛び散り、轟音がとどろく。

「わあーっ！！」

ダメージこそ食らっていないものの、ヴァイス達は驚いて体を寄せ合い、悲鳴を上げた。

視覚や聴覚に余韻を残させながら、やがて破壊光線の光は拡散してなくなる。メルがシールドを解除し、技が放たれた上空を睨み付けた――その時だった。

「危ない！」

ネロが鋭く叫ぶ声を、皆は初めて聞いた。直後ネロは、ヴァイスにアルルにソプラに――自分の近くにいた仲間の体を強く押して弾き飛ばした。

何が起こったのか。ヴァイス達がそれを把握したのは、地面から飛び出してきた――“穴を掘る”という技で攻撃してきた――ポケモンを、ネロが器用に避けている瞬間を見たときだった。

まだ身を起こせないまま、状況を整理するのに必死なヴァイス。そんな彼を突き動かしたのは、アルルの背後の“影”に、怪しく潜むポケモンの姿だった。

「あっ！」

明らかにそのポケモンは、アルルを狙っている。

守りたい。守らなくては……！　と、決心すると、ヴァイスは敵

ポケモンに気が付かないアルルに覆いかぶさるように彼女を保護した。

直後、彼の背中に衝撃が走る。影に溶け込み、相手に確実に近づき、思い切り殴る技“シャドーパンチ”を食らったのだ。

「うっ！」

「わわわ、ヴァイスさんっ！？」

アルルはいきなり抱きつかれたことに赤面し、焦りでヴァイスの辛そうな悲鳴にすぐには気が付かなかったようだ。

「ヴァイス、大丈夫ナノ！？」

シアンがすぐにヴァイスに声をかけた。そこで、アルルは気が付く。ヴァイスが自分を守ってくれたのだと。

「あっ、ごめんねヴァイスさん！」

今にも泣きそうな声でアルルが言うと、

「大丈夫。心配ありがとう」

と、笑顔でヴァイスは頷いた。

――ここで、気が付く。自分たちは、何者かに狙われたと。

「何の用だい！？　姿を見せな！」

上空、地中、そして影。見えないところから不意打ちを仕掛けてきた敵をメルは怒鳴った。すると、

「おっと、いきなり失礼。ケケケ……」

と、特徴的な笑い声と共に影から姿を現したのは、丸みを帯びた紫の体に、鋭く光る赤い目が特徴のポケモン。“シャドーパンチ”を放ったゲンガーだ。

「ちょっとばかり、お前達に用があったのでな」

ネロと睨み合いながら言うのは、頑丈な甲羅に、青色の太い手足。亀のような容姿の大きなポケモン。“穴を掘る”で突然の攻撃を仕掛けてきたカメックスだ。

「用事のある奴にどうして攻撃するんだよ！？　おかしいだろ！」

ソプラが怒りを込めて言うと、

「ふっ。そう思うのも無理はないがな。では、用件を教えてやろう」

ニヤリと怪しい笑みを浮かべて上空から降りてきた――すなわち、先ほど破壊光線を放った――のは、背中に葉っぱの形の大きな翼を持つ、首の長い恐竜のような容姿のポケモン、トロピウスだ。

（このポケモン達……確かマスターランクの救助隊だよ。トロピウス、カメックス、ゲンガー。３人合わせて、救助隊“ＴＫＧ”）

ヴァイスはこの３種族の組み合わせに覚えがあるようで、嫌な予感にサッと青ざめた。――事実、彼の予想は当たっているのだ。

「残念だったな。セナとホノオがいつまでも死なねぇから、もう頭

にきたみたいでさぁ。セナとホノオに関わる奴ら、味方する奴ら…全てを殺すことになったんだよねぇ。ケケケっ」

ゲンガーの言葉を受け入れられる速さは、皆それぞれだった。

“セナとホノオが死んでいない”という情報のお陰で、引きずっていた不思議な夢の不吉さを振り払うことができたヴァイス。自分達の危機にもかかわらず、安堵（あんど）の表情を浮かべている。

もちろん言葉を受け入れられない者もいる。シアン、ソプラ。

しかし、その他のメンバーは、もう覚悟を決めて表情を引き締めた。――救助隊の態度を見て、以前から悟っていたのだ。セナ達の味方をする自分達も、救助隊を敵に回しているのだ、と。

だが……。

「だからって、なんでアタシ達を直接狙うんだよ!?」

「そうだヨ！　シアン達の生死はセナとホノオには関係ないのに！」

耐えかねて抗議するソプラとシアンの言葉にも、皆が頷いた。そうだ。自分達までもを殺すメリットは何なのだろうか？

「そいつは俺達も知らんなぁ。セナを憎む“あのお方”が決定なさったことだからな」

馬鹿にしたような笑いを浮かべ、カメックスが吐き捨てた。

「とにかく、そういうことだ。じゃあ、覚悟し――」

と、カメックスが言いかけた時だった。ＴＫＧの３人が放っている威圧感や、攻撃しにくい雰囲気をものともせず、ネロが疾風のごとく駆け出した。そして、腕についている葉を剣のように硬化させ、

怯むカメックスに振りかざした。

「“リーフブレード”」

「ぐっ……！？」

とっさの事態に避ける体がついていかず、鋭い剣がカメックスの左肩を傷つけた。

「くっ、よくも！」

ここで怯まずすぐに次の手を打つあたり、やはり戦い慣れた救助隊なのだろう。ゲンガーが“催眠術”で、やっかいなネロを眠らせようとするが……

即座にネロは右手をゲンガーに向け、まばゆく輝く緑色の球体を放った。弾丸のように空気を貫くそれ――“エナジーボール”は、催眠術を打ち消し（そもそも催眠術は、成功率が低めの技なのだ）、ゲンガーの体に当たると激しい爆発を起こした。

「ウゲッ……！？」

さすがにすぐにはやられないようで、ゲンガーはすぐに立ち上がった。

「みんなも、やるよ！　戦うしかないんだ！」

ネロの行動に突き動かされ、メルも皆に攻撃指示を出す。覚悟を決めて、いくつもの頭が上下した。

――その一方で、頷きつつもヴァイスは考える。

確かに、マスターランクのＴＫＧは強い。見事に不意打ちを決めるし、先ほどゲンガーに殴られた背中はまだ鋭く痛む。戦略と攻撃力を兼ね揃えたチームだ。

しかし。彼らをはるかに凌駕（りょうが）するネロの実力は一体……？　かつて彼は、強さを求める発言をしていた。その言葉の深い意味を、ヴァイスは無性に知りたくなったのであった。

第３７話：ネロの実力――その１（後書き）

卵（Ｔ）かけ（Ｋ）ご飯（Ｇ）って美味しいですよね。↑

第３７話：ネロの実力――その２（前書き）

“雷鳴の山”経由で“精霊の崖”に向かおうと決めたボク達は、草原を歩いているときに救助隊に襲われた！　それも、ＴＫＧっていう、マスターランクの救助隊なんだ。

突然の奇襲もすごく上手だし、とても強いよ……。でも、ネロさんも負けてない。どうしてネロさんは、こんなに強いんだろう？

（語り：ヴァイス）

第37話：ネロの実力――その2

ヴァイスは怖かった。自分たちが本当に直接の“ターゲット”になったのは初めてだったから。脳みそがずしりと重く感じるが、暴れる心臓はそのおもりさえも揺さぶる。

しかし、堂々と構えるネロの様子を見ると、こんな深刻な緊張さえも少し和らぐような気がした。

戦闘開始直後、真っ先に攻撃を仕掛けたのはやはりネロだった。“高速移動”を用いて敵に接近すると、カメックスに狙いを定める。そして、目にもとまらぬ速さでカメックスの背後にまわり込み、

「“エナジーボール”！」

緑に輝く弾丸をぶつけた。しかし、

「“守る”！」

重量感のある見た目の割に、カメックスは素早かった。すぐに頑丈なシールドを展開し、自分の身を守った。

ネロの攻撃は失敗したかのように見えたが、ヴァイスとメルはそうさせなかった。“守る”の効果が切れたカメックスに向かって、2人は駆け出す。それを見たトロピウスとゲンガーは、もちろんそれを止めようとするが、

「“葉っぱカッ――”」

「“シャドー――”」

背後からリーフブレードで襲うネロ、進路を変えて冷凍ビームを

放つメル。この2人によって、トロピウス達の技は発動前に防がれた。

そして、1人カメックスのもとへ突撃するヴァイス。――自分は小さな炎タイプ、相手は大きな水タイプ。まともにかかっていっても結果は目に見える。

ここは、みんなを信じてみよう。そう決めると、ヴァイスは深く息を吸い込む。そして、

「“煙幕”！」

吐き出した黒い球体はカメックスにぶつかると弾け、彼を煙で覆って視界をふさいだ。カメックスにすきができる。

「今だ、みんな！」

ヴァイスが振り返って指示を出すと、期待した通りに――いや、期待した以上に――嬉しくもすでに攻撃準備を始めていた仲間がいた。

セーのとヴァイスが合図すると、ひとつひとつは小さいが、力が合わさって強力になった攻撃がカメックスを襲う。

効果はいまひとつだがそれなりの威力があるシアンのバブル光線。2人で助け合いながらカメックスの弱点である電気を放つソプラとアルル。同じく効果のある草タイプの技、種マシンガンで攻撃するブレロ。ブルルは遠距離系の技を持っていないのだが、“ゴローンの石”という攻撃アイテムを投げて貢献していた。もちろんヴァイスも精いっぱいの火炎放射をぶつけた。

轟音の中から、カメックスのうめき声が聞こえる。だが、それこそがヴァイス達の油断を誘ったのだった。

「“ミラーコート”！」

その言葉と共に、カメックスは強力に輝く光線を繰り出した。ヴァイス達の攻撃を倍にして返したのだ。

「！！」

とっさに眩しさに目をそむけるが、状況が全く呑み込めないヴァイス達。その時、

「“ミラーコート”！」

先ほどとは違う、女性の声がそう言ったのを、爆発音に邪魔されながらもヴァイスは確かに耳にした。そして、身を引き裂くような痛みが訪れ――なかった。

「……え？」

ヴァイスが恐る恐る目を開けてみると、自分達が攻撃した以上の怪我を負っているカメックスと、先ほどまではそこにいなかったはずのカメールが、無残な様子で倒れていた。ヴァイス達が受けるはずだった攻撃に飛び込んで、それをミラーコートで再びカメックスに送ったのだ。

「お姉ちゃん！」
「ねーちゃん！」
「メルさん！！」

駆け寄ることもできないほどに足がすくみ、ヴァイス達は震えた

声で彼女の名を呼んだ。が、彼女はピクリとも動かない。呼吸も――していない。

“ミラーコート”は相手の技（特殊攻撃）を倍にして返す技。もちろん“守る”とは違い、技の使用者はダメージを防げない。彼女が受けたダメージは、ヴァイス達の一斉攻撃をカメックスがさらに強力に跳ね返したものであって……その威力が、傷によく現れてしまっている。

「そ、そんな。お……お姉ちゃんが……」

大きな目にたまった涙が、体の震えに振り落とされる。頭が真っ白になったヴァイスのそばで、いくつもの嗚咽（おえつ）が聞こえた。

そんな隙だらけの状況を敵が見逃してくれるはずはなく、

「“リーフストーム”！」
「“シャドーボール”！」

とどめと言わんばかりにトロピウスが大技を繰り出し、ゲンガーがそれにさらなる破壊力を追加する。迫りくる攻撃を、必死になって避けようとする余裕のある者はいなかった。――カメックスに攻撃した、メルとネロを除くメンバーの中“には”。

「“守る”！」

聞こえた女の声が、やけに懐かしく感じてしまった。同時に、何か暖かい感情がこみ上げる。

カメール――死んでしまったはずのメルがシールドを作り出し、いつものようにヴァイス達を守っていたのだ。

同時にシールドの外では、ノーマークのネロが動いていた。素早く、しかし物音を一切立てずにトロピウスとゲンガーに忍び寄ると、腕についた鋭利な葉をギラリと光らせた。そして、対象を強く切りつけた。それも、何度も。

「ぐうっ！？」

さすがにたまらず、トロピウスとゲンガーは攻撃をやめた。その少し後に、メルはシールドを解除した。

その瞬間、ヴァイスとシアンはメルに抱きつく。一拍遅れてソプラとアルルも。ブレロとブルルは精神年齢的にそこまではできないものの、すぐにメルに駆け寄った。

「きゃっ、なんだい！？」

「だって、だって……！」

「死んじゃったのかと思っちゃったよぉ……」

困惑するメルに、抱きついている４人は涙で濡れた頬をすり寄せた。よしよしと頭を撫でてやりたかったが、彼女にそんな余裕はなかった。アルルに抱きつかれているしっぽが、特にむずがゆい。

「くっ……うふふっ！　みんな、放れな！　く、くすぐったいじゃないかっ」

笑いながら恥ずかしそうに身をよじるメルが言うと、ヴァイス達はゆっくりとメルから放れた。

「あ。ごめん、お姉ちゃん」

メルの少々意外な一面を見た気がして、ヴァイス達は驚くとともにクスッと笑う。なんだか悔しくなったメルは、少し頬を膨らませて短く解説した。

「ミラーコートを使ったのは、アタイが“身代わり”を使って作った分身なんだ。さっきのボロボロなアタイは、もうどこにもいないだろう？」

「本当だ……」

確かに、目を背けたくなるような怪我を負ったメル――すなわち身代わりは、もう消滅してしまったようで、見当たらない。

「よかったよ、お姉ちゃん……」

「メルさん、ありがとう」

再び、6対もの涙目がメルを見つめる。すると、メルの中に熱い思いがこみ上げてきた。それがなぜだかよくわからないし、戦闘中にそんなことなど考えられない。

しかしメルは、にじむ視界をクリアに戻すのに必死だった。もちろん、涙をぬぐう姿など見せたくなかった。

「さ、さあ。とっとと気持ちを切り替えな！」

振り切るように大きな声で言うと、メルはネロ――トロピウスとゲンガーからの反撃をうまくかわしている――を援護しようと駆け出す。どうにか、涙はごまかせた。が。

ネロはメルを見て、小さく、敵に悟られないように首を振る。

「えっ……？」

思わず足を止めるメルを、ヴァイス達は不思議そうな表情で見つめる。

「どうしたの？」

「ネロが、首を振っている。……来るなってことかい？」

「うーん……そうかもしれない」

と、ヴァイス。

「ボク達、なんだか守ってもらってばっかりだもん。今行っても、邪魔になっちゃうよね……」

少しうつむき、悔しそうに言う。ネロは1対2でありながらも、マスターランクの救助隊員に善戦していた。

「……多分」

と、ポツリと言い出したのはアルルだ。

「ネロさん、集団戦闘に慣れていないんじゃないかな？　だから、ボク達が襲われちゃった時にどうすればいいのか分からなくて……それで、来るなって言っているんだと思うよ」

「そっか……そうかもね」

とメル。さらに言葉を続ける。

「じゃあ、アタイ達はネロを見守ろう。ネロが本当にピンチになった時は、助けに行くんだよ」

「うん！」

こうして、７つの眼差しが一斉にネロに向けられた。

トロピウスにもゲンガーにも、草タイプの技はあまり効果がない。手数と技の大きな威力が求められる戦いだ。

「くそっ、素早い……」

“高速移動”で素早さを増したネロについていけずに苦労するのは、トロピウス。体が大きく、小回りが効かないのだ。その上、さっきヴァイス達に大技を放ったせいで、疲れが見えている。やるならこちらからだ、とネロは思った。

トロピウスの背後に回り込むと、ネロはトロピウスの長い首に思い切り手を振り下ろす。

「“みねうち”」

当たりどころも悪かったのか、トロピウスは苦痛の声を漏らす。そして、思い切り咳き込んだ。

「がっ……！？」

ネロはふっと笑うと、トロピウスの背中を強く踏みつけて空高くはねる。そして、彼が片手をあげると、トロピウスの頭上に大量の、鋭く尖った岩石が出現した。

「“岩なだれ”」

技を発動した直後、幾多の岩がまるで地面に吸い込まれるように高速で落下し、トロピウスを襲った。トロピウスの大きな体は、浴びるように岩なだれを受ける。

「ぐああっ！！」

猛烈な攻撃に似つかわしい痛烈な悲鳴が上がる。飛行タイプのトロピウスは、岩タイプの技に弱いのだ。

「す、すごい……」

と、戦闘を見守るヴァイス達数名の声が重なる。

「やっぱり、１人の方が生き生きと動けているよね、ネロさん」

と、アルルが言うと、ブルルが少し不満げな顔をした。

「どうしてネロさんは、足手まといなおれっち達についてきたんだろう。１人の方がよっぽど強いのに」

その言葉を聞くと、メルとブレロがブルルに咎めるような眼差しを向けた。

「あっ……ごめん。別にネロさんが嫌いって訳じゃないんだけど」

ブルルが焦って誤解を解こうと説明すると、みんなの視線が再び

戦闘に向いた。

（でも……どうしてネロさんは、ボクらについてきてくれたんだろう。どうしてネロさんは、あんなに強いんだろう。――ネロさんがいなきゃ、ボク達はＴＫＧにやられていたかもしれない）

ヴァイスはそんな疑問を抱きながら、その疑問を解決する手がかりを見つけるように、戦うネロを見つめた。

トロピウスを埋めた岩石の山はピクリとも動かない。さすがに命まで奪わないように加減はしたが、どうやらトロピウスは気絶したようだ。

ネロは静かに着地する。そして辺りを見回すが――ゲンガーが、見当たらない。

「ケケケ、俺ならここだよ～」

声は足元から。ゴーストタイプであるゲンガーは、ネロの影に潜り込んでいたようだ。上半身だけ、ネロの影の頭の辺りから出している。

すぐにネロはリーフブレードでゲンガーがいるところを突き刺すが、ゲンガーは器用に影に潜り込み、リーフブレードを回避。そして、前のめりの姿勢になっているネロのお腹を狙って、影から思い切り飛び出した。

「ぐっ……」

ネロが初めて苦痛の声を上げた。ゲンガーはそれを聞いて気分を良くし、スキができたところにさらに攻撃を重ねた。

「“サイコキネシス”」

ゲンガーは赤い瞳を鋭く光らせると、ネロの全身を念力で締め付けた。

「っ……く……」

細長い首にも、ロープがきつく食い込んだような酷い締め付け感を覚える。体がズキズキと痛み出すと、遠のく意識の中、ネロは脱出策を必死に探した。

「ケケケ。お前はもう念力から逃げられないぜぇ。覚悟しな」

と、ゲンガーは勝ち誇った表情で――しかしさらに力を強めて言う。

「まずいよ！」

と、ヴァイスが助けにいこうとした、その時だった。

突然、ガラスを思い切り引っ掻いたような、不愉快な音が大音量でなりだした。

「わあーっ！」

「うげっ……！」

音の正体は、ネロが使った技“嫌な音”。ヴァイス達も、当然ゲンガーも、耳をふさいでうろたえた。

ゲンガーにスキができたので、ネロは即座にゲンガーから距離をとる。そして彼は酷なことに、自分の呼吸が整うまで嫌な音を鳴らし続けた。

「うーぅ……なんだか、力が抜けちゃうヨ～」

「いい加減……やめろよな……」

と、シアンにソプラ。仲間からのブーイングが、続々と飛び交った。

数分後、体の力が抜けるような、気持ちが悪くなるような地獄の音がようやく鳴り止んだ。

「うぅ……」

その瞬間、ヴァイス達は力なく地面に座り込む。メルでさえためらう余裕もなく、ただただぐったりとしていた。

「ウゲゲ……くそ、あいつめ……」

と、ゲンガーはクラクラしながら辺りを見回すと、ネロは腕についた鋭利な葉を鋭く振り、駆けるようにステップを踏み――激しく舞っていた。自らの攻撃力を大幅にあげる技、“剣（つるぎ）の舞”だ。

十分に士気が高まると、ネロは葉を掲げてゲンガーに迫る。もちろん申しぶんない速度だったのだが。ゲンガーも慣れたもので、ネロの足もとに素早く滑り込んで再び影に隠れる。

「ケケッ、もらっ――」

――た、と言いかけた時だった。突如影が消滅し、ゲンガーは陸

上に追い出される。
戸惑って辺りを見回すゲンガー。そんな彼の背後を狙って、ネロは静かに、だが勢いよく地面から飛び出した。気づかれる前に彼は手を打つ。
リーフブレードで何度も背中を襲う。先ほどヴァイス達の援護をする時にも使った手だが、今回の攻撃はわけが違う。

「ぎゃあああっ！！」

ゲンガーは痛烈な悲鳴を上げた。嫌な音で体の力が抜けて防御を崩された上に、ネロは剣の舞で自らの攻撃力をさらに上げている。いくら効果の薄い草タイプの技と言えど、これではかなり辛かった。
必死に足もとに注意を向け、ゲンガーは逃げ込むべき影に狙いを定め始めた。それを許さないのがネロだ。
両手のリーフブレードをゲンガーに思い切り押し当て、そのまま両手を空高く振り上げてゲンガーを空高く投げ飛ばした。――先ほどは“穴を掘る”で地中に逃げて影をかわしたネロは、今度は足もとからのびる影のない空を選んだのだった。

いよいよとどめに入るようだ。今にも意識が途切れそうなゲンガーに追い討ちをかけるべく、ネロもゲンガーを追いかけるように跳ね上がる。強い脚力のお陰か、ゲンガーを追い越して見下ろした。

再びネロは、片手をあげる。大量に出現した岩石を薄目で見たゲンガーは、確かに負けを悟るのだった――。

2つの大きな岩山が、戦闘の終わりを静かに語る。

「ふう」

と、ネロが一息つく。そして少しだけ気を緩めた、その時だった。

「“ハイドロカノン”！」

爆発音と共に襲った攻撃を、ネロはまともに受けてしまった。

「うぐっ……！」

あまりのスピードにより硬化した水がネロの体を叩きつけた。全身に、激痛が走る。

「はぁ、はぁ……。まだまだ、“アクアリング”で回復すれば……」

最初にヴァイス達の一斉攻撃を受け、さらにメルの分身によるミラーコート返しで初めの4倍のダメージを受けたカメックス。彼が、執念深く再び立ち上がったのだ。

もっとも、カメックス自身が言うように彼はまだ回復途中。しかし、あれだけのダメージを受けても再び戦おうとするこの存在に、ネロもヴァイス達も戦慄した。

――逆に言うと。ネロは、水タイプの最強技“ハイドロカノン”を受けたにも関わらず、戦慄する余裕があったのだ（もっとも、草タイプのネロには水タイプの技はあまり効かないが）。

「くっ……。回復、か」

体を起こすと、ネロはカメックスに向かって駆け、背後にまわり込む。大技の後で疲れきったカメックスが、そのスピードについていけるはずがなかった。

「それなら、回復が追いつかないように体力を削ればいい」

低い声で呟くと、ネロはリーフブレードでカメックスの腕に傷を付ける。――刃には、“毒々”を用いた猛毒を塗っておいた。

「ぐぅっ……」

顔をしかめるカメックスに、

「どうする。まだやるか」

と、ネロが問いかけた。

「……くそっ」

まだ何か言いたげだったが、もはや口が回らない。

カメックスが悔しそうな顔で“穴ぬけの玉”という不思議玉を使うと、光とともに彼はこの場から去った。２つの岩山も崩れ――それは、トロピウスとゲンガーの退却を意味していた。

かくしてヴァイス達は、マスターランクの救助隊ＴＫＧから命を守ることに成功したのだった。

第３７話：ネロの実力――その２（後書き）

“強くて頼りになるアネキ”を目指したら、メルはほとんど短所や弱みを見せないキャラになってしまいました；　今回の話でちょっと可愛く見えればいいなぁ↑

そして、メルを目立たせすぎてネロが空気になりかけたというｗうまく軌道修正できているかしら……？

第３８話：オレと焔と真実と――その１（前書き）

ＴＫＧとの戦いで、メルさんはボク達を守るために死んじゃった――と思ったら、どうやらそれは身代わりだったみたい。ボク達は嬉しくてメルさんに抱きついたんだけど――メルさん、しっぽに触っちゃってごめんね。

そのあとは、ネロさんの希望もあって、ネロさんは単独でＴＫＧと戦い始めちゃったんだ。いくつかハラハラした場面もあったけど、ネロさんは１人の方がよく戦えるのかな。見事にＴＫＧに勝っちゃった！　かっこよかったなあ。

怖かったけど、無事にＴＫＧを追い払えてよかった。

（語り：アルル）

第３８話：オレと焔と真実と――その１

密林を抜けた途端に、今までよりも格段にあつい空気が体を包み込んだ。

「うわ……」

たどり着いた目的地“灼熱の火山”は予想以上の暑さで、思わずセナ達はうろたえる。頭上をびっしりと覆っていた木の葉や枝はなくなり、ギラギラと照りつける日差しが足元の岩肌を焼くように加熱していた。

「うひゃー。これは、オレでもちょっと暑いや。……スザク、お前は？」

ホノオが日差しに目を細め、苦笑い。問いかけられたスザクは、

「まあ、暑いんじゃない？」

他人ごとのような素っ気ない返事だが、珍しくまともな言葉を返す。ついに炎タイプの彼らまでも、わずかながら暑さを訴えるようになった。

「気を付けていこうね、みんな。リンゴや木の実を食べてこまめに水分をとらないと、倒れちゃうよ」

ポプリがメンバーを気遣って指示を出すと、カクリと首が折れ曲がるような、元気のない頷きが４つ返ってきた。

「この火山にいるエンテイってポケモンに会えば、スイクンにも会える。何かが……変わる。よおし。頑張らなくっちゃ」

気力を振り絞って持ち直すと、セナはそう言って火山の火口付近をじっと見つめた。

こうしてセナ、ホノオ、ポプリ、スザク、ウォータの5人は、暑さと戦う覚悟を決めて火山を歩き出した。どうやらこの火山のマグマの粘り気は弱いらしく、火山は広いが高さはない。急斜面を登るよりはだいぶましなので、それは不幸中の幸いだった。

まだ歩き出し数分。一行の頭も体も疲れていないときに、ホノオはふと、不安げに聞いた。

「そういえばさ。これから会うエンテイって、スイクンの仲間なんだよな？」

「ホウオウによると、どうやらそういうことになるらしいな」

と、セナが返す。

「だよな。じゃあさ、もしエンテイに、これまでのオレ達の旅のことについて尋ねられたとする。……どこまでなら、本当のことを言ってもいいんだろうな」

うーんとうなり、セナは難しそうな顔をした。スザクとウォータは、先ほどからセナとホノオの顔を交互に見、2人の話を聞いている。ポプリも同じことをしているように見えたのだが、正確には違った。セナの顔を見るのをためらい、彼の足もとを見ている。

「命がけの旅だったとはいえ、色々とまずいことをしちまったよな、オイラ達。あんまりさ、細かいことは言わないでおいた方が良さそうだよな」

「そっか……。じゃあさ、言わない方がいいよな。その――“破壊の、焔”」

それが聞きたかったのか、とセナは納得する。

「言わなくてもいいんじゃない？」

セナの言葉に、ホノオはあいまいに頷いた。そして、再び言葉を紡ぐ。

「う、ん。でもさ……何というか……。自分の正体を隠しちゃっていいのかなあって」

「いいんじゃない？　オイラ達には、“自分達の正体を明らかにする義務”なんかない。だからこそ、生きていられるんだよ」

半分はホノオのために。そしてもう半分は自分のために、セナは言う。

「セナの言うことはちょっと難しいども、オラもそう思うだよー」

ホノオを励ますようにウォータが言うと、ポプリも優しく微笑んでみせる。かつては破壊の焔に猛反発したスザクも、特に文句を言いたそうな様子はなかった。

「そっか。みんな、ありがとう！」

元気に答えると、ホノオは随分と軽くなった悩みとともに、足をはやめるのだった。それに伴い、一同の表情に元気が宿った――が、それは長くはもたなかった。

「あ、暑いな……」

「うーん、暑いだよぉ」

元気のないセナとウォータの声が重なる。2人とも水タイプであり、カラッとした日照りは苦手なようだ。

「大丈夫か？　リンゴでも食えよ」

ホノオが心配そうに2人を見ると、水分補給のためのリンゴを勧める。

「う、うん」

力なく頷くと、セナとウォータは口にリンゴを運ぶ。真っ赤に熟れた果実はヒヤリとみずみずしい――訳がなく、生温い水分がのどをゆっくりと通過した。

「……無理しないでね」

ポプリの声が聞こえると、思わずセナは下げていた目線を跳ね上げた。

ポプリは、セナの“方向に”言葉をかけてくれた。が、セナ“に”言葉をかけたのではないようだ。彼女の眼差しがそれを語ってい

た。

（そっか……。ポプリに謝らなきゃな）

これまではホノオ達が媒介になって話題を紡いでくれていた。お陰で旅の雰囲気はさほど悪くならなかったのだが――2人の間の雰囲気は、いまだに緊張状態にあった。

これではいけない――と、セナが思ったその時だった。

突如、背後から熱風が吹き荒れ、小さな5人の体は宙を舞う。

「うわっ……！？」

悲鳴を上げて戸惑う彼ら。セナは宙でくるりと一回転し、一瞬だけ風が迫る方向に顔が向いた。

迫ってきたのは熱風だけではない。それをまとった、大きなポケモンだった。ポケモンは口の中に強い熱を溜め込み、自らの牙に火をまとわせる。そしてセナに向かってきたのだが、もちろん熱風に遊ばれるセナには抵抗の術はない。

「“炎の牙”！」

鋭い牙が食い込み高熱に焼かれたのは、セナのしっぽだった。

「あああーっ！！」

刺激に弱い場所を狙われ、セナは喉が裂けそうな悲鳴をあげる。

直後、5人の体は地面に引きずられた。

「んぐっ……！　せ、セナ！？」

背筋に走る痛みに耐えつつも、ホノオは飛び上がってセナを見る。

飛び込んできたのは、衝撃の光景だった。どっしりとした構えの４本足で立ち、長い茶色の体毛からのぞかせる眼差しは威厳に満ちている――そんな大きなポケモンが、炎の牙でセナのしっぽを強く捕らえていたのだ。

名前を聞かなくとも、初めて見た存在であっても、その正体を察してしまう。

が、今はそれどころではない。

「セナを放せ！」

ホノオは利き手の左手を引いてそのポケモンに迫り、頬を殴りつけようとする。するとポケモンは思い切り首を振り回してセナをホノオに投げつけた。

セナとホノオは大きく飛ばされ、地面に叩き付けられた。地面の固い岩は、２人の体を削るように傷つける。

「あっ、セナ、ホノオ！」

ようやく体を起こしたウォータは、悲鳴のような声で名を呼んだ。あのポケモンが、セナとホノオを睨み付け、重々しく足を踏み出したのだ。

照りつける太陽が、自らの前に立ちはだかる存在の影をくっきりと焼き付ける。ホノオはとっさに体を起こすと、目の前のポケモンの目をにらんで話しかけた。

「おい、お前がエンテイだろ！？　いきなり何するんだ！？」

ホノオの言葉を聞くと、エンテイは不気味にニヤリと笑う。とても正気には見えなかった。

「わしは、お前たちを殺す！」

どこかぎこちなく宣言するエンテイ。しかし威圧感のある声がホノオの体を震わせた。

「く……。は、話が、違うぞ……？　ホウオウは、エンテイに会えば、スイクンのいば……居場所が、分かるって……」

牙でつけられた傷をじかに焼かれ、しっぽに大怪我を負ったセナが、痛みに耐えつつ声を振り絞る。

彼が言葉を積み上げる長い間に、エンテイはセナ達を倒すのなどたやすいとでも言いたげな不敵で怪しい笑みをセナとホノオに交互に向け、ポプリとスザクとウォータはセナ達のもとへ駆け寄った。

「……何故だか、教えてやろうか？」

と言うのは、エンテイ――ではなく、ホノオだった。拳をかたく握りしめるあまり、小さく震えている。

「オレ達はな、騙されたんだよ！」

と言うと、エンテイの顔を思い切り殴りつけた。エンテイはさすがに顔をそむけるが、体はほとんど後退しない。ムキになったホノオは、今度はエンテイの顔を思い切り蹴り上げ、その後に何度も殴りつけた。

「オレは、お前は信じる。だから、ホウオウの言葉も信じた。でも、それは間違いだったみたいだな！　ホウオウは……アイツは、オレ達がピンチになるように誘導した。そうだろ！？　結局アイツも、オレ達を消したかったんだよっ！」

エンテイに攻撃しながら、ホノオは自分の考えを痛烈に吐き出す。全てを言い終わると、ホノオは息を切らしてエンテイを睨んだ。体力を気にせずに攻撃して叫んだせいで、ドッと疲れに襲われる。

（そんな……ホウオウが……？）

セナにはホノオの仮説は受け入れがたく、痛みに気を取られる中で必死にホウオウを弁護する仮説を考える。しかし、彼がそれを探し当てる前に――というかそんな間をほとんど与えずに――エンテイが深く息を吸って攻撃準備を開始した。

エンテイはホノオの攻撃を受けてもほぼ無傷。むしろ、ホノオは中途半端にエンテイの怒りに火をつけてしまったようだ。エンテイは自らの体から爆発的に火炎を出し、周囲を焼き尽くす。“噴煙”という技を炸裂させた。

日照りのせいで一段と熱く大きく燃え盛る火炎は、小さな5人の体を握りつぶすように襲いかかる。伝説のポケモンによる、激しい炎タイプの技。炎が消えた後、耐えきれなくなったポプリはぐったりとうつぶせに倒れた。

そんなポプリにさえも、エンテイは容赦しない。巨大な炎を操ってセナ達5人を締め付ける“炎の渦”で動きを封じると、強力な“神通力”で5人に激痛を与える。

「うわあああー！！」

もはや叫ぶ気力もないポプリを除く４人の叫びが、青空を不吉に切り裂いた――。

スキも考える暇も与えてくれないエンテイの攻撃から、５人は残酷な殺意を感じ取った。息絶える前に神通力から解放されたのはせめてもの救いなのだが、皆、それに安堵する余裕などなかった。

――次が、来る。

ポプリ、スザク、ウォータ。今までは必死に守ったおかげで大怪我をさせなくて済んでいたこの３人も、ついに虫の息。セナはそのことに大きな責任を感じて体を起こそうとするが、身を引き裂くような激痛がそれを邪魔する。これでは、いざという時に“守る”を使えない。

（オイラがホウオウを信じちゃったから、みんなも巻き込んじゃったのかな。それなのに、オイラはみんなを守れないのかな……。みんな、ごめん……）

気力を振り絞る余裕など、もはやセナに残されていない。ホウオウに関する疑いがさらに彼の心をかき乱し、追い打ちをかけた。

一方のホノオは、ふつふつと湧き上がる感情と向き合っていた。

（オレには、きっとあのエンテイにも勝る力がある。――破壊の焔が。それなのに、こんなところで死ぬのはごめんだ。……それに、エンテイの前であの力を使わないと決めたのは、“オレのため”）

ここでホノオは、力を振り絞って上体を起こし、苦しげに辺りを

見回す。
弱々しく呼吸を繰り返す仲間がいる。そして、体を強く光らせ、力を蓄えているような様子のエンテイが、かすむ視界を通して見えた。決断にかける時間はない。

（でも、オレのあの力を使えば、セナ達を守ることだってできるんだ……！　正体がばれるのは怖いけど……でも……でも！）

いよいよホノオは両足で地面を踏みつけた。するとすぐに、セナのバッグから水晶――ホーリークリスタが、ホノオの思いに引き寄せられるように飛んでくる。ホノオがそれに触れると、例によって酷かった体の傷が全快した。

ひとまず安堵をし、ホノオは落ち着いた眼差しをエンテイに向けた。が、すぐに目をそむける。
エンテイの体は黄金に輝き、眩しいほどの光でホノオの目を刺してきた。さらに、エンテイが何度も足踏みをするのに合わせて、地面がうごめく。直後、辺りの気温が今よりさらに、急激に上昇した。
嫌な予感に少々弱気になるホノオだが、水晶を強く握って気持ちを落ち着かせた。

（頑張れ……。みんなを守るためなら、オレは魔王の力でもなんでも使ってやる！）

強く念じると、ついにホノオの体が赤く輝いた。いつものようなどす黒い赤色ではなく、きれいなルビーのような赤色に。
そして直後、辺りを2つの光が支配した。

「“破壊の焔”！」

「“ゴールデンフレイム”！」

赤と金の光が、命を懸けて押し合う――。

第３８話：オレと焔と真実と――その１（後書き）

最近ポケモンの技についてよくご指摘をいただくみぞれ雪です。

まず、ポケモンの技の仕様は、しばしば意図的に効果を変えています。守るとか、ミラーコートとか。個人的には、ゲームに縛られすぎちゃうとポケモンが機械的になっちゃうと思ってやっているのですが、そういうのウザいと思う方にはこの小説は勧めません。

しかし、純粋なミスも多い。ポケモンの特性を忘れるし。

そして、いつもポケダンの公式ポケモン名鑑を見ながら書いているので、ポケモンの覚える技はそれに準じているのですが――それすら読み間違える始末。

こんないい加減な奴がポケモンの小説を書いていいのか、なんか不安になってきました。

第３８話：オレと焔と真実と――その２（前書き）

灼熱の火山に着いたはいいが、スイクンの居場所を教えてくれるはずのエンテイがオレ達を襲ってきた！
情け容赦のない攻撃に、オレ達はなすすべもなく、とうとうエンテイのとどめが迫った。
――ここは、オレのあの力を使ってでもみんなを守らないと。そう強く思ったら、怒ってもいないのに“破壊の焔”が使えたんだ。
みんなは、オレが守る！
（語り：ホノオ）

第３８話：オレと焔と真実と――その２

地面がうなり、小さな５人を揺さぶる。直後、地面から目を貫くような金色の光を放つ炎の塊が無数に飛び出し、セナ達に襲いかかろうとした。

破壊力の計り知れない、危険な攻撃。それを阻止しにかかるのはホノオだ。

彼が体に力を込めてみると、小さな体にまとう赤い光が強くなる。そして、利き手の左手を高々とあげると、無数の明るい炎が弾けてエンテイの金の炎に立ち向かった。

向かってくる金の炎は巨大。対するホノオの明るい炎も巨大。そんな攻撃があちらこちらでぶつかり弾け、辺りをすさまじい熱風が覆い尽くした。

ホノオが、弱り果てたセナ達を案じたその時だった。

「“守る”」

声が聞こえた直後、熱風が肌から切り離されるのを感じた。どうやら、セナの“守る”のシールドで、彼らは熱風の直撃を防げたようだ。ホノオが振り返ると、セナの笑顔が見える。

「頑張れ、ホノオ。オイラも、頑張る」

その声に背中を押され、ホノオは少し微笑んだ。そして、真剣な眼差しで金の炎をとらえ、自らが操る炎で狙い撃つ。

――エンテイの放つ炎の輝きは激しく、ホノオの目を鋭く突き刺す。反射的に目をそむけそうになったが、ホノオは自らの意志で体を支配した。

（どうせオレは、生きてちゃまずい存在なんだ。だったら、ここで目をつぶしたって構わない。そもそも、オレは、この技に命を懸けているんだ！）

強く心で叫ぶと、ついにホノオの攻撃がエンテイの攻撃を打ち破る。そして、真っ赤な炎がエンテイに降り注いだ――。

強力な光を直視したせいだろうか。ひと段落すると、ホノオは目の前が真っ暗に感じた。

「え、エンテイ……大丈夫かな？」

背後から、呼吸を乱したセナのつぶやきが聞こえる。すると、ホノオはハッとした。いくら怒りの感情を抱いていなかったとはいえ、エンテイが食らったのは命をも奪う“破壊の焔”。

――ひとつ、ホノオの中で疑問が渦巻く。そもそも、どうして怒り狂わずに、正常な心であの技が使えたのだろう。

「また……オレは殺しちゃったのかな……？」

恐怖がホノオの心を乱暴にわしづかみにし、強く揺さぶった。真っ暗な世界が、よけいに恐怖を引き立てる。――また、オレは殺してしまった。そして、生きている限り、きっとこれからも――

そんな考えが、セナの声でかき消される。

「いや、生きてる……。うわ、こっちに来るぞ！」

刹那、ホノオの気持ちは鬱から決意へと変わる。エンテイが再び襲ってくるのなら話は別。セナとポプリとスザクとウォータを守ら

なくては。
まだ目が見えない中、ホノオはエンテイの足音を聴こうと耳を澄ます。その直後。

「すまぬことをした……。そして、ありがとう」

ホノオが聞き取ったのは、低く落ち着いたエンテイの謝罪の声。
何事かと考える間もなく、ホノオの目が見えるようになった。

「うわあ！？」

目の前にいきなり大きな存在があるのに驚き、ホノオは思わずしりもちをつく。すると、背後から４つの笑い声――セナ達の体力も、全快しているようだった。
そして、先ほどまでは彼らの負担になっていた火山の異常な暑さも、ずいぶんと和らいでいた……。

「治癒能力。スイクンだけじゃなくて、エンテイにもあるんだ？」

自分達の怪我が消えた理由を悟ったセナは、エンテイに確認をする。ホノオは引き続きエンテイに対する警戒を続けたが、エンテイは先ほどよりもどこか穏やかな雰囲気をまとっていた。

「ああ。――侵略者からガイアを守り、傷ついた民を救う。それが、“わしら”が“生き返った”理由だからな」

こう答えるエンテイの言葉に、セナは心当たりがあるようだ。

（そっか。ホウオウは確か、オイラ以外にも生き返ったポケモンがいたと言った。きっとそれがエンテイで、多分スイクンもそうなんだろうな）

ここで、話の流れについていけなくなった――ついていこうとしない、アチャモのスザクがエンテイに問う。

「ところで、教えなさいよ。なんでウチらを襲ってきたわけ？　セナとホノオがいたから？」

ハッと表情を変えると、エンテイはうつむきながら言う。

「本当に済まなかった……。その理由についてなのだが、少々複雑な話になりそうだ。しかし、聞いてもらえないだろうか？　お前達にも、大きく関係があることかもしれぬ」

セナとホノオは目線を合わせる。そして頷くと、ホノオは警戒状態を解除してエンテイに疑いなき眼差しを向けた。

「ありがとう。では、話すぞ」

その声で、辺りに緊張感が漂う。ホノオがミズゴロウ――ウォータに目をやると、彼でさえも顔をひきつらせてかしこまっていた。ホノオはひと安心。

「わしとスイクンとライコウというポケモンは、同じ使命を持って生まれ変わった仲間だ。当時混乱していたガイアを救うために、先ほどの“治癒能力”や、仲間やホウオウ様といつでも意志疎通できるような“テレパシー能力”など、多くの力が与えられた。

しかし、少し前からそのテレパシー能力に異常が発生したのだ。
突然、スイクンと連絡が取れなくなってな」

「うーん、やっぱり。スイクンの身に何か異変が起こったのか」

エンテイの話と同じ内容を、ホウオウからも聞いていた。そんなセナが、納得してうなる。

「ああ。そして、異変はわしとライコウの身にも襲いかかった――」

エンテイは語る。

スイクンと連絡が取れなくなってから数日後のことだった。この“灼熱の火山”を拠点にガイアを見回るエンテイは、見回り途中にスイクンに会ったのだ。が、このスイクンの様子がおかしかった。

まず、身にまとう波動の奇妙さにエンテイは首を傾げた。確かにスイクンの波動も感じられたのだが、なにか邪悪な波動がそれを凌駕していた。

そして、スイクンの言葉もまた奇妙。突き刺すような眼差しで、エンテイに「お前にも、“協力者”になってもらおう」などと言い放ったのだ。

エンテイが危機感を抱いた直後、スイクンの瞳が血のような赤色に輝いた。そこから、エンテイの記憶が曖昧になっているという――。

「おそらくそこで、わしはスイクンに操られたのだろう。そして、お前達を襲ってしまった……」

申し訳なさそうにうつむくエンテイが気の毒に思えたチコリータのポプリは、

「エンテイさん、あなたは悪くないよ。だから落ち込まないで」

と、優しく声をかける。そしてエンテイが礼を言い顔を上げると、難しい顔をしたセナと目があった。

「そして今も、スイクンだけじゃなく、ライコウとも連絡が取れない。おそらくライコウも、わしと同じくスイクンに操られたのだろうな……」

エンテイが言うと、セナは頷く。

「そっか。ライコウも“協力者”になったって訳か。ところで、“協力者になる”ってのは“オイラ達を殺す”こと。つまり……？」

セナはそう言ってホノオを見、結論へと誘導する。

「ああ。そのスイクンは、“聖なる森”でオレ達を襲ってきた奴だ」

ホノオが断言すると、セナは頷いた。

「ふむ……。セナよ、他にも分かったことはあるか？」

エンテイは試すように言い、セナは少し考え込む。ホノオやポプリやウォータ、さらには普段無関心なスザクでさえ、共に頭をひねっている。

「ああ、気になることがあった。アンタを操ったスイクンからは、スイクンの波動と邪悪な波動……2つの波動が感じられたんだろう？　それってさ、つまり……ええと」

ここでセナは腕を組み、再び考え出した。何となく分かるのだが、どこかうまくつじつまが合わず……。

「うむ。セナ、もういいぞ。それに気がつけば上出来だ」

少々悔しそうなセナをエンテイが見ると、再び解説を始めた。

「わしやライコウは、スイクンに操られた。しかしおそらく、そのスイクンは、厳密に言うとスイクンではない」

納得の表情を見せるのはセナのみ。他の４人の頭は疑問符で埋め尽くされた。

「ここから先はわしの推測になるが、当たっている自信はある。スイクンの清き波動を凌駕する、邪悪な波動の持ち主。奴は、スイクンの身体を乗っ取り、直接操っていたと考えられる。その正体に、わしは察しがついたのだが……」

エンテイが期待を込めてセナを見るが、彼は今度こそ本当に答えを見つけられぬようだ。ならばもちろん、ホノオ達も。

しばらく待った後、エンテイは口を開く。

「よろしい。答えを教えよう。

スイクンの身体を乗っ取っているのは、ホウオウ様達が言うところの“破壊の魔王”で間違いないであろう」

「えっ！？」

エンテイの答えに衝撃を受けた５人の声が重なる。すると、エンテイは怪訝な顔をした。

「なんだ？　特にひねりもなく、普通に考えれば察しがつくことではないか」

「だ、だって……」

セナが慌てながら言い、ホノオをちらりと見る。対するホノオはセナとは逆に、落ち着いて何かを思案していた。そして、覚悟が決まったような表情をセナに見せると、ホノオは言う。

「セナ。オレ、言うよ。隠し事はもう辛くてね」

そして、ホノオはエンテイの顔を見上げる。

「なんだ？　どうしたというのだ？」

「いや……あのさ。その“破壊の魔王”ってのは、スイクンの所にゃいないんだよね」

「……どういうことだ？」

ライコウが首を傾げると、ホノオは自らを指差す。

「だって。破壊の魔王はここにいる」

「おっ、おいホノオ！！」

あれほど言うことに危機感を感じていたことを、ホノオは簡単に口にする。セナは驚いてとがめるような声を出したが、ホノオの睨みで黙りこくった。

「なぜ、そう思う？」

ホノオに向かって一歩踏み出すエンテイ。心なしが表情が険しくなったが、ホノオは物怖じしなかった。

「追っ手から逃げる旅の途中、オレはセナに酷い打撃を与えた。精神的にも、肉体的にも。そのせいで、セナは一度死んじまった」

「やめろホノオ……。もうその話を引きずるなよ」

悲しげなセナの言葉をかき消すように、ホノオは続ける。

「それにオレは、追っ手のポケモンを殺した。さっきの“破壊の焔”って技で、一瞬で。今ここにいるチコリータとアチャモとミズゴロウだって、一度オレに殺されかけたんだぜ」

「で、でも、元々はこっちが悪いんだし……」

申し訳なさそうなポプリの言葉も、ホノオはかき消した。

「使命を背負ったセナを殺し、自分を襲う奴の命も当然のように消しちまう。そんなオレこそ破壊の魔王だって、オレは思う」

「そうか……」

エンテイの言葉の直後、ホノオはエンテイの目の前まで歩み寄る。

「……ここまで話したからには、これ以上無駄に生きるつもりはないね。大人しくしてるから、とっとと殺してくれないか？」

「バカ！！」

セナは怒りを込めて怒鳴ると、エンテイとホノオの間に立つ。両手を広げてホノオを守る意志を見せた。

「あっ、おい、邪魔だ！」

「誰が邪魔だ、このバカ！」

と、ホノオとセナは互いにつかみかかり、口論を交えた喧嘩を始めた。

ポプリ達が焦って2人を止めようとする中、エンテイは冷静になって考え直す。

（先ほどのホノオの技、か。確か、“ホーリークリスタ”に触れた後に傷が全快し、赤いオーラをまとい……。

――む？　ホーリークリスタ？）

何かを悟ったエンテイは、急いでセナとホノオに話しかける。喧嘩は力の強いホノオが優勢で、ホノオがセナを押さえつけていた。

「そうか……。気の毒だな」

「……へ？」

ポツリと漏らす、エンテイの一言。心当たりのない哀れみの言葉に、ホノオは首を傾げた。エンテイは、そんなホノオを見て続ける。またも、ホノオにとっては謎めいた一言だった。

「すまんがちょっと、ホーリークリスタを見せてくれぬか？」

第３８話：オレと焔と真実と――その２（後書き）

エンテイの技“ゴールデンフレイム”は、一応スイクンで言う“クリスタルストーム”なのですが、少々地味になっちゃいましたね（＾―＾；）

さて、２０１１年７月２６日、この絆の冒険記も２周年を迎えました。今まで読んで下さった読者様、本当にありがとうございます。そして、これからもよろしくお願い致します。

最後に宣伝（？）をさせてください（笑）。この小説の設定集“キズナの救助隊レポート”にて、ただ今企画実施中です。今後の展開の参考にさせて頂こうとも思っておりますので、ぜひお気軽にご参加ください。

第３８話：オレと焔と真実と――その３（前書き）

ホノオは“破壊の焔”を使って、オイラ達を助けてくれた。そして、エンテイも正気にもどったんだ。

エンテイから聞かされた話は、どれも重要。何者かに体を乗っ取られたスイクンが、エンテイを操ったらしい。スイクンを操るのは、何者だ？

……そんなことより。ホノオがエンテイに、自分の正体を明かしやがった。するとエンテイは、ホーリークリスタを見せるように言ってきた。

ホーリークリスタ……何に使うんだろう？

（語り：セナ）

第３８話：オレと焔と真実と――その３

「え……？」

ホーリークリスタを見せろ。エンテイのその欲求に、ホノオは戸惑いつつも地面に落ちた水晶を拾い上げた。そして、エンテイの目の前に差し出す。

「これは……！」

と言うと、エンテイは顔をしかめる。そして、おずおずと水晶に触れた。

「……なに？　どしたの？」

ぎこちなく言うホノオの言葉に、エンテイはすぐには答えない。ホノオとセナは、目を合わせて不安げな表情を交わした。

「そうか……。そういう仕組みだったのか……」

納得したように頷き、エンテイはセナとホノオを見る。そして、ゆっくりと口を開いた。

「この水晶は、スイクンとホウオウ様が、力を合わせて作ったもの。スイクンの清らかな力を、セナに分け与えるためのもの。……だからだろう。この水晶から、スイクンの波動だけでなく、スイクンを操っている者と同じ邪悪な波動を感じるのだ」

「え……？」

５つの首が傾いたのを確認すると、エンテイは静かに語りだした。

「本来この水晶には、スイクンの力がほんの少し宿っている。だから、セナがピンチに陥った時には、この水晶が力を貸すことができる。そういう仕組みだ。……だがしかし、今のスイクンの本体は、邪悪な“破壊の魔王”に乗っ取られている。そしておそらく、“奴”はスイクンを操って、この水晶にも細工をしたようだな。分かりやすく言うと……奴は、この水晶の性質を変えてしまった」

「……」

セナとホノオを中心に、５人はただただエンテイをまっすぐに見つめ、じっと続きを待つ。

「今ならわしにも、ホウオウ様のお声が聞こえる……」

こう言うと、エンテイはじっと目をつむる。そして、しばらくの沈黙。耐えきれなくなったスザクが一言言おうとする直前に、エンテイは話を続けた。

「なるほど……。性質の変わった水晶は、お前達に多くの災いをもたらしたようだな。セナ」

「な、何？」

急に名を呼ばれると、セナはびくりと反応する。

「お前は一度死んだ。そのことに、疑問を感じたことはないか？」

「うーん。今までとくには感じなかったけど、こうして言われてみると、確かに……。水晶はオイラのピンチを3回救ってくれるはずなのに……まだ1回しか力を使っていないはずなのに、どうしてあの時、水晶はオイラを助けてくれなかったんだろう？」

セナが言うと、エンテイは頷いた。

「よく気が付いた。……それはおそらく、奴の力で水晶のメリットが抑えられていたからだ。……さらに言うと、今の水晶には、お前とホノオの感情を察知して奴に伝えるはたらきすらあるようだ。それで奴は、お前たちの様子を探っていた」

「は……ははっ、なるほどね……」

皮肉な笑みを浮かべると、セナは手を固く握り、怒りで震える声を漏らす。

「じゃあ今の水晶には、オイラ達を助けてくれる気なんて一切なくて……。それどころか、オイラ達の悲しみや苦しみを敵に伝える……敵がオイラ達を嘲笑うための道具になっているってわけね」

「セナ……？」

ウォータが心配そうにセナの顔を覗き込むと、彼はやり場のない怒りを涙に変えていた。

「悔しい……。すごく、悔しい。……オイラ達、すごく辛い思いもしたけど、それを何度も乗り越えて今ここにいる。生き返ってからのオイラは、いつだってそれを誇りに思っていたさ。それなのに……。そんなオイラ達の苦労は、いつだって敵に筒抜けで……それっ

て、苦しむオイラ達を見て、喜ぶ誰かがいたってことだろ？　誇りに思ってた旅路が、どこかの誰かさんにとっては滑稽なお楽しみだったなんて……」

自分たちの苦労をリアルタイムで喜ぶ者の存在を知ると、何もかもがバカバカしくなった。そんなセナは、吐き捨てるように思いを述べる。

「……確かにさ」

セナの言葉に、ホノオが静かに続く。

「確かに、オレも悔しい。遠くからオレ達の感情を盗み見た奴は、スイクンを操る奴。オレ達の困難を喜ぶのは間違いない。そう思うと、今すぐにそのツラを殴りたくなるね。……セナ。お前が、オレなんかよりもプライドが高いのはよく知ってるさ。だからなおさら辛いだろうけど……でもさ」

と言うと、ホノオはニッと笑う。

「だったら仕返しをすりゃいい話さ。これからは奴に、オレ達の喜びや楽しみを精いっぱいに伝えてやろうぜ！　現に何度も、無意識的に、オレ達はそうしてきたはずさ。さぞかし不愉快だっただろうな。ハハハ、いい気味だ！」

うつむいていたセナは、ここでホノオの顔を見る。笑顔につられて、自然と表情が柔らかくなっていった。

「これは、本当はこれからの話の中で言うつもりだったのだが……」

エンテイはそう言うと、ホノオに向かって一歩踏み出す。そして、暖かくほほ笑んだ。

「お前のその前向きさは、強力な呪いにさえ打ち勝つ、お前の大きな武器だ。いつまでも忘れるんじゃないぞ」

「……の、呪い！？」

不気味な言葉に、ホノオだけでなくセナ達も驚いた様子を見せた。

「ああ。奴が性質を変えたこの水晶が、ホノオを強く苦しめた呪いのことだ。心当たりはあるか？」

ここでホノオは、察しがついた。自分が強く苦しんだことと言えば――。

だが確信が持てず、“予想”が外れていた時の絶望感を恐れ、発言をためらっていた。それを察して、エンテイは話を始める。

「ホノオ。思い出させるようで申し訳ないが、お前が初めて“破壊の焔”を使ったとき、強い憎しみを抱いたはずだ」

「っ……！　う、うん……」

心の奥に沈めておいたおぞましい記憶が鮮明に浮かび上がり、ホノオは小さく体を震わせる。

「当然その時、お前の憎しみが奴にも伝わった。奴はそれを餌にしたわけだ」

その時のことを想像してみると、ホノオは凍りつく。恐怖を抱く

彼に気が付くと、今度はセナが彼を支えるように彼の肩に手を置いた。

「水晶が不気味に輝いた時、あの水晶には奴の――破壊の魔王の力が満たされていた。そして、それを手にしてしまったお前の憎しみと奴の力の波長が合ってしまい、奴の破壊の力が乗り移り……。そして、あの事件のせいで、お前は癒えない苦しみや、自らへの恐怖……今の年齢のお前が抱えるには深刻すぎる問題を、抱え込む運命になってしまったのだ……。これは恐ろしい呪いだ。本当に、気の毒なことだ」

ここでようやく、少し前にエンテイが言った同情の言葉の意味を理解する。そして、エンテイの今の説明を何度も頭の中で繰り返していくうちに、ホノオの心に熱い気持ちがこみ上げてきた。

「そっか……じゃあ、オレは……オレは……」

言いたい言葉があふれてきて、うまく言えない。とうとう、言葉よりも先に大粒の涙があふれてきた。

「よかったな」

セナがホノオの肩を優しく叩き、ほほ笑んで言う。

「あの恐ろしい力は、お前のものじゃなかった。だから、お前は“破壊の魔王”なんかじゃない」

「うん……うん！」

かっこ悪いとは思ったが、気持ちを抑えきれなくなった。ホノオ

はセナに思い切り抱きつくと、腹部――甲羅に顔をうずめて泣き出した。

「オレは……生きていても、よかったんだ……。この、世界を、壊すのは……オレ、じゃ、なかったんだ……。よかった……。本当に、よかった……」

明るく振舞っていたとはいえ、いつも心の奥底では自分が生きていていいのかと問い続けていた。そのたびに恐怖と罪悪感を抱き、それらを隠すためにさらに自分を追い詰めた。

もちろん、自らの手で命を奪った体験は忘れようのない傷になるが、彼は今まで抱えていた悩みが晴れると、久々に自分を心から肯定できた。それが本当に嬉しくて……。

「よかったね、ホノオくん……」

「オラも、嬉しいだよ……」

ホノオに一歩歩み寄り、ポプリとウォータも涙ぐむ。その様子を見ていると、スザクも不思議な感情を抱いた。

（おかしい……。ウチは、ポプリとウォータについていくために、仕方なくセナやホノオとも旅をしているだけのはずなのに。こいつらのせいで何度も危険な目にあって、大嫌いなはずなのに……）

何度もそう言い聞かせてみるが、何故か視界の潤みが止まらない。

（どうして……？）

とうとう涙がスザクの頬を滑り落ちると、彼女は慌ててホノオ達に背を向けた。彼女の涙をそっと見届けたエンテイは、ホノオにさ

らに言葉をかける。

「あんな体験をした少年は、普通だったらもっと早くに苦痛に耐えきれなくなり、壊れているだろう。お前のような奴は、本当に珍しいぞ。どこまでも困難に付き合ってくれる友達に助けられ、落ち込む気持ちを何度も軌道修正し……。ついには呪いに打ち勝ち、自らの意思で破壊の焔を操った。

そんな自分を、誇りに思え」

エンテイの言葉に、ホノオは震えているがどこか力強い声で返事をする。セナに抱きつく力も強くなった。

（あれ、おかしいな……。オイラは泣かないで、もっとかっこよくホノオに言葉をかけるつもりだったのに……）

エンテイに自らも褒められると、いよいよホノオの抱えていた問題を鮮明に思い出したセナ。

セナが生き返ってから、ホノオはどこか悩みを抱えている様子があった。それを、覚えたての作り笑いで懸命に隠していた。

ポプリ達に出会ったとき、とうとうホノオの秘密をセナも知った。自らを破壊の魔王だと思い込んでいた彼は、セナとの別れを決意し……。その時にセナは、ホノオに「オレを殺せ」と指示された。首を振ると、徹底的に攻撃された。今思うと、あれもホノオなりの思いやりだったのだ。

その後は、ホノオは悩みを抱えるたびに、それをセナに打ち明けた。ホノオに頼られていることが、セナにとっては本当に嬉しくて……。

たどってきた道筋を思い出すと、気持ちを抑えきれなくなった。

「お前さ……。今まで、本当によく耐えたな。強く、なったな……。偉いよ」

ホノオの背中をそっとさすりながら、セナはホノオに声をかける。涙をごまかすのは諦め、乾ききった地面を濡らす。

「……お前の、おかげさ。今まで、迷惑ばっかりかけたけど、お前はオレをずっと……ずっと、支えてくれた。ありがとう、じゃ、足りないけど……ありがとう」

彼らの強い喜びは、ホーリークリスタに乗って、敵――破壊の魔王にも感知された。

ホノオが“仕返し”という言い回しを使ったように、彼らの大きな喜びは確実に敵に不快感を与えた。

憎しみが、またさらに強化される――。

第３８話：オレと焔と真実と――その３（後書き）

悔しさを露わにするセナって、けっこう珍しいかもしれません↑
お察しの方もいらっしゃったかとは思いますが、ホノオ黒幕説はとりあえず否定されましたね。

さて、ここで１つご報告。今までの前書きを編集し終わり、全てをキャラの語りに変えました！　作業が遅くて申し訳ない。

第３９話：雷鳴の山――その１（前書き）

エンテイが教えてくれた。オレの“あの力”は、オレ自身の物じゃなくて――つまりオレは、ガイアを壊す人間じゃなかったんだ！

――あれ？　他にも色々と教えてもらったんだけど、なんだったっけな？　……えへへへ、嬉しすぎて忘れちまった。

とにかく、よかった。セナ。今まで支えてくれて、ありがとうな。

（語り：ホノオ）

第３９話：雷鳴の山――その１

セナ達がエンテイにより数々の真実を教えられている時のこと。この日、なんとかマスターランクの救助隊ＴＫＧから逃れることができたヴァイス達は、引き続き“雷鳴の山”へと向かっていた。

「いやぁ、本当にすごかったなぁ。ネロさん」

と、ＴＫＧとの戦いを思い出して言うのは、ハスブレロのブレロだ。

「うんうん。マスターランクの救助隊を簡単にやっつけちゃうんだもん！　今後、どんなに強い敵に襲われても、ネロさんがいればきっと大丈夫だって……おれっち、そう思っちゃった」

調子よく続けるのは、ブルーのブルル。そんなのん気な２人の言葉を聞くと、ネロは難しい顔でうつむいた。そして、ポロリと言葉を漏らす。

「いや。駄目だ」

短い言葉ではあるが、その低い声がみんなの注目を集める。

「動きにスキがあったようだな。あれは俺のミスだ」

彼の瞳に悔しげな色が宿る。ゲンガーやカメックスの反撃を思い出しているようだ。

「どうしてアンタ、そんなに強さにこだわるんだい？」

メルがネロの目を見ながら問いかけるが、2人の視線はあわなかった。

「悪いか」

ネロが問いかけるが、短い言葉にどこかとてつもない重みを感じ、メルは言葉を返せなかった。気まずい沈黙を、ネロは自分で破る。

「自分の身は自分で守りたいんだよ」

その言葉をきっかけに、今まで悶々と抱えていた悩みの正体が見え始めたヴァイス。視線を下げて、考え込んだ。

（自分の身は自分で守る……か。ボクだって、できることならそうしたいよ。セナとホノオを探すことが旅の目的なのに――これはキズナの問題なのに。ネロさんやおねえちゃんに頼ってばっかりだなぁ。情けないや）

ついつい、ため息を1つ。それに気がついたアルルは、思い出したようにヴァイスに礼を言う。

「ヴァイスさん、さっきはありがとうね。ゲンガーさんの攻撃から守ってくれて」

「あっ、うん」

そうか。ボクは、ちゃんと誰かを守っていたではないか。――でも。

ネロやメルの活躍が、ヴァイスにはとてもまぶしかった。そして、

彼らと自分の活躍を比べてみると――やっぱり、弱い自分が情けなくなったのだ。

彼は切実に願う。もっと強くなりたいと。

こうして、ネロもヴァイスもどこか不満を抱えたまま、一同は雷鳴の山にたどり着いた。この時は、予想もしていなかった。まさか、今日再び強敵に襲われるなんて。

「うわぉ、すごく乾燥してんな、この山。体に静電気がたまって気持ちいいぜ～♪」

ゴツゴツとした地面を歩きながら、うんと伸びをしてソプラが言う。電気タイプの彼女にとって、体に電気がたまりやすい環境は快適なようだ。アルルも、ソプラと目を合わせてほほえんでいる。

「えーっ、シアンは静電気はキライだヨ～！　バチってなるんだモン。痛いヨ！」

「静電気好きとは、またモノズキだね。さすがは電気タイプ」

みんなを代表して反論するのはシアンとブルル。シアンは純粋な水タイプなので電気に弱く、ひときわ嫌そうな顔をしている。

「むっ、失礼な奴。食らえ、静電気アタック！」

頬を膨らませて言うと、ソプラはシアンとブルルの体に手をふれる。ソプラが帯びていた電気が、シアンとブルルに飛びかかった。

「キャア！！」
「いたっ！？」

バチッと音がなった直後、シアンとブルルが飛び上がる。

「へへへっ。静電気の強さを思い知ったか！」

と満足げに言うソプラに、

「いや、ソプラ。シアンさん達は、静電気が痛いから嫌いなんだよね。強くちゃダメだよ」

と、アルルが控えめに突っ込む。
あ、そうかと頭をかくソプラを、メルが元気に笑い飛ばした。

そんな空気に気分的に乗れなかったヴァイスが、ここで何者かの気配――と言うより殺気――に気が付く。

「みんな、気を付けて」

「えっ」

ヴァイスの言葉に声を上げるのは、シアンやソプラ達。ネロはとっくにその殺気に気が付いていたようで、対して慌てる様子はなかった。メルはヴァイスの警告を聞くと、気を張って“守る”の準備をする。

刹那、銀色の光が轟音と共に空気を切り裂き、微塵の迷いもなくヴァイス達に向かってきた。

「“守る”！」

とっさにメルがシールドを張ってみんなを守った。が、これで安心とは言えなかった。

「う……。まずい」

とメル。次第にシールドが薄くなり、強力な光線に押されていった。ここで、

「“守る”」

もう一つの低い声が聞こえると、新たな強いシールドがヴァイス達をすっぽりと覆った。

シールドと銀の光線。しばらく押し合うが、やがて銀色がしぼみ始めた。

「アンタ、守るなんて使えたのかい？」

安全を確認すると、メルがネロに質問する。

「ああ。お前のを見て覚えた」

とネロ。どうやら彼は、メルの守るを見てからのかなり短い期間で守るをものにしたようだ。

「やっぱりすごいや、ネロさん……」

ブレロが再びネロをたたえる。しかしネロは、照れた様子もなく首を横に振った。

どういうわけか、ヴァイスの中のモヤモヤがいっそう強くなった。

（やっぱりネロさんは強いや。……でも、ボクだって、ネロさんと同じくらい強くなりたい。ならなければならない）

ヴァイスの心に吹く強烈な追い風が彼を無性に焦らせる。

そして、彼はある決断をした。

「“シルバーラディウス”……。防がれたのだね」

という言葉と共に、1匹のポケモンが近づいてきた。――“シルバーラディウス”というのは、おそらく先ほどの銀色の光線の名前だろう。

虎をモチーフとしたような容姿に、雨雲のような髭と体毛。勇ましいそのポケモンに、メルは覚えがあった。

「アタイ知ってる。このポケモン……スイクンの仲間のライコウだよ」

「スイクンの、仲間……」

たちまち、重苦しい空気が場を支配した。

「ねえ。あなたはボク達の敵？」

と、ヴァイスが恐る恐る問いかける。

「ああ、そうなるね」

ライコウは、唸るような低い声でそう答えた。

その返答を聞いて、相手の出方次第では攻撃できるように準備を始めたネロ。しかし、その準備は意外な人物によって壊される。

「じゃあ……ボクが倒す！」

決意を込めたつもりの言葉だった。威勢良く言ったつもりだった。しかし、声は頼りなく震え――でも、引き返せなかった。

ヴァイスは地面を思い切り蹴り、ライコウを睨みつけながらそちらに迫る。そして、熱く炎を宿した拳を思い切り構えた。

「“炎のパンチ”！」

燃える右手でライコウを殴り飛ばそうとしたヴァイス。しかし、ライコウはびくともしない。ヴァイスに押される様子もなければ、炎を熱がる素振りも見せないのだ。

「ヴァイス！　なにやってるノ！？」

攻撃が失敗した後も、ムキになってライコウに拳を押し当てる。そんなヴァイスにシアンが疑問をぶつけた。が、ヴァイスの行動は変わらない。答えもしない。

ヴァイスの予想外の行動に対して、仲間達は対応に困っているようだ。ただ1人、ネロは落ち着いてこの状況を見ていた。

「なっ、なんで効かないの……！？」

納得のいかない様子で、ヴァイスはさらにライコウに強く体重を

かける。そんな彼を、ライコウはあざ笑うように眺めた。
そして。力の差を思い知らせるように、ライコウは全身に強力な電流を走らせる。拳を押し当てていたヴァイスに、その電流が襲いかかった。

「うわあああぁ！！」

ヴァイスの全身に痛みが走り、ビクッと激しく痙攣（けいれん）する。悲鳴を上げながらも意地になってライコウに体重をかけ続けたヴァイスだが、とうとうダメージに耐えきれずに倒れた。

そんな彼の横から、ふと声が聞こえる。足音も立てずに近寄ってきた声の主に、ヴァイスはびくりと驚いた。

「分かったか？　弱い者は強い者には勝てない」

冷酷な宣言が、ヴァイスの心に火を付けた。腕に力を込めて、ヴァイスはふらりと立ち上がる。

「うるさいな……。何さ、自分がすごく強いからって！　ボクだって強いんだぞ！」

言い放った直後、ヴァイスはネロに“炎の渦”を放つ。

「！」

まさか味方に攻撃されるとは思わず、さすがのネロも油断していたようだ。炎はネロにまとわりつき、きつく体を締め上げた。

「こら、ヴァイス！」

「やめてよ、ヴァイスさん！」

メルとアルルが声を上げると、仲間達が一斉にヴァイスを止めにかかる。

しかし、今のヴァイスは彼らを“仲間”と認識できなかった。赤いバッグに手を突っ込み、紫色の球を取り出す。そして、向かってくる“仲間”めがけて投げつけた。

紫色の球は宙で弾け、キラキラと光る粉がシアン達に降りかかる。すると……

「なんだか、眠いヨ……」

シアンが言うと、メルもソプラもアルルもブレロもブルルも、同意するように大きなあくび。すぐにまぶたが重くなり、地面に崩れるように倒れて眠りについた。――ヴァイスはアイテム“バクスイ玉”で、彼らを眠らせたのだった。

これで、戦えるのはヴァイスのみ。余裕の眼差しでこちらを見つめるライコウに、ヴァイスは再び向かっていった。

ネロの制止の声も――彼の珍しい叫び声も、ヴァイスには届かなかった。

「“炎の渦”！」

ヴァイスはライコウも炎で拘束しようとする。しかし、敵の大きな図体は予想を遙かに越えて素早く、軽々と攻撃をよけられた。その直後、ライコウは光のような速さでヴァイスに迫り、電気をまとった体で猛突進を仕掛けた。

「“スパーク”！」

「うっ……！」

ヴァイスの小さな体は勢いよく弾き飛ばされるが、ライコウは吹っ飛んでゆくヴァイスにすぐに追いついた。そして、鋭い牙で宙を飛ぶヴァイスを捕らえる。

ヴァイスが悲鳴を上げる前に、もう次の攻撃が仕掛けられた。ライコウは地面にヴァイスを叩きつけると、空に向かって雄叫びをあげる。すると、不気味なほどに黒い雲が出現し、小さなヴァイスを正確に狙って雷を落とした。

雷がピシャリと地面を叩くと、たちまち大地が激しく震え、鋭い光が空気を貫く。ヴァイスの悲鳴など、容易くかき消された。

（くっ……まずい）

光に目を細めながら、体の自由を奪う炎を恨めしく睨むネロ。ライコウが放つ殺気を正確に感じとった。

（あいつ、殺る気だ）

何とかしてヴァイスを助けようともがく彼だが、炎に縛られてからまだ間もなく、締め付けの勢いに負けてしまう。自分が“高速スピン”などの脱出技を持ち合わせていないことを、ネロは恨んだ。

ヴァイスのように口から出せる技も持っていないし、そもそもライコウはすでに技の射程距離の外にでてしまっている。

――また、何もできない。

ネロは悔しさを噛み潰すように歯を食いしばった。

ライコウの雷が拡散すると、ボロボロに焼け焦げたヴァイスが必死に呼吸を繰り返していた。全身が麻痺し、痛みすらも感じられなくなった。が、体を染める見慣れぬ赤色が彼に危機感を与えた。

（あぁ……。死んじゃうんだな、ボク）

もうろうとする意識の中で、ヴァイスは考える。

（誰も守れないで、自分すら守れないで死んじゃうんだね……）

ここで浮かぶのは、事件の始まりの日――スイクンに2度目に襲われた日の夜の、セナの悲しげな顔。自分1人ではヴァイス達を守れないと、罪悪感に苦しむ顔。

今になって、ヴァイスは気がつく。あの時セナを励ました自分は、セナの気持ちなんてちっとも分かっていなかったのだと。

（セナ。ごめんね……。誰かを守れないって――強くなれないって、悲しいことなんだね）

とうとうライコウがとどめを刺しにかかる。立派な牙に鋭利な電流を蓄えて、ヴァイスの首筋を睨みつけた。

（ネロさん、お姉ちゃん、お父さん……。悪い子で、ごめんなさい）

ここで、ヴァイスの意識は消え入るように途切れた。

ライコウの牙が迫る。

第３９話：雷鳴の山――その１（後書き）

ライコウの技“シルバーラディウス”。ラディウスは、ラテン語で“光線”って意味です。
スイクンの“クリスタルストーム”やエンテイの“ゴールデンフレイム”もそうなのですが、彼ら3犬（↑）に金、銀、クリスタルにちなんだ技を使わせたかったために生まれたオリ技です。

さて。みぞれ雪お得意の「とりあえずピンチにして切っちゃおう」が出ました↑
たいていこういう話の次話は行き当たりばったりで書いているのですが、今回はちゃんと考えてるので大丈夫。なんとかなります（、・・ω・´）↑

第３９話：雷鳴の山――その２（前書き）

弱い自分が悔しくて、ボクは１人でライコウに立ち向かった。
――けど、さっそく大ピンチ！
（語り：ヴァイス）

第３９話：雷鳴の山――その２

ライコウにとどめを刺されそうになる上に、助けてくれる者は誰もいない――自ら助けを断ち切ってしまった。そんなヴァイスをただただ見ているネロは、“その光景”を目にした。

ライコウの牙がヴァイスののどに風穴を開ける前か後か――それすらも分からないタイミングで、ヴァイスの体が強く光り輝いたのだ。

「！？」

ネロも、そしてライコウでさえも、光に耐えきれずに目をそむける。

やがて光も収まったころに再びヴァイスを見てみると、なんと、あれほどの傷が治っていたのだ。

「おい」

ネロは光を直視してくらくらしているライコウよりも早くヴァイスに近づくと、ヴァイスを抱き起す。

「……あ、ネロさん……ごめんなさい」

ネロの顔を見るなり、ヴァイスは安堵すると同時に素直な気持ちになり、涙を浮かべてネロに謝った。

「いい。俺も悪かった」

そっけなくそれだけを言うと、ヴァイスを立ち上がらせて後ろを向くネロ。視界に、目を覚ました仲間たちを捕えた。どうやら、強い光で目が覚めたらしい。

「ヴァイス！」

怒りを含んだ声が何重にもなって名を呼んだ。小さくなるヴァイスの目を睨み、シアンが言う。

「ヴァイスのバカ！　なんでシアン達に頼らないで、独りで戦おうとするのサ！？」

「だって……」

こみ上げる後悔が、ヴァイスのしゃべりを邪魔する。目を潤(うる)ませるだけのヴァイスは、それ以上の言葉を言わなかった。

「ヴァイス」

ここで、メルの穏やかな声が飛ぶ。ヴァイスの視線が上がった。

「ごめんね」

意外なメルの一言に、皆の視線が集中した。

「アンタの責任感を、アタイがもっと買ってやるべきだった。アンタが始めた旅なのに、気がつけばアタイやネロばっかり戦闘で活躍しちゃって……。悔しかったんだね」

メルは、ヴァイスの頭にポンと手を乗せた。

「年上なのに、大人気なかったねぇ、アタイ。アンタにあんなに危険なことをさせちゃって……」

メルの目が潤むのを、声を聞いて確認できた。ソプラとアルルが、ブレロとブルルが、不安げに顔を見合わせる。

「お姉ちゃん失格だよ……。ごめんね、ヴァイス」

メルがヴァイスに抱きつくのを、らしくもなく泣き出すのを、ネロはじっと見つめていた。

ある程度の“物理的な”強さがなければ、自分以外の者を守れない。しかし、度重なる保護は、対象を劣等感や無力感で蝕む場合もあり――。そんな難しさを噛み締めながら。

「そっ、そんな。お姉ちゃんは悪くないよ。……泣かないで。ね？」

戸惑い、オロオロと話しかけるヴァイス。他の面々もメルにうまく話しかけられず、気まずい雰囲気がその場に漂った。

そんな時だった。雷鳴のような低い雄叫びが上がり、その場の空気を激しく揺さぶる。――怯んでいたライコウが、立ち直ったのだ。

「げっ、まずい！」

長い耳をピンと立てて声をあげたのはソプラだ。ライコウが一歩一歩、彼らを追いつめるように迫ってきたのだ。

いつもはここで手を打つネロに、先ほど生じた迷いが重くのしかかる。

（どうすればいい……。ヴァイスを守るために、俺は、どうすれば……）

じわりじわりと迫るライコウをただ睨みながら、ネロは頭を働かせる。

そして、ようやく結論が出た。誰も傷つかずに助かるには、この場から逃げるのが良いだろう、と。

彼がその実行を試みた、その時だった。先ほどヴァイスが発したような――しかし、守護ではなく破壊のための――強い光が、ライコウを貫いたのだ。一瞬の後に、轟音が辺りに響く。

「破壊、光線……」

ネロの低い呟きはかき消され、誰の耳にも届かなかった。だがしかし、発言は正解。ライコウを襲ったのは、“破壊光線”だった。

「みんな！」

破壊光線の音が遠のくと、ヴァイスにとって聞き覚えのある声が聞こえた。声を張り上げているものの、優しさを失わない――そんな懐かしい声。

「……お、お父さん？」

そっとヴァイスが顔を上げると、声の主を視界にとらえた。オレンジ色の体に立派な翼、炎のともったしっぽ……。

「ここは、我々ＦＬＢにまかせてくれ」

惜しくも予想は外れたが、ヴァイスは妙な安心感を覚えた。かつて昇格試験の時に世話になったマスターランクの救助隊ＦＬＢ。そのチームのリザードンの優しい笑みが、本能的に安心を誘うものだったから。

リザードンは言うと、ヴァイス達８人をかばうようにしてライコウを見る。幸い、まだ破壊光線――ＦＬＢのフーディンとバンギラスによる――によって怯んでいるようだった。それを確認してから、リザードンはライコウに向かう。

「うわぁ、あれが有名な救助隊“ＦＬＢ”かぁ」

「すごいね」

ブレロとブルルが呟くと、皆も同意するように頷いた。

決着はあっという間だった。破壊光線を使用した反動で疲れがたまったフーディンとバンギラスの代わりに、今度はリザードンが攻撃にうつる。彼が口を大きく開けて放った炎は、ライコウを包み込んだとたんに激しい爆発を起こした。遠く離れたヴァイス達にも、強い熱が伝わってくる。

「これ……」

と、ジワリと熱を感じる頬を押さえつつ、ヴァイスが小さな声で呟いた。

「お父さんの得意技とおんなじだ。“ブラストバーン”……」

その声は、もちろん爆発音にかき消された。

さすがにライコウの命を奪うつもりはないため、リザードンは少々の手加減をしたようだ。炎は比較的早く消え、全身にやけどを負ったライコウが気絶していた。

「ホント、どうなることかと思っちゃった。助けてくれてありがとうネ！」

ＦＬＢに頭を下げて言うのはシアンだ。

――ライコウがしばらく動きそうにないことを確認した後、ヴァイス達とＦＬＢの会話が始まる。

「いやいや、いいんだよ」

と、ヴァイスが思わずドキリとするような笑顔を向けて、リザードンはそう答えた。

ここでバンギラスがうなると、ＦＬＢの３人は難しい顔つきになる。

「しかし、どうしてライコウはお前達を……」

それは、ヴァイス達も気になっていた。いきなり襲われて対応に必死だったが、冷静に考えると謎の深まる行為だ。

「そういえば今日、ライコウに襲われる前にも襲われたんだ、アタイ達。“ＴＫＧ”とかいう、マスターランクの救助隊に。……何か関係はないかな？」

すっかりいつもの冷静さを取り戻したメルが言うと、一同はハッと目線を上げた。

「そういえばそうだ……！　あの時は、たしかにアタシ達を狙って……」

ソプラが言うと、アルルがサッと青ざめた。ＴＫＧの言ったことが、脳裏に不吉に響いたからだ。

「し、しかもさ……。あの救助隊の皆さんは言ってたよね。セナさんとホノオさんに関わるボク達も、みんな殺すことになったって」

「それって、まさか……！？」

アルルの言葉に、ブレロとブルルは声を上げた。まさか――ＦＬＢもＴＫＧの仲間で、自分たちを殺そうとしているのではないか？

そんな考えが、彼らの中に浮かんだのだ。

とっさにネロが身構え、ＦＬＢの動きに注意を注いだ。

そんな彼らに、ＦＬＢの３人は苦笑いを浮かべた。

「ハハハ。まさか。わしらはお前達は殺さないよ」

「セナとホノオを狙うだけでも、すごく精神的に痛いものな。そうむやみに犠牲者は出さない」

と、フーディンとバンギラス。

「なあんだ、よかった」

「あなた達みたいなポケモンなら、マスターランクに値するんだけどねぇ」

ブレロは安堵のため息をつき、ブルルは遠まわしにＴＫＧを皮肉った。

――しかし、ヴァイスはのんきに安心してはいられなかった。

（バンギラスさんの言葉って、よくよく考えるとこういうことだよね。――ＦＬＢは、セナとホノオのことは狙っているんだ）

そう考えると、早くセナ達を見つけて力になりたいという思いが強くなる。しかし、いつも誰かに守られてばかりの自分が役に立てるのか。不安は募る。

（ネロさんやお姉ちゃんには助けられてばかりだし、それに、さっきの光は……？）

思えば、かつて濁流に流された時も、自分たちは不思議な生還を果たした。先ほどの光は、絶体絶命のヴァイスを救ってくれた。

これらの不思議な現象に、なにか共通点はないのか？

（不思議と言えば……。ボクが今日聞いた、お父さんの声。あれはなんだったんだろう？）

ヴァイスの考察はまだまだ続く。

（お父さんの声が聞こえたと思ったら、今日はＦＬＢのリザードンさんが助けてくれて。もしかして、リザードンは――。いや……でも……。ＴＫＧに襲われたときは助けてくれなかったし。そもそも、もしそうだとしたら、どうしてボクに言ってくれないのさ）

などと難しく考えていると、自然と表情が暗くなる。

シアンがくだらない話をし、ＦＬＢのメンバーはシアンを暖かな眼差しでみている。が、アルルやブレロ、ブルルは苦笑い。ソプラに至っては、明らかに興味のなさそうな眼差しをシアンに向けている。

そんな流れにとけ込めていないヴァイスに、メルは気がついた。

「ヴァイス、どうしたんだい？　そんな暗い顔をして」

メルは小声で話しかけたつもりだったが、芯のある声質が災いした。こっそりとするつもりだった質問が、その場のみんなの注意を引きつけたのだ。

「え？　……あの、えっと」

一気に注目を浴びたヴァイスは、戸惑いの声をあげた。しかし。

（聞いてみようかな？　勇気を持って、リザードンさんに……）

せっかくＦＬＢに会えたのだから、機会を逃すのはもったいない。そう思ってはいるものの、なかなか言葉を形にする踏ん切りがつかなかった。

そんな彼を見て、メルは察する。

「ま、別に言わなくてもいいけどね」

「あっ……」

メルの言葉によって、皆の注目がヴァイスからそれそうになる。ヴァイスは、つい引き止めるような声をあげてしまった。

「どしたノ？」

シアンが不思議そうに首を傾げると、ヴァイスはしまった、と口に手を当てる。

しかし、この「言わなければならない」雰囲気が、ためらいがちな彼の背中を押した。

「あの……さ」

もし予想が外れていたら、変に思われるのは当たり前。でも、せっかくＦＬＢに会えたのに、ここで言わなかったら、ボクは――

ヴァイスは覚悟を決めて口を開ける。暴れる心臓が、彼の言葉を震わせた。

「あの……ずっと前から思っていたんだけど、ＦＬＢのリザードンさんって、ボクのお父さんにすごく似ているんだ。それが、すごく気になっていて……」

突きつけられたヴァイスの過去に、仲間たちの表情が重くなる。

ネロは、ヴァイスとリザードンを交互に見比べていた。目線だけの動きではあったが、彼にしてはずいぶんと忙しい運動であった。

誰も言葉を発しない。

沈黙が訪れ、長い間その場に滞在した。

やがて、フーディンとバンギラスがどこか悲しげな瞳でリザードンを見つめ、リザードンからいつもの優しい笑みが消え。

リザードンはふう、とため息をつき、沈黙を吹き飛ばした。そして、声を発する。

「そうか……。ヴァイスも、もう分かってしまう年頃だもんね」

リザードンがヴァイスに歩み寄り、ヴァイスの頭にポンと手をおいた。

「え……？」

戸惑うヴァイスに、リザードンは話しかけた。

「ヴァイス。今まで言えなくてごめん。私は怖かったんだ。私がこうしてＦＬＢにいる――この事実によって、お前に“あの事”を悟られるのが辛かった」

「レッド……さん。まさか……！」

ヴァイスの父――すなわちレッドを名乗る彼にそう言うのは、ネロだった。

「お久しぶりだね、ネロ君。キザキの――暗黒の森事件以来、か」

「あっ、暗黒の――？」

「なに、それ？」

リザードンから飛び出した言葉が分からずに、ブレロやブルルは戸惑いの声をあげた。

「あっ！　それはネ――」

「俺が言う」

シアンが張り切って説明しようとしたが、ネロが遮る。ファインプレー。雰囲気は守られた。

「昔、俺の住んでいた“キザキの森”で事件があった。森のポケモン達が、次々にさらわれた」

ここまで話して、ネロはフッとため息をつく。こんなに長く話をするのは、彼にとっては久しぶりのことだ。

「俺の父は森のポケモン達をかばって死んだ。母はさらわれた。俺の救助依頼を受けてくれたのがＯＮＥ。彼らは俺をかばって、やはりさらわれた。――俺は１人、生き残った」

感情をあまり含まぬ低い声が、なおさら場を重くした。

「その事件は“暗黒の森事件”と呼ばれた。そして、その森にもうポケモンはいない。誰も近寄りたがらない」

話が終わった合図のように、ネロはスッと目を閉じる。

以前シアンがネロに住みかを聞いた時、ネロは「ない」と答えた。その過酷な理由を、一同は今知る。

「……辛いところ、説明ありがとう。ネロ君」

リザードンが深く頭を下げると、話を元に戻した。

「……もし３人――救助隊ＯＮＥの３人で生還できたら、すぐにヴァイスに会えたんだけどね」

遠まわしに、彼は仲間――ＯＮＥのメンバーであった、カメックスのブルーとフシギバナのグリーン――の悲劇を伝える。

「そんな……。じゃあ、ブルーさんとグリーンさんは」

ヴァイスの言葉に、リザードンが首を振る。フーディンとバンギラスは、追い討ちをかけるように目を伏せた。

ヴァイスは思い出す。母親が亡くなって落ち込む自分を励ましてくれた彼らの存在を。父と共に、ヴァイスの憧れだった彼らを。あふれて止まらぬ涙が、ヴァイスから皆に伝染する。唯一ネロは、涙をこぼさずにじっと空を見ていた。

――ほんの少しその場が落ち着いてきたところで、リザードンは優しくヴァイスを抱きしめる。そして、言い聞かせるように言った。

「ヴァイス。お父さんだよ」

第３９話：雷鳴の山――その２（後書き）

更新が遅れてごめんなさい。

あと１０話ほどで逃走編は終わる予定でいるので、今後もお楽しみに！

第４０話：月と太陽――その１（前書き）

昔俺を助けてくれた救助隊ＯＮＥ。
ヴァイスの父、レッドさんは無事だったようだ。
（語り：ネロ）

＞ｉ３１８３０―４３４＜

第４０話：月と太陽――その１

エンテイが真実を告げてからしばらくすると、セナ達は“灼熱の火山”のふもとに降りた。さすがに火口付近は暑すぎる。

陽炎（かげろう）が目に映るものをぼんやりと歪ませる。が、ホノオの目に映る世界は以前よりも明るく、澄んで見えた。もう夕日も沈みかけているのに、である。

彼はぴいんと背筋を伸ばしてみる。辺りの暑苦しい気温を吹き飛ばすように、心に爽やかな風が吹いた。

「お前達」

下山を終えると、エンテイが優しい笑みでセナ達に話しかけた。

「セナとホノオの無実は、わしが責任を持って認めよう。だから、今日からはわしがお前達を守る」

「えっ、いいの！？」

声をそろえるセナとホノオ。ポプリとウォータも、目を輝かせて反応した。

「もちろん。今まで頑張ったお前達への、わしからの褒美だ。だから、今夜はゆっくり休むとよい」

「ありがとう、エンテイ！」

夜中の見張り続きで疲れていたセナとホノオにとっては、ありが

たいことこの上ない言葉だった。エンテイは伝説のポケモンである上に、先ほど襲われたときにその実力は十分に見せつけられた。抜群の安心感に、セナとホノオはつい甘えてしまう。

「じゃあ、さっそく寝るだ。オラもう疲れただよ」

と、ウォータがあくびをして目を閉じたが、エンテイが慌てて止める。

「ま、待て！　まずは、スイクン捜索のための作戦でも話し合おう。寝るのはそれからでもいいだろう？」

しぶしぶウォータは目を開ける。伝説のポケモンを焦らせる彼のマイペースさに、ポプリはクスリと笑った。つられて、セナとホノオも。

「まず、スイクンを探す方法だが――」

「方法も何も、アンタがスイクンの居場所を知っているんじゃないの？」

エンテイの言葉をさえぎって、スザクは適当な言葉づかいで言う。

「いや、それはお前達の勘違いだ。ホウオウ様はこうおっしゃったはずだ。『エンテイに会えばスイクンの捜索が“楽になる”ことでしょう』と」

「へ？」

エンテイの意外な返答に、セナとホノオの目が丸くなる。

「さっき説明した通り、今のスイクンには奴――あー、“破壊の魔王”が宿っている。本来ならわしらは、めいめいの波動を頼りに居場所の情報を交換できるのだが……今は、奴の波動がスイクンの波動を弱めてしまっているのでな」

「……ふむ。そりゃしょうがない。どうやらオイラ達が拡大解釈しちまったみたいだな」

苦笑いでエンテイに答えると、セナは話を続ける。

「じゃあ、スイクンを探すには、地道に歩くしかないのか？」

ここで重くため息をつくスザクを見つつ、エンテイは誇らしげに答えた。

「そんなことはしない。わしだって、伝説のポケモンとしての威厳くらい見せたいのでな。

わしの背中に皆を乗せて、お前達と共に旅をしよう。スイクンに近づいたなら、きっとわずかなスイクンの波動は感じられるだろうから、それを手掛かりにするのだ」

「え、重くないの？」

「振り落とさないでくれよ？」

「熱くないのかな？」

「戦う時はどうするだ？」

セナ、ホノオ、ポプリ、ウォータ。一気に質問を浴びせた。

「全く、お前達は……。わしはお前達の体重の合計よりもはるかに

重い。それにわしには長い毛があるのだから、それを掴めばお前達も落ちないだろう。熱くはなくむしろ暖かいし、戦闘時にはお前達を下す。問題ないだろう！」

４人に呆れつつも、エンテイは早口で答えた。最後の部分は息が足りずに、言葉を投げ捨てがちだった。すると、苦笑いと共に４人は納得した。

こうしてエンテイの提案により、セナ達５人の旅にエンテイも加わることになった。

そのことが決定した後、エンテイは５人に告げた。セナとホノオと共に、３人で話がしたい、と。

残された３人のうち、ウォータ以外の２人――すなわちポプリとスザク――にとってはまだ眠る時間じゃなかったため、彼女たちははセナ達と距離をとって待機することにした。声は聞こえないが、姿はしっかり確認できてすぐに助けにいける、そんな距離。

一瞬セナは考えてしまった。自分とポプリはこれぐらいの距離がいいのかも、と。その考えを、エンテイの声がかき消す。

「さて、悪いな２人とも。では、話を始めよう。スイクンに会った時と、その後――つまり、スイクンが正気に戻ってからのことについてだ」

ここで、一呼吸置く。

「スイクンとは言っても、実質中身は敵。その上、わしら伝説のポケモンは、知っていることを全て話してはいけない。規則に触れる

情報もあるのだ。だから、正確な情報を言えるとも限らないのだが……」

「それでもいいよ。手掛かりは欲しい」

腕組みをしたホノオが言う。それに背中を押され、エンテイは話しだした。

「体を乗っ取られたスイクンが、どうやったら元に戻るのか。それはわしにも分からない。ただ、覚悟はしておくように。奴はお前達に勝負を仕掛けてくる恐れもある」

「勝負……か。また、アイツと」

セナは思い出す。「ヴァイスの父を探す旅」に出た途端に、あのスイクンに襲われたことを。全く歯が立たずに自信を無くし、その戦いがヴァイスの元から離れるきっかけになったことを。

思い出すだけで、震えるほどに悔しい。セナは、拳をかたく握りしめた。

「怖いとは思う。それでも、お前達はスイクンと戦う覚悟ができているか？」

エンテイの問いが、セナとホノオに重くのしかかった。

「オレには“破壊の焔”がある。……だから何だって話だよな。あんな不安定な力を持っても、それが役に立つかな？　情けなくてゴメン。今はまだ、怖い」

ホノオが自嘲気味に言う。うつむいた顔には、やはりかつてスイ

クンと戦った時の恐怖や無力感があふれていた。

「……ポプリ達は？」

「ん？」

セナの言葉に、エンテイは首を傾げた。

「ポプリとスザクとウォータ。アイツらまで危険な目に合わせちゃあいけない」

納得して、エンテイは答える。

「それなら安心して欲しい。あの3人を戦闘に近づけるつもりはないし、だからこそ、今ここにお前達2人だけを呼んでいるのだ」

それを聞くと、よかったと胸をなでおろすセナ。そんな彼を見ると、ホノオはふきだした。

「ぷっ。あはは！　お前って、こんな時にも他人の心配ばっかりするんだな！」

「悪いかよ」

不機嫌そうなセナに、ホノオは

「いいや、別に。むしろ尊敬した」

と褒めてみると、たちまちセナは赤面した。

「とにかく。オイラはやるよ。それがオイラの役目なら、死んでもやり遂げるさ。それに、この前ボロボロに負けたのが、まだ悔しいから……」

「ば、バカ！」

思わずホノオは声を荒げた。びくりと驚くセナの目を、ホノオは刺すように睨み付けた。

「お前が“死ぬ”とか言うな！　本当にまた死んじまいそうで、怖いんだよ」

次第に落ち着き、ホノオは再び話を始めた。

「――まあとにかく。お前がそういう覚悟なら、オレも……やるよ。怖いけど、お前1人が死んじまう方がもっと怖いね」

意見がまとまると、2人は同時にエンテイを見た。芯の強い眼差しで。

「ふむ。覚悟は決まったようだな。セナについてはわしもまだよく分からんが――ホノオ。その戦いはお前にとって“破壊の焔を使える最後の戦い”になるだろう。悔いのないようにな」

「え、それって……？」

「スイクンの体から破壊の魔王の魂が抜けることで、ホーリークリスタも元の性質に戻る。つまり、ホノオにかかっていた呪いも消えるということだ」

「はぁ。そっか」

ホノオは左手をじっと見つめる。尊い命を奪い、友を傷つけた左手を。

「よかったな」

「……うん、まあ。過去は変えられないけどね」

セナの問いに、ホノオは複雑な表情を浮かべて答える。すると、その場に気まずい雰囲気が訪れる。慌ててホノオは話を大きく曲げた。

「ほい。暗い話はおしまーい！　ところでさ、エンテイ。“救いの勇者”と“破壊の魔王”って用語は、誰が作ったわけ？　ずっと気になってたし――正直あんまりセンスがあるとは思えないんだけど」

「あ、それ、オイラも知りたい！　何というか、正直言うのがちょっと恥ずかしい、ガキっぽい言葉だよね」

2人の言葉に、エンテイはぎくりと反応する。それを察したセナは、

「あ、ごめん。もしかしてアンタが……？」

と、恐る恐る聞くが、エンテイは首を振る。セナとホノオが首を傾けると、エンテイは重い口を開いた。

「お前達もそう思っていたのだな。実はわしもなのだよ。……本当に、“あのお方”はネーミングセンスだけが問題だな」

「へ？」

エンテイの丁寧な表現から察するに、名づけの親は――いや、まさか――

「お前達の察する通り。その用語をお考えになったのは、ホウオウ様だ」

唖然。

ガイアの“命の神”、美しい容姿……。そんな威厳と風格が、一瞬にして揺らいだ。

どちらが先か分からないが、セナとホノオは突然思い切り笑い出した。おなかを抱えて、少し苦しそうに。

「静かに、お前達。これでもホウオウ様にしてはまともな方なのだよ。……何度没案が出たことか」

一方のエンテイは少々うんざりとした様子で、ため息交じりに話している。そこで笑いがおさまってきたセナが、おかしそうに言った。

「いやぁ。びっくりしたよ。シアンが男だと分かった時と同じくらいびっくりした」

「笑い事ではない時もある。わしらの名前を決める時だって……ああ、もしわしがあんな名前になっていたら……伝説のポケモンとしての威厳が……」

「その名前候補、教えてよ」

過去を振り返るエンテイにホノオが言うと、エンテイは答える。

「言わない、断じて言わない。もしそんなあだ名が付いたらたまったものではないからな。

結局、今のスイクン、ライコウ、エンテイという名前は、3人で協力して考えたものなのだが……。いい案が思いついてよかった」

エンテイの話を通して、セナもホノオも、ホウオウに不思議な親しみを持った。そして、偉大な伝説のポケモンにさえ親しみがわくと、ガイアがとても愛(いと)おしく感じられるのであった。――この、スイクンの問題さえ解決すれば、この星で平和に過ごせそうだ。そう思った。

「まったく。迷惑なセンスしてるねえ、神様は。オイラに“救いの勇者”だなんて、重すぎるんだよねえ」

事実、セナはこの称号ゆえにプレッシャーを感じ、苦しんだこともあった。

セナの言葉を聞くと、エンテイはしばし考え込んでから言葉を発する。

「ふむ。そうだな……。“勇者”だなんて大そうな称号を持ってくる辺りが、非常にホウオウ様らしいのだが……。お前は“勇者”というより“戦士”という方がふさわしいのかも知れんな」

さらに、ホノオも見据えてから続きを言う。

「わしは、お前達を見ていると月と太陽が連想されるのだが」

「へ？」

突然の指名に、ホノオは間抜けな声を上げた。しかし、少し考えてみると、理由も頷けるような気がしてきた。

セナは月。暗い夜空をほんのりと照らし、皆に安心感を与える。時には怪しく光って不安を煽ることもあるが、無限の神秘を秘めている。

ホノオは太陽。昼の空をまぶしく照らして皆の心も明るくする。時にはその熱で他者を苦しめることもあるが、大きな希望の象徴となる。

「すると、オイラが“月の戦士”、ホノオが“太陽の戦士”となるわけだ」

クスリと笑ってセナが言うと、エンテイは顔を赤らめた。

「す、すまん。どうやらわしも、ホウオウ様がうつってしまったみたいだな」

「病気じゃないんだから」

ホノオの言葉で、３人は声をそろえて笑った。

（“月”――か。前よりだいぶましだよ）

心の中で呟くと、セナの中に不思議な落ち着きが芽生えた。

ここで、大声を上げていたことに気が付き、セナはポプリとスザクの方を見る。スザクはこちらを迷惑そうに睨んでいたが、ポプリ

は気を使って目をそらしていた。本当なら笑顔でこちらを見ているはずなのに。気まずい。

ホノオが大きな壁を乗り越えた。苦難の旅も、もうじき終わりを告げる。偉大な伝説のポケモン、さらにはガイアが、こんなにも親しく思えた――。

もう、怖いものは何もない。セナは覚悟を決めつつあった。

ここでホノオは、セナの目線に気が付く。セナの肩をつついてみると、セナはびくりと反応して振り向いた。

「ひゃ！　なんだよ」

「さあて、覚悟は決まったかなあ？」

たったそれだけしか言葉にはしないホノオは、表情で言いたいことを十分に語っていた。顔からあふれんばかりのニヤニヤを放ちながら、セナとポプリを交互に見ていた。

「……うん」

小さく返事をすると、セナは顔を赤らめた。

（ポプリに謝らないと。そして――）

ゆっくりゆっくりと、セナはポプリに近づいていった。

第４０話：月と太陽――その１（後書き）

ホウオウはけっこうまっとうなポケモンだった（とおもう）だけに、崩したくなったんですｗ

第４０話：月と太陽――その２（前書き）

ここにガイアの最重要機密を記す。
ガイアのポケモン達の生命をつかさどるホウオウ様は、なんとネーミングセンスが悪いらしい！
“救いの勇者”だの“破壊の魔王”だの、微妙な名前を付けたのはホウオウ様だったのだ。

結局オレとセナは、エンテイから新しい称号“太陽の戦士”と“月の戦士”を頂いたわけだが……ホウオウ様がうつってるねえ。

（語り：ホノオ）

第４０話：月と太陽――その２

ぎこちなくポプリ達の元へ歩いてゆくセナの背中を見送ると、ホノオはエンテイへと視線を戻した。

「さてと。ちょうどいい。もうちょっと質問があるんだ。付き合ってくれ、エンテイ」

「な、何を言っておるのだ！　お前のようなガキなどお断りだ！」

「へ？」

エンテイもホノオも、怪訝な顔を見合わせた。しばらくの沈黙の後に、ホノオは誤解の理由を察する。あぁ～、と大げさに言うと、呆れ顔を見せた。

「なーに言ってんの。そっちの“付き合う”じゃないっすよ。オレだってイヤだよ、こんな毛むくじゃらなモップのようなデカい犬――いてっ！」

余計な一言を消し去るように、エンテイは前足でホノオの頭を踏みつけた。いくら親しみが増したとはいえ、ホノオは言い過ぎである。

「うるさい、それ以上は言うな」

「あだだだ！　分かった！　分かったから止めてよ！」

自らの失態により羞恥の表情を浮かべるエンテイは、容赦なくホ

ノオに攻撃を加えた。慌てたホノオの懇願により、エンテイの足はホノオの頭から下ろされた。

「かつてまだブースターだった頃は、わしにだって好きなポケモンがいたのだよ。さっきはセナとポプリを見ていて、その時のことを思い出したのであって……」

ホノオの首がズキズキ痛む中、エンテイは必死に言い訳を始める。

――言い訳とは言っても、全くの嘘ではないようだが。

「はいはい分かりました青春でしたね。じゃあ話を戻して質問するけどさ」

と、エンテイの必死の努力をあざ笑うように、ホノオはあっさりと次の話題にうつった。調子が狂うエンテイは、しかめ面。

「なんで今まで、敵の話題になるたびにわざわざホウオウクオリティのあだ名を使ってたわけ？　まだナントカの魔王の正体は分からないの？」

「いや、実は正体は分かっているのだが……」

エンテイの答えにホノオは食いついた。

「えっ、うそ!?　じゃあなんで教えてくれなかったの!?」

「奴の名前を聞くことで、セナの記憶が蘇(よみがえ)るかもしれないからだ。わしらとしても、判断しかねるのだ。セナの記憶は、戻った方がいいのか。それとも、事件が片づくまでは忘れていた方がいいのか……」

敵の正体が、セナの記憶に――特に辛い記憶に密接に関わっている。それを聞いたホノオは、腕を組んで推理を始めた。正体は、誰か？

「そもそも、セナの能力や記憶の封印は、こちらのミスによって生じたものなのだよ」

地面を睨んで考え込んでいたホノオの目線が、瞬時にエンテイに刺さる。

「ポケモンという生き物は、人間とは違って戦うための特殊な力を持っている。炎や水などを操る“攻撃の力”。強い攻撃を受けても大丈夫なように“防御の力”もある。

セナの場合、その数多い力の中でも“心の力”のバランスに異常があるのだ」

「心？　それと戦いにどう関係が……」

「ポケモンは“挑発”されると、頭に来て攻撃技しか出せなくなってしまうし、“悩みの種”によって眠れなくなってしまう。さらに、“張り切り”という特性によって攻撃力が増すが攻撃が当たりにくくなったり、“闘争心”によって同性に厳しくなったり……。今挙げたのはほんの一例だが、とにかく、ポケモンは感情と戦力が密接に結びついた生き物なのだ」

「……へぇ。難しいけど、とりあえず分かったことにする。それで、続きは？」

「人間をガイアに連れてくることができるお方がいるのだが、どう

やら彼女がセナの能力設定を間違えてしまったらしい」

「人間をガイアに――。それって、もしかして“ポケモン”！？」

「――あぁ。お前達の前では“ポケモン”と名乗っておられるのか。おそらく彼女で間違いないだろう。人間を嫌い正体を隠す、そのお方だ」

「……なんだよ。いつもエラソーに人間をけなしといて、自分は重大なミスを犯してるんじゃないか」

ホノオは不満げに言う。人間を見下したあの声色を思い出すと、余計に気分が悪くなった。

「しかし、記憶が消えたことは全くのデメリットとも言い切れない。少なくとも、今のセナにとっては……な」

「うん。……何か狙いがあるのかな。“ポケモン”にも」

ここで両者は黙って考え込む。が、しばらくすると、ホノオは話題を元に――“破壊の魔王”の正体に戻した。

「ふぅー……。何者なんだろうな、黒幕は。セナの記憶に深く関係し、なおかつ人間――」

ここまで話したところで、ホノオは突然酷い頭痛に襲われた。

「うぐっ……！」

頭を押さえてかがみ込むと、不意に“声”が聞こえた。

――人間中心の考え方しかできないのですね、人間は――

“ポケモン”の声だった。一瞬の嵐のように鋭く駆け抜け、ホノオの頭痛と共に去っていった。

ホノオは深呼吸し、今の言葉を頭で繰り返す。彼を気遣うエンテイの声は頭に入らなかった。

（人間中心……？　どういうことだ？）

ここでホノオは考える。

確かに、地球での人間は、人間にとって住みよい環境を求めてきたらしい。木を切り倒して街にしたり、海や空気を汚したり……。酷いものである。同じく地球に住む動植物のことを、もっと考慮するべきだ。

――動植物――？

ちょっと待て、もしかして――！

何かに感づいたホノオは、興奮気味にエンテイに問いかける。

「なぁエンテイ！　“奴”はどこから来た！？」

急にホノオが元気になったので驚きながら、エンテイは答える。

「地球だ」

「“奴”は何者だ？　人間か？」

間髪入れずに質問を重ねるホノオ。エンテイはギクリと反応し、しばらく黙り込む。やられた、と思った。

「……言えぬ」

真実は言えない。しかし嘘もつけなかった。

「そういうことか……。地球、イコール人間と決めつけた、オレ達の間違いだったんだ」

となると。黒幕は誰だ？　ホノオはぐるぐると考えた。セナにとって辛いのは、間違いなく“あの事件”――。あの事件、人間以外――。

まさかアイツか？　いや、そんなまさか――。でも、アイツは確かに――！

確率は、とても低い。しかし、“アイツ”ならもしかするとガイアに――。

身が凍り付くような寒気に襲われた後、ホノオは複雑な顔でエンテイに話しかけた。

「正体、わかっちゃったかも」

「そうか……。絶対に、セナに言ってはならんぞ」

ホノオの推理の結末を聞かずに、エンテイは静かに念を押した。

一方のセナは、ホノオ達が重大な話をしているとき、彼にとっても大切な行動を起こそうとしていた。

高まる緊張でぎこちない足取りのまま、なんとかポプリとスザクの前にたどり着いた。

「あっ、あのさぁポプリ」

緊張のせいで、予定よりも鋭い声がでてしまった。ポプリは一瞬びくりと反応するが、すぐに笑顔で――期待と怯えが混ざった、複雑な笑顔だった――返答した。

「なあに？」

ここで、セナは困惑する。スザクだ。いくら何でも、第三者に聞かれている状態でこんな話はできない。

「あぁ、えーと、その……」

目が泳ぐセナ。一瞬、スザクと目があった。

途端、スザクはつまらなそうにあくびをし、目を閉じた。

「えと……スザク？」

「スザクならもう寝ちゃったよ。ウォータと同じで寝付くのは早いんだ」

スザクが目を閉じて間もないのに、ポプリはそう断言する。まだ戸惑っているセナを見ると、ポプリは首飾りからツルを伸ばし、スザクのお腹をくすぐってみせた。

スザクはいっさい反応せず、マイペースに呼吸を続けている。

「ほらね？」

「う、うん……」

正直彼女が起きていたとしても、笑い転げる様子は想像できなかった。が、一応納得しておく。

「大丈夫。意外かもしれないけど、起きてるときのスザクはこういうの苦手だから。……セナくんは？」

不意にツルがセナに向けられる。ポプリが見せるいたずらな笑みに、セナはドキリとした。ポプリの意外な一面を見た気がする。

「だっ、ダメ、ムリ！　やめてやめて！」

阻止するように両手のひらをポプリに見せると、セナは必死に訴えた。

「えへへ、セナくんって面白いよね。ゴメンね、からかっちゃって」

ポプリはクスリと笑い、ツルをしまった。セナは安堵のため息。ここですっかりポプリのペースに持って行かれていることに気がついた。――お陰で緊張はほぐれたのだが。

覚悟を決めて、セナは言葉を発した。

「ポプリ。本当に……ごめん」

言葉の後で、深く頭を下げた。

「この前酷いこと言っちゃって、本当にごめん。お前がオイラに言ってくれたこと、すごく嬉しかったんだ。本当は。それなのに……なんでだろうな……ええと……」

言葉に詰まる。あの時の自分をどう説明すればいいのか分からなかった。

――思いだそうとすると、例のおぞましい光景を思い出す。こんな時にも関わらず、セナは呼吸が苦しくなって息を荒げた。

「大丈夫？　セナくん」

ポプリがそっと肩を支えてくれる。暖かな気持ちに包まれて、おぞましい光景は消えていった。

徐々に落ち着きながら、セナは考える。かつてホノオに、ポプリを好きな理由をぎこちなく言ったときのことを思い出しながら。

――“優しいから好き”なんじゃない。“この優しさが好き”なんだ。きっと――

そんなことを考えると、急に恥ずかしい気持ちになる。

真っ赤な顔で、セナはポプリに返答した。ありがとう、と。

「セナくん」

ここで、ポプリがセナに話しかけた。少し恥ずかしそうにしている。

「あたしは大丈夫だよ。ありがとう。

あたしね、あの後セナくんのことを嫌いになってみようとしたの。

……でも、失敗しちゃった。だから、これからもセナくんのこと、好きでもいいかな？」

「う、うん。もちろん」

覚悟を決めた。次の言葉を紡ぐ――

「だって、オイラも、お前の――」

「セナ、ポプリ！　大変だ！！」

――事は出来なかった。ホノオが慌てた様子で2人の元へと駆けつけ、緊迫感あふれる声で叫んだのだ。

ただ事ではない様子に、セナもポプリも急に顔をこわばらせる。すぐにホノオと共に駆け出し、状況を探ろうとした。

先ほどまでエンテイと話していた場所まで戻ると、セナは凍りつく。

「……あ……セナ……」

傷だらけの体が呼びかける声。ずっと彼の声が聞きたかった。しかし、こんな痛々しい声など聞きたくなかった……。

「し、シアン……！？　それに姉貴、ソプラ、アル、ル……」

声も出せなくなった。目の前で倒れているのは、シアン、メル、ソプラ、アルル、そしてブレロとブルル。さらに、大柄の虎のようなポケモン――ライコウだった。

ヴァイスとネロは、いなかった。

第４０話：月と太陽――その２（後書き）

しばらく活動休止してました。お待たせして申し訳ないですｍ（＿＿）ｍ

まだしばらくリアルが落ち着かないので、また遅れる可能性はあります。ご了承ください。

目標としては、大学３年生になるまでに――すなわち再来年の春までには――この物語を完結させたいと思います。

第４１話：試練の再会――その１（前書き）

オイラは勇気を出して謝り、ポプリと仲直りできた。そして自分の気持ちを伝えようとしたんだけど、それどころじゃなくなった。
緊迫感ある表情でオイラ達を呼ぶホノオ。着いていくと、そこには傷ついたシアン、姉貴、ソプラ、アルル。そしてなぜか、ブレロとブルルまでいた。さらに、ライコウも
どうしてブレロ達が一緒なのか気になるところだけど、事態はそれどころじゃなさそうだ。この傷の正体は？　そして、なんでヴァイスはいないんだ――？
（語り：セナ）

第４１話：試練の再会――その１

ボロボロのシアン達とライコウの傷は、エンテイが治癒能力で癒した。どうやらこの治癒能力は、本人がひどく傷ついているときは使えないらしい。その後、シアン達、というより主にメルから事情を聞き、彼らは“問題の場所”へと駆け出した。

シアン、メル、ソプラ、アルル、ブレロ、ブルルは“灼熱の火山”に来た時と同じくライコウの背中に乗った。セナ、ホノオ、ポプリ、ウォータ、スザクはエンテイの背中に乗って大地を駆け抜けた。――ライコウとエンテイにとってはずいぶんな大仕事のように思えるが、彼らの体重は、乗客の体重の合計よりはるかに重い。重量に問題はないようで、彼らは風のように走った。

「ヴァイス……」

エンテイの長い体毛にしっかりと捕まり、風に吹かれながら、セナは呟いた。そして、先ほどメルから聞いた“今回の事情”を思い返す――。

ヴァイスの父親が生きていて、それがＦＬＢのリザードンだったらしい。喜ぶべき展開のはずなのだが、同時に悲しい知らせを受け、ヴァイスはむしろショックを受けてしまった。――ヴァイスの父のチームメイトだったブルーとグリーンが亡くなったそうなのだ。

どうしようもなく泣き出すヴァイス。同情する仲間たち。ネロにさえ、困惑の色がはっきりと表れていたそうだ。

――ここまでは、事態は“正常”だったのだ。この状況を“正常”と呼ばなければならない事態が、この後起こったそうだ。

泣きじゃくるヴァイスを、リザードンは優しく抱きしめた。そして、おまじないでもするかのように呟いた。

「ヴァイス。おとうさんだよ」

その言葉を聞くと、リザードンはヴァイスをそっと抱き上げ、自分の前に立たせた。

一瞬、目があった。

その時、ヴァイスはピタリと泣き止んだのだった。

「……ヴァイス？」

頬に残るしずくが一瞬にして似合わなくなった彼に、メルは安心よりかは違和感を感じた。何か、おかしい。

「大丈夫だよ、おねえちゃん！　ボクには、お父さんがいるから」

ヴァイスはリザードンのお腹に頬をくっつけながら、愛嬌たっぷりに言った。可愛らしく純粋なヴァイスの声。しかしなぜだろう。いつもより暗く沈んだ瞳の色が、気になった。おかしい。

「でも、ヴァイスさん――」

やはり違和感を感じたのか、アルルが呼びかけた。が、ここでヴァイスはアルルに微笑みかけた。有無を言わせぬ迫力を感じ、アルルは言葉を飲み込んだ。彼女は少し、怯えていた。

「ヴァイス。大きくなったね……」

リザードンはヴァイスに語り始めた。

「せっかく、久しぶりに会えたんだ。お父さんたちの旅に、お前も着いてこないかい？」

直後、幾多のどよめきとヴァイスの嬉しそうな返事が重なった。重ねて驚くメルやシアン達。

「ちょ、ヴァイス！？」

さすがのシアンも焦ってヴァイスに訴えた。

「ＦＬＢの皆さんはセナとホノオは狙っているんだヨ？　お父さんに会えて嬉しいのは分かるケド、セナとホノオの敵になっちゃうノ！？」

その場の多くの者は、シアンとヴァイスのやり取りに注目していた。ただ、アルルは先ほどの恐怖から、ヴァイスを見るのをためらっていた。――そんな彼女は、見てしまった。

ふと、ネロが、ヴァイスとリザードンを交互に見て何かを迷うようなしぐさをしていることに気が付いた。アルルの後に、リザードンもそれに気が付いたようだ。リザードンは、ネロの方を振り向いた。

ここで、ネロとリザードンの目があった。

直後、ネロのルビー色の瞳が、スッと黒みを帯びたのだ。

おかしい！　――気が付いたアルルの心臓が、暴れ始めた。

しかしアルルにはこの違和感を伝える勇気がなかった。進行する

会話を、ただ見守るのみ。

少しだけ、ヴァイスの瞳に迷いの色が走った。が、直後、ヴァイスはうつむいてぼそぼそと独り言を言い出した。

「そっか……うん、うん。そうだよね……」

「なんか……まずくない？」

とうとうヴァイスの違和感に耐えられなくなり、ブルルがボソッと呟いた。皆、無言で頷いた。

「いいじゃん。だって、お父さんは血の繋がった家族。でも、セナやホノオは――友達は、みんな他人でしょう？　お父さんの方が、大切だよ」

「……ひどいヨ、ヴァイス」

ヴァイスの冷淡な答えに、シアンは目を潤ませた。彼は、ヴァイスの黒ずんだ瞳に気が付いていなかったようだ。

「うむ。君ならそういってくれると思っていたよ。さすがレッドの息子だ」

満足げに頷いたのは、ＦＬＢのバンギラス。

メルは拳をぐっと握り、怒りを押さえつけて口を開いた。

「アンタ達。ヴァイスに何をしたんだい？」

「……何のことだい？」

ヴァイスを抱っこしたリザードンは、不敵ともとれる笑みを浮かべて聞き返す。メルの怒りが弾けた。

「とぼけるんじゃないよ！　ヴァイスはそう簡単に友達を見捨てるような奴じゃ――」

叫びながら、駆け出し、殴りつけようとした。そんなメルの言葉を、衝撃がさえぎる。

「うっ！」

腹に走る重い衝撃。正体は“リーフブレード”……。

倒れたメルが必死に顔を上げると、冷たい瞳のネロが、再びメルに草の剣を振りかざしているのが見えた。

メルの記憶は、ここで途絶えた。

この後、状況に圧倒されたシアン達に、ヴァイスとネロは容赦なく襲いかかった。いつも以上に強く、さらに冷酷になった2人に、シアン、ソプラ、アルル、ブレロ、ブルルの5人はかなわなかった――。

ちょうどその時に、ＦＬＢにやられていたライコウが目を覚ました。とっさに危機感を覚えた彼は、持ち前の俊足を生かしてその場に乱入。酷い傷を負いつつもすでにボロボロの6人をかばい、どうにかその場を逃げ切ったのだった。

その後に、エンテイの治癒能力を求めて“灼熱の火山”に向かってきたそうなのだった。セナ達がいたのは、本当に偶然であるようだ――。

一通りいきさつを復習し終えると、セナはふさふさしたエンテイの体毛に顔をうずめ、じっと考え込んだ。

――セナやホノオは――友達は、みんな他人でしょう？　お父さんの方が、大切だよ。

ヴァイスは一体、どんな気持ちでこの言葉を言ったのだろうか？　シアン達の話を聞くと、どうやらヴァイス――それからネロという名のジュプトルは、ＦＬＢに“洗脳”されたようだ。

“洗脳”されると、どんな感じになるんだろう。“心を失う”ことと、どう違うんだろう。どっちの方が、怖いんだろう……。

ここでふと、ライコウがセナに話しかけた。

「怖いかい？　セナ君」

雷鳴のようにハスキーな声だったが、優しさを含んでいた。セナは、素直に答える。

「怖いね。今のヴァイスがどんな世界を見ているのか……怖いし、想像できないし」

「そうか……僕達と同じだね。エンテイ」

「ああ。友人が操られ、危害を加えてきたのだからな」

「喋り方可愛いっすねライコウさん……」

ホノオが何か呟いたが、なかったことにされた。ライコウは普通

に話を続行する。

「僕達は、操られたことがある。……解放されてからの罪悪感と言ったら、酷いものだったね。本当に悪いことをした」

「ま、アンタはアタイ達のことを助けてくれたからね。チャラにしようか」

事件のごたごたせいでされぬままだった謝罪を聞くと、すかさずメルはライコウをフォローした。そして、話はまた元の軌道に乗る。

「とにかく、セナ君、ホノオ君。ヴァイス君達はまた僕達に襲いかかってくるだろうけど、事が済んだらきちんと許してあげてほしいんだ。メルちゃんやシアン“ちゃん”達を見習ってね」

クスクスと笑うのは、メルとセナとホノオのみ。シアンはもう突っ込む気力もなく、ただただムスッと頬をふくらましていた。

セナは笑いをこらえつつ、なんとか返事をする。

「くふっ、わ、わかってるって……」

どうもかっこよく言える自信が無くなったため、続きは心の中で呟いた。

ヴァイスは、オイラの心をもとに戻してくれた。今度は、オイラが助ける番だ。

第４１話：試練の再会――その２（前書き）

ヴァイスの様子がおかしいらしい。シアンや姉貴達を狙って攻撃してきたそうだ。どうやらＦＬＢに操られているようだけど……。

とにかく、“雷鳴の山”へ急げ！

（語り：セナ）

第４１話：試練の再会――その２

頬に受ける風が徐々に乾燥してきた。
そろそろだよ。メルのその声が宙に響き、セナ達は真剣な眼差しを前に向けた。
エンテイとライコウは荒れ果てた大地を踏みしめて駆ける。体毛が風になびき、時々パチパチと音を鳴らした。静電気だ。

雷鳴がとどろく大地、ゴツゴツとした岩山。――“雷鳴の山”に到着した。
ふもとに着くと、エンテイとライコウは速度を落とす。そして、セナ達を振り落とさないように止まった。

「よぉいしょっと」

緊張していない風を装って間抜けな声を出しながら、セナはエンテイから降りた。続いて皆がエンテイとライコウから降りた。

一度、セナは山頂をキッと睨みつける。そしてエンテイとライコウに礼を言うと、改まったようすで話を始めた。

「さぁ、突撃の前に。オイラから１つお願いだ。ポプリ、スザク、ウォータ。それからソプラにアルルにブレロにブルル……。今回の戦闘に、お前達は参加しないで欲しいんだ」

「えっ……！？」

指名された者からは、驚きの声が飛んだ。わざわざ戦力を減らすなんて、といったように。

ホノオはすでに、何かわかったように頷く。少し前に、セナは言っていたのだ。やはりポプリ達を危険な目に遭わせたくない、ということを。

「何言ってんだよ、セナ！　アタシはちゃんと戦えるし、戦力の足しになる自信はあるぜ！」

ソプラの反論の言葉は、逆に他の指名者を黙らせた。彼女ほどの自信家は、この中には他にいなかったのだ。

「じゃあ聞くけどさ」

一呼吸置き、セナは問う決心を固めた。

「お前達は、命を懸けて戦ったことがあるのか？」

しいんと沈黙する中、セナは続けた。

「全てを、命すらも失う覚悟で戦ったことがあるのか？　戦って、死にそうになったことはあるのか？」

「それは……」

ソプラは反論に困りだした。

「お前達はなぁ、ライコウが助けてくれたから今無事なんだろ？ライコウがいなかったら、多分殺されてたよ。ヴァイス達に」

セナはソプラやブレロの方を見ながら続ける。

「また殺される覚悟で戦えるのか？」

セナがとどめを刺すように言う。ソプラは少しムッとして、グッと拳を握りしめた。その様子に気がつき、アルルはなだめるようにソプラの肩に手をおいた。

ポプリはそんな2人を見て、決心したように口を開いた。

「うん、分かったよ。あたし、セナくん達を信じてるから……うまくやってくれるって信じてるから、戦いには参加しないで待ってるね」

ポプリが言うと、ウォータやブレロ、ブルル――指名されたメンバーが頷きだした。スザクはさもどうでも良さそうに頷く。アルルは上目遣いでソプラを見つめた。

それを見て、ソプラもとうとう観念したように首を振った。

「けっ、しゃーねーなぁ。仕方ないから待機してやる。負けたら承知しねーぞ！　“王者の雷”の刑だ！」

「えーっ、ボクもお仕置きに協力するのぉ？」

王者の雷はソプラとアルルが使える強力な技だ。セナとホノオは威力を知らないため首を傾げるが、ブレロとブルルが激しく苦笑いを浮かべた。

「と、とにかく、ご理解ありがとうな。オイラ達なら、負けないから」

セナがそう言うと、すかさずメルが突っ込む。

「その“オイラ達”にゃ、アタイやシアンも含まれるのかい？」

「あ、アハハ……。久々に会ったんだもの。ちょっとくらい甘えてもいいだろ、姉貴ぃ？」

苦笑いを浮かべて言うセナを見、メルはやれやれと首を振る。そして、笑みを浮かべて言った。

「手のかかる弟達だねぇ、全く」

聞き覚えのあるようなその言葉を聞くと、セナとホノオの肩の力がふっと抜けた。

こうして、パーティーは2つに分かれた。

セナ、ホノオ、シアン、メル、エンテイは、暴走したヴァイスとネロを助けるために先に進む。

そして、残されたメンバーにはライコウがつき、山のふもとの安全地帯で待機することに。

万一セナ達が危なくなり、どうしようもなくなったその時は、エンテイとライコウで連絡を取り合い、待機部隊から応援を呼ぶことにした。

セナ達はとうとう覚悟を決めて山を登り始めた。

「シアン。ヴァイスは旅の途中、元気だったか？」

セナが真顔で聞くと、シアンは楽しげに答えた。

「ウン、元気にやってたヨ！」

「まぁ、優しい子だから悩みも絶えなかったがね。辛抱強く頑張ってたさ」

シアンの答えの不足をメルが補った。

「相変わらずです何よりだな。ヴァイスも、シアンも」

「ムッ、どういう意味、ホノオ！」

ホノオとシアンの掛け合いを見ると、セナはクスッと笑った。

「シアン、姉貴、サンキュー。今回の件が一段落したら、また色々と話そうな」

とセナ。

彼らのやり取りをほほえましく感じ頬を緩めたエンテイだが、突如、表情が引き締まる。気配を、感じる。

「来るぞ！」

その言葉の直後、オレンジ色と緑色の光線がセナ達めがけて放たれた。とっさにエンテイは炎を放つ。相殺。爆風が暴れた。

「やっぱり来てくれたんだね」

立ち込める煙の向こうから、変に優しい嫌みな声が聞こえた。煙

が晴れるのを待たず、彼らは接近してきた。

「ＦＬＢ……！」

セナとホノオはキッと敵を睨みつけた。

「ヴァイス達に、何をした？」

セナが低い声で威圧的に問う。――小さな彼の姿に相手が怯えるはずはないが。

「彼らに？　ははは、何もしていないよ。彼らは自分の意志で、この道を選んだのさ」

と、バンギラス。

「とぼけやがって！」

セナは叫ぶと、ＦＬＢに向けて轟音（ごうおん）をまとった水流を発射した。

“水鉄砲”にはない迫力。“ハイドロポンプ”だった。

至近距離から大技を放った。その、ごくごく短い時間での出来事だ。先ほどの“オレンジと緑の光線”が、セナの攻撃を打ち破ったのだ。そして、セナに襲いかかる。

「うわあっ……！」

弾き飛ばされたセナの体は低空飛行の後、地面に引きずられた。

「セナ！」

名を呼ぶ声が重なる。エンテイはセナに駆け寄ると、治癒能力を用いてセナの傷を癒した。

「ヴァイス……？」

セナは攻撃してきたヴァイスとネロを見上げる。突き刺さる鋭い眼差しは、覚悟していたとはいえショックだった。

「ヴァイス。久しぶり。オイラだよ。セナ、だよ……？」

じりじりと距離をつめてくるヴァイスに、セナは後ずさりながらぎこちなく呼びかける。反応は、ない。

「呼びかけたって無駄だよ。今のヴァイスにとって、セナとホノオの味方はみんな敵なんだから」

フーディンが言うと、ヴァイスはセナに向かって駆け出した。爪に金属光沢をまとわせて、思い切りセナを斬りつける。“メタルクロー”だ。

「くっ……！」

まともに防御をする時間もなく、セナはとっさに両腕で攻撃を受け止めた。はがねタイプの技には強いセナだが、それにしては大きな痛みに襲われる。

（ヴァイス、強くなってる！）

セナのその考えに答えるように、ヴァイスは容赦なく追い討ちをかけた。“火炎放射”を放ち、セナの身を焦がす。

「セナ！」

そこにホノオが駆けつけ、セナとヴァイスの間に立つ。大きく体を広げ、セナを攻撃からかばった。

ヴァイスの攻撃が終わると、ホノオはフラフラと立っていた。

「だ、大丈夫かホノオ！？」

セナが問うと、

「思ったよりいてぇな。でも、大丈夫」

とホノオ。その後にエンテイが駆けつけ、セナとホノオの傷を癒した。

「ありがとう、エンテ――」

セナは礼をさえぎる。エンテイの背後にＦＬＢを見たのだ。セナと目があった瞬間、フーディンは姿を消す。首を傾げたとたん、セナとホノオは背後から肩を叩かれた。

“テレポート”された――そう悟った瞬間、セナとホノオは激痛に襲われた。フーディンの“サイコキネシス”だ。

「うわああっ！」

悲鳴を上げるセナとホノオに、エンテイは驚いた。

「フフフ。彼らを解放して欲しければ、この場を離れてわしらと戦

ってくれんかね、エンテイ君」

「治癒能力が邪魔でねぇ……」

と、フーディンとリザードン。迷うエンテイだったが、セナとホノオの悲鳴を聞くのに耐えられなくなった。

「ぐ……いッ……行って、く……エンテ、イ……」

息も絶え絶えにセナが訴えると、エンテイは決心して頷いた。

（セナ達を回復できないのは痛い。しかし、この戦いにＦＬＢも参加するのはもっと痛いだろう）

「分かった。その代わり……覚悟するんだな」

エンテイが言うと、ＦＬＢを誘導するようにその場から離れた。フーディンの攻撃も止み、セナとホノオはぐったりと座り込んだ。

セナが少し顔を上げると、距離をつめるヴァイス。その向こうには、ネロの猛攻を“守る”で防ぐメルとシアンが見えた。――どうやら、うまく二手に分かれられたらしい。

「よっ、ヴァイス。久しぶり！　強くなったな」

ホノオがニコニコと笑顔を向けて話しかけるが、ヴァイスは相変わらず冷たい視線を向けている。

そろそろ攻撃に入る。セナとホノオは立ち上がり身構えた。

「とにかく攻撃を避けて呼びかけよう。それしか思いつかないや」

ホノオが言い、セナが頷く。直後、ヴァイスの炎がセナとホノオに向かう――が、これはセナとホノオの攻撃でどうにか相殺できた。

「あのねぇキミ達。ボクを“悪の道”に引きずるのは止めてくれるかな？」

ここで、初めてヴァイスが口を利く。てっきりヴァイスは無口になったと思ったため、セナとホノオは驚いた。

「ボクは別に、キミ達を忘れた訳じゃない。救助隊“キズナ”としてお世話になって、色々と楽しい思い出も作れた」

ここで、ヴァイスはセナの背後に素早く移動する。そして、尖らせた爪をセナのしっぽに突き刺した。

「ぐあぁっ！！」

しっぽに激痛が走り、セナは悲鳴を上げた。ふらりとうつ伏せに倒れた後、痛みに耐えるように両手で地面の岩を握っている。

「ボクね、キミ達のこともちゃんと覚えているんだよ。セナは、しっぽが弱点だったっけ。ほら、痛いでしょ？」

その言葉と共に、ヴァイスはセナのしっぽを踏みつけた。セナは聞くに絶えない悲鳴を上げる。

「お前っ……！　いい加減にしろ！」

とうとうホノオは怒鳴り、“炎のパンチ”でヴァイスを殴りつけようとする。が、ヴァイスは軽々とホノオの拳を受け止めた。

「相変わらず短気だね、ホノオ。カッとなって敵を殺しちゃったりしなかった？」

――白と黒。焼け付くしたカラダが、思い出したくないキオクが、ホノオの頭を支配した。

ホノオの力が抜けたとたん、ヴァイスはホノオを嘲笑（あざわら）う。

「はは、図星のようだね。隠さなくても大丈夫。ホノオなら、殺（や）ると思っていたから」

「や、止めろ……！」

「怖いの、ホノオ？　セナの声でも聞いて安心する？」

皮肉な笑みをさらに強め、ヴァイスは一度は止めたセナへの攻撃を再開した。しっぽを踏みつけ、押しつぶすように体重をかけていった。

「うわあぁーッ！！」

「止めろーッ！！」

セナとホノオの悲鳴が不協和音を奏でる。不安定で悲しい響きを聞くと、ヴァイスは1人高らかに笑った――。

――ポケモンは感情と戦力が密接に結びついた生き物なのだ――エンテイのその言葉を、ホノオは今痛感した。ほんのちょっと“火炎放射”を浴びただけの体が、心に負った重傷のせいでうまく動かない。

「チョロいもんだね。恨むならボクじゃなくて、こんなに弱いキミ達を今まで殺せなかった、弱ーい救助隊を恨むといいよ」

セナもホノオも、ヴァイスの顔を見上げる余裕がない。でも、声を聞くと、その冷たさが分かった。

「とにかく、ボクはお父さん達のおかげで考えを変えられたんだ。ガイアのために、セナとホノオを倒さなくっちゃね！」

ヴァイスはそう言うと、深く息を吸う。口の中に蓄える光は眩しい白。――ヴァイスが嫌ったはずの、“破壊光線”だ。

（ヴァイス……頼む！　オイラ達の話を聞いてくれ！）

絶体絶命の状況だが、セナの心はまだくじけてはいなかった。

第４１話：試練の再会――その３（前書き）

アタシだって、セナ達の力になるつもりだった。でも、命がかかっている――セナのその言葉が、なんかものすごく重くて……。
だからアタシ、セナにクソザル、シアンにメルさんを信じることにしたんだ。絶対に、ヴァイスとネロさんを元に戻して欲しい！
（語り：ソプラ）

第４１話：試練の再会――その３

ここで、セナ達が出発し、姿を見送った後のポプリ達の様子を記す。

「……行っちゃったね、セナくん達」

ポプリが少し寂しげに呟く。

「うん……。大丈夫かな？」

と、ブレロが言う。ポプリとブレロが言葉を交わしたのはこれが初めてだった。

「セナくんとホノオくんなら大丈夫だと思うけど――」

ポプリはそう言うと、ふっと表情を明るくした。そして、声も明るくしていう。

「ううん、絶対に大丈夫！　あたし達が信じないとダメだよね！」

「う……うん、そうだね」

ポプリの笑顔につられて、ブレロやブルルも笑みを浮かべる。

「そうだな。アタシが脅してやったんだから、奴らは負けないさ♪」

ソプラが豪快に笑い飛ばすと、アルルは隣で苦笑い。ここでウォータは口を開いた。

「あのー、そう言えば、おめーがさっきの脅しで言ってた“ナントカの雷”ってのは、どんくらい痛い技なんだか？」

質問が質問だ。心なしか少しビクビクした様子である。

「あぁ、“王者の雷”ね。アレはな、すげーぞ！　どれぐらいすげーかって言うと――」

「僕の技には及ばないでほしいね……。一応僕は伝説のポケモンだし」

ライコウの控えめな主張にソプラは苦笑い。

「いや、さすがにアンタの“シルバーナントカ”には負けるぜ？　でもなぁ――」

ここでソプラはふっと言葉を切り、思いついたように言葉を続けた。

技の名前――すなわち“シルバーラディウス”――を思い出してくれたのかなぁ、とライコウは期待したが……。

「――と、その前に、だ。アタシ達、今まで別々の旅をしてきたから、そもそもまだ互いのことを全然分かってないんだよな。でも、アタシ達みんな、“キズナ”の為に……“キズナ”の奴らのことが、す、好きだから旅してきたんだろ？　目的は同じなはず。アタシは、まずはそんなアンタ達のことを知りてぇな」

「ウチはウチのためだけに旅をしているんだけどね」

スザクがボソッと呟く言葉はソプラの耳には届かなかった。
ライコウは、期待と少し違う答えを聞いてこけそうになった。

「うん、賛成！」

「オラも、おめー達のことを知りてぇだよ！」

ポプリ、ウォータは乗り気のようで、笑顔を向ける。アルルも嬉しそうに頷くと、ソプラを見た。

「いやぁ、ソプラにしてはいい提案じゃない。明日はどんな天気に――」

「ブルル……？」

余計な一言を口走ったブルルの前に、真っ黒笑顔のソプラが立ちはだかる。

「ごっ、ごめんなさいぃ！」

ブルルは言うと、ブレロの影に隠れる。そしてすぐに、ブレロを身代わりとして突き出した。

「あっ、ちょっと！　止めろよブルル！」

愉快なやりとりを見て、スザク以外の皆が微笑む。そして、一段落すると、待機組はめいめい語り始めた。――セナ達を信じているからこその、平常心を持って。

時はヴァイスがセナとホノオに襲いかかった頃に移る。この時、一方のメルとシアンは、襲いかかるネロに必死に向き合っていた。

「ネロ……アンタ、どうしちまったんだい？」

ネロの“リーフブレード”を早速“守る”を使って防いだ後、メルは問いかけた。

元々無口なネロが口を開くことはなく、再び脅すように、メルとシアンにリーフブレードの刃を向けた。

（マズいね……）

使ったばかりの“守る”には頼れない状況。メルは攻撃を避けるすべを必死に考えた。

（よし、あの技なら……！）

メルがニヤリと笑ったのを、シアンは確認する。ほんのちょっと、安心した。

ネロは軽く右手を――剣を引く。メルは身構え、左手でシアンを自身の背後に誘導した。

一瞬、場の空気が止まる。直後、動き出した。

ネロのリーフブレードが2人を切り裂こうとする。刃が刺さるその直前、メルはその身をコウラの中に隠した。

「“高速スピン”！」

強い回転で、メルは剣を弾き飛ばそうとする。一瞬ネロは押された。が、ニヤリと笑い、剣に体重をかける。そして、両手でメルを思い切りなぎ払った。

「キャッ！」

コウラの中のメルは無傷。しかし、彼女の背後にいたシアンは、猛回転したメルがぶつかり吹っ飛ばされた。

「ご、ごめん！　大丈夫かいシアン？」

とっさにメルが駆け寄る。シアンは頷いて立ち上がるが、少しふらついていた。

「う、ウン……」

シアンが返事をして立ち上がる。その時にはすでに、ネロは2人の正面にいた。

「ネロ、アンタ……！」

正気に戻そうと、メルはネロの頬をビンタしようとする。が。当たる直前、メルの手はネロに掴まれた。

「は、放しな！　変わっちまったアンタなんか嫌いさ！」

メルが怒鳴りつけると、ネロがとうとう口を開いた。

「俺は好きだ。強い方がいい」

メルの手をぐっと掴むと、軽々と体を放り投げた。メルの体はシアンに激突。

「あっ、シアン！」

またも、大きなダメージを受けるのはシアン。メルは拳をぐっと握り、ネロを睨みつけた。そして、

「何が“強い”だ……。アタイやシアンなんかよりもよっぽど弱くなったじゃないか！」

再び怒鳴り、ネロが苦手な氷タイプの技を放つ。

「“冷凍ビーム”！」

もちろんネロがこれに動じることはなく、相殺すべく技を放つ。

「“エナジーボール”！」

緑色の豪速球は凍てつく光線をたやすく打ち砕く。そして、技の使い手のメルにクリーンヒットした。

弾き飛ばされそうになるのを、メルはぐっとこらえる。そして、何か狙いでもあるかのようにニヤリと笑みを浮かべた。

直後、メルの体が輝く。

「“ミラーコート”！」

メルからネロへと、緑色の光が強力に跳ね返された。ネロは光に

打たれ、初めて苦痛の表情を浮かべた。

「はぁ、はぁ……。どうだい」

得意げなメル。しかし、攻撃を跳ね返したとはいえ、エナジーボールのダメージは受けてしまっている。草はメルの弱点であるため、かなり苦しそうではある。

「ねーちゃん！」

一瞬にして自分よりはるかにボロボロになった。そんなメルを、シアンは気遣うが。

「危ないよ」

その威圧的な声で、シアンはひるんだ。

メルはまた駆け出す――今度は片手に氷をまとわせて。

“冷凍パンチ”！」

メルの攻撃を、ネロは鼻で笑った。そして、圧倒的なリーチの差――“リーフブレード”でメルを突き刺した。

今度はメルが笑う番。

“カウンター”！」

ネロの剣を押し返し、持ち主ごと思い切り吹っ飛ばした。ネロの体は地面に叩きつけられ、引きずられる。

「ねーちゃん、無茶しないでヨ！」

「うるさ――」

シアンの言葉をあしらおうとしたメル。だが、途中でめまいに襲われて崩れるように倒れた。

「キャッ、ねーちゃん！」

「……アイツ。“毒々”なんか使いやがって」

メルは恨めしそうにネロを睨む。再び立ち上がろうと、腕に力を込めた。

「“強さ”の勘違いに気がつけば……アイツ、元に戻る、と思う。アタイが、アイツを負かすには……この方法しか、ないんだよ……」

腕の切り傷が痛み、再びメルは崩れ落ちた。

そんな時、ネロが目の前に迫る。そして、2人に手をかざして、

「“宿り木の種”」

大ぶりの種を降らせる。種はメルとシアンに根付くと、彼らの体にツルを伸ばして巻きついた。

「あっ……！」

「キャアァ！」

ツルは2人からエネルギーを吸い取り、ネロにそれを送る。そしてどんどん成長し、どんどんきつく2人を締め付けていった。

2人がぐったりとし、動かなくなったところで、ツルは消滅した。
追い討ちをかけられたメルとシアンとは逆に、ネロはわずかな体の傷さえ消えていた。

一方、ヴァイスに“破壊光線”を打たれそうになり、大ピンチのセナとホノオは――。

（ヴァイス！！）

何度目になるか分からないが、セナが心で呼びかけた。しっぽの激痛に目をつむり、必死に。
ずいぶんと時が経ったような気がした。――心なしか、ヴァイスが“破壊光線”を打つのをためらっているような気もした。だから、セナは希望を捨てられなかった。

その時だった。微かにヴァイスの声が、セナに聞こえたのだ。

（……セナ？）

「ヴァイス！」

思わずセナは嬉しそうな声を上げた。それを聞いたホノオは、どこか安心感を覚えた。そして、我に返る。

（殺人者なんかじゃなくて……オレは、セナやヴァイスの友達としてここにいるんだ。ぼーっとしていられるか！）

そろそろヴァイスの情けも絶えそうである。そんな時、ホノオの体はルビーのような明るい赤色に包まれた。そして、

「セナ、そのまま呼びかけろ！　“破壊光線”はオレが防ぐから」

セナの前に立ち、先ほどとは打って変わって頼もしい表情を見せた。

「ヴァイス、聞こえるか！？　オイラだ、セナだ！」

（聞こえるよ、セナ！）

必死なヴァイスの声が、セナ、そしてホノオに聞こえた。思わず2人が目を合わせ、ほほ笑んだその時。

（何をしている！　早く蹴散らせ！）

（うわっ！）

ドスのきいた大人の声が聞こえ、セナとホノオは凍りつく。小さくヴァイスの悲鳴が聞こえた。

――次の瞬間、とうとうヴァイスの“破壊光線”が放たれた。我に返ったホノオが慌てて相殺を試みる。灼熱の焔と激しい閃光が衝突し、ものすごい音が響いた。セナは思わず耳をふさぐ。

（だ……誰だ！？　お前は誰だ！）

セナは先ほどの声の主――正体に心当たりはあった――に呼びかける。もう返答はない。ヴァイスの声すら聞こえなくなった。

ここで、押し合っていたホノオとヴァイスの攻撃が、ついに大爆発を起こす。ホノオの最強の技と、強化されたヴァイスの技の威力が辺り一面を支配し、本人達だけでなく、セナ、さらにはメルとシアン、そしてちょうど彼らにとどめを刺そうとしていたネロまでをも巻き込んだ――。

いくつもの小さな体が、岩の上に倒れる。

「わ、悪い……セナ。失敗、しちまった」

特にダメージの大きかったホノオは、同じく爆発の中心に近かったセナに声をかけた。

むしろセナは、ホノオに礼が言いたかった。傷が増えたのは事実だが、爆発のショックでひらめいたのだ。

「いいよ、ホノオ……」

声を振り絞ると、セナの体は青く光る。ホノオは息をのんだ。

「おかげで、分かった……。オイラ、達の、戦場は……ここじゃ、ない」

「はあ？」

言葉の意味が分からず、ホノオは首を傾げた。

直後、自分達の前に立つヴァイス、それからネロの気配に気が付いた。ネロはともかく、ヴァイスはあれほどの衝撃を受けてもしっかりと歩めている。

「ちょ、どうする、セナ！？」

ホノオの不安げな問いに、セナは不敵な笑みで答えた。

「今すぐ、案内するさ……。“オイラ達の戦場”に！」

直後、セナは強力な青の光を放つ。その光は、周囲にいるもの――ホノオ、ヴァイス、ネロ、さらにはシアンにメル――を包み込み、強く照らした。

第４１話：試練の再会――その３（後書き）

２０１２年、本編初更新です。
昨年は更新速度が落ちてしまいましたが、今年は完結を目標として頑張ります！
今年もよろしくお願いします！

＞ｉ３８２８２―４３４＜
※イラストは本編とは一切関係ありません。

第４１話：試練の再会――その４（前書き）

操られているらしいヴァイスは、すごく強くなっている。
オレとセナが相手をしているんだけど、あっという間に大ピンチに！

そんな時、とうとうヴァイスとセナの心が通じ合った！　が、せっかくの機会を何者かに邪魔される。

あの声は、一体……？
セナは何か、企んだらしいけど……。

（語り：ホノオ）

第４１話：試練の再会――その４

セナが放った強い光に目をつむった。それが、最後の記憶。
ホノオがふと目を開けると、目の前に広がるのは見知らぬ世界。
暗い光と明るい光が混ざり合う、不思議な光景。

「よ、ホノオ」

ホノオの背後からセナが声をかける。心なしか、得意げな顔をしていた。

「セナ、ここは？」

「心――というか、夢の中、かな。うまく侵入できたっぽい」

「夢って誰の？」

「うーん、なんと言えばいいか……。オイラ達みんなの心をつなげて夢を作った、みたいな？」

「……？」

現実離れした言葉の連続に、ホノオは必死についていこうとした。
しかし、首を傾げる角度はどんどん急になってゆく。妙に落ち着いているセナの姿が、どこか神聖にさえ見えた。

「ウーン……」

ここで、高い声がかすかに聞こえた。ホノオが辺りを見回すと、

眠そうに目をこするシアンが。その後メルも起き上がり、セナは再び事情を説明した――。

「セナ、アンタ……。しばらく見ないうちに、とんでもないことができるようになったね……」

事情を理解したが、信じられない。そんなメルが、別人を見るようにセナを眺めた。声色もどこか、よそよそしい。

「やめてよ姉貴ぃ。オイラはオイラだよ」

苦笑いと共に、セナはおどけて言う。メルの見る目が変わり、ほんのちょっと寂しくなった。

そんなセナの気持ちを、ホノオは歪みなく感じ取れた。そのことにわずかな喜びを感じつつ、彼はフォローに入る。

「そうそう。相変わらずチビだし」

そう言うと、ホノオは年下を相手にするかのように、セナの頭をポンポンと叩く。――本来ゼニガメとヒコザルの平均身長は同じなのだが、セナがだいぶ小さくホノオが少し大きいせいで、身長差が目だつ。

セナはムッとして背伸びをするが、ホノオには届かない。あとひと伸びしようと奮闘したとたん――ぐき。と、足首を軽くひねって転倒する。

「わ！？」

しりもちをつくセナを、メルとシアンはおかしそうに笑う。先ほどのメルから感じられた、警戒心のようなものが抜けていることに、

セナもホノオも気が付いた。
ホノオのフォローは成功。達成感がホノオを祝福し、そして彼は、調子に乗る。

「そんでおまけに、“弱い”し」

「ぎゃ！？」

ホノオがセナのしっぽに掴みかかると、セナはスットンキョウな悲鳴を上げる。
シアンとメルが腹を抱えて笑い、ホノオはセナの反撃から避難する。セナは1人、恥ずかしさで赤面する……。懐かしさを感じさせるやり取りだった。

「ハハハ、よかった！　セナはセナのまんまだねえ。悪かった。あんまりにも立派に見えたから、ちょっと疑っちゃったよ」

メルが優しく言うと、言いようのない懐かしさがセナを泣かせにかかる。が、ぐっと我慢。少しだけ、視界がにじんだ。

「セナはホノオと違って可愛いまんまだネ♪」

「どういう意味だ？」

「ホノオは元から可愛さのかけらもなかったモン！」

「な！　オレにもかわいさの“か”の字くらいあるっての！」

シアンとホノオの懐かしい喧嘩に、セナが横やりを入れた。

「ホノオの“か”は“カッコ悪い”の“か”かな」

「……今なんて言った、セナくん？」

ホノオが不気味な優しさを含む声で問うと、セナは危機感を覚えた。

「ほ、ホノオの“か”は“カッコいい”の“か”」

「……なら、いいけど♪」

――こうして話がなんとかひと段落したところで、セナは再び話を元に戻した。

やけに落ち着いた態度のセナが、心の底に秘めた大きな覚悟。それは、まだ、誰にも悟られていない。

「これから、ヴァイスとネロさんの夢を、この夢に繋げる。そうすれば、２人――いや、“４人”もこっちに来れるはずさ」

「４人？　２人多いネ？」

シアンが首を傾げると、セナは得意げに解説した。

「そう、多いんだ。ヴァイスとネロさんは、２人いるんだ」

「え！？」

ホノオとシアンの驚きの声を聞き、セナは頷く。

「1人は、オイラ達の味方の――本物のヴァイスとネロさん。もう1人が、オイラ達の敵の――偽物のヴァイスとネロさん。……多分、本物は、偽物に負けてボロボロだと思う。だから、助けてやるんだ。そして、偽物を倒して、ここから追い出さなきゃ」

「そうすれば、ヴァイス達は元に戻るんだね？」

と、メル。だが、セナは首を振った。

「ううん、それだけじゃダメなんだ。偽物ヴァイス達を支える、“異物”を――この夢の中にいるはずのない侵入者を、ヴァイスとネロさんの中から追い出さなきゃ」

「そ、それってもしかして、あのドスのきいた声の正体か？」

セナとヴァイスの心が通じたとき、その交流を邪魔した声。ホノオはそれを思い出して言う。セナの頭は縦に動いた。

「そ。奴らさえ追い出せば、ヴァイスとネロさんを取り返せる」

「なるほど……」

ホノオが重く言葉を乗せると、一同は少し沈黙した。その後、セナはさらに重いことを。

「ここと本来の体の2か所に心がある“異物”さん達はいいとしてだ。オイラ達の心は、ここに、1つしかない。だから……もしここで、オイラ達がやられちまったら、もう2度と目を覚ますことはできない」

「えッ……」

と、シアン。それに構わず、セナは続けた。

「それと、もし本物のヴァイスとネロさんが偽物に負けちまったら、偽物のヴァイスやネロさんが、“本物だった”ってことになっちまう。2人をもう、仲間と呼べなくなっちまうんだ」

「それでもやるよ、オレは」

セナが覚悟を問う前に、ホノオはそう言い切る。

「それぐらいの覚悟が無かったら、ここにいないよ、オレは」

「アタイもやってやるさ。さっきやられたの、悔しいしね」

「ありがとう」

ここで、一同の視線はシアンに集中する。シアンはピクリと反応した。

（シアン、怖いヨ……）

「もし怖かったら、先に現実世界に戻すぞ？　それはそれでＦＬＢがいるけど、エンテイもいるから多分大丈夫」

（でも、でも……）

シアンはこれまでの旅路を思い返す。ヴァイスの笑顔を思い返す。

（ヴァイスがこれからずっと敵だなんて、シアン、いやだモン！）

シアンもとうとう覚悟を決めた。シアンの瞳に珍しく宿る決意の光に、セナは驚いた。

「シアンも頑張るヨ！」

「……ありがとな、シアン！」

頼もしいシアンを見、成長を感じてセナは嬉しくなった。

「まあ、オイラ達は１００パーセントの心がここにあるけど、敵はそうじゃない。だから、きっと、うまくいくと思うんだけどね」

そう言って、セナは少し皆の緊張をほぐす。そしてまた、真顔に戻った。

「みんな……覚悟はいいか？」

セナは落ち着いた声で言う。いよいよ、ヴァイスとネロの心と――夢と、つながる時が来た。“戦場”に、乗り込む時が、来た。

セナに呼びかけられ、３人は頷く。セナはそれを見ると、右手から大きなつららを生み出した。

つららは中から青く、力強く光る。セナはそれを、剣のように振りかざし、思い切り空気を切り裂いた。

青の光と、夢の光が混ざり合い、新たな世界が開ける。

真っ先に飛び込んできたのは――

目を覆いたくなるような、無数の切り傷。
本物のヴァイスとネロが、ぐったりと倒れていた。

「ヴァイス……！」
「ネロ！」

セナがヴァイスに駆け寄り、そっと体を揺り動かした。
メルはネロの頬を軽く叩き、反応を確かめた。

「……セ、ナ？」
「……ん」

2人とも何とか反応はできるようで、セナ達はホッと胸をなでおろした。

「セナ、ごめんね。迷惑……かけちゃって……」

か細く不安定な声で、ヴァイスは呼びかける。セナはニコリと笑うと、すぐに行動に出た。
体に青の光を満たし、ヴァイスとネロを優しく照らす。“代償”は覚悟の上だった。

「“ヒール”」

すぐに、ヴァイスとネロの傷が嘘のように治る。その様子を、メル、シアン、そしてホノオさえも、唖然として見ていた。

怪我が治った直後、ヴァイスはセナに抱きついた。

「ありがとう、セナ。無事でよかったよ……！」

そう言いながら、体を震わせて泣きじゃくる。感動の再会といきたいところだったが、

「くっ、ヴァイス放せぇ！　くすぐったい！」

ヴァイスがすり寄ってくるのがこそばゆく、セナは困ったように笑った。――彼らがコンビを結成した夜にそっくりな光景である。

しかし、前回はすぐにセナを放したヴァイスが、今回はセナを放さない。

「ボク、セナとホノオのことが本当に心配で……」

「あふっ、わ、分かったから！　あはは、放してぇ！」

こんな2人のやり取りを、皆クスクスと笑う。懐かしさに襲われ、ホノオは少し涙ぐんだ。

セナがどうにかヴァイスを振り払って落ち着かせると、一同の緩んだ空気がようやく元に戻った。ホッと一安心のセナ。

「さて、そろそろ偽物さんにも出てきてもらわないと困るなあ。……それと、ヴァイスとネロさんの心に侵入して操ってた、迷惑な“おじさん達”もね！」

と、セナは誰もいない方向に向かって叫ぶ。戦闘用意をし、一同はセナと同じ方向をじっと睨む。

――すると。空間が歪んで黒い影となり、やがてくっきりと姿を現す。

目つきのキツい、ヴァイスとネロの偽物。そして、侵入者。
セナの予想通り、それは、ＦＬＢだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5085h/

絆の冒険記

2012年1月10日05時49分発行